

西脇市

津万遺跡群2

— 一般国道 175 号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



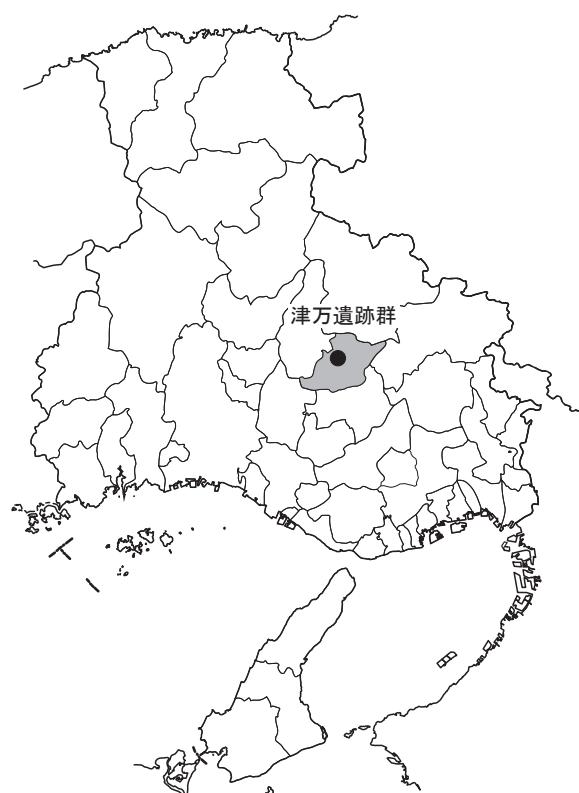
令和 7 (2025) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

西脇市

津万遺跡群2

— 一般国道 175 号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和 7 (2025) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



津万遺跡群遠景（南から）



津万遺跡群遠景（南西から）



鳴 1 区 SR01 溜まり状遺構出土土器



鳴 2 区 SR01-a 出土土器

例　言

- 1 本書は、西脇市津万地先に所在する津万遺跡群のうち津万遺跡群2としてまとめた西嶋1区・西嶋2区・西嶋3区・西嶋4W区・西嶋4E区・西嶋5区・西嶋6区、及び嶋1区・嶋2区・嶋3区・嶋4区と呼称した地区的発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、国道175号西脇北バイパス事業に係る、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所、兵庫県立考古博物館、そして、公益財団法人まちづくり技術センターを調査機関として実施した。また、出土品整理は、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を主体として、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を整理実施機関として実施した。
- 3 調査の推移

津万遺跡群2の調査は、当該開発事業に伴う分布調査から本発掘調査の終了まで、平成12年度から平成21年度、更に、用地買収状況等の事情により、数年を経て、平成30年度に亘っている。その詳細は第1章にあげた。

(発掘調査)

分布調査 平成12年4月25日

実施機関：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

確認調査 平成16年12月13日～平成17年3月11日

実施機関：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

本発掘調査 平成19年7月17日～平成19年12月12日

実施機関：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社 基泰組

空中写真測量委託：株式会社 パスコ

平成20年6月19日～平成20年12月2日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社 大功組

空中写真測量委託：伸栄開発 株式会社

平成21年6月29日～平成22年1月22日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：門上建設 株式会社

空中写真測量委託：株式会社 エイティック

平成30年12月3日～平成31年1月31日

実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター

工事請負：門上建設 株式会社

空中写真測量委託：株式会社 国土開発センター 姫路営業所

(出土品整理作業)

出土品整理期間：平成 26 年度・令和 3～6 年度（5 箇年）

刊行年度契約期間：令和 6 年 6 月 14 日～令和 7 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

遺物写真撮影委託：株式会社 地域文化財研究所

- 4 本書の編集・執筆は、整理技術員の補助のもと、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 深江英憲が担当した。なお、補助にあたった整理技術員個々の氏名は、第 1 章第 3 節に明記している。
- 5 本調査において出土した遺物及び作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 本書に使用した方位は国土座標（第 V 系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（世界測地系に換算）

凡 例

- 1 遺構の名称は、原則的には、発掘調査時に各地区の担当者が付与した記号及び番号に準じているが、使用する記号については、隣接する地区に跨がる遺構名称の統一、遺構の特殊性に則した呼称の差別化等を考慮し、一部の遺構について名称を変更した。
本書では、それぞれの遺構の種類を示す記号として、各地区で付与した番号の頭に以下のような表記をした。また、柱穴については、単独で検出したものと掘立柱建物等の複数の柱穴で構成されるものとで、各地区の担当者によって名称が異なっているが、敢えて統一せず、各地区での名称をそのまま付与した。
SH：竪穴建物、SB：掘立柱建物、SP（P）：柱穴、SK：土坑、ST：土壙墓・木棺墓、SX：不明遺構
SD：溝、SR：流路、NR：自然流路
- 2 遺物には通し番号を付している。ただし、石器・金属器・木器については、その頭に、それぞれ「S」・「M」・「W」を付して、土器類と区別している。
- 3 土器類の図版は、種類ごとの断面の表現として、以下のように区別している。
弥生土器・土師器：白抜き ／ 須恵器：黒塗り ／ 陶磁器類：網掛け
- 4 石器、金属器、木器の断面の表現は、以下のとおりである。
石器：白抜き ／ 金属器：斜線 ／ 木器：板目等が明確である場合はそれを表現（以外は白抜き）
- 5 土層断面及び遺物の註記等で使用した色調名は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）、『HV/C 基準色票 -20 色相簡略版 -』（カラーエンジニアリング研究会企画／編集・株式会社カラーアトラス発行）によるものである。
- 6 本書の執筆にあたっては、各地区の発掘調査担当者を中心に分担しており、各項の構成は各執筆者に委ねている。このため、各章、各節内で文章構成上の不統一が生じているが、本書では敢えて統一を図らず、各章、各節のフォント等を統一する以外は、各執筆者のスタイルを踏襲する。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	(深江英憲) 1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査の概要	
第3節 出土品整理作業	
第2章 遺跡の位置と環境	(深江) 6
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 発掘調査の成果	
第1節 遺構	
1 西嶋1区の調査	(上田健太郎) 7
2 西嶋2区の調査	(深江) 8
3 西嶋3区の調査	(上田) 9
4 西嶋4W区の調査	(岸本一宏) 10
5 西嶋4E区の調査	(池田征弘) 19
6 西嶋5区の調査	(上田) 24
7 西嶋6区の調査	(上田) 25
8 嶋1区の調査	(上田) 26
9 嶋2区の調査	(上田) 27
10 嶋3区の調査	(上田) 29
11 嶋4区の調査	(上田) 32
第2節 遺物	
1 土器類の概要	(岸本) 33
2 弥生時代から平安時代中頃の土器類	(岸本) 33
3 中世の土器	(西口圭介) 53
4 石器	(上田) 60
5 金属器	(別府洋二) 61
6 木器	(別府) 62
第4章 自然科学分析	
第1節 樹種同定 (生材)	(株式会社 古環境研究所) 77
第2節 放射性炭素年代測定	(株式会社 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ) 79
第5章 おわりに	(深江) 85

挿図目次

第1図 木材断面	78
第2図 測定試料写真	80

第3図 暦年較正結果 82

挿図目次

第1表 確認調査一覧表	2
第2表 出土遺物観察表	66
第3表 樹種同定結果	77
第4表 測定試料および処理	79
第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	81

卷頭写真図版目次

- 卷頭写真図版 1 津万遺跡群遠景(南から)
津万遺跡群遠景(南西から)
卷頭写真図版 2 島 1 区 SR01溜まり状遺構出土土器
島 2 区 SR01-a出土土器

図版目次

図版 1 津万遺跡群 2 西島地区 トレンチ配置図	図版39 西島 4 E 区 掘立柱建物 3・柱穴群
図版 2 津万遺跡群 2 島地区 トレンチ配置図	図版40 西島 4 E 区 木棺墓 1
図版 3 津万遺跡群 2 西島地区 確認調査柱状図	図版41 西島 4 E 区 木棺墓 2
図版 4 津万遺跡群 2 島地区 確認調査柱状図	図版42 西島 4 E 区 木棺墓 3・土壙墓
図版 5 津万遺跡群 2 調査区配置図	図版43 西島 4 E 区 土坑 1・柱穴
図版 6 津万遺跡群 2 西島・島地区遺構全体図	図版44 西島 4 E 区 土坑 2
図版 7 津万遺跡群 2 西島地区遺構全体図	図版45 西島 4 E 区 土坑 3
図版 8 津万遺跡群 2 島地区遺構全体図	図版46 西島 4 E 区 土坑 4・不明遺構
図版 9 西島 1 区 全体図	図版47 西島 4 E 区 溝
図版10 西島 1 区 西壁・南壁・北壁断面図	図版48 西島 5 区 全体図
図版11 西島 1 区 掘立柱建物・溝・土坑・自然流路	図版49 西島 5 区 東壁・西壁・溝・土坑断面図
図版12 西島 2 区 全体図	図版50 西島 5 区 掘立柱建物
図版13 西島 2 区 調査区東壁断面図	図版51 西島 6 区 全体図
図版14 西島 2 区 調査区西壁断面図	図版52 西島 6 区 東壁・南壁(SR01)・溝断面図
図版15 西島 2 区 調査区北壁断面図	図版53 島 1 区 全体図
図版16 西島 2 区 自然流路断面図	図版54 島 1 区 東壁・北壁・南壁断面図
図版17 西島 2 区 溝断面図	図版55 島 1 区 流路 1
図版18 西島 3 区 全体図	図版56 島 1 区 流路 2・溝
図版19 西島 3 区 南壁・東壁・流路・土坑状遺構 断面図	図版57 島 2 区 全体図 1
図版20 西島 4 W 区・4 E 区 全体図	図版58 島 2 区 全体図 2・東壁断面図
図版21 西島 4 W 区 全体図	図版59 島 2 区 流路 1
図版22 西島 4 W 区 溝 1	図版60 島 2 区 流路 2・土坑
図版23 西島 4 W 区 自然流路 1	図版61 島 2 区 溝
図版24 西島 4 W 区 自然流路 2 断面図・豎穴建物	図版62 島 3 区 全体図
図版25 西島 4 W 区 豊穴建物内土坑	図版63 島 3 区 北壁断面図・流路
図版26 西島 4 W 区 木棺墓 1・土壙墓	図版64 島 3 区 豊穴建物
図版27 西島 4 W 区 調査区南部遺構群	図版65 島 3 区 柱穴列・溝・土坑
図版28 西島 4 W 区 掘立柱建物	図版66 島 4 区 全体図
図版29 西島 4 W 区 木棺墓 2・土坑 1	図版67 島 4 区 北壁・東壁断面図・掘立柱建物・溝・ 土坑
図版30 西島 4 W 区 溝 2	図版68 調査区外トレンチ・西島 1 区 出土土器
図版31 西島 4 W 区 溝 3	図版69 西島 2 区 出土土器 1
図版32 西島 4 W 区 調査区北東部遺構群	図版70 西島 2 区 出土土器 2
図版33 西島 4 W 区 調査区北東部断面図・溜まり 状遺構	図版71 西島 3 区 出土土器
図版34 西島 4 W 区 柱穴・土坑 2	図版72 西島 4 W 区 出土土器 1
図版35 西島 4 E 区 全体図	図版73 西島 4 W 区 出土土器 2
図版36 西島 4 E 区 東壁断面図	図版74 西島 4 W 区 出土土器 3
図版37 西島 4 E 区 掘立柱建物 1	図版75 西島 4 E 区 出土土器 1
図版38 西島 4 E 区 掘立柱建物 2	図版76 西島 4 E 区 出土土器 2
	西島 5 区・6 区 出土土器

- 図版77 嶋1区 出土土器
　　嶋2区 出土土器1
- 図版78 嶋2区 出土土器2
- 図版79 嶋2区 出土土器3
- 図版80 嶋2区 出土土器4
- 図版81 嶋2区 出土土器5
- 図版82 嶋2区 出土土器6
- 図版83 嶋2区 出土木器7
- 図版84 嶋3区 出土土器
- 図版85 嶋4区 出土土器

- 図版86 津万遺跡群2 出土石器1
- 図版87 津万遺跡群2 出土石器2・出土金属器
- 図版88 西嶋1区・3区 出土木器
- 図版89 西嶋4E区・6区 出土木器
- 図版90 嶋1区 出土木器1
- 図版91 嶋1区 出土木器2
- 図版92 嶋1区 出土木器3
- 図版93 嶋1区 出土木器4
　　嶋2区 出土木器

写真図版目次

- 写真図版1 西嶋1区全景（北から）
　　西嶋1区全景（南から）
　　SB01（北東から）
- 写真図版2 SD01 土器出土状況（南東から）
　　SD01 断面（a-a'）（北東から）
　　SD02 北部断面（b-b'）（南西から）
　　SD02 北中部断面（c-c'）（南から）
　　SD02 南壁断面（f-f'）（北から）
　　SD03 断面（d-d'）（西から）
　　SD04 断面（e-e'）（南西から）
- 写真図版3 SK04 断面（g-g'）（南西から）
　　SK08 断面（h-h'）（南から）
　　SK09 断面（i-i'）（西から）
　　SK10 断面（j-j'）（南から）
　　SK11 断面（k-k'）（西から）
　　SK12 断面（l-l'）（西から）
　　NR01 断面（m-m'）（南から）
- 写真図版4 西嶋2区全景（真上から：上が東）
　　調査区全景（南東から）
- 写真図版5 調査区全景（北から）
　　調査区全景（北から）
- 写真図版6 調査区東壁（A-A'）（西から）
　　調査区東壁（A-A'）南端部（西から）
　　調査区東壁（A-A'）南部（西から）
　　調査区東壁（A-A'）北部（西から）
　　調査区東壁（A-A'）北端部（西から）
- 写真図版7 調査区西壁（B-B'）（南から）
　　調査区西壁（B-B'）南端部（東から）
　　調査区西壁（B-B'）南部（東から）
　　調査区西壁（B-B'）北部（東から）
　　調査区西壁（B-B'）北端部（東から）
- 写真図版8 調査区北壁（C-C'）（南から）
　　調査区北壁（C-C'）西部（南から）
　　調査区北壁（C-C'）東部（南から）
- 写真図版9 NR01 南部（南東から）
　　NR01 断面（a-a'）（南から）
- NR01 断面（b-b'）（南から）
　　NR01 断面（c-c'）（南西から）
　　NR01 断面（d-d'）（南西から）
- 写真図版10 SD01 断面（e-e'）（南から）
　　SD07 断面（g-g'）（南から）
　　SD06・02 断面（g-g'）（南から）
　　SD02 断面（h-h'）（南から）
　　SD06 断面（i-i'）（南から）
　　SD08 断面（南から）
　　SK12 断面（西から）
　　断ち割り断面状況
- 写真図版11 西嶋3区全景（南東から）
　　調査区東部（北西から）
　　調査区南西部（北西から）
- 写真図版12 南壁中部断面（B-C）SR02付近
　　（北東から）
　　東壁北部断面（A-B）及び
　　遺構検出面（南西から）
- 写真図版13 SR02 断面（a-a'）（北西から）
　　SR03 断面（b-b'）（南西から）
　　SR04 断面（c-c'）（南から）
　　SR04（左）・SR06（右）断面（d-d'）
　　（北西から）
　　SR10 断面（f-f'）（北から）
　　SR14 断面（h-h'）（北から）
　　SX01 断面（i-i'）（南から）
- 写真図版14 西嶋4W区遠景（南上空から）
　　西嶋4W区遠景（南東上空から）
- 写真図版15 西嶋4W区遠景（西上空から）
　　西嶋4W区遠景（北西上空から）
- 写真図版16 調査区全景（真上から：上が西）
　　調査区全景（真上から：上が東）
- 写真図版17 調査区全景（南上空から）
　　調査区全景（北上空から）
- 写真図版18 調査区北部の遺構（東から）
　　調査区北半部の遺構（南東から）

写真図版19	SD88 等検出状況（南から） SD88 南部検出状況（南から） SD88 盖（104）出土状況（西から） SD88 壺（100）出土状況（南から） SD88 土器体部出土状況（東から） SD88 下面の SD156 検出状況（南東から） SD88 と SD156 重複部埋土断面（南から） SD156 東部埋土断面（南東から）	SX262 埋土断面（北から） SD222・253 埋土断面（北東から） SD222 埋土断面（北東から）
写真図版20	NR73 北端埋土断面（南から） NR73 中央部埋土断面（南西から）	写真図版31 SX267 埋土断面（西から） SK277（南から） SK277 埋土断面（東から） SD203 埋土断面（東から） SP171 磐板石（S18）検出状況（南から） SP171 磐板石（S18）検出状況（北から） SD210 北部埋土断面（南南西から） SD210 中央部埋土断面（南西から）
写真図版21	SH150 上面検出状況（東から） SH150 全景（南から）	写真図版32 SB01・ST22（南から） SB01・ST22（東から）
写真図版22	SH150 全景（東から） SH150 下層遺構全景（東から）	写真図版33 SB01 内 SP18 截ち割り断面（南から） SB01 内 SP20 截ち割り断面（東から） SB01 内 SP21 截ち割り断面（南から） SB01 内 SP23 截ち割り断面（西から） SB01 内 SP24 截ち割り断面（南から） SB01 内 SP25 截ち割り断面（西から） SB01 内 SP26 截ち割り断面（南から） SB01 内 SP28 截ち割り断面（南から）
写真図版23	SH150 埋土断面（南から） SH150 下層埋土断面（南から） SH150 内 SK160 上面検出状況（西から） SH150 内 SK160 埋土断面（南東から） SH150 下層内 SK278（南から） SH150 下層内 SK278 埋土断面（南から） SH150 下層内 SK279（南東から） SH150 下層内 SK279 埋土断面（東から）	写真図版34 ST22 上面検出状況（南から） ST22（東から）
写真図版24	ST209（北から） ST209（西から）	写真図版35 ST22 墓壙（東から） ST22 棺内埋土断面（南から） ST22 西半部墓壙埋土断面（南から） ST22 東半部墓壙埋土断面（南から） SK212 埋土断面（南から） SK32 埋土断面（南から） SD80 中央部木材出土状況（北東から） SD80 埋土断面（西北西から）
写真図版25	ST46・ST47（東から） ST47（東から）	写真図版36 SD118 全景及び北東部遺構検出状況（北西から） SD118 全景及び北東部遺構検出状況（南東から）
写真図版26	ST47 上面検出状況（南から） ST47 棺内埋土断面（南から） ST47 西半部墓壙埋土断面（南から） ST47 東半部墓壙埋土断面（南から） SP200 截ち割り断面・須恵器（146） 出土状況（東から）	写真図版37 SD118・130 全景及び北東部遺構 検出状況（北西から） SD118 南東部礫出土状況（北から） SD118・130 埋土断面（南東から） 北東部東壁 SD118 等埋土断面（西から） 北東部埋土断面（北西から）
写真図版27	ST46（東北東から） ST46（南南東から）	写真図版38 SD119 埋土断面（南東から） SD120 埋土断面（南東から） SD125 埋土断面（北西から） SX109（東から） SX109 西端埋土断面（東から）
写真図版28	ST46（北北西から） ST46 炭化底板材・漆器漆膜 出土状況（南南東から） ST46 漆器漆膜出土状況（南南東から） ST46 墓壙（東北東から） ST46 埋土断面・土師器（147） 出土状況（東北東から）	写真図版39 SX109 埋土断面（東から） SP82 截ち割り断面（南から） SP82 磐板石（S17）出土状況（南から）
写真図版29	調査区南部遺構群（南から） 調査区南部遺構群（北から）	
写真図版30	調査区南端東部壁断面（北西から） 調査区南端西半部壁断面（北東から） 調査区南端中央部壁断面（北から） 調査区南端中央西部壁断面（北から） 調査区南端西端部壁断面（北から）	

	SP153 埋土断面（北東から）	P34（南から）
	SP155 埋土断面（南西から）	P68（南から）
	SX144 埋土断面（南から）	写真図版48 木棺墓・土壙墓群 ST05～08（北から）
	SX148 埋土断面（南から）	木棺墓 ST05（東から）
	ラジコンヘリによる空中写真 撮影状況（南東から）	ST05 完掘状況（東から）
写真図版40	北西部機械掘削状況（北から）	写真図版49 ST05 側板掘方断面（東から）
	南部人力掘削状況（北東から）	ST05 側板断面（東から）
	NR73 等人力掘削状況（北北東から）	ST05 東小口断面（北から）
	南部遺構検出状況（西南西から）	ST05 西小口断面（北から）
	SH150 掘削状況（西南西から）	ST05 西小口掘方断面（南から）
	北部電子平板測量状況（南南西から）	ST05 東小口掘方断面（南から）
	SB01・ST22 遺構実測状況（北から）	写真図版50 木棺墓 ST06・土壙墓 ST08（北から）
	北半部埋め戻し状況（南から）	土壙墓 ST08 断面（南から）
写真図版41	西嶋4E区全景（右）	木棺墓 ST06・土壙墓 ST08 断面（西から）
	西嶋4W区（左）と合成（真上から）	写真図版51 ST06 側板断面（南から）
	西嶋2区と西嶋4E区遠景 (南上空から)	ST06 側板断面（南から）
写真図版42	西嶋4E区全景（北から）	ST06 断ち割り（南から）
	西嶋4E区全景（南から）	ST06 北小口断面（西から）
写真図版43	SB01（北から）	ST06 南小口断面（西から）
	P05（東から）	ST06 北小口（東から）
	P06（東から）	ST06 完掘状況（南から）
	P04（東から）	写真図版52 土壙墓 ST07 断面（西から）
写真図版44	SB02（03）（西から）	土壙墓 ST07（南から）
	P17（南から）	土壙墓 ST07 完掘状況（南から）
	P56（南から）	写真図版53 木棺墓 ST14 断面（西から）
	P13（南から）	木棺墓 ST14（南から）
	P54（南から）	木棺墓 ST14 完掘状況（西から）
	P57（南から）	写真図版54 土壙墓 ST28 断面及び土器出土状況 (東から)
	P55（南から）	土壙墓 ST28 完掘状況（西から）
写真図版45	SB03（北から）	SK09 断面（東から）
	P30（南から）	SK09 土器出土状況（北から）
	P59（南から）	SK10 断面（北から）
	P18（南から）	SK10 土器出土状況（南から）
	P19（南から）	SK30 断面（南西から）
	P21（南から）	SK30 土器出土状況（南東から）
	P58（南から）	写真図版55 P35 土器出土状況（北から）
写真図版46	SB04（南から）	SK03 断面（東から）
	P66（東から）	SK11 断面（南から）
	P61（東から）	SK12 断面（西から）
	P64・65（東から）	SK13 断面（西から）
	P60（東から）	SK15 断面（北西から）
	P62（東から）	SK16 断面（南東から）
写真図版47	SB04・05（南から）	SK17 断面（南から）
	P44（南から）	写真図版56 SK18 断面（東から）
	P67（南から）	SK19・20 断面（北西から）
	P41（南から）	SK22 断面（南から）
	P69（南から）	SK23 断面（南西から）

	SK24 断面（北西から）	SR01 北部溜まり状遺構西部（南から）
	SK25 断面（南から）	SR01 北部溜まり状遺構北部（南から）
	SK26 断面（南から）	SR02-a・03 南部断面（e-e'）（南西から）
	SK02 断面（東から）	SR02-b 南部断面（c-c'）（北西から）
写真図版57	SD01（北西から）	SR04 南部断面（f-f'）（西から）
	SD01 断面（南東から）	SD01 断面（h-h'）（南から）
	SD02（南西から）	写真図版67 嶋2区全景（北から）
	SD02 断面（南西から）	嶋2区全景（南東から）
	SD04（北西から）	写真図版68 調査区東壁断面南部（SR01・SD01・
	SD04 断面（南東から）	SD03 付近）（西から）
	SD05・06（北西から）	SR01-a・b 断面（a-a'） 南断面
	SD06 断面（南東から）	（南東から）
写真図版58	NR01（西から）	SR01-a・b 断面（a-a'） 南断面
	NR01 断面（西から）	（SR01-a・b 境界付近）（南から）
	堆積状況調査（南西から）	SR01-a 断面（b-b'） 北断面（南から）
	下層断ち割り（北西から）	写真図版69 SR01-a 断面（c-c'） 北断面②（南から）
	SX01（南東から）	SR01-a 東肩弥生土器・礫出土状況
	遺構掘削状況（北西から）	（西から）
	遺構掘削状況（南から）	SR01-a 南東隅底部弥生土器出土状況
	実測状況（南西から）	（北西から）
写真図版59	西嶋5区全景（北から）	SR02 断面（e-e'） 南断面（南から）
	西壁（SR01）断面（B-B'）・SD01	SD01・SD02 断面（A-A'）（南から）
		SD03 断面（B-B'）（南から）
写真図版60	SD01（西から）	SD04 断面（B-B'）（南から）
	SD01 断面（a-a'）（東から）	SD06 断面（E-E'）（南から）
	SD02 断面（b-b'）（東から）	写真図版70 SK01 断面（西から）
	SD03（西から）	SK01 土師器椀（397）出土状況（西から）
	SD03 断面（c-c'）（東から）	SK01 完掘状況（西から）
	SK01（東から）	写真図版71 嶋3区・4区全景（真上から）
	SK01 断面（e-e'）（南から）	写真図版72 嶋3区全景（北から）
写真図版61	西嶋6区調査区東部全景（南から）	SR01（北西から）
	西嶋6区調査区西部全景（南から）	写真図版73 北壁断面（A-A'） 西・中部（南東から）
写真図版62	西嶋6区調査区西部全景（北から）	北壁断面（A-A'） 東部（南から）
	SR01 南壁断面（B-B'）（北から）	SD03（北東から）
	SR01 南壁断面（B-B'） 西部（北から）	SD01 中央部断面（c-c'）（西から）
	SD01 断面（a-a'）（南から）	SD01 西部断面（b-b'）（南西から）
写真図版63	西嶋6区南部及び嶋1区全景	SD02 断面（e-e'）（西から）
		SD03 断面（g-g'）（南西から）
写真図版64	嶋1区全景（北から）	写真図版74 SH01・SD01 検出状況（南から）
	嶋1区全景（南から）	SH01 南東部周壁溝・杭穴検出状況
写真図版65	調査区北壁断面（A-B） SD01 付近	（南西から）
		写真図版75 SH01 検出状況（南から）
	（南西から）	SH01 完掘状況（南から）
	調査区東壁断面（B-C）（北西から）	写真図版76 SH01 中央土坑（東から）
	調査区東壁断面（B-C） 中央付近	SH01 中央土坑断面（東から）
		SH01 中央土坑（南から）
	（西から）	SH01 中央土坑断面（南から）
	調査区東壁断面（B-C） 南部	SH01 主柱穴P2土器出土状況（南から）
		SH01 周壁溝北部断面（東から）
	SR02-a 付近（南西から）	
	SR01 中央部断面（a-a'）（南西から）	
写真図版66	SR01 北部溜まり状遺構（西から）	

- SH01 排水溝断面 (C-C') (東から)
 SH01 間仕切り溝・排水溝・
 周壁溝断面 (B-B') (南から)
- 写真図版77 柱穴列1・2 (北から)
 柱穴列3・4 (西から)
- 写真図版78 嶋4区全景 (北から)
 嶋4区西半部全景 (南から)
- 写真図版79 SB01 柱穴・柱痕 (南東から)
 SB01 柱穴完掘状況 (南東から)
 SD01・SK04 (南東から)
 SD01 断面 (a-a') (西から)
 SK04 断面 (北から)
 SK04 完掘状況 (北から)
 SK04 炭層検出状況 (北から)
- 写真図版80 SR01 全景 (南西から)
 SR01 内埋没上部畦畔検出状況
 (北東から)
 SR01 調査区東壁断面 (B-C) (北西から)
- 写真図版81 トレンチ出土土器
- 写真図版82 西嶋1区出土土器
- 写真図版83 西嶋2区出土土器 (1)
- 写真図版84 西嶋2区出土土器 (2)
- 写真図版85 西嶋2区出土土器 (3)
- 写真図版86 西嶋2区出土土器 (4)
- 写真図版87 西嶋2区出土土器 (5)
- 写真図版88 西嶋2区出土土器 (6)
- 写真図版89 西嶋3区出土土器 (1)
- 写真図版90 西嶋3区出土土器 (2)
- 写真図版91 西嶋3区出土土器 (3)
- 写真図版92 西嶋3区出土土器 (4)
- 写真図版93 西嶋3区出土土器 (5)
- 写真図版94 西嶋4W区出土土器 (1)
- 写真図版95 西嶋4W区出土土器 (2)
- 写真図版96 西嶋4W区出土土器 (3)
- 写真図版97 西嶋4W区出土土器 (4)
- 写真図版98 西嶋4W区出土土器 (5)
- 写真図版99 西嶋4W区出土土器 (6)
- 写真図版100 西嶋4W区出土土器 (7)
- 写真図版101 西嶋4E区出土土器 (1)
- 写真図版102 西嶋4E区出土土器 (2)
- 写真図版103 西嶋4E区出土土器 (3)
- 写真図版104 西嶋4E区出土土器 (4)
- 写真図版105 西嶋4E区出土土器 (5)
- 写真図版106 西嶋4E区出土土器 (6)
- 写真図版107 西嶋5区出土土器・
 西嶋6区出土土器 (1)
- 写真図版108 西嶋6区出土土器 (2)
- 写真図版109 嶋1区出土土器
- 写真図版110 嶋2区出土土器 (1)
- 写真図版111 嶋2区出土土器 (2)
- 写真図版112 嶋2区出土土器 (3)
- 写真図版113 嶋2区出土土器 (4)
- 写真図版114 嶋2区出土土器 (5)
- 写真図版115 嶋2区出土土器 (6)
- 写真図版116 嶋2区出土土器 (7)
- 写真図版117 嶋2区出土土器 (8)
- 写真図版118 嶋2区出土土器 (9)
- 写真図版119 嶋2区出土土器 (10)
- 写真図版120 嶋2区出土土器 (11)
- 写真図版121 嶋2区出土土器 (12)
- 写真図版122 嶋2区出土土器 (13)
- 写真図版123 嶋2区出土土器 (14)
- 写真図版124 嶋2区出土土器 (15)
- 写真図版125 嶋3区出土土器 (1)
- 写真図版126 嶋3区出土土器 (2)
- 写真図版127 嶋3区出土土器 (3)・
 嶋4区出土土器
- 写真図版128 津万遺跡群2出土石器 (1)
- 写真図版129 津万遺跡群2出土石器 (2)
- 写真図版130 津万遺跡群2出土金属器 (1)
- 写真図版131 津万遺跡群2出土金属器 (2)
- 写真図版132 津万遺跡群2出土木器 (1)
- 写真図版133 津万遺跡群2出土木器 (2)
- 写真図版134 津万遺跡群2出土木器 (3)
- 写真図版135 津万遺跡群2出土木器 (4)
- 写真図版136 津万遺跡群2出土木器 (5)
- 写真図版137 津万遺跡群2出土木器 (6)

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

津万遺跡群は、加古川西岸の平野部に位置し、加古川が形成した沖積低地に立地している。本報告書における本発掘調査地は、現国道175号とほぼ併行して南北方向に延伸する道路建設予定範囲内で周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された「津万遺跡群」（遺跡番号140481）のうち、発掘調査時に西嶋1区、西嶋2区、西嶋3区、西嶋4W区、西嶋4区（報告時に西嶋4E区に改名）、西嶋5区、西嶋6区、嶋1区、嶋2区、嶋3区、嶋4区と呼称した地区である。

国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所は、東播丹波連絡道路の一部として、国道175号の東播磨内陸部と丹波地域間及び西脇市等からの中国縦貫自動車道滝野社インターチェンジへのアクセス向上、西脇市内の国道175号の交通混雑緩和、交通安全の確保等を目的に西脇北バイパスを計画した。

同事業は、西脇市下戸田から同市黒田庄町大伏に至る、南北延長5.2kmに及ぶバイパス道路である。

本事業が事業化した平成9（1997）年度以降、用地着手を開始した平成12（2000）年度の4月に、事業予定地内を対象として分布調査を実施（遺跡調査番号2000102）した。当該事業予定地については、既に周知の埋蔵文化財包蔵地である「上戸田遺跡（遺跡番号140301）」、「津万井近世窯群（遺跡番号290450）」、「大門・畠瀬散布地〔大門・畠瀬遺跡〕（遺跡番号290158）」、「大門北山小テラス群〔大伏・北山遺跡〕（遺跡番号290452）」が存在していた。調査の結果、これら周知の埋蔵文化財包蔵地の他に、事業予定地内の「津万地区」、「嶋地区」、「西嶋地区」、「寺内地区」において、新たに埋蔵文化財が存在することが判明し、四つの地区を合わせて「津万遺跡群」として登録された。

分布調査の結果を受け、平成16年度には国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長の依頼（平成16年2月17日付 国近整兵調第114号）に基づき、当該地区の確認調査を実施した〔遺跡調査番号：津万地区（2004245）・嶋地区（2004246）・西嶋地区（2004247）・寺内地区（2004248）。

その結果、各地区において遺構及び遺物が認められた（平成17年3月23日付け 教理文第4403号の埋蔵文化財の取扱い回答文書による）ため（第1表）、要調査範囲のうち、平成19年度から平成30年度までに国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長からの依頼に基づき、平成19年度（平成19年2月21日付け 国近整兵調第120号）に、「西嶋1区・5区・6区」、「嶋1区・3区・4区」（遺跡調査番号：2007052）を、平成20年度（平成20年3月14日付け 国近整兵調第75号）に、「西嶋3区・嶋2区」（遺跡調査番号：2008073）を、平成21年度（平成21年2月3日付け 国近整兵調第43号）に、「西嶋2区・4E区」（遺跡調査番号：2009189）を、平成30年度（平成30年9月25日付け 国近整兵調第38号）に、「西嶋4W区」（遺跡調査番号：2018015）の本発掘調査を実施した。

分布調査及び確認調査、本発掘調査の体制は、以下のとおりである。

1 分布調査（遺跡調査番号：2000102）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 別府洋二 中川渉 山上雅弘
松岡千寿

調査期間：平成12年4月25日

調査面積：26,000 m²

第1表 確認調査一覧表

トレンチ No.	調査番号	調査期間	対応する 本発掘調査区	幅 (m) × 全長 (m)	遺構	遺物	時期	微地形	備考
55	2004246	20141213-20050311	嶋6区	2.0 × 5.0	柱穴	土師器・須恵器	中世	微高地	津万遺跡群3
56	2004246	20141213-20050311	嶋6区	2.0 × 5.0	面アリ			微高地	津万遺跡群3
57	2004246	20141213-20050311	嶋6区	2.0 × 5.0	土坑か	須恵器		微高地	津万遺跡群3
58	2004246	20141213-20050311	嶋5区	2.0 × 5.0	礫の落ち	土師器・須恵器・青磁	奈良	河道	津万遺跡群3
59	2004246	20141213-20050311	嶋5区	2.0 × 5.0	柱穴	土師器		微高地	津万遺跡群3
60	2004246	20141213-20050311	嶋5区	2.0 × 5.0	礫シルト	土師器		河道	本発掘対象外
61	2004246	20141213-20050311	嶋5区	2.0 × 5.0		土師器・須恵器		河道	津万遺跡群3
62	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・須恵器		河道	本発掘対象外
63	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・須恵器		河道	本発掘対象外
64	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・須恵器	中世	河道	本発掘対象外
65	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・須恵器	中世	河道	本発掘対象外
66	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		弥生土器・土師器・須恵器	弥生・中世	河道	本発掘対象外
67	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0	落ち	土師器・須恵器		河道	本発掘対象外
68	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		弥生土器・土師器・須恵器	弥生・中世	微高地	本発掘対象外
69	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		瓦器・土師器・須恵器		微高地	本発掘対象外
70	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・須恵器・青磁	中世	河道	本発掘対象外
71	2004246	20141213-20050311	-	2.0 × 5.0		土師器・備前焼	中世	河道	本発掘対象外
72	2004246	20141213-20050311	嶋4区	2.0 × 5.0	落ち込み	弥生土器・須恵器	弥生	河道	津万遺跡群2
73	2004246	20141213-20050311	嶋4区	2.0 × 5.0	柱穴	土師器・須恵器・丹波焼	中世	微高地	津万遺跡群2
74	2004246	20141213-20050311	嶋3区	2.0 × 5.0	溝2			微高地	津万遺跡群2
75	2004246	20141213-20050311	嶋3区	2.0 × 5.0	柱穴			微高地	津万遺跡群2
76	2004246	20141213-20050311	嶋3区	2.0 × 5.0		土師器・須恵器・チャート		河道	本発掘対象外
77	2004246	20141213-20050311	嶋3区	2.0 × 5.0		土師器	中世	微高地	本発掘対象外
78	2004246	20141213-20050311	嶋2区	2.0 × 5.0	溝柱穴土坑	弥生土器・須恵器	弥生・室町	河道	津万遺跡群2
79	2004246	20141213-20050311	嶋2区	2.0 × 5.0	落ち	土師器		河道	本発掘対象外
80	2004246	20141213-20050311	嶋2区	2.0 × 5.0	シルト流路溝か	土師器・木器	古墳	河道	津万遺跡群2
81	2004246	20141213-20050311	嶋2区	2.0 × 5.0		土師器		河道	本発掘対象外
82	2004246	20141213-20050311	嶋1区	2.0 × 5.0	落ち込み	土師器・須恵器	中世	河道	津万遺跡群2
83	2004246	20141213-20050311	嶋1区	2.0 × 5.0	落ち	土師器・須恵器		河道	本発掘対象外
84	2004246	20141213-20050311	嶋1区	2.0 × 5.0	柱穴溝			微高地	津万遺跡群2
85	2004246	20141213-20050311	嶋1区	2.0 × 5.0	落ち込み	弥生土器・須恵器・馬形	弥生・中世	河道	津万遺跡群2
86	2004247	20141213-20050311	西嶋6区	2.0 × 5.0	溝・柱穴			微高地	津万遺跡群2
87	2004247	20141213-20050311	西嶋6区	2.0 × 5.0				微高地	津万遺跡群2
88	2004247	20141213-20050311	西嶋6区	2.0 × 5.0	柱穴・土坑か	土師器・須恵器・陶磁器		微高地	津万遺跡群2
89	2004247	20141213-20050311	西嶋6区	2.0 × 5.0	土坑か	須恵器		微高地	津万遺跡群2
90	2004247	20141213-20050311	西嶋5区	2.0 × 5.0	柱穴			微高地	津万遺跡群2
91	2004247	20141213-20050311	西嶋5区	2.0 × 5.0	落ち込み			微高地	津万遺跡群2
92	2004247	20141213-20050311	西嶋5区	2.0 × 5.0	柱穴か	土師器・須恵器		微高地	津万遺跡群2
93	2004247	20141213-20050311	西嶋5区	2.0 × 5.0				微高地	津万遺跡群2
94	2004247	20141213-20050311	西嶋4E区	2.0 × 5.0	柱穴・溝			微高地	津万遺跡群2
95	2004247	20141213-20050311	西嶋4W区	2.0 × 5.0	溝・柱穴	須恵器		微高地	津万遺跡群2
96	2004247	20141213-20050311	西嶋4E区	2.0 × 5.0	礫の落ち	須恵器		河道	津万遺跡群2
97	2004247	20141213-20050311	西嶋4W区	2.0 × 5.0	溝2	土師器・須恵器		微高地	津万遺跡群2
98	2004247	20141213-20050311	西嶋3区	2.0 × 5.0	落ち	土師器・須恵器・サヌカイト		河道	津万遺跡群2
99	2004247	20141213-20050311	西嶋3区	2.0 × 5.0	溝か	土師器・須恵器		河道	津万遺跡群2
100	2004247	20141213-20050311	西嶋3区	2.0 × 5.0	溝か	土師器・木器		河道	津万遺跡群2
101	2004247	20141213-20050311	西嶋3区	2.0 × 5.0	近世溝	土師器・陶磁器		河道	津万遺跡群2
102	2004247	20141213-20050311	西嶋2区	2.0 × 5.0	溝か	土師器		微高地	津万遺跡群2
103	2004247	20141213-20050311	西嶋2区	2.0 × 5.0	面の乱れ			河道	本発掘対象外
104	2004247	20141213-20050311	西嶋2区	2.0 × 5.0	土坑・柱穴	土師器・須恵器		微高地	津万遺跡群2
105	2004247	20141213-20050311	西嶋2区	2.0 × 5.0		土師器・須恵器		河道	本発掘対象外
106	2004247	20141213-20050311	西嶋1区	2.0 × 5.0	土坑・柱穴	土師器・須恵器		微高地	津万遺跡群2
107	2004247	20141213-20050311	西嶋1区	2.0 × 5.0		土師器・須恵器	古墳か	河道	本発掘対象外
108	2004247	20141213-20050311	西嶋1区	2.0 × 5.0	溝・土坑・柱穴	土師器・須恵器・陶磁器	平安	微高地	津万遺跡群2
109	2004247	20141213-20050311	西嶋1区	2.0 × 5.0		土師器・須恵器・陶磁器		河道	本発掘対象外

2 確認調査 津万地区（遺跡調査番号：2004245）

嶋地区（遺跡調査番号：2004246）

西嶋地区（遺跡調査番号：2004247）

寺内地区（遺跡調査番号：2004248）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 別府洋二 上田健太郎

調査期間：平成16年12月13日～平成17年3月11日

調査面積：1,591 m²

3 本発掘調査

本発掘調査1（遺跡調査番号：2007052）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 渡辺 昇 長濱誠二 上田健太郎

調査期間：平成19年7月17日～平成19年12月12日

調査面積（合計）：5,460 m²

：3,140 m²（西嶋1区：1,000 m²、西嶋5区：870 m²、西嶋6区：1,270 m²）

：2,320 m²（嶋1区：920 m²、嶋3区：700 m²、嶋4区：700 m²）

本発掘調査2（遺跡調査番号：2008073）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 渡辺 昇 鐵 英記 上田健太郎

調査期間：平成20年6月19日～平成20年12月2日

調査面積：2,331 m²（西嶋3区：1,443 m²、嶋2区：888 m²）

本発掘調査3（遺跡調査番号：2009189）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 別府洋二 深江英憲 池田征弘

調査期間：平成21年6月29日～平成22年1月22日

調査面積：1,633 m²（西嶋2区：850 m²、西嶋4E区：783 m²）

本発掘調査4（遺跡調査番号：2018015）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 埋蔵文化財調査部

岸本一宏 松崎光伸

調査期間：平成30年12月3日～平成31年1月31日

調査面積：896 m²（西嶋4W区）

第2節 調査の概要

津万遺跡群の調査は、要調査地全体の工程として、「寺内地区」、「西嶋地区」、「嶋地区」、「津万地区」と、基本的には北から南への順を基調に、用地買収の進捗や地元との調整案件等を勘案して、進められた。また、調査区は、事業範囲内を通る東西南北の市道及び農道等考慮して設定され、各地区的北から南へ「1・2・3」と呼称し、各調査区を「西嶋1区」、「西嶋2区」、「西嶋3区」、「西嶋4区」、「西嶋5区」、「西嶋6区」、「嶋1区」、「嶋2区」、「嶋3区」、「嶋4区」、として調査を実施した。ただし、西嶋4区については、一部で事業用地の調整に時間を要したため、東西で分割して調査することになり、先の調査で「西嶋4区」、後の調査で「西嶋4W区」と呼称した。このことから、調査段階で呼称した「西嶋4区」は、報告段階で「西嶋4W区」の東側に隣接する地区として「西嶋4E区」とした。

各地区的概要については、「第3章 発掘調査の成果 第1節 遺構・第2節 遺物」において詳述しており、本節ではここまでに止め置くこととする。

第3節 出土品整理作業

本報告書の刊行に至るまでの出土品整理作業は、平成26年度、令和3年度～令和6年度の5箇年で実施した。各年の整理作業内容と体制については、以下のとおりである。

1 平成26年度の整理作業

作業は、水洗い、ネーミング、土器の接合・補強を行った。

整理作業に係る、体制は以下の通りである。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 菱田淳子 長濱誠司 岡本一秀

2 令和3年度の整理作業

作業は、水洗い、ネーミング、木器の接合・補強、木器の実測、自然科学分析、金属器の保存処理を行った。

整理作業に係る、体制等は以下の通りである。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 大嶋昭海 野田優人 久保弘幸 西口圭介

3 令和4年度の整理作業

作業は、土器・石器の接合・補強、土器・石器・金属器の実測・拓本を行った。

整理作業に係る、体制は以下の通りである。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 野田優人 西口圭介 別府洋二

4 令和5年度の整理作業

作業は、復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース（遺構及び遺物の一部）、木器の保存処理を行った。

整理作業に係る、体制等は以下の通りである。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 大嶋昭海 野田優人 稲本悠一 別府洋二

5 令和6年度の整理作業

作業は、トレース（遺構及び遺物の一部）、自然科学分析、レイアウトを行い、報告書を刊行した。

整理作業に係る、体制は以下の通りである。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 深江英憲 稲本悠一 鈴木郁哉 池田 旭

出土品整理事業は、平成26年度の初年で開始したもの、諸々の事情により数年の空白期間を経ての5年計画で実施する結果となり、この間、整理作業に従事した整理技術員（旧整理技術嘱託員）も非常に多く関わった。以下、作業に従事したチームの方々について、年度を分けずに明記する。

池田悦子、今村直子、石原香苗、上田沙耶香、上西淳子、大本昌子、荻野麻衣、岡崎眞子、小野潤子、梶原奈津子、桂昭子、亀井彩菜、栗山美奈、香山玲子、小林礼子、佐々木愛、島村順子、新山王綾子、菅生真理子、高瀬敬子、富永愛子、沼田眞奈美、花房伸予、平宮可奈子、藤池かづさ、藤尾裕子、藤田久範、前谷幸次、前田陽子、嶺岡美見、吉村あけみ（五十音順・敬称略）

また、最終年度については、平宮可奈子の補助を得て報告書刊行した。

報告書の刊行までには、非常に長い期間を要したが、ここに作業に従事していただいた方々へ謝意を表するものである。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

津万遺跡群が位置する西脇市は、兵庫県のほぼ中央で、播磨地域の北東部に位置している。市内では、東経135度と北緯35度が交差している所があり、「日本列島の中心・日本のへそ」と称されている。西脇市域は、中国山地の東端部の山地部で、標高200～600mの丘陵に囲まれている。市域中央部には、南北に加古川が流れ、加古川及びその支流である杉原川の周辺に平野が形成されている。遺跡は、西脇市の北部にあり、加古川右岸の平野に所在する。

津万遺跡群の「津万」の地名は、靈亀元年（715年）の編述とみられる『播磨国風土記』において、「播磨国託賀の郡（はりまのくにたかのこおり）」の里名、「都麻の里（つまのさと）」とされ、「播磨刀壳（はりまとめ）」と「丹波刀壳（たにわとめ）」とが国境を定めた時の説話で表れる。後世では、「妻庄（つまのしょう）」、「都万村（つまむら）」等と記された。

第2節 歴史的環境

津万遺跡群周辺の歴史的環境については、平成28年度に刊行した同事業報告書『兵庫県文化財調査報告 第486号 大門畠瀬遺跡・大伏北山遺跡—一般国道175号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告一』の第2章 位置と環境、第2節 歴史的環境において記述されている。また、令和4年度刊行報告書『兵庫県文化財調査報告 第526号 津万遺跡群1—一般国道175号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告一』においても記述されており、記述内容、周辺の遺跡分布図、遺跡地名表等が重複するため、本項では敢えて記述を割愛する。従って、詳細については、上記報告書を参照されたい。

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺構

遺構は、西嶋1区、西嶋2区、西嶋3区、西嶋4W区、西嶋4E区、西嶋5区、西嶋6区、嶋1区、嶋2区、嶋3区、嶋4区の順に掲載する。遺構名は各調査地区で個別に付しているため、同一遺構名が存在する場合がある。また、本報告書の遺構名は、発掘調査時の遺構名表示との齟齬を避けるため、原則的には発掘調査時に付した遺構名をそのまま使用する。

なお、概要については、基本的には各地区の調査区の概要として記述している。また、遺物のみ掲載したものは、遺構平面図内に明示し、個別の図面及び記述を割愛したものもある。

1 西嶋1区の調査

調査区の概要（図版9・10、写真図版1）

調査区は南北約50.2m、東西約20.5mを測る。遺構検出面の標高は62.3～62.6mで、調査区東部が高く西部が低い。調査区南西部に北西から南に向かって伸びる旧河道NR01の形成した谷部がかかる。基本層序は、表土ないし現耕作土以下は旧河道NR01の形成した谷部埋積以後の砂質の旧耕作土層（1～3層）と、旧河道NR01の堆積土（4・5層）、旧河道開削以前の基盤層（6・7層）で構成される（図版10）。検出した遺構は、掘立柱建物1棟（SB01）、柱穴75基（うち本書掲載6基：SP01～06）、溝4条（SD01～04）、土坑6基（SK04・08～12）を検出した（図版9）。

掘立柱建物

SB01（図版9・11、写真図版1） 調査区中央付近やや東寄りで検出した。規模は東西2間（5.07m）×南北2間（4.43m）に復元される総柱建物である。床面積は22.46m²、主軸方向はN14.5°Wを指向する。柱の掘方は直径20～38cm、検出面からの深さは14～36cmと浅く、上面に削平が及んでいる状況がうかがえる。柱間は梁行方向の平均が2.21m、桁行方向の平均が2.49mと後者が若干広めである。

柱穴

75基を検出した（図版9）。うち、遺物が出土した6基についてはSP01で須恵器の小片が、SP02で弥生土器の小片が、SP03、SP05、SP06で土師器の小片が、SP04で須恵器椀口縁部の小片が出土している。

溝

SD01（図版9・11、写真図版2） 調査区北部で延長18.1mにわたって検出し、SD02に切られる。最大幅60cm、検出面からの深さ17cmを測る。横断面形は両肩が開き気味のU字状を呈し、埋土は黒色のシルト質極細粒砂で基盤層をブロック状に含む。埋土から弥生時代末頃の土器が出土している。

SD02（図版9・11、写真図版2） 調査区北東隅から調査区内の中央部付近を縦断し、最大幅2.33m、検出面からの深さ15cmを測る。横断面形は浅くて幅広のV字状を呈し、底部付近では粗い砂粒を含みつつ基盤層を削り込んで激しく流れた痕跡が部分的に認められ、埋土の断面や検出面において黒褐色と灰オリーブ色のシルト質極細砂から細砂が各々の筋がマーブル状に流れ込むような堆積が観察される。奈良時代から平安時代の土器が出土している。

SD03（図版9・11、写真図版2） 調査区北壁付近で延長3.0mを検出し、北側は調査区外に及ぶが最大幅50cm以上、検出面からの深さ10cmを測る。横断面形は浅い皿状を呈する。

SD04（図版9・11、写真図版2） 調査区北壁付近で延長4.6mを検出し、北端は調査区外に及ぶ。最大

幅30cm以上、検出面からの深さ10cmを測る。横断面形はU字状を呈する。

土坑

SK04（図版9・11、写真図版3）調査区北東部で検出した。長径1.20m、短径1.10m、検出面からの深さは5cmを測る。横断面形は浅い皿状を呈する。

SK08（図版9・11、写真図版3）調査区南東部で検出した。長径1.53m、短径61cm、検出面からの深さは25cmを測る。横断面形は幅広いU字状を呈する。中世前半期の須恵器椀の破片が出土している。

SK09（図版9・11、写真図版3）調査区南東部で検出した。長径1.72m、短径1.08m、検出面からの深さは30cmを測る。横断面形は逆台形状を呈する。

SK10（図版9・11、写真図版3）調査区南東部で検出した。長径1.43m、短径83cm、検出面からの深さは31cmを測る。横断面形は幅広いU字状を呈する。中世前半期の須恵器椀及び須恵器小皿の破片が出土している。

SK11（図版9・11、写真図版3）調査区南西部で検出した。一見、複数の土坑が連結した平面形のようだが、くびれる箇所で底部は立ち上がりらず、むしろこの付近に底部の最深部がある。長径1.01m、短径71cm、検出面からの深さは19cmを測る。横断面形は逆台形状を呈する。

SK12（図版9・11、写真図版3）調査区南西部で検出した。長径1.03m、短径56cm、検出面からの深さは10cmを測る。横断面形は逆台形状を呈する。

旧河道（自然流路）

NR01（図版9・11、写真図版3）調査区南西を南流する。延長18.5mにわたって検出し、検出最大幅3.6m、検出面からの深さ39cmを測る。遺物の出土は認められない。

2 西嶋2区の調査

本地区は、平成16年度の確認調査（2004247-T102・T104：図版1）の結果、流路、土坑及び溝等が検出されたため、平成21年度に本発掘調査を実施したものである（図版12～17、写真図版4～10）。主な検出遺構は以下の通りである。なお、遺物のみ掲載しているものは、遺構平面図内に明示し、個別の記述は割愛した。

（1）自然流路（図版12・16、写真図版4・5・9）

NR01

調査区西半部で検出し、調査区北端から南端まで延びる自然流路で、西嶋1区のNR01の延伸である。検出した掘方は、調査区北側の一部で大きく蛇行する等、不定形で、凡そ人力による開削に伴うものではないことが窺える。また、この流路は、調査区北壁の西端から調査区南壁のほぼ中央に向けて、ほぼ南北方向に伸びている。断面観察では、黒褐色シルト質極細砂から極細砂を中心とする埋土であり、あまり流れがなく澱みのような状態であったことが窺われる（図版16）。

遺物は、弥生時代後期の甕（12～14・16・17）、壺（15・32）、器台（18・19）、古墳時代の須恵器壺（20～25・33）、高壺（26）、甕（27）、壺（35）、土師器壺（31）、高壺（34）、古代の土師器甕（28～30）を図化している。

（2）土坑（図版12、写真図版4・5・10）

SK02

調査区北東側に位置する。長軸西側はSD01に切られて全長は不明だが検出長約170cm、短軸約100

cmを測る長楕円形を呈すると考えられる。遺物は、須恵器坏（36）を図化している。

SK12

調査区中央やや南側に位置する。長軸約140cm、短軸約60cmを測る不定長方形を呈する。遺物は、弥生時代後期甕（37）を図化している。

（3）溝（図版12・17 写真図版4・5・10）

SD01

調査区北東側に位置する。検出延長約770cm、幅約100cm、深度約15cmを測る（断面：e-e'）。ほぼ南北方向に伸びる溝だが、やや湾曲しながら東側調査区外へ伸びる。図化可能な遺物は出土しなかった。

SD02

調査区東側に位置し、南北に細長く伸びる。北側の掘方は、蛇行するNR01と合流し、南側は東側調査区外へ伸びる。検出延長約33m、幅約74cm、深度9～12cmを測り、SD06、SD07とほぼ平行に伸びており、SD06の掘方の一部を切る（断面：g-g'・h-h'）。図化可能な遺物は出土しなかった。

SD04

調査区北西側に位置し、東西に細く伸びる。延長約470cm、幅約29cm、深度約5cmを測る（断面：f-f'）。NR01内でも検出しているが、方向的にSD02の延長上にあり、同一遺構の可能性が考えられる。図化可能な遺物は出土しなかった。

SD06

調査区東側に位置し、南北に細長く伸びる。北側の掘方付近でSD02に切られるが、SD07と共にSD02とほぼ平行に伸びている。南側でやや遺構が途切れるが、検出長約24m、幅約72～78cm、深度約12cmを測る（断面：g-g'・i-i'）。図化可能な遺物は出土しなかった。

SD07

調査区東側に位置し、南北に細長く伸びる。北側の掘方は近現代の暗渠に切られており、全長は不明だが、検出長約13m、幅約48cm、深度約6cmを測る（断面：g-g'）。SD06と共にSD02とほぼ平行に伸びている。図化可能な遺物は出土しなかった。

SD08

調査区南東側に位置し、東西に細長く伸び、SD06を切る。検出長約4m、幅約40cmを測る。

3 西嶋3区の調査

調査区の概要（図版18・19、写真図版11・12）

調査区は南北約37m、東西約37mで、遺構検出面の標高は約62.0mを測る。基本層序は、盛土を除去した以下は現耕作土、近世以降の旧耕作土層（1～2層）に続いて谷底低地の堆積層（3～5層）となり、安定した基盤層とその上部に堆積する黒ボク層（6層）の上面が遺構面となっている（図版19）。ただし、谷底低地の堆積層の最上層である3層をもって谷部の埋没が完全に完了したわけではなく、少なくとも旧耕作土層のうち2層は谷部範囲内の上部の凹みに形成された、逆に言えば谷部埋没最終段階においてその上面が耕地として利用されていた状況が看取される。

北西方向から南東方向に向かって底部の緩やかに傾斜する谷部（NR01）と、谷内の底部を流れる小規模な流路（SR02～14）及び溜まり状遺構（SX01～06）を検出した（図版18）。

自然流路（谷部）

NR01・SR02～14・SX01～06（図版18・19、写真図版13）調査区の全域を占める谷部を形成する自然流路（NR01）及び谷底を開析した自然流路（SR02～14）及び溜まり状の遺構（SX01～06）を検出した。

NR01の形成した谷部の両岸の肩部から一段下がった平坦面が調査区の北東部（東壁北半沿い）及び南西部（南西隅付近）で帯状に検出されているが、両岸の肩部そのものは調査区外に及ぶ。この帯状の平坦面どうしに挟まれた谷の段階では幅39.0m、深さは0.7mを測る。なお、南側の肩部は西嶋4E・4W区北部において検出されており、その延長線は本調査区の南西隅付近をかすめる蓋然性が高いが、当該箇所に搅乱が及ぶために本調査区において肩部を確認することはできなかった。一方、北東側の肩部については西嶋2区におけるSX01東肩から本調査区外北東側に延びてきている可能性が想定される。

NR01埋土最上層（3層）では12世紀後半から近世にかけての土器を、上層（4・5層）では12世紀代の土器をはじめ、古墳時代後期、8世紀代の土器を含む。下層（6層）は調査区北東側の大部分に堆積しており、8世紀代の土器をはじめ弥生時代中期及び後期末の土器が含まれていた。なお、下層の堆積する範囲より南西側の段上には5層直下にSR02・04～07・13・14、SX02・06が検出され、このうちSX06から律令期の須恵器坏蓋（74）が出土している。

上層から下層の埋土を除去した後の谷底部において、SR03・08～12及び溜まり状遺構SX01・03～05が検出された。SR09・10・12及びSX01・03で埋土から弥生時代後期の土器が出土していることから、弥生時代後期から律令期の間に開削された流路ないし溜まり状の遺構と考えられる。SR03からは弥生時代中期のものと考えられるサヌカイト製打製石庖丁（S6）のほか、SR08からは有茎尖頭器（S1）が出土している。

4 西嶋4W区の調査

1. 調査区の概要（図版21、写真図版16・17）

西嶋4W区は南北51.5m、東西17.4mの若干歪んだ長方形の調査区で、調査面積は896m²である。遺構検出面の標高は62.5m～62.6mで、南西の一部で62.7mの部分があり、全体的に南がやや高い傾向にある。基本層序は耕土および床土直下に遺構面があり、遺構面が低くなる部分が北東隅部および南西隅部分で認められた。遺構面になっている土層は明黄褐色を呈する粗粒シルト～極細粒砂で、細粒砂～粗粒砂を微量含む粘質の土であるが、調査区南部の一部分には東端で南北約11m、調査区西端に向かって平面三角形状に砂礫層の盛り上がり部分が認められた。ただし、削平により明黄褐色の遺構面と同じ高さになっていた。調査区内の東端では、橋脚工事の際の掘削が調査区内に1.3m～1.9mの幅まで及んでおり、破壊された溝も存在した。なお、遺構埋土等の土層名註記は本報告に際し文言整理した。

検出した主な遺構は弥生時代中期の溝・流路、古墳時代の方形堅穴建物跡、弥生時代から鎌倉時代初期の木棺墓4基、平安時代後期から鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡1棟のほか、柱穴・溝・土坑・溜まり状遺構などがある。また、北東部には谷状あるいは幅の広い溝状の落ち込み部分も認められた。

なお、西嶋4E区の西側に接した調査区であることから、西嶋4E区で検出された溝などと続くものが数条認められたが、遺構番号は別番号としている。

2. 弥生時代から古墳時代の遺構

溝・流路（図版22～24、写真図版16～20）

SD88 幅 0.9 m～1.5 m、検出面から溝底までの深さは北部で 39 cm 程度、南部では 50 cm 前後で、調査区北端中央部から調査区西壁の中央部まで検出した。断面は U 字形に近い。やや弧状を呈しながら直線的にのびる溝で、溝底の標高は北端が南西端よりも 9 cm 程度低いことから、南西側から北側に流れていった可能性がある。ただし、その差は小さい。調査区内で検出した総延長は 32.1 m である。

北部では SD118・SD120、中央部では SD80 と重複し、いずれも本溝が古い。ただし、中央部で重複する SD156 は、本溝よりも古いことが断面観察により判明している。

埋土は黒褐色および褐灰色を呈し、シルト質の細粒砂が主である。埋土から弥生中期後半を中心とした壺・甕・高杯・蓋など (99～110) が全体から出土しており、12 点を報告した。上面では須恵器甕の小片が出土している。

SD156 調査区西壁北部から東壁南部にかけて、やや弧状を呈しながら直線的に北西～南東方向にのびた溝で、検出した延長は約 24 m であるが、東端部は約 2 m の部分が工事により破壊されていた。溝断面は逆台形に近い。SD88 と重複し、西側では消失しているようにみえるが、SD80 西端部の底面で、SD156 の西端部を検出している。幅 50 cm～70 cm、検出面から溝底までの深さは 21 cm～30 cm で、北西側が深い傾向にある。また、溝底の標高は北西側が南東側よりも 6 cm 高いことから、水流は南東方向であった可能性がある。この溝は西嶋 4 E 区の SD01 に続く。

埋土は黒色や黒褐色が多く、シルト質細粒砂である。溝中央部分より出土した弥生中期の底部 (111) を報告したほか、弥生中期土器多数と須恵器小片が出土している。

NR73 調査区北西隅部分で検出した自然流路で、SD88 の西側で 4 m～5 m の間を置いてほぼ平行方向にある。南端は SX109 により溝肩がかなり改変されている。東側には南北約 3.0 m、東側に約 3.0 m の半円形に張り出した部分があり、水流により削られた部分と判断している。北端での流路幅は 2.6 m で、検出面からの深さは 56 cm～64 cm あり、張り出し部分の深さは 46 cm である。流路底の標高は、北端で南端よりも 11 cm 低くなっていることから、水は北流していたと判断されるが、多くが調査区外に存在するため、そうでない可能性も残る。流路埋土は黒褐色および黒色を呈するシルト質の細粒砂～中粒砂で、埋土は大きく 3 層に分けられ、埋土の上層は北端断面の第 7 層・第 8 層および中央断面の第 2 層で、褐色が強く地山ブロックが目立つ。埋土中層は北端の第 9～第 11 層・第 13 層、中央部断面の第 4 層で、灰色が混じったような黒色で粒子が細かく粘質である。埋土下層は北端での第 14 層・第 18 層・第 19 層、中央部断面の第 6 層で、中粒砂を多く含み地山ブロックも含んでいる。なお、南部を中心とした溝底には地山の礫層が露出している。

埋土からは弥生時代中期後半の壺・甕・高杯など (112～130) のほか、庄内期の壺・高杯など (131～133) に加え、古墳時代中期末～後期初頭の須恵器・土師器 (134～136・138) および飛鳥時代の須恵器 (137) が出土している。また、石製品では敲石・磨石 (S13) の類が出土している。これらのことから、庄内期にほぼ埋まったと考えられる。

豊穴建物跡（図版 24・25、写真図版 18・21～23）

SH150 調査区北東部で検出した平面方形の豊穴建物跡であるが、北東側の半分以上が谷部により削り取られている。内部には重複して規模が小さい住居跡が存在することから、増築されたと判断している。検出面から床面までの深さは西部で 3 cm 程度、南部が 9 cm 前後で、最も残りが良かった部分でも 11.6 cm である。幅 10 cm～25 cm で平均 20 cm、床面からの深さ 2 cm～11.5 cm で南東部が深い周壁溝が遺存し

ていた。方向はほぼ正方位で、南北 3.55 m、東西 4.35 m 遺存していた。住居跡内南西部に存在した柱穴が主柱穴と判断され、4 本柱であったことが推定できる。柱穴は柱痕が径 12.5 cm の円形で、検出面からの深さ 35.8 cm を測る。掘形は長径 36.0 cm のほぼ円形で、検出面からの深さは 39.4 cm であった。

床面南部には周壁溝と重複するかたちで SK160 の土坑が存在していた。建物跡に伴うものと考えている。また、北部の床面には焼土や土師器細片の集中部が幅 50 cm、長さ 1.2 m の楕円形状に認められ、床面よりも 2 cm 程度の高まりとなっていた。埋土の可能性もある。

増築前の下層住居跡は、増築後の壁から 40 cm 前後内側に周壁溝が存在し、増築後住居と相似形になっているうえに、南西隅の主柱を共有している。周壁溝の内側には幅 35 cm ほどの屋内高床部を有し、SK160 により一部破壊されているが、西側から南側にかけて認められた。屋内高床部の残存高は床面から 5 cm 程度で、周壁溝外側は同じ高さまで増築の際に削られていた。周壁溝は南北 3.0 m、東西 3.55 m 遺存しており、下層住居跡の残存規模になる。周壁溝の幅は 10 cm ~ 17 cm、検出面からの深さは 3 cm ~ 10 cm で 7 cm 程度の部分が多い。床面南東部分には SK278 が周壁溝と重複するかたちで存在し、下層住居跡に伴うものと判断しているが、なお、南西隅のさらに下層で検出した SK279 は住居跡に伴うものではないと考えられる。

SH150 の埋土は増築後が第 4 層および第 10 層の黒褐色シルト質細粒砂および第 11 層の褐灰色シルト質細粒砂で地山ブロックを少量含んでいる。下層住居跡の埋土は下半に細かい単位が多く、第 16 層の黒褐色、第 17 層の灰褐色、第 18 層・第 19 層の褐灰色を呈するシルト質細粒砂であるが、上半ではやや大きな単位となり、第 12 層が灰黄褐色のシルト質細粒砂で、第 13 層～第 15 層は黒褐色を呈するシルト質細粒砂や中粒砂になっている。

出土土器は、下層住居跡の周壁溝埋土から土師器甕片（143）、上層住居跡埋土から土師器脚部片（144・145）が出土しているが、小片のため時期判定が難しいものの、古墳時代後期の 6 世紀末～7 世紀前半頃と推定される。なお、本地区以外の近隣調査区では堅穴住居跡は検出されていない。

SK160 平面楕円形に近く、長径 1.38 m、短径 1.07 m で、床面からの深さは 31 cm である。底はやや丸いが平坦に近い。埋土は大きく 3 層に分けられ、上層が褐灰色を呈するシルト質細粒砂の第 2 層～第 4 層・第 7 層を中心とし、中層は第 5 層や第 9 層の黒褐色シルト質細粒砂が中心である。上層・中層には地山ブロックを含んでいる。下層の第 10 层・第 11 層は黒色のシルト質極細粒砂で木材片や炭化物を含んでいた。埋土からは須恵器壺や椀の小片が多数出土している。

SK278 平面は円形に近いようであるが、西側が SK160 により削り取られているため正確な形状は不明である。検出面での南北規模は 75 cm、検出面からの深さは 24 cm である。底はやや丸く、杭のような穴がある。埋土は大きく 3 層に分けられ、炭化物を少量含み、中層・下層は褐灰色を呈する。埋土から土師器甕体部片などが出土している。

SK279 位置と重複関係から建物跡に伴わない土坑と判断した。平面は三角形に近い歪な楕円形を呈し、底は丸い。検出面での長径は 80 cm、短径 53 cm で、検出面からの深さは 24 cm である。埋土は 3 層に分けられ、中層の褐灰色以外は黒褐色を呈し、埋土全体に地山ブロックが含まれ、上層には炭化物が混じっていた。

木棺墓（図版 26、写真図版 24～26・29）

ST209 調査区南部で検出した木棺墓で、西端部分は SD222・SD253 により削り取られている。残存長

2.1 m、幅は西側で 65 cm、東側が 75 cm で、東側が 10 cm 幅広くなっている。長軸は東西方向に近い。頭位は東側の可能性がある。検出面から墓壙底までの深さは深い所で 14 cm を測り、長側板をはめ込むための溝が掘られていた。長側穴の幅は 10 cm 程度、墓壙底からの深さは約 1.1 cm ~ 4.4 cm であまり一定していない。溝の存在から弥生時代の所産である可能性が高いが、埋土から土師器小片が出土しているものの、時期を確定できる遺物は出土していない。なお、西嶋 4 E 区でも長側穴が存在するものが 2 基検出され、弥生時代とされていることから同時期の所産と判断される。

ST47 調査区中央西部で SD88 と重複して検出した木棺墓で、SD88 が完全に埋まった後に掘削されている。長軸は南北方向に近く、検出時の墓壙長 2.0 m、墓壙幅 95 cm で、北側がやや狭くなっている。検出面からの深さは 16 cm 残存し、底は平坦である。墓壙埋土には地山ブロックを多く含んでいた。箱形の木棺痕跡は長さ 165 cm、幅 61 cm で、北側が若干狭くなっている。検出面からの深さ 12 cm で、黒褐色および黒色の埋土であった。棺内西寄りには角礫が 4 点ほど遺存していたが、棺おさえの礫または埋土に混入したもの可能性もあり、その性格は不明である。棺内から弥生土器壺底部（140）が出土しているほか、棺内や墓壙内埋土から須恵器・土師器の小片が多数出土し、上面から轍羽口の小片が出土している。140 は SD88 の埋土中のものが混入したものと思われる。

木棺墓の時期は未確定であるが、古墳時代のものと推定しており、東隣の西嶋 4 E 区でも 3 基の土壙（墓）が検出されている。ただし、長軸方向は SB01 内の ST22 と同じであることから、時期が降る可能性も残っている。

柱穴（写真図版 26）

SP200 調査区北西部西壁で NR73 と重複して検出した柱穴と思われる遺構で、NR73 埋没後に掘削されている。図は作成できなかったが、掘形は幅約 30 cm、深さ約 20 cm 程度である。上面から古墳時代後期～末の須恵器壺蓋（146）が出土している。

3. 奈良時代から平安時代後期の遺構

木棺墓（図版 26、写真図版 25・27・28）

ST46 調査区中央西部で、木棺墓 ST47 の東隣で検出した小型の墓である。主軸は東西に近いが約 18° 振れている。平面形は西側が丸くひろがっているが、矩形に近い。東西の長さ 90 cm、幅 50 cm で、検出面からの深さは 32 cm である。埋土は灰褐色や黒褐色で地山ブロックを多く含んでいたが、木棺の痕跡は認められなかった。ただし、底には薄い木片が遺存しており、小口部分では礫が立った状態で検出されたことから、単なる土壙墓ではなく、小口両側に石を立て、底に板を敷いた上に埋葬されたと判断され、木棺墓の一種と判断しておきたい。なお、小口礫間の棺長は 67 cm ~ 72 cm で、棺底の東部では漆器の赤漆膜が遺存していたことから、東枕であったと判断される。埋土の第 3 層から奈良時代後半～平安時代初期の土師器壺（147）が埋土から出土しているほか、埋土から須恵器・土師器小片が出土した。なお、漆器の漆膜は取り上げ後粉々になり、報告できなかった。

墓の規模から、小児未満の子供の墓と推定される。

溜まり状遺構（図版 27、写真図版 29 ~ 31）

調査区南端部には平安時代前期の土器を含む浅い落ち込みをはじめ、多くの遺構が集中していた。そ

これらのうち地山あるいは地山土壤化層を遺構面とした下層面と、その上に堆積した褐灰色のシルト質細粒砂を遺構面とした上層面に分かれることが判明している。下層面では SX262 や SX267 といった溜まり状遺構や SD222・SD253 の溝がある。これらの遺構は調査区南側の未調査部分にのびており、他の遺構も続いて存在している可能性が高い。

SX262 中央東寄りで検出した溝に近い形状の溜まり状遺構で、最大幅 1.85 m、検出面からの深さは約 20 cm で、底はやや丸みがある。北端はやや歪であるが、南北方向の長さは 3.2 m にわたって検出し、さらに南側の調査区外に続く。埋土は灰褐色のシルト質細粒砂で一部に地山ブロックを多く含んでいる。埋土からは奈良時代後半～平安時代初期の須恵器蓋片（148）や須恵器の坏 B（149）と思われる破片が出土している。

SX267 調査区南西隅で検出した落ち込み状遺構で、埋土には土器を多く包含していた。検出できた範囲は東西約 3.6 m、南北約 1.3 m の矩形部分で、調査区外の南側や西側に続いている。底は北から南に向かって徐々に低くなっている。検出面からの深さは 4 cm～15 cm である。埋土は下層が暗褐色、上層が黒褐色を呈し、粒度は小さい。上層を中心に飛鳥時代～平安時代初期の須恵器坏類 7 点（150～156）や土師器椀か鉢の高台部片（157）および須恵器壺や甕の口縁部（158・159）、土師器鍋片（160）が出土している。

土坑（図版 27、写真図版 31）

SK277 南端中央部の溝などと重複して下層で検出した土坑である。平面形は不明であるが直径約 80 cm の円形に近いと思われる。底は南に傾いており、検出面からの深さは最も深い南部で 29 cm を測る。埋土は黒褐色や暗褐色を呈し、地山ブロックを含む。粒度は小さく炭化物を含んでいる。第 1 層から須恵器椀・甕や土師器・弥生土器の小片が出土している。

溝（図版 27・30、写真図版 29～30）

SD222 調査区南部で、北東～南西方向に直線的にのびる溝で、西嶋 4 E 区の SD02 につながる溝である。調査区内では延長約 15 m にわたって検出したが、橋脚工事の際の搅乱により北東部は 3 m 程度の長さにわたってすでに破壊されており、南西端は調査区外に続いている。中央部南西より部分で SD253 と重複しており、SD253 が新しい。また、南西端付近では SD210 と重複しており、SD210 が新しい。

溝幅は 60 cm～110 cm で、SD253 の北端にあたる部分が幅広い。検出面からの深さは 16 cm～32 cm で北東部が深い傾向にある。溝底の標高は上下しているが、大略的には南西側が高く北東側が低いことから、北東に向かって流れていた可能性が高い。ただし、その差は最大でも 10 cm 程度である。埋土は大半が黒褐色や褐灰色を呈しているが、褐灰色は北西部にみられた。

本溝は層位的には調査区南部の下層面にあたり、奈良時代後半～平安時代初期の可能性が高く、SD253 よりも古いが、平安末の青磁皿の破片（167）が出土している。ほかには須恵器甕の破片や須恵器・土師器の小片が多数と弥生土器小片が出土している。

SD253 SD222 に途中から合流するように途切れる溝であるが、明らかに SD222 埋没後のものである。溝北端は確定できないが、調査区内で 4 m 弱にわたって検出した。南端は調査区外に続いている。検出面での幅は 63 cm 前後、検出面からの深さは 25 cm～30 cm で、溝横断面は逆三角形に近く、SD222 よりも全体的に深い。埋土は黒褐色で SD222 とほぼ同じである。SD222 と同様に調査区南部の下層面にあたり、

SD222 よりも深い。底は尖る。

溝埋土からは壺A（161）や稜椀と思われる破片（162）、壺の口縁部片（163）といった奈良時代後半～平安時代初期の須恵器のほか、須恵器壺片や土師器片が多数出土している。

なお、出土土器や出土層位から、この時期の可能性がある柱穴には、調査区中央西部で SD88 と重複する SP55、調査区北部西端で検出した SP94、調査区南端で SX262 と重複する SP250 および SP252、調査区南端中央西部で溝と重複する SP255 がある。

4. 平安時代後期から鎌倉時代初期の遺構

掘立柱建物跡（図版 28、写真図版 32・33）

SB01 調査区中央南部で検出した掘立柱建物跡で、南北の桁行 3 間（6.9 m）、東西の梁行 2 間（4.4 m）の小規模な総柱建物跡であるが、中央部の柱芯桁間は 2.9 m で北側の柱芯桁間 2.0 m や南側の柱芯桁間 1.9 m よりも広くなっている。ほぼ中央部西寄りの床下には木棺墓（ST22）が営まれていた。建物の主軸方向は N 4° E で、木棺墓の主軸もほぼ同じであることから、屋敷墓と判断される。柱芯梁間は 2.1 m と 2.2 m である。地山は大半が黄褐色系の粗粒シルト～細粒砂が基本であるが、南東部の地山は礫層になっている。柱穴掘形は円形を呈し、直径 22 cm～28 cm 程度、柱痕も円形で直径 14 cm 前後である。検出面からの柱穴の深さは 20 cm 程度であるが、10 cm 程度のものも多く存在することから、後世に面的に削平を受けたと判断される。柱痕埋土は黒褐色を呈し、掘形埋土には地山ブロックが多く含まれていた。

SP20 と SP23 では柱痕埋土上部で板石が検出されたが、柱抜き取り穴に蓋をするような状況であることから、礎板石を利用したものと思われる。SP16 では礎板石の可能性がある礫が柱痕底から検出され、SP26 の柱痕底は硬く締まっていた。SP20 では柱おさえの礫も柱痕埋土中から検出されたが、SP18・SP21 でもその可能性がある礫を検出している。

SP21 の上面からは須恵器椀の小片（164）が出土しており、SP18 の柱痕および SP19 の柱痕・掘形から須恵器椀小片、SP23 上面・SP24 掘形からも須恵器椀小片が出土し、SP25 上面および掘形と SP26 の柱痕から土師器小片が出土している。また、取り上げできなかったが、SP23 の礫上面から漆器の漆膜を検出した。これらの出土遺物から、SB01 は平安時代末～鎌倉時代初頭の時期と思われる。

木棺墓（図版 28・29、写真図版 34・35）

ST22 SB01 内の中央部西寄りで検出した木棺墓で、掘立柱建物跡とほぼ同一の主軸方向で真北に近い。子孫の守り神として祀られた先祖の墓である屋敷墓と判断している。墓壙平面形は長方形で、長さ 1.86 m、幅 62 cm～70 cm で北側が若干幅広い。検出面からの深さは最大で 21 cm を測り、墓壙底は平坦である。墓壙内には箱形の木棺が安置されていた痕跡を検出した。検出した高さは 14 cm で、長さは 1.68 m、幅は 45 cm～48 cm で北側が若干幅広いことから、北枕であったと判断される。底も若干高い。木棺痕跡の高さから、少なくとも 20 cm 程度が面的に削平されていると想定される。埋土は黒色や黒褐色のシルト質細粒砂で、棺内埋土と墓壙埋土に大きな差はない。埋土から遺物は検出されなかったが、M2 の鉄製紡錘車はこの遺構出土の可能性がある。

土坑（図版 29、写真図版 35）

SK212 調査区中央南部の西壁寄りで検出した平面方形の土坑で、東側には円形の土坑 SK32 がある。平

面で北側が丸みを帯びるが、一辺 80 cm 強で底は礫層に達するがほぼ平坦で、検出面からの深さは 55 cm を測り、垂直に落ち込んでいる。埋土は地山ブロックを含む褐灰色のシルト質細粒砂で、底部では黒褐色を呈して礫を多く含んでいた。

埋土から須恵器椀の破片（165）が出土しており、ほかに土師器小片が出土している。平安時代末～鎌倉時代初頭の時期と判断している。SB01 に関する施設の可能性がある。

SK32 SK212 の東側、約 60 cm の間隔で近接した位置にあり、平面円形を呈する。直径 80 cm の円形を呈し、検出面からの深さは 30 cm で壁はほぼ垂直で底は平坦である。埋土は褐灰色や灰褐色を呈し地山ブロックを含んでおり、自然堆積の状況を示している。

図示していないが、須恵器椀や土師器土鍋の小片が出土しており、SK212 と同様に SB01 の関連施設であろう。

溝（図版 27・30～33、写真図版 18・29～31・35～38）

SD80 調査区中央北部で西北西から東南東方向の溝で、橋脚工事の際の搅乱を辛うじて免れて調査区東端に達し、西嶋 4 E 区の SD04 へ続く。西側は埋没後の SD88 を横断して調査区外にのびている。また、西部で SD156 と重複しており、SD80 の下層で SD156 の一部を検出した。検出した総延長は 20.7 m で、幅は西部で 1.7 m、東部で 40 cm である。多くの部分で溝幅が変わっていることから、改修された可能性がある。検出面からの深さは 10 cm～32 cm で、溝底の標高とともに一定しないが、西北西方向であつたかもしれない。埋土は黒褐色や灰褐色を呈している。

出土遺物には弥生時代中期後半の甕片（139）のほか、須恵器椀・須恵質土鍋の破片や七輪片も出土している。139 は SD88 や SD156 の埋土に含まれていたものであろう。また、中央部では木材片も検出している。溝の方向が北東側にある溝と同じであることから、時期が降る可能性がある。

SD119 調査区北東部で検出した北西～南東方向の浅い溝で、SH150 の埋土上面で検出した。長さ約 4 m を検出したが、両端とも自然消滅していた。中央部での幅は 55 cm、検出面からの深さは 9 cm で、横断面での底は丸く、中世素掘溝に似る。埋土は黒褐色のシルト質細粒砂で、埋土から須恵器椀や土師器の小片が出土している。

SD120 SD119 の南西側で約 50 cm の距離を置いて平行に走る溝であるが、東端では北東方向に大きくひろがっている。また、SD130 や SD118 につながっていたと推定される。幅は約 30 cm で底は丸く、検出面からの深さは 6 cm と浅い。中世素掘溝のようである。埋土は SD119 と同じである。埋土から土師器小片が出土している。

SD124 SD119・SD120・SD125 と同じ方向で同程度の幅であり、中世素掘溝であろう。西嶋 4 E 区の SD06 につながる溝であるが、南東端では約 1.5 m 長的部分が橋脚工事の搅乱によりすでに破壊されていた。北西端は SD88 埋土上までで、調査区内での延長は約 11.1 m 検出した。SD120 とは 75 cm の間隔がある。溝幅は 30 cm 程度であるが、西部では下層にある同規模程度の溝と重複していた。溝底は丸みがあり、検出面からの深さは 10 cm 前後である。溝底の標高は北西側が若干高いが、水が流れている溝ではないようである。埋土は褐灰色のシルト質細粒砂で、須恵器椀小片が出土している。

SD125 SD124 の南西側で、約 3.1 m の距離を置いて平行に走る。延長約 7.8 m を検出し、南東側は途切れているが、西嶋 4 E 区の SD05 と同一の溝である。溝幅は 30 cm～40 cm 程度、検出面からの深さは 8 cm で、底が丸く、中世素掘溝であろう。南東側は確認調査時に検出面が深くなっている。埋土は黒褐

色のシルト質細粒砂で、糸切底を含む土師器小片が多数出土している。

SD130 北東隅部分で検出した溝であるが、溝肩の北東側は近世以降の溝SD118と重複して不明となつておらず、それよりも古いことから、検出面での溝幅は1.1m以上で2.1m以下となる。ただし、SD130を谷状遺構の始まり部分とすることも不可能ではない。溝は北西—南東方向で、約12.3mの延長を検出した。検出面から溝底までの深さは36cmで、北西から南東方向に水が流れていると推定している。埋土は灰黄褐色や黒色・黒褐色を呈するシルト質極細粒砂から中粒砂で、最下層は褐灰色で砂層に近い質になっていた。埋土から輪高台や糸切り底部の須恵器小片が出土しており、石器類では台形石器(S10)が出土している。

SD203 調査区南西部で検出した東西方向の溝状遺構である。延長は3.2m確認できるが、西端はピットや柱穴と重複し、不明となっている。西部での溝幅は50cm、検出面からの深さは12cm前後で、底には丸みがある。埋土は黒色や黒褐色および灰褐色のシルト質細粒砂である。須恵器椀の破片(166)のほか、弥生土器底部・土師器片が出土している。

SD210 調査区東壁中央部から調査区南壁中央まで延長約29mの溝でややうねっている。幅は20cm~40cmで、底には丸みがあり、検出面からの深さは4cm~14cmで南部が相対的に深くなっている。埋土は黒褐色や褐灰色のシルト質極細粒砂~中粒砂で、溝底の標高は北側が高く南側が低い。

図示していないが、埋土から須恵器と土師器の小片が多数出土しており、調査区南部ではSD222・SD253よりも上層に存在する上層面の遺構にあたる。

SD256 調査区南西部で検出した東西方向でやや弓なり形状の溝状遺構である。調査区内で9mにわたって検出したが、西側は調査区外に続いている。溝幅は70cm程度で、検出面からの深さは8cm前後である。多くの柱穴などと重複しており、重複関係ではSD210よりも古い。図示していないが、埋土から弥生土器または土師器の小片が出土している。

SD260 調査区南西隅部分で検出した東西方向の溝である。調査区内では約1.8m部分を検出したが、西側は調査区外に続いている。溝幅は45cm程度で、検出面北側からの深さが最大で10cmを測る。石鎌未完成(S3)が出土しているほか、図示していないが須恵器壺Aや土師器の破片が出土している。

谷状遺構（図版32・33、写真図版36・37）

北東隅部分 調査区北東角に存在した谷状遺構は、北側の西嶋3区および東側の西嶋4E区と一連のもので、北西—南東方向に谷状遺構の一部である。調査区大半の遺構面よりも約45cm低く最大幅約4.5mの平坦な面と、北東隅でさらに約30cm低くなる緩い傾斜面を検出した。最も低い部分の標高は61.78mで、黒色のシルト質極細粒砂（最下層）が堆積し、上段には黒褐色のシルト質細粒砂（下層）が2層堆積していた。最下層から11世紀代の須恵器椀底部(172)や須恵器甕口縁部(175)が出土し、12世紀代の須恵器小皿(173)や14世紀代の須恵器鉢口縁部(174)は下層出土の可能性がある。また、土師器鍋片(177)は下層またはSD130出土である。

本調査区内で検出した谷状遺構は、北西から南東方向に水流があったと思われ、平安時代後期に埋まりはじめ、最後は溝SD118となって圃場整備前まで存在していた。

溜まり状遺構（図版33、写真図版38・39）

SX109 調査区北部の西壁際で検出した、溝に近い平面形状の遺構であるが、西側は調査区外にのびて

いる。NR73の埋没後に重複している。検出した長さは約3.5m、調査区西壁部分での幅は約1.8mである。底の形状は凹凸が多く、検出面からの深さは東部で19cm、中央部で16cmを測り、西部では中央部分が深くなり、底には15cm前後の角礫が9点集中していた。また、西端南部も深くなっていた。西端部での深さは中央部で34cm、南端部で32cm、浅い部分での深さは16cmである。埋土は褐灰色を呈するが、下層は黒褐色を主としており、数度にわたって堆積と流出が繰り返された状況を示していた。須恵器椀の底部や弥生土器・土師器の小片が多数出土している。

柱穴（図版21・27・34、写真図版29・31・39）

調査区内で検出した柱穴は平安時代～鎌倉時代初期を中心とした時期のものが多いことが出土土器などから想定され、江戸時代以降のものも南西部に少量存在していた。また、遺物が出土しなかった遺構についても上記時期や鎌倉時代～室町時代といった中世の所産である可能性が高いと推定している。

SP81 調査区中央部西端付近に存在し、直径約25cm、検出面からの深さ14cmの掘形で直径約17cmの柱痕をもつ柱穴である。柱痕から平安時代末～鎌倉時代初頭の須恵器椀の破片（168）が出土している。

SP82 SD88の南端で、埋没後に営まれた柱穴である。掘形直径約30cm、深さ27cmで、円形柱痕は直径約15cmである。埋土から庄内期の底部（141）が出土し、掘形からは須恵器椀小片（142）が出土している。庄内期の底部はSD88埋土に含まれていたものであろう。柱痕の底からは礎板石（S17）が検出された。

SP153 調査区北西隅で検出した柱穴で、掘形は77cm×68cmの矩形に近く、検出面からの深さは40cmである。柱痕は円形と思われ、直径20cm前後である。柱痕と掘形の埋土の差は不明瞭である。柱根から甕と思われる土師器小片、掘形から土師器小片が出土している。

SP155 調査区北端の西寄りで検出した柱穴で、一部は調査区外になる。平面方形に似るが、不明である。掘形の最大長は86cmで、検出面からの深さは40cmである。柱痕は平面円形で、径約27cmである。柱痕埋土は黒色、掘形埋土は褐灰色で地山ブロックを多く含んでいた。埋土から糸切り底部と思われる須恵器椀片と、捏鉢と思われる須恵器小片が出土している。

SP171 調査区南西隅で検出した。掘形は円形に近く、径約30cmを測る。柱抜き取り後の柱痕部分の穴を礎板石（S18）で埋めていた。礎板石は約13cm×約10cmで矩形に近い。

SP259 調査区南部中央で、SD222とSD253の合流部付近に溝埋没後に掘削された柱穴である。掘形は径約40cmの円形で、検出面からの深さは19cmである。柱痕は径約23cmの円形平面である。掘形埋土からは須恵器小片、柱痕から鉄滓（M6）のほか土鍋と思われる土師器小片や上面から土師器小片が出土している。

なお、出土土器と出土層位から、ほぼ確実なこの時期の柱穴にはSP14・SP44・SP134・SP175があり、この時期の可能性が高い柱穴にはSP77・SP169・SP176・SP196・SP201・SP230・SP235がある。

5. 時期不明の遺構

土坑（図版34、写真図版18・39）

SX144 調査区北部の東寄りで検出した不定形な土坑である。東西方向の規模は178cm、南北方向は最大135cmで、底の形状は丸い。検出面からの深さは32cmで、埋土のうち、下層はにぶい黄褐色のシルト質細粒砂、中層には灰褐色のシルト質細粒砂、上層には黒褐色や灰黄褐色のシルト質細粒砂が堆積し

ていた。堆積状況から風倒木の可能性がある。遺物は出土しなかった。

SX148 調査区北部の SX144 の南側で検出した不定形な土坑である。北西—南東方向の長径は 155 cm、短径は 130 cm で、検出面からの深さは 36 cm で底は丸い。埋土の状況は基本的に SX144 と同じである。埋土から遺物は出土しなかった。

なお、SX144 の北西側にある、長さ 220 cm、深さ 38 cm の SX129 も同様の性格と思われる。

6. 近世から近代の遺構

溝（図版 32・33、写真図版 36・37）

SD118 調査区北東隅の谷状遺構および SD130 の埋没後に掘削された溝と考えられる。溝が掘削された当初の状況は不明であるが、調査区東壁の土層断面では、谷状遺構下層堆積層上にある圃場整備前の水田畦畔が溝肩となっており、南西側対岸には杭が打設されていた。溝幅は 1.28 m～1.40 m で、谷状遺構の南西肩ラインに沿って約 10.5 m 長を検出した。溝の横断面は逆蒲鉾状に近い。検出面から溝底までの深さは 48 cm で、調査区東壁土層断面の旧水田畦畔上端までの深さは 52 cm である。溝内の底に近い南西側肩部では点々と角礫が散らばっていた。埋土は基本的に上層には褐灰色のシルト質細粒砂、下層には黒褐色のシルト質細粒砂や極細粒砂が堆積している。

埋土からは丹波焼擂鉢（178・179）、丹波焼甕（180・181）、無釉陶器（182）、色絵染付磁器碗（183）や、砥石または硯の破片（S15・S16）のほか、ガラス瓶や須恵器小片も出土している。

5 西嶋 4 E 区の調査

1. 調査区の概要

北端は西嶋 3 区で検出された南東方向に向かう谷筋の南岸が西嶋 4 E 区の北側をかすめて南東側へ延びている。谷の南側は比較的安定した平坦な微高地となっている。微高地部では薄く盛土がなされている部分もあるが、ほとんどは表土直下で、遺構検出面である明黄褐色土の基盤土が現れる。この微高地で弥生時代の木棺墓（ST05・06・14）、土壙墓（ST07・08・28）、溝（SD01）、古墳時代後期の土坑（SK09・10・30）、奈良時代の溝（SD02）、中世の掘立柱建物跡（SB02～04）、溝（SD03）などが検出された。北端の谷部は幅 16 m 以上で、深さは肩から 80 cm 程度である。圃場整備以前までは 2 層を表土とする 1 段下がった耕作地で、8 層以上が同様の土地利用と見られる。9 層以下は弥生時代以降徐々に埋積していた状況がうかがわれる。

2. 遺構

掘立柱建物跡（図版 37～39・43、写真図版 43～47・55）

SB01 調査区の南端部に位置する南北 2 間以上、東西 1 間の掘立柱建物跡で、規模は南北 3.3 m × 東西 3.4 m である。南北方位は N 6° W である。柱穴 P04 が ST05 を切る。南北側の柱間は 1.6 ～ 1.7 m であるのに対して、東西側の柱間は 3.4 m と長い。柱穴の径は 20 cm 程度のものが多く、深さは南側 4 基が約 30 cm、北側 2 基が約 20 cm である。柱穴の P01・02・05 から弥生土器の破片が出土している。

SB02 調査区の南部に位置する南北 2 間、東西 2 間以上の掘立柱建物跡と考えられ、規模は南北 4.6 m × 東西 4.1 m で、南北方位は N 8° W である。南北の柱間は南側の 1 間が 2.8 ～ 2.4 m であるのに対して、北側の 1 間は 2.0 m 前後と短い。東西方向の柱間は約 2.0 m である。柱穴の径は 20 ～ 30 cm 程度で、深

さは 25～5 cm である。P56 から土師器皿（212）、P17 から須恵器椀（213）が出土している。P13 から須恵器破片、P27・54・70 から土師器破片が出土している。

SB03 調査区の南部に位置する南北 2 間、東西 2 間の掘立柱建物跡で、北東隅の柱穴は SD04 の開削により残存していないと考えられる。規模は南北 3.0 m × 東西 3.0 m で、南北方位は N 4° W である。南北の柱間は北側の 1 間が 1.8 m 程度であるのに対して、南側の 1 間は 1.3 m 稲度と短い。東西方向の柱間は約 1.5 m である。柱穴の径は 20～30 cm 程度で、深さは 25～5 cm である。P19 から土師器皿（214）、P30 から土師器皿（215）・鍋が出土している。P18 から土師器皿・鍋、須恵器破片、P21 から須恵器椀、土師器破片、P25・29 から土師器破片が出土している。

SB04 調査区の中央部に位置する南北 2 間、東西 1 間の掘立柱建物跡である。北東隅の柱穴は SD04 の開削により残存していないと考えられる。規模は南北 5.2 m × 東西 1.9 m で、南北方位は N 3° E である。南北方向の柱間は 2.6 m である。柱穴の径は 20～35 cm 程度で、深さは 20～5 cm である。柱穴から土器は出土していない。

SB05 調査区の中央部に位置する東西 2 間、南北 1 間の掘立柱建物跡である。P44 は SD02 を切っている。規模は東西 3.8 m × 南北 2.5 m で、南北方位は N88° W である。東西方向の柱間は 2.1～1.7 m である。柱穴の径は 40～20 cm 程度で、深さは 15～8 cm である。P34 から須恵器椀・小皿（216）・坏身、土師器皿・鍋、P67 から須恵器捏鉢（217）が出土している。P41 から土師器鍋、P44 から須恵器鉢、P86 から須恵器椀が出土している。

柱穴群 調査区の南部の SB02・03 付近では深さ 40 cm 程度の柱穴を比較的集中して検出しているが、建物を復元することはできなかった。P08 から土師器破片、P09 から須恵器破片・土師器破片、P10 から土師器鍋、P12 から須恵器椀（225）、P14 から須恵器破片、P15 から土師器破片、P16 から土師器鍋、土師器破片、P20 から土師器鍋、P22 から須恵器破片、土師器破片、白磁破片、P31 から土師器破片、P35 から青磁碗（226）、P51 から須恵器椀、P76 から須恵器椀、土師器破片、P77 から須恵器破片、土師器皿、P78 から須恵器椀、土師器皿・鍋、P80 から須恵器椀、土師器鍋、P81 から土師器破片、P82 から須恵器椀、土師器破片が出土している。底部糸切の須恵器椀、手づくね成形の土師器皿、平行タタキ成形の土師器鍋の出土が多いことから 13 世紀頃の柱穴が多いと考えられる。その他、調査区中央部の P38 から須恵器坏 A（224）が出土している。

墓〔木棺墓・土壙墓〕(図版 40～42、写真図版 48～54)

ST05 調査区の南端部に位置する埋葬施設である。堀形の平面は東西主軸の長方形で、主軸方位は N81° E である。堀形の規模は長さ 270 cm、幅 115 cm で、深さは 45 cm である。堀形中央の棺と見られる部分は長さ 205 cm、幅 50 cm で、黒褐色土の側板の痕跡とみられる部分を確認した。小口部の構造が不明瞭で、棺両端部の側板間に黄褐色土が詰められている。埋葬後に小口板が内側に倒れたか、小口板が存在しなかつたことが想定され、いわゆる H 形の木棺とみられる。黄褐色土が途切れる南北小口間の長さは 1.3 m 程度である。埋土から弥生土器底部（184）が出土している。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

ST06 調査区の南部に位置する埋葬施設とみられる遺構である。堀形の平面は南北主軸の長方形で、主軸方位は N 4° E である。堀形の規模は長さ 220 cm、幅 85 cm で、深さは 35 cm である。堀形中央の棺と見られる部分は長さ 210 cm、幅 58 cm で、黒褐色土の側板の痕跡とみられる部分を確認した。北側小口

部は板を立てたような痕跡が見られたが、南側小口部は不明瞭であった。いわゆるH形の木棺とみられる。南北小口間の長さは1m程度と推定される。埋土から土師器の破片が出土しているが、ST05と同様な形状と埋土の黒味の強い色調から弥生時代の遺構と考えられる。

ST07 調査区の南部に位置する埋葬施設である。堀形の平面は南北主軸の長方形で、主軸方位はN4°Eである。堀形の規模は長さ130cm、幅60cmで、深さは25cmである。棺の痕跡は確認できず、土壙墓とみられる。埋土上層から礫とともに弥生土器壺(185)が出土している。遺構内で検出されたピットはこの遺構より新しいものと見られる。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

ST08 調査区の南部に位置する埋葬施設である。ST06の東側に並んで検出された。堀形の平面は南北主軸の長方形で、主軸方位はN10°Eである。堀形の規模は長さ110cm、幅33cmで、深さは10cmである。棺の痕跡は確認できず、土壙墓とみられる。遺構に伴って遺物は出土していないが、埋土の黒味の強い色調から弥生時代の遺構と考えられる。

ST14 調査区の中央部に位置する埋葬施設である。堀形の平面は東西主軸の長方形とみられ、主軸方位はN80°Eである。堀形の規模は長さ115cm以上、幅95cmで、深さは20cmである。堀形中央の棺と見られる部分は長さ80cm以上、幅55cmで、箱形木棺とみられる。遺構に伴って遺物は出土していない。

ST28 調査区の中央部に位置する土坑である。平面は東西主軸の長方形で、主軸方位はN73°Wである。規模は長さ75cm、幅38cmで、深さは5cmである。土坑内の床面から須恵器碗(218)が正位置で出土している。遺構の形状等から土壙墓の可能性が考えられる。

土坑(図版43～46、写真図版54～56)

SK02 調査区の南部に位置する土坑である。平面は不整円形で、径60～50cm、深さ4cmである。埋土から須恵器破片、土師器鍋が出土している。

SK03 調査区の南部に位置する溝状の土坑である。西端は調査区外まで延びているが、隣接する西嶋4W区の東端部の一部が調査前に工事により損壊を受けていたことから検出されなかった。長さ160cm以上、幅55cm、深さ8cmである。埋土から弥生土器の破片が出土している。

SK09 調査区の南部に位置する土坑である。平面は不整方形で、規模は長さ110cm、幅90cmで、深さは14cmである。埋土から土師器壺(186)、土師器鉢(187・188)、製塩土器(189～194)が出土している。出土した製塩土器の重量は178gである。時期は古墳時代中期後半～後期初頭と考えられる。

SK10 調査区の南部に位置する土坑である。平面は円形で、直径65cm、深さ12cmである。土坑内の東半には灰黄色の粘土が詰められており、西半の埋土から須恵器有蓋高壺(195)・甌(196)、土師器壺(197)、製塩土器が出土している。出土した製塩土器の重量は1gである。時期は5世紀後葉と考えられる。

SK11 調査区の南部に位置する溝状の土坑である。長さ210cm、幅70cm、深さ8cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。埋土から須恵器と土師器の破片が出土している。

SK12 調査区の南部に位置する溝状の土坑で、東端部は調査区外である。長さ230cm以上、幅40cm、深さ10cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK13 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ65cm、幅50cm、深さ12cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK15 調査区の中央部に位置する溝状の土坑である。長さ117cm、幅26cm、深さ17cmである。遺構に

伴って遺物は出土していない。

SK16 調査区の中央部に位置する不整楕円形の土坑である。長さ 60 cm、幅 55 cm、深さ 17 cmである。

遺構に伴って遺物は出土していない。

SK17 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 97 cm、幅 76 cm、深さ 20 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK18 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 60 cm、幅 57 cm、深さ 9 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。埋土から須恵器と土師器の破片が出土している。

SK19 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 50 cm、幅 47 cm、深さ 10 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。SK20 を切っている。

SK20 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 140 cm、幅 70 cm、深さ 18 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。SK19・29 に切られている。

SK21 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 116 cm、幅 60 cm、深さ 11 cmである。埋土から須恵器と土師器の破片が出土している。

SK29 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 70 cm、幅 65 cm、深さ 19 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。SK20 を切っている。

SK22 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 92 cm、幅 72 cm、深さ 22 cmである。埋土から須恵器と土師器の破片が出土している。

SK23 調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長さ 67 cm、幅 55 cm、深さ 8 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK25 調査区の北部に位置する不整円形の土坑である。直径 50 cm、深さ 23 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK26 調査区の北部に位置する楕円形の土坑である。長さ 63 cm、幅 48 cmで、北側が 1 段深くなっている。深さは 11 cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK24 調査区の中央部に位置する土坑である。複数の土坑が接合して検出された。中央の部分のみ深く、長さ 80 cm、幅 43 cm、深さ 20 cmである。埋土から須恵器壺 G 盖・壺、土師器破片が出土している。

SK27 調査区の中央部に位置する不整楕円形の土坑で、SX01 内で検出された。長さ 170 cm、幅 120 cm、深さ 24 cmである。埋土から須恵器壺、土師器破片が出土している。

SK30 調査区の中央部に位置する土坑である。平面は楕円形で、規模は長さ 98 cm、幅 68 cmで、深さは 18 cmである。埋土から土師器壺（198）、土師器甕（199）、製塩土器（200～207）、土錘（208）が出土している。出土した製塩土器の重量は 172g である。

不明遺構（図版 46、写真図版 58）

SX01 調査区の中央部から北部の谷筋際にかけての位置で検出された浅い落ち込み状の遺構である。SD06 に切られている。遺構内で検出された SK27 との前後関係は不明である。長さ 5.5 m、幅 4.3 m、深さ 30 cmである。埋土から須恵器壺 A・壺 B・壺 B 盖・甕、土師器壺（209）・甕（210）・把手（211）、弥生土器破片が出土している。

溝（図版47、写真図版57）

SD01 調査区の南部から中央部にかけて検出された溝である。北西—南東方向の溝でやや南側へ弧状に振れている。検出された延長は22mで、北西側は西嶋4W区のSD156に接続するとみられる。幅約60cm、深さは約18cmである。西嶋4E区内の溝の底面の高さは北西側が低いが、西嶋4W区側を含めれば北西側が高い。SD02に切られている。埋土から弥生時代中期の壺などの破片が出土している。

SD02 調査区の中央部から南部にかけて検出された溝である。北東—南西方向の溝でSD01を切り、SD04に切られている。検出された延長は26mで、南側は西嶋4W区のSD222に接続する。幅は約80～30cm、深さは35～20cmである。断面は2段掘りで、下段は箱掘状である。西嶋4E区内の溝の底面の高低差はあまりないが、西嶋4W区側を含めれば南西側が高い。埋土から弥生土器破片、須恵器椀(221)、備前焼甕、青磁無文碗(222)も出土しているが、須恵器坏A・坏B・平瓶・甕、土師器坏・甕(219・220)など律令期の土器が多く出土している。

SD03 調査区の北部から中央部にかけて検出された溝である。北から南西方向に曲がる溝でSD04・05に切られている。検出された延長は12mで、西側は西嶋4W区のSD210に接続する。幅は約30～20cm、深さは約10～3cmである。西嶋4E区内の溝の底面の高低差はほとんどないが、西嶋4W区側を含めれば南側が高い。埋土から須恵器・土師器の破片が出土している。

SD04 調査区の中央部から南部にかけて検出された溝である。北西—南東方向の溝でやや南側へ弧状に振れ、東端は幅が膨らんでいる。検出された延長は19mで、北西側は西嶋4W区のSD80に接続するとみられる。幅は180～60cm、深さは30～10cmと掘り返しにより差が大きくなっている。西嶋4E区内の溝の底面の高さは掘り返しにより不均一で、流れの方向は不明である。SD02・03を切っている。埋土から須恵器鉢・椀・甕、土師器羽釜(223)、丹波焼擂鉢、青磁無文碗、白磁杯、染付磁器碗・杯、近世の軒平瓦・平瓦などが出土地である。圃場整備直前の耕作地の形状と一致する溝である。

SD05 調査区の北部から中央部にかけて検出された溝である。北西—南東方向の溝で、検出された延長は11mである。北西側は間が途切れているが西嶋4W区のSD125と一連のものとみられる。幅は40～20cm、深さは6～3cmである。SD03を切っている。埋土から須恵器椀、土師器破片、弥生土器破片が出土している。SD06と並行し、耕作時の鋤溝とみられる。

SD06 調査区の北部から中央部にかけて検出された溝である。北西—南東方向の溝で、検出された延長は11mである。北西側は間が途切れているが西嶋4W区のSD124と一連のものとみられる。幅は40～20cm、深さは9～3cmである。SX01を切っている。埋土から須恵器椀、土師器破片が出土している。SD05と並行し、耕作時の鋤溝とみられる。

北端谷部（図版35・36、写真図版58）

NR01 北端の谷部は幅16m以上で、深さは肩から80cm程度である。圃場整備以前は2層を表土とする1段下がった耕作地で、8層以上が同様の土地利用と見られる。谷の落ち際に西嶋4W区で検出された溝SD118の続き(19～21層)が存在したようである。9層以下は弥生時代以降徐々に埋積していく状況がうかがわれる。谷内の堆積土から弥生時代から近世の土器・陶磁器や石器・木製品が出土している。土器・陶磁器には緑釉陶器椀(227)、須恵器蓋(228)・坏B(229)・小皿(230)・椀(231・232)があり、石錐(S4)、木札様板材(W5～7)、木片(W8)、角棒(W9・36)、棒状木製品(W10)、付け木(W35)も出土している。

3. 小結

検出された遺構は大きく弥生時代・古墳時代・律令期・中近世の4つの時期に分かれる。

弥生時代　掘立柱建物跡、墓、土坑、溝が検出された。溝 SD01 は北西方向から南東方向に向くが傾斜はほとんどない。弥生時代中期に属するとみられる。調査区南部の SD01 の西側で、墓とみられる遺構がある。ST05・06 は木棺墓で、側板の痕跡は確認できたが、小口板の痕跡はほとんど確認できなかった。小口板が存在しなかった可能性がある。ST06 は土壙墓の ST07・ST08 とともに南北主軸で、ST05 は東西主軸である。ST05 から弥生時代中期中葉の土器、ST07 から弥生時代後期後葉の土器が出土している。墓を一群のものとみれば、時期は弥生時代後期後葉とすべきだろう。掘立柱建物跡は ST05 を切っているが、柱穴の埋土と ST05 と方位を同じくすることから弥生時代に属するものと考えられる。

古墳時代　土坑が検出された。SK09・30 では丸底 I 式の製塩土器が合わせて重量 350 g 出土している。出土土器から時期は 5 世紀後葉頃と考えられる。

律令期　顕著な遺構は溝 SD02 のみであり、その他、土坑 SK24、落ち込み SX01 が検出された。

中近世　小規模な掘立柱建物跡が 4 棟検出され、柱穴の出土遺物から時期は 12 世紀末から 13 世紀代と考えられる。その他、墓と考えられる SK14・28 や溝 SD03 がこの時期に属する。溝 SD04 は江戸時代の溝で、圃場整備前の地割と一致する。向きを同じくする SD05・06 も時期は江戸時代であろう。

6 西嶋 5 区の調査

調査区の概要（図版 48・49、写真図版 59）

調査区は南北約 43.8 m、東西約 20.3 m を測る。遺構検出面の標高は 61.7 ~ 62.1 m で、調査区北部が高く南部が低い。調査区中央付近を北東から南西に向かって伸びる旧河道の形成した谷部が遮る。

基本層序は、表土ないし現耕作土以下は中世以降の旧耕作土層（1・2 層）、旧河道 SR01 の形成した谷部内の堆積土（3 層）、谷部埋積以前の基盤層（4・5 層）で構成される（図版 49）。検出した遺構は、掘立柱建物 1 棟（SB01）、溝 4 条（SD01 ~ 04）、土坑 1 基（SK01）を検出した（図版 48）。なお、調査区の南端では中世以降の水田面が検出され、検出面からの深さは 10cm 程度である。この水田面の肩と SD04 は平行しており、両者の間約 1.3 m の範囲は本来畦畔が形成されていた可能性が考えられるものの旧耕作土層（2 層）により削平されているため、詳細は明らかではない。

自然流路（谷部）

SR01（図版 48・49、写真図版 59）調査区の中央付近を北東方向から南西方向に流れ、溝 SD01 を切る。平面的には最大幅 8.4 m を検出したが、土層断面の観察からは東壁から調査区東部においては幅 18.4 m 程度、西壁では南側で搅乱が及ぶも少なくとも幅 14.5 m 以上に復元され、西側は東側に比べて谷幅が拡がる傾向が看取されることから、谷幅は本来 20 m 強の範囲であった可能性が考えられる。これは人力掘削時に遺構検出可能なレベルまで掘り下げたため、検出面からの谷部の深さは東壁付近で 27cm、西壁付近で 47cm を測るが、遺構面からの谷部の深さとしては東壁土層断面では 37cm、西壁土層断面では 77cm を測り、谷埋土の上部 10 ~ 30cm 強を遺構検出までに既に除去していた蓋然性が考えられる。なお、谷底は東側に比べて西側が 38cm 低い。

埋土は西壁では上部（3 a・3 b 層）は黒褐色の極細粒砂、それ以下（3 c・3 g 層）はより黒みの強く特に 3 c・3 d 層が最も黒みを帯びる。3 e・3 g 層の黒色シルト層では粘質が上位の層に比べて強く、低湿な環境で堆積した状況がうかがわれる。

埋土上半から12世紀後半代の須恵器椀底部や捏鉢、甕の破片が出土している。これより上部の包含層として人力掘削した地層から14世紀後半代の土製煮炊具の破片が出土していることから、谷部は13世紀代から遅くとも14世紀代に埋没したことが考えられる。

掘立柱建物

SB01（図版50、写真図版59）調査区北西部で検出した。規模は南北2間（4.31m）×東西1間（2.53m）に復元される総柱建物である。床面積は10.9m²、主軸方向はN0.1°Eを指向する。柱の掘方は直径19～31cm、検出面からの深さは9～21cmと浅く、上面に削平が及んでいる状況がうかがえる。柱間は梁行方向の平均が2.46m、桁行方向の平均が2.11mと前者が若干広めである。

南側の梁行の両側に掘り方の中心が一列に通る並びのP3-1及びP3-4があり、P3-1・P3-2間は1.18m、P3-3・P3-4間は1.21mを測り、P3-1・P3-4間の長さは4.81mを測る。

溝

SD01（図版48・49、写真図版60）調査区南部で延長19.9mにわたって検出し、最大幅52cm、検出面からの深さ34cmを測る。横断面形は両肩がやや開き気味のU字状を呈する。埋土は概ね暗灰色のシルト質極細粒砂で構成され、底部付近では基盤層（黄褐色シルト質極細粒砂）を巻き込む（2層）。埋土中から弥生土器の小片が出土している。

SD02（図版48・49、写真図版60）調査区東部の東壁中央よりやや南側で延長4.0mにわたって検出し、谷部SR01を切る。最大幅59cm、検出面からの深さ11cmを測る。横断面形は浅く幅広のU字状を呈し、埋土は暗灰色のシルト質極細粒砂で全体的に均質であるが底部付近は若干シルト質を帯びず砂質に富む。埋土中から弥生時代中期頃と思われる甕の小片が出土している。

SD03（図版48・49、写真図版60）調査区北部で延長20.6mにわたって検出し、最大幅1.16m、検出面からの深さ38cmを測る。横断面形はV字状を呈し、埋土は土壤化の顕著な上層（1層）がシルト質極細粒砂で構成され、下層では底部付近で灰白みをおびた粘質シルトを巻き込んだ堆積が見られる。埋土中から中世前半期の須恵器椀や甕の小片が出土している。

SD04（図版48・49）調査区南部で延長3.7mを検出し、最大幅52cm、検出面からの深さ11cmを測る。横断面形は深い皿状を呈する。

土坑

SK01（図版48・49、写真図版60）調査区北西部で検出した。長径1.36m、短径90cm、検出面からの深さは19cmを測る。横断面形は皿状を呈する。弥生時代中期の壺（233）をはじめ弥生土器の小片が出土している。

7 西嶋6区の調査

調査区の概要（図版51・52、写真図版61・62）

調査区は南北約50.1m、東西約29.2mを測る。遺構検出面の標高は61.2～61.5mで、調査区北部が高く南側に至るほど低くなる。基本層序は、表土ないし現耕作土、旧耕作土層（東壁1・2層）、低湿な環境での埋積土層（東壁3層）、安定した基盤層（東壁4～6層）の層序となる（図版52）。東壁3層の堆積が認められる範囲は調査区南部に限られ、嶋1区の4層に対応することから、嶋1区に続く谷状低地が本調査区の南半部において肩部を形成するものと考えられる。

旧耕作土層（東壁1・2層）及び谷状低地堆積土層の東壁3層を除去した東壁4～6層の上面を遺構

検出面とし、自然流路1条（SR01）、溝1条（SD01）、柱穴を検出した。なお、東壁2層中には13世紀後半代の須恵器捏鉢口縁部片や14世紀前半代及び後半代の土製煮炊具口縁部片をはじめとする土器が含まれる。なお、嶋1区SR01南壁土層断面（B-B'）では、自然流路SR01最上層には上部から水田畦畔が削り出され、旧耕作土層中においても同位置に畦畔が踏襲して形成されている。

遺構

自然流路（谷部）

SR01（図版51・52、写真図版61・62）調査区西部を南北に縦断する。検出最大幅9.8m、検出面からの深さ78cmを測る。埋土は最上層（嶋1区南壁（D-E）5層）から中層（同7層）にかけて粘質の強い黒褐色シルトで構成され以下に触るとおり土器の出土がみられ、下層（同8・9層）ではより粘質の強い粘土層となり遺物は認められなかった。最上層（同5層）から上層（同6層）にかけては8世紀から13世紀前半代にかけての土器を含む。なお、中層（同7層）では弥生時代の土器のみが出土する。

溝

SD01（図版51・52、写真図版61・62）調査区南部の東壁付近で検出し、最大幅1.87m、検出面からの深さ23cmを測る。本調査区では延長22.3mの範囲を検出したが、南西側の延長方向に位置する嶋1区SD01と同一の溝となる蓋然性が高く、この場合の延長は40.0mに及ぶ。

横断面形は両肩がやや開き気味のU字状を呈し、調査区南端部では幅広のV字状を呈する。埋土はまず底付近（3層）で基盤層（黄褐色シルト質極細粒砂）を巻き込みつつ中粒砂を含む底面を部分的に抉る激しい流れの痕跡が観察され、その上部を削りつつもその後は概ね黒褐色ないし暗褐色のシルトで構成され低湿な堆積状況（1・2層）へと変遷した状況が観察される。さらにその上部は調査区基本土層3層に切られている。埋土からは7世紀後半から8世紀後半代の須恵器及び土師器が出土している。

8 嶋1区の調査

調査区の概要（図版53・54、写真図版63～65）

調査区は南北約47.8m、東西約25.3mを測る。遺構検出面の標高は60.7～61.0mで、調査区北部が高く南側ほど低い。基本層序は、表土ないし現耕作土、旧耕作土層（1～3層）、低湿な環境での埋積土層（4・5層）、安定した基盤層（6層）の層序となる（図版54）。4層の堆積が調査区全域に観察されることから、本調査区は谷状低地の一部分を占めると考えられる。なお、4b層中では14世紀後半の土製煮炊具をはじめとする土器が出土しており、4層を埋土の主体とする谷状低地は概ね14世紀代までに埋没したものと考えられる。4・5層を除去した6層上面を遺構検出面とし、自然流路5条（SR01～05）、溝2条（SD01～02）を検出した（図版53）。

遺構

自然流路（谷部）

SR01（図版53・55、写真図版64～66）調査区東部を南北に縦断しつつ南部では西側に折れ曲がる。最大幅10.4m、検出面からの深さ50cmを測る。北端部では幅4.8m、検出面からの深さ73cmの溜まり状になりつつも北壁付近で途切れ、北壁土層断面では埋土の続きは観察されない。一方、この付近の東壁土層断面には搅乱が及んでおり埋土の存在を確認できないが、遺構検出時の状況から本来は溜まり状

部分東側の調査区外から南西方向に流れてきている状況がうかがわれる。

溜まり状部分の底部付近において、中粒砂から粗粒砂の混じる黒褐色粘質シルト中に8世紀末から9世紀前半にかけての土器を主体としつつ一部10世紀代の土器が混じる状況で出土し、斎串や付け木、曲げ物などの木製品（W12～20・22・23・28・37～39）も含まれていた（図版55・写真図版66）。

SR02（図版53・54・56、写真図版65・66）調査区南部において東側から蛇行して南側に向かって流れ、最大幅5.13m、検出面からの深さ46cmを測る流路の形態（SR02-a）を基本とするが、SR01南端の埋没した箇所を開削して東西方向に流れる形態（SR02-b）も観察される。SR02-aは横断方向の土層断面からSR03を切る状況が観察されるが、南流する行先の嶋2区SR01の底部とはレベル差があり、両者の中に合流する別の流路が存在する可能性も考えられる。本調査区での本流路に限定しうる遺物は出土していないが、SR02-a及びSR03、SR04の検出中に6世紀後葉の須恵器坏蓋の破片が出土している。

SR03（図版53・56、写真図版66）調査区南端部で検出し、最大幅1.90m、検出面からの深さ45cmを測る。本調査区では延長3.88mの範囲を検出したが嶋2区SR02と同一の流路である蓋然性が高く、この場合の延長は28mに及ぶ。本調査区での本流路に限定しうる遺物は出土していない。

SR04（図版53・56、写真図版66）調査区南端部において蛇行しつつ東西方向に流れる。南肩は調査区外南側に及ぶが土層断面形状から西壁付近では底部南立ち上がり付近までを検出したものと判断できる。検出最大幅3.3m、検出面からの深さ48cmを測る。嶋2区北端部で検出したSR04と同一の流路となる可能性が考えられる。本調査区での本流路に限定しうる遺物は出土していない。

SR05（図版53・54・56）調査区西部を縦断し、南端では南西方向に蛇行する。最大幅6.27m、検出面からの深さ30cmを測る。確認調査の際に流路北端部東肩付近（T85）で馬形（W27）が出土したことが特筆されるが、本発掘調査時には埋土中に7世紀代前半から8世紀代にかけての須恵器の小片が含まれていたほか、遺構検出面付近において11世紀中頃から後半と思われる須恵器椀底部の破片が出土しており、この頃に埋没したものと考えられる。

溝

SD01（図版53・54・56、写真図版63・65・66）調査区北端付近で検出し、最大幅1.38m、検出面からの深さ16cmを測る。本調査区では延長9.0mの範囲を検出したが、北東側の延長方向に位置する西嶋6区SD01と同一の溝となる蓋然性が高く、この場合の延長は40.0mに及ぶ。横断面形は浅くて幅の広いV字状を呈する。ただし、埋土の堆積状況は西嶋6区SD01の3層のみと共に、特に北壁土層断面では粗い砂粒が全体的に顕著に含まれており、その上部を調査区基本土層4層に切られている。

SD02（図版53）調査区中央やや北寄りで検出し、遺構検出時には切り合い関係が不明であったが、掘削過程の埋土の観察ではSR05を切る状況が観察された。延長7.0mにわたって検出し、最大幅43cm、検出面からの深さ14cmを測る。横断面形は幅広のU字形を呈する。

9 嶋2区の調査

調査区の概要（図版57・58、写真図版67・68）

調査区は南北の長辺約48m、東西の短辺約18.5mを測る。遺構検出面の標高は60.5～60.8mで、調査区東部が高く西ほど低い。基本層序は、表土ないし現耕作土、旧耕作土層（1～5層）に続いて、安定した基盤層（7・8層）とその上部に堆積する黒ボク層（6層）の上面が遺構面となっている（図版58）。なお、旧耕作土層の下半部（4・5層）は11世紀後半から14世紀代にかけての土器を含む遺

物包含層であり、旧河道 SR01 の形成した谷部内の上部の凹みに形成されている。

自然流路 4 条 (SR01 ~ 04)、溝 6 条 (SD01 ~ 06) 及び土坑 1 基 (SK01) を検出した (図版 57)。

遺構

自然流路（谷部）

SR01 (図版 58 ~ 60、写真図版 67 ~ 69) 調査区を南北に縦断し、SD01・03 ~ 05 を切る。調査区南西部で平面図に立ち上がり及び流路肩部を表現したが、流路帶としてはさらに南西側に一段高いステップ状に続いており、西肩は調査区外西側に及ぶ蓋然性が考えられる。この流路帶の調査区内での検出最大幅は 15.5 m を測り、その付近で観察された土層断面からは西半部のステップ上部の 13・14 層の堆積時期は不明ながら、概ね流路底の最深部が東側から西側に遷移している様相が看取される (図版 59)。流路は大きく古相 (6 ~ 12 層 : SR01-a) と新相 (1 ~ 5 層 : SR01-b) に分かれ、両者の間には結果的に西壁中央付近から南東方向にのびる中州状の高まりとなって境界を形成している。

SR01-a は調査区内を南北に蛇行しつつ縦断し、検出した延長は 53.2 m、最大幅 8.9 m、検出面からの深さ 75cm を測る。下層 (8 層以下) からは弥生時代後期末から古墳時代中期の土器が出土し、底部付近 (11・12 層) では弥生時代後期末 (庄内式併行) の土器のみの出土にほぼ限られる (写真図版 69)。

SR01-b は調査区西壁中央やや南寄り付近から南東方向にのび、延長 19.1 m、最大幅 9.3 m、検出面からの深さ 68cm を測る。古墳時代中期から平安時代後期までの土器が出土している。

SR02 (図版 58・60、写真図版 67・69) 調査区北西部を北東から南西方向にのび、検出範囲北半部で膨らむ箇所の最大幅 5.8 m、検出面からの深さ 68cm を測る。調査区北壁土層断面 (断面図掲載なし。以下同じ。) では SR01-a を切る状況が観察される。嶋 1 区南端の SR03 から直線的にのびて本調査区に至るが、調査区西端付近では SR01-a に平行して緩やかに蛇行しつつ調査区外西側に及ぶ。流路底には 2 ~ 3 条ほどの筋が見られ、南北の土層断面観察アゼ及び調査区北壁土層断面から東から西に流路の単位が変遷している状況が観察される。各画期ともに流路底付近には中粒砂ないし粗粒砂を含む粗い砂粒により流路底が開削され底部付近に堆積している状況が見られる。埋土から 9 世紀代の須恵器壺 A の破片 (396) が出土している。

SR03 (図版 58・60) 調査区北西隅付近の SR02 の西側を北東から南西方向にのび、検出最大幅 2.1 m、検出面からの深さ 12cm を測る。

SR04 (図版 58) 調査区北端付近において東西方向に延び、流路幅の大部分は調査区外北側に及ぶ。嶋 1 区南端の SR04 と同一の流路となる可能性が考えられる。調査区北壁土層断面では SR01-a 及び SR02 に切られる状況が観察される。検出最大幅 1.5m、検出面からの深さ 29cm を測る。

溝

調査区東部で SR01 に平行する方向の溝 6 条 (SD01 ~ 06) を検出した。

SD01 (図版 58・61、写真図版 69) SR01 及び SD04 に切られ、SD02 及び SD03 を切る。最大幅 61cm、検出面からの深さ 10cm を測る。横断面形は幅広の逆台形を呈する。古墳時代前期の土師器が出土している。

SD02 (図版 58・61、写真図版 69) SD01、SD03 に切られる。最大幅 50cm、検出面からの深さ 13cm を測る。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土から 8 世紀代と思われる土師器甕の口縁部の破片が出土している。

SD03 (図版 58・61、写真図版 69) SR01 及び SD01 に切られ、SD02 を切る。最大幅 1.35 m、検出面からの深さ 12cm を測る。横断面形は幅広の U 字形を呈する。埋土から弥生時代後期の甕の小片が出土している。

SD04 (図版 58・61、写真図版 69) SR01 に切られ、SD01 及び SD05 を切る。最大幅 1.20 m、検出面からの深さ 14cm を測る。横断面形は幅広の U 字形を呈する。埋土から弥生時代後期の甕の小片が出土している。

SD05 (図版 58・61) SR01 により全容は不明である。最大幅 51cm を測り、横断面形は幅広の逆台形を呈する。埋土中より、7世紀後半から8世紀代にかけての須恵器が出土している。規模や形状、流れの方向や出土土器の時期から、本来 SD02 と同一の溝であった蓋然性が考えられる。

SD06 (図版 58・61、写真図版 69) 最大幅 70cm、検出面からの深さ 12cm を測る。横断面形は幅広の U 字形を呈する。埋土中より、古代のものと思われる須恵器甕口縁片が出土している。

土坑

SK01 (図版 60、写真図版 70) 調査区東部中央付近で検出した。SD04 を切る。長径 1.0 m、短径 83cm、検出面からの深さは 37cm を測る。横断面形は U 字形を呈する。9世紀代の土師器椀が出土した。

10 嶋3区の調査

調査区の概要 (図版 62・63、写真図版 71・72)

調査区は南北約 25.8 m、東西約 30.1 m を測る。遺構検出面の標高は 61.1 ~ 61.2 m で、調査区全体がほぼ平坦である。基本層序は、表土ないし現耕作土、旧耕作土を除去した以下は黄褐色の基盤層となり、基盤層上面が遺構検出面となる (図版 63)。なお、調査区東半部では SR01 や SH01 中央土坑の底部において確認されるように、基盤層の黄褐色極細粒砂が 30 ~ 50cm 堆積するさらに下層には亜角礫の大礫を顕著に含む褐灰色粗砂混じり極細粒砂が存在する。

なお、調査区北部において大礫を多く含む褐色から暗褐色を呈するシルト質極細砂のまとまりの範囲が長さ 2.1 ~ 3.0m、幅 1.0 ~ 1.3 m の長円形ないしは隅円形で 3ヶ所検出され、うち 1箇所は SH01 を切っている (写真図版 72)。土坑として調査を進めた結果、底面や立ち上がりにも大礫がめりこみ明確な掘り方を識別するには至らなかった。この大礫層の上部に中世前半期の須恵器がわずかに認められたが、人為的に掘削された遺構としては認識しがたく、シートバーのような河川の営力等により抉り込まれた箇所と考えたい。

遺構は、自然流路 1条 (SR01)、柱穴列 4基 (柱穴列 1~4)、竪穴建物 1棟 (SH01)、土坑 1基 (SK05)、柱穴、溝 4条 (SD01 ~ 04) を検出した (図版 62)。

遺構

自然流路 (谷部)

SR01 (図版 62・63、写真図版 71 ~ 73) 調査区東部を緩やかに蛇行しつつ南北に縦断する。検出最大幅 9.4 m、検出面からの深さ 76cm を測る。埋土は概ね、上層が褐灰色のシルト質細粒砂、下層が砂混じりの暗灰色シルトで構成され、底部には巨礫を含む褐灰色細粒砂層の基盤層が露出する。

流路底部において 7世紀前後の土師器鍋の把手 (410) をはじめ弥生時代中期後葉の土器が、埋土中層から 8世紀代前半の須恵器をはじめ律令期の土師器や瓦類、10世紀代の須恵器椀や中世前半期の白

磁が、埋土上層からは14世紀前半代の土製煮炊具が出土している。

柱穴列

調査区南部において一列に並ぶ柱穴列を検出した。いずれも4基の柱穴で構成され、柱穴列1と柱穴列2、柱穴列3と柱穴列4は指向する主軸方向が近似し掘立柱建物を構成する可能性も考慮されたが、仮にその場合の前者の梁行方向の柱間は4.72～4.77m、後者の梁行方向の柱間は2.45～2.78mとなり、特に前者の梁行方向の柱間は桁行方向の柱間の約2.5倍となり桁行方向の全長も40cm以上の差となることから、掘立柱建物としての認識には慎重を期したい。ここでは便宜的に柱穴列として報告する。

柱穴列1（図版65、写真図版77）調査区南部で南北方向に一列に並ぶ柱穴4基を検出した。柱穴間は1.78m～2.34mで平均値は1.99m、全長は5.96mを測る。柱穴列の主軸方向はN15.0°Wを指向する。柱穴掘方の直径は18～31cm、検出面からの深さは3～6cmを測り、柱痕が確認できるものの直径は9～15cm程度である。P01から弥生土器の小片が出土している。

柱穴列2（図版65、写真図版77）調査区南部中央付近において南北方向に一列に並ぶ柱穴4基を検出した。柱穴間は1.75m～1.98mで平均値は1.85m、全長は5.55mを測る。柱穴列の主軸方向はN13.2°Wを指向する。柱穴掘方の直径は12～21cm、検出面からの深さは5～16cmを測り、柱痕が確認できるものの直径は9～12cm程度である。P03・08から弥生土器の小片が出土している。

柱穴列3（図版65、写真図版77）調査区南東部で東西方向に一列に並ぶ柱穴4基を検出した。柱穴間は1.22m～1.44mで平均値は1.31m、全長は3.92mを測る。柱穴列の主軸方向はN69.1°Wを指向する。柱穴掘方の直径は15～19cm、検出面からの深さは2～10cmを測り、いずれも柱痕は認識されなかった。

柱穴列4（図版65、写真図版77）調査区南東部で東西方向に一列に並ぶ柱穴4基を検出した。柱穴間は1.18m～1.44mで平均値は1.33m、全長は3.99mを測る。柱穴列の主軸方向はN73.5°Wを指向する。柱穴掘方の直径は17～22cm、検出面からの深さは3～11cmを測り、いずれも柱痕は認識されなかった。

竪穴建物

SH01（図版64、写真図版74～76）調査区中央付近や北東寄りに位置する。検出した屋内施設は周壁溝2条及びその付近に伴う多数の小規模な柱穴、主柱穴4本、中央土坑、間仕切り溝1条である。

いずれも遺構検出面において検出し、周壁の立ち上がりや床面より上の埋土を伴わないと二重の周壁溝の南側の一部が浅くなったり途切れたりすることから、後世の削平が南側を中心に床面付近にまで及んでいるものと考えられる。周壁溝は2条が重複する北東箇所に設定したA-A'断面の観察により、外周のものが内周のものを切る状況が見てとれる。ただし、主柱穴4本には切り合い関係が認められず、建て替えではなく床面の拡張がなされたことが推察される。

外周の周壁溝は長径6.62m、短径6.02m、最大幅24cm、検出面からの深さ9.5cmを測る。横断面形は北側の深い箇所ではV字状に近く、それ以外の箇所では浅い皿状を呈する。内周の周壁溝は長径5.80m、短径5.23m、最大幅27cm、検出面からの深さ6.6cmを測る。横断面形は浅い皿状を呈する。

周壁溝2条の付近に直径7～12cmの杭坑が55本認められた。打設箇所ごとの深さと本数は、外周の周壁溝より外側には深さ7.2～9.8cm（平均値8.5cm）が2本、外周の周壁溝中には深さ4.5～21.2cm（平均値11.3cm）が28本、外周と内周の周壁溝間には2.8～20.4cm（平均値11.0cm）が8本、内周の周壁溝中には深さ2.5～16.5cm（平均値7.8cm）が15本、内周の周壁溝より内側の床面には5.3～

5.8cm（平均値5.6cm）が2本であり、深さの平均値からは内側から外側に向かって深くなる傾向があるがわれる。

主柱穴4本の掘方の直径は21～36cm、深さは29～45cmを測り、柱痕の直径はP1で22cm、P2で18cmを測る。P2の柱痕部分の床面からの深さ約25cm付近で甕の底部の破片（404）が出土しており、柱材が抜き取られた箇所に入った可能性が考えられる。

中央土坑は長辺88cm、短辺78cmの隅円長方形で床面から18～22cm程度の深さまで鉢状に傾斜して落ち込んだ以下は箱状ないし袋状に深く落ち込み、床面からの底部の深さは44cmを測る。埋土は3層に分かれるが概ね黒褐色シルトで焼土や地山がブロック状に混ざる。埋土中から甕や高坏と思われる土器の破片（401～403）が出土している。

間仕切り溝は、中央土坑北東隅の直近から建物外方まで北東に向かって延び、SR01に切られ、検出した延長は2.98mを測る。幅は建物外方に向かって徐々に広くなりSR01に切られる箇所で最大幅37cmを測り、深さも中央土坑付近ではほぼ床面前削平レベルからSR01に切られる付近では最深部11cmと建物外方に向かって傾斜する。平面検出時に周壁溝を切っており、延長方向中央に設定した断面B-B'からも周壁溝埋土の上部を切っている状況が観察される。

柱穴

掘立柱建物や竪穴建物を構成するものを除くと、58基を検出した。うち、遺物が出土した5基についてはP04～06・10で弥生土器の小片が、P09では内面ヘラ削りされ、外面に煤の付着した弥生土器もしくは土師器の甕の破片が出土している。

溝

SD01（図版62・65、写真図版71～74）調査区中央を北東から南西に向かって横断し、SR01に切られる。延長26.7mにわたって検出し、最大幅41cm、検出面からの深さは8cmを測る。横断面形は逆台形ないし幅広のU字形を呈し、埋土は基盤層をブロック状に含む黒色のシルト質極細粒砂で構成される。埋土からの出土遺物は認められないが、切る柱穴P06から弥生時代後期前葉の土器（406）が出土していることから、弥生時代後期中葉以降と考えられる。

SD02（図版62・65、写真図版73）調査区中央やや南西よりで延長1.46mにわたって検出し、最大幅34cm、検出面からの深さは16cmを測る。横断面形はV字形ないしU字形を呈し、埋土は基盤層をブロック状に含む黒色のシルト質極細粒砂で構成される。

SD03（図版62・65、写真図版73）SH01の南側付近から調査区南半を南西に向かって延び、SD01に切られる。延長17.9mにわたって検出し、最大幅61cm、検出面からの深さは45cmを測る。延長の北側約7.7mでは以南の溝底でも認められる凹みが約70cm間隔で2基1対になって並列し、凹みの長径は18～29cm、短径は12～18cmで、検出面の深さ5～7cm程度である。横断面形はV字形ないしU字形を呈し、埋土は黒色のシルト質極細粒砂で構成され、底部付近では基盤層をマーブル状に巻き込む箇所も認められる。

SD04（図版62・65、写真図版71）調査区北西部を北東から南西に向かって延び、延長6.5mにわたって検出し、最大幅56cm、検出面からの深さは11cmを測る。横断面形はU字形を呈する。

土坑

SK05（図版65）調査区南西部で検出し、長径86cm、短径71cm、検出面からの深さ18cmを測る。埋土は黒褐色のシルト質極細粒砂で構成される。横断面形はU字形ないしは皿状を呈する。

11 島4区の調査

調査区の概要（図版66・67、写真図版71・78）

調査区は南北約25.4m、東西約30.3mを測る。遺構検出面の標高は約61.0mで、調査区全体がほぼ平坦である。基本層序は、表土、旧耕作土（1～8層）ないし近世以降の耕作地造成のための客土及び水路（a～e層）の下は黄褐色極細粒砂の基盤層となり、基盤層上面が遺構検出面となる（図版67）。

遺構検出面では弥生時代中期後葉の土器の出土するSD01を中心となり、島3区同様に黄褐色極細粒砂の基盤層上面は弥生時代中期後葉から後期初頭頃にはすでに安定し遺構面が形成されていた蓋然性が考えられる。遺構は、掘立柱建物1棟（SB01）、土坑1基（SK04）、柱穴、溝1条（SD01）、自然流路1条（SR01）を検出した（図版66）。

遺構

自然流路（谷部）

SR01（図版66・67、写真図版71・78・80）調査区東部を緩やかに蛇行しつつ北東から南西に向かって流れる。検出最大幅15.3m、検出面からの深さ1.05mを測る。埋土は概ね、上層が褐灰色のシルト質細粒砂、下層が暗青灰色シルトで構成され、河底は礫層となっている。なお、西肩から2.5～3.3m付近には近世以降の水田に伴う施設として畦畔（北壁b層）とそれを挟む2条の水路（北壁c・e層）、西側の水路（北壁e層）に切られる前段階の水路（北壁d層）が設けられている。東西の両水路と畦畔は、SR01の北部ではいずれも流路肩に平行しているが、西側の水路は北壁から延長10.5mで、畦畔は延長12mで途切れしており、東側の水路のみ南壁まで延長30.0mが続いている。畦畔の幅は45～83cm、東側の水路は63～159cm、西側の水路は56～130cmを測り、深さは上部を水田面造成により損なわれているため一定ではない。

流路埋土から弥生時代末頃の土器が出土しているが、同一の流路と考えられる島3区SR01底部において7～8世紀頃の土師器片が出土したことから開削は当該時期まで遡る蓋然性が高い。

掘立柱建物

SB01（図版67、写真図版79）調査区北西部の北壁付近で、1間×1間を検出した。桁行方向はP01-P02間で1.93m、P03-P04間で1.89mを測り平均値は1.91m、梁行方向はP01-P03間で1.79m、P02-P04間で1.89mを測り平均値は1.84mである。桁行方向の平均値を基準とした主軸方向はN34.0°Wを指向する。柱穴掘方の直径は27～39cm、検出面からの深さは35～50cmを測り、いずれの柱穴においても柱痕が確認でき直径は11～16cm程度である。柱穴から弥生土器の小片のほか、古墳時代以降と思われる土師器の小片が出土している。

溝

SD01（図版66・67、写真図版79）調査区南西部を東西に延び、延長14.16mにわたって検出し、最大幅1.52m、検出面からの深さは24cmを測る。横断面形は幅広のU字形を呈し、埋土は概ね黒みを帶びたシルト質極細粒砂で構成されるが底部付近では粗砂や小礫を含む。

土坑

SK04（図版67、写真図版79）調査区南西部で検出し、長径97cm、短径72cm、検出面からの深さ27cmを測る。横断面形は幅広のU字形を呈する。埋土は、底部には焼土や基盤層をブロック状に含む炭層が厚さ8cmほど堆積し、その上に褐灰色のシルト質極細粒砂が地山まじりの極細粒砂と互層となる。

第2節 遺物

1 土器類の概要

遺構および包含層などから弥生時代中期・弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代中・後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代およびそれ以降の土器類が出土している。

以下、弥生時代から平安時代中頃、平安時代後期～江戸時代およびそれ以降に分けて、島2～3区間の確認調査を初め、西島1区から順に島4区まで、地区および遺構ごとに報告する。

2 弥生時代から平安時代中頃の土器類

確認調査（図版68、写真図版81）

- ・T76 出土土器

1は土師器壺口縁部片である。二重口縁の形態を示すが、頸部は短い。頸部外面にはナデ上げの圧痕が残る。古墳時代前期頃と思われる。

- ・T69 出土土錐

2は土師質の管状土錐で、一端は欠失している。端は細くなるが中央はあまり膨らまない。孔径は約4mmで、残存重量は8.0gである。

西島1区（図版68、写真図版82）

- ・SD02 出土土器

4～8を報告する。4は須恵器壺Aか皿の破片で、体部内面は使用により平滑になっている。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が残る。底部外面は丁寧に回転ヘラ切りされている。5は土師器の壺片で、底部の器壁は厚い。器表は磨滅しているが、回転ナデ調整であろう。4・5ともに8世紀中頃～後半であろう。6は須恵器蓋で、器厚は比較的厚く、半分弱の破片である。天井部内面は少し平滑になっているが、硯としては使用されていないようである。口縁端部外面の上部には沈線状の凹面が認められる。天井部外面の傾斜面には、ロクロ目のような幅6mm程度の凹面が2条認められる。8世紀後半～9世紀頃と思われる。7は緑釉陶器の小皿で、外面にぶい稜がある。内外面に施釉されている。胎土は濃灰色で、釉は濃緑色を呈することから、篠塙産と思われ、10世紀代の可能性がある。

8は端部を下方に大きく拡張する器台口縁部の小片である。端面には櫛描波状文を施し、さらに円形浮文を貼付した後、竹管文を二重に刺突する。庄内期頃と思われる。

- ・その他の出土土器

9～11を報告する。9・10は土師器鍋の小片である。11は須恵器小皿である。

西島2区（図版69・70、写真図版83～87）

- ・NR01 出土土器

本遺構出土土器は、12～35を報告する。12～14は壺の口縁部小片で、12は口縁端部を拡張して垂直面としている。端面には鈍い凹線を2条施している。後期前半の可能性がある。13は口縁端部を上方にひきのばして外面に2条の鈍い凹線を施す。北近畿系のものである。北近畿系の14も口縁端部を上方にひきのばしており、外面は凹面をなす。体部内外面はハケを密に施す。12～14は体部タタキ成

形で口縁叩き出し技法である。

15は壺体部の大きな破片である。体部はタタキ成形で、外面はヘラミガキ、内面はハケやナデで仕上げている。肩部内面には粘土接合痕が顕著に残る。

16は甕の可能性がある体部下半の破片で、外面はタタキ成形後ハケをやや密に施している。内面下半はナデ、上半はハケ調整である。外面に煤状の黒色物が付着している。17は体部器壁が厚い底部で、壺の可能性もある。外面タタキ成形、内面ナデ調整である。

器台の18は受部で、ほぼ完形である。口縁端部を上下に大きく拡張し、外面に4条～5条の凹線を施し、さらに3個一対の竹管円形浮文を4方向に貼付する。内外面はヘラミガキ仕上げである。19の破片も口縁端部は上下に大きく拡張し、外面に沈線状の細い凹線を6条施した後、2個一対と思われる竹管円形浮文を貼付する。方向は不明である。この円形浮文には竹管文を二重に刺突している。内外面はヘラミガキ調整である。

20～25は7世紀代の坏身で、いずれも底部回転ヘラ切り未調整あるいは一部ナデである。口径が10cm以上はやや古く7世紀前半、10cm未満は新しいと判断している。20は約半分、21は1/3程度、22は1/4程度の破片で、23は口縁部の多くを欠失している。21は口縁端部のみ少し外反する形態で、22は焼け歪みが目立つ。23は体部から鈍い稜をもって折れ曲がり、直立に近い口縁部となる。外面に重ね焼きの痕跡が認められる。24は1/3程度の破片であるが、底部が小さく、口縁端部は屈曲して外反する。25は口縁部の約半分を欠失する。深みのある形態で、盤と呼ばれる形態に近い。

26の高坏は1/4程度残存する脚部破片である。脚端部は下方に折り曲げて凹面としている。7世紀中頃のものであろう。27は推定口径14.7cmの甕口頸部片で、端部は帯状に肥厚し、外面を凹面としている。MT21型式期で、8世紀初頭と推定している。

土師器甕の28は飛鳥～奈良時代初頭のものと思われ、体部外面と口縁部内面はハケ調整、体部内面は縦方向のヘラケズリである。29はやや大きめの破片で、体部外面のハケが目立つ。体部内面はユビオサエ後横方向にイタナデを施している。30は鉢の破片で、8世紀のものであろう。外面と口縁部内面は細目のハケ、体部内面は横方向のヘラケズリを施している。31は壺の形態を呈する1/5程度の破片で、外面は二次受熱により赤褐色に変色している部分があることから、甕とすべきかもしれない。内面はヘラケズリ調整で一部ハケが残る。

32は大型壺の肩部破片で、S字状渦文のスタンプを施文している。かなり以前の集成（岸本一宏1990）であるが、この形態のスタンプ文は、北陸地域以外では岡山県で多く認められ、兵庫県下では認められなかったものである。また、S字状スタンプ文施文土器は弥生時代後期後半～古墳時代前期にはほぼ限定されることから、本例もその時期と想定される。

33は口縁部の1/3程度を欠失するもので、焼け歪みにより橢円形を呈している。底部は回転ヘラ切り後一部ナデを施し、口縁部は外反気味のものである。7世紀前半～中頃のものである。34は器表の遺存状況が悪く調整は不明であるが、脚柱部内面にはシボリ目が残る。

35の外面の大半は回転ヘラケズリ、内面にはユビオサエ痕が多数残る。外面には火櫻がある。

・SK02 出土土器

36は須恵器坏身の半分弱の破片で、口縁部は焼け歪みにより橢円形を呈し、底部内面には別個体の破片が融着している。底部は回転ヘラ切り後ナデを施し、乾燥までに付いた圧痕が残る。口縁部は外反気味で、内面の仕上げナデが顕著に残る。7世紀中頃～後半のものである。

・SK12出土土器

弥生土器の壺または甕の口縁部破片1点を報告する。37の口縁端部は下方に少し拡張し、端面に2条の擬凹線に似た文様を施す。口縁部内面はハケ後ヨコナデで、外面下端には体部のハケを施した際の工具圧痕が残る。

・包含層出土土器・土錐・瓦

須恵器11点(38~48)、土師器2点(49・50)、弥生土器1点(51)、土錐2点(52・53)、平瓦2点(54・55)の計18点を報告する。

38は盤に近い形態の壺で、TK46型式期で飛鳥IVの7世紀後葉のものである。内面に被釉していることから蓋の可能性は無い。焼け歪みにより口縁部は橢円形を呈するが、つくりは丁寧である。底部は回転ヘラ切り後にケズリやナデで調整しており、使用により底面は平滑になっている。口縁は端部のみ外反する。39は口縁部の約半分を欠失する。底部は回転ヘラ切り後未調整、内面には仕上げナデを施す。口径が11.9cmとやや大きいが、形態的にはTK48型式期の7世紀後葉~末で、飛鳥IVと判断している。40・41は壺Aで、40は口縁部の1/4を欠失するのみで、口縁部は橢円形に大きく歪んでいる。底部回転ヘラ切り未調整。外面の多くに自然釉がかかり、内面には点々と付着している。7世紀末~8世紀のものであろう。41は1/3程度の破片で、焼成はややあまい。底部は回転ヘラ切り後ナデを施しているようである。内底面はやや平滑になっており、使用によるものであろう。奈良時代後半の可能性がある。42・43は壺Bで、42の口縁部は一部のみ残存し、端部が少し外反する。焼成は良好で、8世紀前半と思われる。43は焼成やや不良で、内面がセピア色を呈する半分弱の破片である。口縁端部は欠失し、内底面はやや平滑になっている。奈良時代前半であろうか。

44は短頸壺の破片で、肩部と体部の境は稜をもって曲折する。稜の上側に1条、下側に2条ないし3条の沈線を施す。肩部に自然釉が付着しているが、蓋を被せた状態で焼成していたことが窺える。8世紀中頃であろう。45は稜碗の破片である。内外面回転ナデで、内面底部の仕上げナデは広範囲におよぶ。内面底部付近は使用により平滑になっている。比較的丁寧なつくりである。46は横瓶の口縁部片で、内面に自然釉がやや厚く付着している。外面に1条の沈線を巡らす。体部内面には青海波文があり、外面にはカキ目を施している。47は大型甕の口縁部片で、端部を大きく肥厚させている。外面に沈線と沈線間に波状文を施している。MT21型式期の8世紀初頭頃であろう。

48は6世紀中頃のTK10型式の壺身で、たちあがり部は内上方に直線的にのびる。

土師器の49は奈良時代頃の甕口縁部片である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面にはハケを施し、内面はヘラケズリで仕上げている。50は土師器の把手部分の破片で、甕や鍋であろう。平面形は三角形に近い。

弥生時代後期後半の甕と思われる底部の51は、タタキ成形で内面にはヘラケズリを施している。底面に「+」形と推定されるヘラ記号文がある。

土錐は管状のものが2点あり、どちらも土師質である。52は完形で円柱状を呈し、孔径は約4mm、重量は8.8gである。53は中央部が膨らむ形態で、一端を欠失している。孔径は約6mm、残存重量は19.5gである。

平瓦片は54・55の2点がある。54は土師質に近い灰白色を呈し、軟質である。凸面は平行タタキ、凹面には布目が残っている。凹面の様子から桶巻きづくりの可能性がある。最大厚は2.5cmである。55は灰色を呈する須恵質の平瓦片で、凸面は平行タタキ、凹面には縄目とともに平行条線が多数認められ

る。条線間隔は3mm～4mmが5条認められ、9mmの部分もあり、繰り返されているようである。

西嶋3区（図版71、写真図版89～93）

・SX01 出土土器

弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の6点を報告する。67は直口壺の口縁～肩部の破片で、頸部外面の一部に波状文のようなヘラ書き記号文が描かれている。口縁部はヨコナデ調整、頸部～体部の外面はハケ調整である。内面には粘土の接合痕が残り、体部内面はイタナデで、一部ヘラミガキにみえる。68は口縁部が大きく開く長頸壺の口縁部片で、端部は上方に拡張する。端部外面は凹面をなす。口縁部内面はヘラミガキ、頸部内面はヨコハケで、頸部外面にはタテハケが残る。69は壺体部下半の破片で、少し上げ底状の平底である。外面はヘラミガキ、内面は細目のハケ仕上げで、底部付近にはシボリ目が残る。70は高杯脚部で、裾部分は1/6程度が残る。裾部にはタタキ目が残り、ヘラミガキを加える。内面にはハケ目が残る。径約1cmの円形透孔を3方向に穿つ。71は高杯か器台の脚部片で、透孔は認められない。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヨコハケ調整である。端部は外上方に少し拡張しているようである。72是有孔鉢の底部片で平底である。円形孔の径は約7mmで、内面の傾斜面はそのまま孔下端まで続いている。タタキ成形で、内面はハケ仕上げ、底面に圧痕があるが原体は不明である。

・SX03 出土土器

73の甕口縁部片を報告する。器表の遺存状況が悪いが、体部はタタキ成形で、外面の一部にタテハケが残る。内面はイタナデのようである。口縁端部外面は凹面をなす。弥生後期中頃～後半であろう。

・SX06 出土土器

74は須恵器坏B蓋のほぼ完形品である。口縁部外面には帯状に黒灰色の変色部分が認められることから、重ね焼きの痕跡である。内面はある程度平滑になっていることから、転用されていた可能性があるが、用途は不明である。奈良時代末～平安時代初期の可能性がある。

・NR01 出土土器

弥生時代後期末～古墳時代初頭の9点（75～77・79～84）と、奈良時代頃の土師器1点（78）と須恵器2点（85・86）を報告する。75は二重口縁壺の頸部を中心とした破片で、口縁部外面下端に半截竹管文を巡らし、その上部の一部にヘラで文様を描いているが、部分的な残存のため意匠は不明である。体部内面には粘土紐の接合痕が顕著に残る。76は広口壺の口頸部と想定される破片で、口縁部内面に外径6mmの竹管文が1箇所のみ残存している。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケである。77も広口壺で、接合による上半部のほぼ完形品である。外反しながら開く口縁部で、端部は上下に少し拡張し、外面に2条以上の細い凹線を巡らす。器表の遺存状況が悪いため調整は不明である。

79は底部であるが、器種は不明である。ドーナツ状上げ底で、底面に「+」の記号文をヘラ書きしている。タタキ成形後、内外面ハケ調整で、外面は密に施している。80は小さな平底の底部片で、甕と思われる。タタキ成形後外面ハケで、内面にはユビオサエ痕が残る。

81は口縁部が外反する鉢の破片で、体部内面はハケ調整である。口縁端部は丸くおさめる。82は脚台部分の破片で、器壁の厚さから鉢の可能性が高い。器表の遺存状況は悪い。

83は尖底の有孔鉢で、底部の破片である。孔径は約1cmである。タタキ成形で、体部内面にはヨコハケ、外面にはタテハケが残る。

84は高杯の脚部で、器表の遺存状況は悪い。脚柱部内面にはシボリ目が残り、脚端部は丸くおさめる。

推定径 1.3 cm の円形透孔を 3 方向に穿孔しているようである。

奈良時代頃と思われる 78 は、甕の比較的大きな破片で、体部内外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデを施す。口縁端部は面をなす。

須恵器壺 B 盖の 85 は、3/4 程度が残っている。つまみは扁平に近いが、天井部からそのままのびる口縁端部となり、傾斜する端面を有する。8 世紀前半のもので、内外面が平滑になっており、明確な墨痕は認められないが、転用硯の可能性がある。86 は須恵器皿か壺の破片で、口縁部に歪みがある。8 世紀中頃～9 世紀初頭頃と思われる。

・SR12 出土土器

93 は弥生時代後期前半の甕の破片である。タタキ成形で肩部内面はヘラケズリ、口縁端部は僅かに上方に拡張し、端面は凹面となる。

・包含層出土土器・竈

94・95 の須恵器壺身と、壺と思われる須恵器底部の 96 および竈片の 97 を報告する。

94 は須恵器壺身の破片で、ほぼ垂直のたちあがり部で、端部は凹面をなす。外面の回転ヘラケズリの範囲は 4/5 に近い。6 世紀前葉の MT 15 型式期と思われるが、さらに遡る可能性もある。

95 は口縁部の 3/4 を欠失する。底部は回転ヘラ切り後ナデを加えており、不明原体の圧痕も残る。体部外面下半のロクロ目はやや顯著で、口縁部は端部のみ少し外反させる。7 世紀後半～8 世紀初頭の飛鳥後半の III～IV と想定している。

96 の内面には、自然釉の上側に黒褐色を呈する薄膜状の付着物がある。体部外面には回転ヘラケズリが施され、自然釉が一部付着している。7 世紀後半～8 世紀代のものと思われる。

97 は竈の底部付近の破片で、焚口部の端面も認められる。底部から続いてきた突帯は欠損しているが、遺存する体部下端面よりも下方に続くことから、突起状になっており、竈の体部下端は空いていたことがわかる。外面はタテハケ調整、内面はナデ仕上げである。

西嶋 4 W 区 (図版 72～74、写真図版 94～98)

・SD88 出土土器

99～110 の 12 点を報告する。破片であるが、壺・蓋・甕・高杯がある。99～103 は壺口縁部で、大きく外反する 99 は端部が丸く口縁部外面には凹線状に窪んでいる部分が認められる。器表が荒れていったため文様・調整は不明である。100 は推定口径 11.8 cm の広口壺口縁部片で、端部を玉縁状に下方に拡張している。文様は不明であるが、口縁部外面はヨコナデ調整である。101 は口縁端部を下方に大きく拡張する広口壺口縁部片で、口縁端面に 4 条の凹線文を施す。器表が荒れているため棒状浮文等は不明である。頸部外面には 1 条以上の凹線文が認められる。突帯が貼付されていた可能性がある。102 は受口壺口縁部片で、外面に 4 条の凹線文を施す。頸部外面にはタテハケが残る。口縁端部は少し拡張し、面をもつ。103 は無頸壺口縁部の破片で、口縁端部は内側に折り曲げている。口縁部外面にはやや幅の広い凹線文を 4 条めぐらす。約 1.5 cm 間隔で 2 個一対の紐通孔が残存し、孔径は約 3 mm である。

104 は蓋の 3/5 程度の破片で、口縁内径は推定で 16.2 cm、器高 3.65 cm である。平らな天井部外面中央部に櫛状工具による刺突文を螺旋状に施し、文様外側には 1 条の沈線を巡らす。沈線に接するように 2 個一対の紐通孔を約 2.5 cm の間隔を空けて穿つ。孔径は約 6 mm である。珍しい形態であるが、同形態の蓋は、管見では徳島県矢野遺跡（I 群）の SX2017 で出土している（近藤 玲・谷川真基 編 2006）も

の、外面の文様は異なる。矢野遺跡例も時期は中期後半とされており、本遺跡例との齟齬はない。

105～107は甕の小片で、105は推定口径12.7cmと小ぶりである。口縁端部は凹面をなす。106は推定口径17.2cmで、口縁端部は主として上方に拡張し、やや幅広い端面としている。107は推定口径30.4cmの大型のもので、口縁端部は上下に大きく拡張するが、端面には文様は認められない。3点とも器表剥離など荒れているため、調整等は不明である。

108は推定口径32.8cmの大型高杯口縁部小片で、口縁部外面にはやや幅広い3条の凹線文、少し拡張した口縁端部上面には2条の細い凹線文を施す。109は水平口縁の高杯杯部片で、内面の突帯は内傾し、大きい。外面はヘラミガキ調整のようである。110は2片に分かれているが、同一個体の高杯脚部である。脚端部は上方に大きく拡張し、外面はヘラミガキ調整のようである。内面にはシボリ目が残る。

SD88出土土器は弥生中期後半でも末に近い時期であろう。

・SD156 出土土器

111は弥生時代中期の底部片で、剥離など器表が荒れている。

・NR73 出土土器

112～138の27点を報告する。壺口縁部片は112～120の9点、壺頸部や体部片は121～123の3点、124は甕口縁部片で、そのほか底部・高杯など弥生時代中期後葉の破片が6点ある。131～133は弥生時代後期末～古墳時代初頭の破片で、壺・高杯・底部がある。134～136・138は古墳時代中期末～後期前葉のもので、137は7世紀前半のものである。

壺口縁部9点はすべて広口壺で、120以外は口縁端部を大きく拡張し、端面に凹線文を施す。112には円形浮文と棒状浮文、114には大きな円形浮文、115～118には棒状浮文、119には刻目文を、それぞれ端面に加飾する。また、114の頸部外面には幅広で鈍い凹線文を3条施す。口縁端部を少し拡張する120には文様は確認できない。

121の頸基部には幅広の押圧文突帯を貼付し、122の頸部には櫛描波状文と直線文を施す。122のみ中期前葉に遡る可能性がある。123の肩部には櫛描直線文と波状文を交互に繰り返して描いている。

甕は124の1点で、口縁端部を上方に少し拡張し、端面は凹面とする。

125の底部は比較的大きな破片で、底径は8.75cmである。壺と思われる。

126は高杯口縁部片で、推定口径は23.2cmである。口縁部外面に5条の凹線文を施すが、108とは異なり、端面は無文である。127の脚部には断面三角形の突帯を4条貼付し、その直下に円形透孔を穿っている。弥生中期中葉の可能性が高い。128・129は脚の裾部で、端部を上方に大きく拡張する。内面はヘラケズリである。130の脚端径は推定で8.0cmと小さい。脚部内面にはシボリ目が多く残り、外面は縦方向のヘラミガキのようである。

131の二重口縁壺は内面の屈曲がほとんどみられない。口縁部が大きく外上方に開く有稜高杯の132は、口縁端部直下の外面に1条の凹線を施す。蓋の可能性もある133の底部は、脚台風のもので、底部外周にユビオサエを施す。

須恵器坏蓋の134・136はともに小片であるが、134は端部形状と口径からTK47型式、136は同様の理由でMT15型式としておきたい。135の坏身は比較的大きな破片で、立ちあがり部端部の形状と口径から、TK47型式であろう。

須恵器高坏脚部の137は、脚端部付近が内湾していることから、7世紀前半のものとしておきたい。

土師器甕口縁部の138は、外面のユビオサエや体部内面のナデの状況から、古墳時代中期後半頃と推

定しているが、古墳時代前期の可能性も捨てきれない。

・ SD80（西嶋4E区SD04）出土土器

弥生時代中期後半の甕139は推定口径27.3cmの大型で、口縁端部を肥厚させて幅広い端面をつくり出すが、文様は施さない。

・ ST47 出土土器

140は底部のみ完形で、弥生時代中期後半の可能性が高い。壺と思われ、内面はユビオサエが目立つ。

・ SP82 出土土器

弥生時代中期の可能性がある底部141は、底部のみほぼ完形で、外面ヘラミガキ、内面はイタナデ調整である。

・ SH150 出土土器

土師器甕・脚部の破片が出土している。下層住居跡から出土した143は、口縁部は少し湾曲し、体部外面はタテハケで仕上げる。古墳時代後期であろうか。144の脚裾部は、内面はハケで、上部はヘラケズリである。薄手のつくりである。145は脚柱部の小片で、中空である。内面にはヘラケズリを施す。

・ SP200 出土土器

146は須恵器坏蓋の約1/2の破片で、楕円形に少し歪んでいる。天井部と口縁部の境が不明確で、端部は尖り気味である。回転ヘラケズリの範囲は少し狭い。MT 85型式併行期～TK 209型式期と判断され、6世紀後半～7世紀初頭の時期であろう。

・ ST46 出土土器

147は土師器坏片で、器表は剥離している。口縁端部はやや尖るが丸みを帯びている。平城宮VI・平安宮I中の8世紀後半から9世紀前半かもしれないが、もう少し時期が降る可能性もある。

・ SX262 出土土器

148は須恵器坏B蓋の破片で、口縁部外面には重ね焼きの際の別の土器の一部と自然釉が付着している。平城宮VI・平安宮I中～平城宮VII・平安宮I新の8世紀後半～9世紀前半のものである。149は須恵器坏Bと思われる破片で、内面底部は使用により平滑になっている。

・ SX267（南西部包含層）出土土器

須恵器の器種では坏Aの150～152、坏Bの153・154、坏の155・156、壺の158、甕の159があり、土師器では鍋の160がある。150は1/4程度の破片で、内外面に火櫻が認められる。形態的に飛鳥IVかVの時期と思われる。151は1/3程度の破片で、平城宮IV～Vの8世紀後半頃と思われる。口縁端部のみ外傾するが、内面に膨らみも認められる。小片の152も151に似た形態であるが、平城宮VII・平安宮I新の9世紀前半まで降ると思われる。口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。153は1/3程度の破片で、体部から外上方に直線的にひびて口縁部となる。高台はしっかりしている。内面底部は平滑になっており、使用の痕跡と思われる。9世紀中頃の平安宮I新であろう。154の破片も内面に使用痕が認められる。平城宮VII・平安宮I新で9世紀前半～中頃の時期と思われる。155も同時期と思われる坏の破片で、底部は残存していない。焼成良好な破片の156の内外面には火櫻が多数認められる。

158の壺口縁部は1/4程度の破片で、口縁端部を上方にひきのばしている。焼成は良好である。平城宮VI・平安宮I中～平城宮VII・平安宮I新の8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。

159は甕の口縁部小片で、細かい櫛目がある刺突文を口縁部外面に施す。口縁端部は内傾する凹面となっている。6世紀後半～7世紀の所産と思われる。

160 は土師器の鍋の破片で、大型のものである。体部から外折して外上方にのびる口縁部で、下面是やや丸みがあり、端部は凹面を呈する。体部はタタキ成形後タテハケを施し、口縁部内面はヨコハケである。奈良時代頃のものと判断している。

・SD253 出土土器

須恵器 3 点を報告する。161 は壺 A の破片で、外面口縁部下に幅 5 mm 程度の凹面がめぐる。平城宮 VI・平安宮 I 中の 8 世紀後半頃と思われる。162 は稜椀によく似た器形の破片であるが、口縁部を欠失している。胎土は緻密で良好であり、外面全体に自然釉が付着している。163 は壺口縁部小片で、端部は凹面をなす。奈良時代後半～平安時代初期のものであろうか。

・出土位置不明土器

169 は緑釉陶器椀の小片で、口縁部は端部のみ外反する。内外面に 10GY7.5/4 の色調の釉を塗布する。高橋氏の A 2 類（高橋照彦 1995）で、II 期の 9 世紀後半と判断している。東海産の可能性がある。

西嶋 4 E 区（図版 75・76、写真図版 101～106）

・ST05 出土土器

平底の底部小片の 184 は若干上げ底気味で内面は強いナデ調整である。二次受熱により変色している。弥生時代後期後半であろう。

・ST07 出土土器

185 は弥生時代中期中葉の直口壺口縁部小片である。端部は若干拡張し水平な端面となる。外面にはハケと櫛描波状文にみえる部分がある。

・SK09 出土土器

186～194 の土師器 9 点を報告する。壺・鉢と製塙土器がある。186 は口縁端部と底部を欠失する直口の壺で、器表の傷みにより調整は不明である。肩部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。古墳時代中期後半から後期初頭の形態と判断している。

187・188 はほぼ完形に復元できた鉢で、187 は口縁部が短く外反し、体部はやや深いものである。口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキのようである。古墳時代中期中葉から後期初頭であろう。

188 は浅い形態の鉢で、器表剥離のため調整不明である。古墳時代中期後半から後期前葉と思われる。

189～194 の 6 点は器厚が薄い製塙土器口縁部片で、口径が 4 cm 前後の丸底 I 式と判断される。内外面ナデ調整がほとんどで、190～192 にはユビオサエ痕が残る。192 の口縁部は内湾している。二次受熱により 189 は黒色、190 は橙色、191 は外面にぶい橙色、内面灰白色を呈し、192 は褐灰色で須恵質に近い。193・194 も丸底式でいわゆるコップ形の製塙土器の破片で、ともに口縁部が遺存する。灰色～暗灰色を呈し、193 の内面は橙色に近い部分がある。5 世紀後葉～6 世紀代のもので、壺や鉢との時期的齟齬は認められない。

・SK10 出土土器

須恵器 2 点と土師器 1 点を報告する。須恵器には蓋の 195 と壺の 196 がある。195 はほぼ完形品であるが、つまみの多くを欠失している。口縁端部は外にひろがり、端面は凹面をなす。天井部回転ヘラケズリの範囲は広く 9/10 に近い。回転方向は左で焼成は良好である。TK 23 型式で、5 世紀後葉と判断している。196 は口縁部を欠失する。焼成は良好で肩部に自然釉がかかる。推定孔径は 9 mm と小さい。体部の波状文は認められず、体部下半には細筋の平行タタキ目を残す。底部がやや尖る形態であること

から、蓋と同様のTK23型式である。

197は土師器杯で3/4程度まで接合できた。口縁端部が若干外反し、体部がやや深い形態で、体部外面下半には静止ヘラケズリを施している。詳細な時期は不明であるが、上述の須恵器と同時期で齟齬はない。

・SK30 出土土器・土錘

198～208の土師器11点を報告する。器種は壺・甕・土錘各1点と製塩土器8点である。198は直口壺で口縁部と体部の一部を欠失する。口縁端部は丸くおさめ、体部の肩が張る。肩部内面に粘土紐の接合痕を残すが、器表が剥離しているため調整痕は残っていない。初頭を除く5世紀代のものであろう。199の甕は口縁部から肩部にかけての破片で、器表が剥離しているが、体部内面はヘラケズリのようである。口縁部は外反して端部は丸くおさめる。198と同時期の可能性がある。

200～206の7点は製塩土器口縁部から体部の破片、207は製塩土器の底部片である。すべて丸底I式のコップ形を呈すると判断される。推定口径は3.4cm～4.8cmで、口径よりも体部径が大きい下膨れの形態を示すものが多く、203・205は形態が異なるものの、207の底部最大径が4.5cmであることから、すべてが下膨れ形態であった可能性が高い。器高は不明であるが、200が高さ7.6cm残存し、底部の207が残存高2.0cmであることから、10cm弱の高さであったと推定している。内外面の調整はユビオサエやナデで、204のように内面にハケを施している例もある。すべて二次受熱していると思われ、200は褐灰色、201～203と205・207の内面は灰白色、204の内外面や205・207の外面は橙色やにぶい橙色を呈している。5世紀後葉～6世紀代のものである。

208は管状土錘の破片で、土師質である。中央部が膨らむもので、残存最大径は約1.5cm、孔径は5mmを測る。黒褐色と明褐灰色を呈し、残存重量は4.7gである。

・SP38 出土土器

224の須恵器壺Aは1/4弱の破片で、口縁部はごく一部が残存する。底部外面はヘラキリ後ナデを加えている。その他の部分は回転ナデである。胎土に含まれる石粒が目立ち、やや軟質の焼成である。飛鳥時代末頃～奈良時代の所産である。

・NR01 出土土器

緑釉陶器碗の227と須恵器蓋の228を報告する。227は底部付近の破片と口縁部の小片である。口縁部が外反し、底部は平高台で中央が皿状に窪む。口縁部付近はヨコナデ、体部下端はロクロケズリ、底部内面もケズリのようである。体部外面に糸切り痕は認められず、ヘラ切り後ケズリを施しているようである。施釉は全面におよび、釉は10Y7/2の灰白色を呈する。胎土の色調は7.5Y8/1の灰白色部分が多く、底部では10YR7/4にぶい黄橙色を呈している。9世紀代のものであろう。

228の壺蓋は1/4の破片で、宝珠つまみも欠失する。天井部外面には自然釉がかかり、外周に沿って幅1mm程度の沈線状圈線を2～3条巡らす。焼成は良好で、8世紀後半頃のものであろう。

・T96 落ち込み出土土器

229は壺Bと思われる底部で、整った円盤状の破片であることから意識的に割られた可能性がある。内外面に墨痕が付着しており、底面の高台内側がやや平滑になっていることから、転用硯の可能性がある。

西嶋5区 (図版76、写真図版107)

・SK01 出土土器

弥生時代中期の底部233を報告する。甕または壺で、外面ヘラミガキ調整、内面はユビオサエ後ナデのようである。外面の一部が赤褐色を呈し、二次受熱の可能性が高い。

・SR01 出土土器

須恵器1点と蛸壺1点がある。234は坏Bと想定している底部の破片で、底面は回転ヘラ切り後ナデを施す。内面に自然釉が点々と付着している。235は釣鐘形飯蛸壺の上部片である。孔径は約1.8cmである。内陸部での蛸壺の出土は非常に珍しい。

西嶋6区 (図版76、写真図版107)

・SD01 出土土器

236～238の3点を報告する。236は口縁部の多くと肩部や体部の一部を欠失する須恵器壺で、口縁部の一部が注ぎ口のように外方に少し広げられている。体部の器厚は厚く、内面には凹凸が目立ちやや粗雑なつくりである。肩部外面には1条の沈線が巡るが、一部2条になっている。体部外面下半には平行タタキ目を残す。飛鳥IIIの7世紀第3四半期あたりであろうか。237は土師器坏で、口縁部の多くを欠失する。内外面回転ナデ調整と思われるが、外面は磨滅が激しい。底部外面は回転ヘラ切りである。238は土師器甕の破片で、体部内外面は細かいハケで仕上げている。口縁部はヨコナデで端部のヨコナデにより若干上方に拡張する。口縁部外面には焦げ状の色調変化がみられる。

・包含層出土土器

239は須恵器坏Aの破片で、内面は使用により少し平滑になっている。口縁部外面には重ね焼きの痕跡がある。回転ヘラ切りの底部外面に墨書が認められるが、判読不能である。8世紀後半頃であろう。240は遺構面から出土した須恵器短頸壺の破片で、底部外面の外周にはヘラケズリを加えている。その他は回転ナデ調整である。奈良時代後半頃のものであろう。

鳴1区 (図版77、写真図版109)

・SR01 溜まり状遺構出土土器

249～257が出土している。249は須恵器蓋の完形品で、口縁部外面には重ね焼きの痕跡が認められる。天井部の器厚は比較的厚く、宝珠つまみの平面は楕円形を呈する。内外面回転ナデ調整で、天井部外面は回転ヘラ切り後不定方向のナデを加える。口縁端部外面は凹面を呈し、口縁端部は尖り気味になっている。9世紀中頃と思われる。250は口縁部が外反する緑釉陶器の稜碗であるが、外面の稜はやや鋭いものの突出度は低い。口縁部外面は縦方向にヘラ描きの沈線を入れることで輪花としている。内面の体部と底部の間には2条の浅い沈線を巡らす。幅広高台に近い形態の高台から内側は原則露体であるが、釉が散ったように点々と薄く付着している。9世紀後半～10世紀前半と判断されるが、胎土の色調等は篠窯に似ており、篠窯産であれば10世紀前半であろう。251・252は須恵器皿か坏Aで、251は完形品、252は口縁部を一部欠失する。底部外面は回転ヘラ切りで、内外面は回転ナデであるが、252は内面底部の狭い範囲に、251の内面底部には仕上げナデをジグザグに施している。251・252ともに口縁部外面には重ね焼きの痕跡が認められる。252の内面全体と底部外面外周は使用により少し平滑になっている。253は焼成不良のやや深い坏Aで、口縁部から体部の一部を欠失する。使用により表面全体が平滑にな

っている。内外面回転ナデ調整で、底部外面は回転ヘラ切り後一部ナデを施している。254と255は土師器の坏Aの破片である。254の底部内面は黒く焦げたようになっている。製作技法は須恵器坏と同じであるが、255の底部内面仕上げナデの範囲は広い。256は土師器皿であろう。口縁部の1/3程度を欠失する。製作技法は須恵器坏と同じである。257は土師器の大型鍋か鉢の破片である。外折する口縁部の端部はヨコナデにより上方に少し拡張する。体部外面は縦方向、体部と口縁部の内面はヨコハケ調整である。

嶋2区（図版77～83、写真図版110～124）

・SR01-a 北部・T80 出土土器

259～321の63点とT80出土の322～327の6点を報告する。壺・甕・有孔鉢・鉢・底部・高杯・器台などがあり、一部を除き庄内期のものがほとんどを占めるが、さらに詳細な時期については一部を除き不明である。

T80出土土器を除くと、出土層位別では、最下層（北断面②8～9層）が260・269・274・276・289・290・295・298～300・308・314の12点、下半部が261・263・265・267・268・271～273・275・278～280・282～286・291～294・296・297・301～304・307・310～313・316～321の38点で、両者出土で接合したのは259・262の2点である。下層（同6・7層）出土は266・277・309の3点であるが、266の破片のほとんどはT80出土である。上層（同1～3層）から出土したのは270・281・287・288・305・306・315の7点、下半と上層出土のものが接合したのは264の1点である。

壺は259～273の15点で、口縁部が二重口縁・複合口縁になるものには259～263がある。259の口縁部内外面はハケのような目のあるヨコナデである。頸部外面はヘラケズリ状の強いイタナデ後に縦や横方向にヘラミガキを雑に施す。内面も粗くヨコハケを施す。肩部外面はヘラミガキを雑に施し、内面はハケを密に施している。260の口縁端面には細い擬凹線を5条～6条施しており、口縁部内外面はヨコナデで上段は左斜め上方方向のハケ後に施している。外反しながら大きくひろがる口縁部の261は、内外面ヨコナデ調整で外面にはハケのような条線が残り、口縁端部は丸い。262・263は口縁部が内湾気味のもので外面にはタタキ成形痕が残る。262の口縁部内面と端部外面には条線が残るヨコナデ調整で、頸部付近内面にはヘラミガキを加えている。263の口縁端部は凹面をなし、口縁下部外面にはヨコハケ、内面にはヘラミガキを施す。

264～267は広口壺で、264の口縁端部は上方に拡張し、外面には条線のあるヨコナデを施し凹面をなす。頸部外面にはタテハケ後に縦方向、内面は横方向のヘラミガキをそれぞれ施す。体部はタタキ成形である。肩部と口径部外面に煤が付着している。265は口縁端部をつまみ上げるように少し拡張し、端面には擬凹線に似た条線が残るヨコナデを施し凹面をなす。口縁部内面の一部にはヘラで波状文風の記号文が認められる。口頸部内外面はヨコナデ調整である。266・267は広口壺上半部で、口縁端部は拡張せず丸くおさめる。266の体部はタタキ成形で外面にタタキ目を残す。頸部外面はタテハケで、口縁部内外面はヨコナデのようである。肩部内面はヨコナデであるが、粘土紐接合痕とユビオサエ痕が明瞭に残る。267は口縁部内外面ヨコナデ調整、筒状頸部の内外面にはハケを施す。体部はタタキ成形で、肩部外面にはハケを加え、内面はイタナデやナデでユビオサエ痕が残る。

長頸に近い口縁部の268は口頸部ハケ調整で、口縁端部はやや凹面をなし、条線のあるヨコナデで仕上げている。体部はタタキ成形で、外面にハケを加え、内面は荒搔きのようなナデが認められる。269

は口頸部が短くあまり開かない。体部はタタキ成形で、外面にはハケを加えるが、下半との接合部外面には強いイタナデを施し、滑らかにする意図が認められる。体部内面はイタナデ調整であるが、肩部には施さずユビオサエ痕が残る。270は外上方に短く開く口縁部の破片で、口縁端部は内湾気味である。口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面にはハケ、内面はナデを施す。

271は壺頸部の破片で、外面に櫛描波状文を施し、体部との境に突帯を貼付し、刻目を加えるものである。

272は口縁部の多くを欠失するが、大型の壺と判断した。甕の可能性もある。体部外面はタテハケ後肩部にハケに似た櫛描直線文を施す。体部内面はヘラケズリで一部頸部付近にまでおよぶ。

273は弥生時代中期後葉の無頸壺口縁部で、口縁部および直下の外面には凹線文を施し、その直下には櫛による刺突文が認められる。内面はハケ調整である。

274～293は甕で、20点を報告する。274は尖底に近い平底でやや長胴のもので、一部を欠失するが完形に復元した。体部はやや細筋のタタキ成形で、外面にはハケを密に加える。内面はヨコハケを基本とし、底部付近は螺旋放射状に施している。庄内期のもので全体的に丁寧なつくりである。内面底部付近にはオコゲ状の物質が付着し、外面下半には煤が付着しているが、内容液体の吹きこぼれにより煤が消えた部分が線状に複数認められる。275は図上復元の破片で、体部はタタキ成形、体部内面にはハケとナデを施す。尖底に近い平底である。276は平底の一部まで残存する約半分の破片である。口縁部は外反しながら外上方にのび、内面にはハケを施す。やや張り出す形態の体部はタタキ成形で、外面一部と内面全体にイタナデを施す。外面下半には煤が付着し、底部付近は二次受熱により赤桃色に変色している。口縁部～肩部までの破片の277～280は体部タタキ成形で、277はやや細筋のタタキ、277・280は口縁叩き出し技法である。278は肩部外面全体に、279は疎らにハケを加え、277の外面には一部にナデを加えている。内面調整は278～280がヨコハケで、280ではやや疎らなナデを加えている。277はイタナデで、口縁部内面にはハケが残る。280の口縁部は直線的に開き端部は尖り気味である。278～280の外面には煤が付着している。281～283は口縁部も含め器壁が厚いもので、281の体部内面は横方向のヘラケズリのようである。282の口縁部内面にはヨコハケ、体部外面にはタテハケを施す。283は肩部外面タテハケ、内面ヘラケズリで、口縁部外面のヨコナデには細い条線が残る。

284・285は小型の甕で、口縁部は短い。284はタタキ成形で、内面には粘土の継ぎ目が明瞭に残る。285はナデ仕上げで、口縁部外面には細い条線が残るヨコナデである。

286は直立に近い口縁部で、端部直下外面は段状を呈する。北近畿系であろうか。体部はタタキ成形で、タタキ目の方向が縦に近い部分が多い。体部内面はヘラケズリである。外面の一部に煤が付着している。

287・288は大型の甕で、287は厚手である。体部外面は幅広いヘラミガキで、ナデに近い。内面は横方向のヘラケズリである。288は口縁部の破片で、端部は跳ね上げたようになっている。外面はヨコハケまたはヨコナデ、内面は粗目のハケ後ヨコナデで、胎土に細かい砂粒を多く含んでいる。一部に煤が残存している。

289は体部から屈曲せず外反しながら外上方にのびる口縁部で、口縁部内外面はヨコハケ、肩部外面は細かいタテハケ、肩部内面はヘラケズリである。外面に煤が付着しているが、口縁端部で急に無くなることから、蓋をして煮炊していたと判断できる。奈良時代まで時期が降る可能性があるものである。

290は口縁部が直立に近く、長胴の形態で、欠損部が多少認められるが完形に復元した。若干内湾する口縁部には粘土の接合痕が明瞭に残り、端部には面をもつが丁寧な仕上げは認められない。体部外面

の多くは密にハケが施されており、タタキ目は極めて不明瞭である。外面下半部にはイタナデを施しているようである。底部は丸みのある平底で、全体的には尖底となっている。底部付近以外の体部外面下半には煤が付着している。体部内面はヘラケズリ調整である。なお、底部外面に蓑状の圧痕が認められる。

291 は破片のためやや細長い形状の図になっているが、口縁端部を上方に跳ね上げ、端部外面が凹面をなし、体部外面のタタキ目は細筋で、庄内形播磨型甕の特徴を備えている。体部内面はヘラケズリ、体部外面下半にはハケを加えている。外面下半には煤が残存している。

292 は欠失部分が多いが完形に復元した。長胴に近く丸みがある平底で、屈曲気味の有段口縁の口縁部外面には3条の擬凹線を施す。体部外面はタテハケ後にイタナデをケズリのように施し、内面もイタナデである。北近畿系のもので、庄内期でも前半の可能性がある。293 も北近畿系の有段口縁の甕破片で、鉢の可能性もある。体部はタタキ成形でハケを加え、内面はイタナデである。外面に煤が付着している。

294～307 の14点は鉢や鉢の可能性が高いものである。294 は有孔鉢であるが、形態的には甕に近い。太筋のタタキ成形で、連続するように施されている。底部は僅かに平底を呈し、径約8mmの円孔を穿っている。内面はハケ調整で、底部付近は螺旋放射状に施している。口縁部は体部から一旦すぼまった後直立する形態で、内面はヨコハケである。口縁部外面のヨコナデは微かに認められる。

295・296 は小型の平底鉢で底部は殆ど突出せず、体部は直線的に外上方に開く。ともに一部に黒斑が認められる。295 はタタキ成形で内外面にヘラミガキを加えている。296 は口縁部が若干内湾気味で外反し、口縁端部もヨコナデで整形している。内外面にヘラミガキを密に施し、丁寧なつくりとなっている。

297・298 はやや大型で体部が丸みをもつ形態である。297 は突出する底部を有し、体部はタタキ成形の可能性がある。内面はハケを密に施し、底部付近の約半分には蜘蛛の巣状に施す。外面はナデであろう。298 は口縁部付近が二次受熱により赤紫色を呈する。底部は突出しない平底で、体部内面はヘラミガキとハケである。口縁部にはヨコナデを施す。

299～301 は中型の鉢で体部が丸みをもつ。299 はドーナツ底と思われ、体部外面はナデ、内面はハケで、上半にはヨコナデを加えている。口縁端部のつくりはやや雑である。内面に粒状圧痕が認められる。300 は小さな平底で、内面はイタナデ、外面はナデで、タテハケ後かもしれない。底面は木葉底のようである。301 は丸底に近い小さな平底で、体部外面はハケ、内面はイタナデである。口縁部のつくりは丁寧である。

302～305 は台付鉢で、体部は内湾しながら口縁部にいたる。302 は中実の脚台部で、周囲のユビオサエが顕著である。体部内面は丁寧なナデ仕上げであるが、外面には粘土接合痕が目立つ。303 は一部欠損するが完形に復元できた。口縁部をヨコナデするなど比較的丁寧なつくりで、体部内外面はヘラミガキを施し、内面はハケ後に施している。脚台部内面のハケは螺旋放射状に施している。304 は体部内外面ヘラミガキや内面イタナデのようである。305 は器表が荒れており、体部内面はナデやヨコナデ、外面には一部にヘラミガキを施しているようであり、脚台部内面には一部ハケが認められる。

306 は有段口縁部のような形態で、台付鉢かもしれない。調整痕は不明である。307 は薄手のつくりの台付鉢の可能性が高く、有段口縁の北近畿系のものである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面には鈍くハケ目が残る。内面はナデである。庄内期のものである。

308～312 は底部である。308 は壺の底部で、体部はタタキ成形、体部内面にはイタナデやユビナデが認められる。底面には三角形状の圧痕が認められる。309 も壺底部であろう。内面は器表が剥離して

いるが底面には葉脈圧痕が残る。310は甕の底部と思われる。タタキ成形後外面にイタナデをミガキ状に縦方向に施し、内面にはユビオサエ後にイタナデを施す。311は鉢底部の可能性があり、蓋の可能性も捨てきれない。体部内外面にはハケを施す。底面はドーナツ状に近い。312は台付器種の底部であるが、器種は不明である。内外面ナデ調整で、弥生時代中期初頭の底部である可能性もある。

313～318は高坏である。313は坏部を欠失する。有稜の脚部で、上部には小さな円形透孔を上下2段に穿孔し、計7箇所残存している。裾部外面はタテハケ後斜め方向のヘラミガキで、中実の脚柱部外面にもハケ後ヘラミガキを施す。314は有稜高坏の坏底部から裾部で、脚部内面以外にヘラミガキを施している。脚部外面はハケ後である。脚部内面はハケ調整である。脚部には径約1.2cmの円形透孔を4方向に穿つ。315は椀形高坏で裾部を欠失する。坏部内外面にはヘラミガキを施すが、つくりは丁寧とは言い難い。脚柱部外面にはヘラミガキを施すが、裾部の透孔の有無は不明である。316・317は中実の脚柱部の脚部で、316の裾部外面はタテハケで一部にヘラミガキ、内面はヨコハケで、脚部に透孔は穿たない。317は脚柱部がタテハケ、脚部内外面は細かい単位のヘラミガキで、裾部はヨコナデ調整である。透孔は穿たない。318は短い脚柱部から大きく下外方に直線的に開く脚部である。径約7mmの円形透孔を4方向に穿っている。脚柱部はタテハケ、脚部内面はハケやナデで、外面はヘラミガキのようである。

319～321は器台である。319は有稜高坏の坏部に似た受部で、口縁端部は丸くおさめる。脚柱部は中空で、裾部を欠失する。受部の屈曲部稜線部分には竹管文を一列に施すが、直径が2.5mm～4mmまでばらつきがある。受部と脚柱部の境には断面三角形の突帯を貼付し、刻目を加えている。受部内外面や脚柱部・裾部外面はヘラミガキ調整で、脚部内面はナデである。320も有稜高坏の坏部に似た受部の形態であるが、口縁部を欠失している。受部内外面の調整は基本的にハケ後ヨコナデで、その後ヘラミガキを施している。脚柱部外面はヘラミガキで、内面にはシボリ目が認められる。裾部への移行部に円形透孔が穿たれているが、残存部分が僅かであることから、詳細は不明である。321は器台口縁部の小片である。屈曲部分の上部が剥離している。外面屈曲部下端には、外径5mmほどの竹管円形浮文を1.3cm程度の間隔で貼付している。屈曲部下面はヨコナデ調整で、内面にはヘラミガキが認められる。

322～327は確認調査のT80から出土した土器で、甕・鉢・底部・脚部・脚台部がある。

322は甕で、体部外面はタテハケまたはイタナデ、内面はヘラケズリであるが、内面下半はナデのようである。外面には煤が付着している。口縁部は内湾ぎみで、端部は丸みのある面をもつ。

323は壺または甕の平底底部で、太筋のタタキ成形後外面にヘラミガキとハケを疎らに施す。内面はイタナデである。

324は鉢の完形に近いもので、平底である。タタキ成形で、口縁部外面には粘土接合痕が残る。内面はイタナデである。

325は脚台形態の底部破片で、外周にはユビオサエ痕が残る。体部外面にはヘラミガキ、内面はイタナデ後ヘラミガキを施している。大型鉢の可能性がある。

326は脚台部の破片で、鉢の可能性がある。脚台部外面はハケで、多くの爪形圧痕が重なる。内面はヨコナデである。体部内面はナデ後ヘラミガキを施している。

327は器台と思われる脚部の破片で、中空の脚柱部内面にもナデを施している。外面にはヘラミガキを施し、脚端部は丸い。径約1.2cmの円形透孔は3方向に穿っているようである。

・SR01-a 中部出土土器

328～333の甕や鉢、脚部の6点を報告する。甕には328～330の3点と大型鉢の可能性もある331がある。328・329は上層出土で、他は下層（砂層）出土である。庄内期およびその直後のものと判断される。

328は接合により約半分まで復元した。口縁部が外反し、尖底でやや浅いものである。外面はイタナデで、内面にはユビオサエ痕が残る。庄内期の後半以降あるいは布留期の可能性もある。329は口縁部が内湾気味の破片で、口縁外面にはヨコハケのようにみえる条線があるが、ヨコナデであろう。体部内面はヘラケズリで、外面はタテハケのようである。外面には煤が付着している。布留期かそれに近い庄内期と思われる。330は大型で、体部はタタキ成形後の外面にハケを加えており、内面はイタナデである。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデで、外面の一部が焦げ跡のようになっている。331は山陰系の形態の複合口縁部で大型の鉢か甕であろう。内面は細い条線が入るヨコナデで、端部を内側に肥厚させている。砂粒をやや多く含む。332は台付鉢の下部で、体部はタタキ成形の可能性があり、内面はイタナデ調整である。脚台部には指頭圧痕が目立つ。333は高坏の脚部であろう。外面はハケ後にヘラミガキ、内面もハケ後に下半部をヘラミガキしている。直径約6mmの円形透孔を4方向に穿つ。

・SR01-a 中部南出土土器

334～342の9点を報告する。すべて下層（砂層）出土である。甕・鉢・底部・器台・脚部などがある。弥生時代後期末～庄内期の時期が与えられよう。

334は甕と判断したが壺の可能性も残す。体部はタタキ成形で、上半部にタタキ目を残す。連続螺旋状のタタキ目を意識して施しているようである。底部周囲は削り上げて体部下端を整形しているよう、底面は四角形に近くなっている。体部内面はヨコナデ後ユビナデのような縦方向のナデを施している。335は小型の甕で、底部は欠失する。口縁部はヨコナデで、体部外面はヘラミガキで仕上げている。体部内面はヘラケズリ後に一部ヘラミガキを加える。336は甕の口縁部片で、口縁部外面に煤が付着する。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、肩部内面はヘラケズリで、外面はイタナデのようである。

337の鉢は底部が上げ底状で底部周囲をユビオサエで整形している。体部内面はイタナデで、口縁部をヨコナデし、端部を丸く仕上げている。やや丁寧なつくりである。

338～340は底部で、すべて壺と思われる。338は少し突出する平底で、体部はタタキ成形後外面にハケやナデを加えている。内面はイタナデのようである。339は突出しない平底で、体部外面にヘラミガキを加えており、内面はイタナデである。底部外面には圧痕が多く残り、一部には藁状のものも認められる。340は中央が皿状に窪む底部で、底面にヘラミガキを加えているようである。大きく開く体部はタタキ成形で、内面にはヘラミガキを施す。

341は器台で、裾部を欠失する。口縁端部は上下に拡張し、端面は凹面となる。受部内面はハケであるが、短い単位で回数多く施している。脚柱部外面には成形時の凹凸が横帯状に残り、内面はヘラケズリが行なわれている。脚部内面はハケを施すが、脚柱部との接合痕を明瞭に残す。

342の脚部は脚柱部がほとんど認められないもので、下外方に外反しながら開く形態である。端部は丸くおさめる。外面はタテハケ後縦斜め方向のヘラミガキを加えているが、残存部分が非常に限定される。内面はハケで、上部は蜘蛛の巣状に施している。

・SR01-a 南部出土土器

343～368の26点を報告する。343～350は壺、351～358は甕で、359も甕と思われる。360～364は鉢で、365も鉢であろう。364は高坏の可能性も残る。366は器台、367は脚部、368は蓋である。庄

内期を中心とした時期の所産であろう。

343～350・352～354・357～363・365～368は下層（砂層）や下層（黒褐色シルト）出土、351・356は下半（砂層）出土で、355は上層（黒褐色シルト）出土、364は流路底直上出土である。

壺のうち343・344は二重口縁・複合口縁の口縁部である。343は胎土に砂粒をやや多く含むが、微細砂粒は目立たない。口縁部内外面ヨコナデ調整で、頸部外面の一部にタテハケが残る。344は内湾気味に外傾する口縁部で、端部内面に凹線状の窪みがある。口縁部内外面ヨコナデ調整で、頸部外面はタテハケである。345は口縁端部を上下に拡張する広口壺で、端面には5～6条の擬凹線を施す。頸部外面には口縁部接合時の粘土ナデツケ痕跡が顕著で、凹凸が多く、ヨコハケを施すものの平滑になっていない。頸部内面はヨコハケやイタナデで、肩部外面にはヘラミガキの一部が観察できる。346も345に似た形態の広口壺であるが、頸部の長さと口縁端部の形状が異なる。346の口縁端部は外上方に短く跳ね上げたような形状で、端部はほとんど拡張しない。体部はタタキ成形で、ハケを重ねる。口頸部外面もタテハケ調整で、口縁部はヨコナデを加えている。頸部内面はヨコハケを施しており、肩部内面にはユビオサエ痕が目立つ。347は口縁端部を欠失する破片で、体部はタタキ成形である。外面はナデ、内面は細目のハケで調整している。頸部外面は粗目のハケである。体部上端にヘラ記号文のような3～4条の刻線を雜に施している。348は筒状の頸部から外折して外上方にのびる口縁部である。端部は下部を凹面状にヨコナデしている。口縁部外面のヨコナデは細い条線が目立つが、内面のヨコナデには認められない。頸部外面はタテハケ後ヨコナデ調整であるが、ごく一部に横方向のヘラミガキが認められる。349は口縁部を欠失するが体部は完存する壺である。体部は尖底で算盤玉形に近く、底部付近に黒斑が認められる。外面はハケやナデ調整で、内面はハケ調整である。下半部に径約4mmの円孔が貫通しており、焼成後に丁寧に穿たれ、「仮器化」されたものと判断される。350はドーナツ状上げ底で平底の大型壺体部下半である。上げ底部分には葉脈痕が残る。太筋のタタキ成形で、上部はタテハケ、下部は縦方向のナデをやや疎らに加えている。下部では細かい単位のナデによりタタキ目を消す部分が大半であるが、粘土紐接合痕が残る。内面はナデ上げであるが、単位は不明である。下部に黒斑が認められる。

351～358の甕のうち、全体がうかがえるのは351に限られる。351はドーナツ状の平底のもので、体部は丸みを帯びる。太筋のタタキ成形で口縁部との接合部にはタテハケを施し、底部周囲を少し削っているようである。体部外面には煤が薄く残存している。体部内面の調整は下半がイタナデ、上半はヨコハケである。口縁部内面はヨコハケを施す。352～354は口縁部が体部から「く」字状に外反するもので、端部を丸くおさめる352と面をもつ353・354がある。352はやや薄手で、体部外面にハケを密に施し、内面は粗目のヨコハケである。体部には丸みがある。353は大型の甕で、体部の器壁が厚い。外面はタタキ目に似た粗目のタテハケを密に施し、内面は横方向のヘラケズリである。外面に薄く煤が付着している。354の体部外面は353と同様のハケを施し、内面も同じく横方向のヘラケズリである。355の体部は卵形に近く、下膨れで丸みがある。口縁部は外反しながら上外方に長くのび、端部は丸くおさめる。体部は太筋のタタキ成形で、器壁はやや厚い。下部に煤が帶状に付着している。体部内面はイタナデである。口縁部内外面はヨコナデで、細い筋目が目立つ。356は口縁部形態が北近畿系の甕上部片で、体部はタタキ成形で、体部内面や口縁部はヨコナデ仕上げである。外面に薄く煤が付着している。357は山陰系に近い口縁部であるが、形態的に北近畿系にも似る。口縁部内外面はヨコナデである。口縁端面に凹線状に窪む部分が認められる。体部外面には粗目のハケにみえるタタキ目で、内面は左方向のヘラケズリである。外面に煤が付着している。358は甕体部下半で、尖底に近い平底である。底部

付近の黒斑が目立つ。やや細筋のタタキ成形で、外面に疎らにタテハケを加える。底面にもタタキを施している。内面は粗目のハケで、部分的にナデを加えている。359は平底の甕底部で、体部はやや歪んでいる。タタキ成形で、内面にはイタナデを施す。底面に蕈のような圧痕が残る。

360・361は口縁部が外反する鉢で、360は大きな平底で、底面に棒状の圧痕が残る。体部外面はナデ調整、内面はハケを施している。口縁部は一部のみ残存し、ヨコナデ調整である。361は台付鉢のような中央部が窪む上げ底状の底部で、口縁部は短く外反する。体部外面には胎土のひび割れが目立ち、ナデ仕上げのようである。内面はイタナデを主として横方向に丁寧に施し、口縁部内外面のヨコナデも丁寧である。底部周囲には指頭圧痕が目立つ。362は鉢と思われるが、口縁部の径が体部径に比べて非常に大きい。口縁部は山陰系の複合口縁であるが、北近畿系の可能性も残る。ただし、擬凹線は施さない。甕の357とともに山陰系・北近畿系の折衷的な様相を示す。胎土に砂粒を含む量は少なめである。口縁部はヨコナデで頸部内面にヨコハケ、体部内面はユビオサエ後ナデである。体部外面下半は細筋のタテハケを細かい単位で施している。外面全体に煤が付着している。

363・364は半球形の鉢で、363は脚台部が付く。体部はやや丸みがあり、内面はハケを密に施すが、外面はナデのようである。口縁部のヨコナデもまとい。364も丸みがある体部で、底部を欠失する。丁寧なつくりで、口縁端部直下の外面を強いヨコナデにより一段低く仕上げている。内外面にヘラミガキを加えているが、外面には黒色の漆膜のような付着物があり、黒色のスリップを塗布した後ヘラミガキを施したと判断している。内面には焦げ状のものが薄く付着している。365は小さな底部で薄手であることから鉢と判断される。中央が少し窪む平底で、体部内面はイタナデ、外面はナデである。

366は器台の受部で、二重口縁になっている。5YR8/4の淡橙色を呈し、内外面を丁寧にヘラミガキしている。口縁部外面はヨコナデ後、受部下半外面はハケ後に施している。口縁部外面のヨコナデには細い条線が多数入る。受部の1/5程度を欠失する。367は脚部で、高杯と思われる。裾部は内側に粘土が少しはみ出して接地面を有する。内外面ヨコナデ調整で、杯底部の一部にはハケ目が残る。

368は蓋の破片である。内外面を細いヘラミガキで調整している。残存部分があまり多くなく、つまりの部分も端部は僅かに残るのみである。

・SR01-a 南東隅出土土器

369～382の14点を報告する。369・381・382は流路底直上（南断面12層）出土で、370～374・376～380は最下層（暗灰色粗砂混じりシルト、同11～12層）出土で、375は上層（黒色シルト、同1・4・5層）から出土している。いずれも弥生時代後期末から庄内期を中心とした時期のものである。

369は広口壺口縁部片で、端部を上下に拡張し、端面は櫛描波状文で加飾する。内外面ヨコナデで、内面にはヨコナデを施す際の原体の断続部分が観察できる。370は壺体部で、口縁部を欠失する。太筋のタタキ成形で、底面にもタタキ目が明瞭に残る。体部外面下半にヘラミガキを加え、上半はイタナデのようである。内面は丁寧なナデ後に下半は縦方向、上半は横方向のハケを施す。肩部内面はヨコナデでミガキのように丁寧に施す。体部外面下半には煤が付着しており、甕としての使用を物語る。371・372は壺底部である。371は太筋のタタキ成形で、やや突出する平底である。底部周囲にはナデを加えている。内面はハケ調整で、底部は蜘蛛の巣状や螺旋放射状に施している。372は突出する平底で、体部はタタキ成形である。内面では一部にハケ目が確認できる。外面全体に煤が付着している。

373～378は甕および甕と思われる底部である。373は甕上半部の破片である。体部はタタキ成形で連続螺旋状を意識しているようである。体部内面はイタナデ調整であるが、粘土紐接合痕が顕著に残る。

口縁部外面はヨコハケ後に内面とともにヨコナデである。外面に薄く煤が残存している。374は小型甕の上半部片で、口縁部の器壁は厚い。体部はタタキ成形で、口縁叩き出し技法である。体部内面はイタナデで、口縁端面には凹線状にみえる部分がある。375は小型甕の下半部である。器壁が厚く平底で、タタキ成形である。内面には粘土紐接合痕が残り、下半はイタナデである。376は平底の底部で、甕と思われる。外面にはユビオサエ痕が残り、内面にはイタナデを螺旋放射状に施す。377は尖底に近い平底で甕の底部である。太筋のタタキ成形で、内面はイタナデ後ナデを加えている。底面の周囲内側と底部付近の外面に複数個所の刺突痕があり、製作時の工具の痕跡と判断されるが、具体的には不明である。378の底部はほぼ尖底で、底面にもタタキを施す。内面はハケである。

379は大型の鉢で、口縁部が外反し、端部に面をもつ。注口部分が残存している。外面は全面タテハケ後、内面は口縁部ヨコハケ、体部ヘラケズリ後に、全面にヘラミガキを密に施している。外面には煤が付着し、外面屈曲部には押圧痕が認められる。380は口縁端部の凹凸が激しく、非常に雑なつくりである。底部は突出する平底で、中央に径約1.5cmのやや楕円形の円孔を内側から穿っている。内外面ナデ調整で、有孔鉢と判断したが、特異な形態である。

381は高杯の脚部で、裾部は欠失する。短い脚柱部から大きく湾曲して下外方に開くもので、器壁は厚い。脚柱部外面はタテハケ、脚柱部下半から脚部外面は細かい単位のヘラミガキを密に施す。内面はハケを螺旋放射状に施し、裾部付近にはヨコナデを加えている。径約1.2cmの円形透孔を4方向に穿つ。

382は山陰型甕形土器の端部付近と想定している。端部は幅広い面をもち、内側にユビオサエが多数認められる。内面はナデやハケ調整で、外面には粘土紐接合痕が顕著に残る。内面と底面に煤が付着する。

・SR01-b 出土土器

肩付近から出土した383・384は須恵器、385は土師器である。

383は須恵器坏身片で、たちあがり部は垂直に近く、端部には内傾する面をもち受部はほぼ水平である。口径や特徴からTK47型式期の5世紀末～6世紀初頭のものと判断できる。384は須恵器坏で、1/3程度欠失するが、完形に復元した。歪みにより楕円形を呈し、底部外面は回転ヘラ切り後ナデを加える。やや深い形態で、9世紀後半あたりによくみられるが、輪高台が付かない点が珍しい。385は土師器の坏底部で、墨書き土器である。底部は回転ヘラ切りで、内面は回転ナデである。外面の墨書きは「□出口」にも見えるが判読不能である。

・SD01 出土土器

389・390の2点のみ図示した。甕と鉢各1点である。389の甕は丸みが強い体部をもち、体部外面はハケ、内面は横方向のヘラケズリで、肩部内面上端にヘラケズリ前のヨコハケが一部残る。

390はドーナツ状上げ底の平底鉢で、口縁部の一部を欠失する。底部径が大きい。二次受熱により変色している部分が多い。内面底部付近にハケを蜘蛛の巣状に施す。T78の最深部（シルト～砂）出土である。

・SD05 出土土器

391～395の須恵器5点を報告する。奈良時代初期のものや古墳時代後期のものがある。

391・392・394は検出中～上半部出土、395は埋土出土で、393はSD01出土の可能性があるものである。

SR03出土破片と接合した391は、壺の破片で、幅の狭い輪高台が付くものである。高台貼付時の工具痕が外面に残る。内外面回転ナデで、外面上部の一部に自然釉が薄くかかる。平城宮Ⅲ期の8世紀中頃の可能性がある。392は坏蓋で、口縁端部は丸く、天井部との境に段や凹線は認められない。回転

ヘラケズリの範囲は天井部の約4/5である。MT 85型式併行期かTK 43型式期の6世紀後葉頃であろう。393・394は壊の破片で、底部は回転ヘラキリ後、一部ナデを施す。内外面回転ナデで、内面底部には仕上げナデを施す。393は飛鳥V・平城宮I期の8世紀前半、394は飛鳥IV期～飛鳥V・平城宮I期の7世紀末～8世紀前半であろう。395は長頸壺で、半分程度遺存していたが、完形に復元した。肩がやや張るが、丸みがあり、高台が付かないものである。肩部直下に沈線で上下を画した帶内に刺突文を巡らす。その上の肩部には浅い2条の沈線状のものがあるが、途中で消失している。口頸部中央には2条の沈線を巡らす。底部外面は静止ヘラケズリで、底部内面には円形の当て具痕が残る。TK 46型式期とほぼ同時期の飛鳥IV期で、7世紀後葉頃と思われる。還元焰焼成不十分で橙色に近い。

・SR02 出土土器

西壁付近北部から出土した須恵器壺Aの396を報告する。底部は回転ヘラキリ後ナデで、他は回転ナデである。底面に板側面のような圧痕が2箇所認められる。平城宮VI期・平安京I期中頃の8世紀後半～9世紀初頭のようである。

・SK01 出土土器

397の土師器壺を報告する。一部を欠失するのみで、完形に復元した。底部は回転ヘラキリで、内外面は回転ナデ調整である。口縁端部は少し外反する。内面はやや平滑になっており使用によるものと思われる。10世紀頃の所産と推定している。

・包含層出土土器

398は調査区中央東で出土した須恵器壺である。やや楕円形に歪み、口縁部の多くの部分を欠失する。底部はヘラキリであるが、静止か回転を伴うか不明である。他の部分は回転ナデで、内面底部に仕上げナデを施す。TK 48型式期とほぼ同時期の飛鳥IV期・V期で、7世紀後葉頃と思われる。下半部の器厚が厚く、外面は灰被りにより一部銀色に近いが、内面では認められない。

嶋3区（図版84、写真図版125～127）

・SH01 出土土器

中央土坑から401～403の3点が出土している。401は弥生時代後期初頭～前葉の甕の小片である。口縁端部は上下に少し拡張し、2条～3条の凹線があるようにもみえる。口縁部外面には煤が付着している。402は台付鉢の鉢部で接合完形品である。口縁部は丸くおさめ、体部内外面にはヘラミガキを密に施している。403は脚部で、下端には指頭圧痕が多く残り、外面にハケを加えている。体部はイタナデである。

SH01内のP2から出土した404は甕の下半部である。タタキ成形で、器厚は薄いが、タタキ目は太筋で、底径は推定5cmと大きい。内面の調整はヘラケズリである。弥生時代後期中頃と推定している。

・P05 出土土器

405は甕と思われる底部の小片で、外面にはユビオサエ痕が残る。底面に葉脈と推定される圧痕がある。外面は赤紫色を呈し、二次受熱があったものと判断される。

・P06 出土土器

406は弥生時代後期前葉の甕の口縁部小片で、端部は上下に少し拡張し、端面に擬凹線のような細い条線が3条巡らされている。体部外面はタテハケである。407の破片は器台の可能性がある脚部と推定したが、口縁部の可能性もある。端部は外面を幅広く肥厚させ、内面はつまみ上げるように細く突出す

るが、上端がつぶれたようになっている部分がある。端面に細い条線が認められる。内外面はハケ調整である。

・SR01 出土土器・瓦

弥生土器2点（408・409）、奈良時代頃の土師器把手部分（410）、飛鳥～奈良時代の須恵器2点（411・412）、布目瓦4点（413～416）を報告する。408は中期後葉の大型短頸壺口縁部片で、頸部に押圧文突帯を貼付する。口縁端部は肥厚するが無文である。409の把手は詳細時期不明である。環状の把手部分で、断面は橢円形を呈する。甕か壺の肩部に付けられていたものであろう。

410は平面三角形に近い把手で、少し反り上がる。長さは9cmに近い大型で、土師器の大型鍋に付けられていたものと思われる。

411は飛鳥IV～平城宮Iの7世紀後葉～8世紀前葉と思われる。やや深い形態の壺で、半分弱の破片である。外面には自然釉が付着している。底面は回転ヘラ切り後回転ナデを加えており、焼成は良好堅緻である。412は壺Bの1/4程度の破片で、飛鳥V・平城宮Iの8世紀前半の時期であろう。小ぶりで口縁部は少し外反している。

413・414は須恵質の平瓦の破片で、ともに端辺と側面の一部が残る。厚さ1.45cm～1.5cmで、凹面には布目が付着し、凸面にはナデを加えている。413の側面の凸面側、414の側面の凹面側の稜はヘラで面取りをしている。414の凸面の一部にはナデ後に布目が付着している。

415は須恵質の丸瓦の破片で、玉縁をもたない行基瓦である。凸面はナデ後、側面に近い部分に薄くヘラケズリしており、凹面には布目がかろうじて残るが、端部付近にはヘラケズリを加えている。焼成良好・堅緻である。416は玉縁部分の破片で、凸面が燻された色調を呈している。焼成はややあまく、灰白色を呈する。凹面には布目が残り、側面に近い部分は薄くヘラケズリしている。凸面は不明である。

嶋4区（図版85、写真図版127）

・SD01 出土土器

419～421の弥生土器を報告する。419は中期後半の広口壺口縁部片で、主として下方に拡張した口縁端面に4条の凹線文を施した後、刻目を加え、最後に円形浮文を貼付している。円形浮文は4個一単位で4方向に施されていたようである。420は中期後半の高杯か鉢の口縁部片である。高杯の可能性が高い。内外に拡張した口縁端面に4条の凹線文を施し、棒状浮文を貼付している。棒状浮文は9条以上を一単位として何方向かに加飾していた。口縁部やや下部の外面には、2条以上の凹線文が残存している。421は蓋の破片であるが、内面イタナデの痕跡が明瞭で、時期が降る可能性がある。外面はヘラミガキ調整である。

・SR01 出土土器

422～424は流路出土の弥生時代末～古墳時代初頭の土器である。422は広口壺の破片で、体部はタタキ成形の可能性がある。423は有稜高壺の壺部片であるが、稜は鈍い。表面が剥離しているため、調整等は不明である。424は壺と思われる口縁部片で、器台の可能性も残す。口縁端部は凹面をなし、口縁部外面には5条の櫛描波状文を施し、波状文の隙間に竹管文を上下に互い違いに施す。器表磨滅のため調整等は不明である。

・包含層出土土器

425の弥生土器と426の須恵器壺蓋各1点を報告する。425はタタキ成形の甕と思われる底部で、外

面底面は若干ドーナツ状になっている。外面に黒斑が認められる。426は口縁端部に面をもち、天井部と口縁部の境の稜は鋭い。天井部外面の回転ヘラケズリ範囲は天井部端の稜線付近にまでおよぶ。回転方向は左である。MT 15型式かTK 10型式と判断され、6世紀前半～中頃である。

【参考文献】

- 岸本一宏 1990 「いわゆる「祭文」についての覚書」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 近藤 玲・谷川真基 編 2006 『矢野遺跡（III）（弥生・古代篇）』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 徳島県教育委員会・（財）徳島県埋蔵文化財センター・国土交通省 四国地方整備局
- 高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告 第5号 大手前大学史学研究所
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』4 九州歴史資料館

3 中世の土器

各調査区から出土した中世土器について、以下に上げる。

確認調査（図版68、写真図版81）

- ・T67 出土土器 嶋4・5区間に設定したT67から出土した。3は須恵器碗である。底部にロクロ右回転の糸切り離しを施し、平坦な底部を造り出している。底部・体部の境は内面では丸みを帯びる。体部・口縁部は心持ち内湾気味に立ちあがり、口縁部は端反り、端部は丸く玉縁状である。体部にはロクロ目が顕著である。器壁を薄く作る。

西嶋1区（図版68、写真図版82）

- ・機械掘削及び排土出土土器 9は土師器鍋口縁部である。筒型の直立する体部・口縁部に、水平に伸びる四角い鍔が伴う。口縁端部は角頭で、上端に面をもつ。形状は兵庫津編年羽釜形タイプA系列I類に近い。13世紀後半頃と考えられる。

10は土師器鍋である。排土より出土した。口縁部は内傾し、端部は外傾して丸く紡錘形に肥厚する。端部直下に短い三角形の鍔が付く。外面体部には平行のタタキ目を施す。兵庫津編年羽釜形タイプ播磨型B系列I B類に相当する。15世紀中頃と考えられる。

11は須恵器小皿である。底部は厚く、外面は心持ち突出し、右回りの回転糸切りを施す。口縁部は外方に立ち上がり、底部との境に弱い稜を持つ。口縁端部は丸くおさめる。全体に厚手の造りである。

西嶋2区（図版70、写真図版86・88）

- ・包含層（上層）出土土器 64を除いて、56～66までの出土土器は包含層（上層）から出土している。56は土師器鍋である。口縁部が頸部から直立し、端部は屈曲して水平に伸びる。最大腹径は体部中位にある。外面にはタタキ目整形痕、煤が付着する。内面は刷毛目後ナデ調整を施す。兵庫津編年甕形タイプIV類に相当する。薄く、硬質に焼成され、無釉陶器に近い製品である。時期は15世紀前半から中頃である。

57は土師器托状製品の底部である。底部外面に回転糸切りを施す。やや内側にすぼまる形状の筒型を呈し、外側から内面に向かって内面で15mm、外面で9mmの楕円形の穿孔を施す。

58は突出した平高台をもつ須恵器ロクロ目椀である。体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は心持外反する。底部は右回転の糸切離しを施す。高台側面の調整は不充分である。見込みは緩やかに段を有して窪む。体部は内外面ともにロクロ目が顕著である。西脇市金城池1号窯採集品に類例がある。東播北部古窯址群の2段階後半（11世紀後半～12世紀前半）の時期が考えられる。

59は須恵器小皿である。底部は心持ち突出し、右回りの回転糸切り話を施す。口縁部は外方に開き、口縁端部は丸くおさめる。底部と口縁部の境は強めのロクロナデによって若干凹む。口縁端部には重ね焼き痕が認められる。器壁が薄い造りである。

60は須恵器小皿である。59に比べ、器壁が厚い製品である。底部は平底、右回りの回転糸切り話を施す。口縁部は内湾気味に外方に立ち上がり、端部は肥厚し丸くおさめる。外面底部と口縁部の境は強めのロクロナデによって若干へこむ。内面は、底部から口縁端部にかけて所々乱方向のナデを施す。

61・62は須恵器体部外面に墨書が施されている。

61は須恵器ロクロ目椀の体部片である。外面に、墨書が右から左へ横向きに書かれている。釈読は不明であるが、二文字もしくは一文字の一部と考えられる。

62は須恵器椀体部下半の破片である墨痕が確認できるが文字・記号の判断を含め、判読不明である。

63は須恵器甕体部片である。外面には＊形のタタキを施し、内面の当て具痕はナデ消している。

64は機械掘削により出土した。63の接合片と共に出土していることから、この項で記述する。丹波焼甕口縁部である。頸部においてくの字に屈曲し、短い口縁部は水平に伸びる。口縁部は紡錘形であり、上面が浅く窪む。長谷川編年IV期甕Bに相当する。西暦1330年～1400年頃の時期が考えられる。

65は丹波焼甕口縁部である。頸部において大きく屈曲し、短い口縁端部外側に面を持ち上端内側が浅く窪む。長谷川編年III期に相当する。西暦1270年～1330年頃の時期が考えられる。

66は白磁玉縁口縁碗である。底部を欠く。外面の残存する部分は露胎である。内面見込み部分に沈線が巡る。内外面共にほぼ全面が施釉されているが、ロクロ削りに伴う粘土くずが付着したまま施釉され、内面には釉だれが顕著である。外面にはピンホールが目立つ粗製品である。太宰府編年IV 1a類に分類され、11世紀後半～12世紀後半の時期が考えられる。

西嶋3区（図版71、写真図版91・92）

・NR01出土土器 87・88、90～92を上げた。

87・88、後述する92はNR01南西部・肩付近の攪乱層から出土している。

87はロクロ土師器小皿である。右回りの回転ヘラ切離しを施し、底部は若干突出する平高台である。底部に斜めに立ち上がり心持ち外反する口縁部が付く。端部は丸くおさめる。見込みは平坦である。内面及び外面口縁部はロクロナデを施す。

88はロクロ土師器小皿である。底部は右回転のヘラ切り後の調整は不充分で、切り離し時の粘土が付着する。また板状工具痕（板目状圧痕）が見受けられる。底部と体部の境は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反し水平に拡張される。端部は尖る。底部内面には仕上げナデを施す。

90・91はNR01北西部からの出土である。

90は須恵器捏鉢である。口縁部を欠く。底部外面は回転糸切り離し、未調整。底部内面はやや盛り

上がり、一方向の仕上げナデを施す。体部はロクロナデを施し、心持ち内湾する。

91は施釉陶器鉢の底部・体部下半片である。太い高台を持つ。底部外面はロクロ削りを施す。施釉は外面に施され、内面は一部赤色に変色している。近世もしくは近代の陶器と考えられる。

92は不明土師器である。口縁部はくの字に屈曲して外方へ伸びる。体部は平板で、器形が円形ではなく方形であったと考えられる。外面体部は平行タタキ後ナデを施す。炬燵・角火鉢など火器類の一部の可能性がある。

・T98 出土土器 89は西嶋3区（南）に設定したT98から出土した須恵器小皿である。口縁部が外方に立ち上がり、端部はやや肥厚し、丸くおさめている。器高は低い。底部は平底で、ほとんど突出しない。底部外面は右回転の糸切りが施されている。重ね焼き痕が口縁部に認められる。

・包含層等出土土器 98は包含層から出土した。突出した平高台をもち、須恵器ロクロ目椀の底部と考えられる。底部外面は回転糸切り、未調整。側面はロクロナデを施す。底部内面は比較的緩やかな段をもって深めに窪む。内面中央はユビオサエ痕が顕著である。段の形状から東播北部古窯址群の2段階後半（11世紀後半～12世紀前半）の時期が考えられる。

西嶋4W区（図版73・74、写真図版96・98～100）

・SP82 出土土器 142はSP82の掘方から出土した須恵器椀である。底部周辺を欠く。体部下半かやや丸みを帯び、外方へ立ち上がる。口縁端部は紡錘形となり、端部は丸くおさめる。端部には重ね焼き痕がある。

・SX267 出土土器 157はSX267から出土した土師器高台付き椀もしくは鉢の下半である。丸みを帯びた底部に、直立する高い高台が付く。見込みは緩やかに窪み、体部と底部の境は明瞭ではない。底部外面はヘラ切り未調整、高台はヨコナデもしくはロクロナデ。その他の内外面共に摩滅が激しく、調整は詳らかではない。

・SP21 上面出土土器 164は須恵器椀もしくは皿の口縁部である。大きく外方に開く。口縁端部は丸くおさめる。薄い造りの製品である。

・SK212 出土土器 165は須恵器椀である。底部は平高台、まったく突出しない。体部との境は丸みを帯び、外方へ立ち上がる。口縁端部は紡錘形となり、端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切りもしくは回転糸切り後ナデ。体部下半は調整が不十分で、石粒・凹凸が目立つ。ロクロナデの後ユビオサエ整形・ナデ調整を行っている。口縁部は内外面ともロクロナデ、端部は強いロクロナデを施す。内面底部はロクロナデ、体部はロクロナデ後ユビオサエ整形・ナデ調整を施す。ロクロナデによる石粒の軌跡が顕著に認められる。

・SD203 出土土器 166は須恵器椀である。高台部分を欠く。造りが薄い製品。口縁部がロクロナデにより若干外反気味、端部は丸くおさめる。内面に自然釉がまばらに付着している。一部沈線が認められる。西脇市平野東1号窯の沈線椀 東播北部古窯址群の椀c類 11世紀前半代の製品と考えられる。

・SD222 出土土器 167は青磁皿である。底部の殆どを欠く。形態から太宰府編年 同安窯系青磁皿I-1b類に分類され、12世紀中頃～12世紀後半の時期が考えられる。

・SP81 出土土器 168は須恵器椀である。底部は平高台、高台部は極僅かに突出する。底部と体部との境は丸みを帯び、大きく外方へ開く。口縁端部は肥厚し、端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りと考えられる。体部内面には補修があり、その部分を乱方向にナデしている。口縁端部には重ね焼き痕がある。

・包含層等出土土器 170～177 を上げた。

170 は遺構面までの掘削時に出土した。白磁玉縁口縁碗である。底部を欠く。口縁部の玉縁は断面に折り曲げた痕跡が顕著である。内外面共に全面が施釉されているが、外面にはロクロ削り痕が認められる。また、小さな虫喰いが認められる。太宰府編年IV類に分類され、11世紀後半～12世紀後半の時期が考えられる。

171 は遺構検出作業時に出土した。須恵器碗である。底部を欠く。体部が外方へ開き、口縁部が外反する。口縁端部内側が肥厚する。端部には重ね焼き痕がある。口縁部・体部の境に弱い稜を生じている。

172 は北東部最下層から出土した須恵器碗底部である。底部は体部に比べ小径で、回転糸切りを施し、突出する。側面は未調整。底部内面は段をもって窪む。東播北部古窯址群の碗 c II類 11世紀～12世紀前半の製品と考えられる。

173 は器高の低い須恵器小皿である。右回りの回転糸切離しを施し、平底の底部に斜めに立ち上がる口縁部が付く。端部は丸くおさめる。西脇市平野東窯の攪乱出土例に類例がある。12世紀後半の時期が考えられる。

174 は須恵器捏鉢である。下層面より出土した。口縁端部は下端が外側に拡張し断面三角形となり外側面が外傾する。東播系須恵器捏鉢III-3類（新概説 中世の土器・陶磁器）にあたる。14世紀前半の時期が考えられる。

175 は最下層掘削時に出土した。須恵器甕口縁部である。内外面に薄く灰を被る。大きく外反し、口縁端部の外側面が心持垂下し外傾する面をもつ。

176 は遺構面までの掘削時に出土した。土師器甕上半部である。卵形の体部にくの字に屈曲した短い口縁部が付く。端部は丸くおさめる。体部外面には粗いタテハケ及びユビオサエ、内面にはナデ及びユビオサエ調整を施す。

177 は土師器鍋である。東壁トレンチの南半部より出土した。筒型の体部に外反する短い口縁部が付く。端部は内側に向け肥厚する。口縁端部下には水平に張り出す三角形の短い鍔をもつ。鍔接合部の内面には段が認められる。兵庫津編年羽釜形タイプ播磨型B系列I B類に属す。15世紀中頃と考えられる。

・SD118 出土土器 178～183 を上げた。何れも中世末～近世・近代の陶磁器である。

178 は無釉陶器 丹波焼の擂鉢である。平底の底部から斜め外方に体部・口縁部が間直ぐ立ち上がり口縁端部下はロクロナデによって外側に弱い稜をもつ。体部には指押さえ痕、内面にはヘラ描きの擂り目を施す。15世紀末～16世紀前半の製品と考えられる。

179 は外面体部・口縁部～口縁部内面に鉄釉が掛かる擂鉢である。底部はやや上げ底気味の形状、口縁部は端部が水平に拡張する。近代以降の丹波焼擂鉢と考えられる。類例は塚口城跡発掘調査において出土している。

180 は丹波焼甕である。底部を欠く。筒型の胴部に端部が水平に拡張する口縁部をもつ。全体に赤土部を施し、外面には、鉄釉を『ひしやく掛け』している。口縁部下には3条の沈線、2条の波状文がある。

181 は丹波焼甕である。体部下半底部を欠く。筒型の胴部に、内湾する頸部、端部が水平に拡張する口縁部をもつ。180 と同じく全体に赤土部を施し、外面には、鉄釉を『ひしやく掛け』している。口縁部下には4条の凹線を施す。

182 は無釉陶器皿である。碁笥底に、内湾して立ち上がる薄い口縁部をもつ。底部外面にはロクロケズリが顕著である。近世～近代の製品である。

183 は色絵染付磁器小碗である。口縁端部が若干外反する。口縁端部には口紅、外面口縁部と体部・底部に赤絵の円圏（圏線）を描き、圏線の間に草花文を描く。一部、外面の器面を削り、釉を落とし文字様の墨書が描かれている。

西嶋4E区（図版75・76、写真図版104～106）

- ・SX01 出土土器 209・210・211の3点をあげた。

209 は土師器高台壺である。口縁部は外方へ開き気味、ロクロによる凹みが巡る。体部下半がやや丸みを帯びる壺部にハの字に踏ん張る高台が付く。高台の畳付き部分は欠失している。

210 は土師器甕上半部である。卵形の体部にくの字に屈曲した短い口縁部が付く。口縁部は内湾気味となり、端部は外傾する面をもつ。体部外面には粗いタテハケ、内面にはナデ及びユビオサエ調整を施す。

211 は土師器の把手である。卵形の平面形で上方に反る状態で体部に接合される。

- ・SB02 出土土器 212 はP56から出土した手づくね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形後、口縁部はヨコナデ、底部内外面ともナデ調整。口縁部は短く内湾し、端部は丸くおさめる。

213 は須恵器椀底部である。突出のない平底から体部との境はなく、丸みを帶びて外方へ立ち上がる。見込みに浅い凹みをもつ。底部外面は回転糸切りのちナデ、内面見込みには仕上げナデ、体部内外面はロクロナデ後斜め方向のナデを施す。

- ・SB03 出土土器 214 はP19から出土した手づくね成形の土師器小皿である。全体の形は橢円～隅丸方形に近い。底部は緩やかな丸底で、内面中央が窪む。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。底部外面には粘土紐巻き上げ痕が残り、ユビオサエ整形後ナデ、口縁部はヨコナデ調整。215 はP30から出土した手づくね成形の土師器小皿である。浅い丸底の底部から内湾して口縁部が立ち上がる。全体に厚い器壁をもつ。ユビオサエ整形のちナデ、内面にユビオサエ痕が若干認められる。

・SB05 出土土器 216 は須恵器小皿である。右回りの回転糸切りによる平底の底部。底部と体部の間に稜を持つ。口縁部は短く直立し、外側に面をもつ。端部は丸くおさめる。底部外面にはヘラによる刻線が認められる。曾我井野入遺跡・曾我井沢田遺跡に類例が認められる。

217 はP67から出土した。須恵器捏鉢口縁部である。口縁端部は断面三角形、外側に面をもつ。内側は若干丸みをもつ。口縁部に重ね焼き痕がある。（新）概説 中世の土器・陶磁器のIII-1類、12世紀代に相当する。

- ・SK28 出土土器 218 は須恵器椀である。底部は平底、体部との境は丸みをもち、体部はやや内湾気味に外方へ開き、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部内面はロクロナデ後、ユビオサエを施し、凹みを作り出す。乱方向のナデを施す。外面中位は右回転のロクロナデによって凹みを見せる。全体に粗い仕上がりの製品である。蒲江木谷1号窯採集遺物に類形がある。13世紀代の製品と考えられる。

- ・SD02 出土土器 219～222を図示した。

219 はSD02の延長の中ほどから出土した土師器甕上半部である。卵形の体部に大きく外反した短い口縁部が付く口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケもしくは横方向の板ナデを施す。口縁端部は摘み上げ、外側に面をもつ。体部外面には粗いタテハケ及びユビオサエ、内面にはナデ及びユビオサエ調整を施す。全体に粘土紐巻き上げ成形の処理が甘く、角張っている。

220 はSD02の延長の南半から出土した厚手の土師器甕口縁部である。頸部から一端外反し、内湾する。口縁端部は摘み上げられ、外側に外傾する面をもつ。口縁部外面にはナデ、頸部付近はタテハケ。口縁

部内面はヨコハケ後ヨコナデ。頸部にはナデを施す。

221 は SD02 の延長の中ほどから出土した須恵器碗である。底部を欠く。体部下半は丸みを帯び、口縁端部は心持ち外反し端部は丸くおさめ、内側は肥厚、浅い段が付く。西脇市平野東窯 2 号窯～3 号窯に相当すると考えられる。11 世紀後半～12 世紀前半の時期が考えられる。

222 は SD02 の延長の中ほどから出土した龍泉窯系青磁無文碗である。薄い器厚、体部は外方に開き、口縁端部は外反する。福田片岡遺跡分類の A II 類に相当する。

・**SD04 出土土器** 223 を図示した。口縁部から鍔部分が残る土師器鍋である。口縁部は内傾し、上面に平坦な面を持つ。外側面には 3 条の凹線が巡る。口縁部下には水平に鍔が巡り、端部は紡錘状を呈している。鍔より下にはタテハケが施されている。内面口縁部上半はヨコナデ、下半は横方向の板ナデを施す。形状から、兵庫津編年羽釜形タイプ B 系列 III A 類、15 世紀後半から 16 世紀初頭の製品と考えられる。

・**P12 出土土器** 225 は須恵器皿もしくは碗である。口径と底径がほぼ 2 : 1 、器高は口径の約 1/4 を測る。扁平な器形である。突出のない平底から体部との境はなく、丸みを帶びて外方へ立ち上がる。体部は心持ち内湾気味となり、口縁端部は肥厚する。底部内面は平坦で、中央の凹みは殆ど認められない。底部外面は回転糸切り離し、調整は不充分で、粘土クズが付着する。体部は内外面共にロクロ目が顕著である。

・**P35 出土土器** 226 は龍泉窯系青磁劃花文碗である。畳付き部分は磨かれ、高台裏は釉を搔きとっている。外面体部下半はロクロ目が顕著、上半には丁寧なヘラ削りを施す。内面は、見込みに草花文、体部は 5 分割され、飛雲文が認められる。口縁部を欠き、輪花の有無などは不明である。大宰府編年龍泉窯系青磁碗 I - 4 類 12 世紀中頃～後半と考えられる。

・**NR01 出土土器** 230 は須恵器小皿である。右回転の糸切りを施した平底の底部に外方に開いた短い口縁部が付く。端部は玉縁になる。

231 は須恵器碗である。平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は若干外反し、端部は紡錘形になる。右回りの回転糸切りによる平高台の底部は、殆ど高さを持たず、見込みの凹みは緩やかな段となっている。口縁端部の内側にはロクロナデによる沈線を生じている。蒲江大谷 1 号窯採集品に類例がある。

232 は須恵器碗である。平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し丸くおさめる。右回りの回転糸切りによる平高台の底部は殆ど高さを持たず、内面の底部・体部の境は丸みを帯びる。蒲江大谷 2 号窯採集品に類例がある。13 世紀代と考えられる。

西嶋 6 区 (図版 76、写真図版 107・108)

241 は須恵器小皿である。底部は突出しない平底である。右回転の糸切りを施す。口縁部は外方に開き、端部は肥厚する。底部と口縁部の境にはヨコナデによって弱い奥部を持つ。口縁端部には重ね焼き痕が認められる。

242 は須恵器小皿である。底部にロクロ左回転の糸切り離しを施すが、底部内面は中央が薄らと盛り上がりを見せる。口縁部は外方に立ち上がり端部は肥厚する。

243 ～ 245 は墨書土器である。

243 は墨書土器、須恵器碗である。底部を欠く。底部・体部の境は丸く、体部下半は内湾し、上半から口縁部は緩やかに外反し端部は肥厚している。外面体部に墨書『口』を記す。釈読は不明である。

244 は西嶋 6 区北西部から出土した墨書土器、須恵器碗である。底部を欠く。体部から口縁部は外方

に開き、端部は心持ち端反りする。外面下端には墨書『口』を記す。釈読は不明である。

245は墨書土器、須恵器椀である。底部を欠く。体部下半は内湾し、上半から口縁部は緩やかに外反し肥厚している。外面体部に墨書『口』を記す。釈読は不明である。

246は無釉陶器鍋である。焼成時のひずみが激しい。口縁部は大きく外方に開いているが、口縁部は逆L字に端部を折り曲げ外方に屈曲する。体部には平行タタキ目を施す。兵庫津編年甕形タイプI類の無釉陶器鍋と考えられる。

247は機械掘削時に出土した、龍泉窯系青磁碗である。体部は丸みを帯び、口縁部は外反して外方に伸びる。全体に貫入が著しく、口縁端部の釉は剥離している。

248は瓦質土器三足脚香炉である。底部・脚を欠く。筒型の体部、口縁部は丸くおさめる。内外面はヘラミガキ調整。外面には2条の沈線の間に菊花のスタンプを施す。

嶋1区（図版77、写真図版109）

- ・SR01溜まり状遺構出土土器 258は土師器托である。しっかりと輪高台に外方に直ぐ開く受け部が付く。内面見込みが窪む。

嶋2区（図版83、写真図版123・124）

- ・SR01-b出土土器 386はSR01-b周辺の人力掘削時に出土した須恵器小皿である。口縁部は若干外反し端部は肥厚し丸くおさめる。右回転糸切りを施す。内面見込みが平滑に調整されている。平野3号窯に類品がある。

387はSR01-bから出土した須恵器ロクロ目椀である。突出した平高台にロクロ目が顕著な体部、外反する口縁部が付く。見込みは比較的緩やかな段をもって窪む。津万遺跡群1及び西脇市窯跡調査集報金城池1号窯採集品に類例がある。東播北部古窯址群の椀C I 2類 ロクロ目椀、10世紀第4四半世紀の時期と考えられる。

388はSR01-bから出土した須恵器椀である。口縁部を欠く。突出した平高台に外方へ開く体部が付く。見込みは窪まない。

- ・包含層等出土土器 399は包含層面までの機械掘削土中から出土した。手づくね成形の土師器皿である。深さを持つ。底部はユビナデとユビオサエ整形、口縁部は内外面共にユビオサエ成形・整形を行い、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。口縁部端部は心持ち外反し、丸くおさめる。

400は嶋2区南半の検出面から出土した。底部は平底、右回りの回転糸切りを施す。口縁部との境にロクロナデを行い心持ち突出する。口縁部は内湾気味に外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。

嶋3区（図版84、写真図版127）

- ・SR01出土土器 417は須恵器突帶椀である。口縁端部を欠く。高台は円盤の台に、外方に開いた細い輪高台を貼付している。体部中位に小さな断面三角形の突帶を巡らせており、全体に焼成が甘い。

418は口縁端部を拡張し摘み上げ上面に溝をもつ白磁皿もしくは浅形碗である。底部を欠く。内外面に釉が掛かり底部内面に浅い稜が巡る。

島 4 区 (図版 85、写真図版 127)

・**包含層出土土器** 427 は東半の礫混じり層（整地層）から出土した。須恵器椀である。口縁部を欠く。突出する平高台に丸みを帯びた体部が付く。高台の側面は未調整、見込みは比較的緩やかな段をもつて窪む。西脇市窯跡調査集報 椥 c（見込み分類 B）11世紀代と考えられる。

【参考文献】

全国シンポジウム 2005.9 『中世窯業の諸相』 資料集

太宰府市教育委員会 2002.3 『太宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財 第49集

西脇市教育委員会 2005.3 『西脇市窯跡調査集報』

日本中世土器研究会 2015.12 『中近世土器の基礎研究 26 東播系須恵器 - 編年と分布から考える-』

兵庫県教育委員会 2004.3 『兵庫津遺跡 II 浜崎・七宮地区の調査』 第270冊

兵庫県教育委員会 2006.3 『板場町遺跡』 第294冊

4 石器 (図版 86・87 写真図版 128・129)

S1～S7 はサヌカイト製の打製石器であり、肉眼観察ではあるが S2 が二上山産のサヌカイトであるほかは香川県産と考えられるサヌカイトを使用している。

S1 は有茎尖頭器である。先端部はわずかに欠損するが全長 7.95cm と大ぶりで重量は 17.0g を測る。身部側縁は下半が内湾し上半部で膨らみ気味となり、緩やかな S 字状のカーブを描く。身部の横断面形はレンズ状を呈し、両側縁ともに鋭く尖る。全面に調整剥離が及び、素材面をとどめない。身部の調整剥離は、正面中央の左側縁からの剥離が階段状となりわずかに瘤状に残される以外は良好になされ、側縁は細かい調整で成形されるかえしは鋭角をなすが先端は丸みを帯び、茎部の根元にかけて脛挟り状となる。茎部は根元で折損しており、根元は幅広い。

S2・S3 は打製石鎌である。S2 は上下端をわずかに欠損するが長身の凸基式の形態をしており、特に背面側は中央に稜をなすことから横断面形は菱形に近い形状となる。

S3 は両側縁を調整剥離する工程の製作途中品であるが、現段階では平面形が二等辺三角形状を呈する凸基式の形態をしている。

S4・S5 は打製石錐である。S4 は下端に回転痕を留める。S5 は凸基式の打製石鎌を再利用している。

S6 は打製石庖丁である。背部を弧状に、刃部を直線状に成形し、背部は両面の境界となる稜線上を潰して掌にフィットさせる。背面側から見て左側端部（図下端）に自然面を留め直線的な端部を形成するのに対し、右側端部を背部からのカーブを収束させつつやや尖り気味に成形する。両面の刃部付近と背面側は左端側が、腹面側は左右両端側が顕著に摩耗している（図網掛け範囲）。

S7 は楔形石器で、図正面（背面側）の左端と下端に自然面を留め上下両端に微細な階段状剥離が認められる。右端は剪断面となるがさらに剥離が及ぶ。

S8 は頁岩を用いた搔器であろうか。ただし剥離が粗いことから石核の可能性の余地も残る。

S9 は剥片で、S9 はサヌカイトを用い、風化が著しく灰白色を呈する。

S10 は黒灰色を呈するチャートを用いた台形石器である。刃部の一部をわずかに欠損する。基部の両側縁に微細な加工を施す。

S11 は砂岩を用いた伐採石斧で、最大厚付近で破損する。折損した破断面に敲打痕が認められ敲打具

に転用されている。ただし、正面と側縁にもあばた状の敲打痕跡が観察されるが、成形時の敲打痕跡が研磨工程を経てもなお残存しているものが主体を占めると観察される。弧を描く幅の狭い刃部の中央を打撃により剥離する。身幅の狭い割には厚みがあり、側縁が丁寧に研磨されることから、横断面形は精美な橍円形を呈する。重量は 468.4 g を測り、ずっしりとしている。

S12 は安山岩質の石材の棒状の礫で、先端にわずかに潰れ状の痕跡を留める。重量は 262.2 g を測る。

S13 は 659.3 g と重量に富むが、敲打によるあばた状の凹みや潰れをさほど顕著にはとどめず、部分的に平坦に磨れる箇所が観察されることから磨石と判断される。石材は風化した緑色岩であろうか。

S14 は凝灰質細粒砂岩を用いた砥石で、上下両端を欠損するが少なくとも 4 面の砥面を形成する。図正面と右側面がよく使用されており、目の非常に細かい擦過痕が観察され、図正面は著しい凹面となる。

S15・16 は珪質頁岩の薄い石材で、砥面は認められないものの本来砥石であった一部かまたはこれから砥石として利用されるものであった可能性が想定される。

S17 は西嶋 4 W 区 SP82 の礎板石で、凝灰質細粒砂岩の砥石ないし台石として利用されたものを転用している。写真正面の平坦面には少数の粗い擦過痕のほかは極めて目の細かい擦過痕が多数観察される。平坦面は片側端部（写真右端）でわずかに反り上がるほかは凹凸の少ない平滑な面を形成する。一方で側面にも研磨が及ぶものの細かい凹凸が研ぎきれずに残存し、正面の平坦面のようには平滑に研ぎ出されていない。裏面は剥離した面を残すが写真右端付近にはわずかに研磨が及ぶ。

S18 は西嶋 4 W 区 SP171 の礎板石で、角閃石安山岩を用いた台石を転用している。写真正面側の平坦面に石材に当初からあった段差の付近に浅いくぼみが 4 箇所程度観察される。写真裏面側の平坦面にも直径 3 cm 程度のごく浅いくぼみが数箇所観察され、周縁にかけて被熱し変色している。

5 金属器

1. 西嶋地区（図版 87、写真図版 130）

M1 は、西嶋 1 区の近代溝から出土した銅製品である。幅 3.3 cm、厚さ 0.15 cm の薄い板状を呈しており、一部に緑青を生じている。下端は両側縁に対して直角ではない。上端は反るよう曲がり、破損している。両側縁、下辺とも縁辺はやや斜めに切断あるいは加工され、縁周辺がわずかに湾曲している。直径 0.35 cm の 4 ヶ所の穿孔も図左面から右面側へと抜けており。飾り金具か。一部に木片と思われるものが付着するが、銅製品本体の軸方向とは異なる。

M2 は、西嶋 4 W 区南側遺構検出中に出土した鉄製紡錘車である。直径 3.5 cm の傘型を呈する円盤の中央に直径 0.4 cm の心棒を通している。軸の両端は失われている。円盤部は緩やかに開いて、縁辺部で更に下垂させており、比較的厚いため重量感がある。

M3 は、西嶋 2 区機械掘削時に出土した角釘で、頭巻き部分が残る。幅 1.0 cm、厚さ 0.7 cm の端部を叩き広げて折り曲げ、釘の頭部としている。

この他、写真のみ掲載の M6 は、西嶋 4 W 区の SP259 出土である。9.7 × 5.7 × 4.1 cm の大きさで、表面側は大きな凹部があるものの比較的平坦面が多く、5 ~ 8 mm 大の砂粒が付着している。下面側は細かい粒状の凸凹が連なり、湾曲している。完形ではないが比較的大型の椀形鉄滓であろう。磁性の反応はなかった。SP259 は奈良時代後半～平安時代初期の溝が埋まったのちに掘削されていることから、中世に属するものと考えられている。

M7 は、西嶋 4 W 区遺構検出中に出土したスラグである。5.2 × 2.55 × 1.75 cm の大きさで、2 ~ 3 mm

大の砂粒が見られる。下面是細かい孔状の凸凹が多い。上面は磁性を有している。

西嶋2区からは機械掘削時にもスラグ小片が数点出土し、同じく西嶋2区からは鞴羽口も出土しているが、図化等には至っていない。

2. 嶋地区（図版87、写真図版130・131）

M4は、嶋2区SR01最上部黒褐色シルト層上部出土の鉄製のU字形鋤・鍬先である。長さ14.95cm、幅12.7cm。装着する風呂部の内法長（風呂長）11.0cm、風呂部内法幅（風呂幅）10.5cm、刃部先端長4.8cmを測る。根元がやや開いている。風呂部内側のV字溝は均等に開いてはおらず、表裏に偏って一方が大きく開く。その位置関係は表裏左右で対称的となる。中央近くでは1.3mm近く開く部分もある。刃は風呂部の位置から先にのみ付けられている。他の例からみると、大きさの比率からやや大きい部類のU字形鋤・鍬先の範疇に入るが、中世以降の風呂鋤・鍬先の可能性が残る。むしろ出土層位からは比較的新しい可能性のほうが高い。

M5は、嶋3区SH01中央土坑から出土した鉄製品である。上半部を失っているが、下半は断面を見ると両側縁に刃部を作り、下半は断面が円形を呈した茎状を成すことから、鉄鎌あるいは小型の刀子と思われる。

6 木器

西嶋1区～6区、嶋1区～4区にかけては全区域で旧河道が検出され、主に旧河道への落ち際の岸辺に近い位置から土器や木器が出土している。河道内に廃棄されたもの、あるいは、流れてきたものであろう。以下、北側の西嶋1区からはじめて、地区ごとに報告する。

1. 西嶋地区

西嶋1区（図版88・写真図版132）

W1は、西嶋1区の近代の溝から出土した下駄である。年輪界の粗い針葉樹の芯去り材を用いた一木下駄で、2枚の歯を作り出した連歯下駄である。長さ22.6cm、幅11.1cm、厚さ3.85cmを測る。鼻緒孔はあまり偏らずに穿たれているが、台の右前方部と歯の右側がより大きく摩滅していることや、右側に孔紐ずれしていることから、左用の下駄と思われる。

西嶋2区（写真図版132）

写真のみを掲載したW32・W33・W34は、西嶋2区の人力掘削の際に上層包含層から出土した。一方の端を尖らせ、もう一方の端が焼け焦げた棒状の木片で、松明などに使用された付け木であろう。

西嶋3区（図版88・写真図版132）

W2・W3は、西嶋3区の北東部にあたるトレンチT100から確認調査の際に出土した。W2は、楕円形の円盤を半裁して作られたものと思われ、一短辺と湾曲する長辺の外縁の角を削って刃を付けている。もう一方の半裁した部分の長辺は不明瞭ながらも整形している。刃部の幅は4.1cmほどである。もう一方の短辺の背はわずかに削る程度でまっすぐ作り、刃部側からは2.7cmまで幅を狭めて柄部としている。折敷底板を元にして切匙に再加工したものとも考えられる。

W3は、針葉樹を割り裂いて作られた長さ13.0cm、幅1.3cmの角柱状の端材で、下端部は削って尖らせており、松明等の付け木である。西嶋2区から、同様のものが出土している。

W4は、西嶋3区西半部のNR01上層から機械掘削時に出土した。年輪界の密な針葉樹柾目材を板状に加工しているが、残存する短辺がわずかに湾曲していることから、挽物皿を幅2.3cmの板状に再加工したものであろう。一方の長辺に加工痕が見られる。

西嶋4E区（図版89・写真図版133）

W5～W10及び写真掲載のW35・W36は、西嶋4E区NR01から出土した。W5は、7.55×4.1×1.25cmの木札様の板材で、針葉樹板柾目材を用いている。下辺は刃物の痕跡を残してやや窪んでおり、四辺ともあまり丁寧な整形は施していない。一隅に穿孔があり、孔内の片面側が二段に窪んでいることから、釘を打ち込んだ痕跡かもしれない。墨痕等は認められない。

W6は、おなじく6.65×3.75×1.75cmの木札様の板材で、年輪界の密な針葉樹を用いている。表面の下半を大きく削り、斜めに落としているが、楔としては削り残しが厚い。裏面にも刃が当たる。小口面には刃物痕は認められない。

W7は、過半を失うが、同じく厚さ0.7cmほどの木札様の針葉樹板柾目材で、裏面の長辺・短辺の角を浅く面取りし、表面は縁部を残して墨書のように黒色を呈している。箱型の容器の一部で、内面を黒く塗ったものか。黒色部分の形状は直線的ではなく、色も薄い。

W8は、針葉樹柾目材を横木取した木片で、角はすべて丸くなっている。風化或いは使用によるものと思われる。2.9×9.5×1.5cmの大きさを持つ。用途不明。

W9は、年輪界の密な針葉樹を用いた12.2×1.65×1.4cmの角棒で、小口面には上下方向の刃物痕が見られる。長辺の角は面取りを行い、丁寧な仕上げをするが、用途は不明である。墨書等はない。

W10は、年輪界の粗い針葉樹を用いた21.35×2.5×1.4cmの棒状の木製品である。両端部がやや細くなる形状を示し、長側面の角は図の上半部のみ面取りを施している。表面の下半部に横方向のあたりがある。用途不明である。

写真のみを掲載したW35は、針葉樹を割り裂いた棒状のもので、一端が焼け焦げており付け木である。同じくW36は、年輪界の密な針葉樹の不整形な角棒で、一端を失う。

この他、西嶋4W区SP23の柱痕の石の下から赤色の漆膜片が出土し、同地区のST46からは表側赤色、裏側黒色の漆の膜が検出されている。

西嶋6区（図版89・写真図版133）

W11は、西嶋6区SD01出土で、年輪界の粗い針葉樹の丸太材を加工した木錐である。両端を粗く切断した長さ16.2cm、直径5.4cmの丸太の中央部を全面から大きく削って直径2.6cmまで窪ませている。あまり丁寧なつくりではない。

2. 嶋地区

嶋1区（図版90～93・写真図版134～137）

W12～W20、W22・W23、W25・W26および写真掲載のW37～W39は、SR01から出土した。このうちW12～W20および写真掲載のW37～W39は、SR01北端の溜まり状遺構からの出土である。他にも鋭利な刃物で切断し、巻き取った状態の蔓などが出土している。

W12～W14は、白木作りの挽物皿である。いずれもよく年輪界の詰まった針葉樹柾目材で作り、年輪界で割れており、各々接合はできない。W13は樹種同定によりヒノキ材と判明している。復元直径がW12・W13は19.6cm、W14は20.5cmを測る。内法の深さは0.3～0.7cmしかない。内面及び側面には輻

轆目をよく残している。底面はあまり削っておらず、仕上げられてはいない。W12・W13の底面の中央には、木目方向に沿った長さ1cmほどの刻みが3～4ヶ所観察された。轆轤軸に取り付ける5本爪痕であろう。いずれの皿の内面には細かい不定方向の刃物傷が見られ、使用痕或いは再利用痕と思われる。W14は、挽物皿の中央部に刀子様の刃物を用いた直径2.5cmほどの穿孔が見られるが、穿孔の細工が粗いことから二次利用の際のものと思われる。

W15は、挽物と同じ柾目材を用いているが、縁辺を薄く作る曲物底板である。一面では縁辺を残して黒化しており、柿渋などの塗布の可能性がある。使用痕であるならこちら側が内面にあたる。直径20.7cm強の円盤である。

W16・W17は、円形の曲物底板で、針葉樹の板目材を使用する。側板が乗る位置に細い罫書き線を巡らせており、W16では樺皮紐が上下に抜けて残る。W17では樹種同定によりヒノキ材が用いられたことが判明している。

W18は、曲物側板で、高さは7.2cm残る。ヒノキの板目材の内面に縦方向平行に細かく刃物を入れ、曲げに備えている。同じく曲物側板で、写真に示したW38では縦横方向に刃物を入れている。また、一方の角には斜めに刃物を入れている。この加工が見られないW37には樺皮紐綴じが残存している。3段綴じであろう。

W19は、指物箱の側板と思われる。一方の小口端に凸形の枘を成形して組み合わせている。中央の上下に小円孔を穿つ。ヒノキ科の板目材を使用しており、器表面は荒れている。長さ28.5cm、幅5.5cmを測る。

W20は、針葉樹柾目材の板で、残存する平面の角の部分を斜めに落としている。13.3×4.0×0.7cm残存しており、箱物或いは折敷底板の可能性があるが、面は平滑でなく、一方の短辺は折り取られている。

W21は、SR05から出土した年輪界の密な針葉樹薄板材で、小口が湾曲することから曲物底板の可能性があるが、一部側面に当たりがあり、別用途のために幅2.35cmの板に再加工した可能性がある。

W22は、直径約1.8cm、長さ54.2cmの丸棒である。年輪界の密な針葉樹角材を加工しており、表面を丁寧に削っている。一方の端部にはあたりがある。

W23は、針葉樹柾目材を使用した棒状をなすもので、一端を失うが48.55×1.55×0.9cmの大きさを残す。長辺の角を面取りしているが、下面側は摩滅が著しい。使用によるものか、下端部はやや細くなり、先端もよく摩滅している。

W24は、嶋1区SR02-b底部となる礫層直上から出土した。年輪界の粗なヒノキの柾目材を使用しており、断面を菱形に成形している。両側辺には刃が付けられているが、部分的に摩滅して丸くなる。摩滅部位は両側辺で対応しない。上端部は甘く納めているが、下端部は一方の側辺があたりで壅み、もう一方は2回以上削って細くしている。紡織具の織機の緯打具か。47.7×3.4×1.8cmの大きさを残す。

W25・W26は、嶋1区SR01南半部上層から出土した。同一個体の可能性があるが、接合できない。年輪界の密な針葉樹柾目材（W25は樹種同定によりヒノキと判明）を使用しており、断面を菱形に成形している。両側辺には刃が付けられている。W25の残存する端部には4.6cmの長さで断面方形の枘を作り出している。枘の先端は丁寧に面取りを施しており、基部付け根の少し上の側面にあたりがある。幅4.4cm、厚さ1.5cmを測る。W26の一方の側面の刃は丸くなるため、幅は3.25cm、厚さ1.35cmとなる。神戸市新方遺跡や滋賀県入江内湖遺跡・鴨田遺跡などに類例がある。

W27は、嶋1区SR05の検出北端の立ち上がり付近の灰色粘土上半から出土している。確認調査の機

機械削時に出土したため2分割されるが、幅2.95cm、厚さ0.55cmの針葉樹板目薄板材を用いた馬形代と思われる。一方の小口端部を3方向に削って丸くし、直下の下側辺に両方向からやや角度を変えて切り欠きを施して、馬の頭部を表現している。他方の小口端部はまっすぐに切り落とし、上側辺から斜めに切り欠いて幅を狭めている。端部の角には面取りを施している。頭部の後方の上半部表面は割り込み状に裂けており、別部材の脚を差し込んだ可能性があるが、後脚部の切れ目は存在しない。

W28は、針葉樹の細い角棒端材で、一端部を二股に割り裂いている。もう一方の端部は三方向を斜めに削って尖らせており、その部分はよく摩滅している。斎串であろう。21.55×0.8×0.9cmを残す。

W29は、嶋1区の包含層より出土した。針葉樹の角棒端材で、一端は焼け焦げており、付け木として使用されている。もう一端を削って尖らせていることから、松明に用いられたものと思われる。長さ28.5cmと他のものより大きい。

写真のみ掲載のW39も付け木で、針葉樹端材の一方の端が焼け焦げている。

嶋2区（図版93・写真図版137）

W30は、SR01検出上面付近の包含層や掘削中に出土した。上端が焼け焦げ、下端は尖っており、所謂付け木である。長さは13.95cm、幅は1.35cmの大きさである。針葉樹端材を割り裂いて用いている。

写真掲載のW40は、嶋2区SR01北部最深部の、W41はSR01最下層の暗灰色粗砂混りシルトから出土した付け木で、針葉樹の一方の端が焼け焦げている。W42はSR01南東部最下層の粗砂から出土した桃核である。

W31は、SR01北部の確認調査時（T80）に古式土師器が含まれる灰色粘土から出土した。嶋2区北東部にあたる。針葉樹を用いた幅4.4cm、厚さ1.5cmの板材で、両端部を失うが、中央には3.0×2.2cmの楕円形の穿孔があり、一端部にも同様の穿孔があるようだ。器表面はあまり平滑ではなく穿孔も粗い。建築部材であろうか。

【参考文献】

奈良国立文化財研究所 1985.3「木器集成図録 近畿古代篇」奈良国立文化財研究所 史料第27冊

奈良国立文化財研究所 1993.3「木器集成図録 近畿原始篇」奈良国立文化財研究所 史料第36冊

兵庫県教育委員会 1992.3「明石城武家屋敷跡」兵庫県文化財調査報告第109冊

第2表 出土遺物觀察表

土器

報告番号	図版番号	鎮藏番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
1	68	81	土師器	壺	(21.9)	(7.35)	-		1/3	-		T76		調査区範囲外
2	68	81	土師器	土錐	長(4.5)	幅1.4	厚1.4		-	-	一部欠損?	T69		調査区範囲外
3	68	81	須恵器	椀	(15.6)	4.95	5.5		1/3	完存		T67		調査区範囲外 ロクロ目を描出
4	68	82	須恵器	壺A or 皿	(14.8)	2.75	(12.1)		1/4弱	1/4弱		西嶋1区	SD02	8世紀中頃～後半
5	68	82	土師器	壺	(13.7)	3.6	(8.4)		1/8	1/3		西嶋1区	SD02	8世紀中頃～後半か
6	68	82	須恵器	蓋	(17.8)	2.7	つまみ径2.85		1/8	-	天井部1/2 つまみ部 完存	西嶋1区	SD02	8世紀後半～9世紀か
7	68	82	綠釉陶器	小皿	(10.0)	(1.7)	-		小片	-		西嶋1区	SD02	篠窯産 10世紀代か
8	-	82	弥生土器	器台(口縁部)	-	-	-		小片	-		西嶋1区	SD02	庄内頃
9	68	82	土師器	鍋	(25.3)	(5.7)	鍔径(31.8)		小片	-		西嶋1区		兵庫津羽釜タイプ A系列I類に近いか
10	68	82	土師器	鍋	(21.2)	(5.95)	-		1/9	-		西嶋1区	排土	兵庫津羽釜タイプ B系列IB類
11	68	82	須恵器	小皿	(6.9)	1.25	(4.5)		1/4	1/3		西嶋1区		13世紀代
12	69	83	弥生土器	甕	(14.8)	(2.45)	-		1/8	-		西嶋2区	NR01	後期前半
13	69	83	弥生土器	甕	(14.95)	(3.15)	-		1/6	-		西嶋2区	NR01	北近畿系
14	69	83	弥生土器	甕	(16.6)	(7.5)	-		若干	-	肩部3/4	西嶋2区	NR01	北近畿系
15	69	83	弥生土器	壺	-	(15.5)	腹径(17.75)		-	-	体部1/2弱残	西嶋2区	NR01	
16	69	83	弥生土器	甕	-	(9.65)	4.55		-	完存		西嶋2区	NR01	
17	69	83	弥生土器	壺or甕(底部)	-	(6.6)	6.4		-	2/3弱		西嶋2区	NR01	
18	69	83	弥生土器	器台	(25.15)	(5.0)	-		3/4	-		西嶋2区	NR01	
19	69	83	弥生土器	器台	(25.0)	(4.1)	-		1/8弱	-		西嶋2区	NR01	
20	69	83	須恵器	壺	(10.7)	3.75	(7.65)		1/2弱	1/2弱		西嶋2区	NR01	7世紀前半
21	69	84	須恵器	壺	(10.8)	4.15	-		1/3	3/4		西嶋2区	NR01	7世紀
22	69	84	須恵器	壺	(9.6)	3.7	(6.3)		1/4	1/3強		西嶋2区	NR01	7世紀中頃
23	69	83	須恵器	壺	(9.85)	3.4	-		1/4	完形		西嶋2区	NR01	7世紀中頃後半
24	69	84	須恵器	壺	(9.8)	(3.9)	(4.0)		1/3	若干		西嶋2区	NR01	7世紀後半か
25	69	84	須恵器	壺	(8.7)	4.15	5.3		1/2	完存		西嶋2区	NR01	7世紀中頃～後半
26	69	84	須恵器	高壺	-	(5.5)	9.5		-	1/4		西嶋2区	NR01	7世紀中頃
27	69	84	須恵器	甕	(14.7)	(5.6)	-		1/4	-		西嶋2区	NR01	MT21型式期(8世紀初)
28	69	85	土師器	甕	(20.7)	(7.0)	-		1/8	-		西嶋2区	NR01	飛鳥～奈良時代初
29	69	85	土師器	甕	(18.8)	(8.35)	-		若干	-	頭部1/4	西嶋2区	NR01	
30	69	85	土師器	鉢	(25.8)	(6.15)	-		1/6	-		西嶋2区	NR01	8世紀
31	69	85	土師器	壺or甕	(11.0)	(7.0)	腹径(10.5)		若干	-	体部1/5	西嶋2区	NR01	7世紀頃か?
32	69	84	弥生土器	壺	長(5.9)	幅(12.6)	厚1.85		-	-	若干	西嶋2区	NR01	スタンプ文
33	69	84	須恵器	壺	10.35	3.8			2/3	完形		西嶋2区	NR01	7世紀前半～中頃
34	69	84	土師器	高壺	-	(6.5)	(9.6)		-	2/3		西嶋2区	NR01	
35	69	85	須恵器	壺	-	(8.15)	-		-	1/4		西嶋2区	NR01	
36	69	85	須恵器	壺身	(10.0)	3.55	-		1/4	完形		西嶋2区	SK02	7世紀中頃～後半
37	69	86	土師器	壺or甕	(17.6)	(4.85)	-		1/8	-		西嶋2区	SK12	奈良時代頃か?
38	70	85	須恵器	壺身	(10.0)	(3.75)	-		1/3	2/3		西嶋2区		TK46型式期 飛鳥IV(7世紀後葉)
39	70	85	須恵器	壺身	11.9	4.45	8.4		1/2	完存		西嶋2区		TK48型式期 飛鳥IV (7世紀後葉～末)
40	70	85	須恵器	壺A	(10.6)	2.95	6.75		3/4	完存		西嶋2区		7世紀末～8世紀
41	70	85	須恵器	壺A	(13.6)	2.85	(11.2)		1/3	-		西嶋2区		奈良後半か
42	70	85	須恵器	壺B	(13.5)	(4.85)	(7.8)		わずか	2/3		西嶋2区		8世紀前半
43	70	86	須恵器	壺B	-	(3.75)	(9.2)		-	1/2		西嶋2区		奈良前半か
44	70	85	須恵器	短頸壺	(8.7)	(7.85)	腹径(17.2)		わずか	-	肩部1/3	西嶋2区		8世紀中頃
45	-	86	須恵器	稜椀					-	-		西嶋2区		
46	70	86	須恵器	横瓶	(13.8)	(6.05)	-		1/6	-	頸部1/3	西嶋2区		
47	70	86	須恵器	甕	(38.4)	(7.15)	-		1/8	-		西嶋2区		MT21(8世紀初頭) 頃か
48	70	86	須恵器	壺	(11.2)	(3.4)	-		1/4	-		西嶋2区		TK10型式(6世紀中頃)
49	70	87	土師器	甕	(29.9)	(6.95)	-		1/9	-		西嶋2区		奈良時代頃
50	-	87	土師器	把手	長(4.5)	幅(7.5)	厚1.2		-	-	把手のみ	西嶋2区		
51	70	86	弥生土器	甕(底部)	-	(4.8)	5.0		-	4/5		西嶋2区		後期後半
52	70	87	土師器	土錐	長4.6	幅1.35	厚1.35	8.8g	-	-	完存	西嶋2区		
53	70	87	土師器	土錐	長5.6	幅2.2	厚2.3	19.5g	-	-	一端欠損	西嶋2区		
54	70	87	瓦	土師質平瓦	長(11.05)	幅(15.6)	厚2.5		-	-	破片	西嶋2区		
55	-	87	瓦	須恵質平瓦	長(7.3)	幅(6.0)	厚2.7		-	-	破片	西嶋2区		

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
56	70	88	土師器	鍋	(22.5)	(9.3)	腹径(25.8)		若干	-		西嶋2区		15世紀前半～中頃
57	70	86	土師器	托	-	(2.6)	5.7		-	完存		西嶋2区		
58	70	86	須恵器	椀	(15.3)	5.8	6.4		若干	完存		西嶋2区		11世紀後半～12世紀前半
59	70	88	須恵器	小皿	7.3	1.5	4.9		3/4	3/4		西嶋2区		
60	70	88	須恵器	小皿	6.95	1.6	4.25		2/3	3/4		西嶋2区		
61	70	88	須恵器	椀(破片)	長(3.0)	幅(3.7)	厚0.5		-	-	体部若干	西嶋2区		墨書
62	70	88	須恵器	椀(破片)	長(3.3)	幅(4.2)	厚0.6		-	-	体部破片	西嶋2区		墨書
63	70	88	須恵器	甕	-	(5.8)	-		-	-	体部破片	西嶋2区		
64	70	88	無釉陶器	甕	-	(5.75)			若干			西嶋2区		丹波焼 AD1330～1400
65	70	88	無釉陶器	甕	-	(5.95)	-		若干	-		西嶋2区		丹波焼 AD1270～1330
66	70	88	白磁	碗	(15.6)	(4.95)	-		1/9	-		西嶋2区		大宰府編年IV 1a類 11世紀後半～12世紀後半
67	71	89	弥生土器	直口壺	(9.4)	(8.1)	-		1/4	-	頸部1/3	西嶋3区	SX01	
68	71	89	弥生土器	長頸壺	(15.3)	(5.6)	-		1/4	-		西嶋3区	SX01	
69	71	89	弥生土器	壺	-	(6.9)	3.7		-	ほぼ完存		西嶋3区	SX01	
70	71	89	弥生土器	高杯(脚部)	-	(7.25)	脚端部(11.9)		-	-	脚端若干 脚柱完存	西嶋3区	SX01	
71	71	89	弥生土器	高杯 or 器台(脚部)	-	(6.65)	脚端部(12.35)		-	-	脚端部1/4強	西嶋3区	SX01	
72	71	89	弥生土器	有孔鉢	-	(3.15)	3.4		-	ほぼ完存		西嶋3区	SX01	
73	71	89	弥生土器	甕	(14.5)	(5.25)	-		1/4	-		西嶋3区	SX03	弥生後期中頃～後半
74	71	89	須恵器	坏B蓋	(13.8)	3.5	つまみ 径2.3		1/4	-	天井部 つまみ部 完存	西嶋3区	SX06	奈良末～平安初期か
75	71	90	弥生土器	二重口縁壺	-	(8.75)	-		-	-	頸部7/8	西嶋3区	NR01 北東部溜り状	
76	71	90	弥生土器	広口壺	-	(5.75)	-		-	-	頸部1/3	西嶋3区	NR01	
77	71	90	弥生土器	広口壺	10.65	(7.7)	-		完存	-		西嶋3区		溜り状遺構
78	71	90	土師器	甕	(20.4)	(14.5)	腹径(21.4)		1/8	-	体部1/4	西嶋3区	NR01 北西部	奈良時代
79	71	90	弥生土器	底部	-	(4.55)	(5.2)		-	2/3		西嶋3区	NR01 最北部	
80	71	90	弥生土器	甕(底部)	-	(3.65)	3.1		-	完存		西嶋3区	NR01 南西部	
81	71	90	土師器	鉢	(13.7)	(5.45)	-		1/7	-		西嶋3区	NR01 北東部溜り状	
82	71	91	弥生土器	鉢？(脚台部)	-	(2.75)	3.45		-	完存		西嶋3区	NR01 北西部	
83	71	90	弥生土器	有孔鉢	-	(5.0)	2.1		-	完存		西嶋3区	NR01 北東部	
84	71	91	弥生土器	高杯	-	(8.7)	(13.2)		-	1/5	脚柱部完存	西嶋3区	NR01 北東部	
85	71	91	須恵器	坏B蓋	13.45	3.15	つまみ 径2.8		3/4	-		西嶋3区	NR01 北西部	8世紀前半
86	71	90	須恵器	皿 or 坏A	(14.8)	2.35	(12.7)		1/4	-		西嶋3区	NR01 南西部	8世紀中頃～9世紀初か
87	71	91	土師器	小皿	9.05	1.9	5.65		2/3	完存		西嶋3区	NR01 南西部	
88	71	91	土師器	小皿	9.7	1.9	6.9		1/3	4/5		西嶋3区	NR01 南西部	
89	71	91	須恵器	小皿	6.9	1.25	4.85		完存	完存		西嶋3区	T98	
90	71	92	須恵器	捏鉢	-	(5.05)	(9.8)		-	1/4		西嶋3区	NR01 北西部	
91	71	92	施釉陶器	鉢	-	(3.2)	(11.7)		-	1/12		西嶋3区	NR01 北西部	
92	71	92	土師器	炬鍵？	-	(6.65)	-		若干	-		西嶋3区	NR01 南西部	
93	71	93	弥生土器	甕	(17.6)	(4.7)	-		1/8	-		西嶋3区	SR12	後期前半
94	71	93	須恵器	坏身	(11.85)	(3.5)	-		1/8	-		西嶋3区		MT15(6世紀前葉)か さらに遡る可能性
95	71	93	須恵器	坏身	(12.95)	4.15	7.7		1/4	完存		西嶋3区		飛鳥後半(III～IV)か 7世紀後半～8世紀初
96	71	93	須恵器	壺(底部)	-	(3.2)	8.15		-	完存		西嶋3区		7世紀後半～8世紀代
97	-	93	土師器	甕	長(12.0)	幅(13.0)	厚1.7		-	-	体部若干	西嶋3区		
98	71	92	須恵器	椀	-	(2.2)	5.9		-	完存		西嶋3区		11世紀後半～12世紀前半
99	72	94	弥生土器	壺	(13.0)	(3.4)	-		1/4	-		西嶋4W区	SD88	
100	72	94	弥生土器	広口壺	(11.8)	(3.9)	-		3/4	-		西嶋4W区	SD88	
101	72	94	弥生土器	広口壺	(16.9)	(4.7)	-		1/4	-		西嶋4W区	SD88	
102	72	94	弥生土器	受口壺	(17.6)	(7.45)	-		1/6	-		西嶋4W区	SD88	
103	72	94	弥生土器	無頸壺	(11.8)	(4.0)	-		1/8	-		西嶋4W区	SD88上面	
104	72	94	弥生土器	蓋	(17.4)	(3.65)	-		2/5	-	天井部1/2	西嶋4W区	SD88	中期後半(IV)
105	72	94	弥生土器	甕	(12.7)	(4.7)	-		1/6	-		西嶋4W区	SD88上面	
106	72	94	弥生土器	甕	(17.2)	(5.1)	-		1/4	-		西嶋4W区	SD88	
107	72	94	弥生土器	甕	(30.4)	(10.3)	-		1/12	-		西嶋4W区	SD88	
108	72	94	弥生土器	高杯	(32.8)	(4.25)	-		1/8	-		西嶋4W区	SD88	
109	72	94	弥生土器	高杯	(15.2)	(3.55)	-		1/4	-		西嶋4W区	SD88上面	
110	72	94	弥生土器	高杯(脚部)	-	(9.8)	(15.5)		-	-	脚1/4	西嶋4W区	SD88上面	
111	72	94	弥生土器	底部	-	(5.0)	(7.8)		-	1/2弱		西嶋4W区	SD156	

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考	
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他				
112	72	95	弥生土器	広口壺	(16.0)	(3.8)	-		1/6	-		西嶋4W区	NR73		
113	72	95	弥生土器	広口壺	(17.6)	(4.2)	-		1/6	-		西嶋4W区	NR73		
114	72	95	弥生土器	広口壺	(16.8)	(6.45)	-		若干	-	頸部若干	西嶋4W区	NR73		
115	72	95	弥生土器	広口壺	(17.1)	(4.8)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73下層		
116	72	95	弥生土器	広口壺	(18.1)	(2.75)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73下層		
117	72	95	弥生土器	広口壺	(16.8)	(2.3)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73下層		
118	72	95	弥生土器	広口壺(口縁部)	(22.7)	(2.95)	-		若干	-		西嶋4W区	NR73		
119	72	95	弥生土器	広口壺	(22.0)	(2.4)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73		
120	72	95	弥生土器	広口壺(口縁部)	(15.4)	(4.7)	-		1/7	-		西嶋4W区	NR73	中期後半～末	
121	72	95	弥生土器	壺	-	(4.3)	-		-	-	頸部小片	西嶋4W区	NR73		
122	72	95	弥生土器	壺	-	(4.8)	-		-	-	頸部小片	西嶋4W区	NR73	中期前葉	
123	72	95	弥生土器	壺	-	(6.85)	-		-	-	体上部小片	西嶋4W区	NR73		
124	72	95	弥生土器	甕	(14.7)	(3.6)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73	中期後半	
125	73	95	弥生土器	壺?	(底部)	-	(5.8)	(8.75)		-	2/3		西嶋4W区	NR73	
126	73	95	弥生土器	高杯(口縁部)	(23.8)	(4.95)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73		
127	73	95	弥生土器	高杯	-	(5.8)	-		-	-	脚部小片	西嶋4W区	NR73	中期中葉か	
128	73	95	弥生土器	高杯(脚部)	-	(2.6)	(16.8)		-	-	脚部小片	西嶋4W区	NR73下層		
129	73	95	弥生土器	高杯(脚部)	-	(3.6)	(13.0)		-	-	脚部1/5	西嶋4W区	NR73		
130	73	95	弥生土器	器台or高杯	-	(8.4)	(8.0)		-	-	脚部1/4	西嶋4W区	NR73		
131	73	96	弥生土器	二重口縁壺(口縁部)	(25.6)	(4.8)	-		1/8	-		西嶋4W区	NR73		
132	73	96	弥生土器	高杯	(19.7)	(3.85)	-		小片	-		西嶋4W区	NR73下層	後期	
133	73	96	土師器	底部	-	(4.4)	(4.4)		-	1/2強		西嶋4W区	NR73		
134	73	96	須恵器	坏蓋	(10.1)	(3.9)	-		1/5	-		西嶋4W区	NR73	TK47型式	
135	73	96	須恵器	坏身	(10.55)	(4.5)	-		1/4	-	受部1/3	西嶋4W区	NR73	TK47型式	
136	73	96	須恵器	坏蓋	(15.9)	(2.95)	-		1/10	-		西嶋4W区	NR73上面	MT15型式(6世紀前半)	
137	73	96	須恵器	高坏	-	(4.4)	(10.15)		-	-	脚部2/3	西嶋4W区	NR73	7世紀前半	
138	73	96	土師器	甕	(15.7)	(5.2)	-		1/7	-		西嶋4W区	NR73	古墳中期後半頃か	
139	73	96	弥生土器	甕	(27.3)	(5.2)	-		1/8	-		西嶋4W区	SD80(西嶋4E区SD04の続き)	中期後半か	
140	73	96	弥生土器	壺?	(底部)	-	(3.9)	9.9		-	完存	西嶋4W区	ST47	中期後半か	
141	73	96	弥生土器	底部	-	(4.35)	6.6		-	ほぼ完	体部わずか	西嶋4W区	SP82	中期か	
142	73	96	須恵器	椀	-	(3.25)	-		1/16	-		西嶋4W区	SP82		
143	73	97	土師器	甕	(13.0)	(7.65)	腹径(11.5)		1/3	-	体部上半1/3	西嶋4W区	SH150内下層住居跡	古墳後期か	
144	73	97	土師器	高坏(脚部)	-	(3.25)	(10.5)		-	脚1/8		西嶋4W区	SH150		
145	73	97	土師器	高坏(脚柱部)	-	(3.8)	-		-	-	脚柱部上半のみ	西嶋4W区	SH150		
146	73	97	須恵器	坏蓋	(12.9)	4.1	天井部4.8		-	-	1/2	西嶋4W区	SP200	MT85型式～TK209型式期6世紀後半～7世紀初	
147	73	97	土師器	坏	(13.8)	(2.85)	-		1/5	1/4		西嶋4W区	ST46(木棺墓)		
148	73	97	須恵器	坏B蓋	(15.7)	(2.25)	-		1/8	-		西嶋4W区	SX262	平城宮VI・平安宮I中～平城宮VII・平安宮I新8世紀後半～9世紀前半	
149	73	97	須恵器	坏B	-	(2.3)	(12.2)		-	1/4		西嶋4W区	SX262		
150	73	98	須恵器	坏A	(14.2)	(3.0)	-		1/4強	1/4		西嶋4W区	包含層たまり	飛鳥IVかV	
151	73	98	須恵器	坏A	(14.5)	(2.6)	-		1/3	1/3		西嶋4W区	包含層たまり	平城宮IV～V8世紀後半	
152	73	97	須恵器	坏A	(13.7)	(2.5)	-		1/6	若干		西嶋4W区	包含層たまり	平城宮VII・平安宮I新9世紀前半	
153	73	98	須恵器	坏B	(15.5)	6.2	(8.5)		1/3	1/2		西嶋4W区	包含層たまり	平安宮I新9世紀中頃	
154	73	97	須恵器	坏B(底部)	-	(3.6)	(7.9)		-	1/3		西嶋4W区	包含層たまり	平城宮VII・平安宮I新9世紀前半～中頃	
155	73	97	須恵器	坏	(15.7)	(4.55)	-		1/6	-		西嶋4W区	包含層たまり		
156	73	97	須恵器	坏	(13.1)	(2.95)	-		1/4	-		西嶋4W区	包含層たまり		
157	73	98	土師器	椀or鉢	-	(3.7)	(9.2)		-	1/3		西嶋4W区	SX267		
158	73	98	須恵器	壺(口縁部)	(9.1)	(5.0)	-		1/4	-		西嶋4W区	包含層たまり	平城宮VI・平安宮I中～平城宮VII・平安宮I新8世紀後半～9世紀前半	
159	73	97	須恵器	甕	(41.5)	(5.65)	-		1/9	-		西嶋4W区	南西隅	6世紀後半～7世紀	
160	73	98	土師器	鍋	(40.9)	(10.3)	-		1/4	-	体部わずか	西嶋4W区	包含層たまり	奈良時代頃	
161	74	97	須恵器	坏A	(11.8)	(3.15)	(7.8)		1/5	1/4		西嶋4W区	SD253	平城宮VI平安宮I中(8世紀後半か)	
162	74	97	須恵器	稜椀?	-	(6.0)	(9.8)		-	若干		西嶋4W区	SD253		
163	74	97	須恵器	壺(口縁部)	(11.0)	(4.5)	-		1/6	-		西嶋4W区	SD253	奈良後半～平安初か	

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
164	74	98	須恵器	椀 or 盆	(17.0)	(1.65)	-		1/12	-		西嶋4W区	SP21上面	
165	74	98	須恵器	椀	(15.6)	(5.05)	-		1/3	若干		西嶋4W区	SX212	
166	74	98	須恵器	椀	(13.7)	(3.55)	-		1/8	-		西嶋4W区	SD203	西脇市平野東1号窯 椀C類 11世紀前半代か 沈線椀
167	74	98	青磁	皿	(11.2)	(2.2)	-		若干	1/6		西嶋4W区	SD222	同安窯系青磁皿 I-1b類 12世紀中頃 ~12世紀後半
168	74	98	須恵器	椀	(15.6)	4.3	(4.6)		1/4	わざか		西嶋4W区	SP81	
169	74	97	緑釉陶器	椀	(12.6)	(1.65)	-		1/16	-		西嶋4W区		高橋A2類II期 9世紀後半か 東海産の可能性
170	74	99	白磁	碗	(16.8)	(3.6)	-		1/18	-		西嶋4W区		太宰府IV類 11世紀後半 ~12世紀後半
171	74	99	須恵器	椀	(11.7)	(4.35)	-		1/8	-		西嶋4W区		
172	74	99	須恵器	椀	-	(1.85)	(5.0)		-	1/3		西嶋4W区	北東部	西脇市CII類 11世紀代 ~12世紀前半
173	74	99	須恵器	小皿	(7.8)	(1.25)	(4.7)		1/4弱	1/4		西嶋4W区		西脇市平野東窯 搅乱出例 12世紀代後半か
174	74	100	須恵器	捏鉢	(31.5)	(4.1)	-		1/12	-		西嶋4W区		東播系III-3類 14世紀前半
175	74	100	須恵器	甕	(24.8)	(4.9)	-		1/7	-		西嶋4W区	北東部	
176	74	100	土師器	甕	(15.8)	(6.95)	-		1/9	-	体部上半 1/9	西嶋4W区		
177	74	100	土師器	鍋	(24.5)	(4.0)	鍔径 (27.8)		1/18	-		西嶋4W区		兵庫津羽釜タイプ 播磨型B系列IB類 15世紀中頃
178	74	100	無釉陶器	擂鉢	(28.0)	11.05	(15.3)		1/6	1/8		西嶋4W区	SD118	丹波焼 15世紀末 ~16世紀前半
179	74	100	施釉陶器	擂鉢	(30.8)	11.2	(15.2)		1/5	1/2		西嶋4W区	SD118	丹波焼 近代以降の製品
180	74	100	施釉陶器	甕	(19.2)	(15.5)	-		1/3	-	体部上部1/3	西嶋4W区	SD118	丹波焼
181	74	100	施釉陶器	甕	(33.1)	(14.6)	-		1/5	-		西嶋4W区	SD118	丹波焼
182	74	100	無釉陶器	皿	(11.1)	2.4	(3.6)		1/3	1/2		西嶋4W区	SD118	近世~近代
183	74	100	色絵染付磁器	小碗	(9.2)	4.7	(4.0)		1/4	1/2		西嶋4W区	SD118下流面	
184	75	101	弥生土器	底部	-	(2.0)	(4.1)		-	1/4		西嶋4E区	SK05	
185	75	101	弥生土器	直口壺	-	(2.8)	-		小片	-		西嶋4E区	SK07	中期中葉
186	75	101	土師器	直口壺	-	(14.0)	腹径 (16.0)		-	-	体部1/3	西嶋4E区	SK09	古墳中期中葉~後期初
187	75	101	土師器	鉢	(10.7)	6.5	-		1/3	3/4	体部3/4	西嶋4E区	SK09	古墳中期後半 ~後期前葉
188	75	101	土師器	鉢	(13.4)	4.45	-		若干	3/4	体部3/4	西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
189	75	101	土師器	製塩土器	(4.2)	(4.05)	腹径 (5.0)		1/5	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
190	75	101	土師器	製塩土器	(4.5)	(3.8)	腹径 (5.0)		1/6	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
191	75	101	土師器	製塩土器	(3.8)	(3.3)	-		1/6	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
192	75	101	土師器	製塩土器	(2.8)	(2.7)			1/2	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
193	-	101	土師器	製塩土器	(4.0)	(4.3)	-		1/6	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
194	-	101	土師器	製塩土器	(3.8)	(4.3)	-		1/8	-		西嶋4E区	SK09	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
195	75	102	須恵器	蓋	12.4	(5.0)	-		3/4	-	天井部完存 つまみ 上部欠	西嶋4E区	SK10	TK23型式期 5世紀後葉
196	75	102	須恵器	甕	-	(11.0)	腹径 16.2		-	-	体部完存	西嶋4E区	SK10	TK23型式期 5世紀後葉
197	75	102	土師器	壺	(11.4)	5.0	-		若干	3/4	体部3/4	西嶋4E区	SK10	
198	75	102	土師器	直口壺	(8.4)	13.8	腹径 12.7		1/3	完存		西嶋4E区	SK30	中期末頃か?
199	75	102	土師器	甕	(18.0)	(4.6)	-		1/2強	-	肩部1/2強	西嶋4E区	SK30	
200	75	102	土師器	製塩土器	(3.4)	(7.6)	腹径 (5.0)		1/2	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
201	75	102	土師器	製塩土器	(3.4)	(5.85)	腹径 (4.8)		1/3	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
202	75	103	土師器	製塩土器	(3.7)	(5.65)	腹径 (5.4)		1/4	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
203	75	103	土師器	製塩土器	(3.5)	(5.15)	腹径 (4.0)		1/3	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
204	75	103	土師器	製塩土器	(4.1)	(4.6)	腹径 (5.0)		1/4	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
205	75	103	土師器	製塩土器	(3.9)	(3.1)	腹径 (4.4)		1/4	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
206	-	103	土師器	製塩土器	(4.8)	(3.3)	-		1/5	-		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀
207	75	103	土師器	製塩土器	-	(2.0)	-		-	完存		西嶋4E区	SK30	丸底I式 5世紀後葉~6世紀

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
208	75	103	土師器	土錐	長 (3.05)	幅 1.45	厚 1.3	4.7g	-	-	両端部欠損	西嶋4E区	SK30	庄内頃
209	75	104	土師器	壺	(13.4)	(4.5)	-		1/2	-		西嶋4E区	SX01	
210	75	104	土師器	甕	(22.3)	(8.8)	-		1/8	-	頸部1/3	西嶋4E区	SX01	
211	75	103	土師器	把手	長 (6.2)	幅 (4.95)	厚 3.4		-	-	把手のみ	西嶋4E区	SX01	
212	75	104	土師器	小皿	(7.8)	1.2	-		1/4	-		西嶋4E区	SB02内P56	
213	75	104	須恵器	椀	-	(1.95)	(6.8)		-	1/2		西嶋4E区	SB02内P17	
214	75	104	土師器	小皿	7.05	1.35	-		3/4	3/4		西嶋4E区	SB03内P19	
215	75	103	土師器	小皿	(7.25)	1.35	-		1/3	-		西嶋4E区	SB03内P30	
216	75	104	須恵器	小皿	(6.3)	1.3	(4.7)		1/6	1/6		西嶋4E区	SB05内P34	
217	75	103	須恵器	捏鉢	(26.6)	(2.75)	-		1/12	-		西嶋4E区	SB05内P67	III-1類 12世紀
218	75	104	須恵器	椀	(17.4)	4.75	6.05		1/3	完存		西嶋4E区	SK28	13世紀
219	75	105	土師器	甕	(24.8)	(11.1)	-		1/8	-		西嶋4E区	SD02中	
220	75	105	土師器	甕	(18.9)	(4.5)	-		1/12	-		西嶋4E区	SD02南	
221	75	105	須恵器	椀	(12.7)	(3.35)	-		1/6	-		西嶋4E区	SD02中	西脇市平野東窯2号窯～3号窯 11世紀後半～12世紀前半
222	75	105	青磁	碗	(13.7)	(3.0)	-		1/8	-		西嶋4E区	SD02中	龍泉窯系 福田片岡AII類
223	75	105	土師器	羽釜	(28.7)	(5.05)	鍔径 (35.4)		1/12	-		西嶋4E区	SD04	兵庫津羽釜タイプ B系列III A類 15世紀後半～16世紀初
224	76	105	須恵器	壺A	(12.7)	(3.8)	-		若干	1/4		西嶋4E区	P38	飛鳥末～奈良
225	76	105	須恵器	皿 or 椭	(15.6)	3.65	(7.4)		1/18	1/4		西嶋4E区	P12	
226	76	106	青磁	碗	-	(5.45)	(6.2)		-	1/4		西嶋4E区	P35	龍泉窯系 大宰府編年 龍泉窯系青磁碗I-4類 12世紀中頃～後半
227	76	106	綠釉陶器	椀	(12.8)	(4.0)	(5.6)		若干	2/3		西嶋4E区	NR01	9世紀
228	76	106	須恵器	蓋	(14.0)	(2.45)	-		1/4	-		西嶋4E区	NR01	8世紀後半
229	76	106	須恵器	壺B	-	(1.4)	7.3		-	完存			T96	転用窯の可能性
230	76	106	須恵器	小皿	7.05	1.25	-		11/12	完存		西嶋4E区	NR01	
231	76	106	須恵器	椀	(16.1)	5.05	(5.4)		1/3	1/2		西嶋4E区	NR01	
232	76	106	須恵器	椀	(14.6)	4.05	6.1		1/3	2/3		西嶋4E区	NR01	13世紀代
233	76	107	弥生土器	甕 or 蓋 (底部)	-	(5.1)	(8.4)		-	1/3		西嶋5区	SK01	中期
234	76	107	須恵器	壺B	-	(2.15)	6.2		-	完存		西嶋5区	SR01	
235	76	107	土師器	飯蛸壺	-	(5.1)	-		-	-	上部のみ	西嶋5区	SR01	
236	76	107	須恵器	壺	(12.4)	15.2	腹径 18.6		1/4	-	体部7/8	西嶋6区	SD01	飛鳥III 7世紀第3四半期 あたりか
237	76	107	土師器	壺	11.7	(3.7)	8.8		1/8	5/6		西嶋6区	SD01	
238	76	107	土師器	甕	(21.7)	(7.0)	-		1/6	-		西嶋6区	SD01	
239	76	107	須恵器	壺A	(14.0)	2.9	(10.8)		若干	1/4		西嶋6区		墨書 8世紀後半頃
240	76	107	須恵器	短頸壺	(8.2)	5.35	(8.7)		1/8	1/4		西嶋6区		奈良後半
241	76	107	須恵器	小皿	7.1	1.2	5.6		3/4	完存		西嶋6区		
242	76	108	須恵器	小皿	(6.7)	1.8	4.45		1/4	3/4		西嶋6区		
243	76	108	須恵器	椀	(13.7)	(3.05)	-		1/6	-		西嶋6区		墨書
244	76	108	須恵器	椀	(13.6)	(2.9)	-		1/8	-		西嶋6区		墨書
245	76	108	須恵器	椀	(15.7)	(3.45)	-		1/7	-		西嶋6区		墨書
246	76	108	無釉陶器	鍋	(22.1)	(4.65)	-		1/8	-		西嶋6区		兵庫津甕タイプI類
247	76	108	青磁	碗	(14.8)	(3.15)	-		1/18	-		西嶋6区		龍泉窯系
248	76	108	瓦質土器	三足脚香炉	(10.8)	(3.55)	-		1/9	-		西嶋6区		スタンプ文
249	77	109	須恵器	蓋	16.65	3.55	つまみ 径 2.6		-	-	完形	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	9世紀中頃か
250	77	109	綠釉陶器	稜椀	(11.5)	(4.2)	(7.0)		1/9	1/4		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	9世紀後半～10世紀前半 (篠窯産であれば 10世紀前半)
251	77	109	須恵器	皿 or 壺A	13.35	2.8	-		-	-	ほぼ完形	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
252	77	109	須恵器	皿 or 壺A	13.8	2.95	-		4/5	5/5		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
253	77	109	須恵器	壺A	13.65	3.8	-		2/3	2/3		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
254	77	109	土師器	壺A	(12.9)	(3.45)	-		若干	3/4		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
255	77	109	土師器	壺A	(13.6)	(3.3)	-		1/3	1/3		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
256	77	109	土師器	皿 or 壺A	14.2	2.45	-		2/3	3/4		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
257	77	109	土師器	鍋 or 鉢	(49.2)	(9.7)	-		若干	-	破片	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
258	77	109	土師器	托	10.1	2.55	5.4		1/2	完存		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
259	77	110	土師器	二重口縁壺	(16.1)	(11.0)	-		1/4	-	頸部完存 底部若干	嶋2区	SR01-a 北部	
260	77	113	土師器	二重口縁壺 (口縁部)	(19.6)	(4.9)	-		1/4	-		嶋2区	SR01-a 北部	

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
261	77	110	土師器	二重口縁壺	(19.6)	(6.6)	-		1/4	-		嶋2区	SR01-a 北部	
262	77	113	土師器	二重口縁壺	(16.7)	(3.65)	-		1/7	-		嶋2区	SR01-a 北部	
263	77	110	土師器	二重口縁壺	(19.1)	(5.65)	-		1/3	-		嶋2区	SR01-a 北部	
264	77	110	土師器	広口壺	(17.7)	(9.0)	-		1/4	-	頸部3/4	嶋2区	SR01-a 北部	
265	77	110	弥生土器	広口壺(口縁部)	(17.2)	(6.15)	頸部径 (10.15)		ほぼ完	-	頸部1/4	嶋2区	SR01-a 北部	
266	77	110	土師器	広口壺	16.3	(13.2)	-		1/3 + 1/3	-	体部上半 2/3残	嶋2区	SR01-a 北部	
267	77	110	土師器	広口壺	15.0	(11.65)	-		2/3	-	体部上半 1/2	嶋2区	SR01-a 北部	
268	77	110	弥生土器	壺(口縁部)	(9.55)	(9.8)	頸部径 (8.9)		1/2	-	頸部1/2	嶋2区	SR01-a 北部	
269	77	110	土師器	壺	14.3	(18.4)	腹径 (23.35)		ほぼ完存	-	体部上半 1/3残	嶋2区	SR01-a 北部	
270	77	113	土師器	壺	(14.7)	(7.4)	-		1/4弱	-	頸部1/4弱	嶋2区	SR01-a 北部	
271	77	111	弥生土器	壺(頸部)	-	(3.35)	頸部径 最小 4.5				頸部のみ	嶋2区	SR01-a 北部	
272	78	111	土師器	大型壺	-	(17.2)	腹径 (32.3)		端部全欠	-	体部上半 1/2	嶋2区	SR01-a 北部	北近畿系か
273	78	113	弥生土器	無頸壺	(20.5)	(3.7)	-		破片	-		嶋2区	SR01-a 北部	中期後葉
274	78	111	土師器	甕	14.6	28.5	2.55		3/4	完存	体部4/5残	嶋2区	SR01-a 北部	庄内期
275	78	111	土師器	甕	12.8	16.25	2.7		1/8	-		嶋2区	SR01-a 北部	
276	78	111	土師器	甕	(15.6)	20.3	(4.0)		1/4強	若干	体部1/2	嶋2区	SR01-a 北部	
277	78	113	土師器	甕	(11.9)	(7.55)	-		1/5	-	体部上半 1/6	嶋2区	SR01-a 北部	
278	78	113	弥生土器	甕(口縁部)	(12.15)	(4.3)	-		1/4	-		嶋2区	SR01-a 北部	
279	78	113	土師器	甕	(15.45)	(8.1)	-		1/5	-	肩部1/4残	嶋2区	SR01-a 北部	
280	78	113	土師器	甕	(14.75)	(5.9)	-		1/6	-	肩部1/3	嶋2区	SR01-a 北部	
281	78	111	土師器	甕	(16.6)	(9.2)	-		1/6	-	体部1/4	嶋2区	SR01-a 北部	
282	78	113	土師器	甕	(15.5)	(7.6)	-		1/16	-		嶋2区	SR01-a 北部	
283	78	111	土師器	甕	(11.6)	(5.8)	-		1/8	-	体部1/2	嶋2区	SR01-a 北部	
284	78	112	土師器	小型甕	(8.1)	(7.85)	腹径 (11.1)		1/2	-	体部1/8	嶋2区	SR01-a 北部	
285	78	112	土師器	甕	(9.8)	(5.1)	-		1/3	-		嶋2区	SR01-a 北部	
286	78	112	土師器	甕	14.2	(10.9)	-		3/4	-	肩部1/2弱	嶋2区	SR01-a 北部	北近畿系か
287	78	112	土師器	甕	(22.8)	(16.1)	腹径 (23.7)		1/7 + 1/3	-	体部上部 若干	嶋2区	SR01-a 北部	
288	78	113	土師器	甕	(25.7)	(4.9)	-		1/6	-		嶋2区	SR01-a 北部	
289	79	112	土師器	甕	(16.3)	6.0	-		1/3	-		嶋2区	SR01-a 北部	
290	79	112	土師器	甕	12.9	24.9	腹径 (18.9)		完存	完存	体部2/3	嶋2区	SR01-a 北部	
291	79	112	弥生土器	甕	(14.9)	(17.5)	腹径 (18.2)		1/3	-		嶋2区	SR01-a 北部	
292	79	112	土師器	甕	12.5	22.0	3.5		7/8	完存		嶋2区	SR01-a 北部	北近畿系 庄内期前半か
293	79	113	土師器	甕	(14.8)	(6.75)	腹径 (15.4)		1/8	-		嶋2区	SR01-a 北部	北近畿系
294	79	113	弥生土器	有孔鉢	13.2	13.5	1.95		1/4	完存	体部3/5	嶋2区	SR01-a 北部	甕に近い形態
295	79	113	土師器	平底鉢	(10.25)	5.5	3.75		若干	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
296	79	113	弥生土器	平底鉢	10.4	6.2	3.35		1/4欠	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
297	79	113	土師器	鉢	(17.4)	10.1	4.3		若干	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
298	79	115	土師器	鉢	(17.7)	(8.7)	(3.0)		1/6	1/4		嶋2区	SR01-a 北部	
299	79	114	弥生土器	鉢	12.15	6.65	4.15		1/6	完存		嶋2区	SR01-a 北部	甕を転用したか?
300	79	114	土師器	鉢	(12.0)	6.3	2.75		1/4	2/3		嶋2区	SR01-a 北部	
301	79	114	土師器	鉢	(10.6)	(5.55)	(2.2)		1/4	1/3		嶋2区	SR01-a 北部	
302	79	114	土師器	台付鉢	(12.7)	8.25	7.1		若干	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
303	79	114	土師器	台付鉢	14.0	7.1	7.55				ほぼ完形	嶋2区	SR01-a 北部	
304	79	114	土師器	台付鉢	(11.9)	6.05	6.5		1/3	4/5		嶋2区	SR01-a 北部	
305	79	114	土師器	台付鉢	(10.5)	6.35	(8.8)		若干	-	脚部3/4	嶋2区	SR01-a 北部	
306	79	115	土師器	台付鉢か	(11.8)	(5.5)	腹径 (10.4)		若干	-	体部上部1/2	嶋2区	SR01-a 北部	
307	79	114	土師器	鉢?	(8.9)	(8.7)	腹径 (10.4)		1/6	-	体部1/6	嶋2区	SR01-a 北部	台付鉢か 庄内期
308	79	115	土師器	壺(底部)	-	(3.7)	5.95		-	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
309	79	115	弥生土器	壺(底部)	-	(4.2)	5.55		-	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
310	79	114	土師器	甕(底部)	-	(6.2)	5.5		-	完存		嶋2区	SR01-a 北部	
311	79	114	弥生土器	鉢?(底部)	-	(3.6)	4.8		-	完存	体部わずか	嶋2区	SR01-a 北部	
312	79	114	弥生土器	底部	-	(5.1)	6.4		-	完存		嶋2区	SR01-a 北部	中期初頭
313	79	115	土師器	高坏	-	(10.25)	(18.2)		-	1/2	筒部完存	嶋2区	SR01-a 北部	
314	79	115	土師器	高坏	-	(7.9)	(14.1)		-	-	脚部1/3 杯部1/3	嶋2区	SR01-a 北部	
315	79	115	土師器	高坏	(10.0)	(7.45)	-		若干	-	杯部1/4 脚柱完存	嶋2区	SR01-a 北部	
316	80	115	土師器	高坏	-	(6.85)	10.4		-	1/2	筒部完存	嶋2区	SR01-a 北部	
317	80	115	土師器	高坏(脚部)	-	(8.65)	(13.6)		-	1/12	脚柱完 杯部わずか	嶋2区	SR01-a 北部	
318	80	115	土師器	高坏	-	(5.6)	(16.0)		-	1/10	筒部2/3	嶋2区	SR01-a 北部	

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
319	80	116	弥生土器	器台	(24.3)	(19.6)	-		1/2	-	筒部完存	嶋2区	SR01-a	北部
320	80	116	弥生土器	器台	-	(11.25)	脚部径 最小3.9		-	-	体部2/3 脚部完	嶋2区	SR01-a	北部
321	80	115	弥生土器	器台(口縁部)	-	(1.85)	-		小破片	-		嶋2区	SR01-a	北部
322	80	116	弥生土器	甕	14.2	(16.25)	腹径 (19.6)		1/3	-		嶋2区	SR01-a	北部
323	80	116	土師器	壺 or 甕 (底部)	-	(6.55)	4.1		-	完存		嶋2区	SR01-a	北部
324	80	116	土師器	鉢	(10.2)	6.25	3.4		2/3	完存		嶋2区	SR01-a	北部
325	80	116	土師器	底部	-	(5.7)	6.2		-	4/5		嶋2区	SR01-a	北部
326	80	116	土師器	脚台部	-	(3.7)	(8.0)		-	1/4		嶋2区	SR01-a	北部
327	80	116	土師器	器台	-	(5.9)	(10.0)		-	1/6		嶋2区	SR01-a	北部
328	80	116	土師器	甕	(13.8)	12.8	腹径 (14.45)		1/4	-	体部1/2	嶋2区	SR01-a	中部
329	80	116	土師器	甕	(15.8)	(16.4)	腹径 (20.2)		1/4	-		嶋2区	SR01-a	中部
330	80	117	土師器	大型甕 or 鉢	(22.4)	(10.25)	-		1/4	-	体部上半 若干	嶋2区	SR01-a	中部
331	80	117	土師器	大形鉢 or 甕	(31.6)	(5.3)	-		1/12	-		嶋2区	SR01-a	中部
332	80	117	土師器	台付鉢	-	(4.45)	5.4		-	ほぼ 完存	体部下半 1/4	嶋2区	SR01-a	中部
333	80	117	土師器	高坏	-	(6.35)	8.8		-	脚 ほぼ 完存		嶋2区	SR01-a	中部
334	80	117	土師器	甕	-	(12.4)	2.45		-	完存	体部1/3	嶋2区	SR01-a	中部南
335	80	117	土師器	甕	12.45	(9.15)	腹径 (12.1)		3/4	-	体部上部 ほぼ残	嶋2区	SR01-a	中部南
336	80	117	土師器	甕	(14.8)	(7.2)	-		1/5	-		嶋2区	SR01-a	中部南
337	80	117	土師器	鉢	(11.85)	7.8	4.35		1/8	完存		嶋2区	SR01-a	中部南
338	80	117	土師器	壺(底部)	-	(4.8)	(6.5)		-	2/3		嶋2区	SR01-a	中部南
339	80	117	土師器	壺(底部)	-	(3.65)	(5.2)		-	2/3		嶋2区	SR01-a	中部南
340	80	117	土師器	壺(底部)	-	(2.9)	5.5		-	完存		嶋2区	SR01-a	中部南
341	80	117	土師器	器台	-	(8.9)	-	3/4 端部 欠損	-	脚柱完存		嶋2区	SR01-a	中部南
342	80	117	土師器	高坏?	-	(4.45)	11.1		-	脚1/2		嶋2区	SR01-a	中部南
343	81	118	土師器	二重口縁壺	(19.9)	(8.55)	-	1/12 + 1/4強	-			嶋2区	SR01-a	南部
344	81	118	弥生土器	二重口縁壺	(21.6)	(6.8)	-		1/4	-		嶋2区	SR01-a	南部
345	81	118	土師器	広口壺	(16.7)	(6.3)	-		1/5	-		嶋2区	SR01-a	南部
346	81	118	土師器	広口壺	(14.75)	(8.75)	-		1/3	-	体部上半 若干	嶋2区	SR01-a	南部
347	81	118	弥生土器	壺	-	(9.2)	頸部径 (7.8)		-	-	頸部3/4	嶋2区	SR01-a	南部
348	81	118	土師器	壺	15.65	(5.5)	-		3/5	-		嶋2区	SR01-a	南部
349	81	118	土師器	壺	-	(10.3)	腹径 12.75		-	ほぼ 完存	頸部以下 完存	嶋2区	SR01-a	南部
350	81	118	弥生土器	大型壺	-	(37.9)	7.85		全欠	完存	体部下半 1/4	嶋2区	SR01-a	南部
351	81	119	土師器	甕	(13.3)	19.95	3.4		若干	1/2	体部1/2	嶋2区	SR01-a	南部
352	81	119	土師器	甕	(15.7)	(10.65)	腹径 (15.8)		1/12	-	体部1/5	嶋2区	SR01-a	南部
353	81	119	土師器	甕	(19.3)	(10.3)	-		1/10	-	体部上半 1/4	嶋2区	SR01-a	南部
354	81	119	土師器	甕	(15.4)	(8.15)	-		1/6	-		嶋2区	SR01-a	南部
355	82	119	土師器	甕	(12.05)	(24.85)	腹径 (20.5)		1/4	-	肩部1/2 体部3/4	嶋2区	SR01-a	南部
356	82	119	土師器	甕	(15.8)	(6.55)	-		1/8	-	肩部1/4	嶋2区	SR01-a	南部
357	82	119	土師器	甕	(16.5)	(8.9)	-		1/3	-		嶋2区	SR01-a	南部
358	82	119	土師器	甕	-	(8.8)	2.75		-	完存	体部下半 1/6	嶋2区	SR01-a	南部
359	82	119	土師器	甕(底部)	-	(5.85)	4.35		-	完存		嶋2区	SR01-a	南部
360	82	120	土師器	鉢	(11.6)	8.15	4.5		若干	完存		嶋2区	SR01-a	南部
361	82	120	土師器	鉢	(10.4)	7.6	(4.6)		1/4	1/2		嶋2区	SR01-a	南部
362	82	120	土師器	鉢?	(13.4)	(8.0)	腹径 (10.1)		1/2弱	-		嶋2区	SR01-a	南部
363	82	120	土師器	台付鉢	(12.4)	6.8	(4.2)		1/12	1/4		嶋2区	SR01-a	南部
364	82	120	土師器	鉢	(15.2)	(6.3)	-		1/3	-		嶋2区	SR01-a	南部
365	82	120	土師器	鉢(底部)	-	(2.55)	2.95		-	完存		嶋2区	SR01-a	南部
366	82	120	土師器	器台	21.55	(7.6)	-		1/2	-	杯部3/4	嶋2区	SR01-a	南部
367	82	120	土師器	高坏 or 器台	-	(6.2)	9.3		-	脚3/4		嶋2区	SR01-a	南部
368	82	120	土師器	蓋	(11.5)	(6.2)	つまみ 径 (3.3)		1/2	-	つまみ1/8	嶋2区	SR01-a	南部
369	82	121	弥生土器	広口壺	(16.0)	(2.65)	-		1/6	-		嶋2区	SR01-a	南東隅
370	82	121	弥生土器	壺	-	(23.95)	5.1		-	完存		嶋2区	SR01-a	南東隅
371	82	121	弥生土器	壺	-	(8.9)	5.3		-	完存	体部下半 1/3	嶋2区	SR01-a	南東隅

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
372	82	121	弥生土器	壺(底部)	-	(5.95)	5.7		-	完存		嶋2区	SR01-a 南東隅	
373	82	122	土師器	甕	(14.6)	(7.85)	-		1/8	-	肩部1/3	嶋2区	SR01-a	
374	82	121	土師器	甕	(11.6)	(5.95)	腹径 (11.0)		1/2弱	-		嶋2区	SR01-a	
375	82	121	土師器	甕	-	(12.15)	3.6		-	4/5	体部1/4	嶋2区	SR01-a	
376	82	122	土師器	甕? (底部)	-	(3.7)	4.45		-	ほぼ 完存		嶋2区	SR01-a	
377	82	121	弥生土器	甕	-	(5.0)	3.4		-	完存	体部下半 若干	嶋2区	SR01-a 南東隅	
378	82	122	土師器	甕? (底部)	-	(2.15)	2.85		-	完存		嶋2区	SR01-a	
379	83	122	土師器	鉢	(26.5)	(8.0)	-		1/6	-		嶋2区	SR01-a 南東隅	粗痕
380	83	122	弥生土器	有孔鉢	(11.8)	(7.05)	4.8		若干	完存		嶋2区	SR01-a 南東隅	
381	83	122	弥生土器	高杯 (脚部)	-	(6.5)	脚柱径 3.35				脚柱完 脚裾1/3	嶋2区	SR01-a 南東隅	
382	83	121	土師器	山陰型 瓶形土器	-	(7.55)	(43.8)		-	1/8		嶋2区	SR01-a 南東隅	
383	83	123	須恵器	壺身	(9.8)	(3.35)	-		1/4	-		嶋2区	SR01-b	TK47型式期 5世紀末～6世紀初
384	83	123	須恵器	壺	12.9	5.5	6.3		1/2	3/4		嶋2区	SR01-b	
385	83	123	土師器	壺(底部)	-	(1.15)	(7.6)		-	1/2弱		嶋2区	SR01-b	墨書
386	83	123	須恵器	小皿	8.05	1.55	4.95		1/2強	ほぼ 完存		嶋2区	SR01-b	
387	83	123	須恵器	椀	(14.7)	5.8	6.4		1/4	完存		嶋2区	SR01-b	東播北部古窯址群 椀C I 2類 10世紀第4四半世紀
388	83	123	須恵器	椀	-	(3.8)	5.4		-	完存		嶋2区	SR01-b	
389	83	123	土師器	甕	(13.9)	(13.2)	腹径 (21.35)		1/4	-	体部上半 1/2	嶋2区	SD01	
390	83	123	土師器	鉢	(10.0)	6.8	5.1		1/2	完存		嶋2区	SD01	
391	83	124	須恵器	壺	-	(11.25)	(11.3)		-	1/4 + 1/12	体部下半 1/3	嶋2区	SD05	平城宮III期 (8世紀中頃)の可能性
392	83	124	須恵器	壺蓋	(13.8)	(3.8)	-		1/7	-	天井部1/2	嶋2区	SD05	MT85型式併行期か、 TK43型式期 (6世紀後葉頃)
393	83	124	須恵器	壺	(13.5)	(4.6)	-		1/12	3/5		嶋2区	SD05	飛鳥V・平城宮I期 (8世紀前半)
394	83	124	須恵器	壺	(12.15)	(4.3)	-		若干	3/5		嶋2区	SD05	飛鳥IV期 ～飛鳥V・平城宮I期 (7世紀末～8世紀前半)
395	83	124	須恵器	長頸壺	(8.5)	(21.7)	腹径 (19.25)		1/3	1/3	体部1/2	嶋2区	SD05	TK46与飛鳥IV期 (7世紀後葉頃)
396	83	124	須恵器	壺A	(14.2)	2.25	(11.0)		1/4	-		嶋2区	SR02	平城宮VI期・ 平安宮I中頃 (8世紀後半～9世紀初)
397	83	124	土師器	壺	14.6	3.35	8.5		3/4	完存		嶋2区	SK01	10世紀頃
398	83	124	須恵器	壺	(10.6)	3.8	5.8		1/4	完存		嶋2区	中央東	TK48与飛鳥IV・V 7世紀後葉
399	83	124	土師器	皿	(10.7)	(2.0)	-		1/4	-		嶋2区		
400	83	124	須恵器	小皿	7.85	1.65	5.2		7/8	完存		嶋2区	南半	
401	84	125	弥生土器	甕	(13.4)	(2.3)	-		1/7	-		嶋3区	SH01 中央土坑	後期初頭～前葉
402	84	125	土師器	台付鉢	(11.4)	(5.3)	-		ほぼ 完存	-	杯部 ほぼ完存	嶋3区	SH01 中央土坑	
403	84	125	土師器	高壺? (脚部)	-	(4.7)	(6.55)		-	-	脚部1/2 脚柱完存	嶋3区	SH01 中央土坑	
404	84	125	土師器	甕? (底部)	-	(10.3)	(5.0)		-	1/4	体下部1/4	嶋3区	SH01 P02	後期中頃
405	84	125	弥生土器	底部	-	(2.3)	(5.15)		-	1/4		嶋3区	P05	
406	84	125	弥生土器	甕	(15.3)	(3.3)	-		小片	-		嶋3区	P06	後期前葉
407	84	125	土師器	脚部	-	(3.75)	(18.8)		-	-	脚端部1/8	嶋3区	P06	天地不明
408	84	125	弥生土器	大型短頸壺	(23.7)	(6.25)	-		1/12	-		嶋3区	SR01	中期後葉
409	84	125	弥生土器	把手のみ	-	(10.25)	-		-	-	把手のみ	嶋3区	SR01	
410	84	125	土師器	鍋(把手)	-	(8.6)	-		-	-	把手完存 体部 わづか	嶋3区	SR01	
411	84	127	須恵器	壺	(13.0)	4.35	(9.2)		1/4	1/2		嶋3区	SR01	飛鳥IV～平城宮I期 (7世紀後葉～8世紀前葉)
412	84	125	須恵器	壺B	(10.8)	3.85	(7.3)		1/4	1/4		嶋3区	SR01	飛鳥V・平城宮I期 (8世紀前半)
413	84	126	瓦	平瓦	長 (6.7)	幅 (12.9)	厚 1.45				破片	嶋3区	SR01	
414	84	126	瓦	平瓦	(8.25)	幅 (5.2)	厚 1.5				破片	嶋3区	SR01	
415	84	126	瓦	丸瓦 (行基式)	(8.5)	幅 (7.0)	厚 1.5				破片	嶋3区	SR01	
416	84	126	瓦	丸瓦 (行基式)	(3.65)	幅 (6.5)	厚 2.3				破片	嶋3区	SR01	
417	84	127	須恵器	突帯椀	-	(6.2)	7.9		-	5/6	体部1/3	嶋3区	SR01	
418	84	127	白磁	皿 or 瓢	(13.15)	(1.95)	-		1/8	-		嶋3区	SR01	
419	85	127	弥生土器	広口壺	(16.1)	(2.7)	-		1/4	-		嶋4区	SD01	中期後半

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)				残存			出土地区	出土遺構	備考
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
420	85	127	弥生土器	高杯 or 鉢	-	(3.9)	-		小片	-		嶋4区	SD01	中期後半
421	85	127	弥生土器	蓋	-	(3.3)	つまみ 径 3.0		-	-	つまみ部 完存	嶋4区	SD01	
422	85	127	弥生土器	広口壺	(12.9)	(8.5)	-		1/5	-	肩部若干	嶋4区	SR01	
423	85	127	土師器	高壺	(14.6)	(3.2)	-		1/6	-		嶋4区	SR01	
424	85	127	弥生土器	壺 or 器台 (口縁部)	(29.6)	(3.1)	-		1/6	-		嶋4区	SR01	
425	85	127	土師器	甕? (底部)	-	(3.3)	(4.9)		-	1/4		嶋4区	SK03	
426	85	127	須恵器	壺蓋	(12.8)	(3.8)	-		1/8	-		嶋4区	東半	MK15かTK10 (6世紀前半～中頃)
427	85	127	須恵器	椀	-	(2.25)	(4.9)		-	1/3		嶋4区	東半	西脇市窯跡調査集報 椀C(見込み分類B) 11世紀

石器

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			重量	残存	出土地区	出土遺構	備考
					長さ	幅	厚み					
S1	86	128	石器	有茎尖頭器	7.95	2.8	0.875	17.0g	先端欠舌部欠	西嶋3区	SR08	サヌカイト
S2	86	128	石器	石鏃	5.025	1.3	0.55	3.7g		西嶋2区	NR01	サヌカイト
S3	86	128	石器	石鏃	2.1	1.4	0.2	0.6g		西嶋4W区	SD260	サヌカイト
S4	86	128	石器	石錐	2.85	1.15	0.6	2.2g	完形	西嶋4E区	NR01	サヌカイト
S5	86	128	石器	石鏃転用石錐	2.95	1.45	0.4	1.9g	先端折損	西嶋4W区		サヌカイト
S6	86	128	石器	打製石庖丁	10.9	4.55	1.55	79.3g	完形	西嶋3区	SR03	サヌカイト
S7	86	128	石器	楔形石器	3.5	4.6	1.0	20.7g		西嶋4E区		サヌカイト
S8	86	128	石器	搔器	4.1	5.75	1.45	41.5g		西嶋2区		貞岩
S9	-	128	石器	剥片	-	-	-			西嶋4W区		サヌカイト
S10	86	128	石器	台形石器	3.2	2.15	0.9	4.8g		西嶋4W区	SD130	チャート
S11	87	129	石器	大型蛤刃石斧	11.4	5.6	4.6	468.4g		西嶋2区		
S12	87	129	石器	敲石	9.4	5.9	4.0	262.2g		西嶋2区		
S13	87	129	石器	磨石	8.55	7.05	6.7	659.3g	完形か	西嶋4W区	NR73	
S14	87	129	石製品	砥石	(9.65)	(7.2)	(5.2)	374.4g	砥面4面残	西嶋2区		
S15	-	129	石製品	砥石か硯の薄片	-	-	-			西嶋4W区	SD118	
S16	-	129	石製品	砥石か硯の薄片	-	-	-			西嶋4W区	SD118	
S17	-	129	石製品	礎板石	-	-	-			西嶋4W区西部中央	SP82	
S18	-	129	石製品	礎板石	-	-	-			西嶋4W区南西部	SP171	

金属器

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			重量	出土地区	出土遺構	備考
					長さ	幅	厚み				
M1	87	130	銅製品	飾り金具か	8.5	3.3	0.15		西嶋1区	近代溝	
M2	87	130	鉄製品	紡錘車	3.25	3.5	1.9/1.25	完形?	西嶋4W区		
M3	87	130	鉄器	角釘	(2.85)	1.3	0.7	上部残	西嶋2区		
M4	87	131	鉄器	鋤先	14.95	12.7	0.4	完形	嶋2区	SR01-a	
M5	87	130	鉄器	鉄鎌 or 小型の刀子	(2.7)	(1.2)	0.3	上部欠損	嶋3区	SH01 中央土坑	
M6	-	130	楕形鉄滓		9.7	5.7	4.1		西嶋4W区	SP259	
M7	-	130	スラグ		5.2	2.55	1.75		西嶋4W区		

木器

報告番号	図版番号	写真版番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構	備考
					長さ	幅	厚み	口縁	底部	他			
W1	88	132	服飾具	下駄	22.6	11.1	3.85			完存	西嶋1区	近代溝	針葉樹 年輪粗
W2	88	132	食事具	切匙か	(16.5)	4.3 2.85	0.6			把手部欠損	西嶋3区	T100	折敷底板の再利用か?
W3	88	132		付け木	13.0	1.3	1.0 0.7			ほぼ完存	西嶋3区	T100	
W4	88	132		挽物皿 再加工	断面最大 (17.1)	断面最大 2.3	断面 0.8				西嶋3区西半	NR01上層	針葉樹 年輪密
W5	89	133			7.55	4.1	1.25			ほぼ完存	西嶋4E区	NR01	針葉樹板目材
W6	89	133			6.65	3.75	1.75			完形	西嶋4E区	NR01	針葉樹 年輪密
W7	89	133			(5.6)	(2.55)	0.7			1角残	西嶋4E区	NR01	墨痕
W8	89	133			最大2.9 最小2.05	9.5 断9.4	1.5			完形?	西嶋4E区	NR01	
W9	89	133			12.2	1.65	1.4			ほぼ完存	西嶋4E区	NR01	針葉樹 年輪密
W10	89	133			21.35	2.5 断面 2.45	1.4			ほぼ完形	西嶋4E区	NR01	針葉樹 年輪粗
W11	89	133	工具	木錘	16.2	断面 2.6 5.2 最大5.4	4.0				西嶋6区	SD01	針葉樹 年輪粗
W12	90	134	容器	挽物皿	口径 (19.1)	器高 1.2	底径 (17.8)			1/2	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W13	90	134	容器	挽物皿	口径 (19.1)	器高 1.3	底径 (17.4)	1/4	1/2		嶋1区	SR01 溜まり状遺構	樹種同定 ヒノキ材
W14	90	134	容器	挽物皿	口径 (20.5)	器高 1.2	底径 (17.8)	1/8	1/4	中央孔1/2	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	針葉樹 年輪密
W15	91	135	容器	曲物 (底板)	20.7	(4.6)	0.8			1/6	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	針葉樹 年輪界狭い
W16	91	135	容器	曲物 (底板)	(18.6)	(8.4)	0.8			約1/2	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W17	91	135	容器	曲物 (底板)	(18.2)	(4.4)	0.55			1/12	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	樹種同定 ヒノキ材
W18	91	135	容器	曲物 (側板)	(27.3)	(7.2)	0.5			一部	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	樹種同定 ヒノキ材
W19	91	135	容器	指物箱 側板か	28.5	(5.5)	0.6				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	樹種同定 ヒノキ材
W20	91	137		折敷底	(13.3) ヒゲ含む (15.9)	断面 (3.7) 最大 (4.0)	0.7				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W21	91	137		曲物 底板か	(9.9)	2.35	0.6			上部残	嶋1区	SR05	針葉樹 年輪密
W22	92	136		丸棒	54.2	断面1.8 最大1.9	1.7				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	針葉樹 年輪密
W23	92	136		紡織具の 可能性あり	(48.55)	1.55	0.9			先端一方欠	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W24	92	136	工具	縫打具か	(47.7)	3.4	1.8				嶋1区	SR02-b 底部 疊層直上	樹種同定 ヒノキ材
W25	92	136			(22.0)	4.4	1.5			上部残	嶋1区	SR01 南半部	樹種同定 ヒノキ材
W26	92	136			(20.75)	3.25	1.35			両端欠損	嶋1区	SR01 南半部	
W27	93	137	祭祀具	馬形代	(9.55) +(12.05)	2.95	0.55			ほぼ完存	嶋1区	SR05 検出北端 立ち上がり付近 (T85)	
W28	93	137	祭祀具	斎串	(21.55)	断面0.65 最大0.8	断面0.6 最大0.9			上部欠損	嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W29	93	137		付け木	28.5	2.0	1.2			完存	嶋1区		
W30	93	137		付け木	(13.95)	1.35				上部残	嶋2区	SR01付近	
W31	93	137	建築部材		(17.35)	(4.4)	1.5			穴1個と半分	嶋2区	SR01 北部 (T80)	樹種同定 ヒノキ材
W32	-	132		付け木か	10.2	1.6	0.7				西嶋2区		
W33	-	132		付け木か	9.5	1.9	0.9				西嶋2区		
W34	-	132		付け木か	3.8	1.4	0.5				西嶋2区		
W35	-	133		付け木	4.2	2.2	1.8				西嶋4E区	NR01	
W36	-	133			21.4	1.9	1.9				西嶋4E区	NR01	
W37	-	135	容器	曲物 (底・側板)	-	6.5	0.35				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W38	-	135	容器	曲物 (側板)	-	5.5	0.55				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W39	-	137		付け木	10.1	1.9	1.2				嶋1区	SR01 溜まり状遺構	
W40	-	137		付け木	12.9	1.2	0.8				嶋2区	SR01 北部	
W41	-	137		付け木	11.7	1.3	1.0				嶋2区	SR01	
W42	-	137	種実	桃核	2.8	2.2	0.9				嶋2区	SR01 南東隅	

第4章 自然科学分析

第1節 樹種同定（生材）

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

津万遺跡群2より出土した木製品について、用材選択を明らかにするために樹種同定を実施する。

2. 試料

試料は、出土した木製品7点である。試料の詳細は、樹種同定結果とともに第3表に示す。

3. 方法

各資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて横断面（木口）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の3断面について徒手切片を直接採取した。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定した（第1図）。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にした。

4. 結果

木製品は、全て針葉樹のヒノキとヒノキ科に同定された（第3表）。以下に、解剖学的特徴等を記す。

- ・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

なお、W19は、組織が収縮しており、保存状態が悪い。晩材部の幅が狭い特徴からヒノキの可能性があるが、分野壁孔が観察できないことからヒノキ科とした。

第3表 樹種同定結果

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	木取り	樹種	備考
W31	建築部材		嶋2区(T80)	SR01 北部	灰粘土	追柾	ヒノキ	
W18			嶋1区	SR01 溜まり状遺構		板目	ヒノキ	
W17	容器	曲物(底板)	嶋1区	SR01 溜まり状遺構		板目	ヒノキ	
W19	容器?	?	嶋1区	SR01 溜まり状遺構		柾目	ヒノキ科	
W13	容器	挽物	嶋1区	SR01 溜まり状遺構		柾目	ヒノキ	
W24	工具	緯打具?	嶋1区	SR02-b 碓層直上		柾目	ヒノキ	木刀タイプ
W25			嶋1区	SR01 南半	上層	板目	ヒノキ	

5. 考察

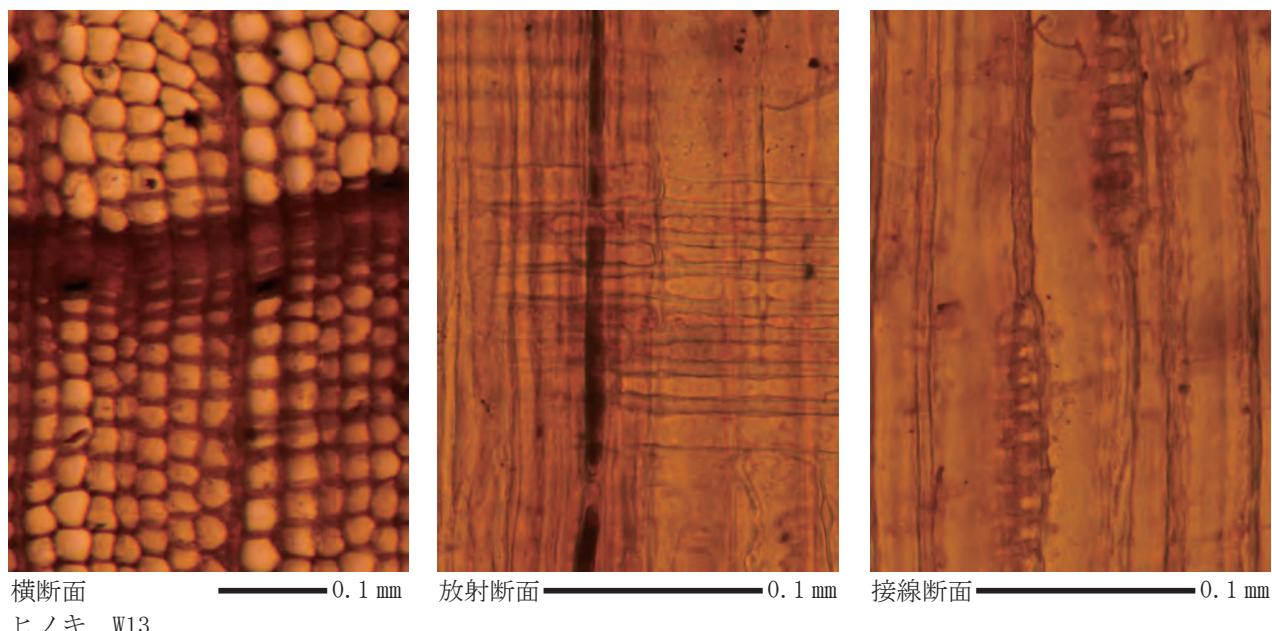
樹種同定を実施した木製品は、容器（挽物、曲物側板）、紡織具（緯打具？）、建築部材（建築部材）等がある。これらの木製品は全て針葉樹であり、1点がヒノキ科、6点がヒノキに同定された。ヒノキは、山地・丘陵地の尾根筋を中心に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性や耐水性が高い。

樹種同定結果から、ヒノキ材が建築部材から生活道具まで幅広く利用されていたことが推定される。本遺跡では、これまでにも木製品の樹種同定が実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2023）。その結果をみると、ヒノキ属の利用が多く、今回の結果とも整合的である。また、ヒノキ属の器種をみると、板材、柱材、矢板、曲物底板、円盤状製品など、今回の結果とも類似する結果が得られている。

伊東・山田（2012）のデータベースをみると、兵庫県では日本海側でスギ、瀬戸内海側でヒノキの利用が多い傾向がある。本遺跡ではこれまでの調査結果からヒノキの利用が多い地域であったことが推定される。

引用文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2023, 津万遺跡群1の樹種同定。「津万遺跡群1 -一般国道175号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」, 兵庫県教育委員会, 63-68.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第1図 木材断面

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

1. はじめに

津万遺跡群の発掘調査に伴い採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。測定試料を写真1～7に示す（第2図）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第4表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-45425	試料 No. 1 出土地区：西嶋 1 区・No. 1 採取場所：たちわりトレンチ断面 調査番号 No. 2007052 層位：暗褐色灰色シルト 採取日：2007. 10. 26	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45426	試料 No. 2 出土地区：西嶋 1 区・No. 2 採取場所：たちわりトレンチ断面 調査番号 No. 2007052 層位：暗褐色灰色砂質シルト 採取日：2007. 10. 26	種類：土壤 状態：dry	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45427	試料 No. 3 出土地区：西嶋 1 区・No. 3 採取場所：西壁断面 調査番号 No. 2007052 層位：再下位の黒灰色シルト 採取日：2007. 10. 26	種類：土壤 状態：dry	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45428	試料 No. 4 出土地区：西嶋 1 区 -1 採取場所：たちわりトレンチ断面 調査番号 No. 2007052 層位：暗灰色シルト 採取日：2007. 12. 26	種類：土壤 状態：dry	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45429	試料 No. 5 出土地区：嶋 2 区 採取場所：東西深掘トレンチ 調査番号 No. 2008073 層位：最下大礫層 採取日：2008. 8. 11	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45430	試料 No. 6 出土地区：嶋 2 区 採取場所：東西深掘トレンチ 調査番号 No. 2008073 層位：中層 その他：2008. 8. 11	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45431	試料 No. 7 出土地区：西嶋 4 W区北東隅 採取場所：SH150 下層西側の土坑 調査番号 No. 2018015 層位：埋土中 採取日：2019. 1. 30	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）



写真1 試料No.1 (PLD-45425)



写真2 試料No.2 (PLD-45426)

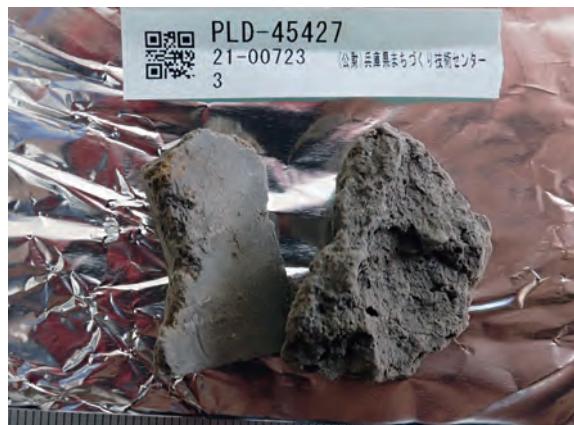


写真3 試料No.3 (PLD-45427)

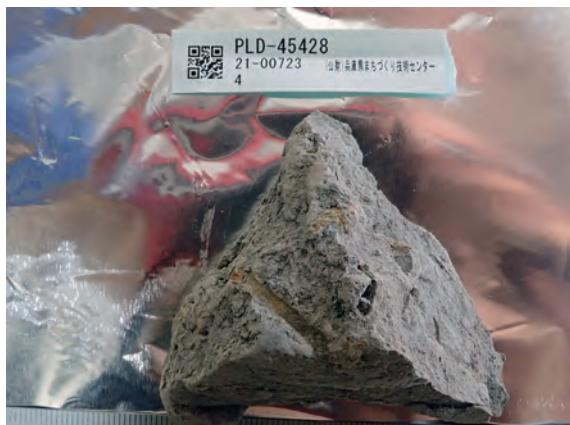


写真4 試料No.4 (PLD-45428)



写真5 試料No.5 (PLD-45429)



写真6 試料No.6 (PLD-45430)

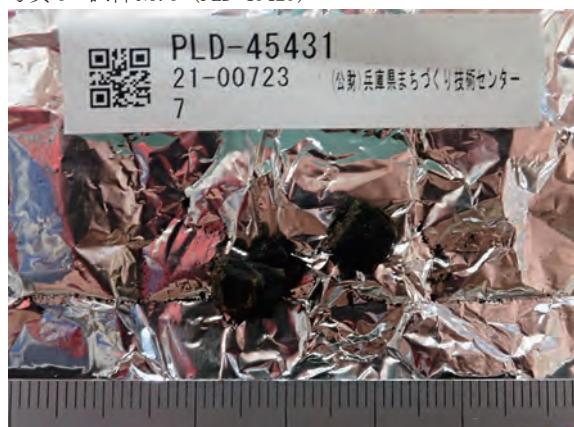


写真7 試料No.7 (PLD-45431)

第2図 測定試料写真

3. 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第3図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

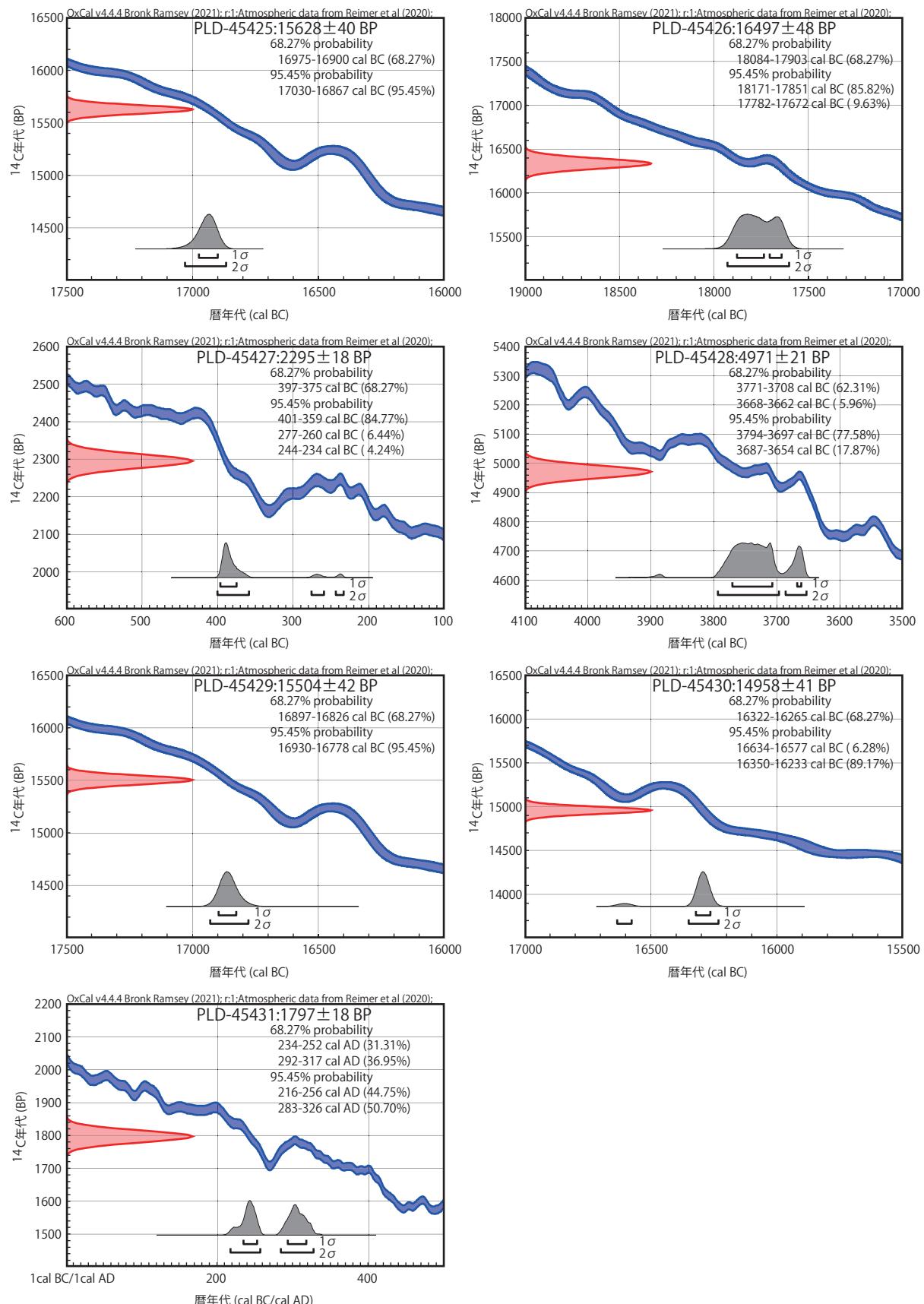
^{14}C 年代の暦年較正には 0xCal4.4 (較正曲線データ:IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-45425 試料 No. 1	-28.96 \pm 0.25	15628 \pm 40	15630 \pm 40	16975–16900 cal BC (68.27%)	17030–16867 cal BC (95.45%)
PLD-45426 試料 No. 2	-28.40 \pm 0.19	16497 \pm 48	16495 \pm 50	18084–17903 cal BC (68.27%)	18171–17851 cal BC (85.82%) 17782–17672 cal BC (9.63%)
PLD-45427 試料 No. 3	-24.31 \pm 0.26	2295 \pm 18	2295 \pm 20	397–375 cal BC (68.27%)	401–359 cal BC (84.77%) 277–260 cal BC (6.44%) 244–234 cal BC (4.24%)
PLD-45428 試料 No. 4	-26.98 \pm 0.23	4971 \pm 21	4970 \pm 20	3771–3708 cal BC (62.31%) 3668–3662 cal BC (5.96%)	3794–3697 cal BC (77.58%) 3687–3654 cal BC (17.87%)
PLD-45429 試料 No. 5	-27.01 \pm 0.23	15504 \pm 42	15505 \pm 40	16897–16826 cal BC (68.27%)	16930–16778 cal BC (95.45%)
PLD-45430 試料 No. 6	-23.61 \pm 0.31	14958 \pm 41	14960 \pm 40	16322–16265 cal BC (68.27%)	16634–16577 cal BC (6.28%) 16350–16233 cal BC (89.17%)
PLD-45431 試料 No. 7	-27.05 \pm 0.27	1797 \pm 18	1795 \pm 20	234–252 cal AD (31.31%) 292–317 cal AD (36.95%)	216–256 cal AD (44.75%) 283–326 cal AD (50.70%)

4. 考察

今回の測定結果は、大きくは後期更新世と完新世に属する年代値に区分できる。後期更新世の年代値（以下の較正年代は 2σ の値）を示す試料は、試料 No. 1 (PLD-45425) の ^{14}C 年代が 15630 \pm 40 BP、較正年代が 17030–16867 cal BC / 18979–18816 cal BP (95.45%)、試料 No. 2 (PLD-45426)



第3図 暦年較正結果

の¹⁴C年代が16495±50 BP、較正年代が18171–17851 cal BC / 20120–19800 cal BP (85.82%)および17782–17672 cal BC / 19731–19621 cal BP (9.63%)、試料No.5 (PLD-45429) の¹⁴C年代が15505±40 BP、較正年代が16930–16778 cal BC / 18879–18727 cal BP (95.45%)、試料No.6 (PLD-45430) の¹⁴C年代が14960±40 BP、較正年代が16634–16577 cal BC / 18583–18526 cal BP (6.28%)および16350–16233 cal BC / 18299–18182 cal BP (89.17%)である。今回の4点が示した後期更新世の年代値は、¹⁴C年代で1.49万年前～1.64万年前、較正年代で1.81万年～2.01万年前(cal BP)で、時間幅が存在する。工藤(2012)にもとづくと、得られた年代の期間は、最終氷期最寒冷期に相当する。

一方、完新世の年代値の試料について、古い順に示すと、試料No.4 (PLD-45428) の¹⁴C年代が4970±20 BP、較正年代が3794–3697 cal BC (77.58%)および3687–3654 cal BC (17.87%)、試料No.3 (PLD-45427) の¹⁴C年代が2295±20 BP、較正年代が401–359 cal BC (84.77%)、277–260 cal BC (6.44%)、244–234 cal BC (4.24%)、試料No.7 (PLD-45431) の¹⁴C年代が1795±20 BP、較正年代が216–256 cal AD (44.75%)および283–326 cal AD (50.70%)である。

縄文時代の土器型式および時期区分と暦年代の関係については小林(2017)、弥生時代～古墳時代前期については森岡ほか(2016)と若林(2018)を参照すると、試料No.4の暦年代は縄文時代前期後葉～末葉、試料No.3は弥生時代前期後半～中期前半前後、試料No.7は弥生時代終末期ないし古墳時代初頭～古墳時代前期前半に対比できる。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料では、No.1とNo.7が最終形成年輪の確認できない部位不明の木片である。したがって、No.1とNo.2の測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337–360.
- 小林謙一 (2017) 縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史. 373p, 新泉社.
- 森岡秀人・三好玄・田中元浩 (2016) 総括. 古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335–398, 六一書房.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen,

U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62 (4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

若林邦彦（2018）近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代—石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比—. 同志社大学考古学研究室編「同志社大学考古学シリーズX II 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集」：119–129, 同志社大学考古学研究室.

第5章 おわりに

津万遺跡群2に該当する西嶋地区及び嶋地区の遺構及び遺物の調査成果については、本報告第3章において記載したとおりである。

検出した遺構は、各地区を蛇行するように流れる自然流路（NR）、及び流路（SR）の影響を搔い潜るように点在しているように見受けられ、竪穴建物及び掘立柱建物を主とする居住域に伴う遺構、木棺墓及び土壙墓を主とする墓域に伴う遺構が展開されている。

本項では、各調査区で検出した遺構（特に居住域としての竪穴建物及び掘立柱建物、墓域としての木棺墓及び土壙墓）の配置等から、本調査成果を概観する。

1. 居住域

竪穴建物では、嶋3区のSH01は、他の遺構との切り合い関係はなく、図化可能な遺物がないものの、形状及び規模等から弥生時代後期前半以降と考えられる。また、西嶋4W区のSH150は、古墳時代後期と考えられ、8世紀後半以降の遺物が出土している西嶋4E区の自然流路（NR01）とほぼ同方向に延びる、中世以降の遺物が出土している溝（SD118・130）に切られており、遺構の前後関係として齟齬はない。

掘立柱建物では、西嶋4E区のSB01は、弥生時代後期後葉の木棺墓（ST05）を切っており、ST05より新しいが、同遺構と同一方位にあり、弥生時代に属すると考えられる。また、その他の掘立柱建物では、柱穴から古墳時代以降と思われる土師器の小片が出土している嶋4区のSB01の他、西嶋4W区SB01、西嶋4E区SB02・03・04・05は平安時代以降～中世の遺構と考えられており、西嶋4W・E区周辺で同時期の居住域を形成していたことが窺える。

2. 墓域

津万遺跡群2での墓と判断される遺構としては、西嶋4W区、及び西嶋4E区における木棺墓、及び土壙墓が挙げられ、ほぼこの両区で集中しているが、西嶋4W区の木棺墓（ST209）や西嶋4E区の木棺墓（ST05・06）、土壙墓（ST07・08）は弥生後期、西嶋4W区の木棺墓（ST46）は奈良時代～平安時代、西嶋4W区の木棺墓（ST22）は平安時代～中世と、時期不明ながら西嶋4W区ST22と長軸方位が近似する木棺墓（ST47）等、多様な時代構成となっている。

特に、西嶋4W区の木棺墓（ST22）は、同区の掘立柱建物（SB01）の床下にあり、子孫の守り神として屋敷地に祀られた先祖の墓である「屋敷墓」とされるため、同時期の居住域内における墓に対する意識が窺える。

3. 周辺地区との関係性

上記において、津万遺跡群2の地区で検出した遺構について、居住域と墓域という括りで述べたが、既刊報告書に掲載された周辺地区【①〔寺内0区～寺内6区：津万遺跡群1（兵庫県文化財調査報告第526冊）〕、②〔嶋5区・嶋6区・津万1W区・津万1E区・津万2区：津万遺跡群3（兵庫県文化財調査報告第503冊）〕】の状況と本地区との関係性から集落の状況を述べる。

まず、居住域としては、弥生時代後期において嶋3区の竪穴建物（SH01）を検出しているが、②において弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物を多数検出しており、恐らくその一群に括られるものと考

えられる。また、同時期の竪穴建物としては、①の北半部の地区〔寺内0区（SH01）・寺内1区（SH01）〕で検出しており、別の群の居住域と考えられる。そして、古墳時代後期に属する西嶋4W区の竪穴建物（SH150）は、同時期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されていないことから、周辺において同時期の一群の存在が考えられる。

掘立柱建物については、弥生時代後期の遺構として、西嶋4E区のSB01以外は、①の嶋6区（SB10）が見られるのみで、別の一群として捉えられる。

上記以外の掘立柱建物については、奈良時代以降、中世にかけて、本地区及び①、②において一群が見られ、本地区では特に西嶋4W・E区において一群を形成している。

次に、墓域では、弥生時代後期、古墳時代、奈良時代～平安時代、平安時代～中世と複数時期において西嶋4W・E区で検出されており、同地区周辺が複数の時代を通して墓域として意識された事が窺えるが、平安時代～中世では、屋敷墓としての性格を持った墓（木棺墓）が、居住域である屋敷地とセットで現れることから、土地利用も含めた意識の違いが窺われる。

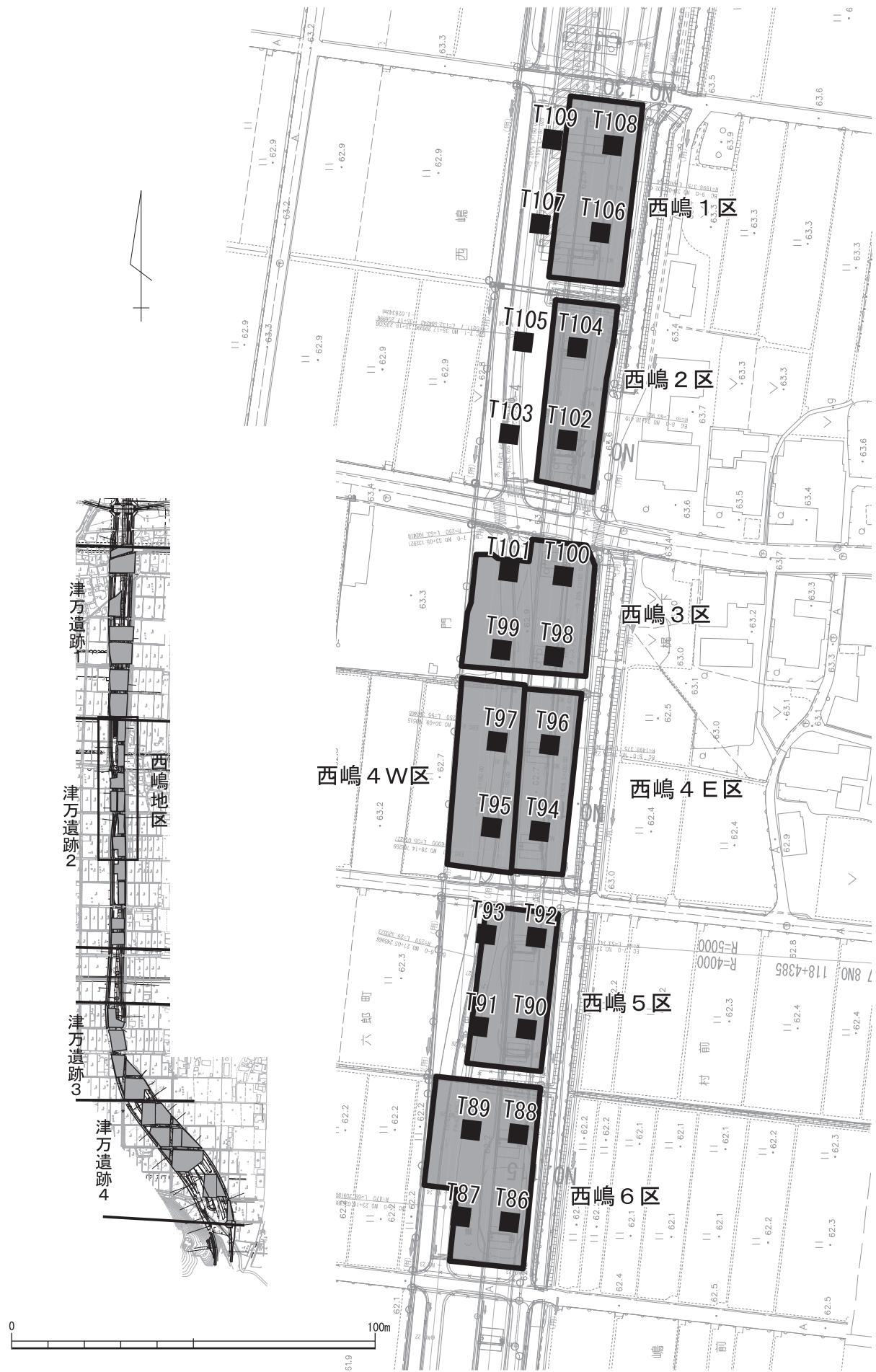
津万遺跡群2とその周辺の地区では、何れの地区、何れの時代においても自然流路及び流路、それに付随する溝が、集落が形成され始めた弥生時代中・後期以降、流れを変えながら、後世に渡って存在し、移ろいゆく時代時代において、集落の形成に大きく影響していたことが窺える。

4. おわりに

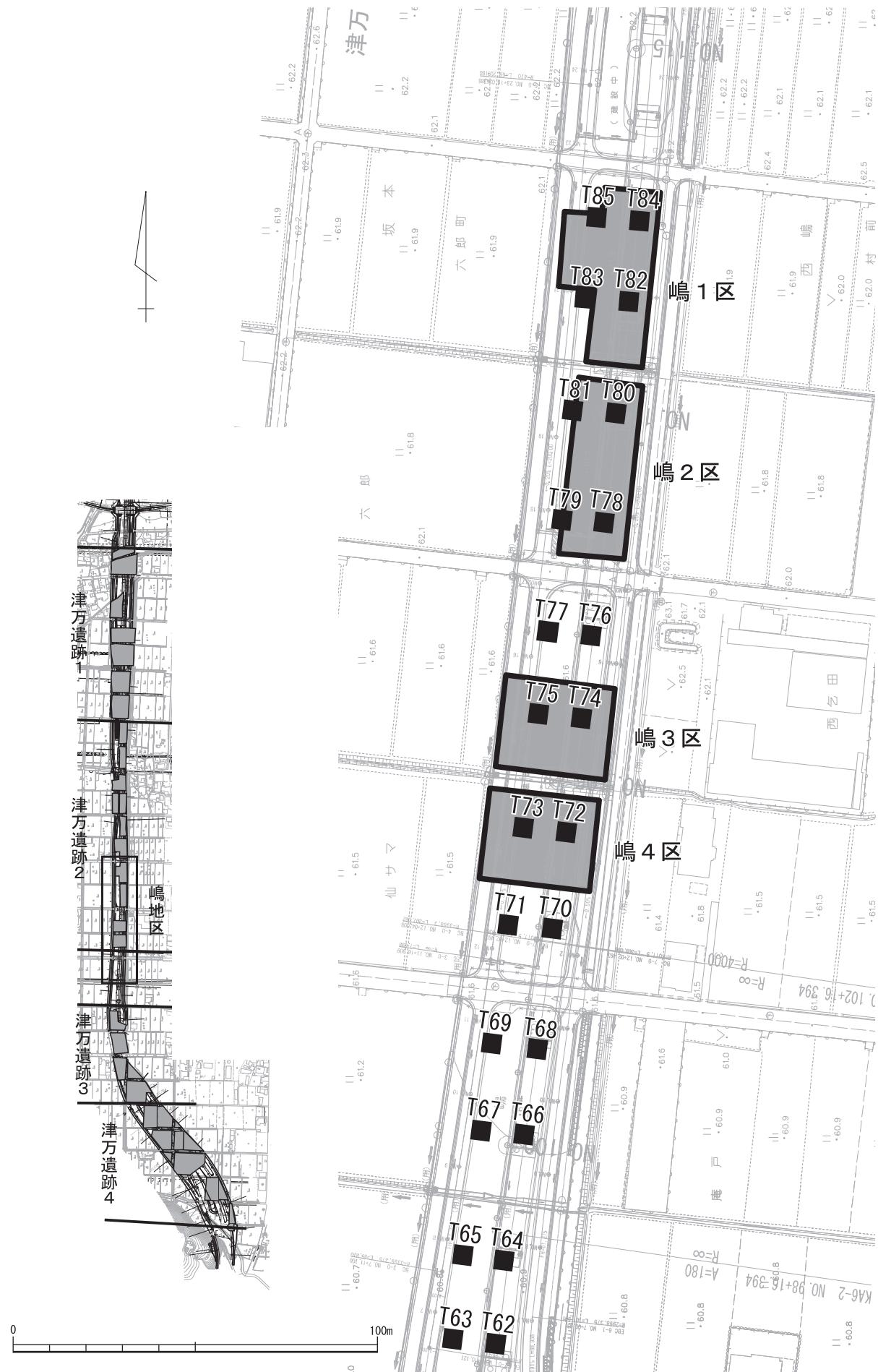
さて、平成12年度の分布調査に始まり、平成16年度実施の確認調査を経て、平成19年度から平成30年度に渡って実施した津万遺跡群の発掘調査は、一般国道175号西脇北バイパス事業に係る施工範囲内での極限的な部分で得られた成果であり、集落全体の規模、性格を評価する上では、非常に限定的結果であることは否めない状況である。ただし、今後、この調査地周辺において、公的あるいは民間における開発事業に伴う発掘調査が実施された際に、これまでの一連の調査成果が、津万遺跡群の評価への一助となることは、紛れもない事実であるし、そう望むものである。

なお、本報告では、本来ならば、津万遺跡群全体の集落形成に係る地形環境の復元について、現地指導いただいた立命館大学非常勤講師 青木哲哉氏の詳細な分析成果を掲載する予定であったが、紙面の都合上困難となつたため、今後、隣接する上戸田遺跡の本報告で掲載することを以て、津万遺跡群とその周辺に営まれた集落形成の理解に寄与することができればと考える次第である。

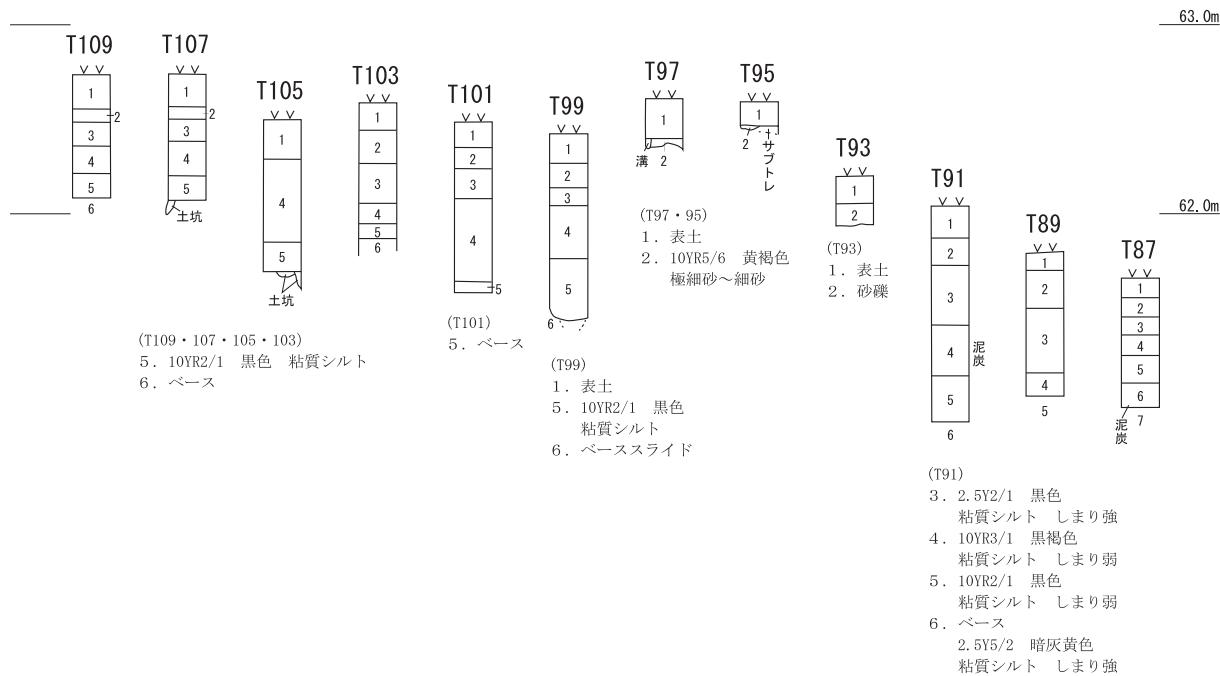
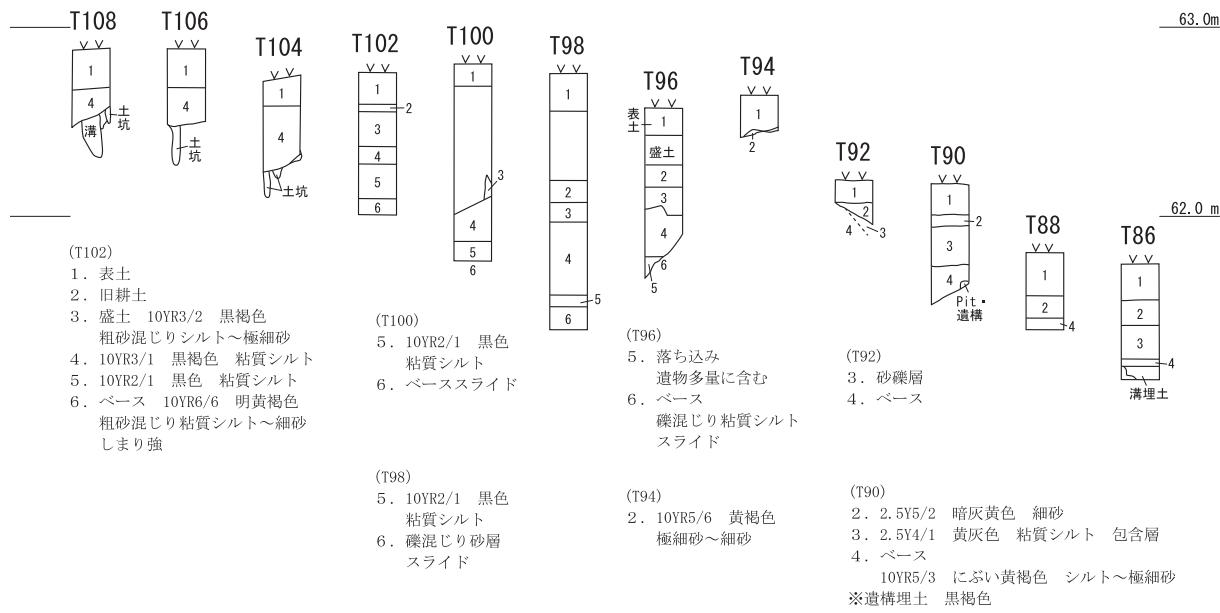
図 版



津万遺跡群2 西嶋地区 トレンチ配置図



津万遺跡群2 島地区 トレンチ配置図

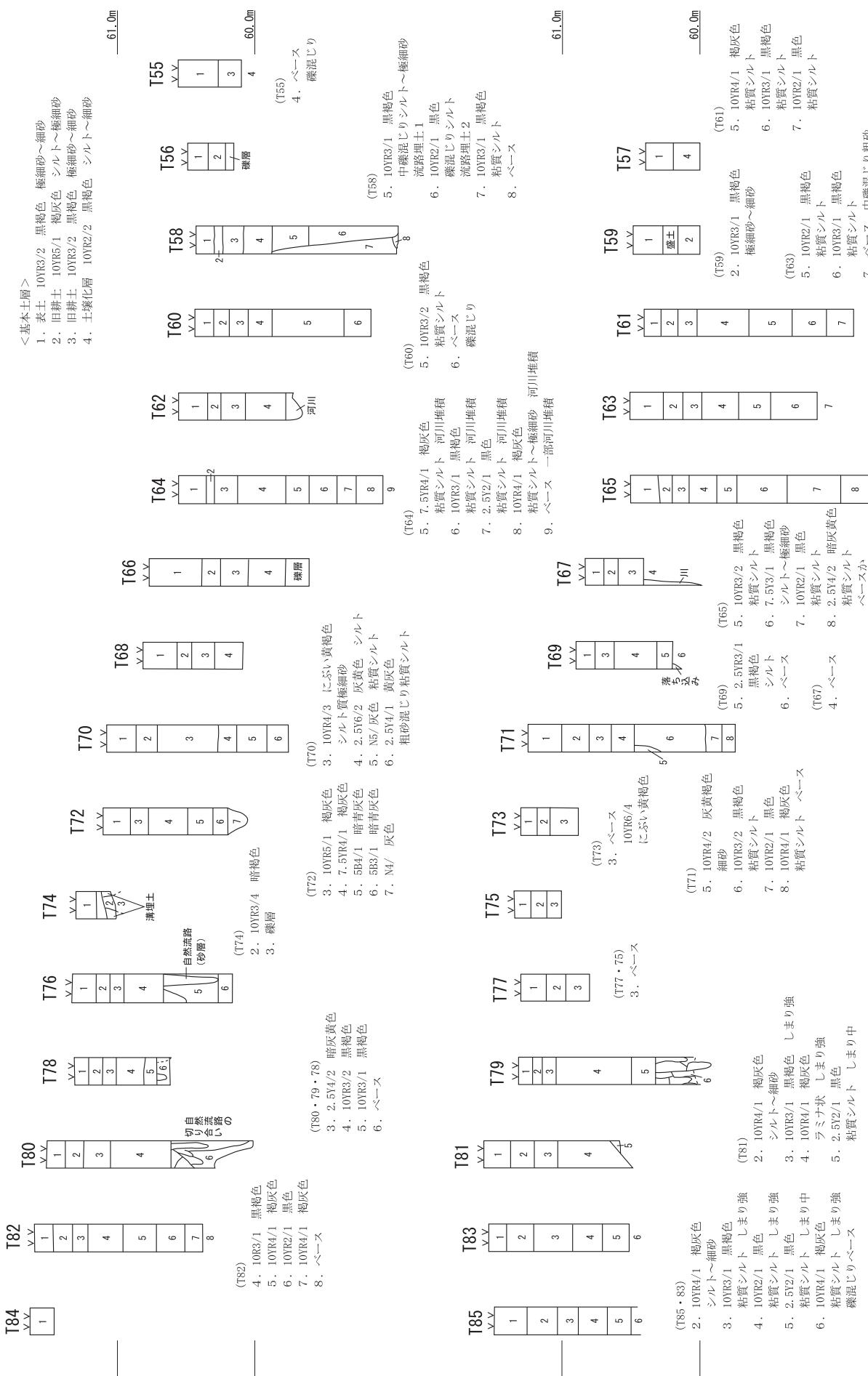


<基本土層>
1. 表土 10YR2/2 黒褐色 極細砂～細砂
2. 旧耕土 10YR5/1 褐灰色 シルト～極細砂
3. 旧耕土 10YR3/2 黒褐色 極細砂～細砂
4. 土壌化層 10YR2/2 黒褐色 シルト～細砂

(T89)
2. T90 同じ
5. ベース
2.5Y6/3 にぶい黄色
シルト～極細砂

(T87)
7. ベース 黄灰色

図版 4



津万遺跡群2 島地区 確認調査柱状図



津万遺跡群 2 調査区配置図

図版 6



津万遺跡群 2 西嶋・嶋地区遺構全体図



津万遺跡群 2 西嶋地区遺構全体図

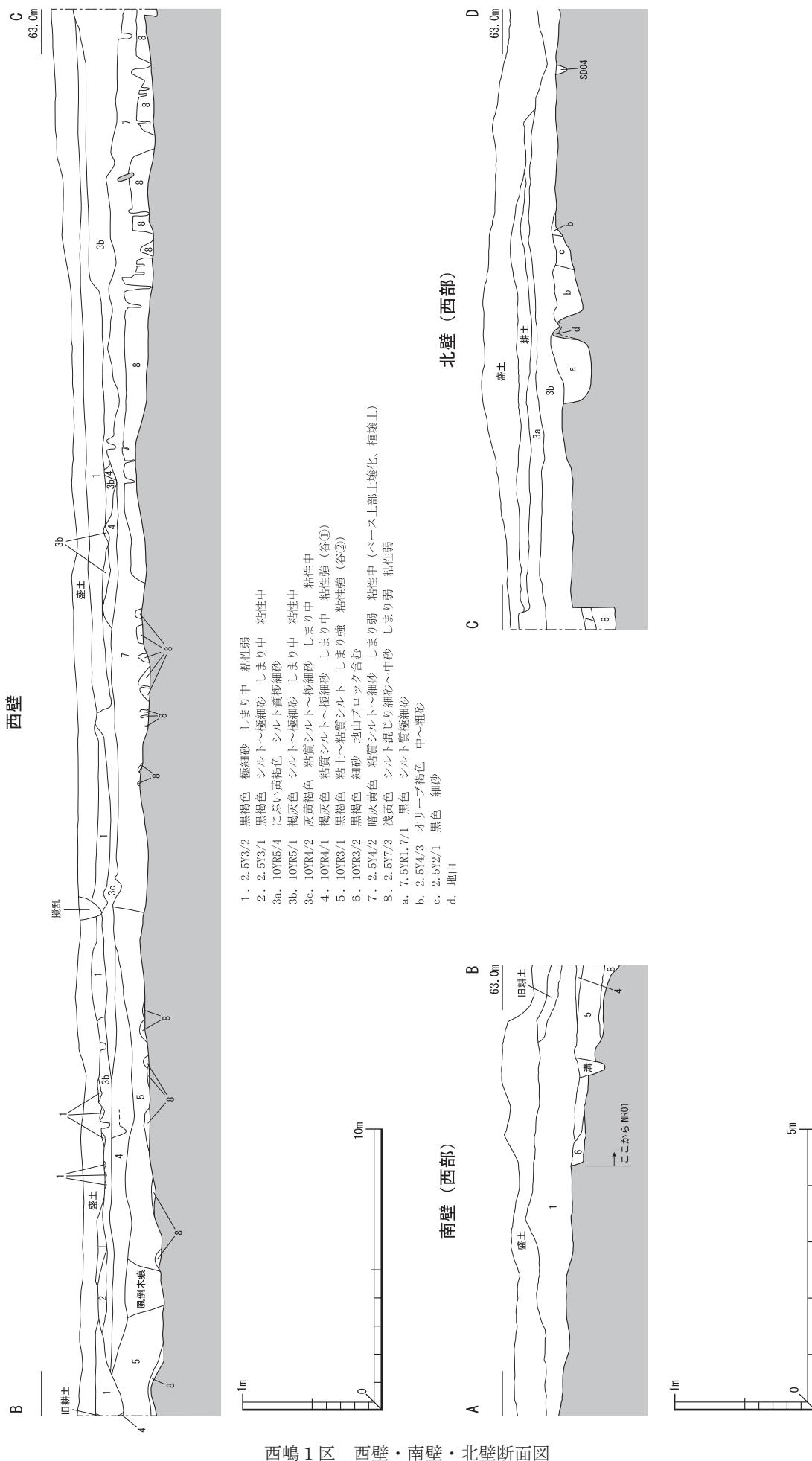
図版 8

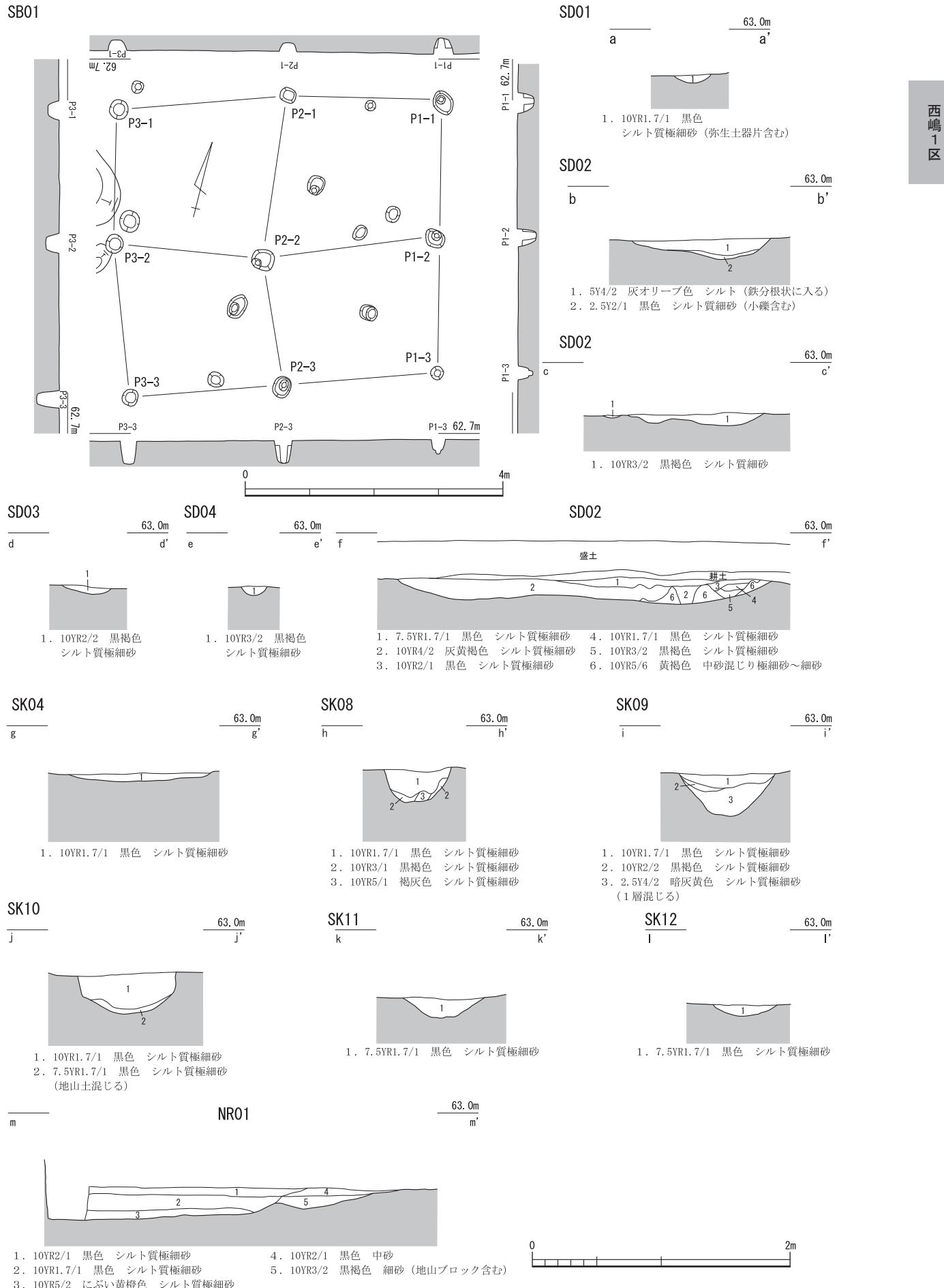


津万遺跡群 2 嶋地区遺構全体図



西嶋1区 全体図

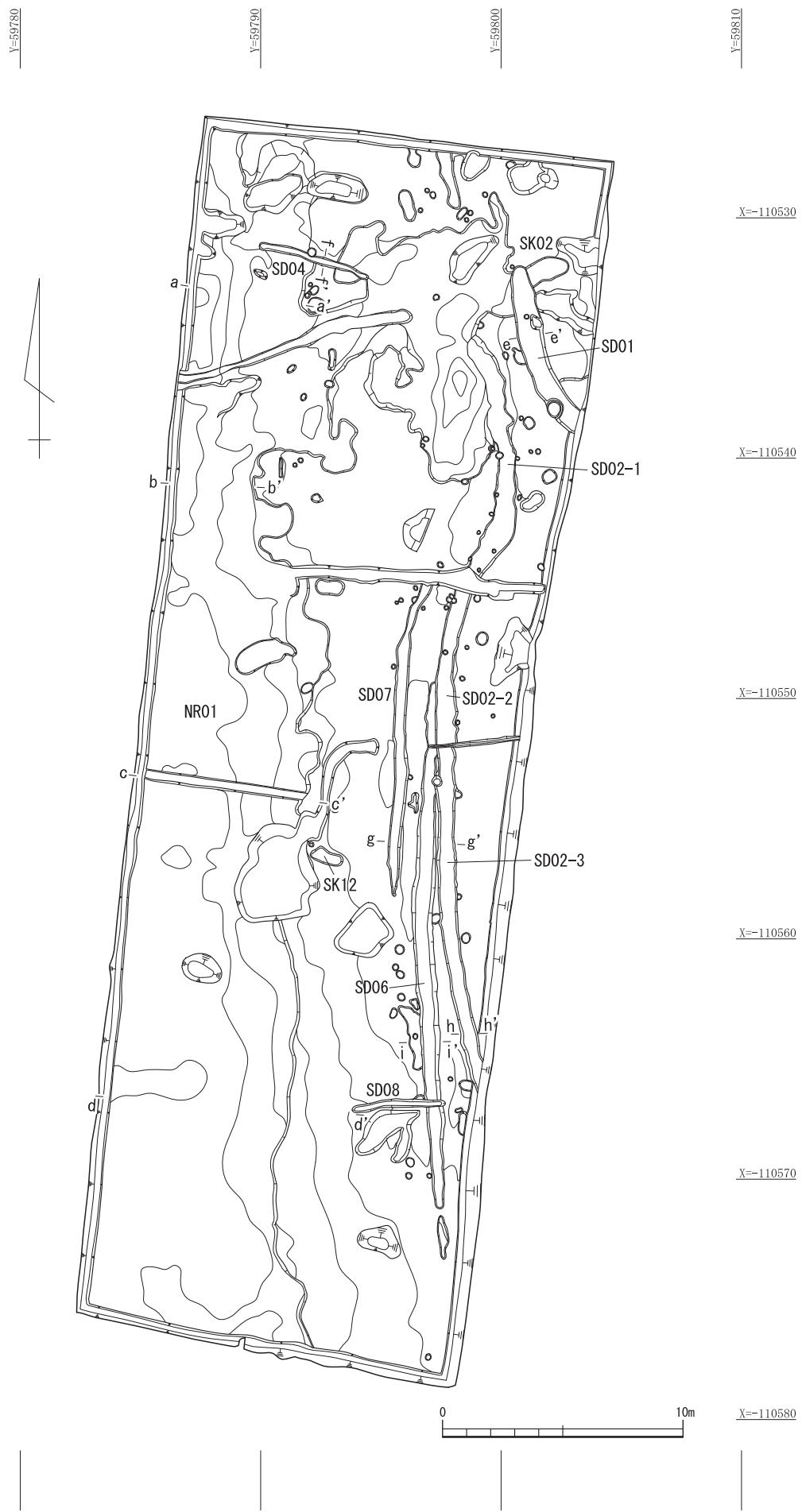




西嶋1区 掘立柱建物・溝・土坑・自然流路

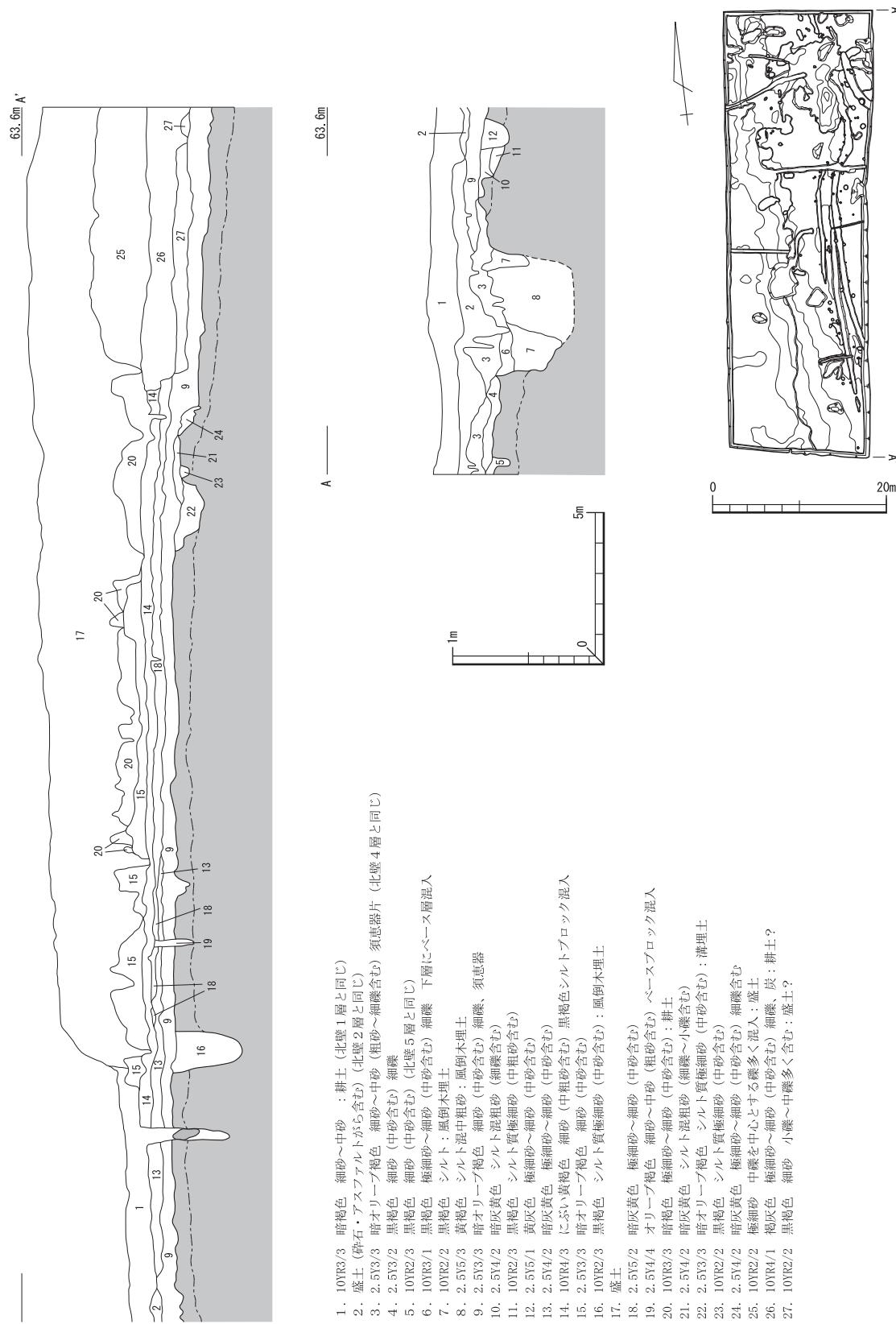
図版12

西嶋
図2

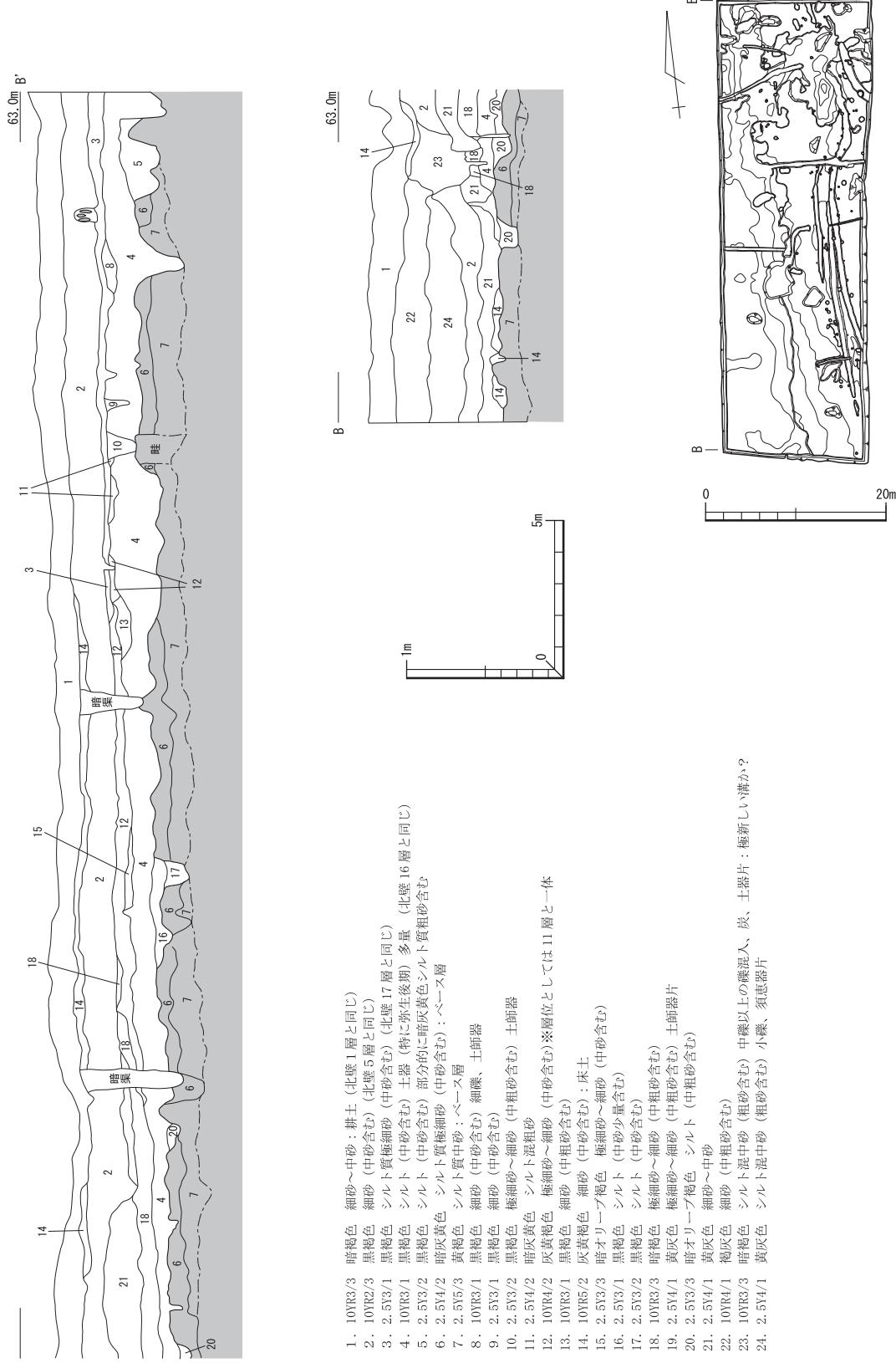


西島 2 区 全体図

調査区東壁断面

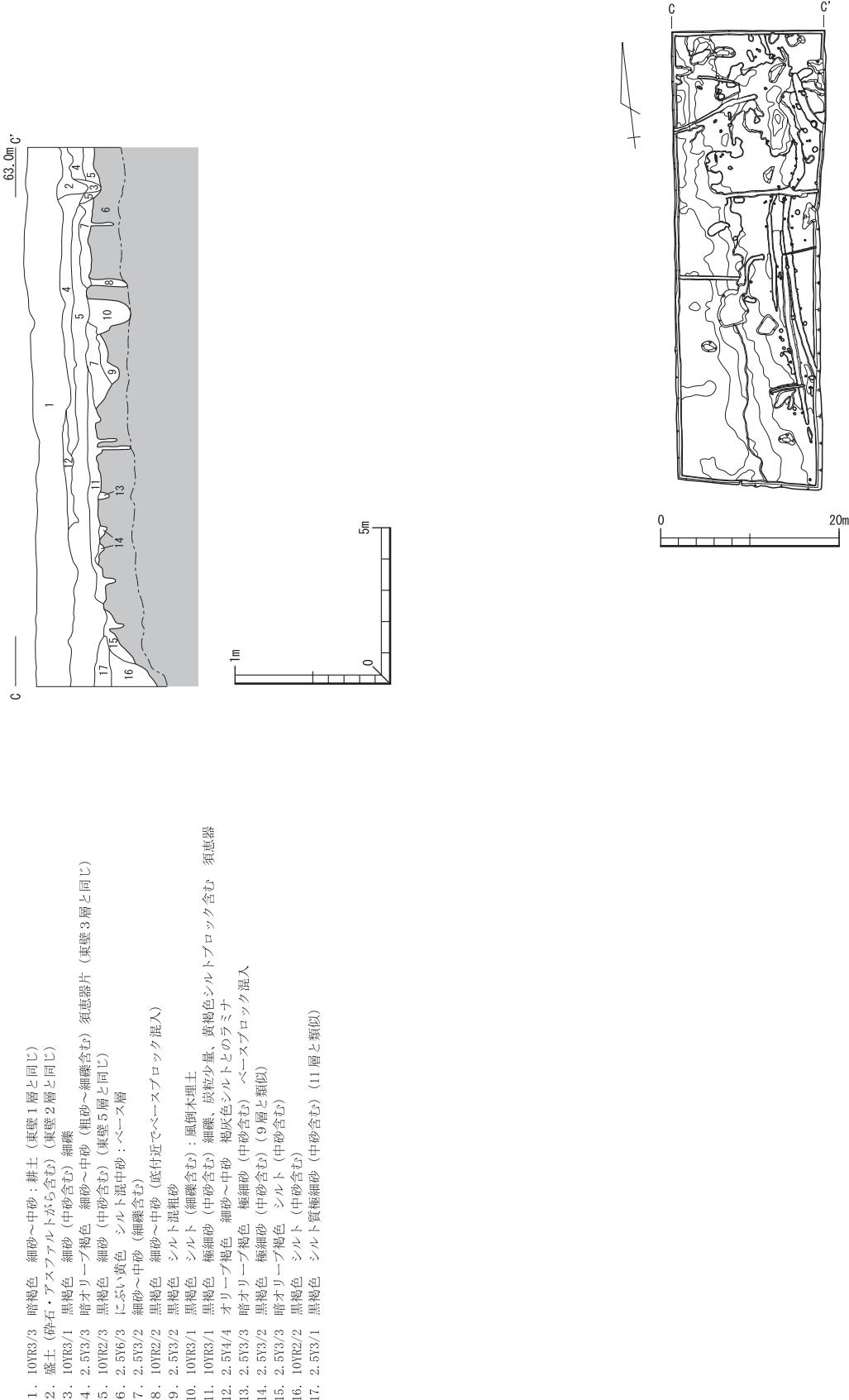


調查區西壁斷面



西嶋2区 調査区西壁断面図

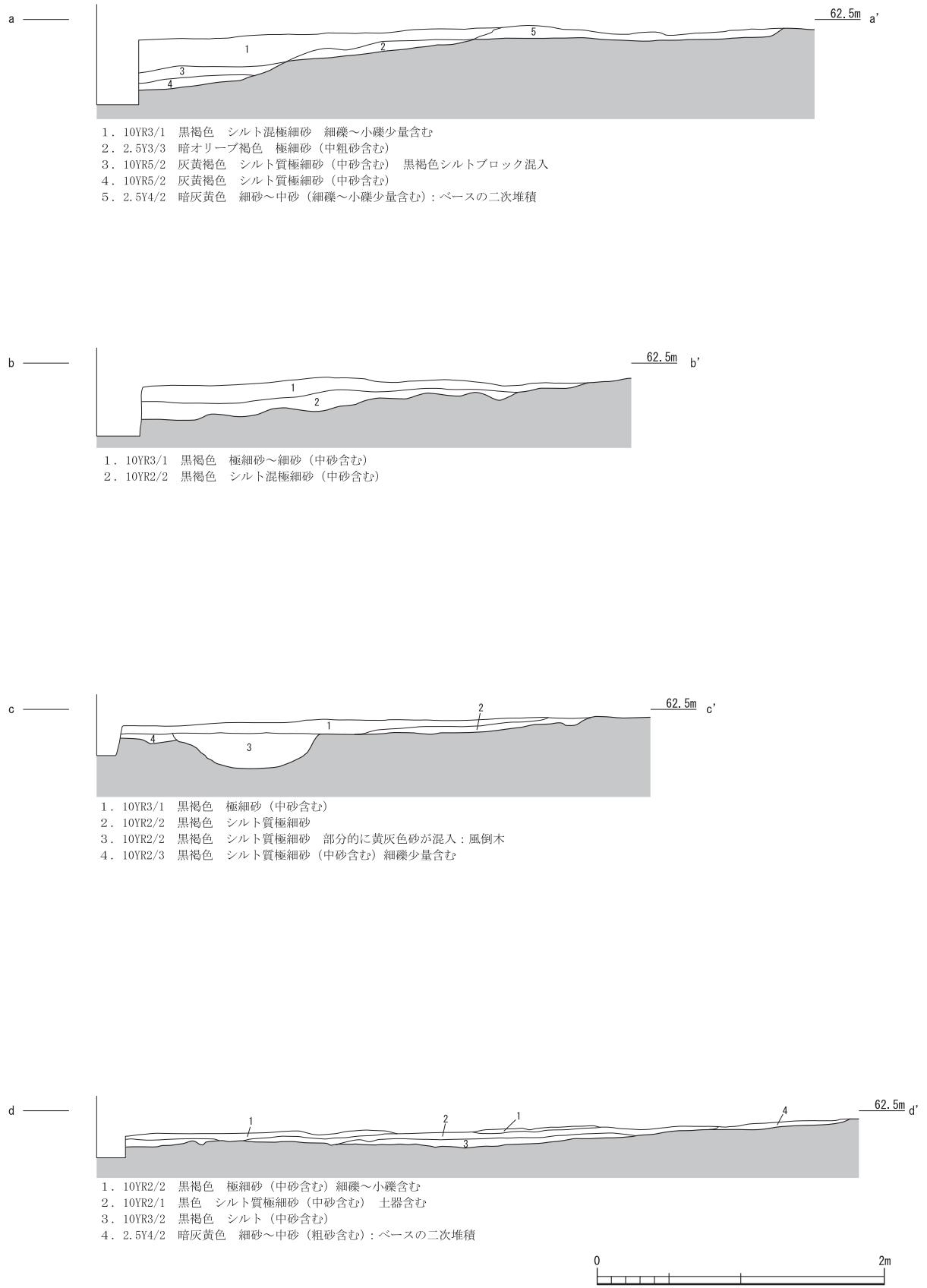
調査区北壁断面



西嶋2区 調査区北壁断面図

図版 16

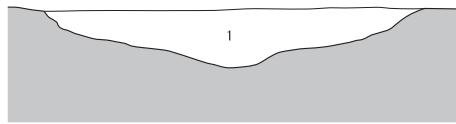
NR01



西嶋 2 区 自然流路断面図

SD01

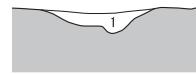
e

— 62.8m —
e'

1. 10YR4/2 暗黄褐色 細砂～中砂

SD04

f

— 62.8m —
f'

1. 10YR2/3 黒褐色 極細砂～細砂（中砂含む）

SD07・06・02

g

— 62.8m —
g'

SD07

SD06

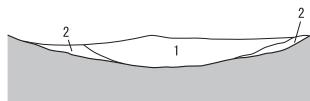
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細砂～細砂
2. 2.5Y3/1 黒褐色 細砂（中砂～粗砂含む）
3. 10YR2/1 黒色 シルト
(暗灰黄色シルトとのラミナ)

SD02

1. 2.5Y3/2 黒褐色 細砂（中砂含む）
2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂（中砂含む）

SD02

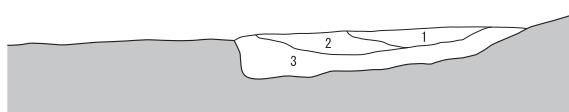
h

— 62.8m —
h'

1. 2.5Y3/2 黒褐色 細砂（中砂含む）
2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂（中砂含む）

SD06

i

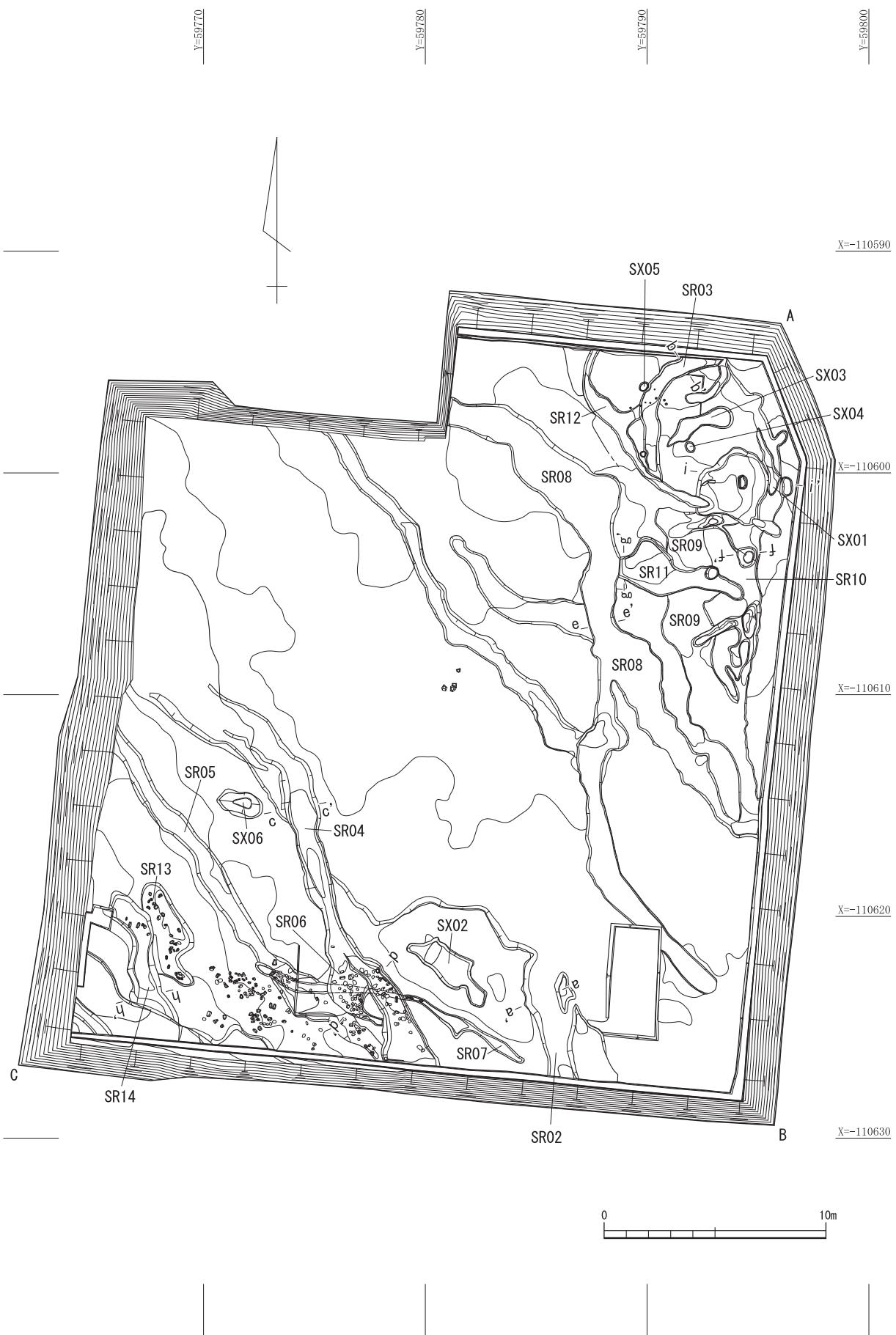
— 62.8m —
i'

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細砂～細砂
2. 2.5Y3/1 黒褐色 細砂（中砂～粗砂含む）
3. 10YR2/1 黒色 シルト（暗灰黄色シルトとのラミナ）

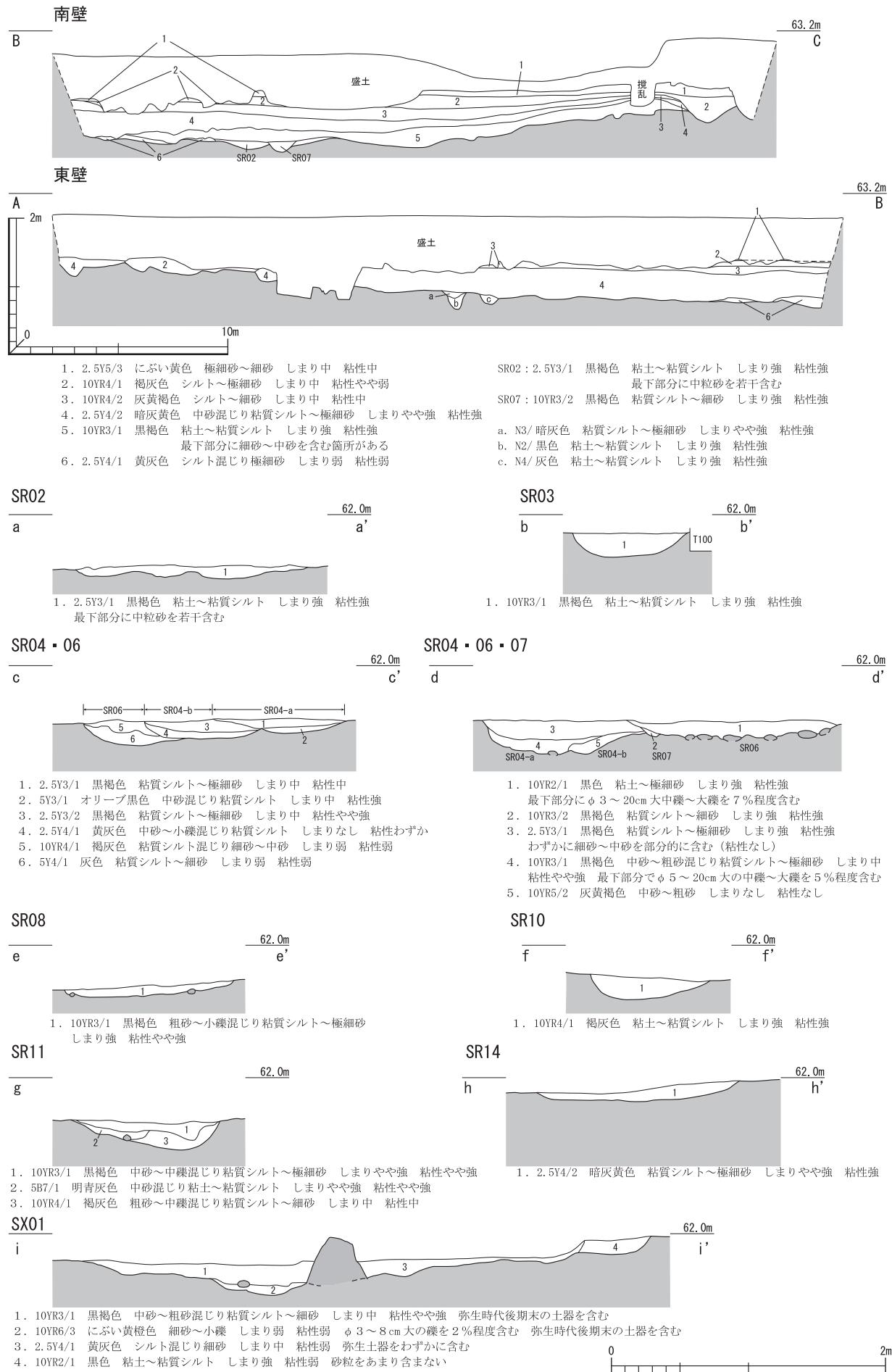


図版 18

西嶋3区

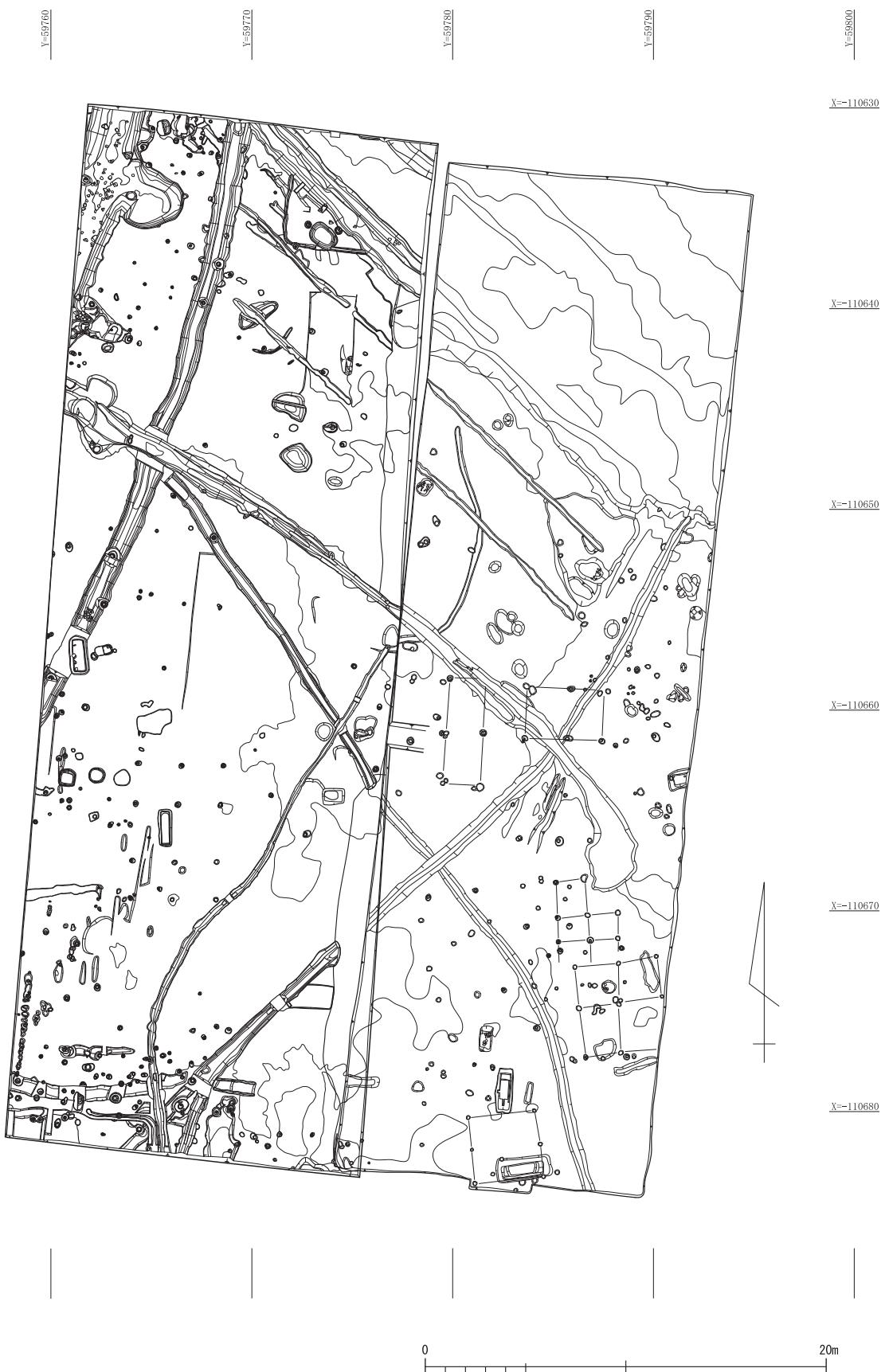


西嶋3区 全体図



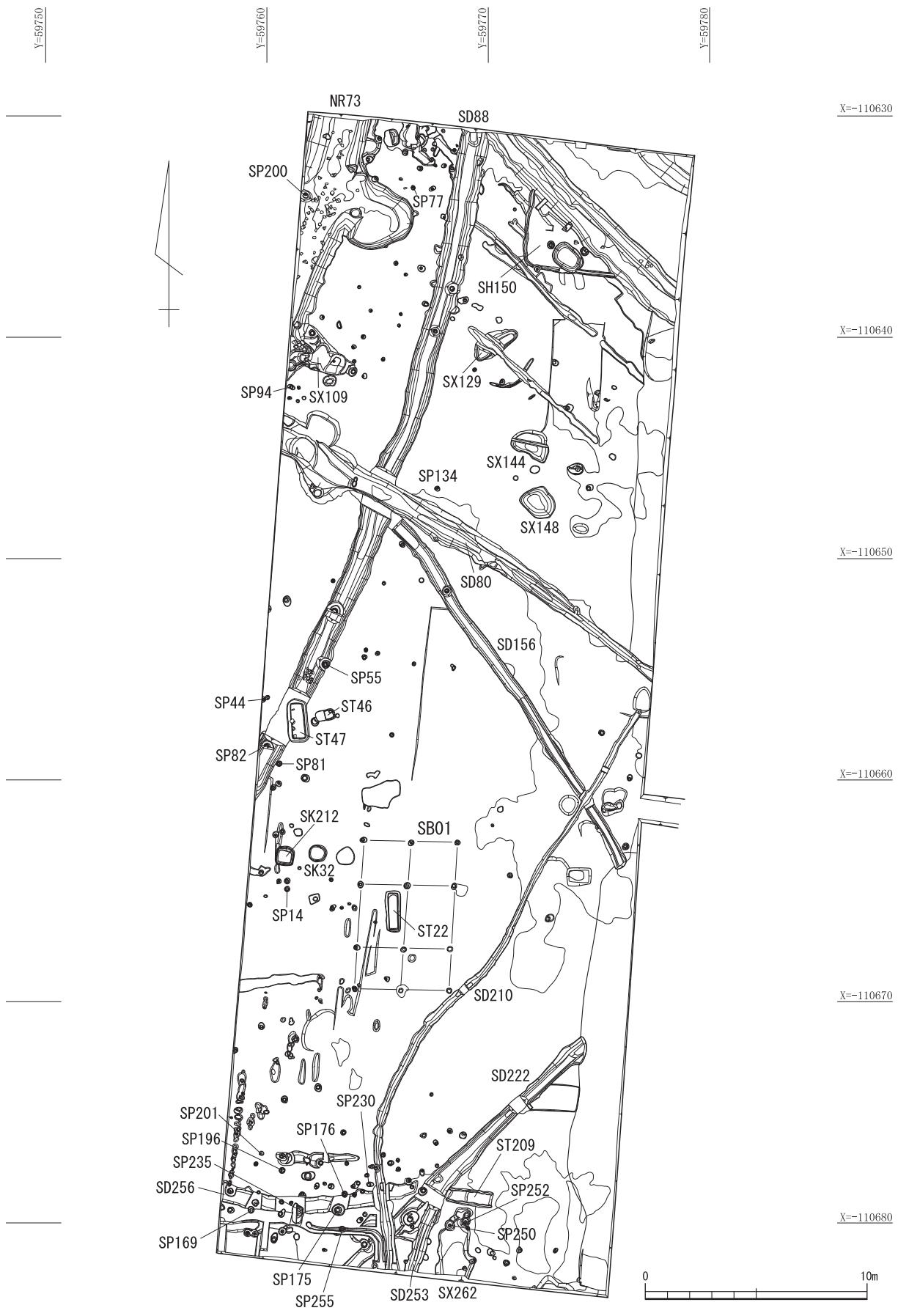
西嶋3区 南壁・東壁・流路・土坑状遺構断面図

図版20



西島4W区・4E区 全体図

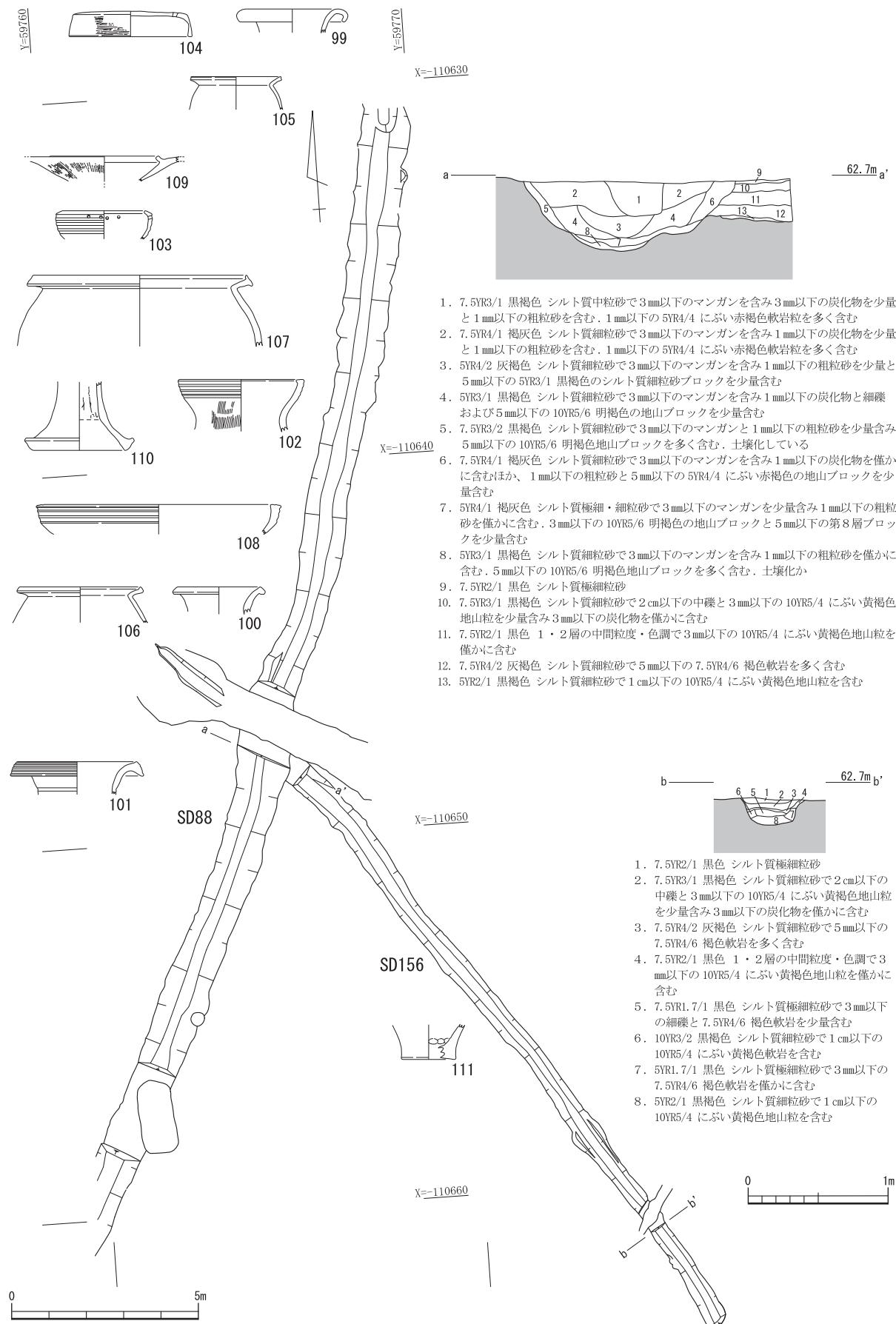
西嶋4W区



西嶋4W区 全体図

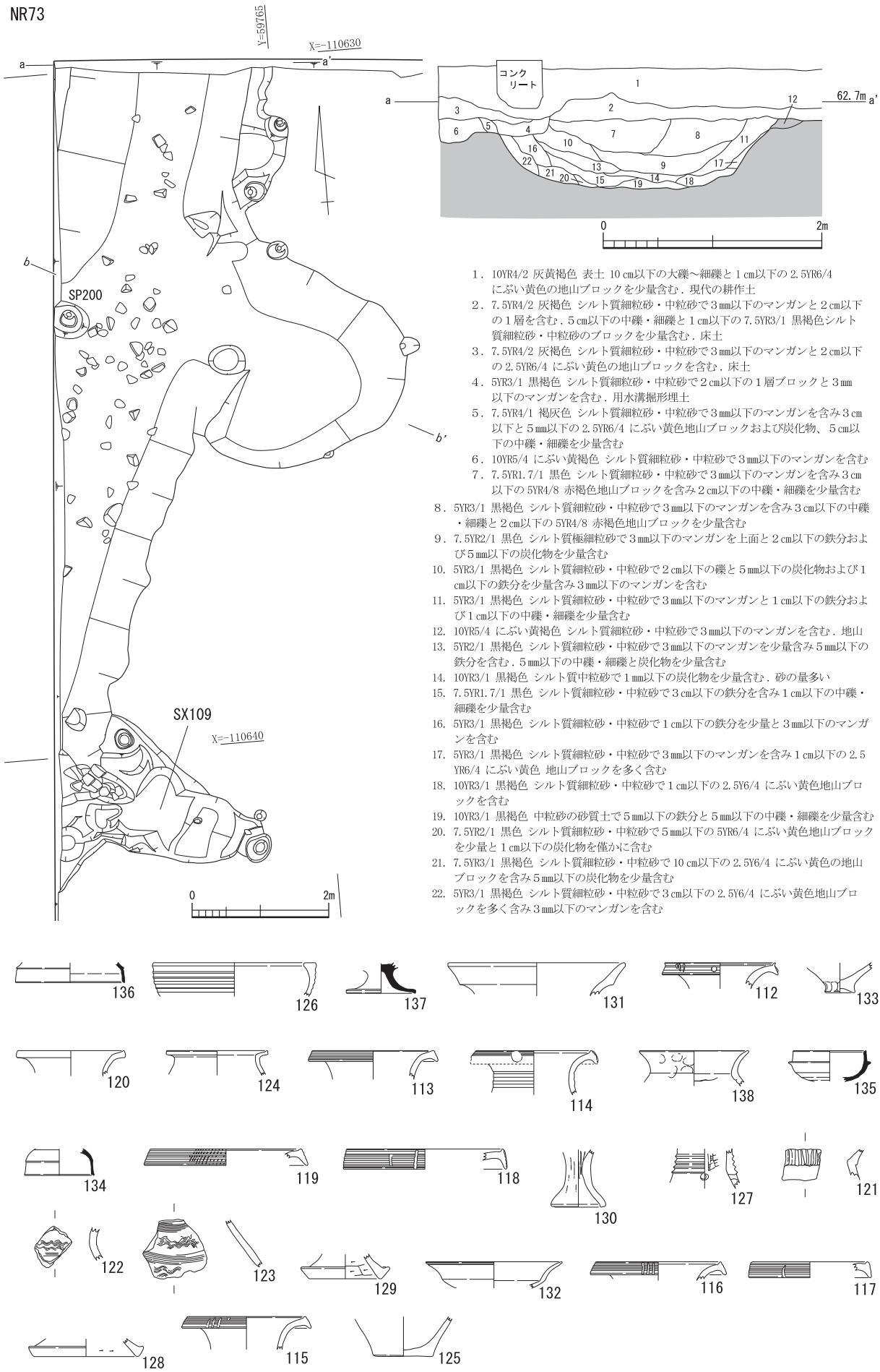
図版22

西嶋4W区



西嶋4W区 溝1

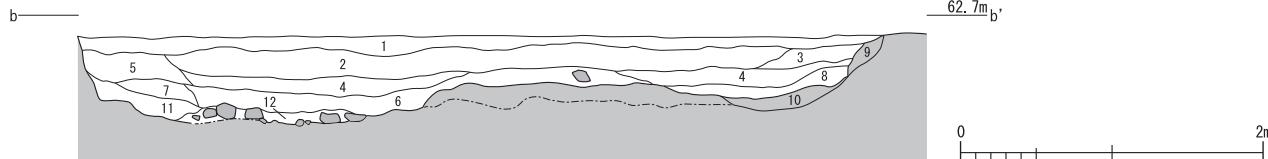
NR73



西嶋4W区

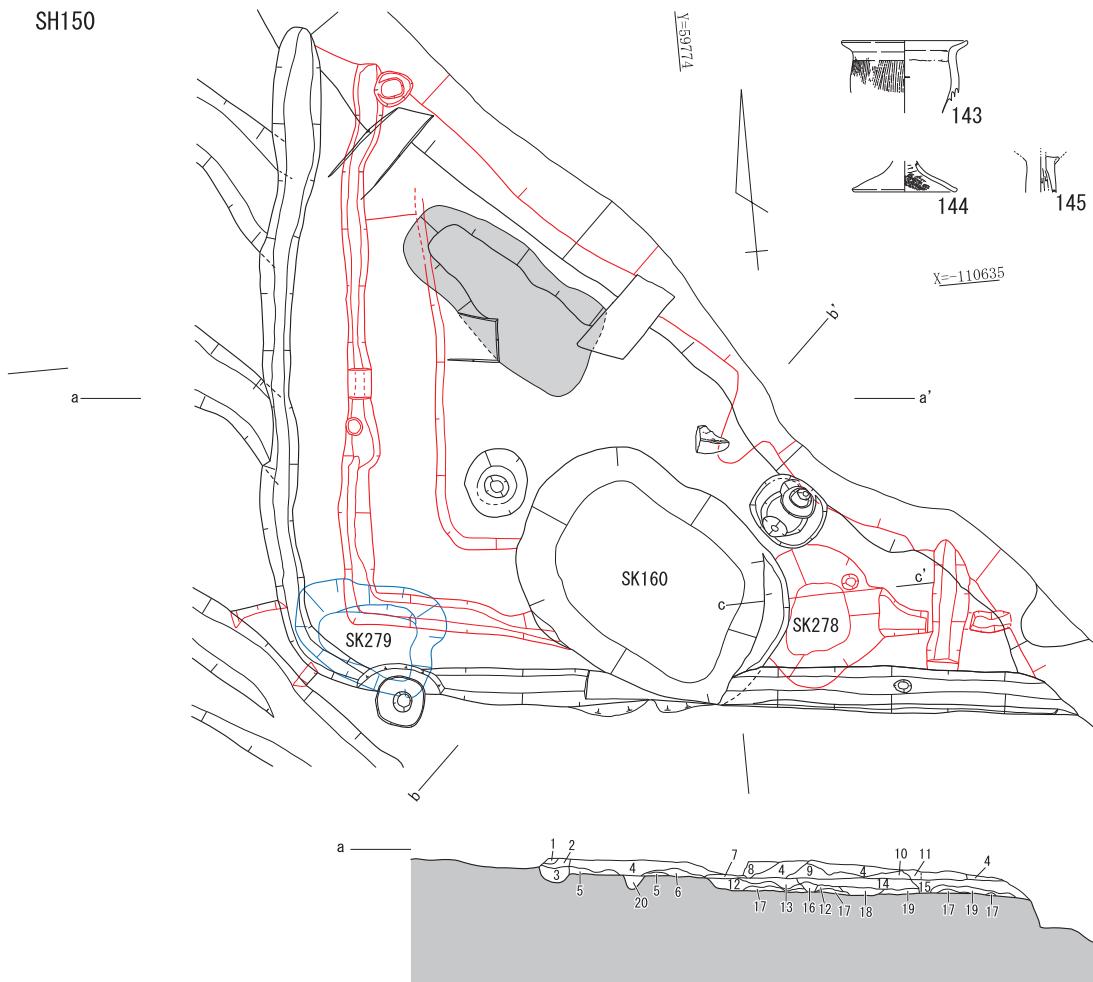
図版24

NR73



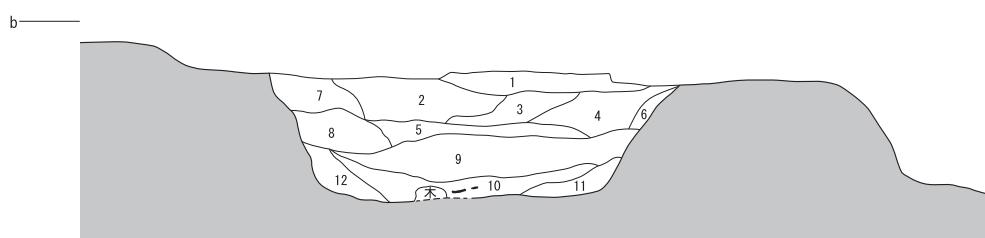
1. 5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で5mm以下の量管状鉄分を含み1cm以下の第2層と10YR5/4にぶい黄褐色地山ブロックを少量含む
2. 7.5YR1.7/1 黒色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと3cm以下の量管状鉄分を含み地山ブロックと2cm以下の中礫・細礫を少量含む
3. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを含み3cm以下の中礫・細礫と2cm以下の量管状鉄分を少量含む
4. 7.5YR2/1 黒色 シルト質極細粒砂で3mm以下のマンガンを上面に少量と2cm以下の量管状鉄分および5mm以下の炭化物を少量含む
5. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で2cm以下の礫と5mm以下の炭化物および1cm以下の鉄分を少量含み3mm以下のマンガンを含む。地山ブロック少量含む
6. 10YR3/1 黒褐色 中粒砂の砂質土で5mm以下の鉄分と5mm以下の中礫・細礫および地山ブロックを少量含む
7. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを含み1cm以下の2.5YR6/4にぶい黄色の地山ブロックを多く含む
8. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガン・鉄分を少量含み1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色地山ブロックを含む
9. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを含み1cm以下の2.5YR6/4にぶい黄色地山を多く含む。地山土壤化層
10. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色地山ブロックを多く含み5mm以下の鉄分と10cm以下の大礫～細礫を少量含む。地山土壤化層
11. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の鉄分および3mm以下の2.5Y6/4にぶい黄色地山ブロックを少量含む
12. 5YR2/1 黑褐色 中粒砂を中心とした砂質土で10cm以下の大礫～細礫を多く含み5mm以下の2.5Y6/4にぶい黄色地山ブロックを少量含む

SH150



1. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを含む
 2. 7.5YR5/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと3mm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを含む
 3. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと7.5YR5/4 明褐色の地山ブロックを少量含む
 4. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを少量含む
 5. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを含む
 6. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを少量含む
 7. 10YR4/2 灰暗褐色 シルト質細粒砂で1cm以下の5YR2/1 黑褐色のシルト質細粒砂ブロックを含み3mm以下のマンガンと鉄分を少量含む
 8. 第4層に相当するが1mm以下の炭化物を少量含み3mm以下の細礫を僅かに含む
 9. 第4層に相当するが3mm以下のマンガンと鉄分および炭化物を少量含む
 10. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと鉄分を少量含む
 11. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを含み3mm以下の鉄分と5mm以下の中礫・細礫を少量含む
 12. 10YR4/2 灰暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを含み1mm以下の粗粒砂・中粒砂を少量含む。1cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックと7.5YR4/1 暗褐色でシルト質細粒砂のブロックを含む
 13. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で2mm以下の炭化物と3mm以下のマンガンおよび2mm以下の極粗粒砂・粗粒砂を少量含み5mm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
 14. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと2cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含み5mm以下の炭化物を含む
 15. 7.5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で5mm以下の中礫・細礫と2mm以下の炭化物および5cm以下の7.5YR4/2 灰暗褐色 シルト質細粒砂のブロックを少量含む
 16. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で2mm以下の極粗粒砂と5mm以下の炭化物を少量含み3mm以下のマンガンを僅かに含む。5mm以下の10YR5/4にぶい黄褐色 シルト質細粒砂のブロックを含む
 17. 7.5YR4/2 灰暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと5mm以下の7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂のブロックを少量含み2cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを多く含む
 18. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを僅かに含み2mm以下の炭化物と1mm以下の粗粒砂・中粒砂を少量含む。1.5cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを含む
 19. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下の炭化物と1mm以下の粗粒砂・中粒砂および3mm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
 20. 7.5YR3/1.3 黑褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含み炭化物小片と5mm大の黄色地山礫を微量含む。粘質
- 0 2m

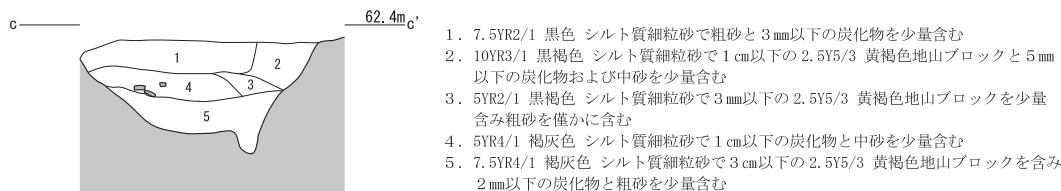
SK160



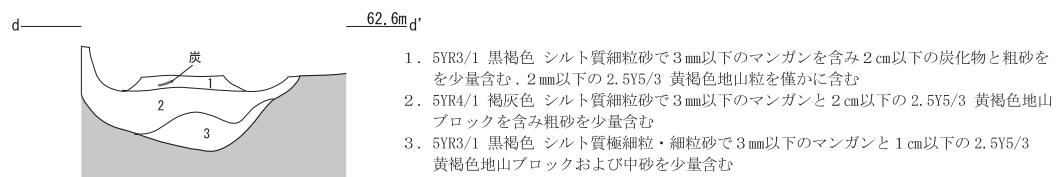
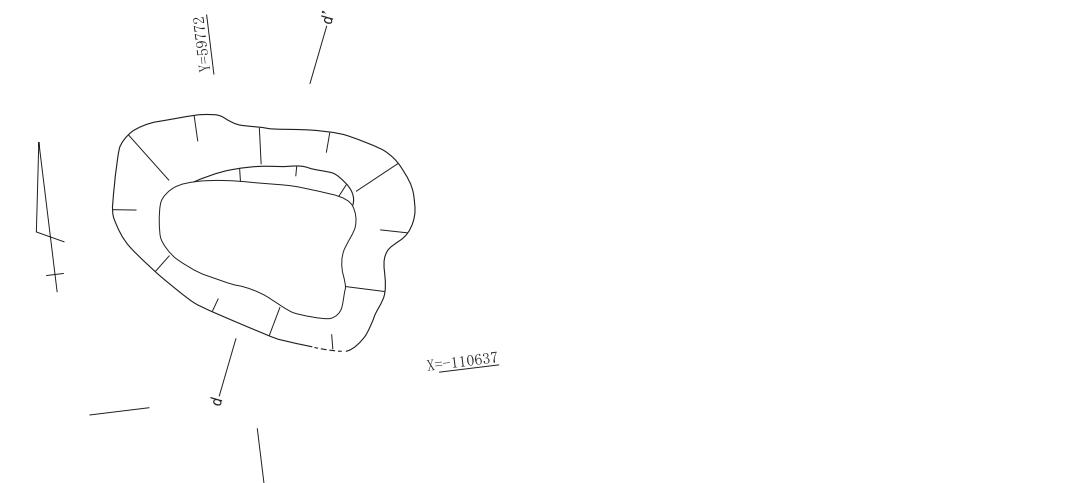
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質細粒砂で5mm以下のマンガンと3mm以下の鉄分を含み3cm以下の2.5Y5/3 黄褐色地山ブロックを多く含む
2. 10YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で2mm以下の極粗粒砂・粗粒砂を少量含み3mm以下のマンガン・鉄分と5cm以下の2.5Y5/3 黄褐色地山ブロックを含む
3. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分を含み2mm以下のマンガンと5mm以下の2.5Y5/3 黄褐色地山ブロックを少量含む
4. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分と2mm以下のマンガンを含み2cm以下の10YR5/3 にぶい黄褐色地山ブロックを多く含む
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分を含み1cm以下の以下のマンガンを少量含む
6. 10YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分と2mm以下のマンガンを含み3mm以下の10YR5/3 にぶい黄褐色地山ブロックを少量含む
7. 10YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分を含み2mm以下のマンガンと3mm以下の2.5Y5/3 黄褐色地山ブロックを少量含む。5mm以下の中礫・細礫を僅かに含む
8. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分と2mm以下のマンガンを含み2cm以下の10YR5/3 にぶい黄褐色地山ブロックを多く含む
9. 10YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下の鉄分を多く含み3cm以下の10YR5/3 にぶい黄褐色地山ブロックを含む。3mm以下の炭化物と1cm以下のマンガンおよび炭化物を少量含む
10. 10YR2/1 黒色 シルト質極細粒砂で5mm以下の鉄分を少量含み木材片を含む
11. 10YR2/1 黑色 シルト質極細粒砂で5mm以下の鉄分を含む
12. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質極細粒砂で3mm以下の炭化物を少量含み5mm以下の鉄分を僅かに含む

西嶋4W区

SK278

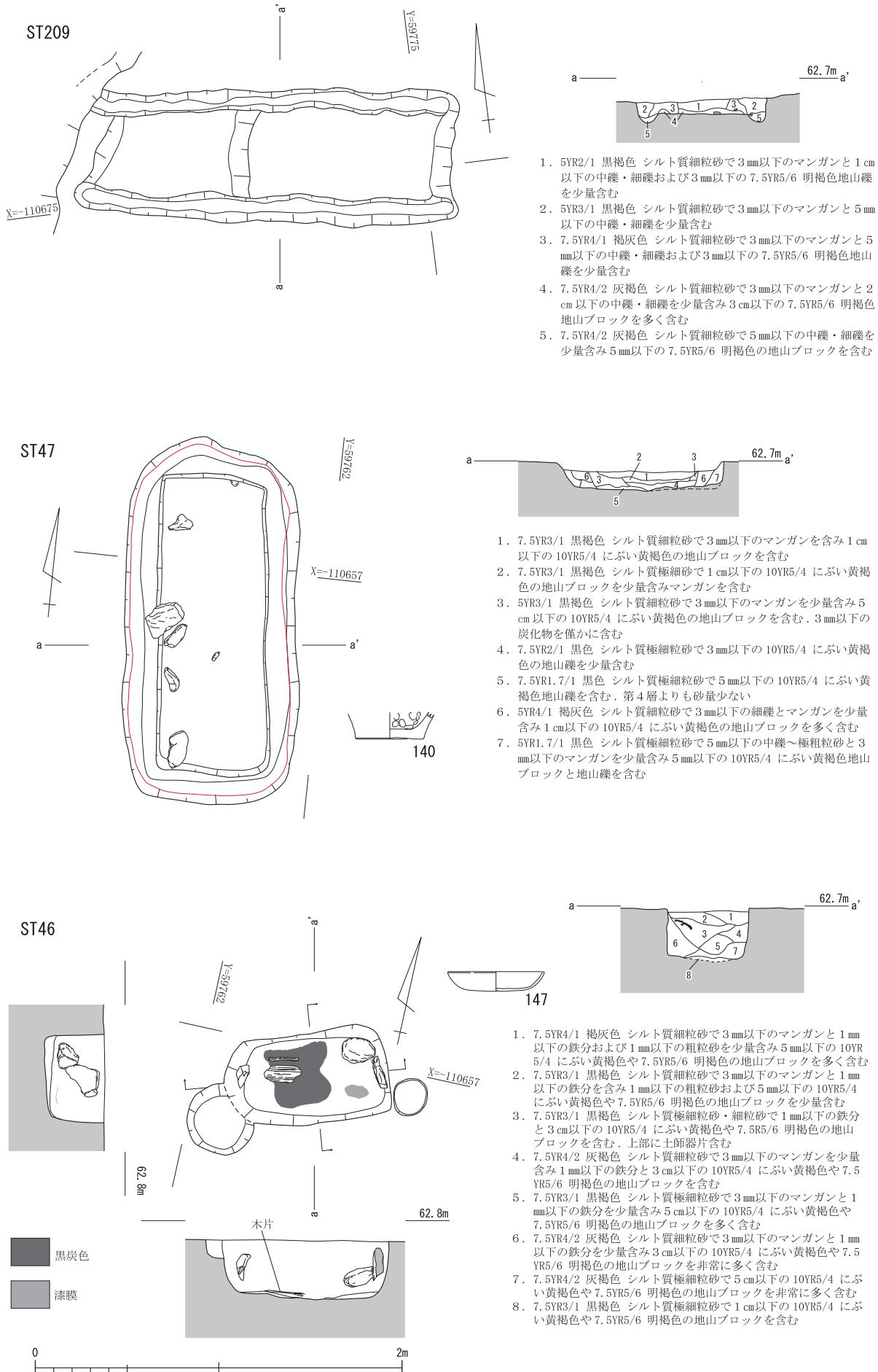


SK279

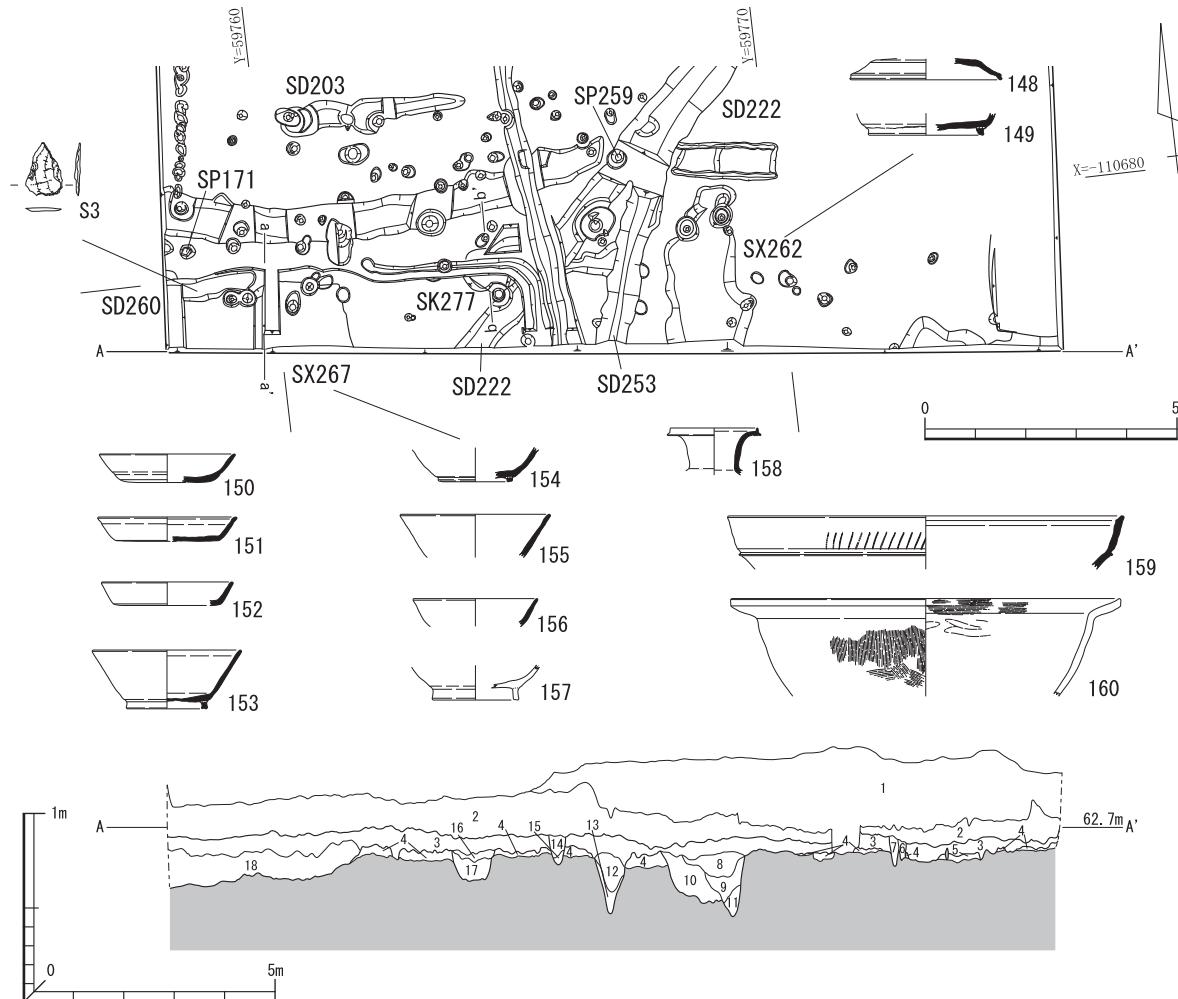


図版26

西嶋4W区

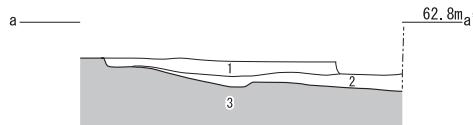


西嶋4W区 木棺墓1・土壙墓



1. N3/ 暗灰色 表土 ケミコンで碎石混じり
2. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で5mm以下の中礫・細礫を含む。耕土
3. 7.5YR1/1 褐灰色 シルト質細粒砂で1cm以下の中礫・細礫を少量含み3mm以下のマンガンを含む
4. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを少量含み1cm以下の10YR 5/4 にぶい黄褐色の地山礫を含む。地山土壤化層か
5. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で1mm以下の炭化物を僅かに含み3mm以下のマンガンを少量含む。土壤埋土
6. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1mm以下の粗粒砂を少量含む。柱穴埋土
7. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと2mm以下の極粗粒砂と3mm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の礫を少量含む。柱穴埋土
8. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で1cm以下の中礫・細礫と10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含み1cm以下の炭化物を僅かに含む。3mm以下のマンガンを含む。SX262埋土
9. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で3cm以下10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを多く含み3mm以下の細礫とマンガンを少量含む。3mm以下の炭化物を僅かに含む。SX262埋土
10. 5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で1cm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックと3mm以下の細礫を少量含む。3mm以下のマンガンを含む。SX262埋土

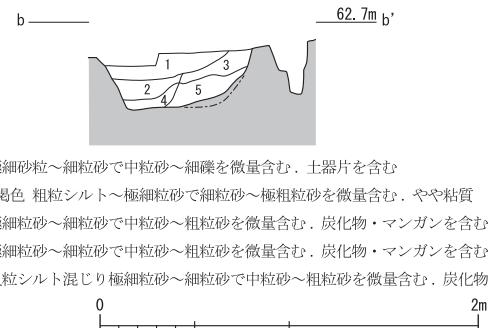
SX267



1. 7.5YR3/1.1 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む。平安前期頃の土器含む
2. 10YR3.4/4.4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む
3. 10YR5.7/8 明黄褐色 地山。粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を微量含む。粘質

11. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質極細粒砂で1cm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックと3mm以下のマンガンおよび3cm以下の中礫・細礫を少量含む。SX262埋土
12. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で1mm以下の鉄分と1cm以下の中礫・細礫および1mm以下の炭化物を少量含み3mm以下のマンガンを含む。SD253埋土
13. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で2cm以下の中礫・細礫を少量含み3mm以下のマンガンを含む。1cm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを含む。縦まり悪い。SD253埋土
14. 5YR3/1 黑褐色 シルト質極細粒砂で5mm以下の中礫・細礫を少量含み1mm以下のマンガンを僅かに含む。SD210埋土
15. 10YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で1mm以下のマンガンを少量含み1cm以下の2.5Y 4/2 暗灰黄色の地山ブロックを含む。SD210埋土
16. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを多く含み3mm以下の細礫と1mm以下の鉄分を少量含む。SD222埋土
17. 5YR2/1 黑褐色 シルト質極細粒砂で1mm以下の細礫と3mm以下のマンガンおよび1mm以下の鉄分を少量含む。SD222埋土
18. 10YR3.4/4.4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。SX267埋土

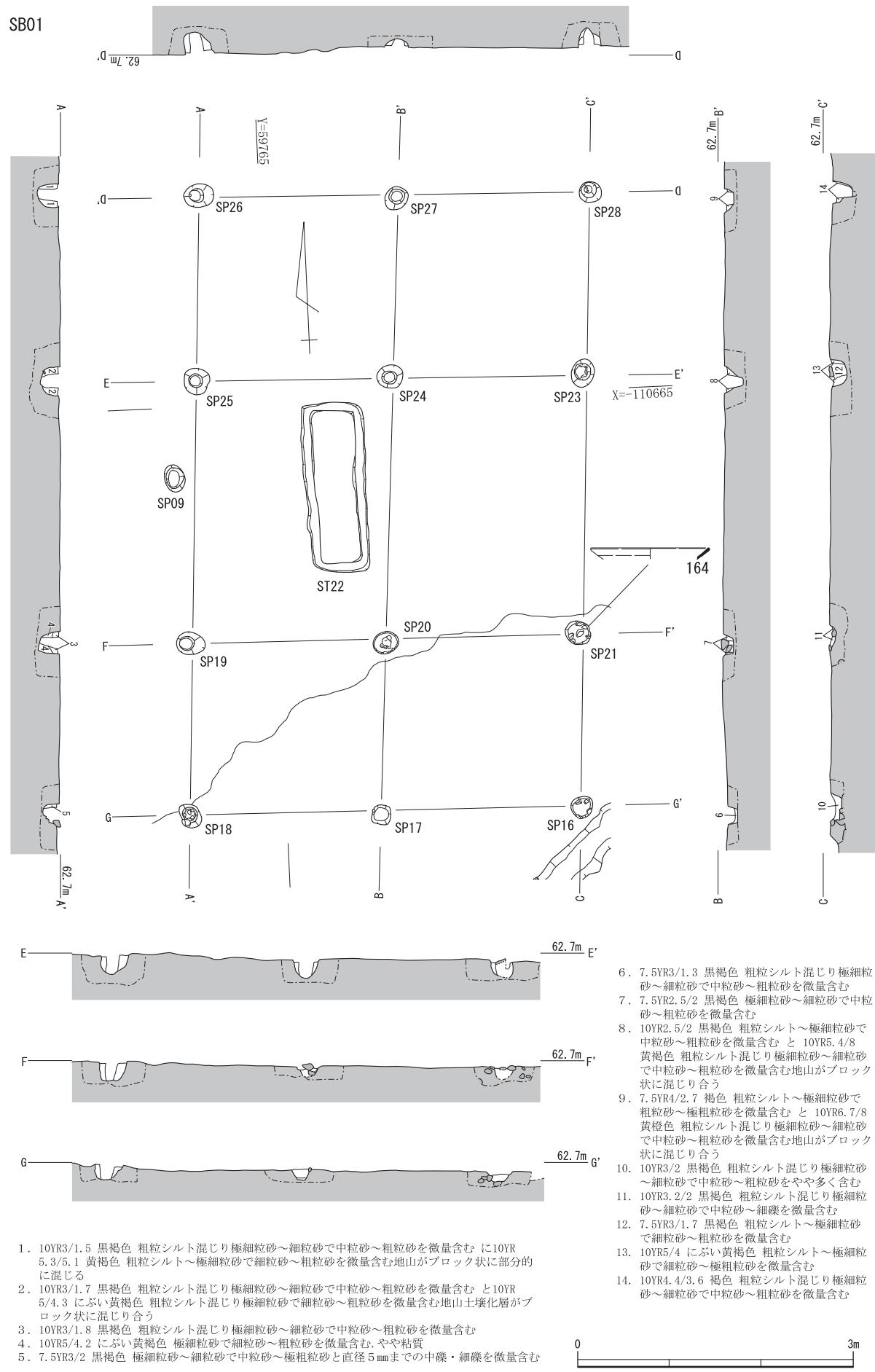
SK277



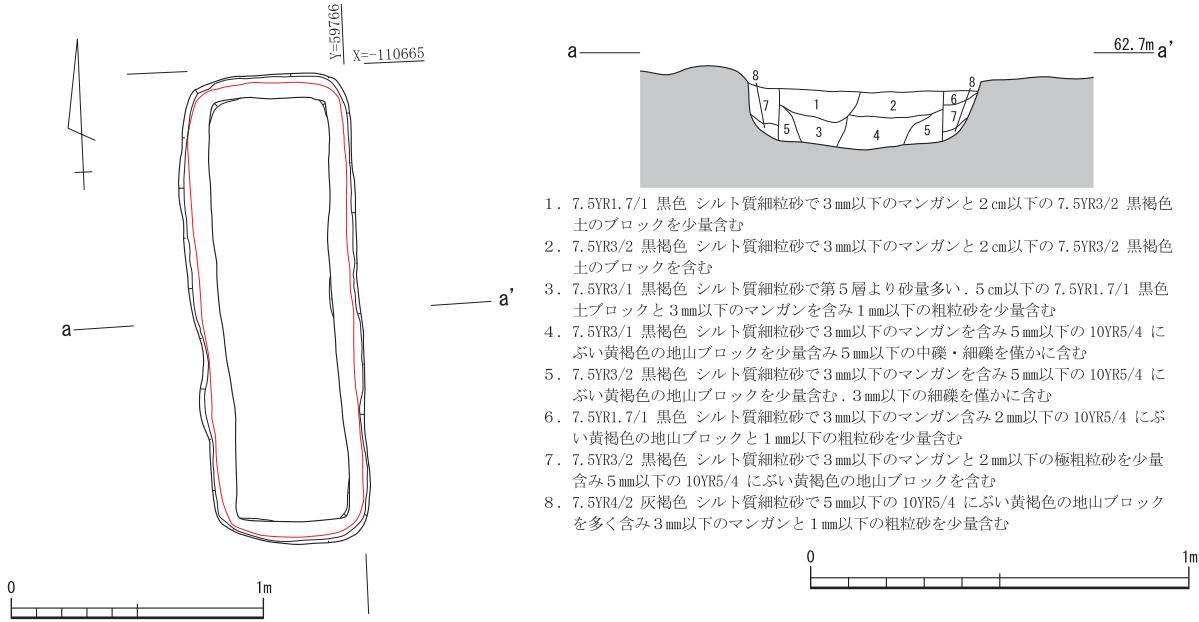
1. 10YR2.5/2 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。土器片を含む
2. 10YR3.6/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂～細粒砂～極粗粒砂を微量含む。やや粘質
3. 10YR3.2/1 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。炭化物・マンガンを含む
4. 10YR3.3/1 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。炭化物・マンガンを含む
5. 10YR3.2/6 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。炭化物を含む。粘質

図版28

西嶋4W区

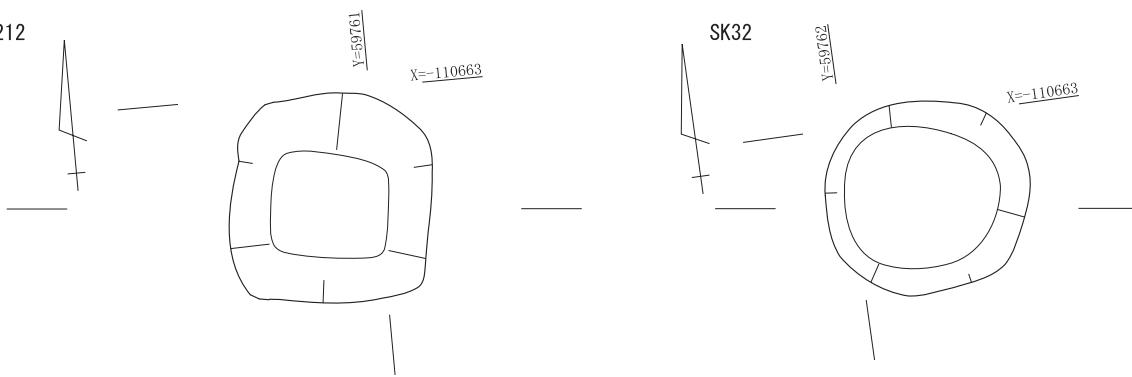


ST22



西嶋4W区

SK212

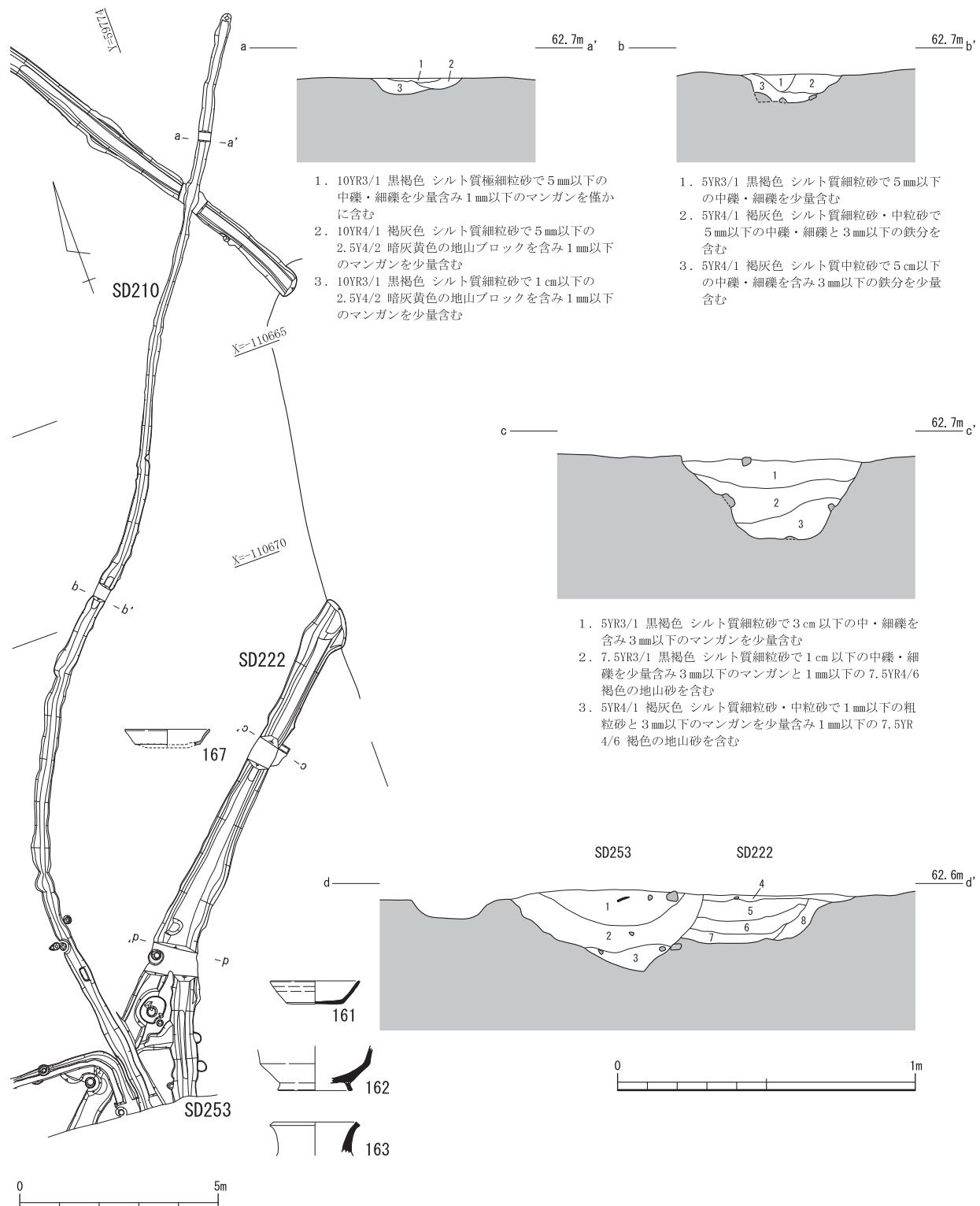


1. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の中礫・細礫を含み5cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを多く含む
2. 5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを含み10cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを多く含む、3cm以下の中・細礫を僅かに含む
3. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを少量含み1cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを多く含む、1cm以下の中・細礫を含む
4. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを少量含み5cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを非常に多く含む、1cm以下の中礫・細礫を含む
5. 5YR4/1 暗褐色 シルト質中粒砂で3mm以下のマンガンと3cm以下の中礫・細礫を少量含み5cm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山ブロックを含む
6. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質中粒砂・粗粒砂で20cm以下の大礫へ細礫を多く含む

1. 5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと5cm以下の10YR5/6 黄褐色の地山ブロックを含み5mm以下の中礫・細礫を少量含む
2. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の粗粒砂および1cm以下の10YR5/6 黄褐色の地山ブロックを少量含み10cm以下の7.5YR3/2 黑褐色の粘質土を下部にラミナ状に含む
3. 7.5YR4/1 暗褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを僅かに含み2cm以下の7.5YR3/2 黑褐色の粘質土ブロックを多く含む、1cm以下の10YR5/6 黄褐色の地山ブロックを含み1mm以下の粗粒砂を少量含む
4. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと3cm以下の7.5YR3/2 黑褐色土のブロックおよび5mm以下の中礫・細礫を少量含み2cm以下の10YR5/6 黄褐色の地山ブロックを含む

0 2m

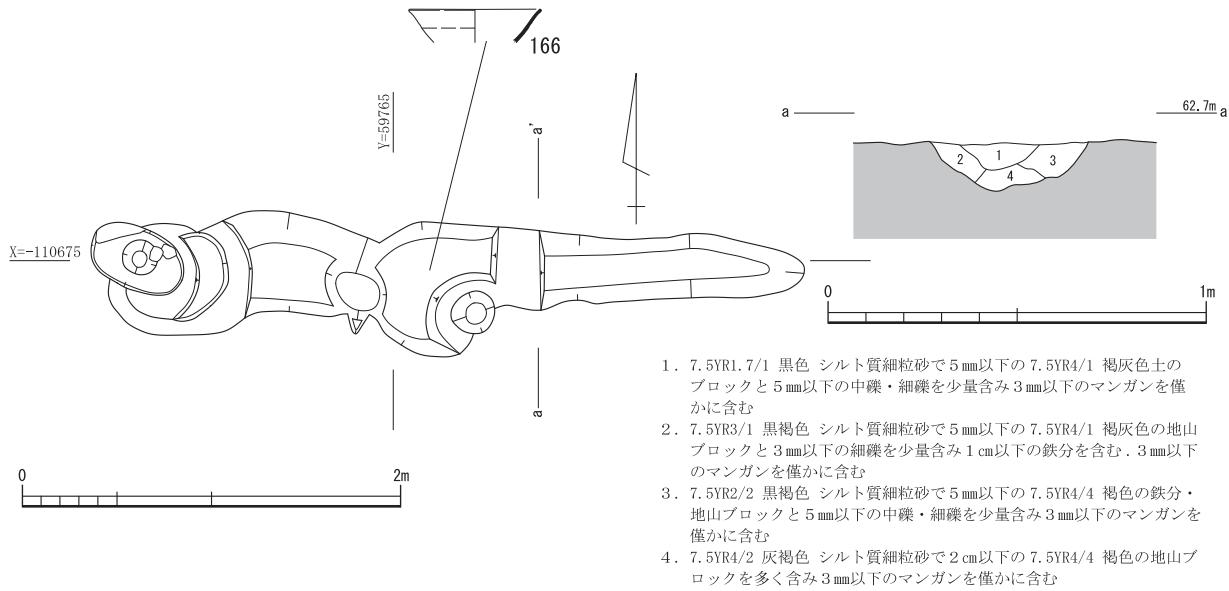
図版30



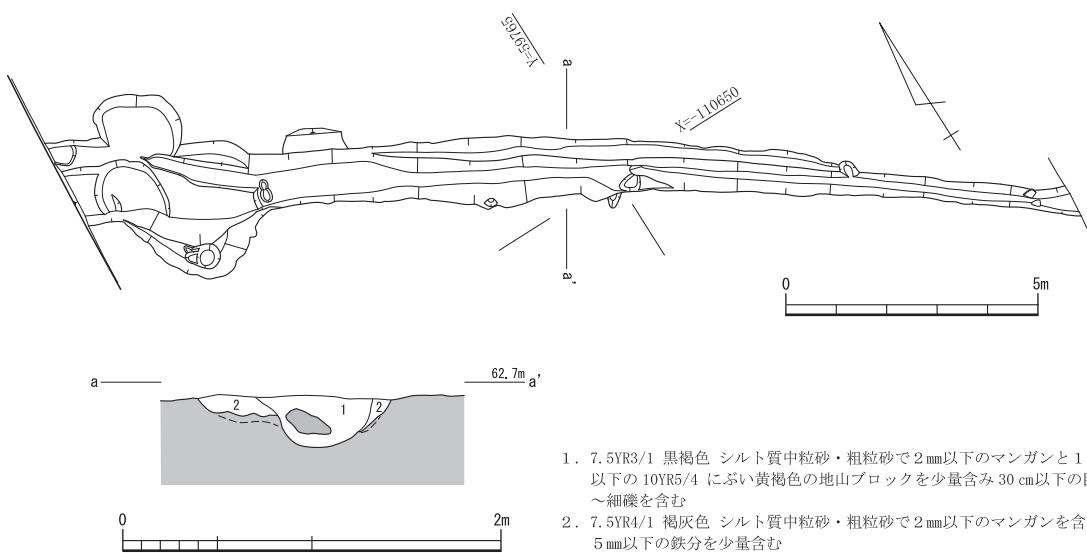
1. 5YR2/1 黒褐色 シルト質細粒砂で5cm以下の中礫・細礫と3mm以下のマンガンを含み1mm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山砂を少量含む
2. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを含み1cm以下の中礫・細礫と1mm以下の炭化物および1mm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山砂を少量含む
3. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で締まりが弱い。2cm以下の中礫・細礫を少量含み3mm以下のマンガンと1cm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山礫を含む
4. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下の細礫と3mm以下のマンガンを含む

5. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンを多く含み3mm以下の細礫と1mm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山砂を少量含む
6. 5YR2/1 黑褐色 シルト質極細粒砂で1mm以下の粗粒砂と3mm以下のマンガンおよび1mm以下の7.5YR5/6 明褐色の地山砂を少量含む
7. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1mm以下の粗粒砂および3mm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
8. 2.5YR2/1 赤黒色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと5mm以下の10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを含み1mm以下の粗粒砂を少量含む

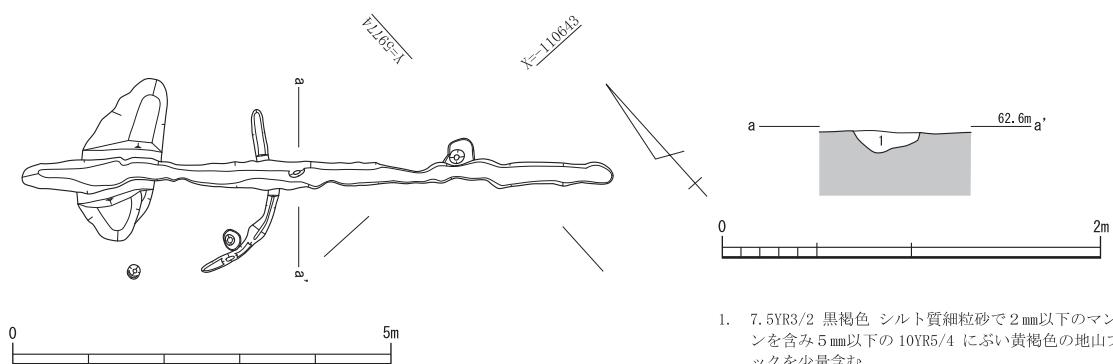
SD203



SD80

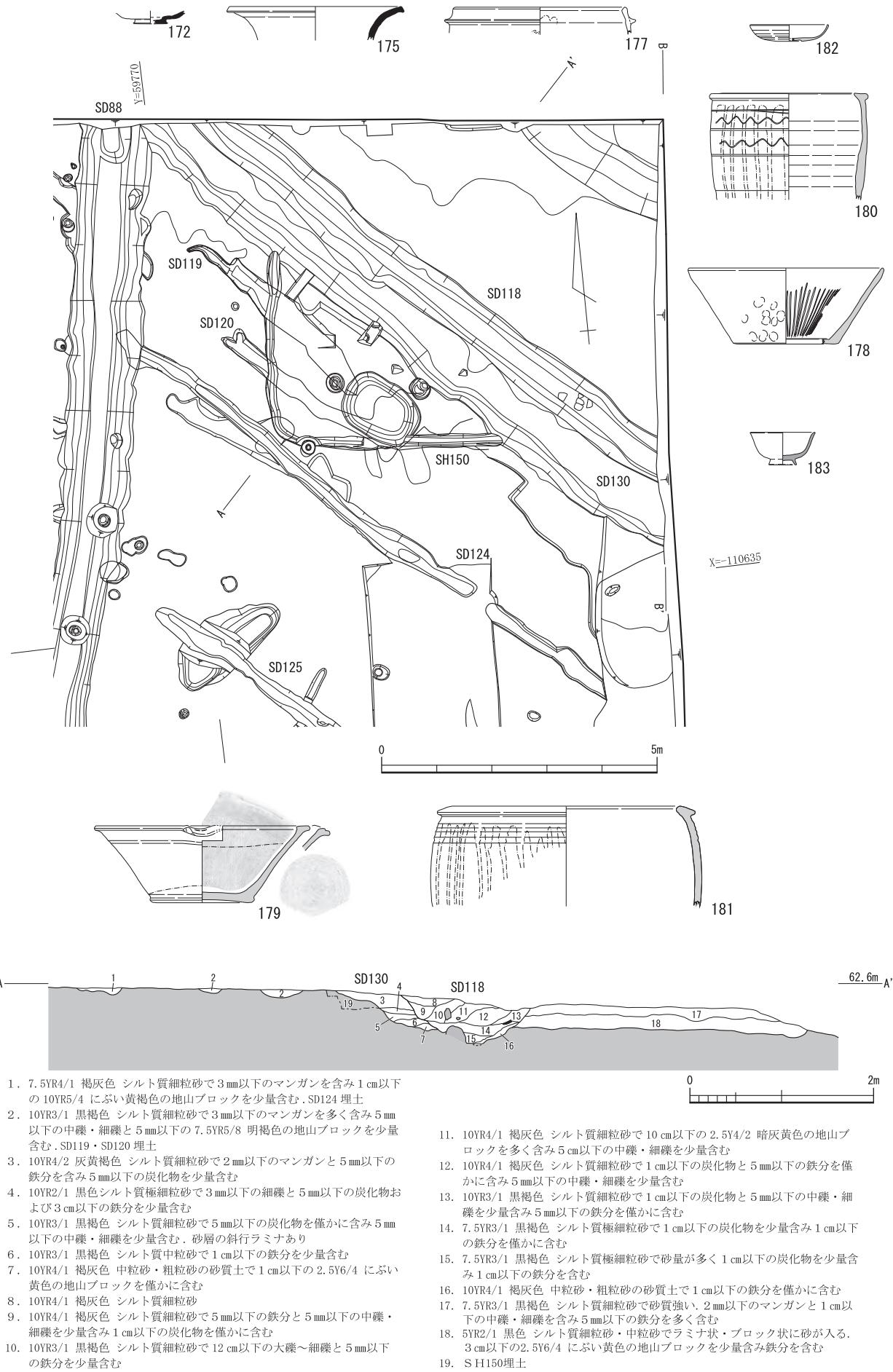


SD125



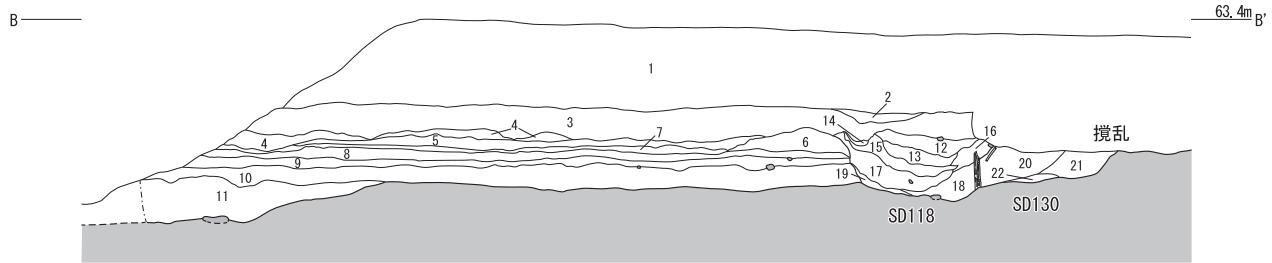
図版32

西嶋4W区

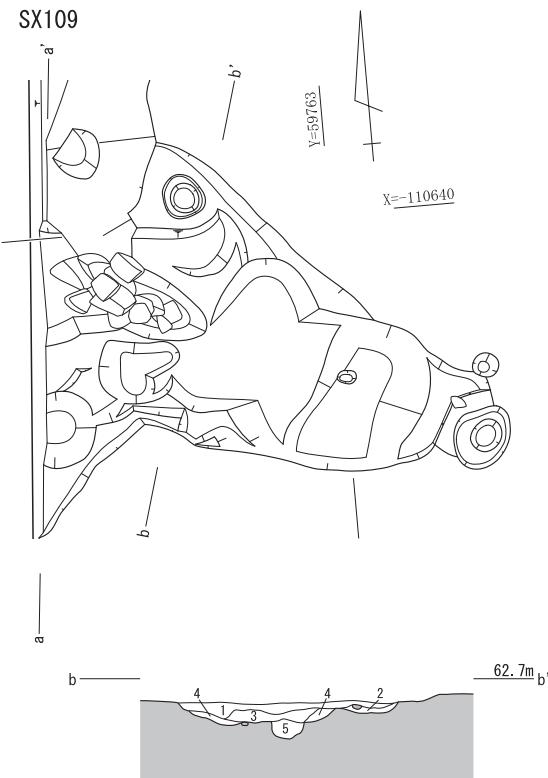


西嶋4W区 調査区北東部遺構群

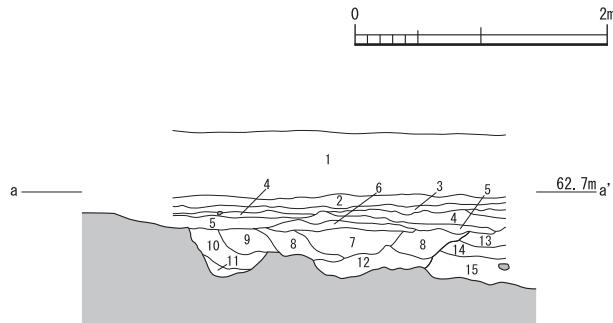
北東部



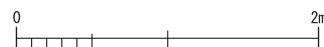
1. 2.5Y4/1 黄灰色 20cm以下の大礫～細礫や碎石を多く含む。造成土
 2. 5Y4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂、耕土
 3. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質細粒砂・中粒砂、耕土
 4. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で5cm以下の中礫・細礫を少量含む。
 嵩上げ土
 5. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂、旧耕土
 6. 7.5YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で5mm以下の中礫・細礫を少量含み
 5mm以下の鉄分を含む。旧水田畔
 7. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で5mm以下の中礫・細礫・鉄分を含み5mm以下
 の炭化物を僅かに含む。床土
 8. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で砂質強い。2mm以下のマンガンと1cm以下
 の中礫・細礫を含み5mm以下の鉄分を多く含む
 9. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で砂質強い。5mm以下の鉄分を多く
 含み3cm以下の中礫・細礫を含む。5mm以下の炭化物を少量含む
 10. 5YR2/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で砂質強い。砂がラミナ状に入る部分
 あり。3cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロックを少量含み鉄分は暈管状
 11. 10YR1.7/1 黑褐色 シルト質細粒砂で2cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブ
 ロックを下部に含み鉄分は暈管状
 12. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で10cm以下の2.5Y4/2 暗灰黄色の地山ブロッ
 クを含む
13. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で5mm以下の鉄分を含み5mm以下の中礫・細
 礫を少量含む。1cm以下の炭化物を僅かに含む
 14. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で2cm以下の10YR2/2 黑褐色土のブロック
 を少量含む
 15. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で10cm以下の2.5Y4/2 暗灰黄色の地山ブロッ
 クを多く含む
 16. 10YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3cm以下の中礫・細礫と5mm以下の鉄分を
 少量含む
 17. 7.5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で1cm以下の炭化物・鉄分を少量含む
 18. 10YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で5mm以下の中礫・細礫を少量含み5mm以下
 の炭化物を僅かに含む。斜交する砂のラミナあり
 19. 10YR3/1 黑褐色 シルト質中粒砂で1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロ
 ックを少量含む
 20. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で1cm以下の中礫・細礫を少量含み
 1cm以下の鉄分を含む
 21. 10YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で2mm以下のマンガンと5mm以下の鉄分を
 含み5mm以下の炭化物を少量含む
 22. 10YR4/1 暗赤色 中粒砂・粗粒砂の砂質土で1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の
 地山ブロックを僅かに含む



1. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを
 含み1cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
 2. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で第1層よりも砂質強い。
 3cm以下の中礫・細礫と3mm以下のマンガンおよび1cm以下の10
 YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
 3. 7.5YR4/2 灰褐色 砂質土で3mm以下のマンガンと2cm以下の鉄分
 より1cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
 4. 10YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンを
 少量含み1cm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロックを含む
 5. 5YR3/1 黑褐色 シルト質中粒砂で3mm以下のマンガンを含み1cm
 以下の鉄分を含む。平行ラミナあり



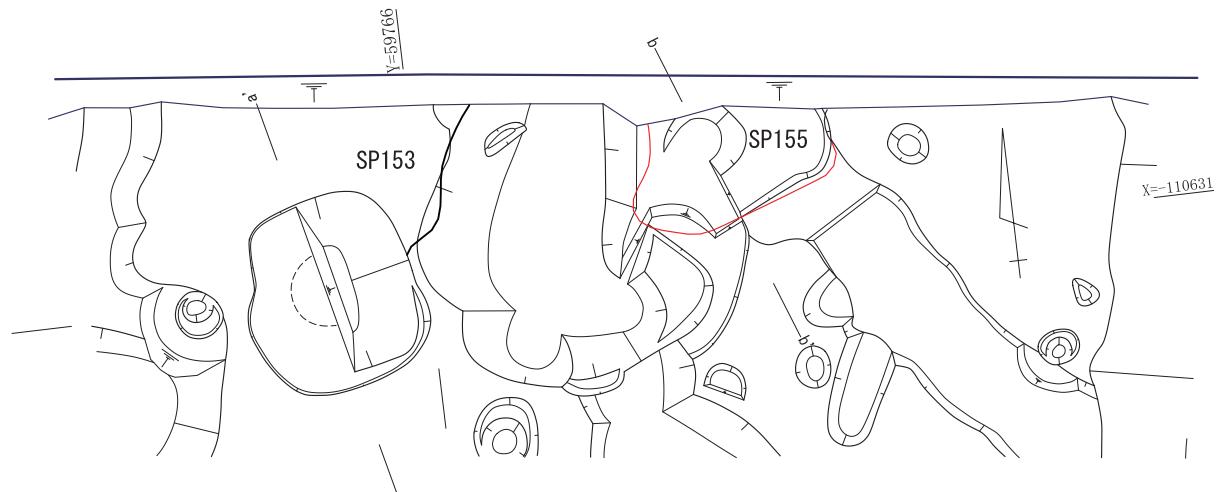
1. 10YR4/2 灰褐色 10cm以下の大礫～細礫を少量含む。耕土
 2. 7.5YR4/2 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと2cm以下
 の第1層を含み5cm以下の中礫・細礫と1cm以下の7.5YR3/1 黑褐色土のブ
 ロックを少量含む。旧耕土
 3. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3mm以下のマンガンと2cm以下
 の鉄分を含む。床土
 4. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で2cm以下の第1層のブロックと3
 mm以下のマンガンを含み5cm以下の中礫・細礫と3cm以下の2.5Y6/4にぶい
 黄色の地山ブロックを少量含む。嵩上げ土
 5. 5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で2mm以下のマンガンと1cm以下の2.5Y6/4
 にぶい黄色の地山ブロックを含む
 6. 7.5YR4/1 暗赤色 細粒砂・中粒砂の粘性砂質土で2mm以下のマンガンと3mm
 以下の細礫を少量含む
 7. 5YR4/1 暗赤色 中粒砂・粗粒砂の粘性砂質土で2mm以下のマンガンと1cm以
 下の鉄分を少量含む。平行ラミナあり
 8. 7.5YR4/1 暗赤色 細粒砂・中粒砂の粘性砂質で2mm以下のマンガンを含み3
 mm以下の鉄分を少量含む。3mm以下の10YR5/4にぶい黄褐色の地山ブロック
 を僅かに含む
 9. 7.5YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂・中粒砂で2mm以下のマンガンと5mm以下
 以下の鉄分を含み3mm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロックを少量含む
 10. 2.5YR3/1 暗赤色 シルト質細粒砂・細粒砂で2mm以下のマンガンや1mm
 以下の粗粒砂と2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロックを少量含み鉄分を含む
 11. 5YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で2mm以下のマンガンを少量含み5mm以下の
 鉄分と2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロックを含む
 12. 5YR3/1 黑褐色 シルト質中粒砂で2mm以下のマンガンと5mm以下の鉄分お
 よび1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山ブロックを少量含む
 13. 7.5YR1.7/1 黑褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で3cm以下の暈管状鉄分と3mm以
 下のマンガンを含み2cm以下の中礫・細礫を少量含む
 14. 5YR3/1 黑褐色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと3mm以下の鉄分を少
 量含み1cm以下の2.5Y6/4にぶい黄色の地山礫を含む
 15. 7.5YR4/1 暗赤色 シルト質細粒砂で3mm以下のマンガンと1cm以下の2.5Y
 6/4にぶい黄色の地山ブロックを含み5mm以下の鉄分と10cm以下の大礫～
 細礫を少量含む



西嶋4W区 調査区北東部断面図・溜まり状遺構

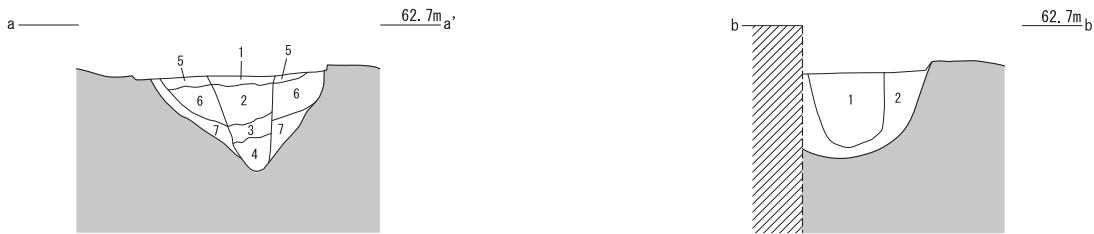
図版34

西嶋4W区



SP153

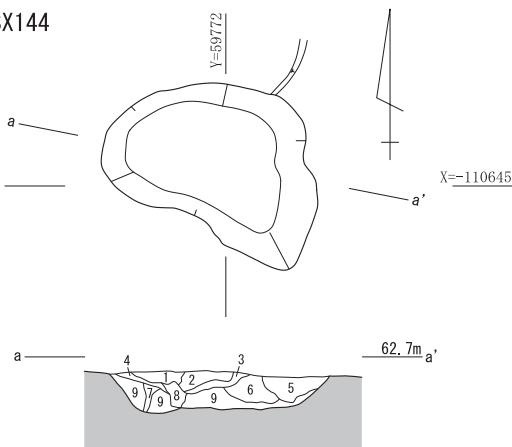
SP155



1. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを含む
2. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 2cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを多く含む
3. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 2cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを多く含む
4. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で 1cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックと 7.5YR4/1 褐灰色土および 3mm以下のマンガンを少量含む
5. 5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを含み 1cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂・中粒砂で 1cm以下の 7.5YR4/1 褐灰色土と 3mm以下のマンガンを少量含む
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 1cm以下のマンガンと 5mm以下の中礫・細礫を僅かに含む

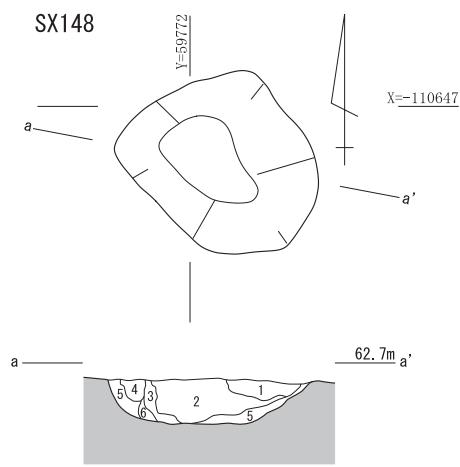
1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質土で 5mm以下の鉄分と 3mm以下のマンガンを含む
2. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 5cm以下の 2.5Y5/6 黄褐色の地山ブロックを含む

SX144



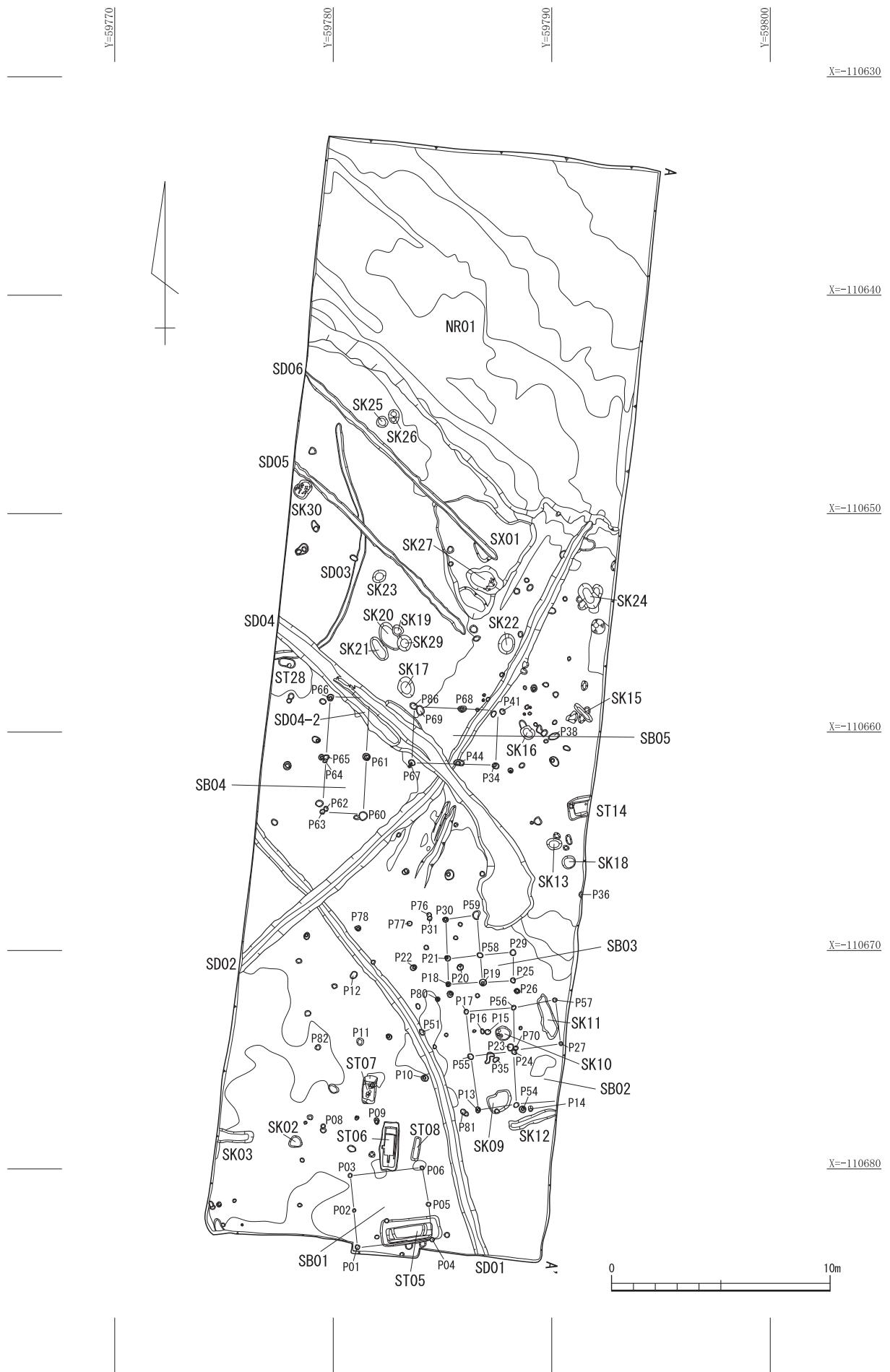
1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質細粒砂で 1cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含み 3mm以下のマンガンを含む
2. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で 2cm以下のマンガンと 3mm以下の鉄分を含む
3. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で 1cm以下のマンガンを少量含み 2cm以下の 10YR4/1 褐灰色土ブロックを含む
4. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを含み 5mm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックと 10YR4/1 褐灰色土を少量含む
5. 10YR4/2 灰黃褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを多く含み 3cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを含み 2cm以下の 10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロックを少量含む
7. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 2cm以下の 10YR4/1 褐灰色土・10YR5/4 にぶい黄褐色の地山ブロック・7.5YR3/1 黑褐色土を少量含む
8. 不明
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 5cm以下の 10YR4/1 褐灰色土のブロックと 3mm以下のマンガンを少量含む

SX148



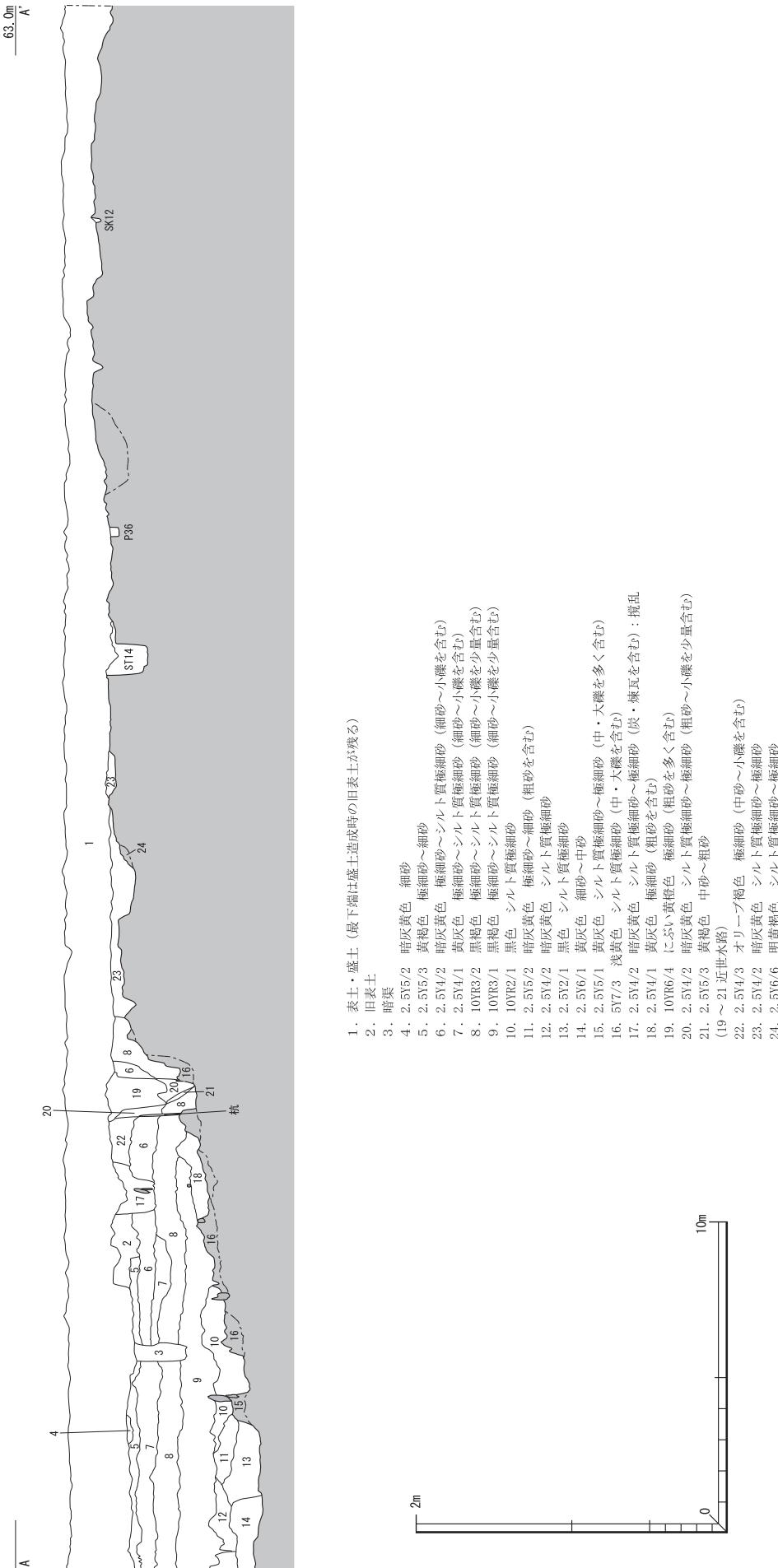
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質細粒砂で 5mm以下のマンガンを含み 1cm以下の中礫・細礫と 2cm以下の 7.5YR3/1 黑褐色土のブロックを少量含む
2. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンを含み 2cm以下の 7.5YR3/1 黑褐色土のブロックと 1cm以下の 10YR4/1 褐灰色土のブロックを少量含む
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 5cm以下の 10YR4/1 褐灰色土および 3cm以下の 2.5Y6/4 にぶい黄色の地山ブロックを含み 1cm以下の 7.5YR3/1 黑褐色土を少量含む
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト質細粒砂で 3mm以下のマンガンと 2cm以下の 10YR4/1 褐灰色土ブロックを含み 1cm以下の中礫・細礫を少量含む
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 3cm以下のマンガンを含み 1cm以下の 2.5Y6/4 にぶい黄色の地山土を多く含み 1cm以下の 10YR4/1 褐灰色土のブロックを少量含む。3mm以下のマンガンを僅かに含む
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で 3cm以下の 2.5Y6/4 にぶい黄色の地山土や 10YR4/1 褐灰色土のブロックを多く含む



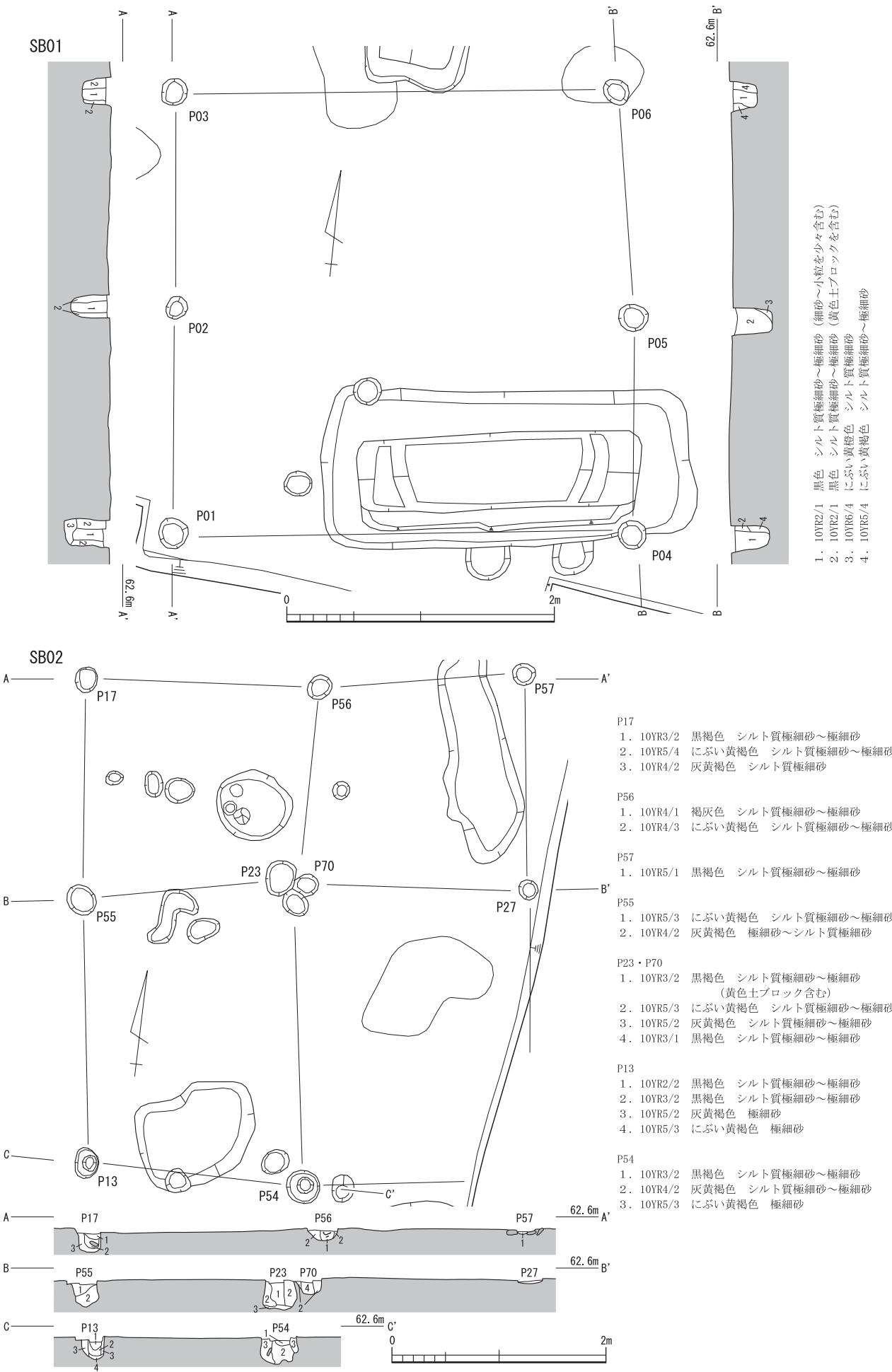


西島4E区

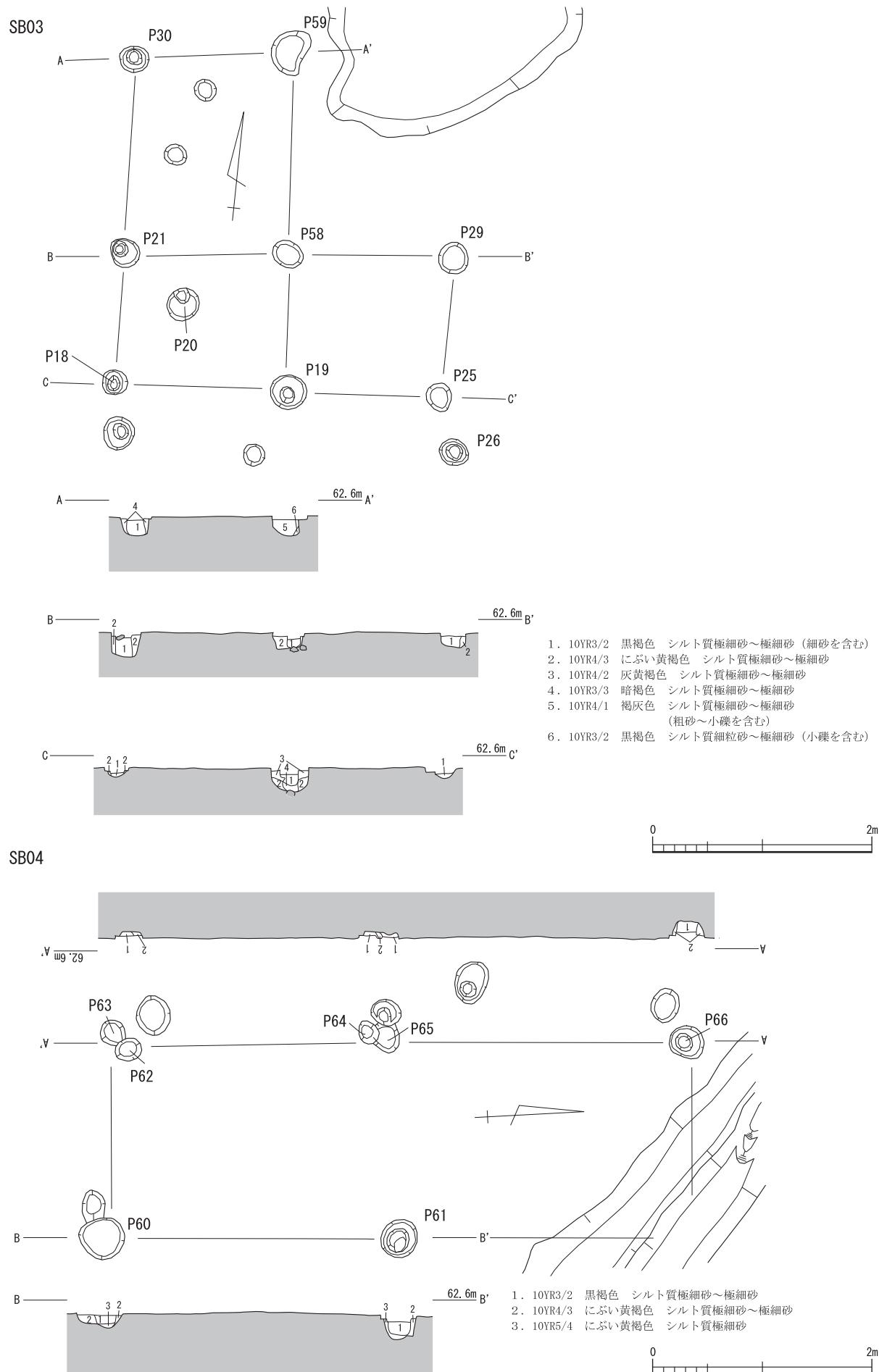
西島4E区 全体図



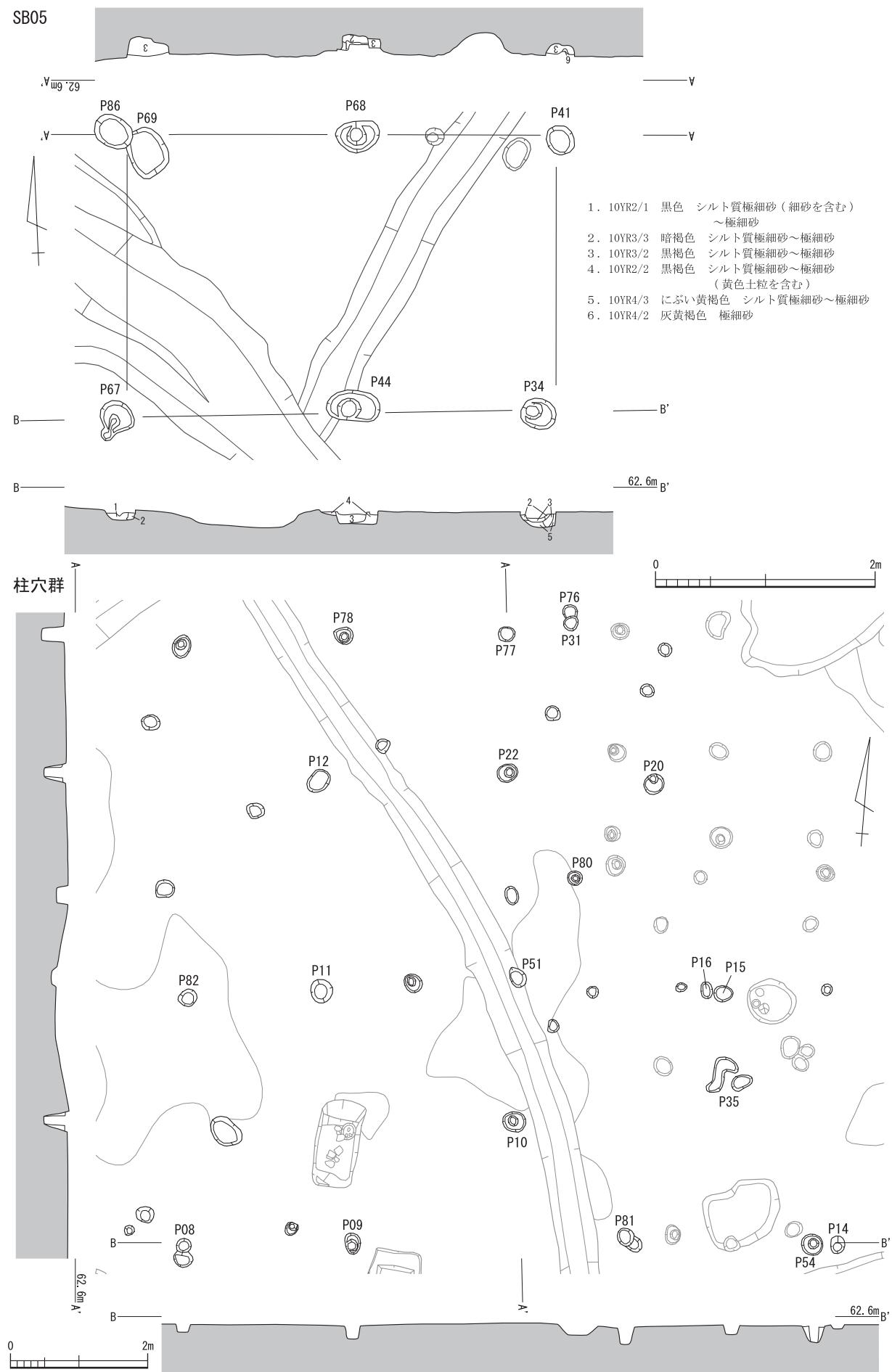
西嶋 4 E 区 東壁断面図



図版 38



西嶋 4 E 区 掘立柱建物 2

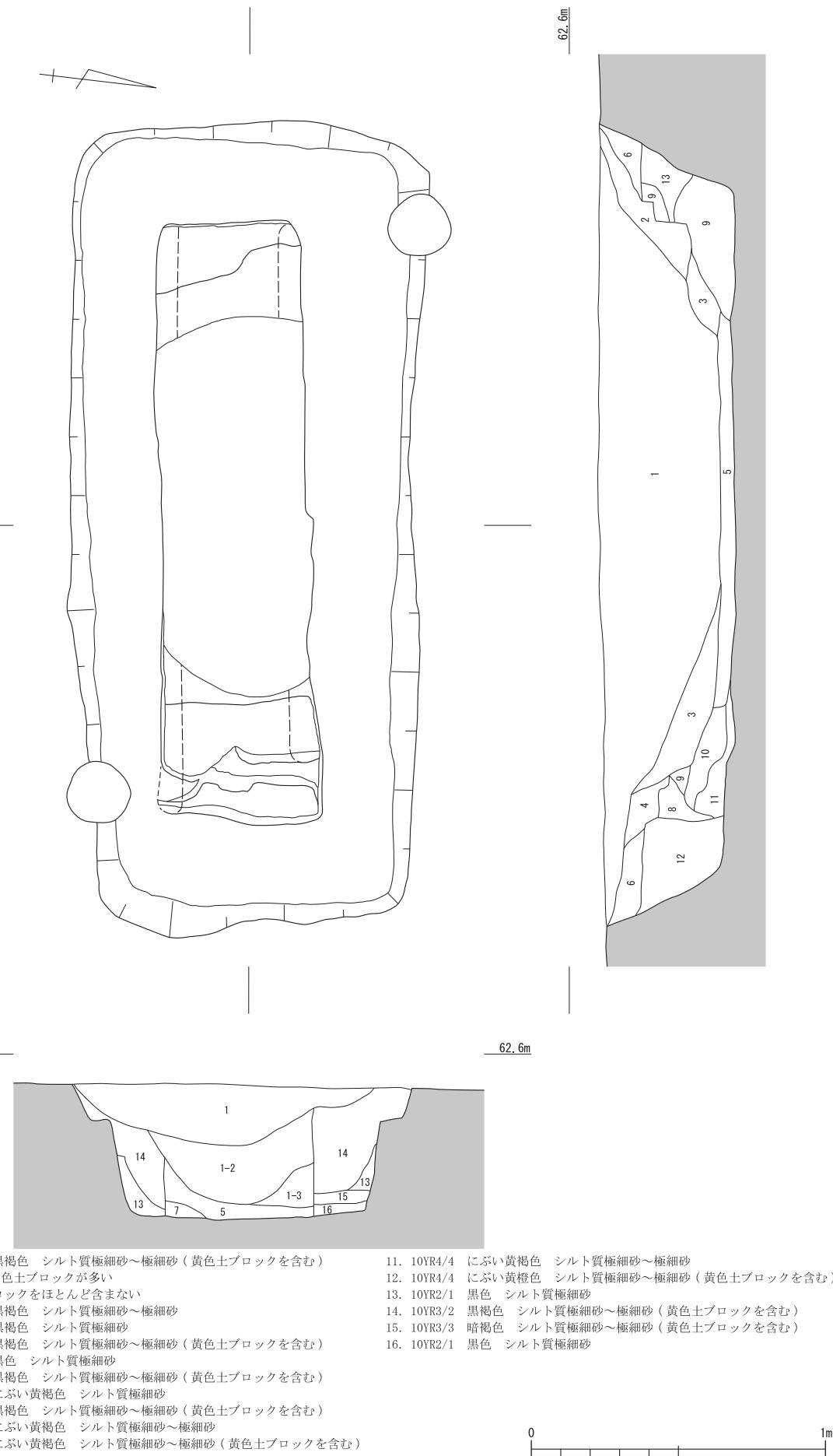


西島4E区 掘立柱建物3・柱穴群

図版40

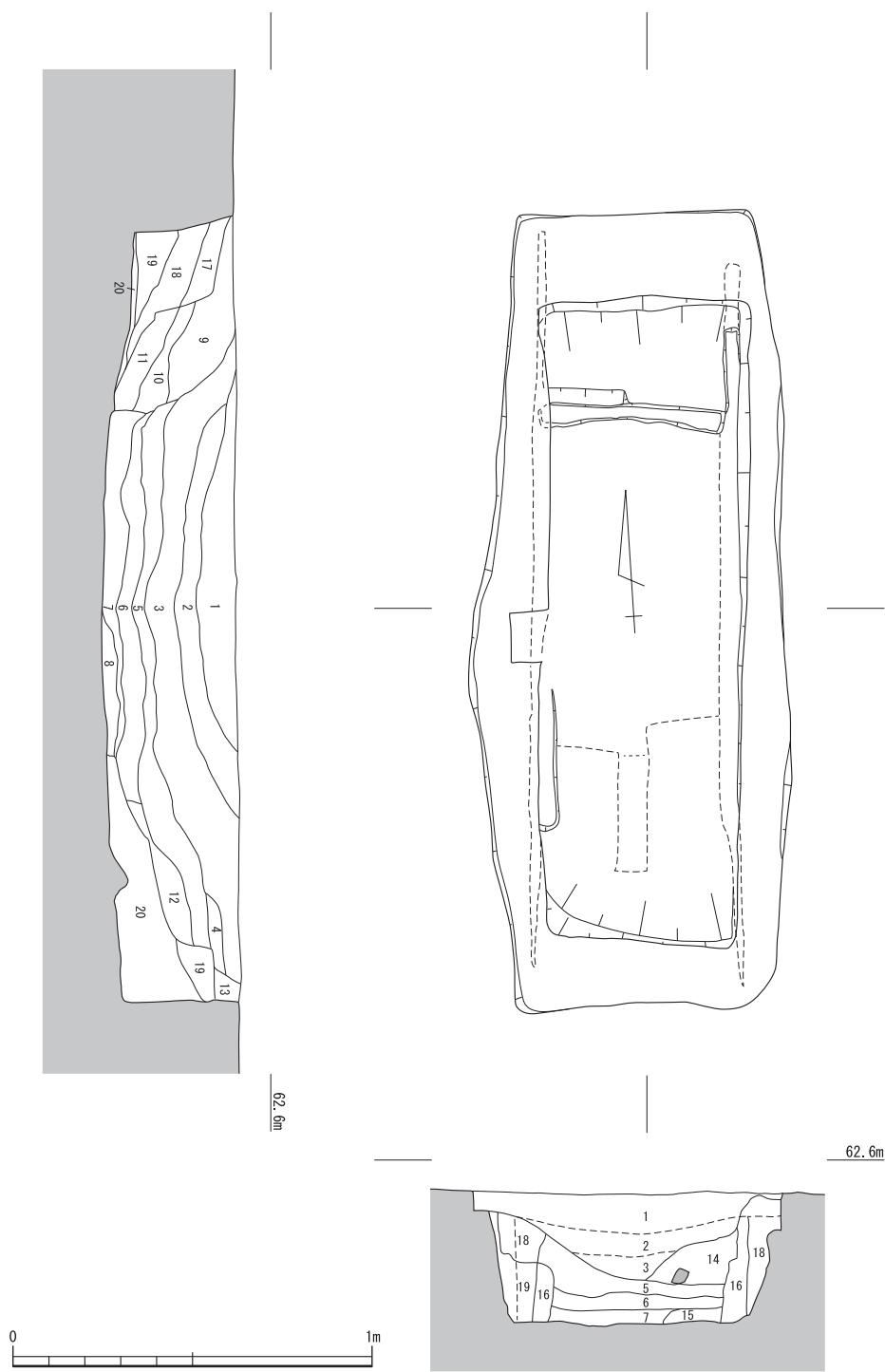
ST05

西嶋4E区



西嶋4E区 木棺墓1

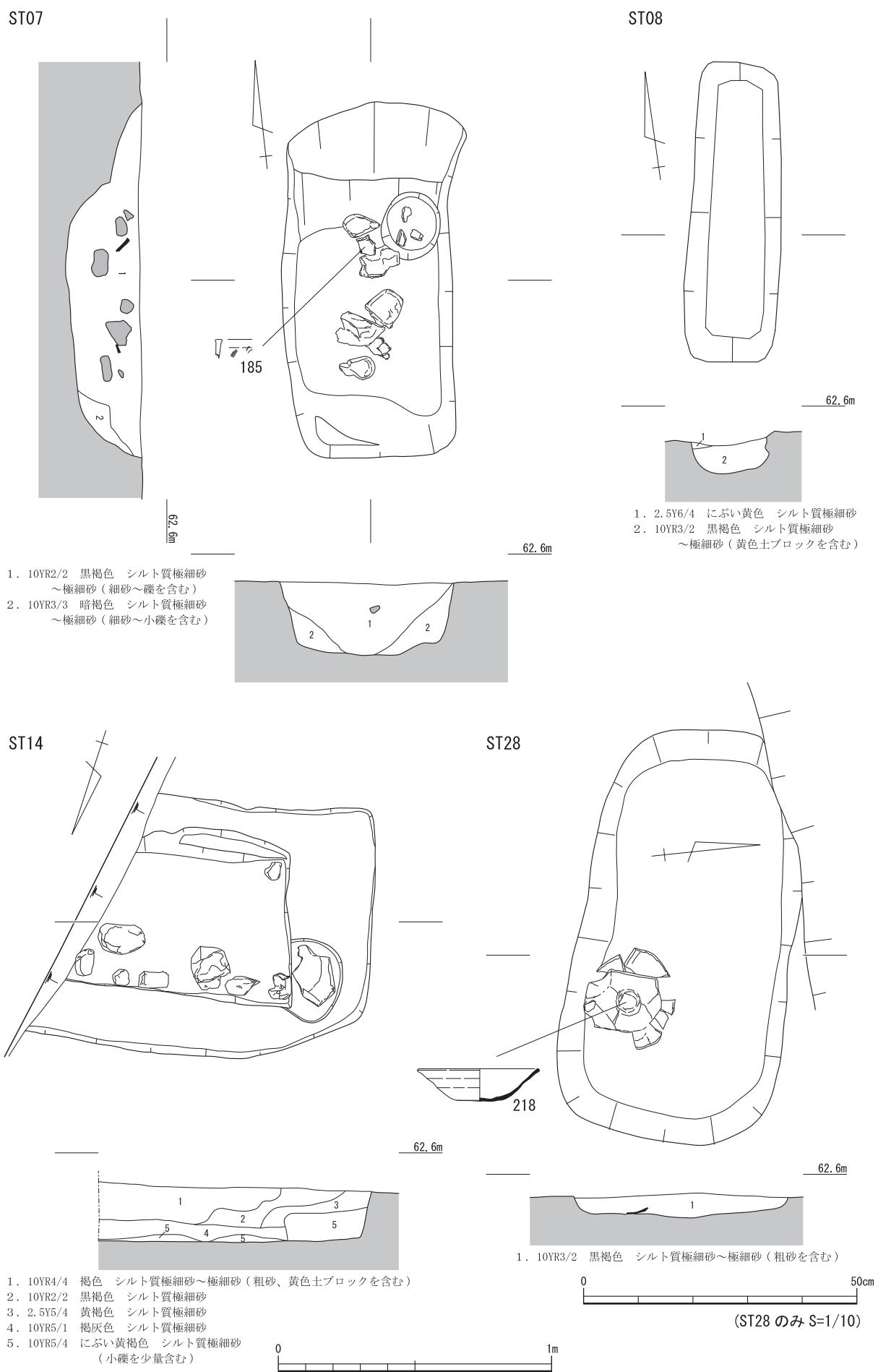
ST06



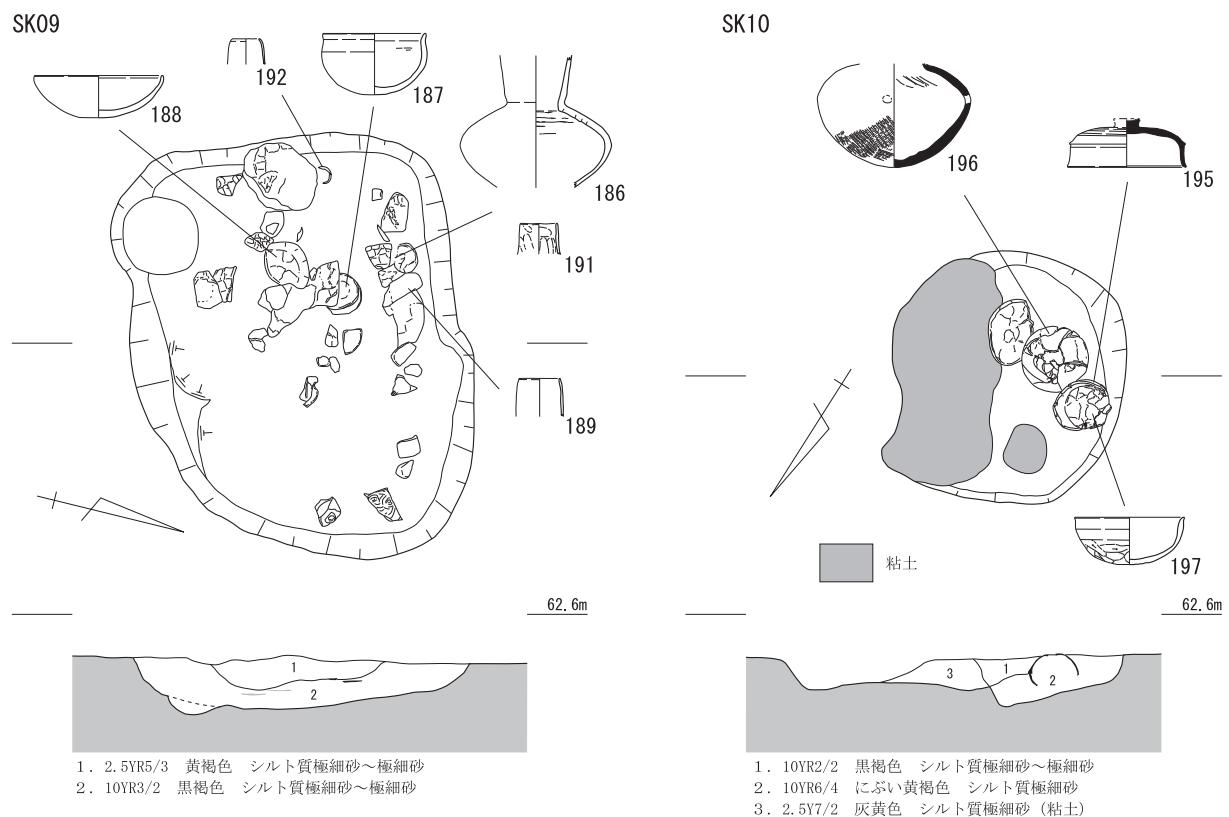
- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～極細砂粗（粗砂～小礫を含む） | 11. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 |
| 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～極細砂（粗砂含む） | 12. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 |
| 3. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂～極細砂（粗砂を少量含む） | 13. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂 |
| 4. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 | 14. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 |
| 5. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂（黄色土を含む） | 15. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 |
| 6. 10YR5/6 黄褐色 シルト質極細砂 | 16. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂（側板痕跡） |
| 7. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂（黄色土を含む） | 17. 10YR4/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 |
| 8. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂 | 18. 10YR2/3 黒褐色 シルト質極細砂（黄色土ブロックを含む） |
| 9. 10YR3/2 黑褐色 シルト質極細砂～極細砂（黄色土を含む） | 19. 10YR4/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 |
| 10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂（黄色土を含む） | 20. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 |

図版42

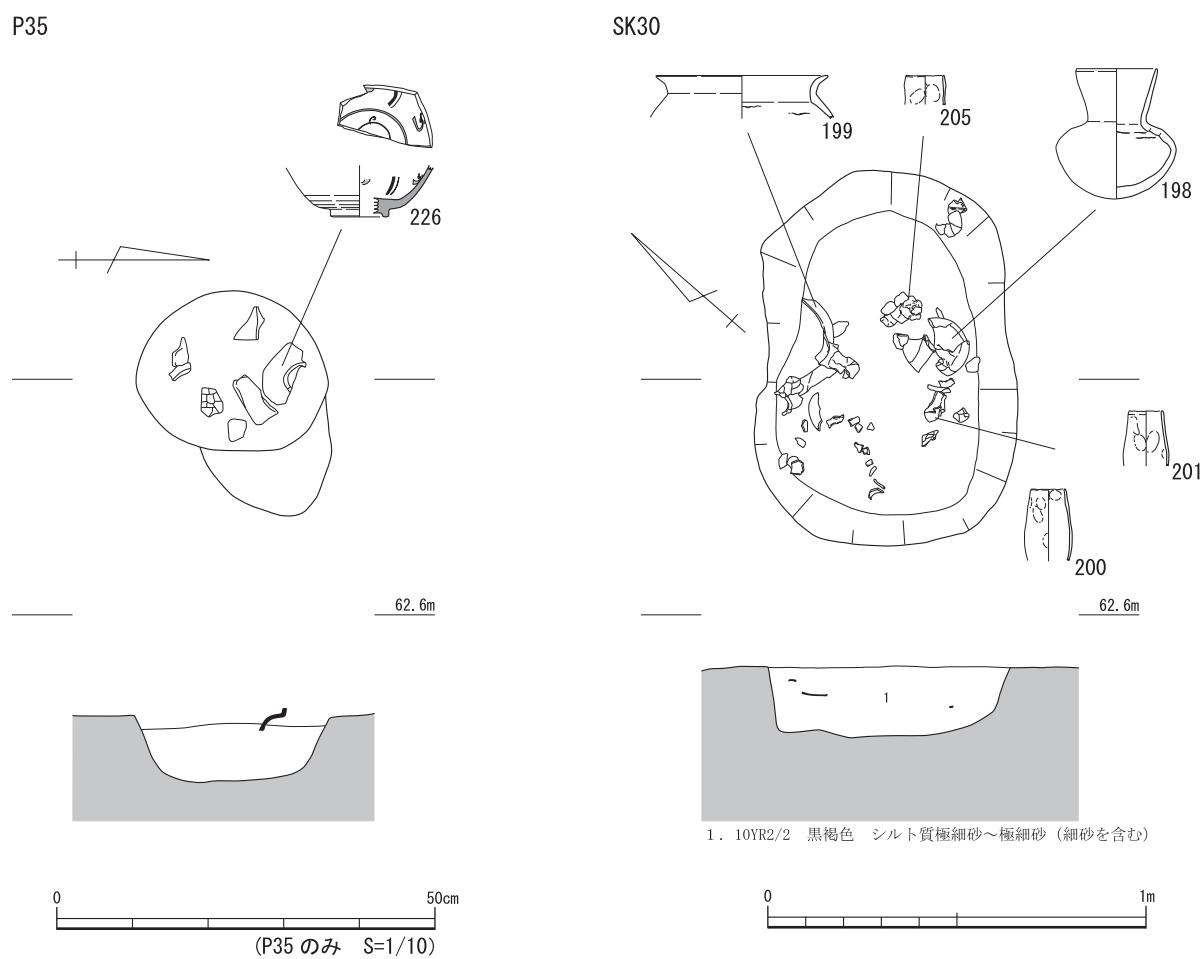
西嶋4E区



西嶋4E区 木棺墓3・土壙墓

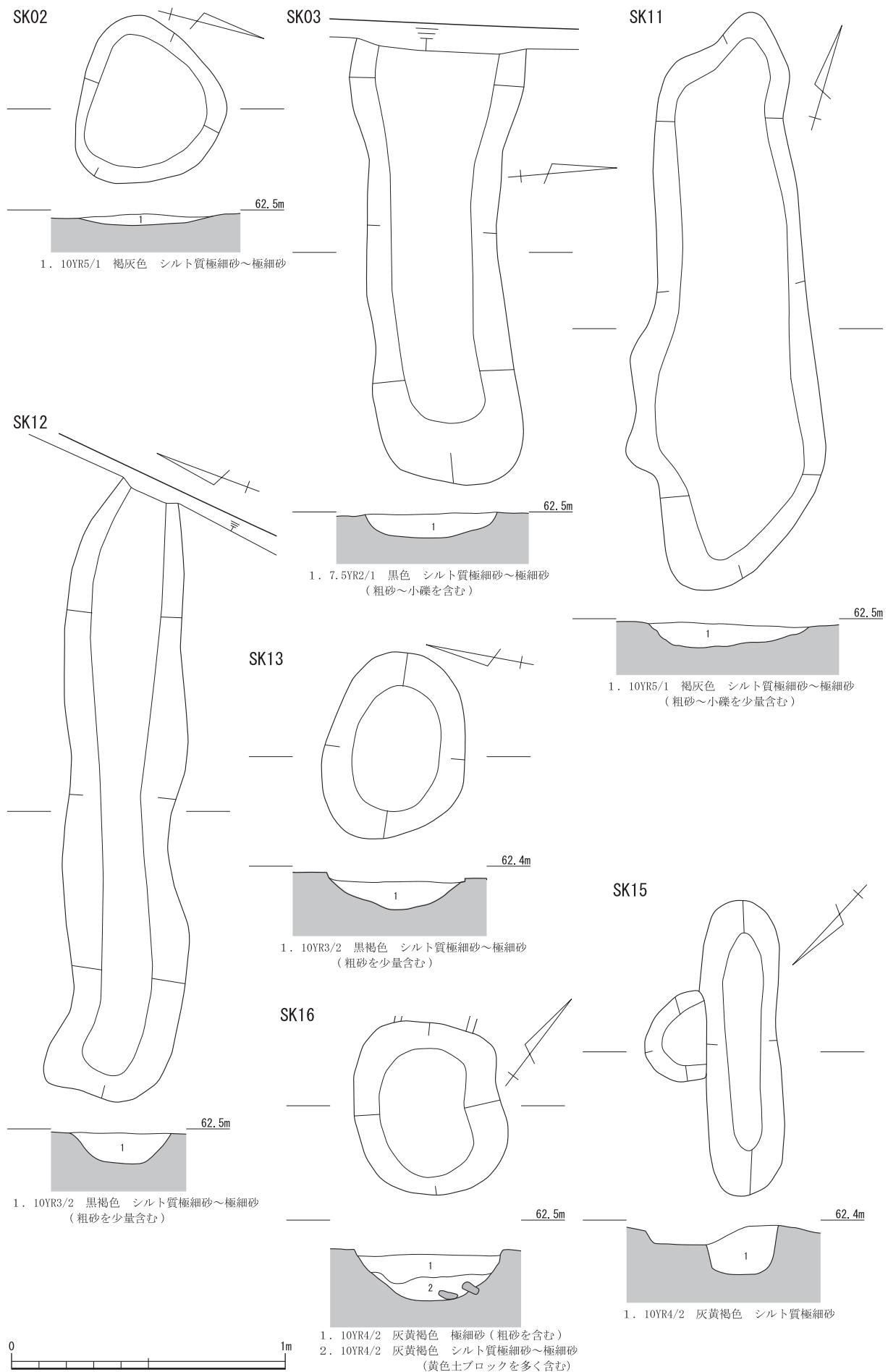


西嶋4E区

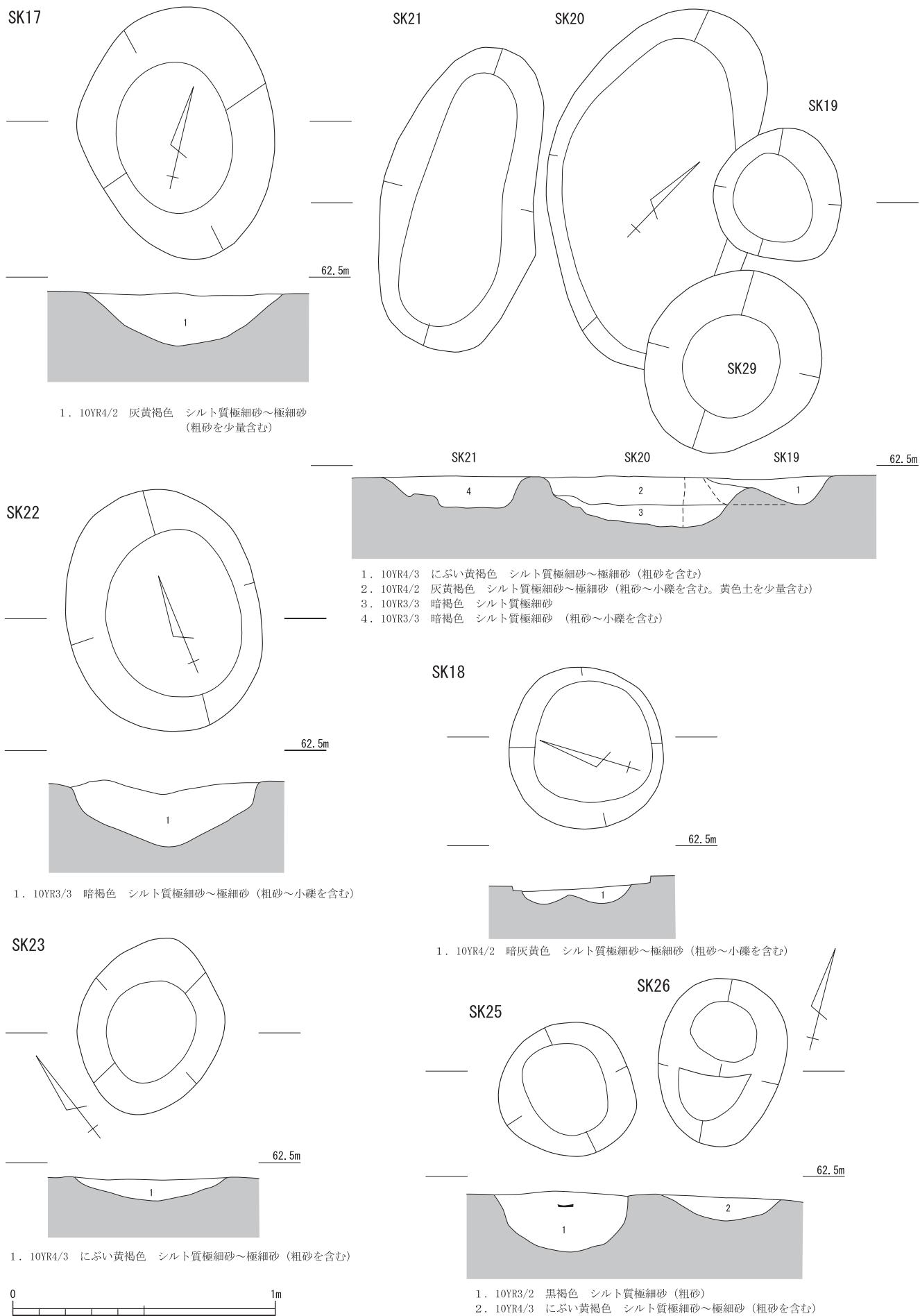


西嶋4E区 土坑1・柱穴

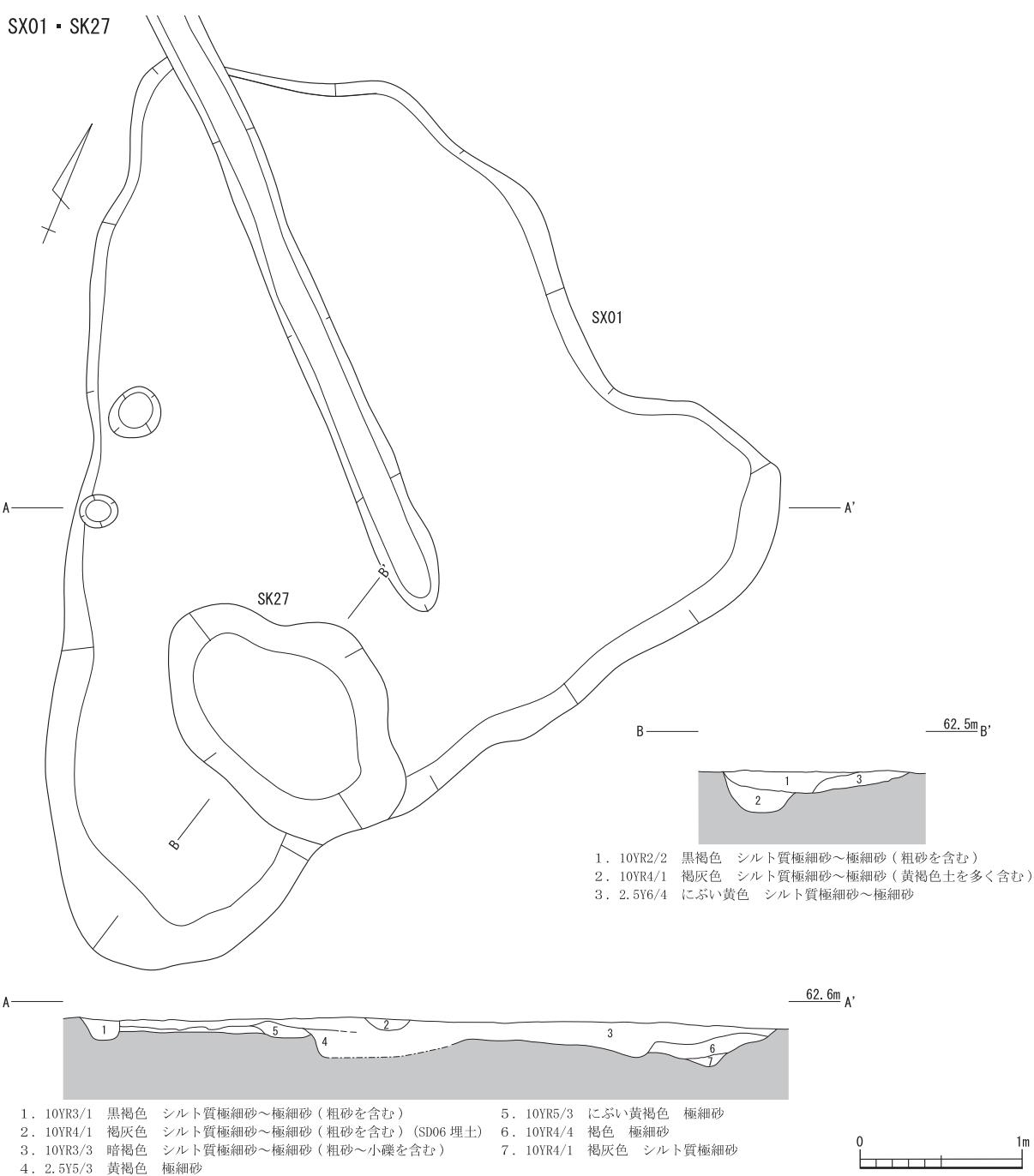
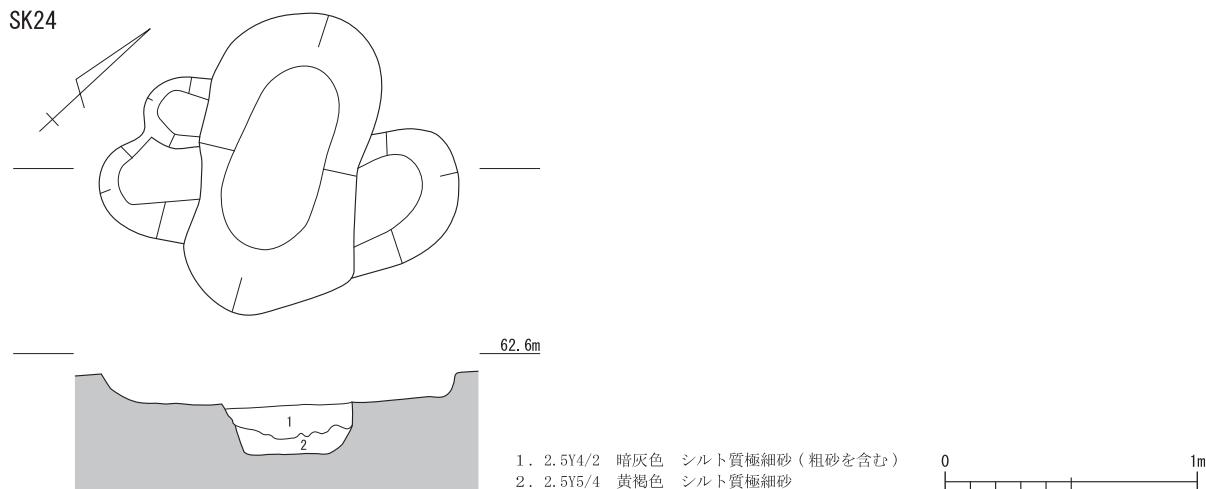
図版44



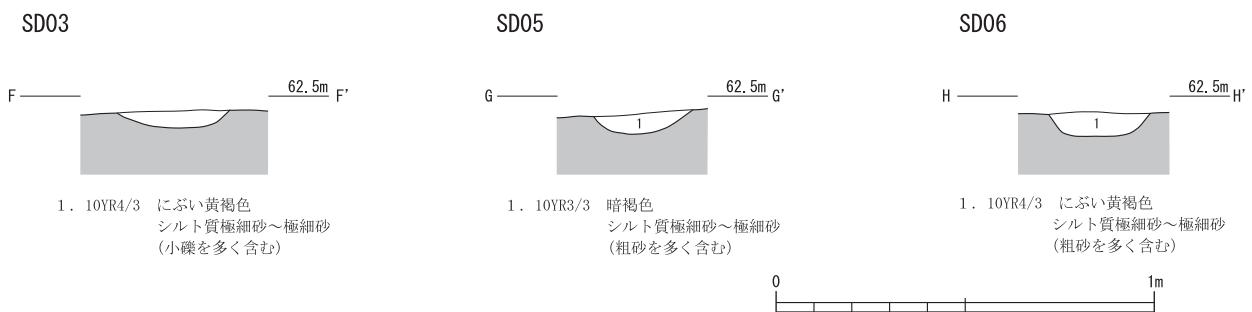
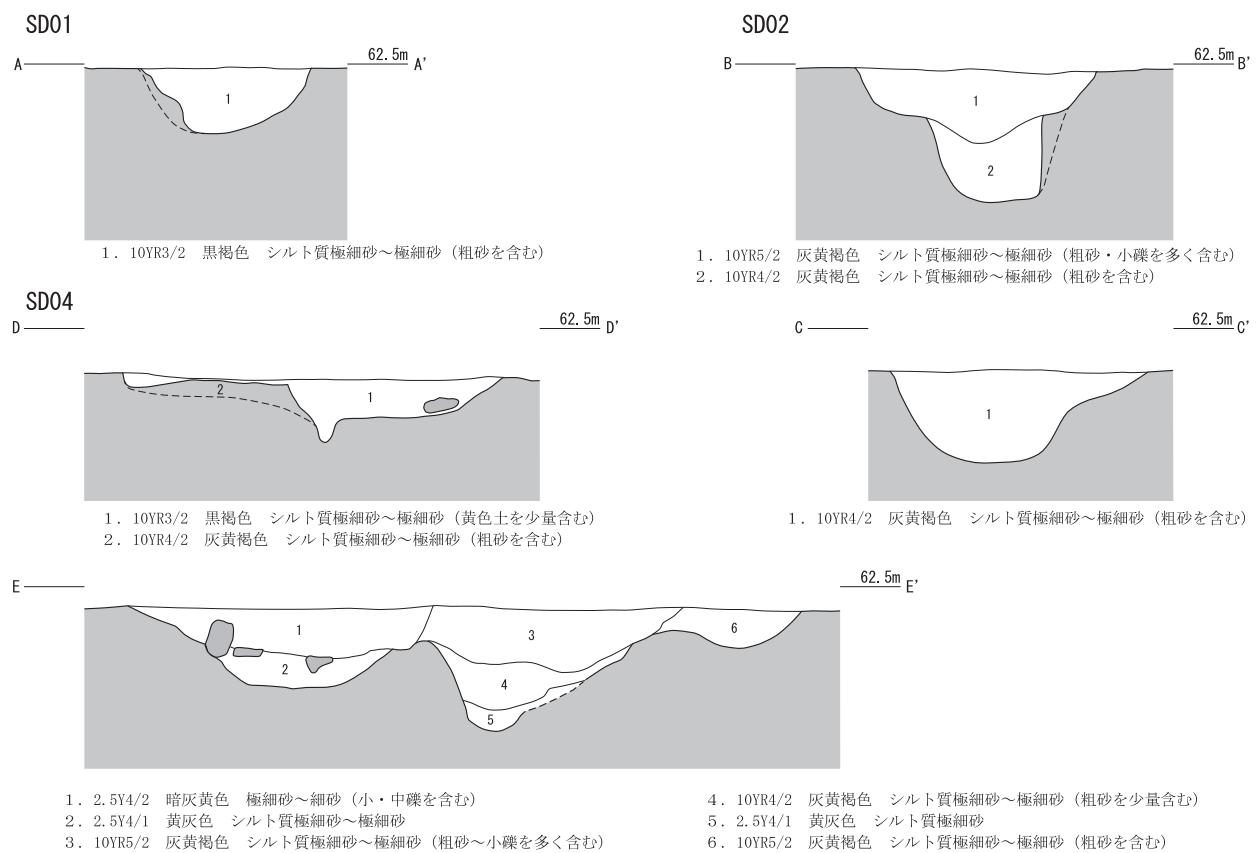
西嶋4E区 土坑2



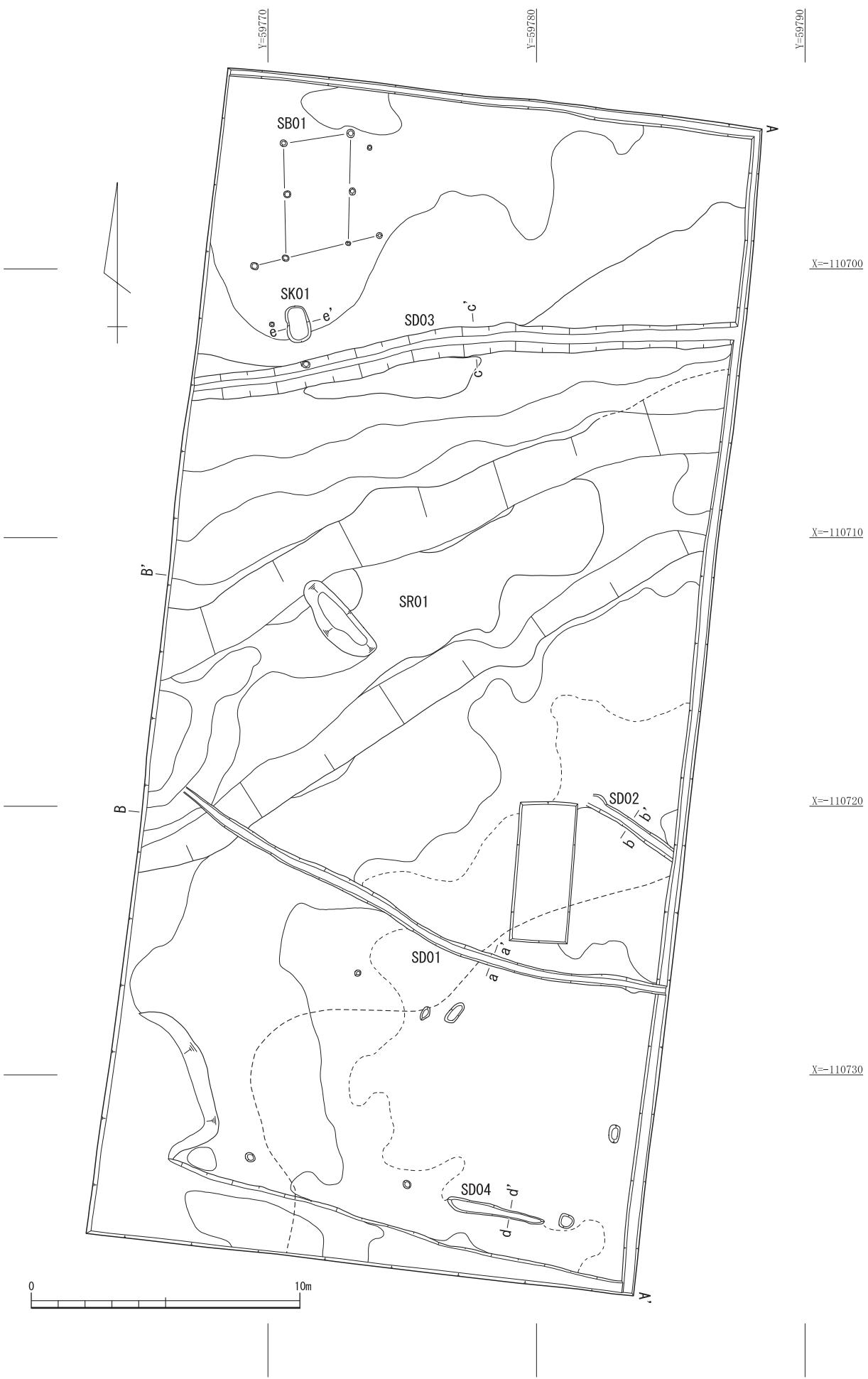
図版46



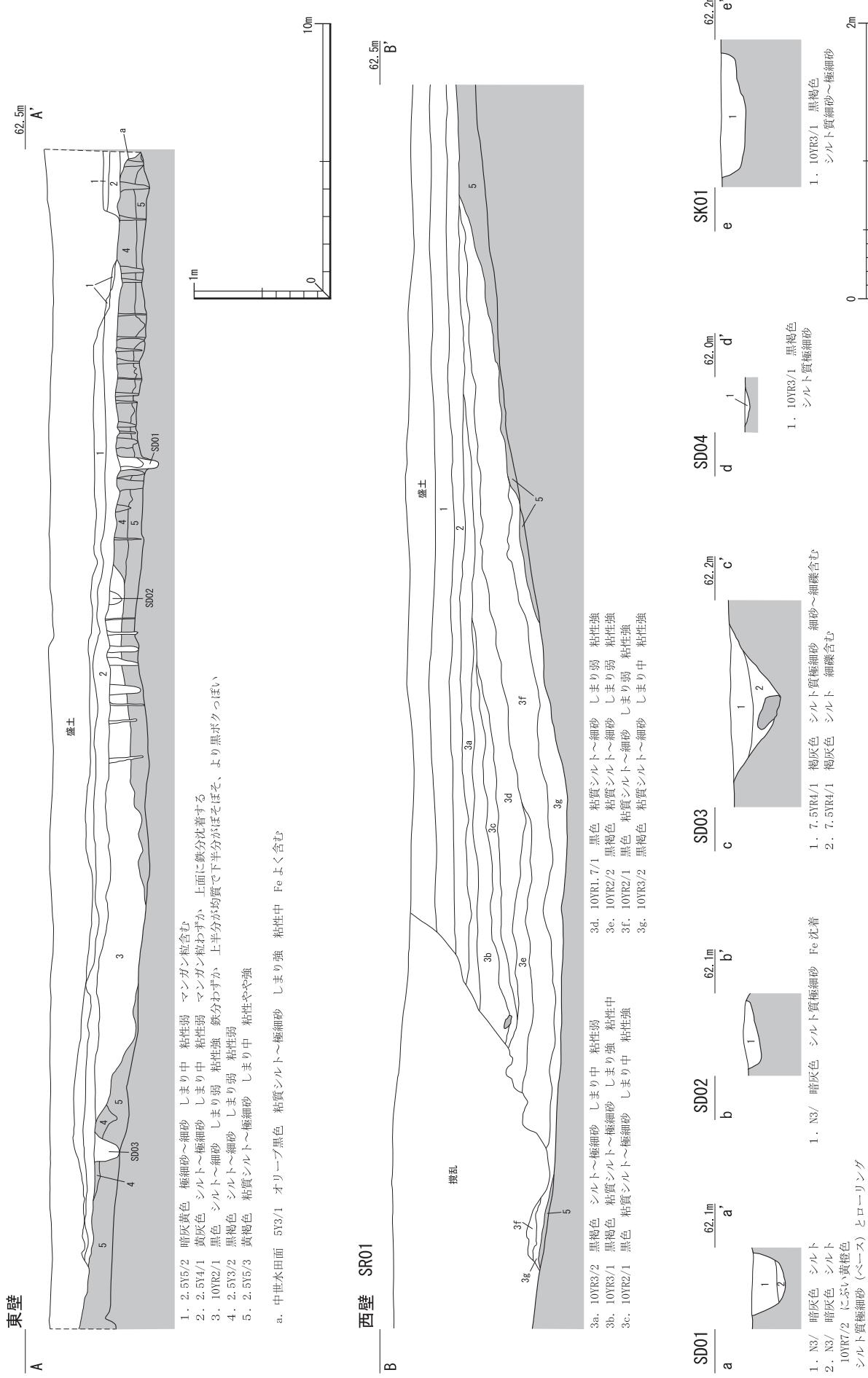
西嶋4E区 土坑4・不明遺構



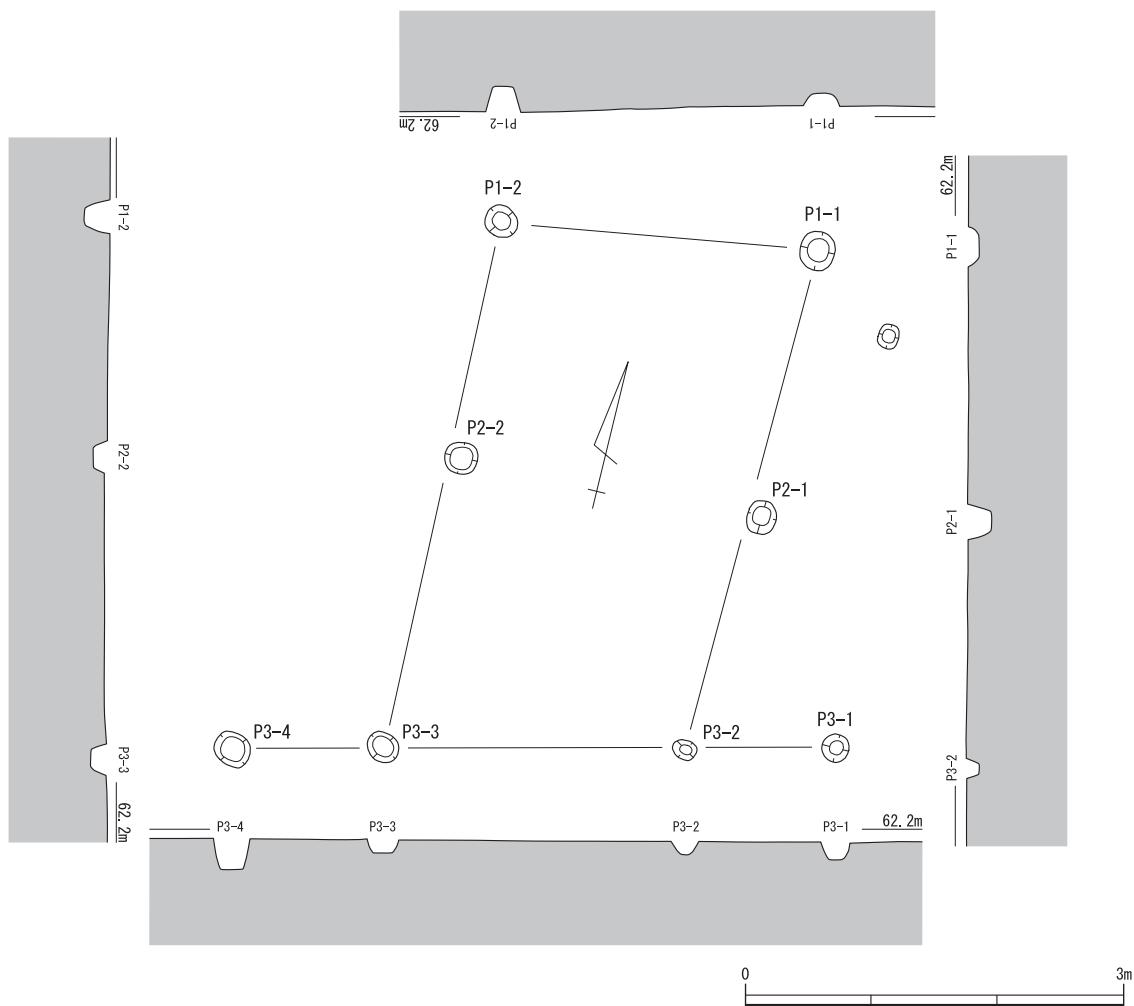
図版48



西島 5 区 全体図



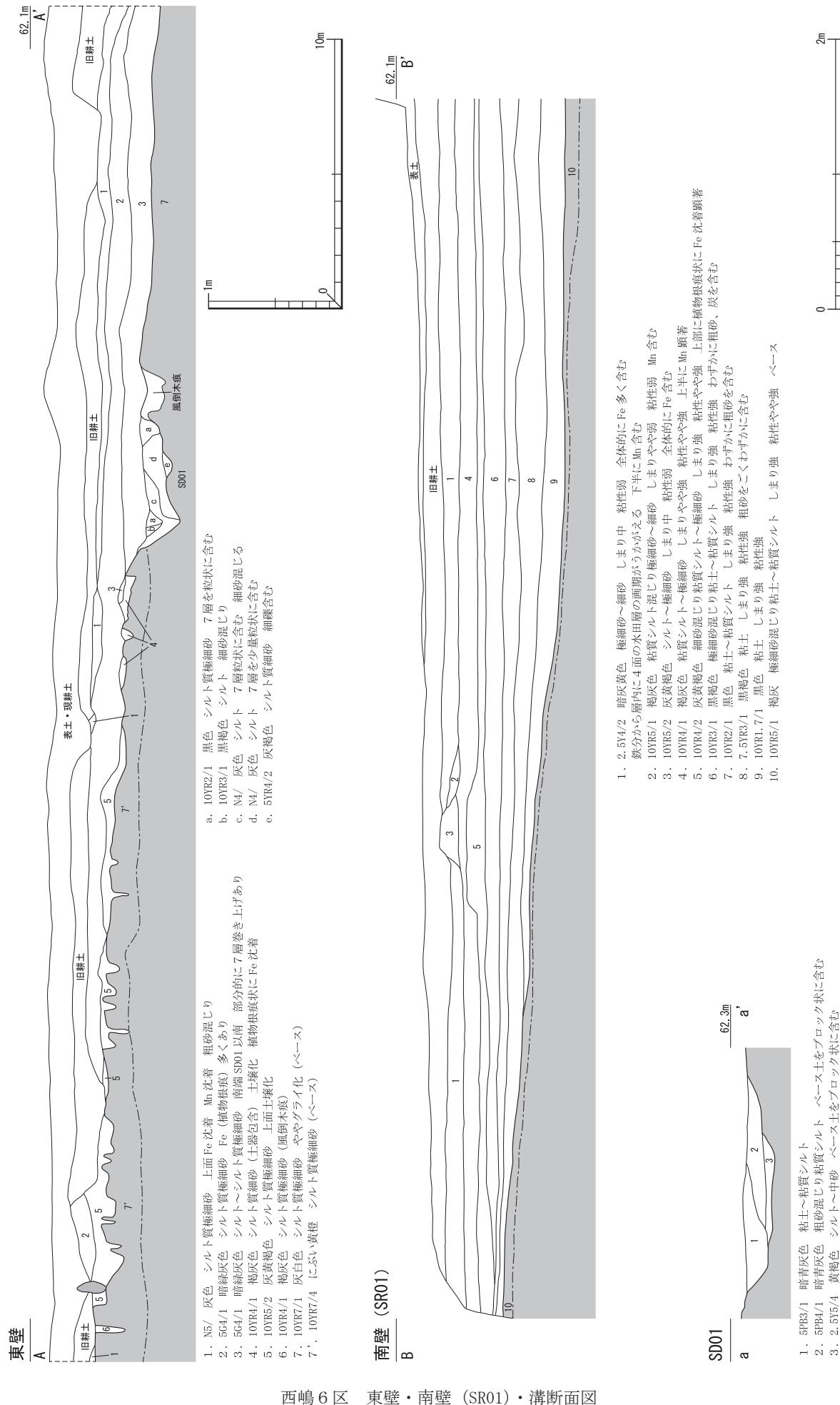
SB01



西嶋5区 掘立柱建物

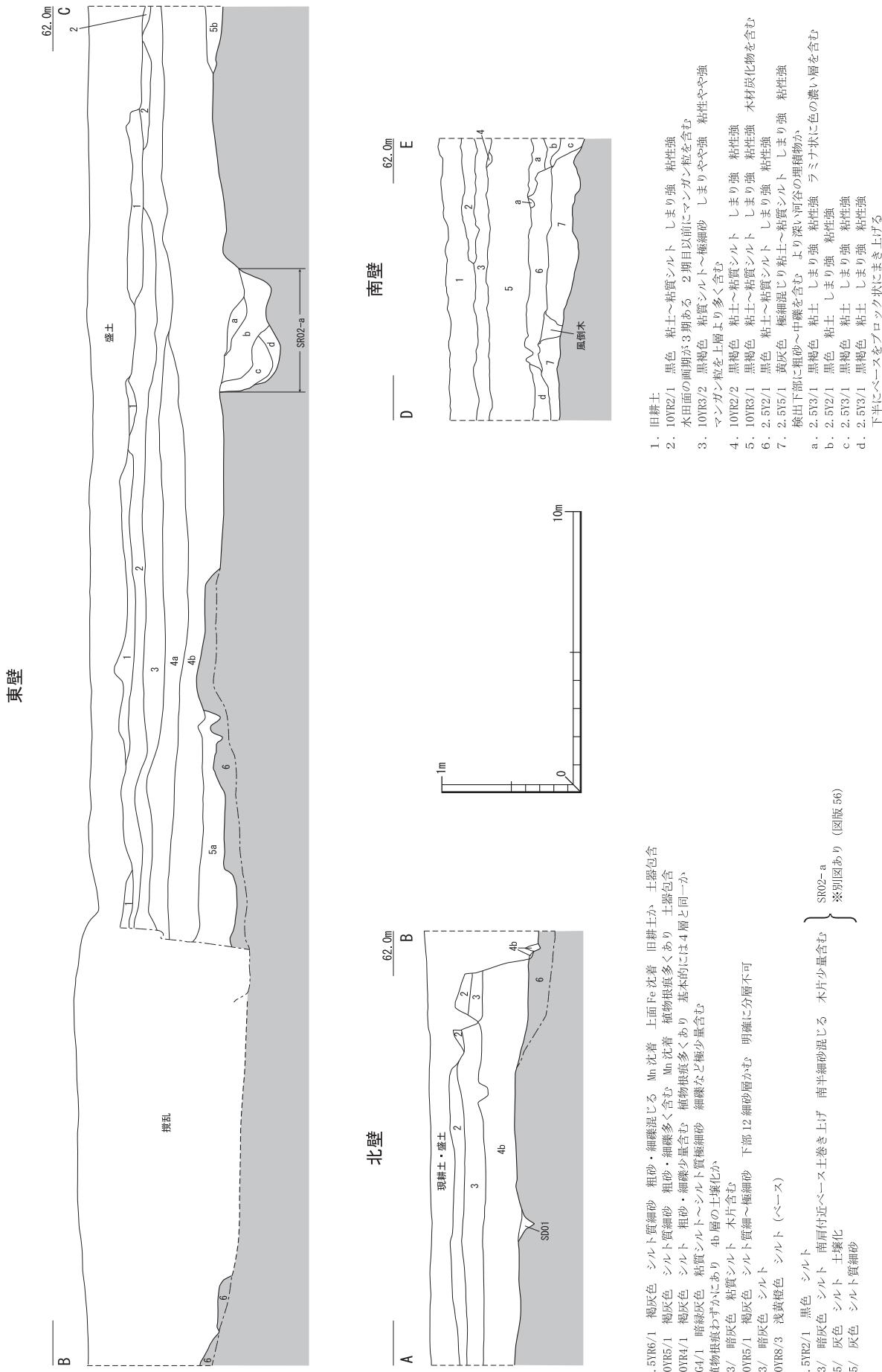


西島6区 全体図



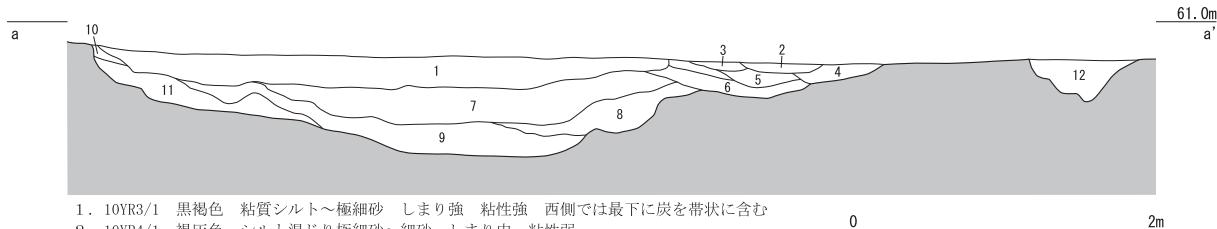


島 1 区 全体図



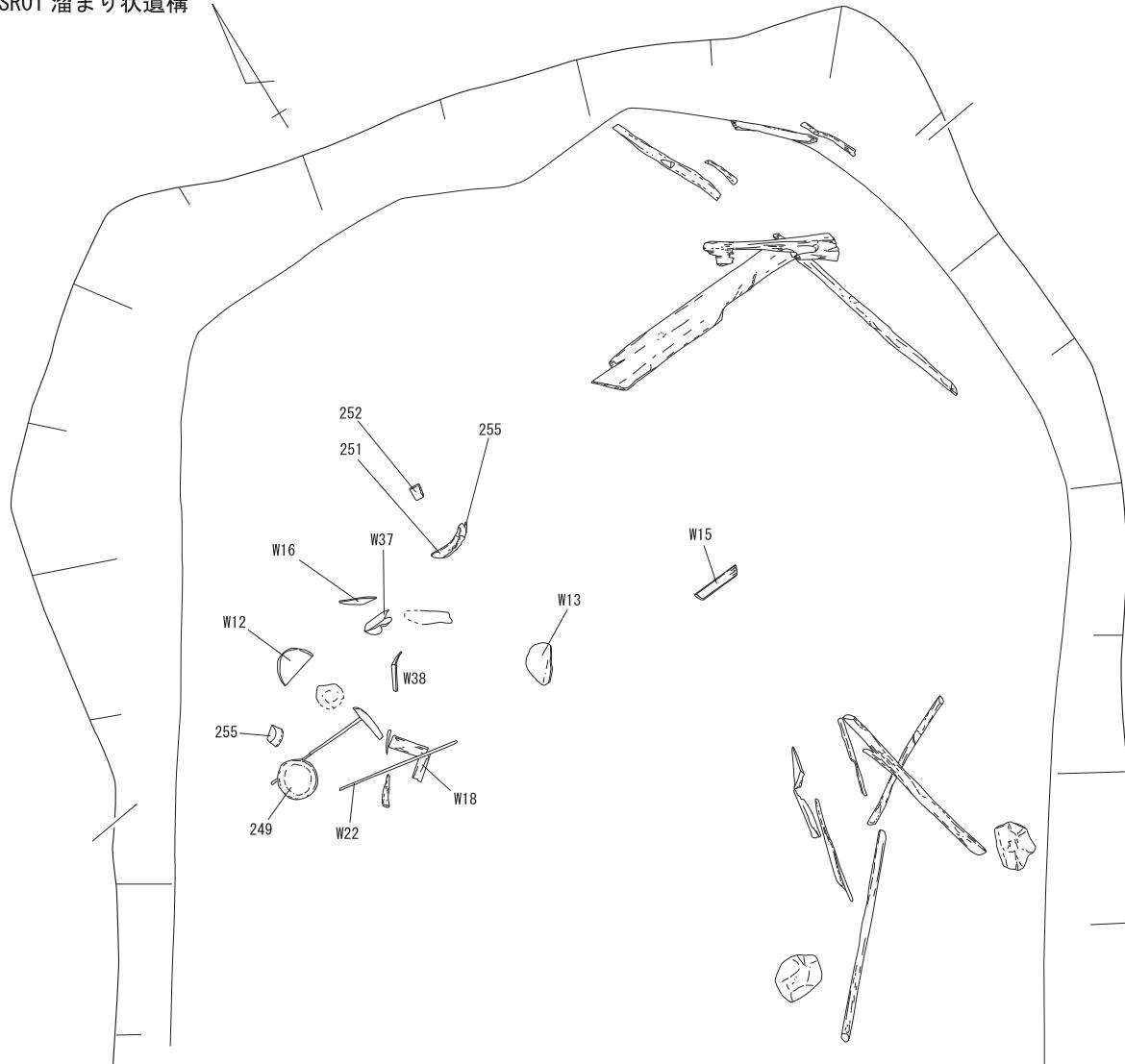
島1区 東壁・北壁・南壁断面図

SR01

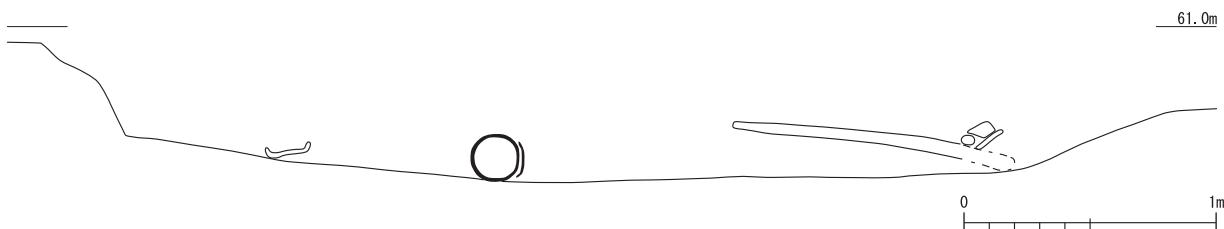


1. 10YR3/1 黒褐色 粘質シルト～極細砂 しまり強 粘性強 西側では最下に炭を帶状に含む
 2. 10YR4/1 褐灰色 シルト混じり極細砂～細砂 しまり中 粘性弱
 3. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～細砂 しまり中 粘性弱
 4. 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト～極細砂 しまり中 粘性中
 5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂混じりシルト～細砂 しまり弱 粘性中 Feをよく含む
 6. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土～粘質シルト しまり強 粘性強
 7. 10YR2/1 黒色 粘土～粘質シルト しまり強 粘性強 下半にわずかに炭を含む 植物起源か
 8. 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト～中砂 しまり弱 粘性弱 上から下に向けてシルト～粗砂に主体が変わる
 9. 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘土～粘質シルト しまり中 粘性強 全体に約5%の炭を含む 下部にベースをわずかにまき上げる
 10. 2.5Y4/1 黄灰色 粘土～極細砂 しまり中 粘性強
 11. 5Y5/1 灰色 粘質シルト～極細砂 しまり中 粘性強 Mn沈着 下部にわずかにベースをまき上げる
 12. 10YR3/1 黒褐色 粘土～極細砂 しまり強 粘性強

SR01 溜まり状遺構



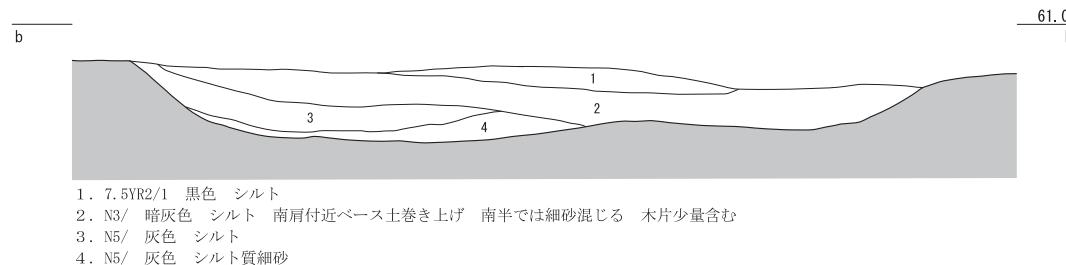
島1区



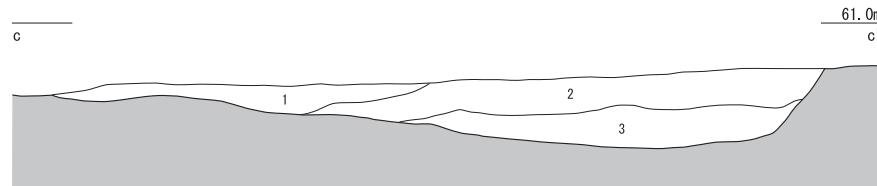
島1区 流路1

図版56

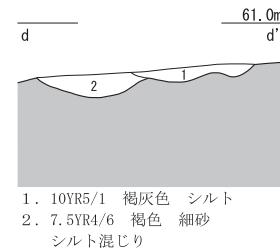
SR02-a 東壁断面



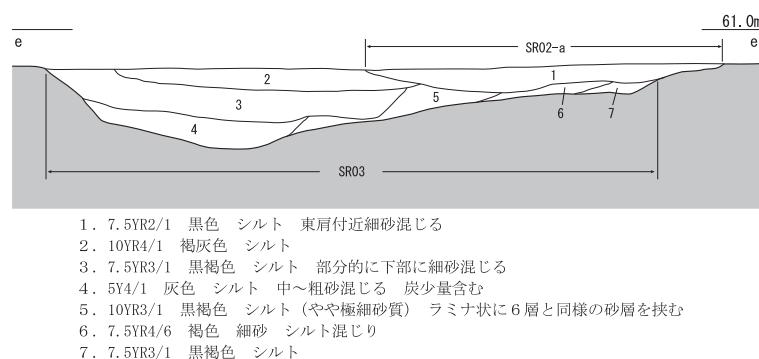
SR02-b 西断面



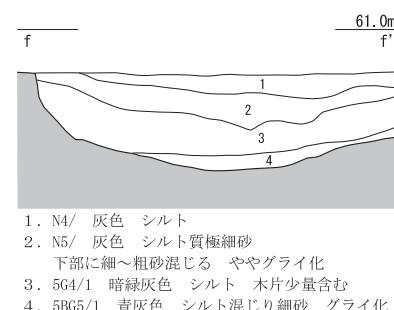
SR02-b 東断面



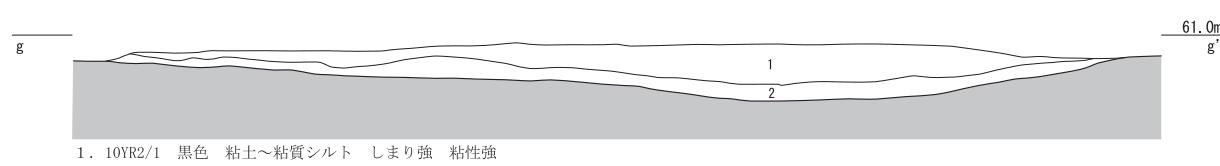
SR02-a・SR03



SR04



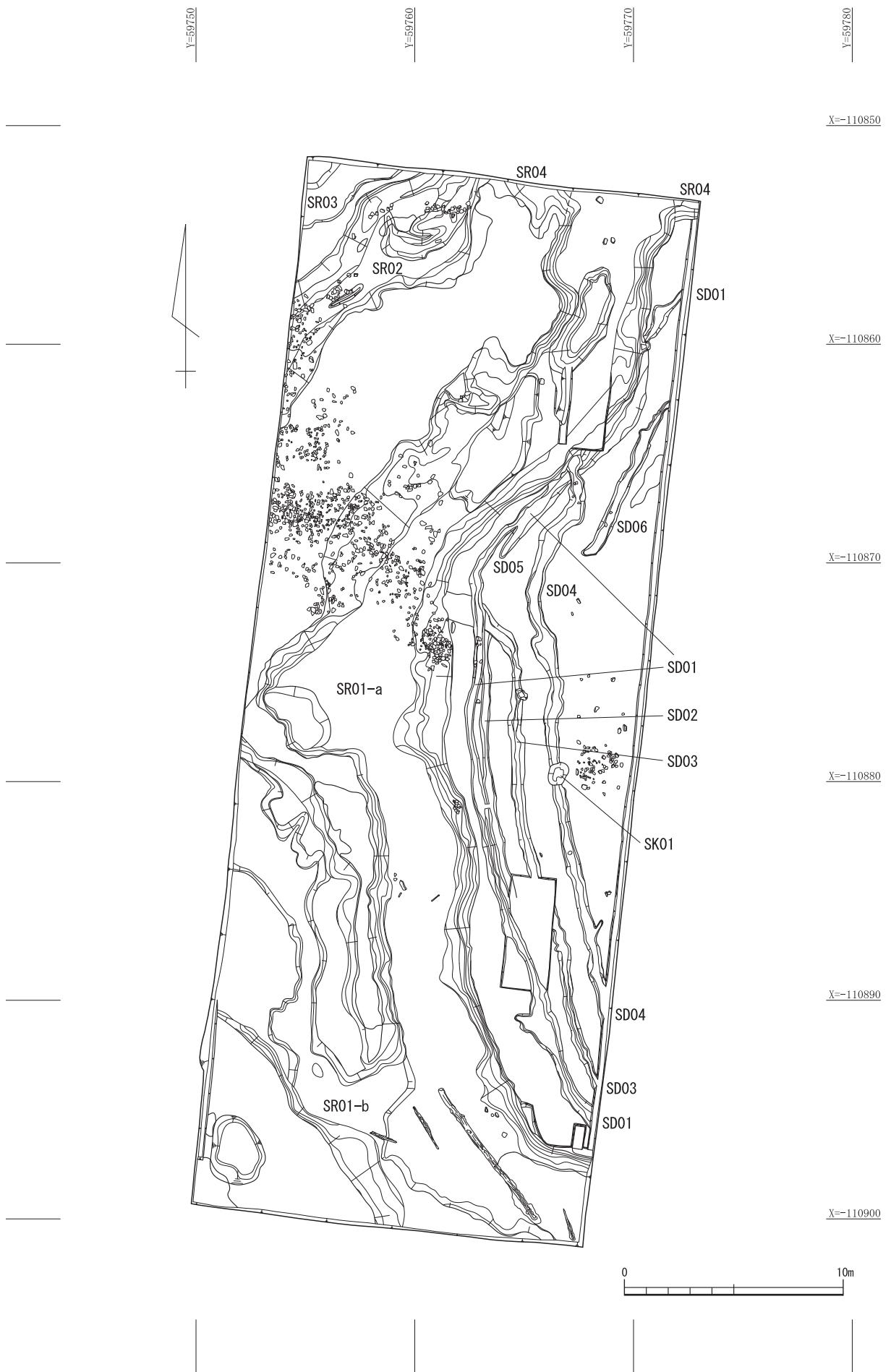
SR05



SD01



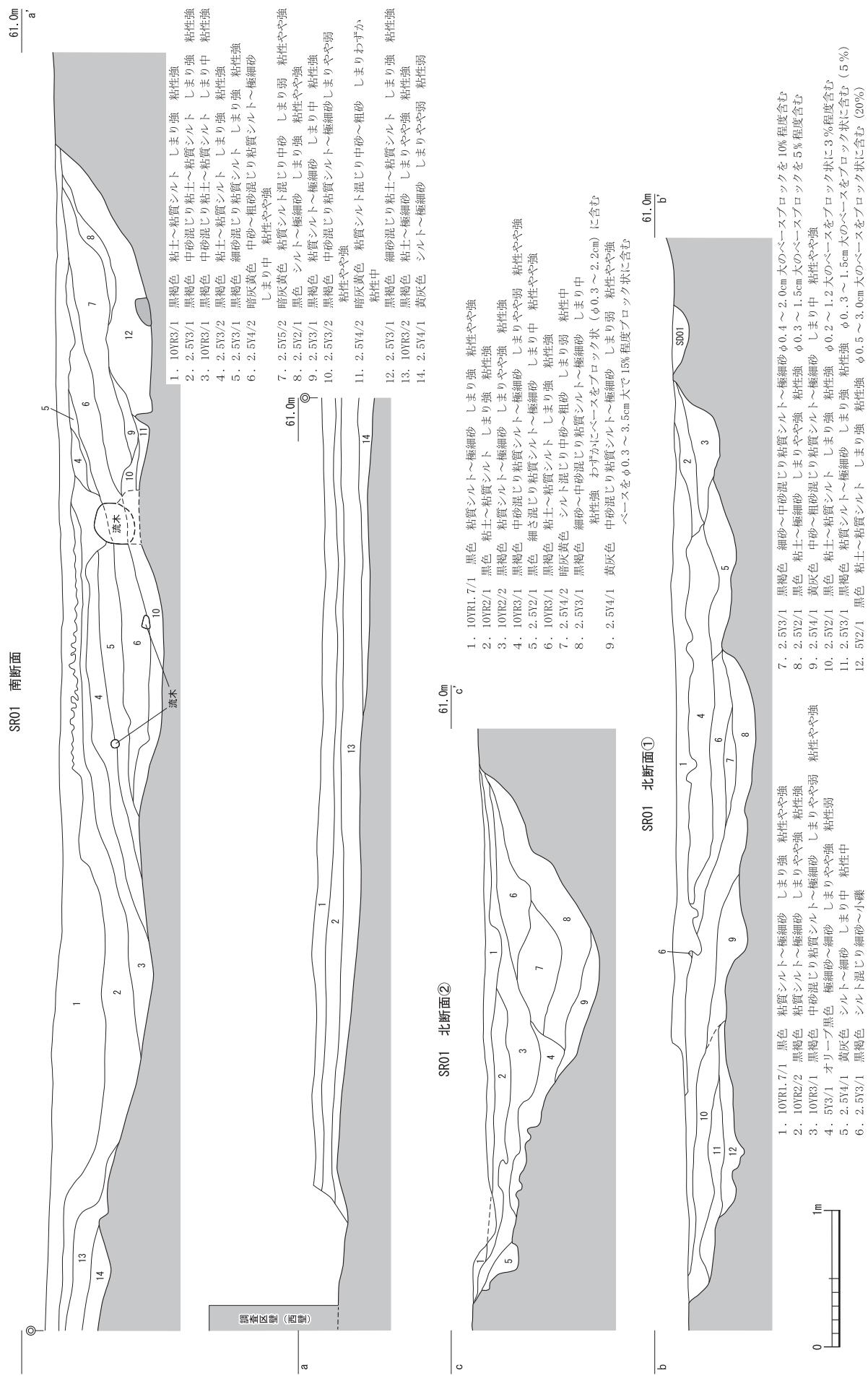
島1区



島2区 全体図1



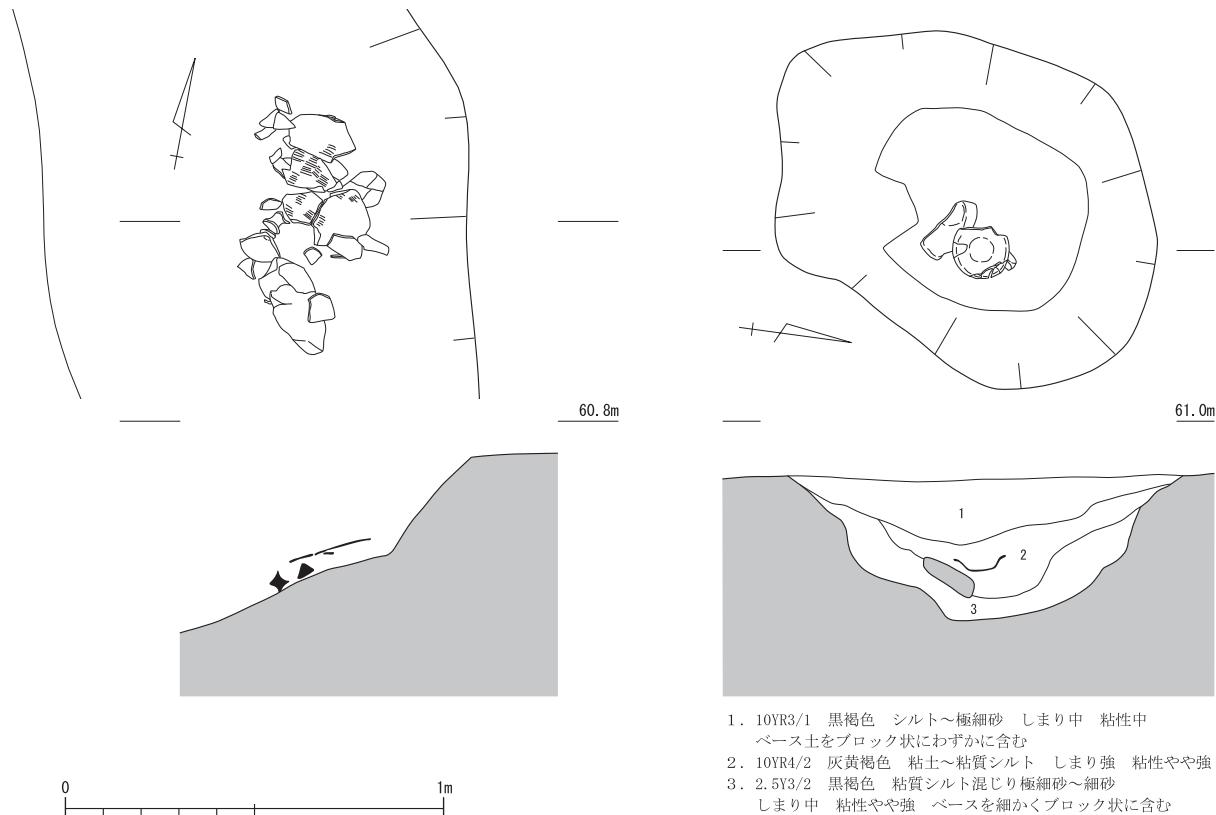
鳴2区 全体図2・東壁断面図



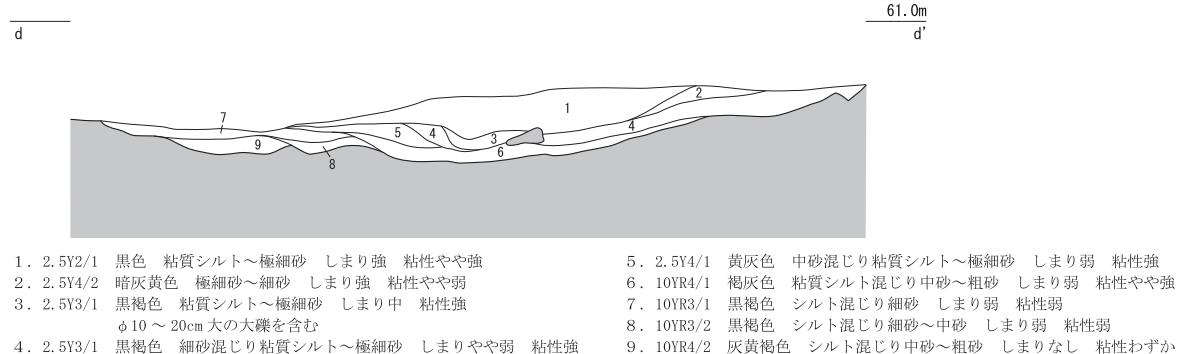
嶋2区 流路1

図版60

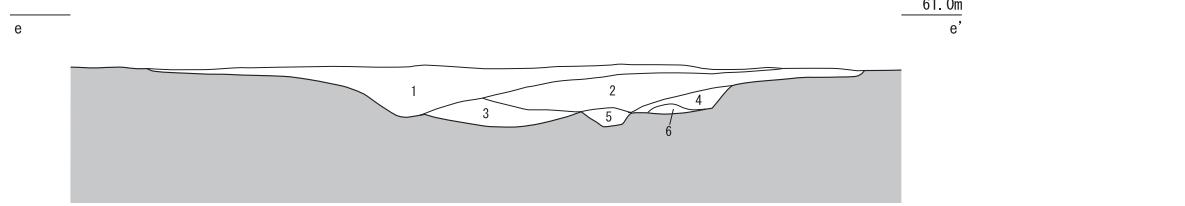
SR01-a 東肩土器出土状況



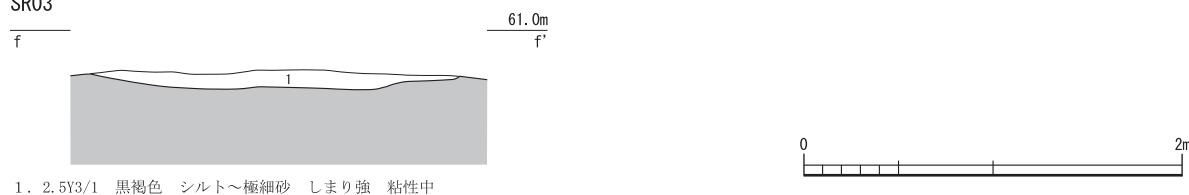
SR02 北断面

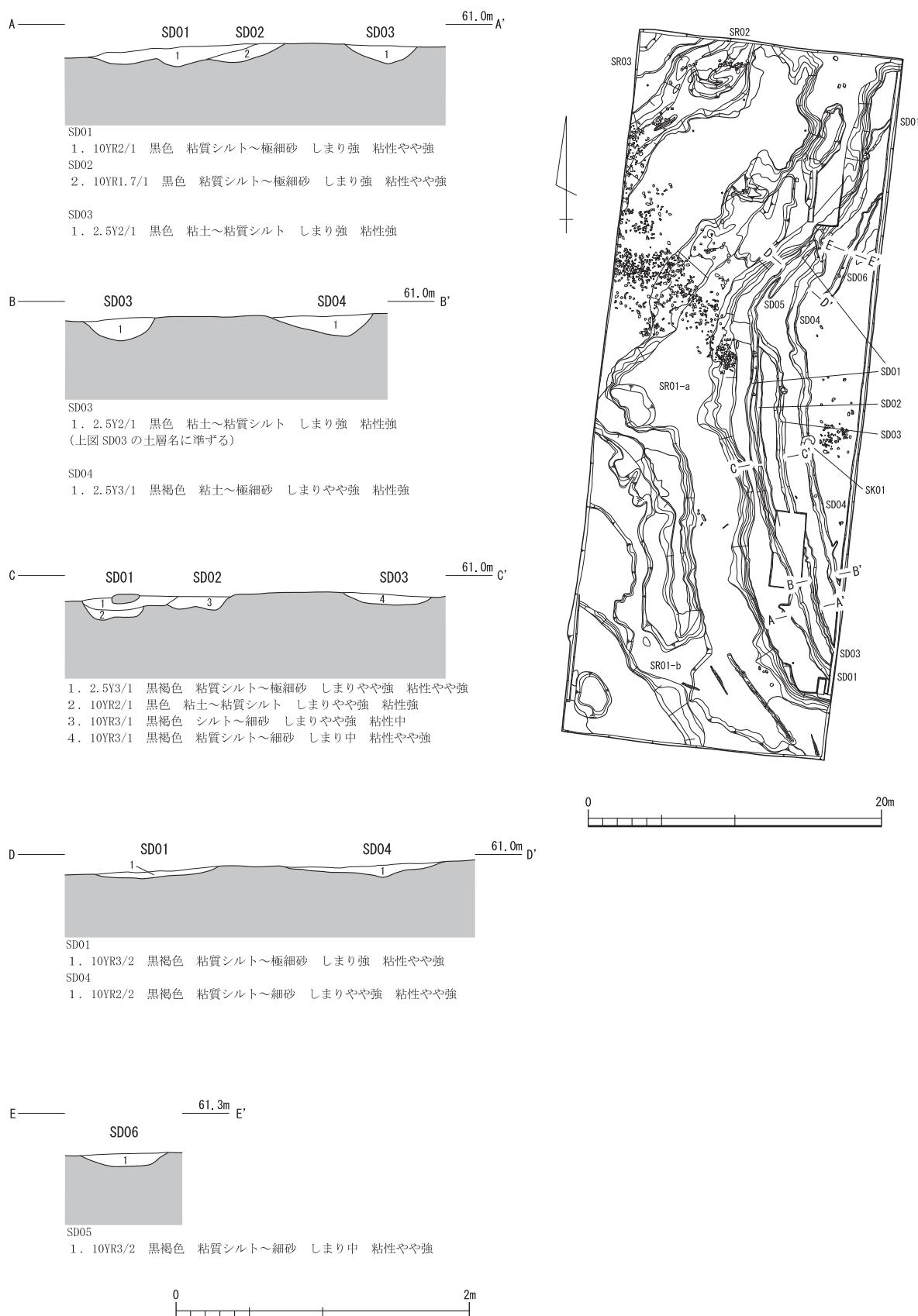


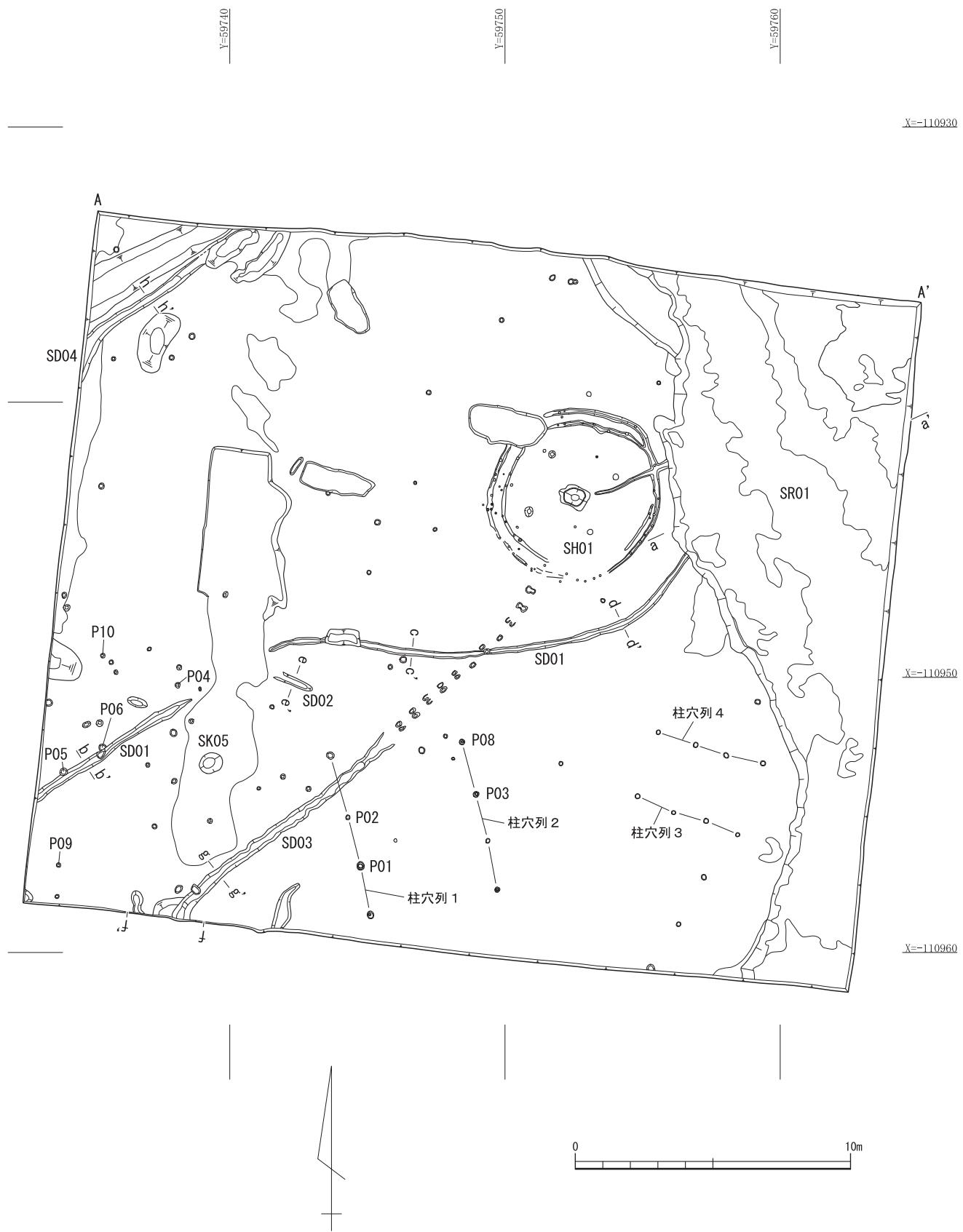
SR02 南断面



SR03

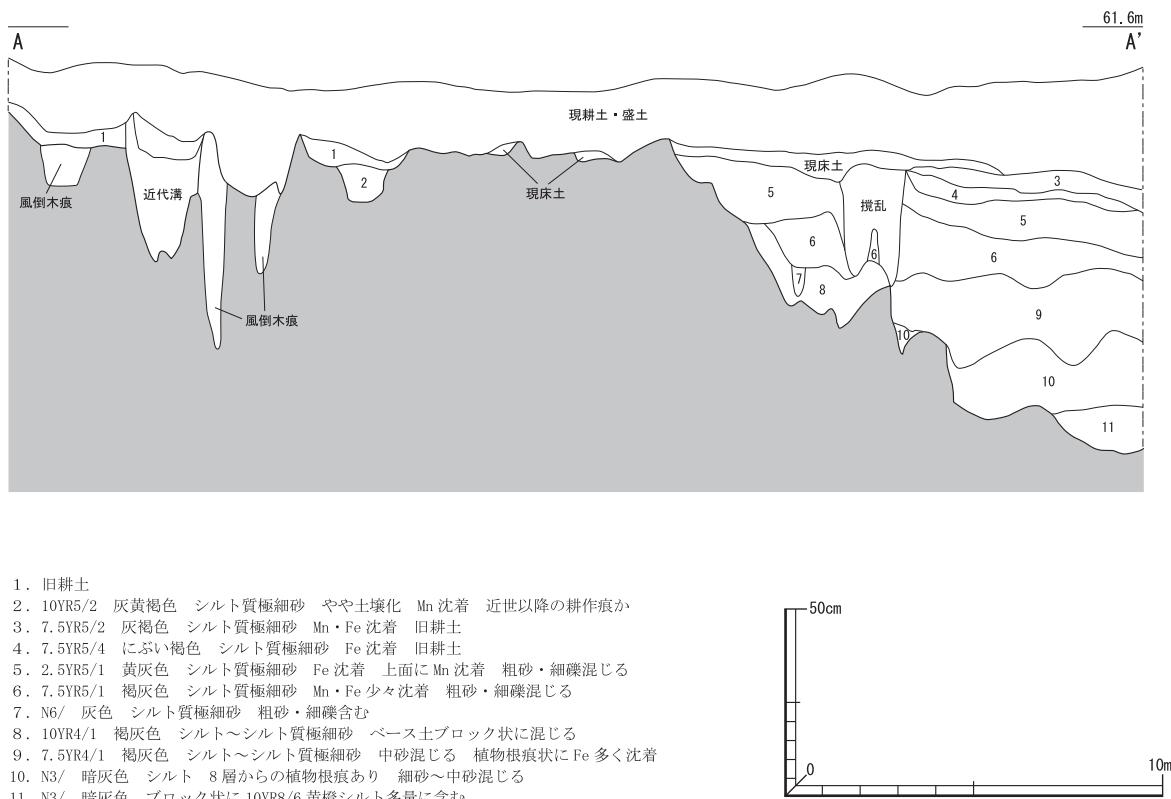




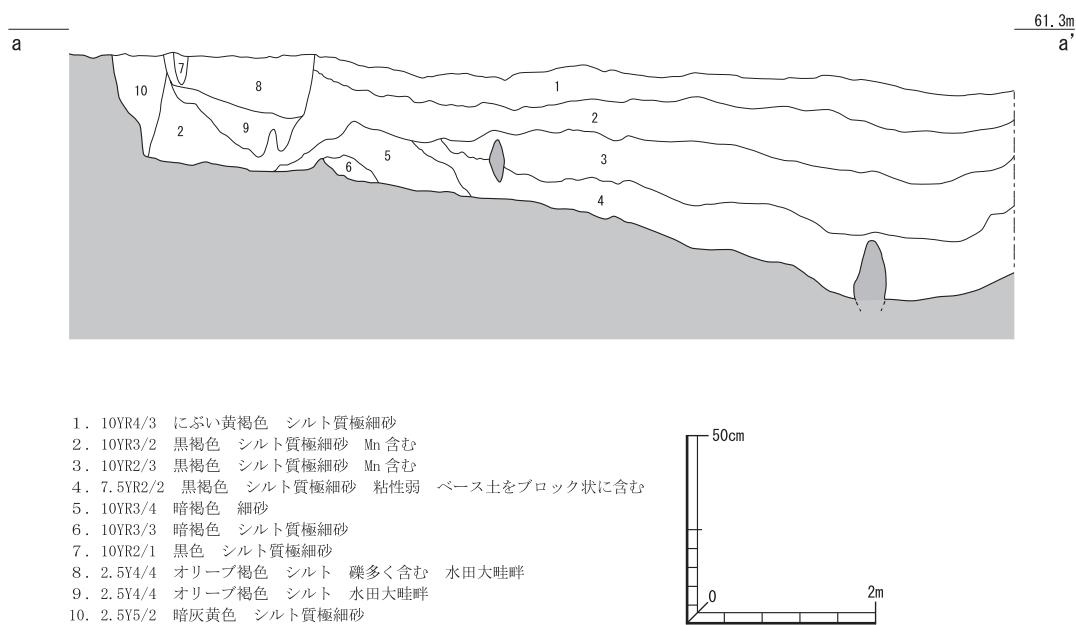


島3区 全体図

北壁



SR01

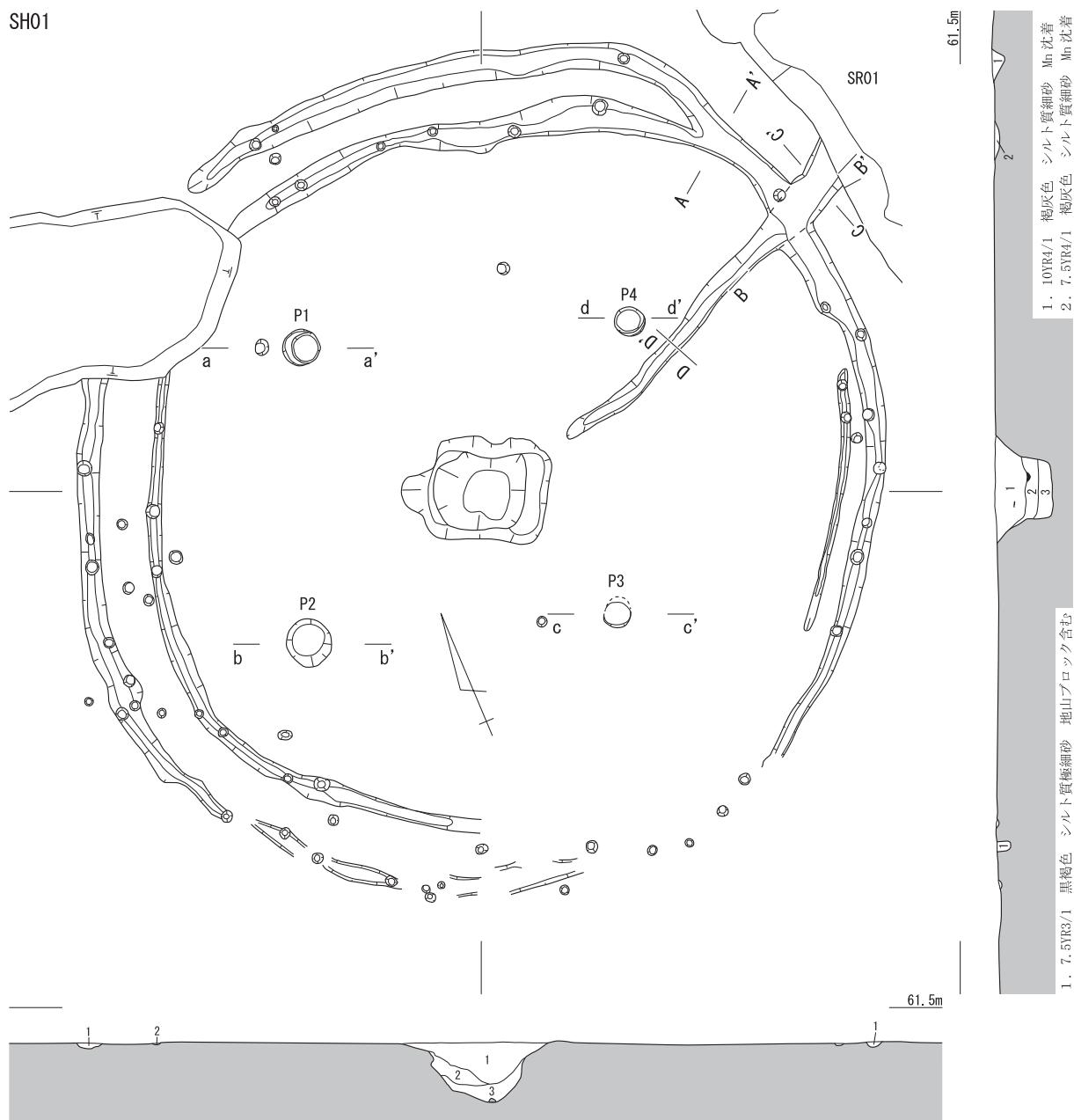


島3区

島3区 北壁断面図・流路

図版64

SH01

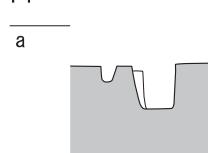


1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂
2. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質極細砂
3. 5YR2/1 黒褐色 シルト 焃土粒含む

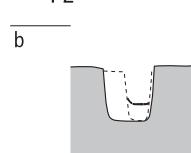
1. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂 Mn沈着
2. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト ベース土をブロック状に含む
3. 5YR2/1 黒褐色 シルト 焃土粒含む

1. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂 Mn沈着

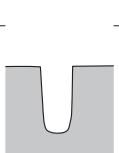
P1



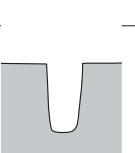
P2



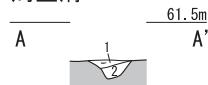
P3



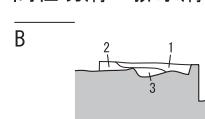
P4



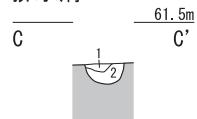
周壁溝



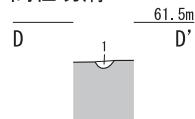
間仕切溝・排水溝・周壁溝



排水溝



間仕切溝



1. 7.5YR5/1 褐灰色 シルト質極細砂 Mn沈着 ベース土含む
2. 10YR5/1 褐灰色 シルト質極細砂 シルト強い Mn沈着 ベース土含む
3. 10YR5/1 褐灰色 シルト質極細砂 シルト強い

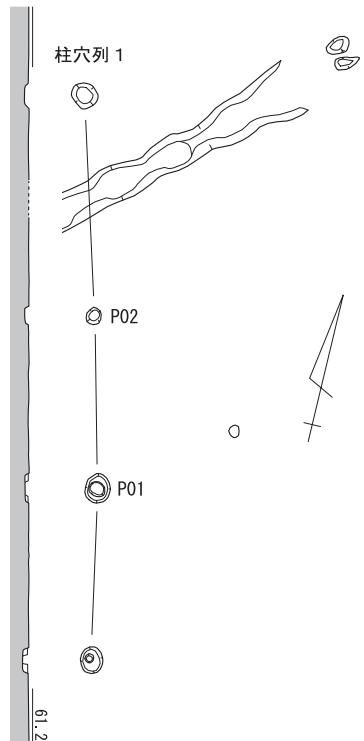
1. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂 Mn沈着 地山の粒少量含む
2. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 地山ブロック含む
3. 10YR5/1 褐灰色 シルト質極細砂 地山ブロック含む

1. 7.5YR5/2 灰褐色 シルト質極細砂
2. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂

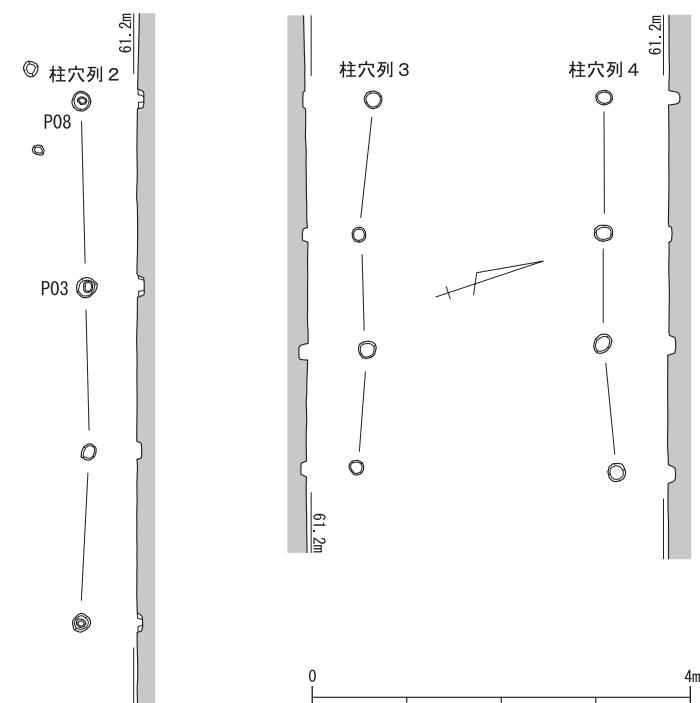
1. 10YR6/1 褐灰色 シルト質極細砂 ベース土含む

0 2m

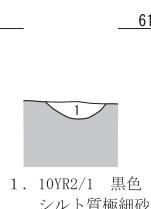
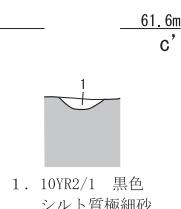
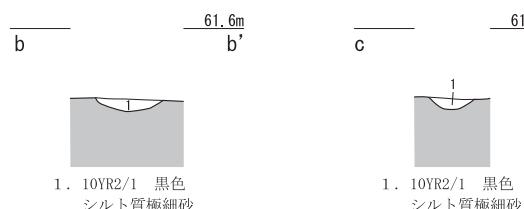
柱穴列 1・2



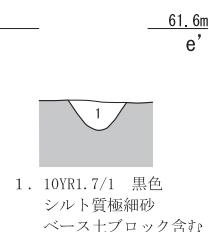
柱穴列 3・4



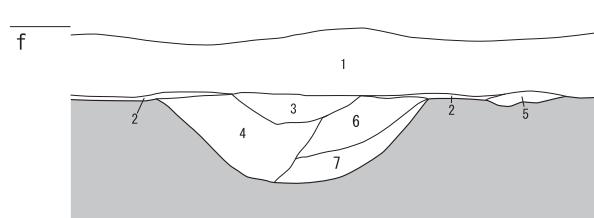
SD01



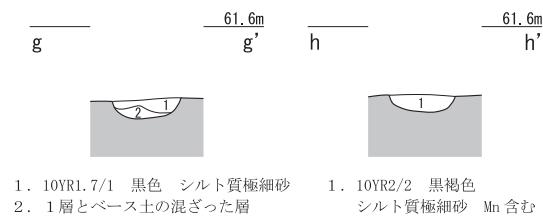
SD02



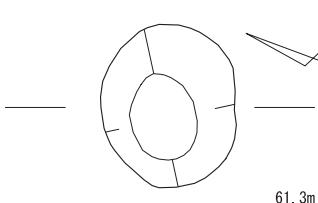
SD03



SD04

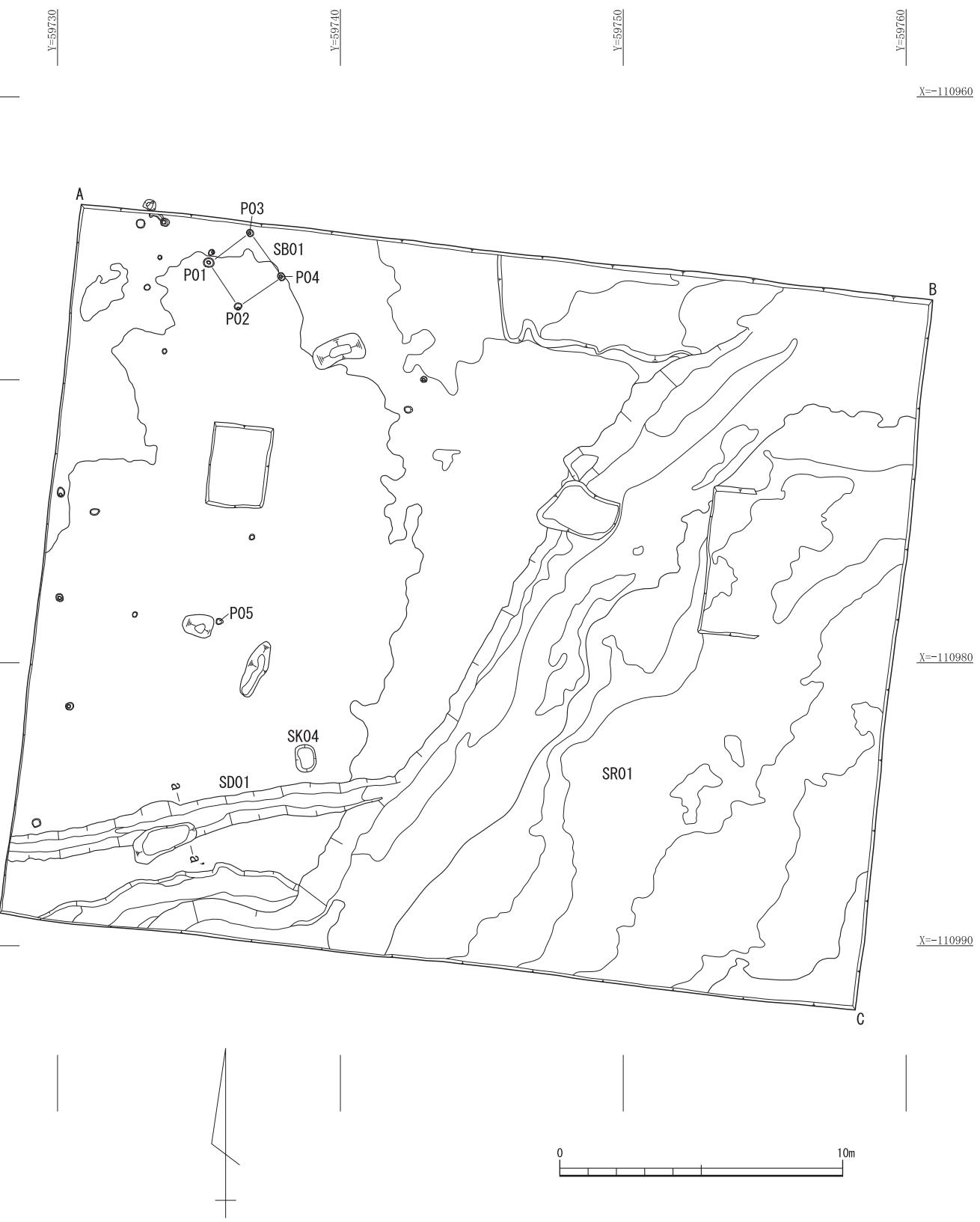


SK05



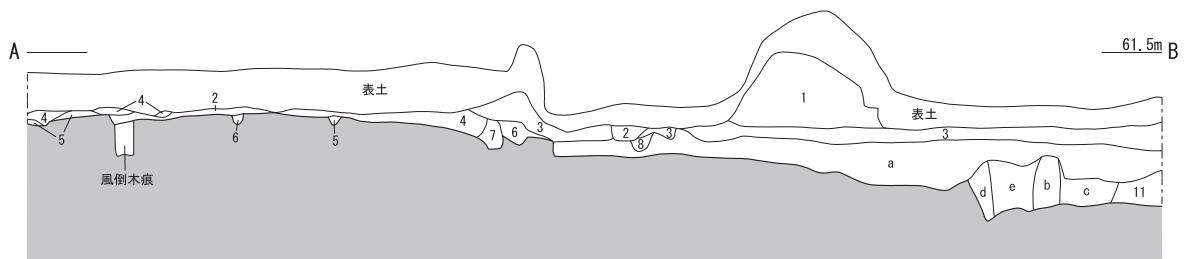
1. 7.5YR1.7/1 黒色
シルト質極細砂
2. 10YR2/2 黒褐色
シルト質極細砂



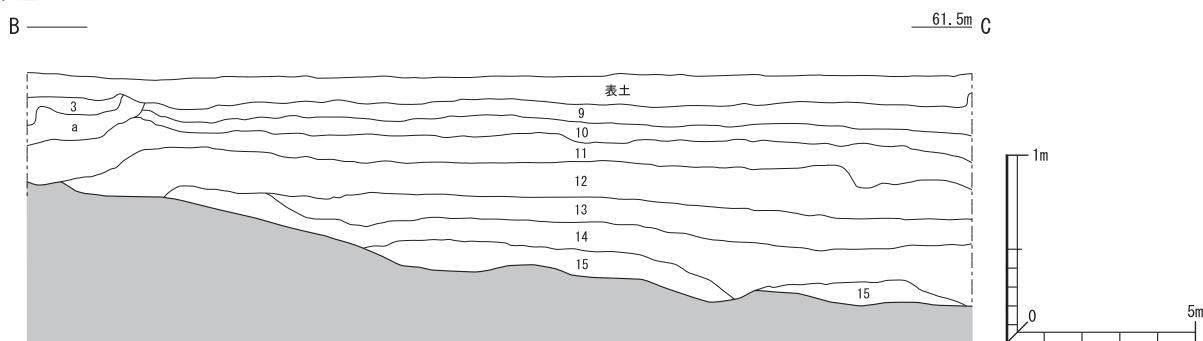


島 4 区 全体図

北壁

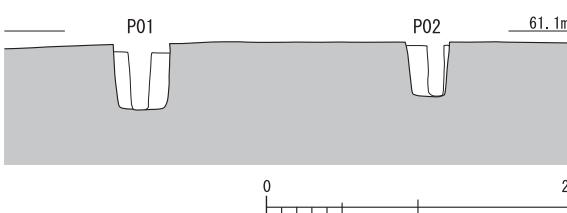
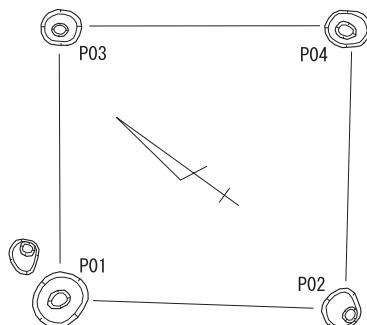


東壁

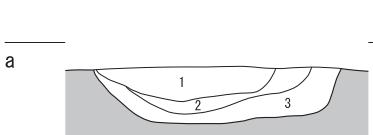


1. 10YR5/1 褐灰色 シルト質極細砂 Fe・Mn 少量沈着 3層に近い
 2. 10YR7/6 明黄褐色 シルト Mn 沈着 よくしまる(床土)
 ベース土を客土か
 3. 4層に5層がブロック状に混ざる
 4. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 Mn 沈着
 5. 10YR6/1 褐灰色 シルト質極細砂
 6. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂 明確な掘り方は認められない
 7. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 中礫含む
 8. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質細砂～中砂
 9. NS/ 灰色 シルト質細砂 Mn 沈着 旧耕土
 10. 10YR5/1 褐灰色 シルト質細砂 Mn・Fe 沈着 旧床土か
11. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂 Fe・Mn 沈着 しまる
 上部から植物根痕状にFe沈着顕著
 13. 5B4/1 暗青灰色
 14. 5B3/1 暗青灰色 シルト
 15. N4/ 灰色 シルト
 a. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂～中砂 Mn 沈着 多量の礫含む 水田化に伴う敷土か
 b. 2.5Y4/1 黄褐色 シルト～シルト質極細砂 Fe 沈着 磯多く含む
 c. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂 (シルト強い) Fe 沈着
 d. 5Y6/2 灰オリーブ色 シルト質細砂～中砂 矶含む 近世以降水路
 e. 7.5YR6/3 にぶい褐色 細砂～中砂 シルト混じり細礫～中礫含む 水路

SB01

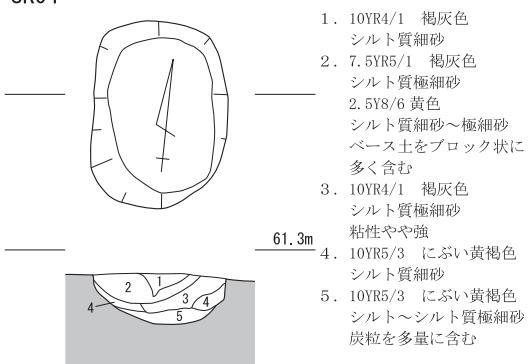


SD01



1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質極細砂
 2. 10YR2/1 黒色 シルト質極細砂
 3. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂

SK04



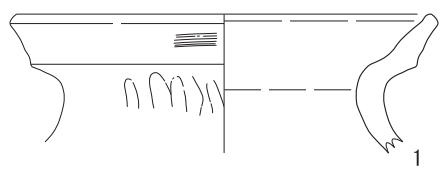
1. 10YR4/1 褐灰色 シルト質細砂
 2. 7.5YR5/1 褐灰色 シルト質細砂
 2.5Y8/6 黄色 シルト質細砂～極細砂
 ベース土をブロック状に多く含む
 3. 10YR4/1 褐灰色 シルト質細砂 粘性やや強
 4. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細砂
 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～シルト質極細砂
 炭粒を多量に含む

島4区

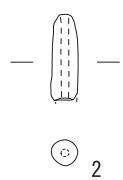
島4区 北壁・東壁断面図・掘立柱建物・溝・土坑

調査区外トレンチ

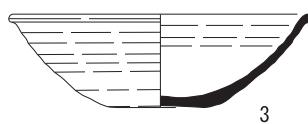
T76



T69

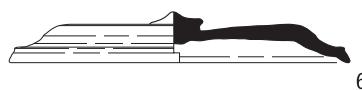
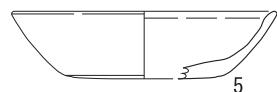
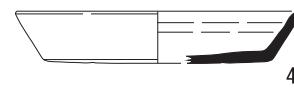


T67

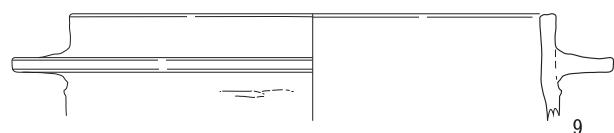


西嶋1区

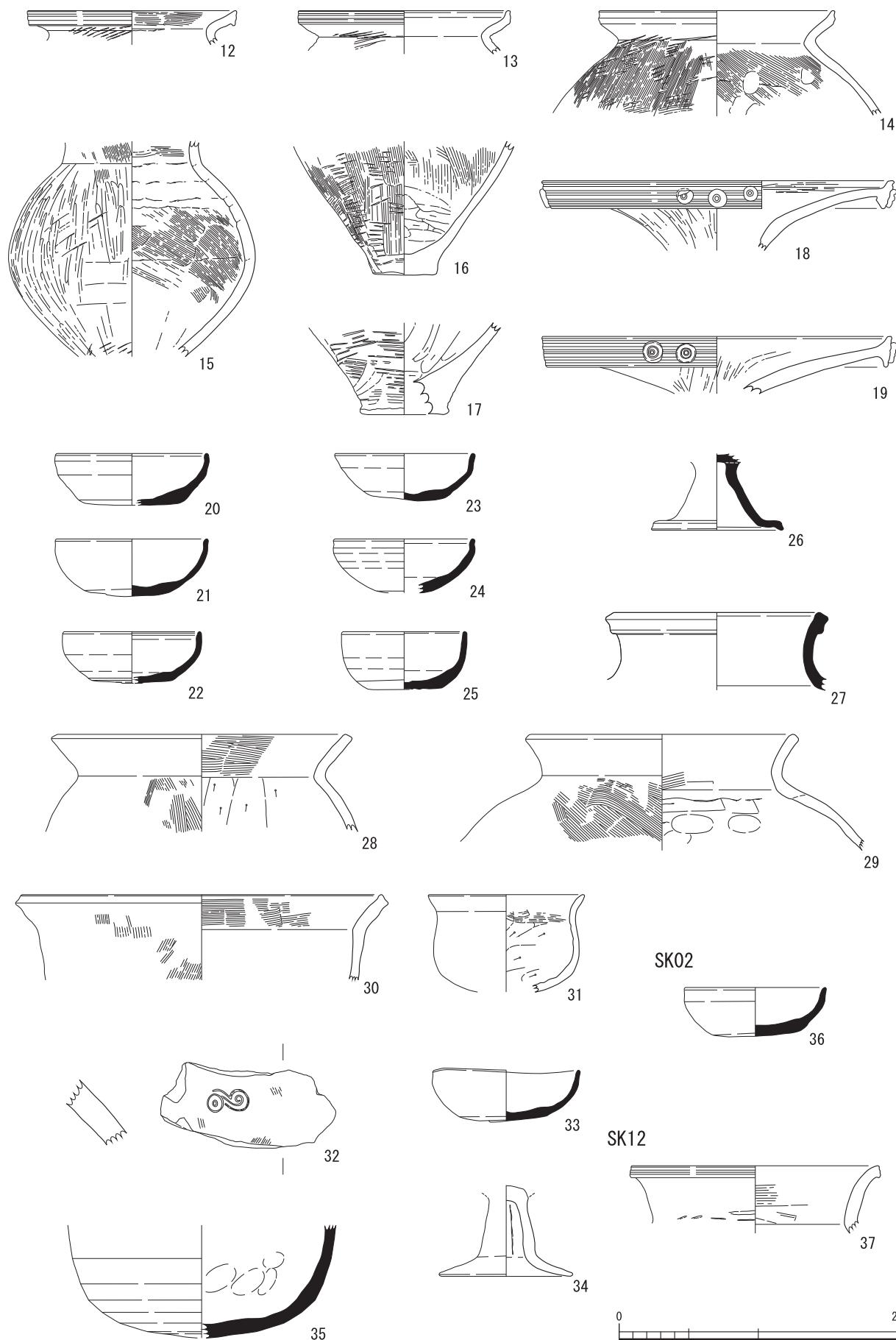
SD02



包含層

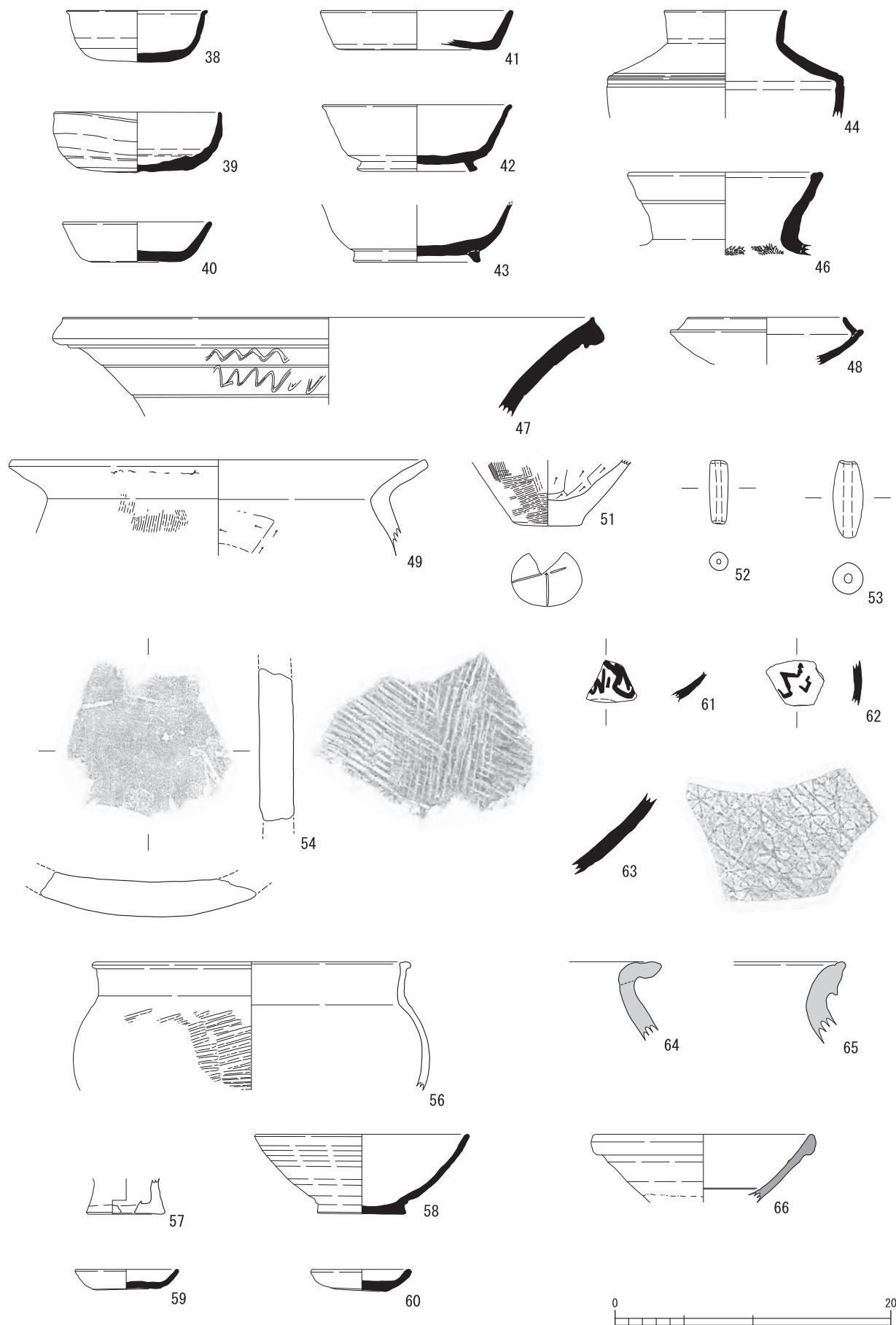


NR01



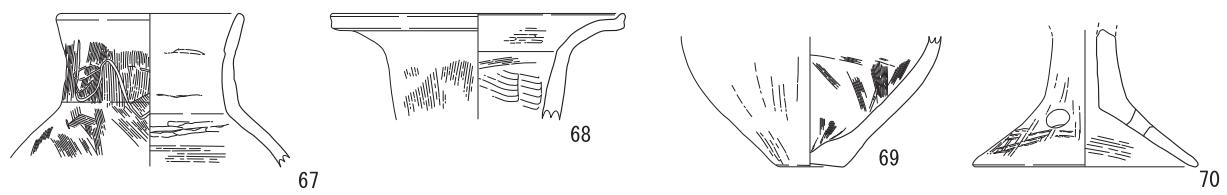
図版 70

包含層

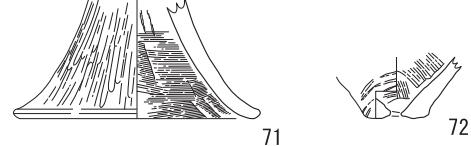


西嶋 2 区 出土土器 2

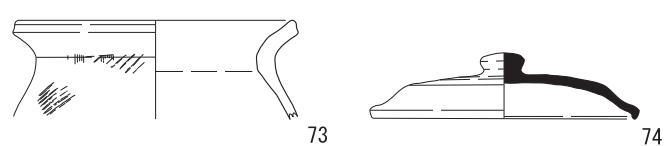
SX01



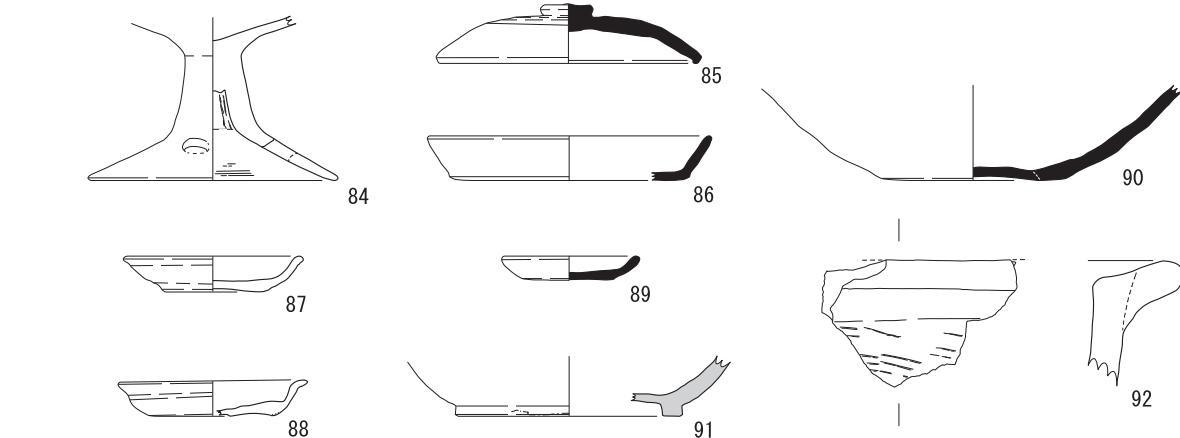
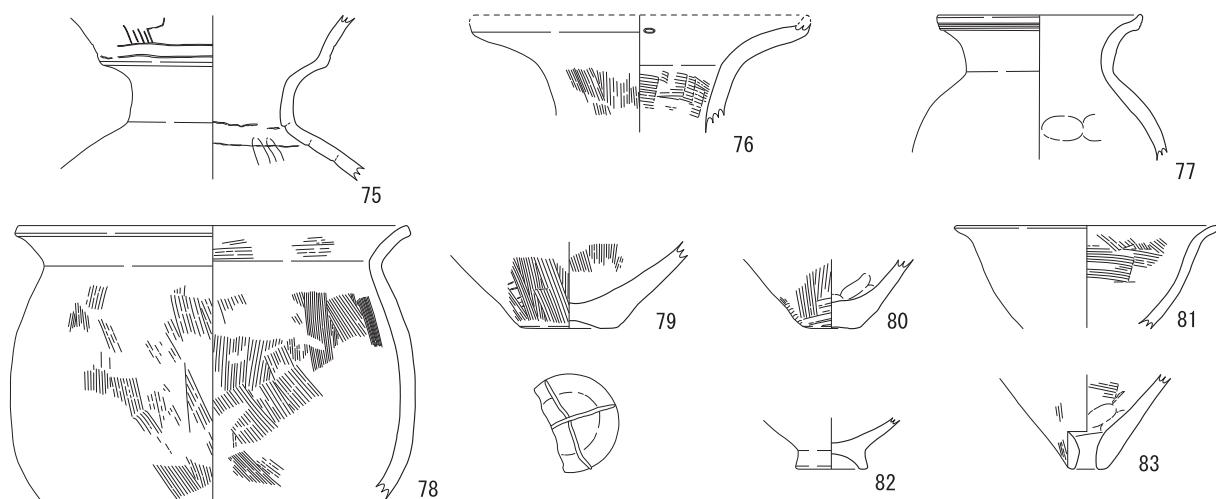
SX03



SX06

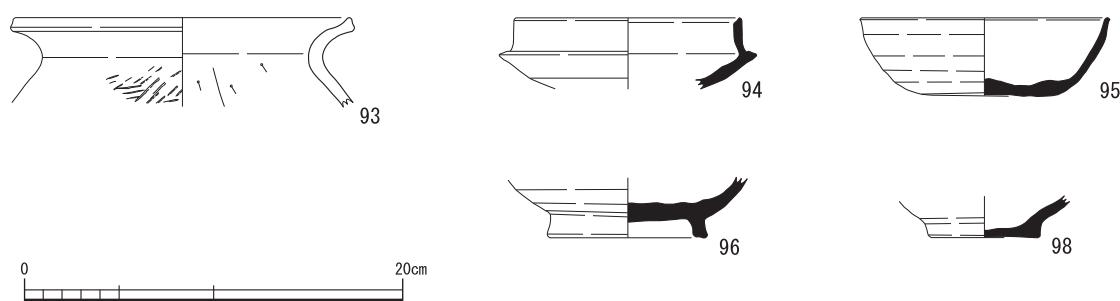


NR01



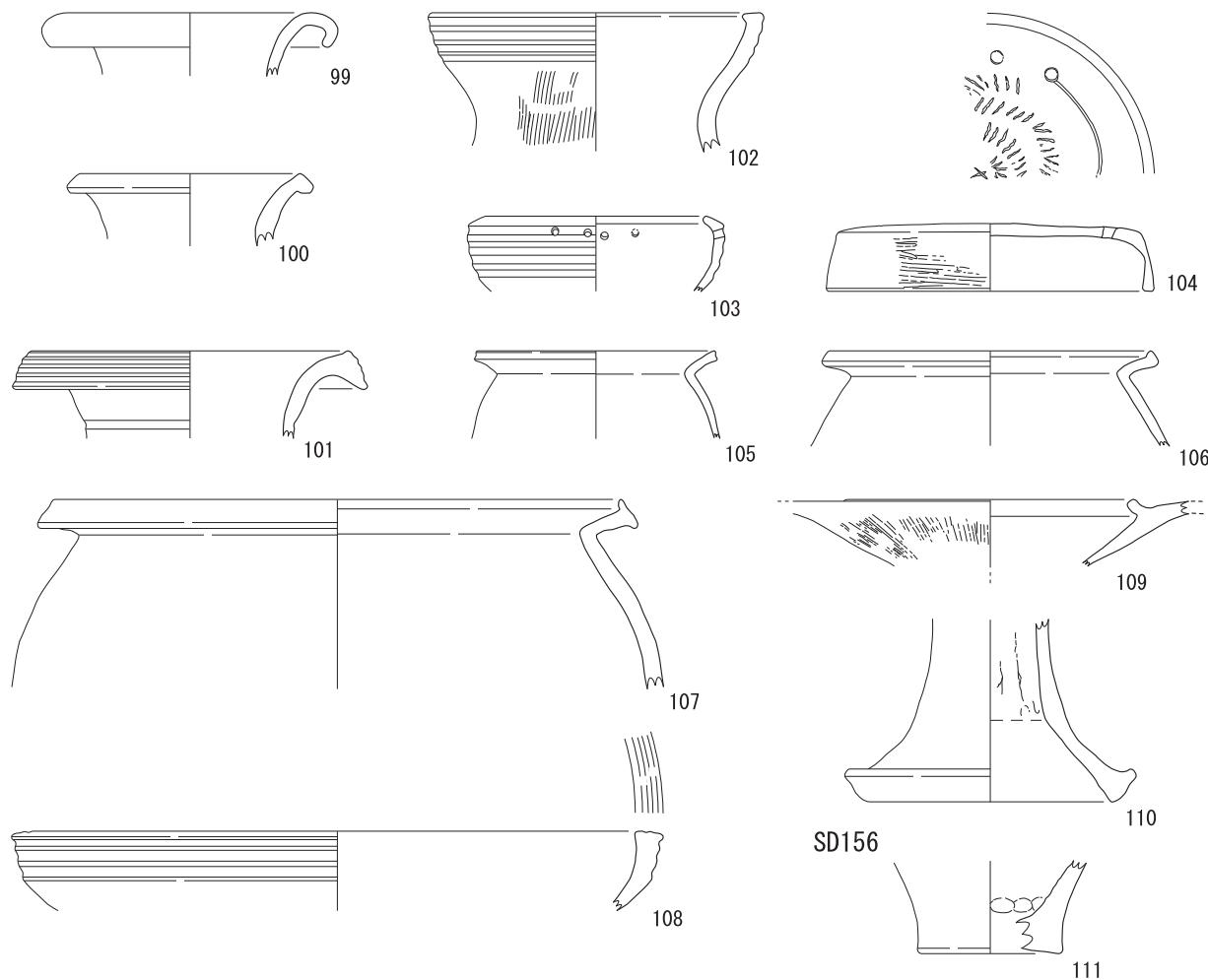
SR12

包含層

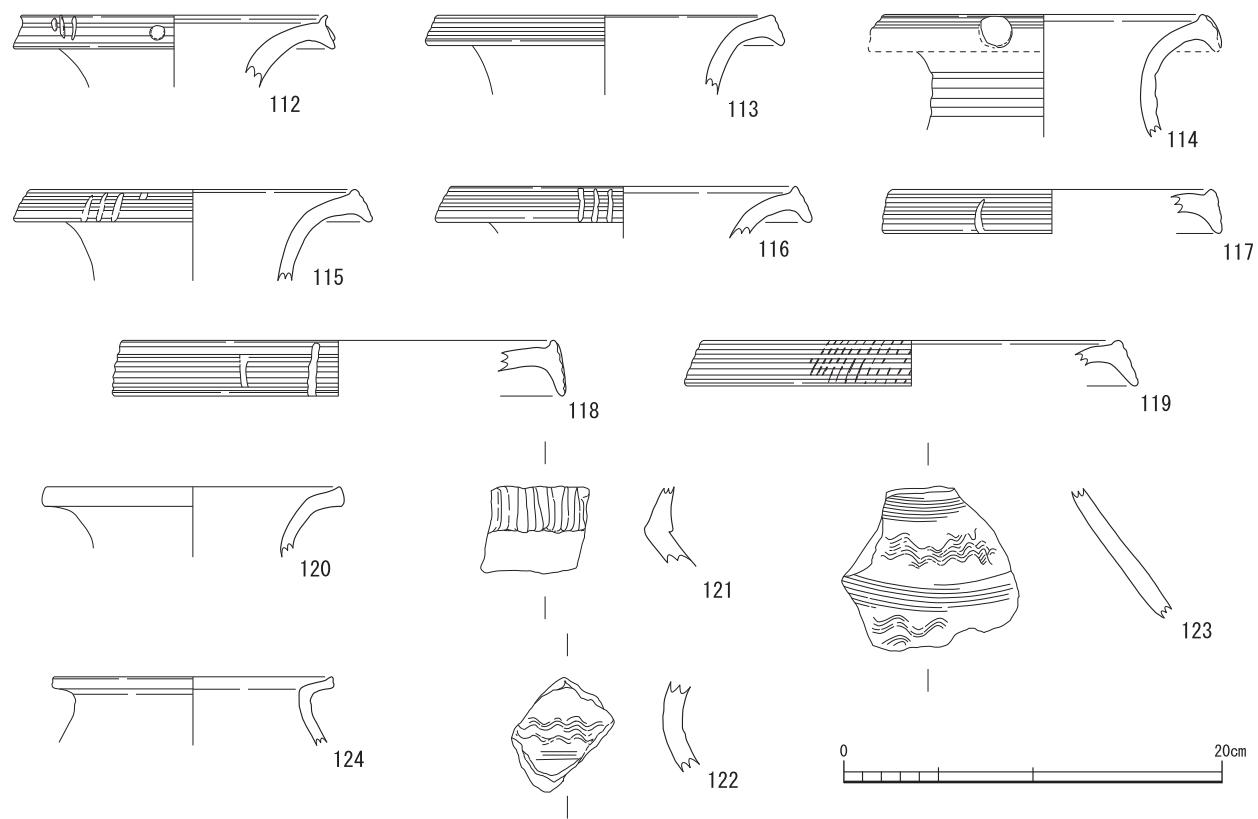


図版 72

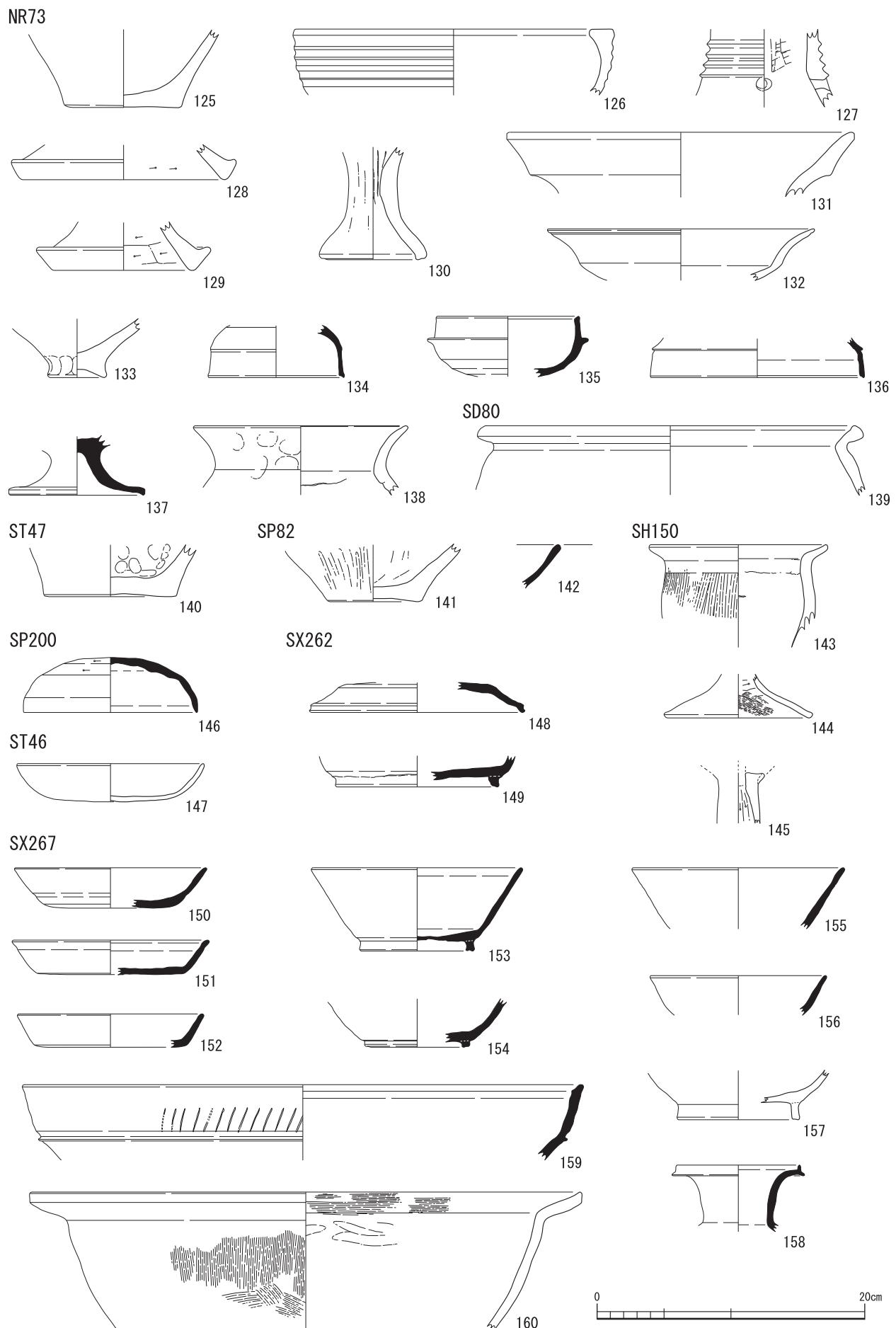
SD88



NR73



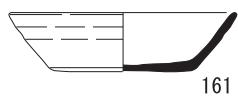
西嶋 4 W区 出土土器 1



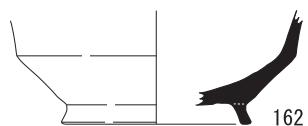
西嶋 4 W区 出土土器 2

図版 74

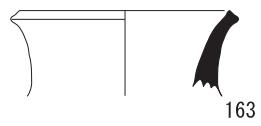
SD253



161

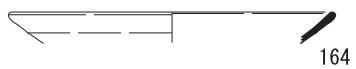


162



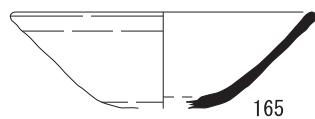
163

SP21



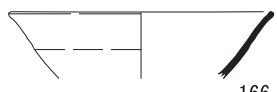
164

SK212



165

SD203



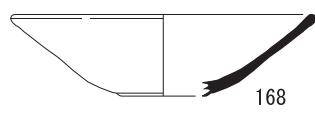
166

SD222

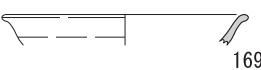


167

SP81

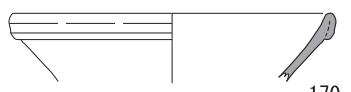


168

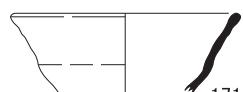


169

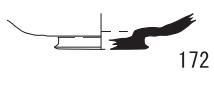
包含層



170



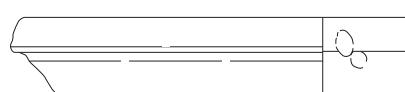
171



172



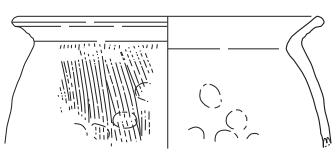
173



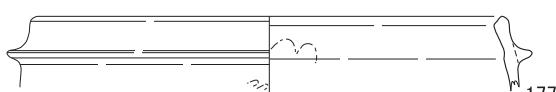
174



175

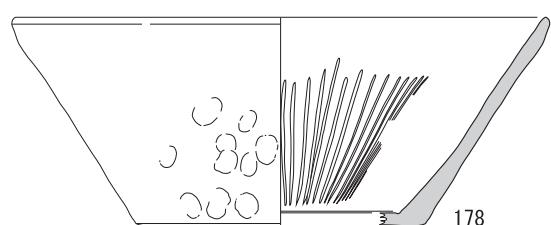


176

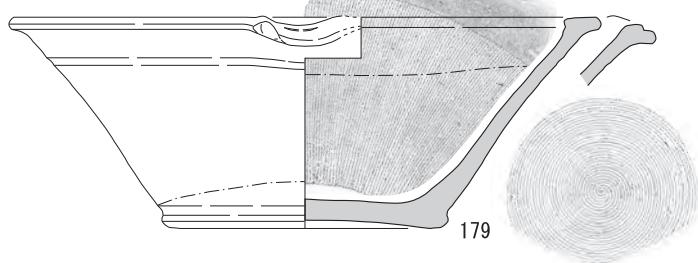


177

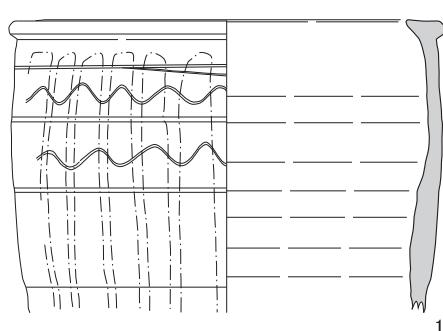
SD118



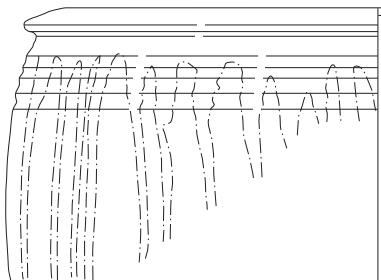
178



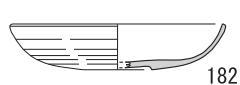
179



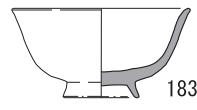
180



181



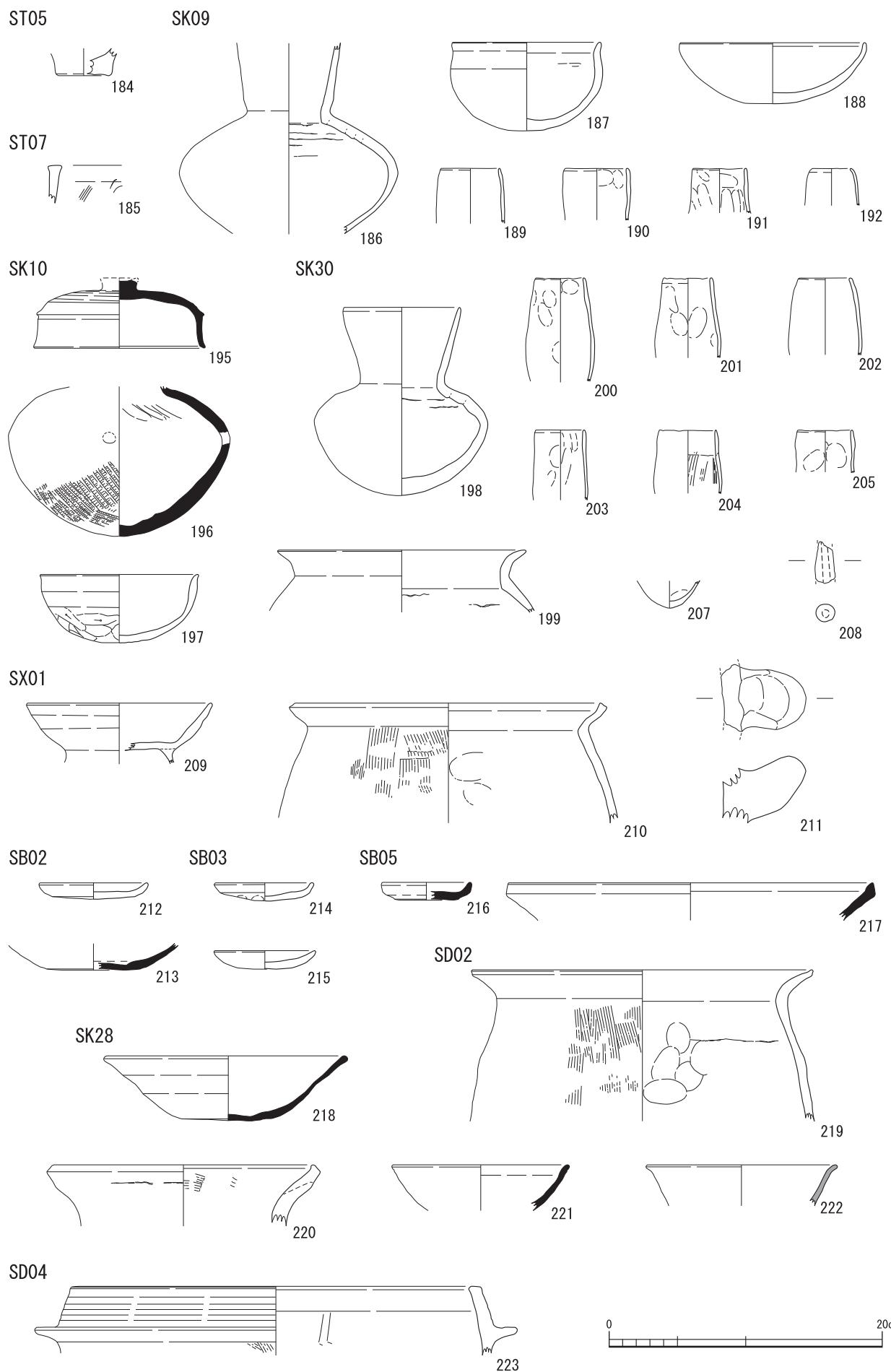
182



183

0

20cm

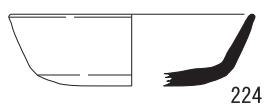


西嶋4E区

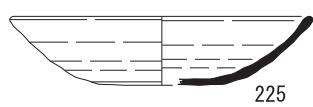
図版 76

西嶋 4 E 区

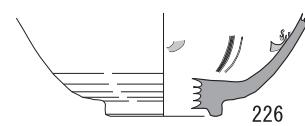
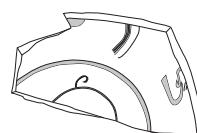
P38



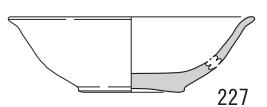
P12



P35



NR01

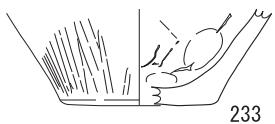


T96

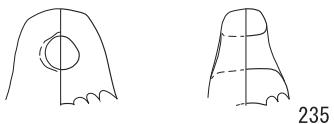


西嶋 5 区

SK01

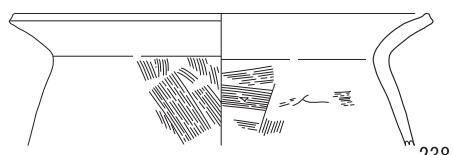
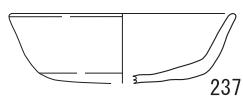


SR01

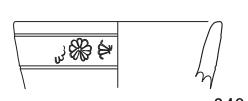
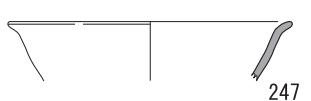
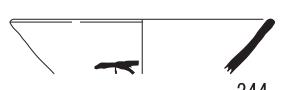
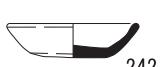
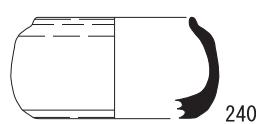
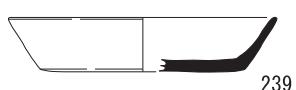


西嶋 6 区

SD01

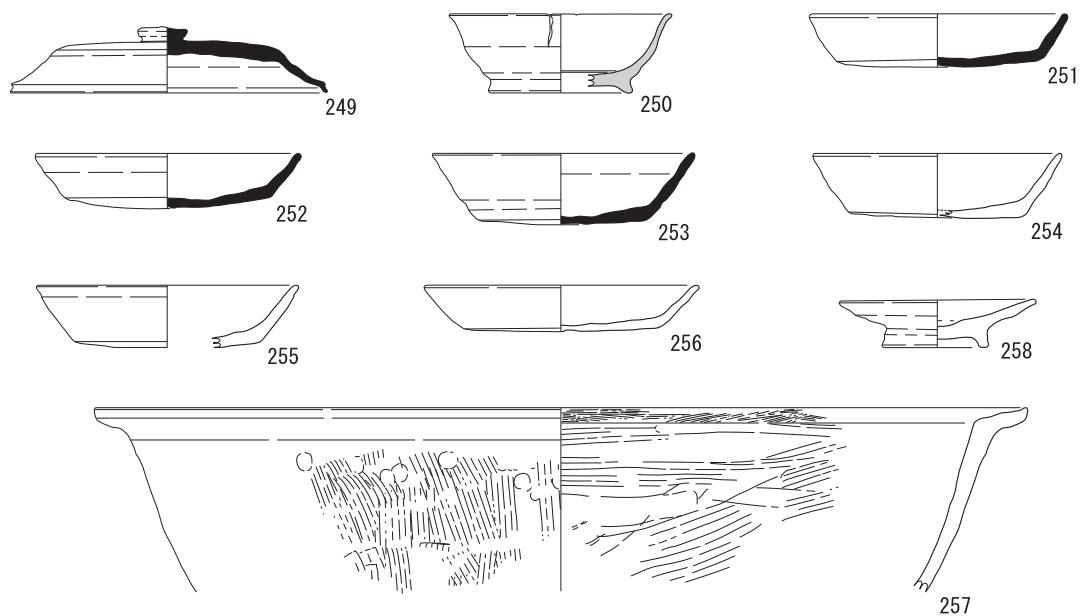


包含層

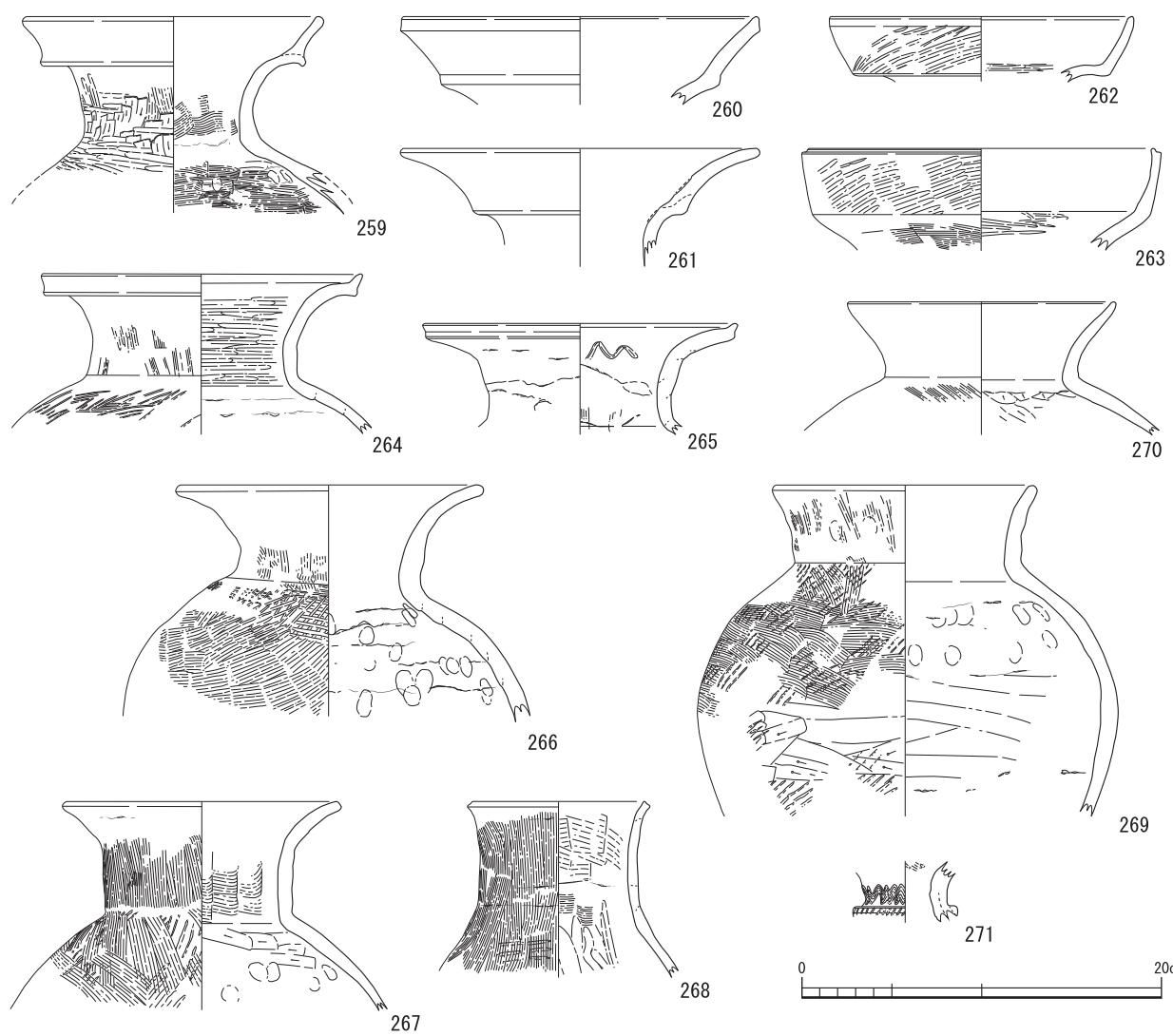


西嶋 4 E 区 出土土器 2、西嶋 5 区・6 区 出土土器

島 1 区
SR01 溜まり状

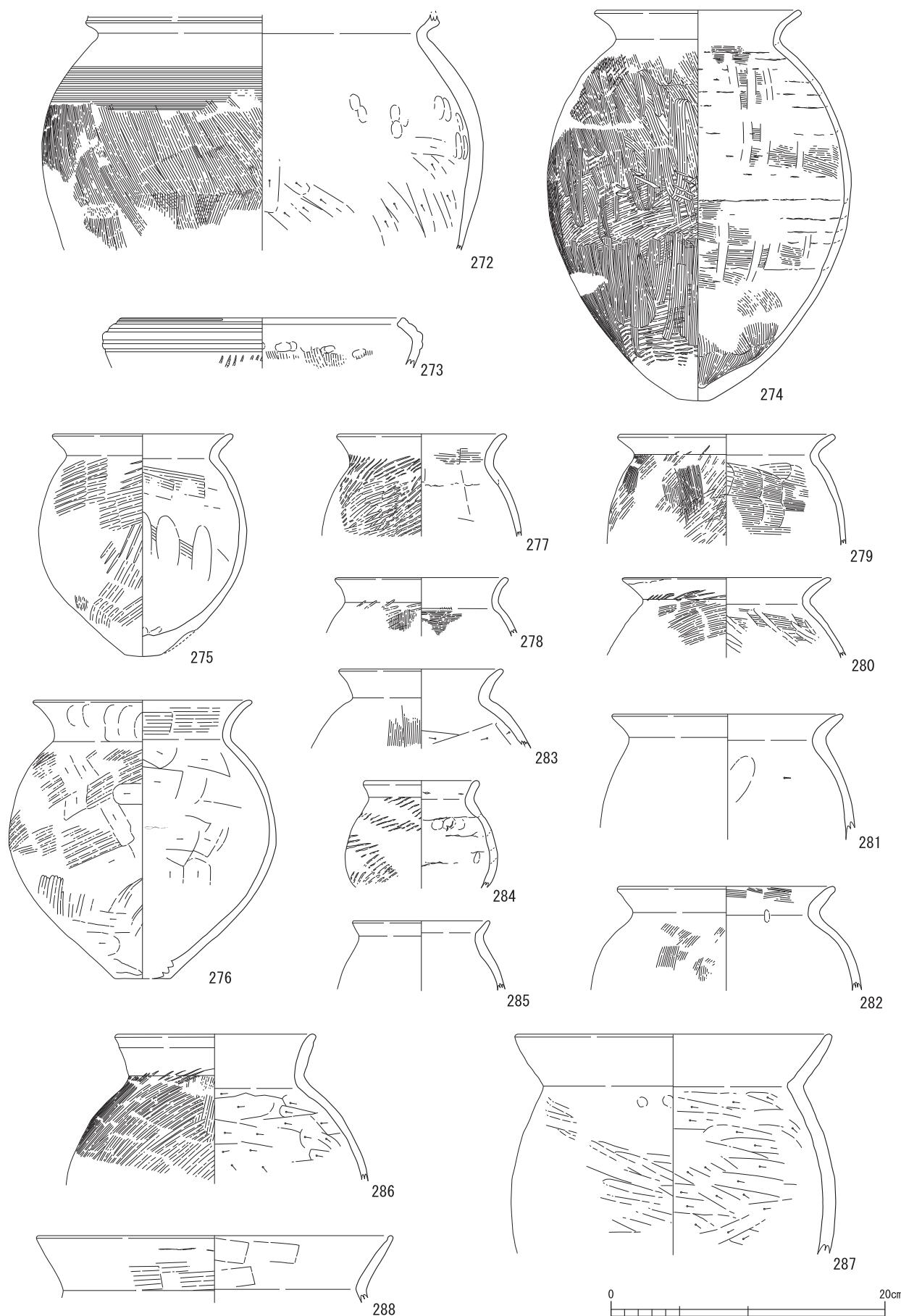


島 2 区
SR01-a 北部

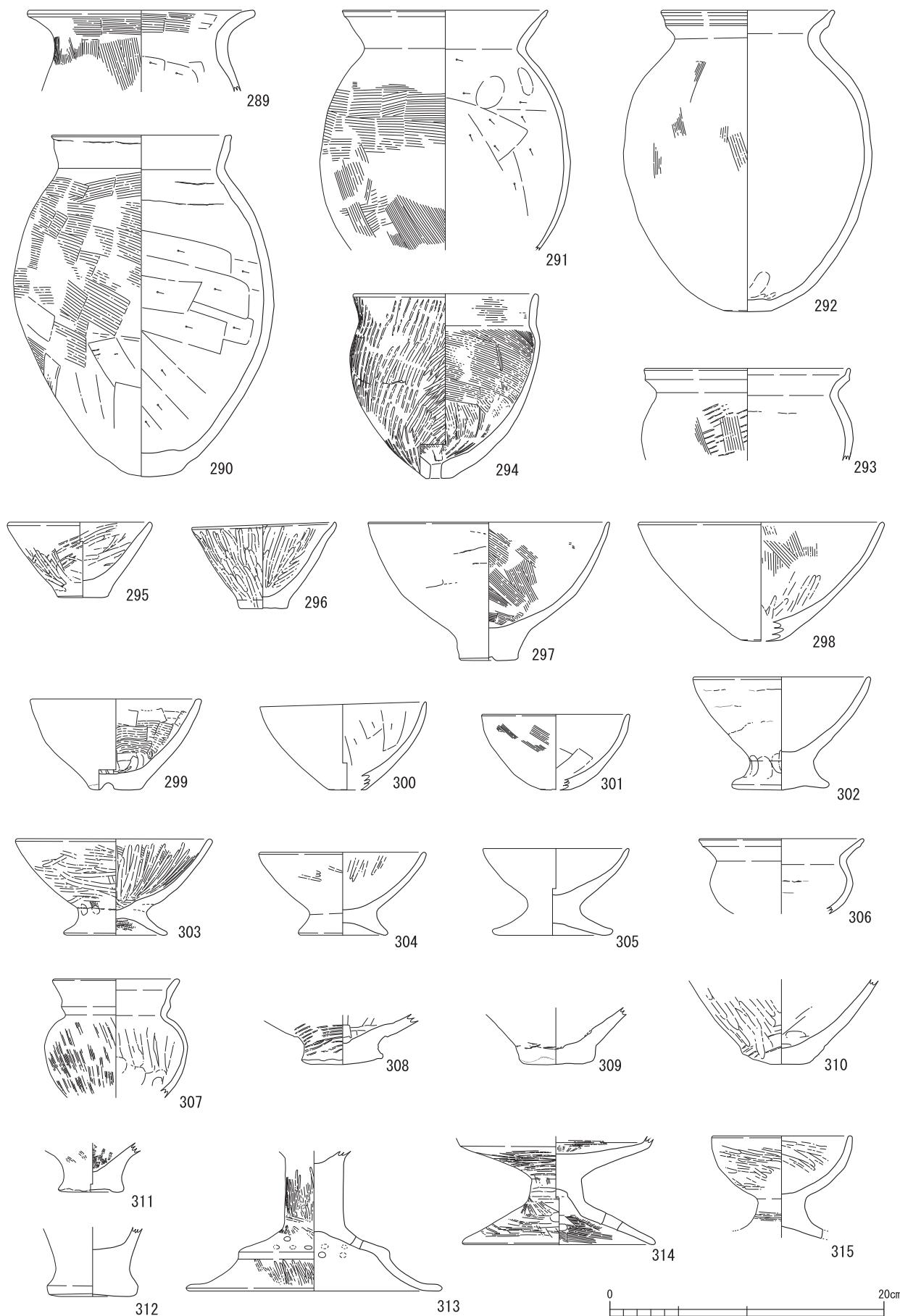


島 1 区
島 2 区

SR01-a 北部

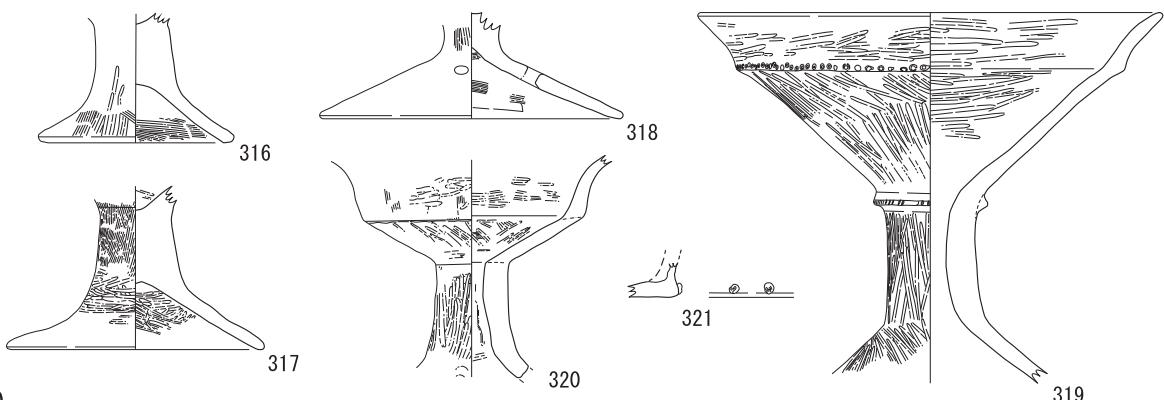


SR01-a 北部

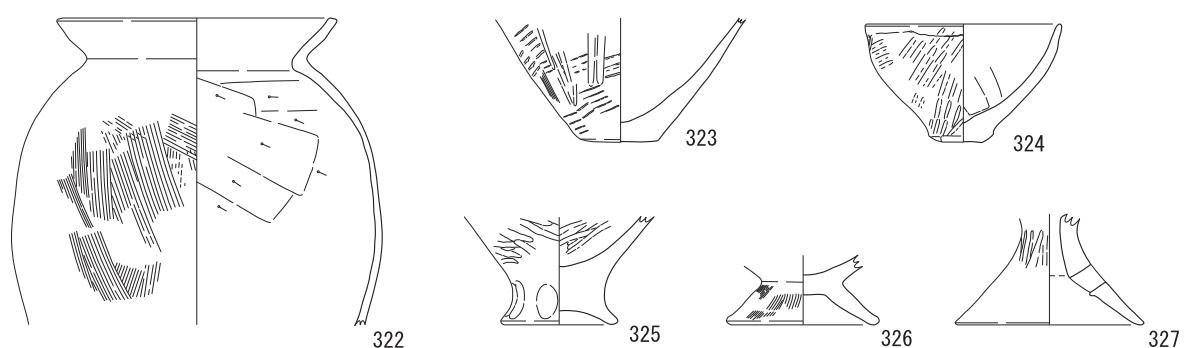


島2区 出土土器3

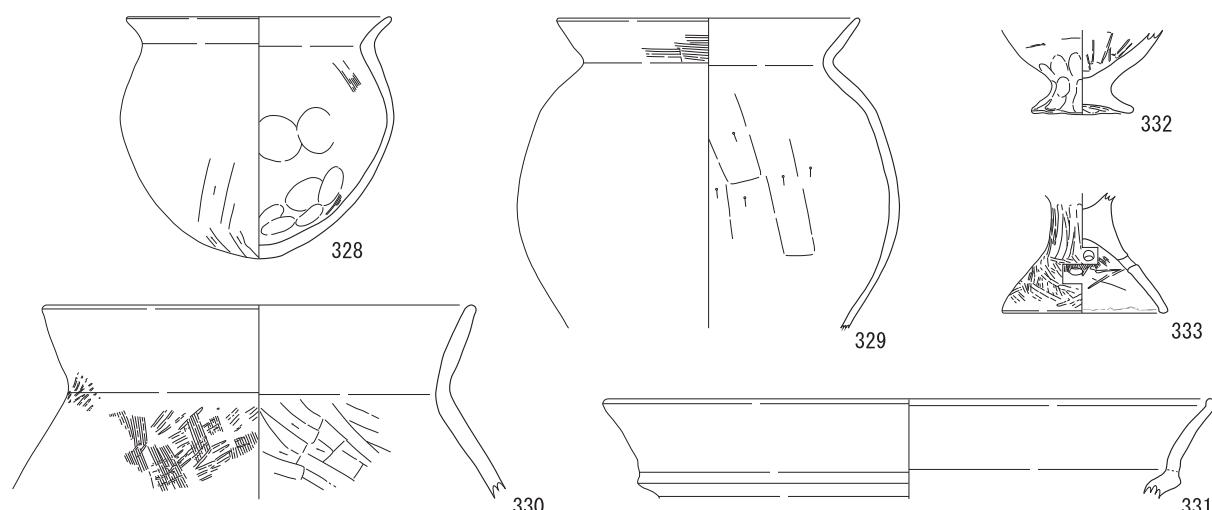
SR01-a 北部



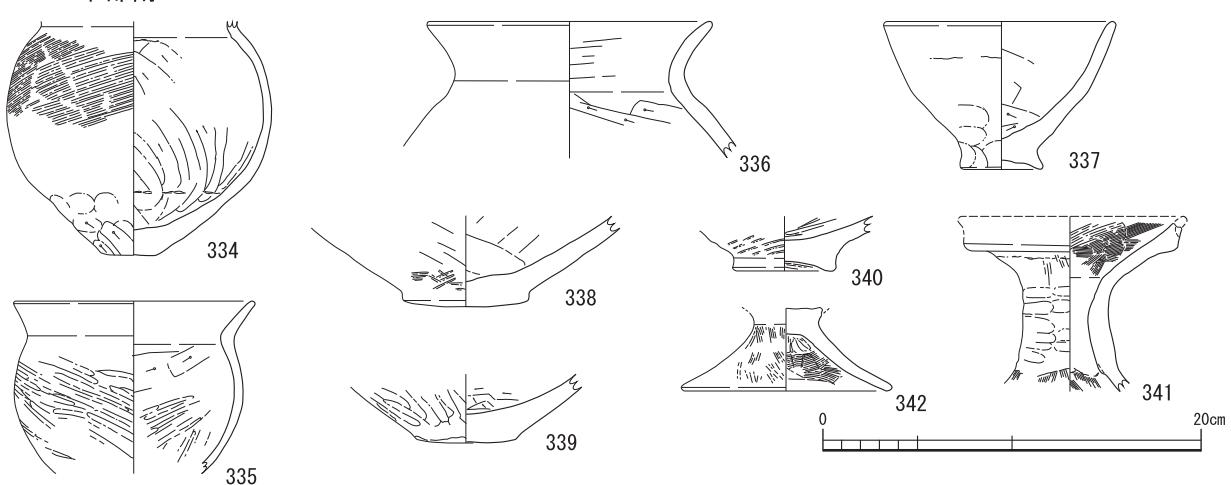
T80



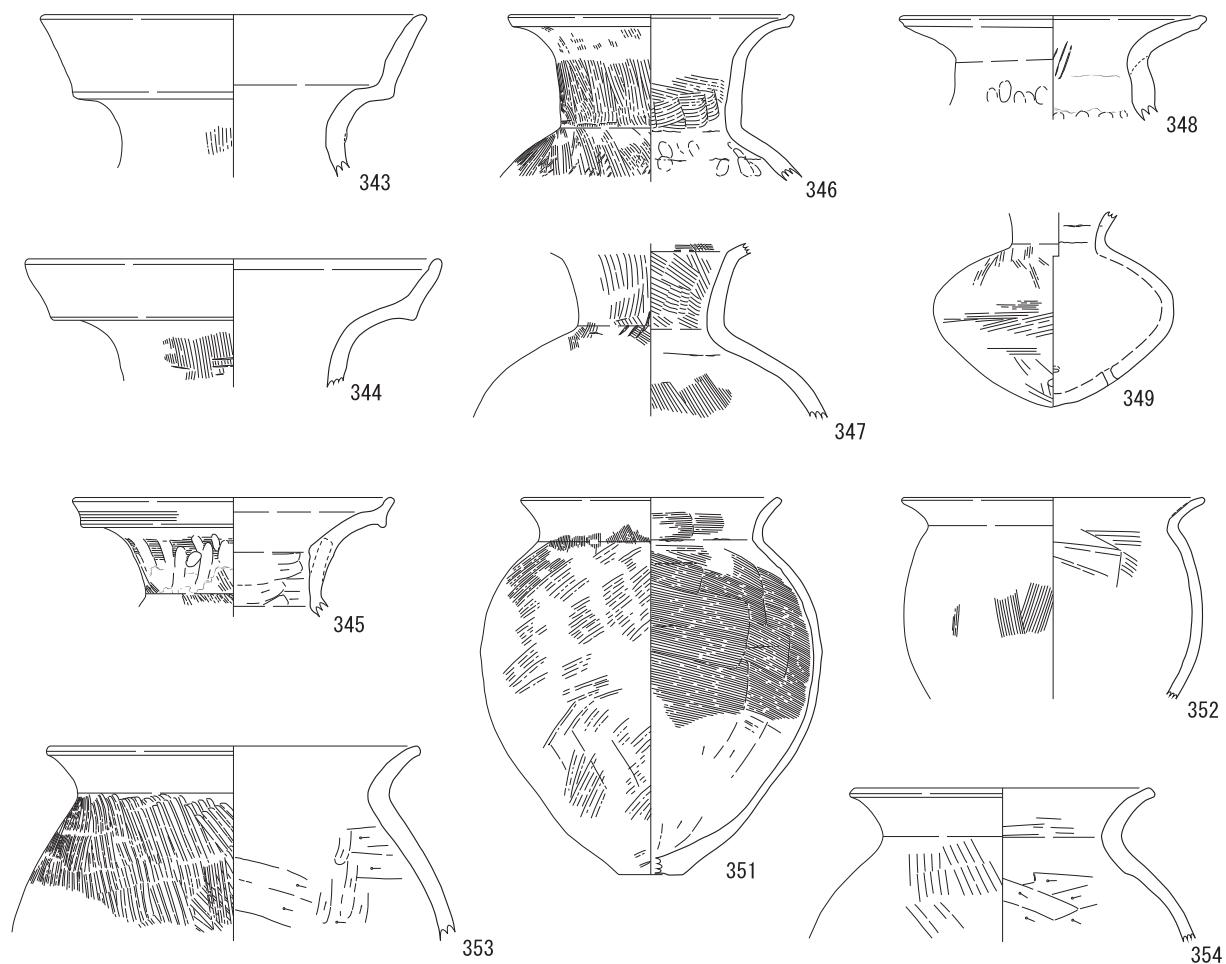
SR01-a 中部



SR01-a 中部南



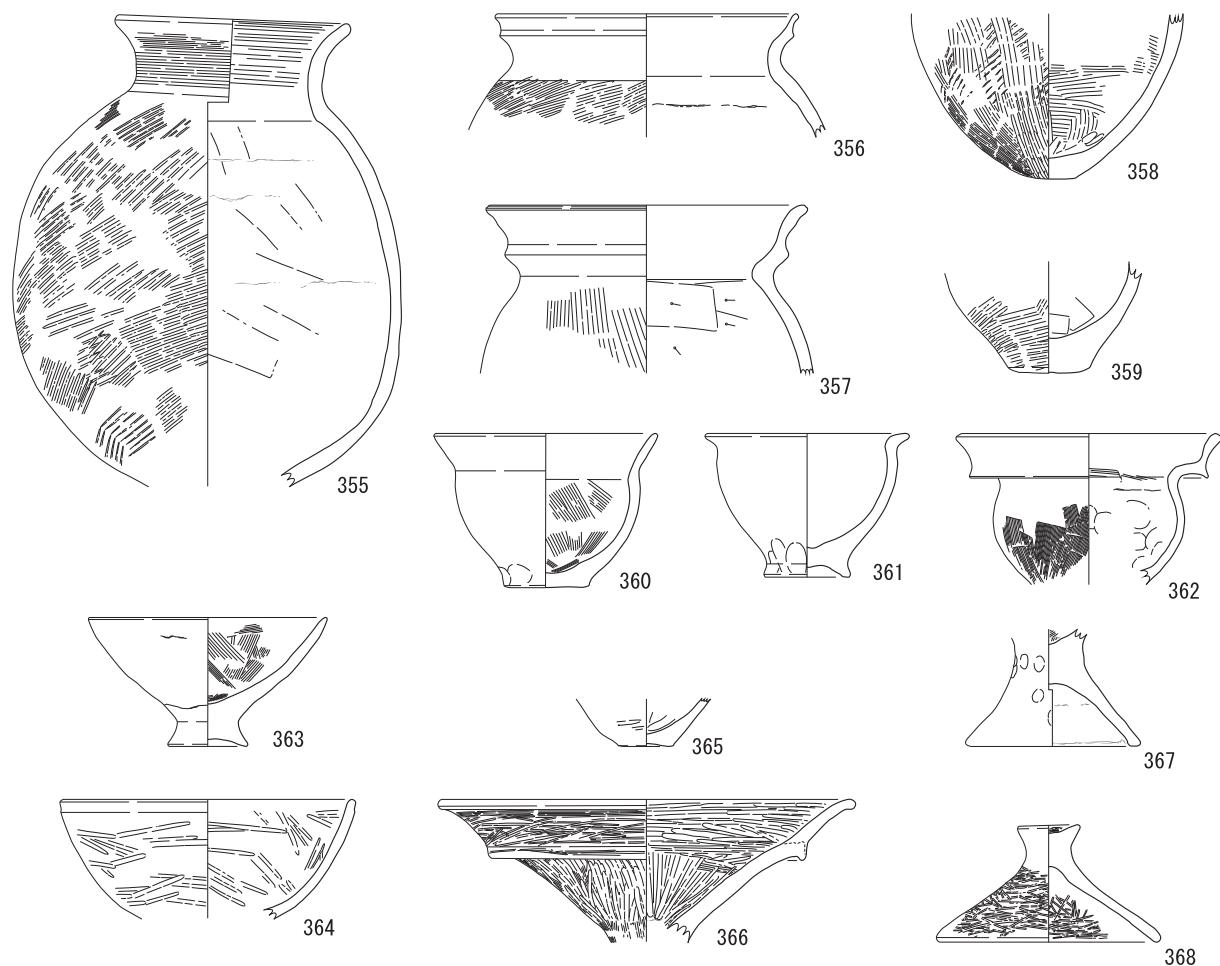
SR01-a 南部



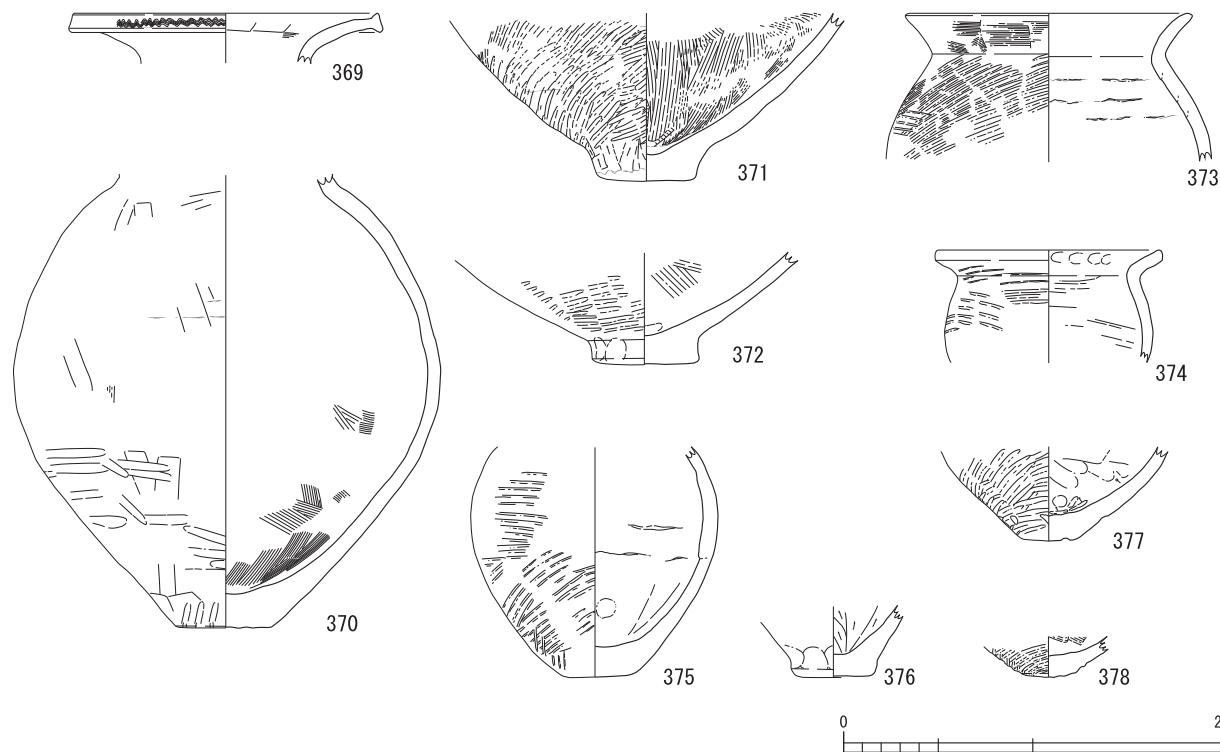
島2区

島2区 出土土器5

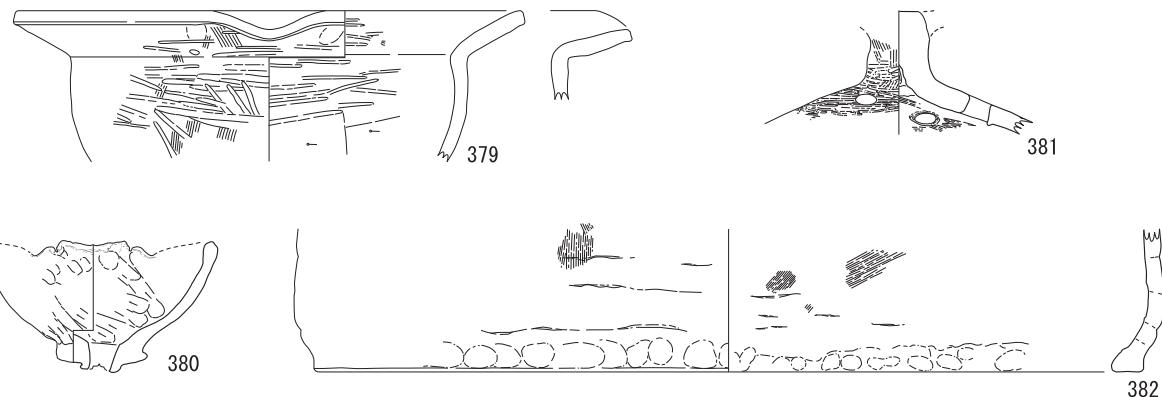
SR01-a 南部



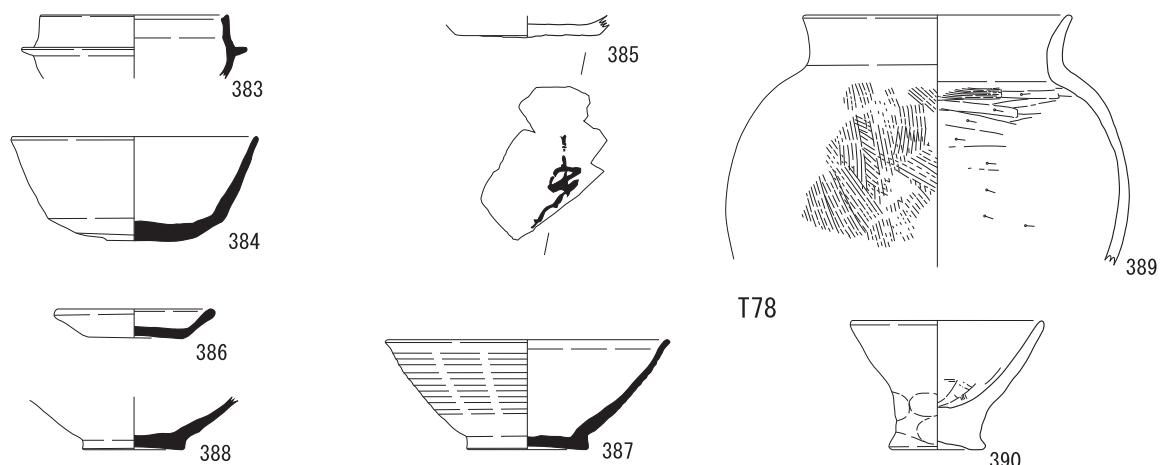
SR01-a 南東隅



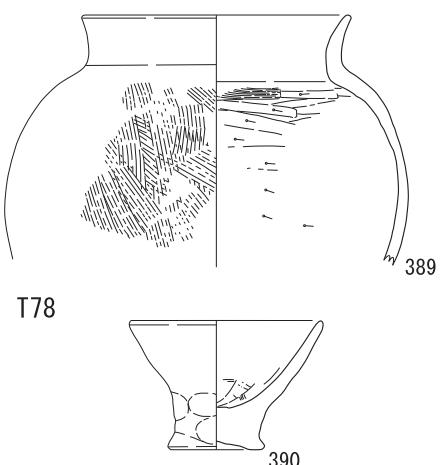
SR01-a 南東隅



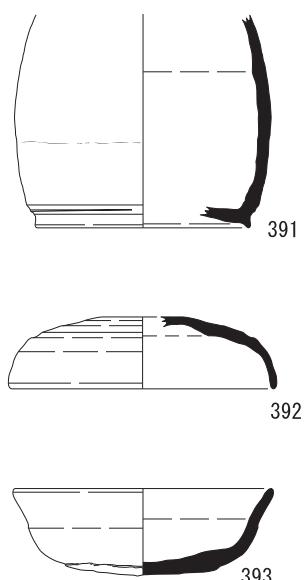
SR01-b



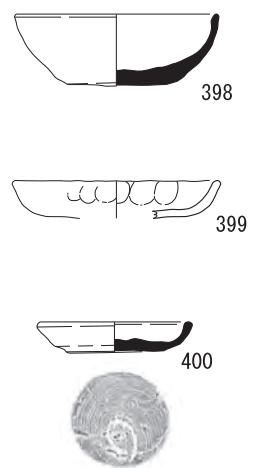
SD01



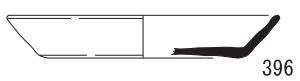
SD05



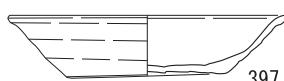
包含層



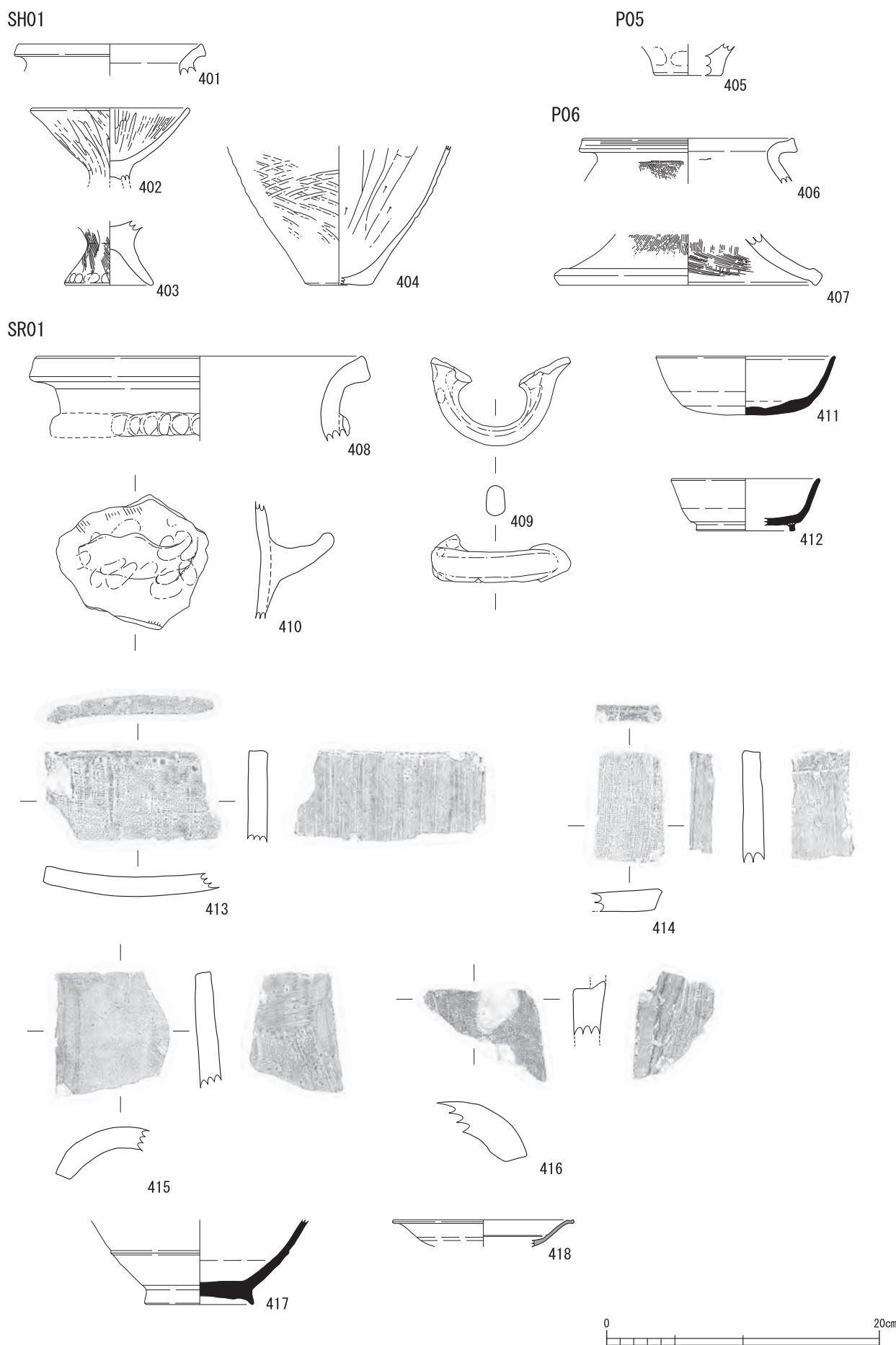
SR02



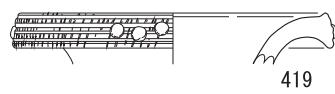
SK01



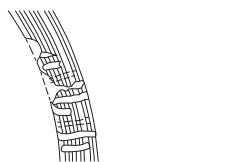
図版84



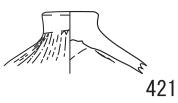
SD01



419

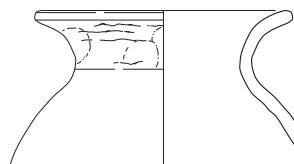


420

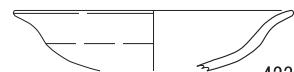


421

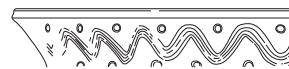
SR01



422



423



424

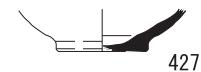
包含層



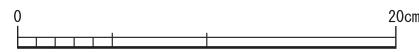
425

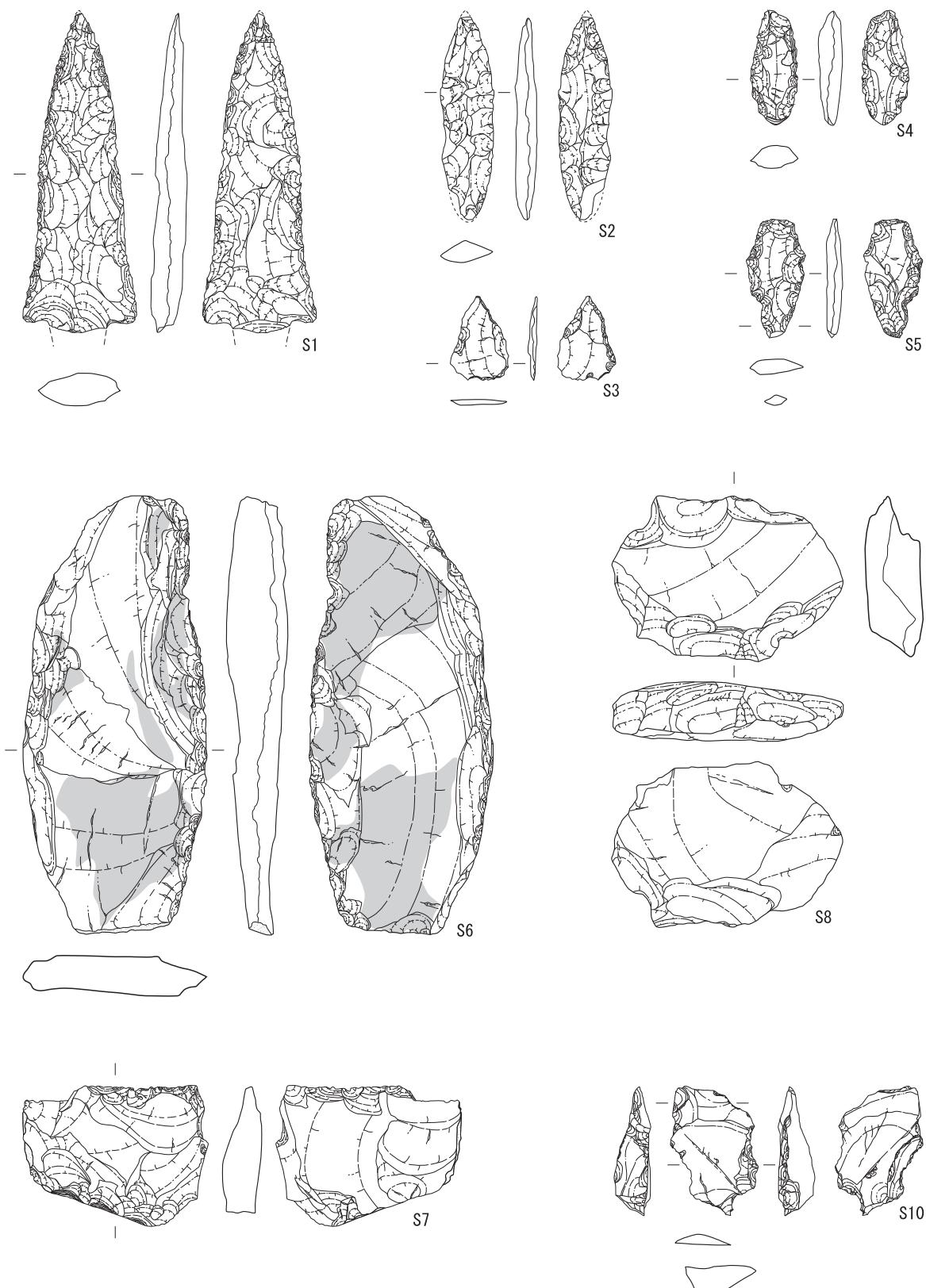


426

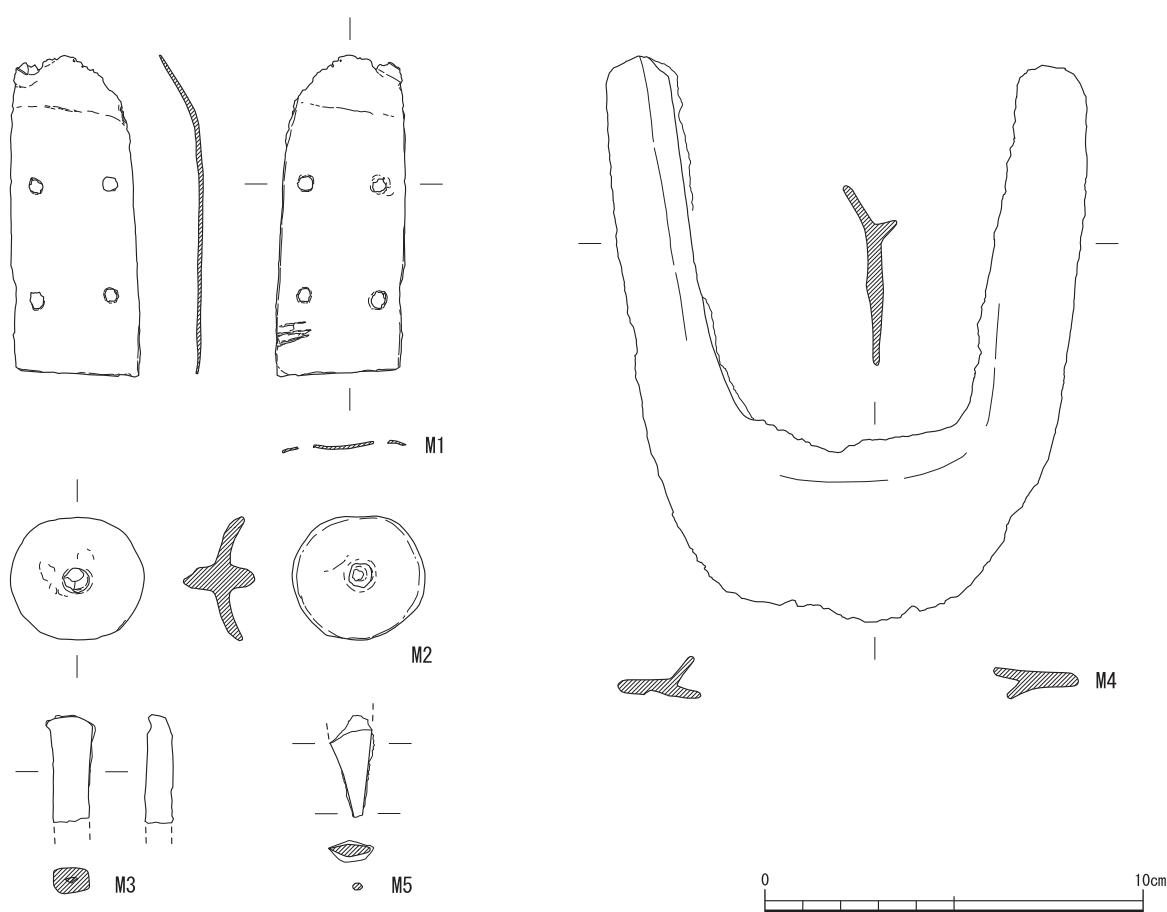
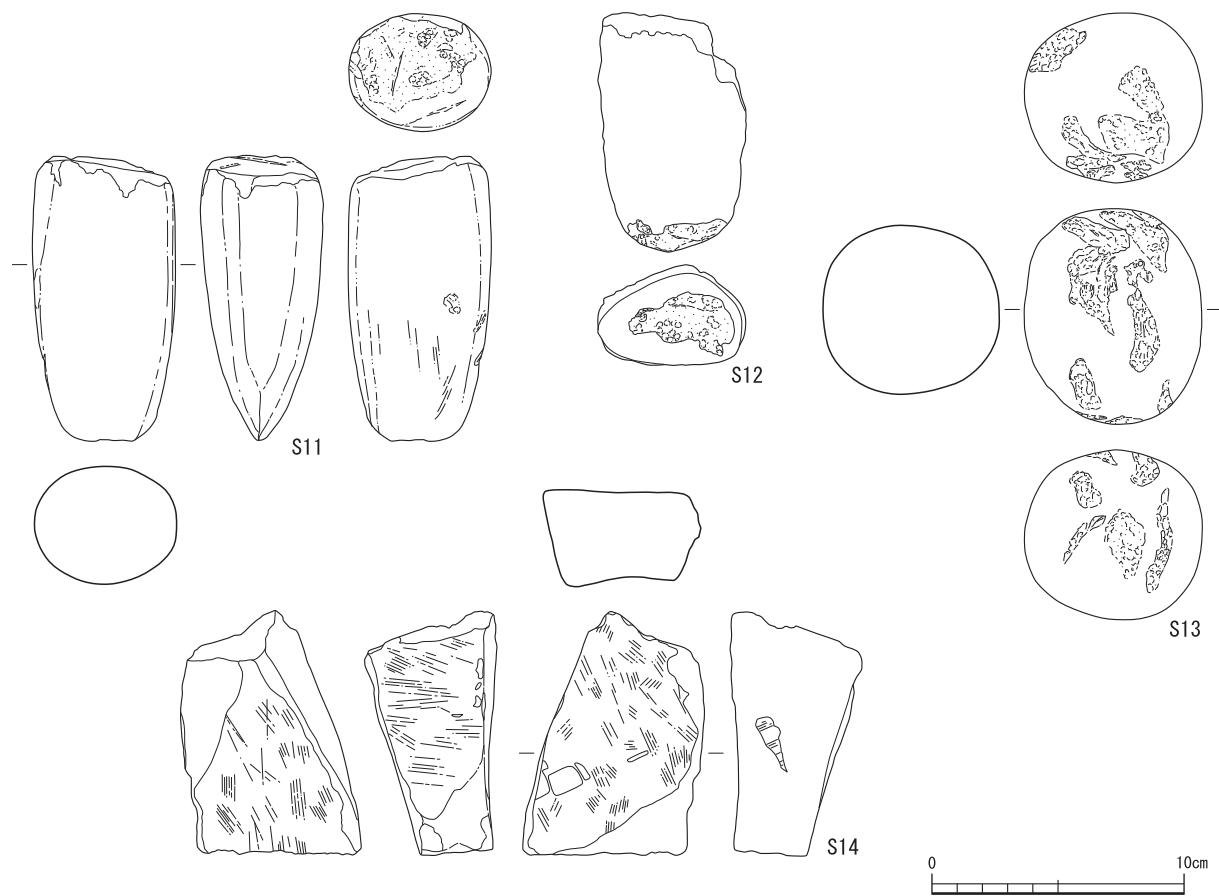


427

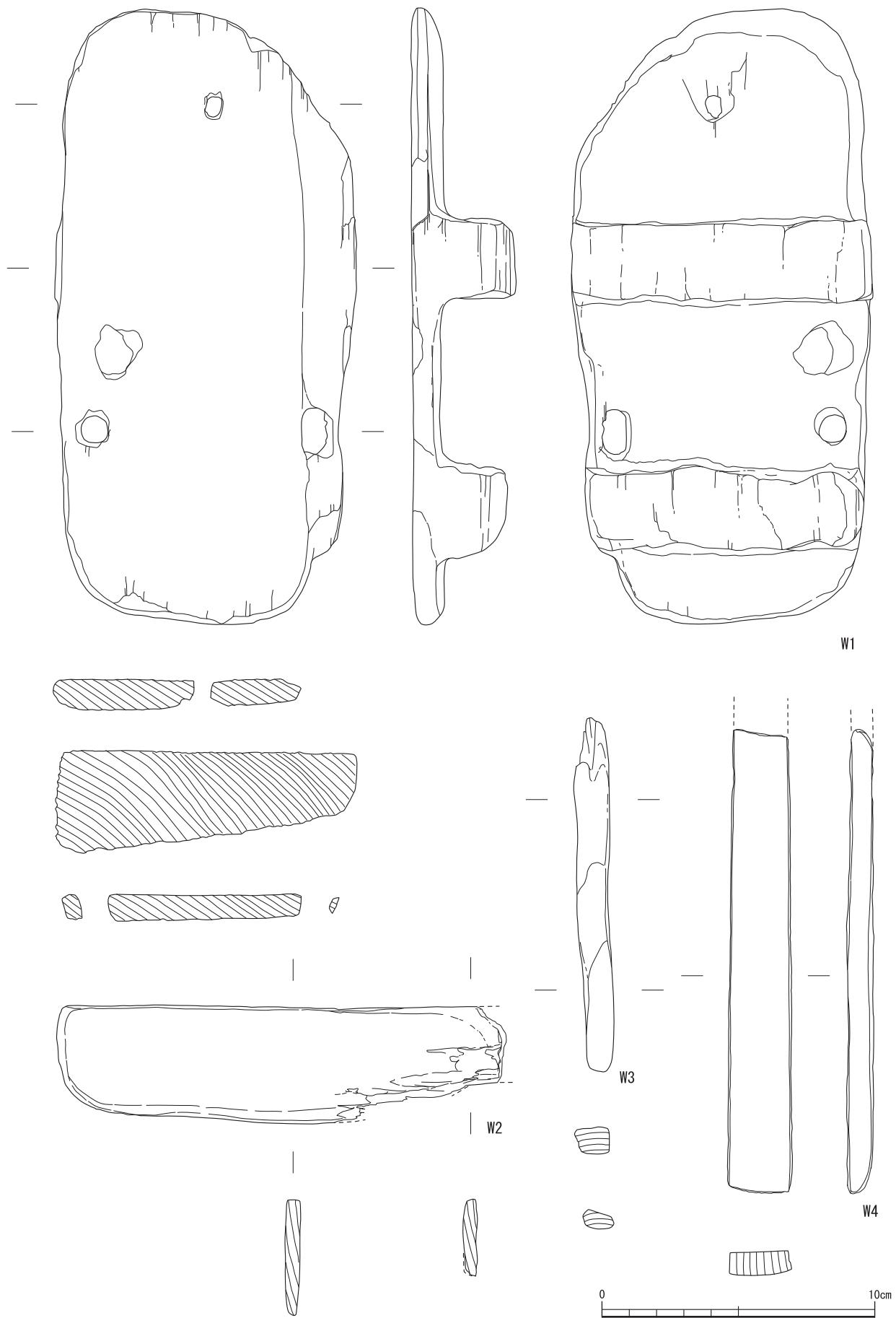




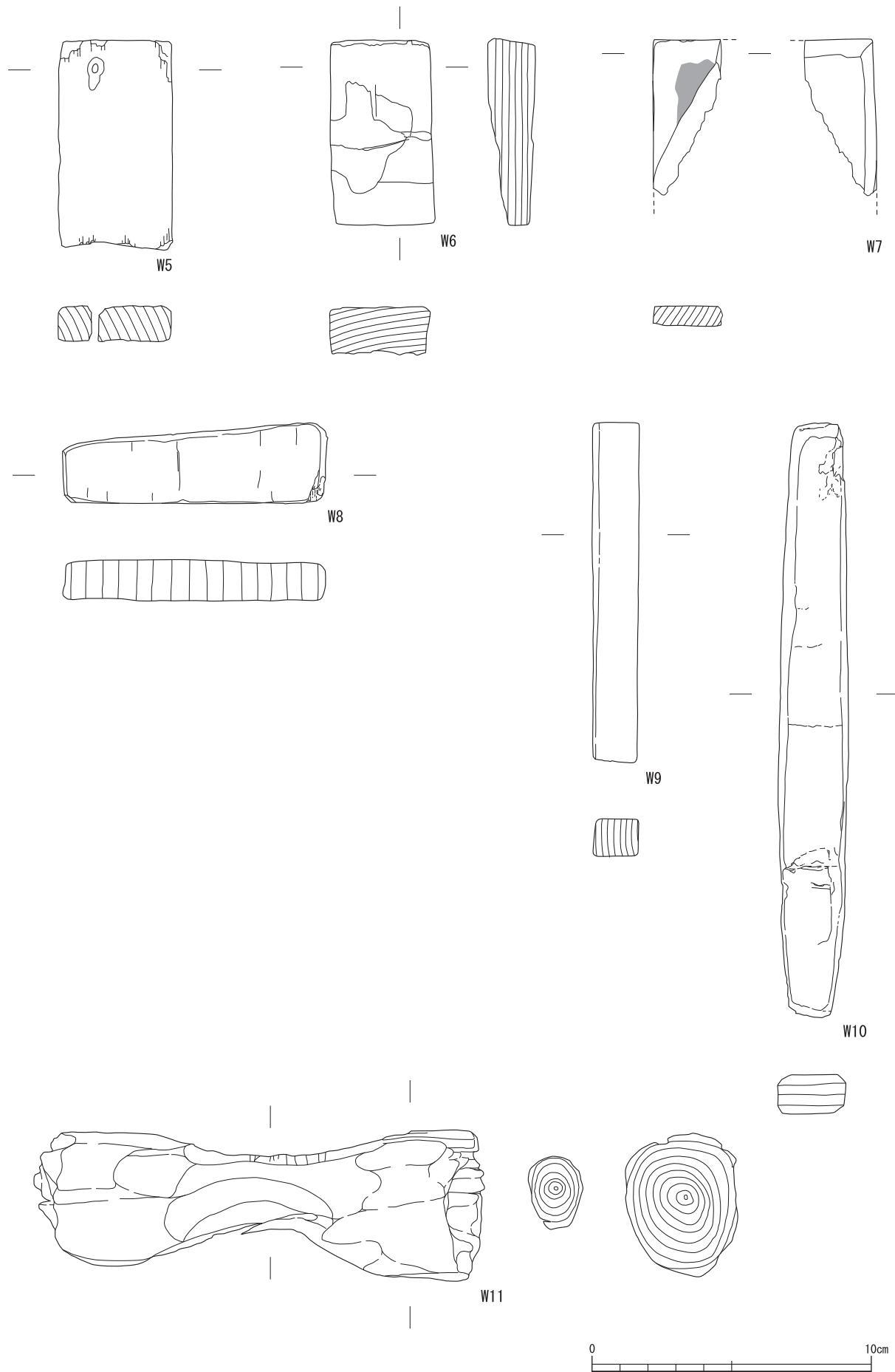
津万遺跡群2 出土石器1



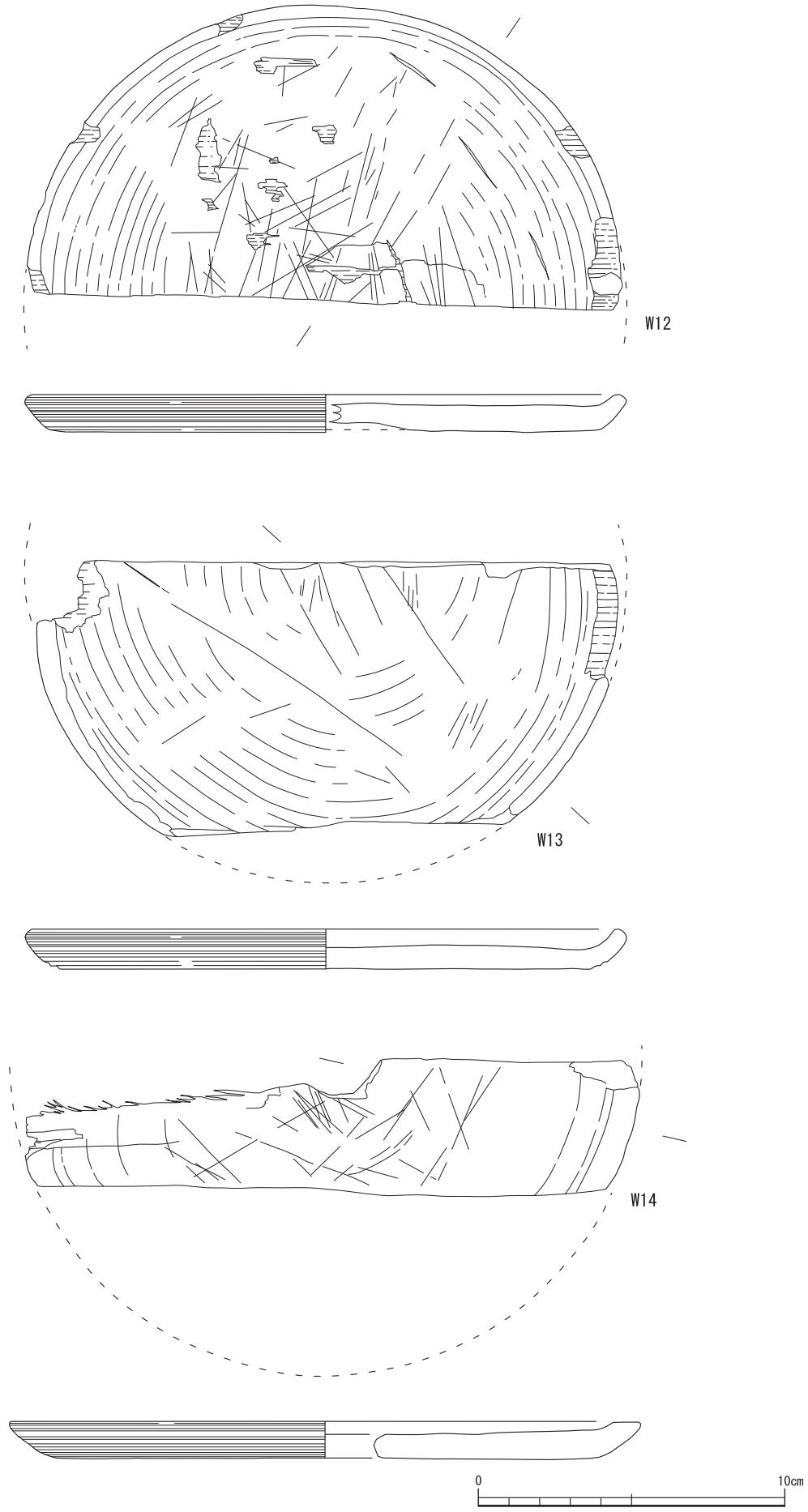
津万遺跡群2 出土石器2・出土金属器



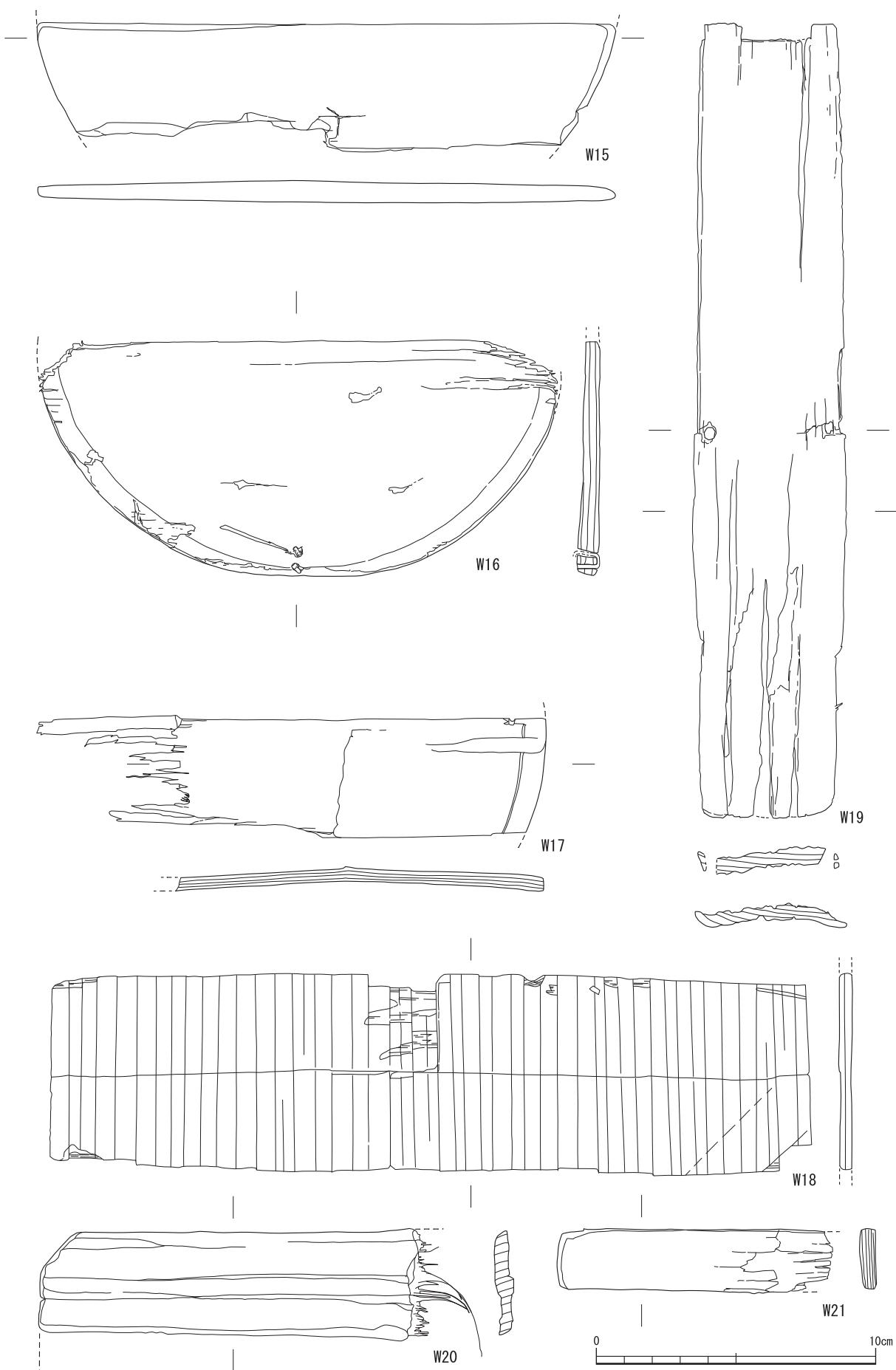
西嶋1区・3区 出土木器



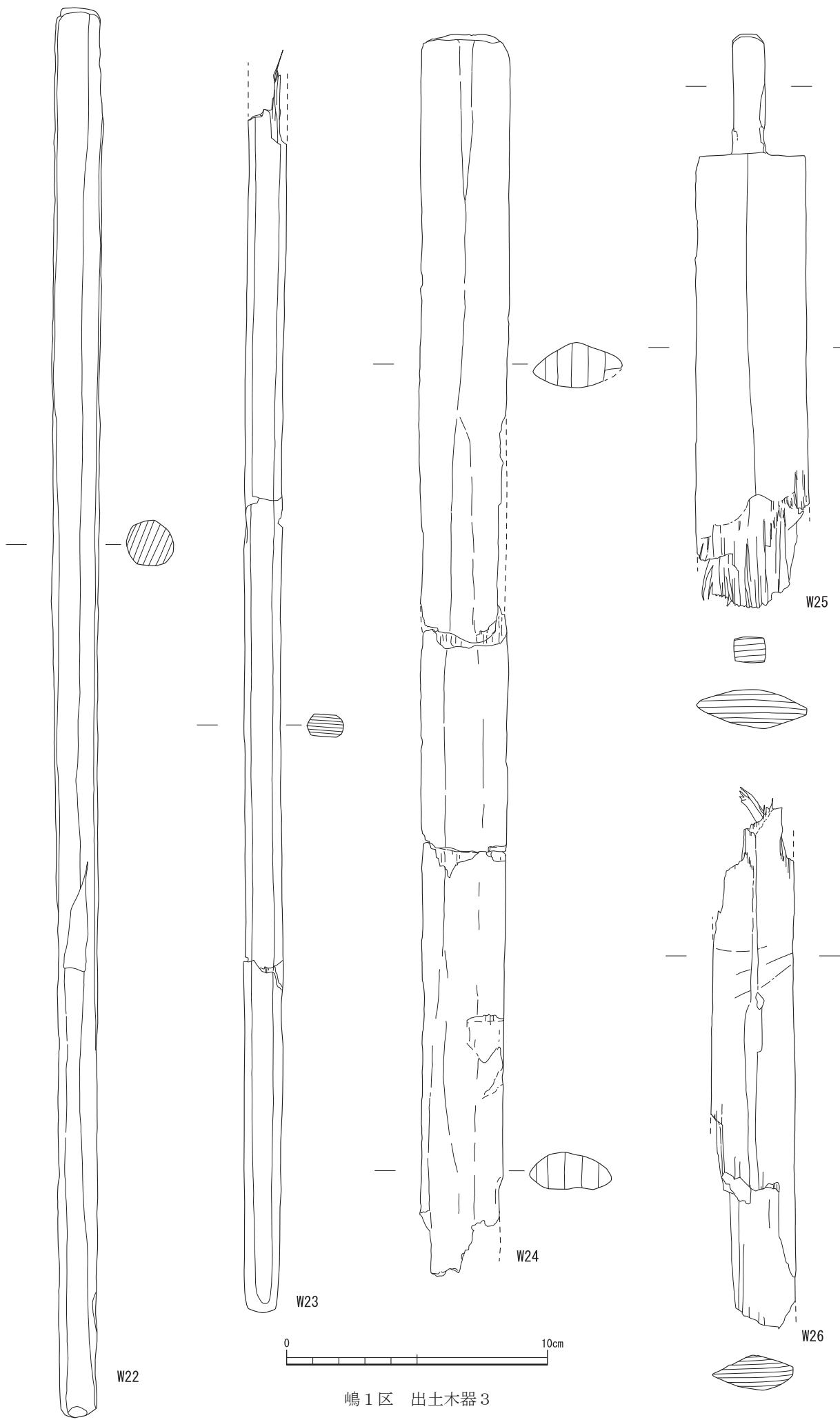
西嶋4E区・6区 出土木器

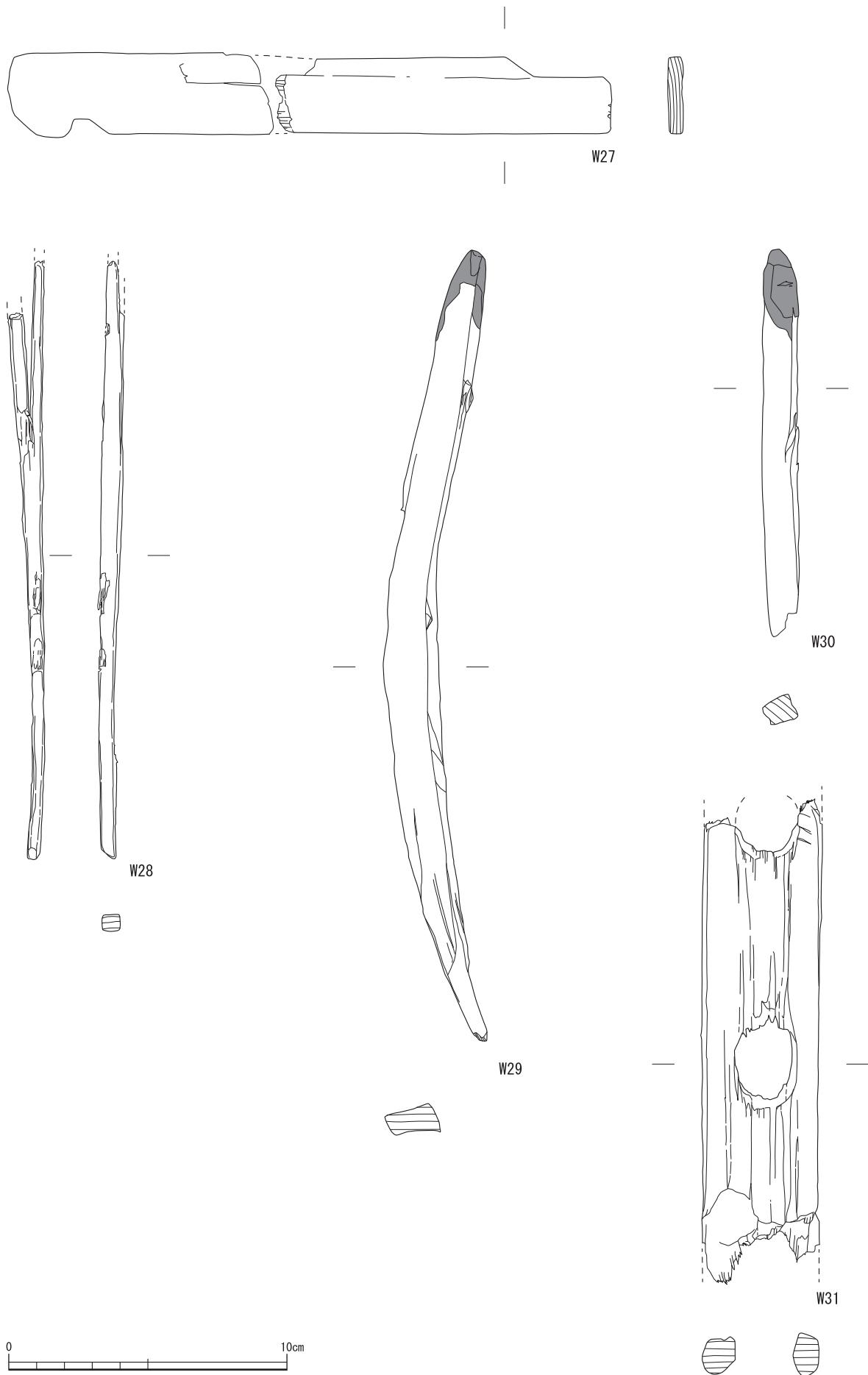


鳩 1 区 出土木器 1

鳩
1
区

鳩 1 区 出土木器 2





島1区 出土木器4、島2区 出土木器

写 真 図 版

西嶋
1区



西嶋 1 区全景（北から）



西嶋 1 区全景（南から）



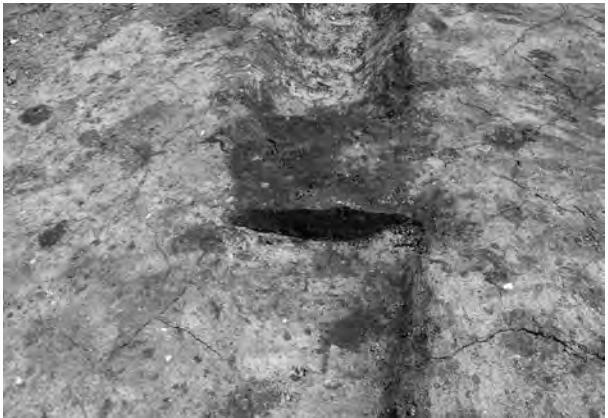
SB01（北東から）

写真図版 2

西嶋
1区



SD01 土器出土状況 (南東から)



SD01 断面 (a-a') (北東から)



SD02 北部断面 (b-b') (南西から)



SD02 北中部断面 (c-c') (南から)



SD02 南壁断面 (f-f') (北から)



SD03 断面 (d-d') (西から)



SD04 断面 (e-e') (南西から)

西嶋
1区



SK04 断面 (g-g') (南西から)



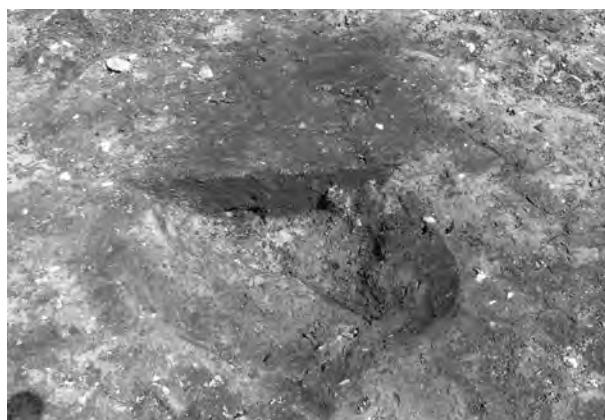
SK08 断面 (h-h') (南から)



SK09 断面 (i-i') (西から)



SK10 断面 (j-j') (南から)



SK11 断面 (k-k') (西から)



SK12 断面 (l-l') (西から)



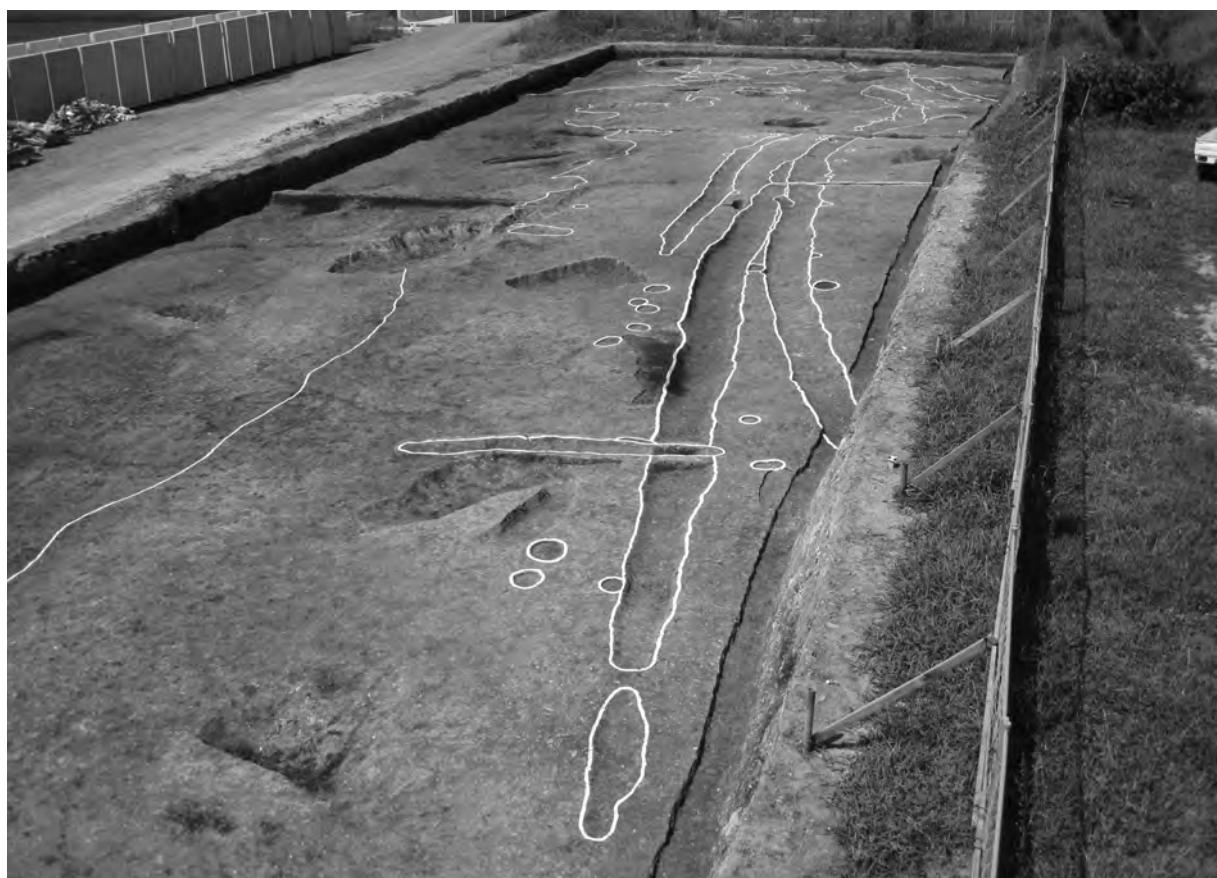
NR01 断面 (m-m') (南から)

写真図版 4

西嶋
2区



西嶋 2 区全景（真上から：上が東）



調査区全景（南東から）

西嶋
2区



調査区全景（北から）



調査区全景（北から）

写真図版 6

西嶋2区



調査区東壁（A-A'）（西から）



調査区東壁（A-A'）南端部（西から）



調査区東壁（A-A'）南部（西から）



調査区東壁（A-A'）北部（西から）



調査区東壁（A-A'）北端部（西から）



調査区西壁（B-B'）（南から）



調査区西壁（B-B'）南端部（東から）



調査区西壁（B-B'）南部（東から）



調査区西壁（B-B'）北部（東から）



調査区西壁（B-B'）北端部（東から）

写真図版 8

西嶋2区



調査区北壁 (C-C')
(南から)



調査区北壁 (C-C') 西部
(南から)



調査区北壁 (C-C') 東部
(南から)



NR01 南部（南東から）



NR01 断面（a-a'）（南から）



NR01 断面（b-b'）（南から）



NR01 断面（c-c'）（南西から）



NR01 断面（d-d'）（南西から）

写真図版10

西嶋
区



SD01 断面 (e-e') (南から)



SD07 断面 (g-g') (南から)



SD06・02 断面 (g-g') (南から)



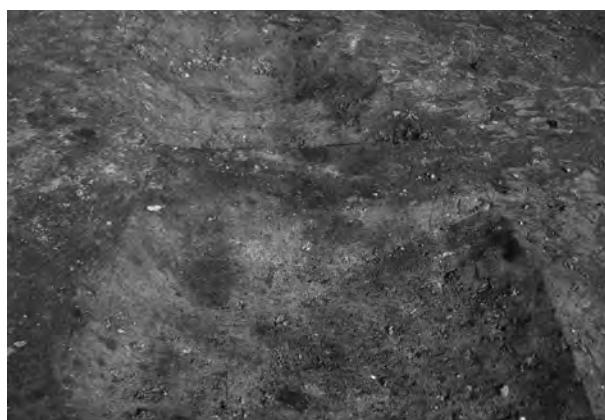
SD02 断面 (h-h') (南から)



SD06 断面 (i-i') (南から)



SD08 断面 (南から)



SK12 断面 (西から)

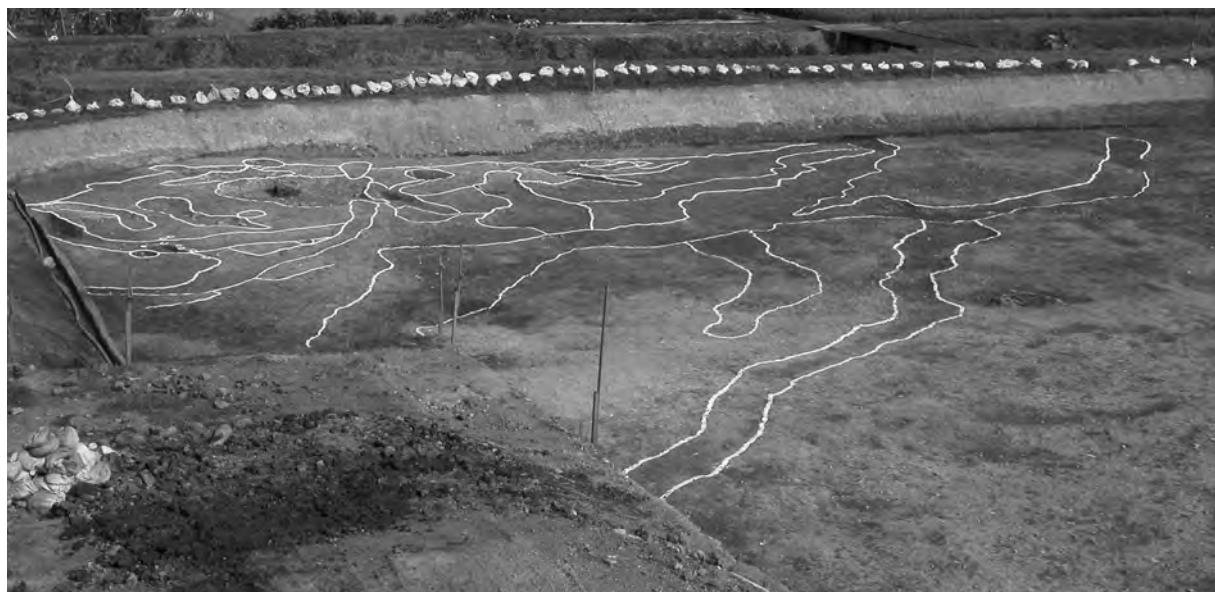


断ち割り断面状況



西嶋3区全景（南東から）

西嶋3区



調査区東部（北西から）



調査区南西部（北西から）



南壁中部断面（B-C）SR02付近（北東から）



東壁北部断面（A-B）及び遺構検出面（南西から）



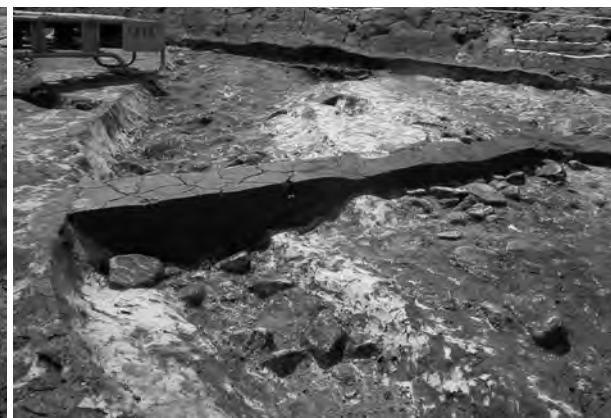
SR02 断面 (a-a') (北西から)



SR03 断面 (b-b') (南西から)



SR04 断面 (c-c') (南から)



SR04 (左)・SR06 (右) 断面 (d-d') (北西から)



SR10 断面 (f-f') (北から)



SR14 断面 (h-h') (北から)



SX01 断面 (i-i') (南から)

写真図版14



西嶋4W区遠景（南上空から）



西嶋4W区遠景（南東上空から）



西嶋 4 W区遠景（西上空から）



西嶋 4 W区遠景（北西上空から）

写真図版16



調査区全景（真上から：上が西）



調査区全景（真上から：上が東）



調査区全景（南上空から）



調査区全景（北上空から）

写真図版 18



調査区北部の遺構（東から）



調査区北半部の遺構（南東から）



SD88 等検出状況（南から）



SD88 南部検出状況（南から）



SD88 蓋（104）出土状況（西から）



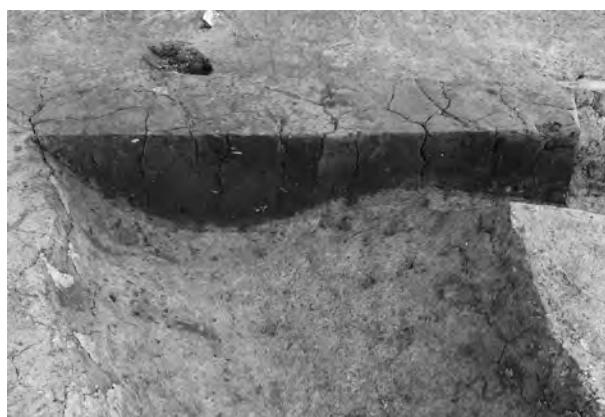
SD88 壺（100）出土状況（南から）



SD88 土器体部出土状況（東から）



SD88 下面の SD156 検出状況（南東から）



SD88 と SD156 重複部埋土断面（南から）



SD156 東部埋土断面（南東から）

西嶋
4W
区

写真図版20



NR73 北端埋土断面（南から）

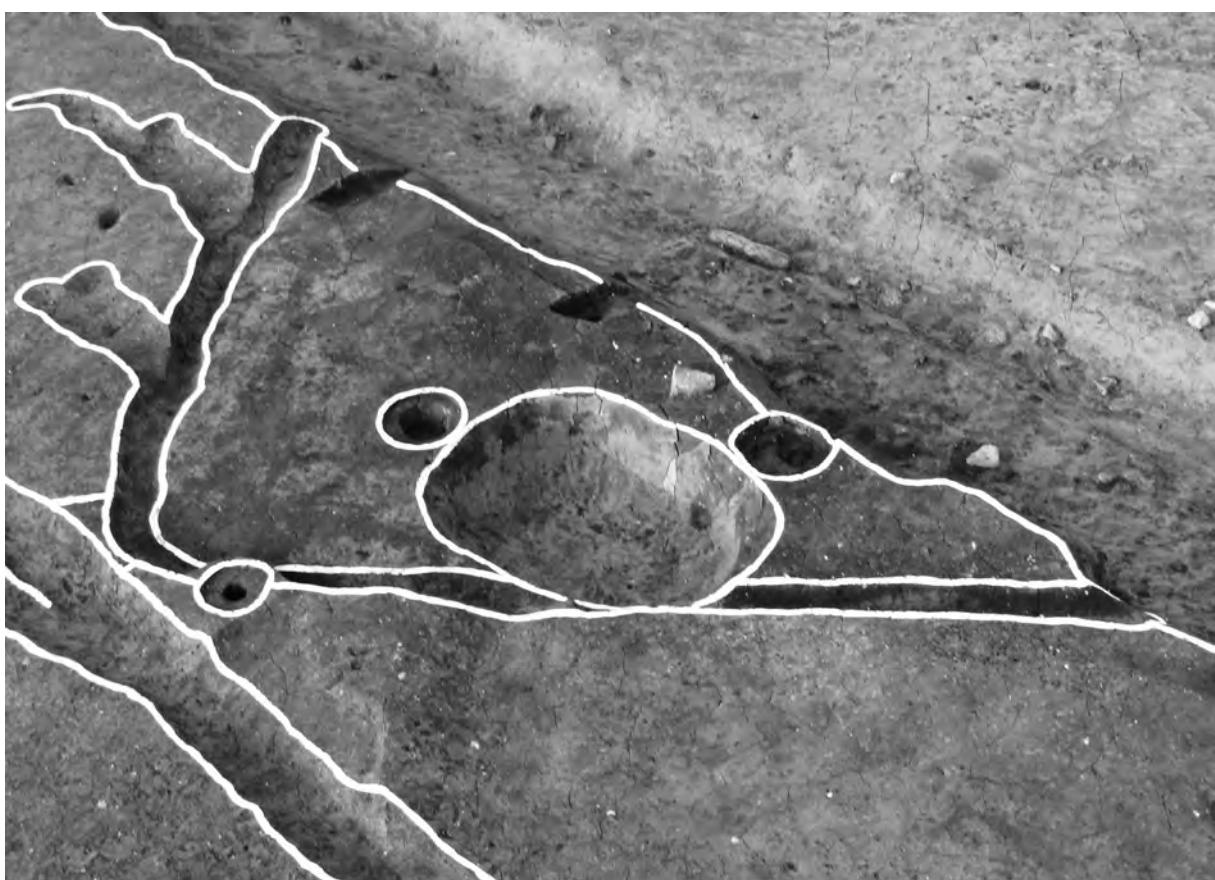


NR73 中央部埋土断面（南西から）



SH150 上面検出状況（東から）

西島
4W
区



SH150 全景（南から）

写真図版22



SH150 全景（東から）



SH150 下層遺構全景（東から）



SH150 埋土断面 (南から)



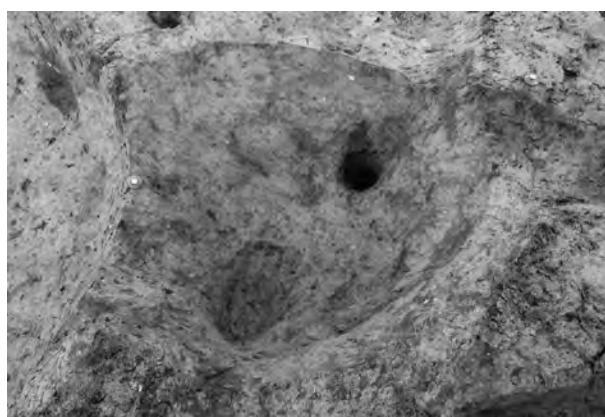
SH150 下層埋土断面 (南から)



SH150 内 SK160 上面検出状況 (西から)



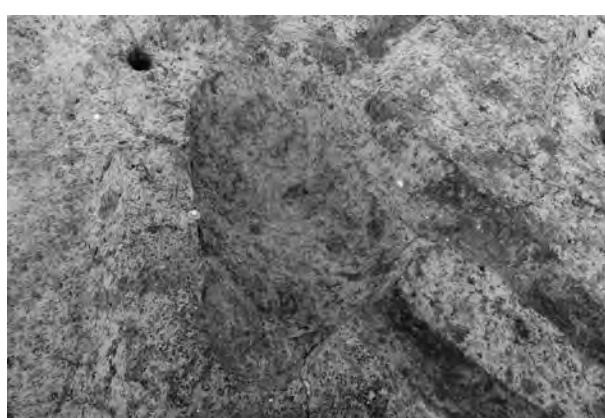
SH150 内 SK160 埋土断面 (南東から)



SH150 下層内 SK278 (南から)



SH150 下層内 SK278 埋土断面 (南から)



SH150 下層内 SK279 (南東から)



SH150 下層内 SK279 埋土断面 (東から)

西嶋
4W
区

写真図版24



ST209 (北から)



ST209 (西から)



ST46・ST47（東から）



ST47（東から）

写真図版26



ST47 上面検出状況（南から）



ST47 棺内埋土断面（南から）



ST47 西半部墓壙埋土断面（南から）



ST47 東半部墓壙埋土断面（南から）



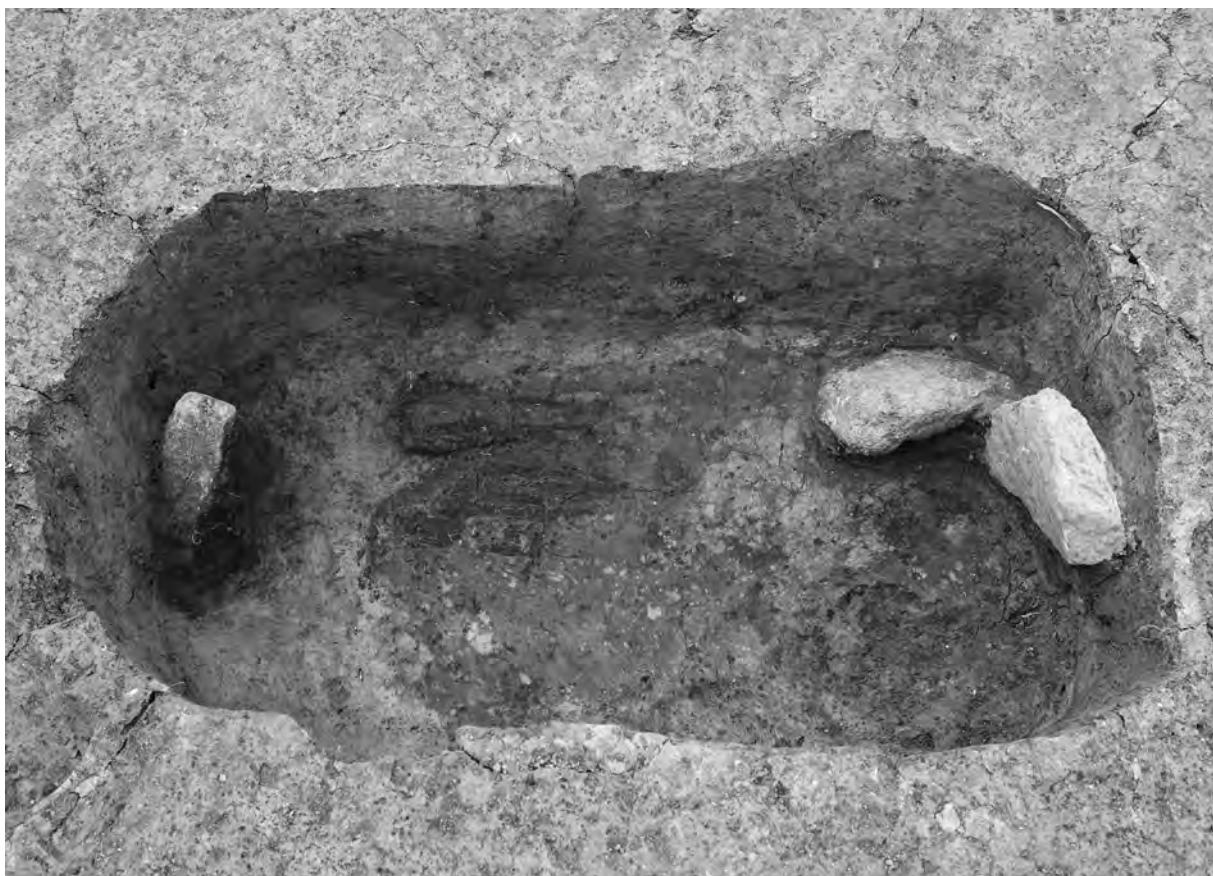
SP200 截ち割り断面・須恵器（146）出土状況（東から）



ST209 埋土断面（東から）



ST46 (東北東から)



ST46 (南南東から)



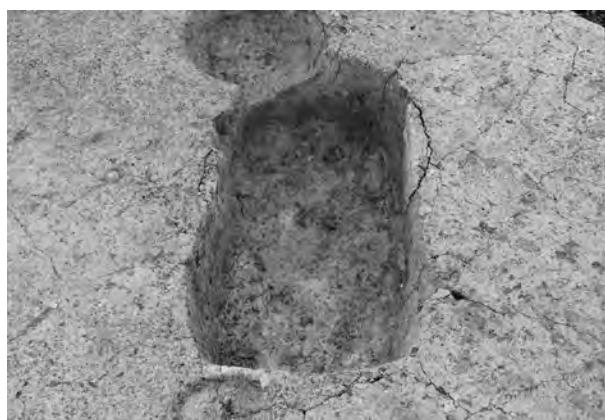
ST46 (北北西から)



ST46 炭化底板材・漆器漆膜出土状況 (南南東から)



ST46 漆器漆膜出土状況 (南南東から)



ST46 墓壙 (東北東から)

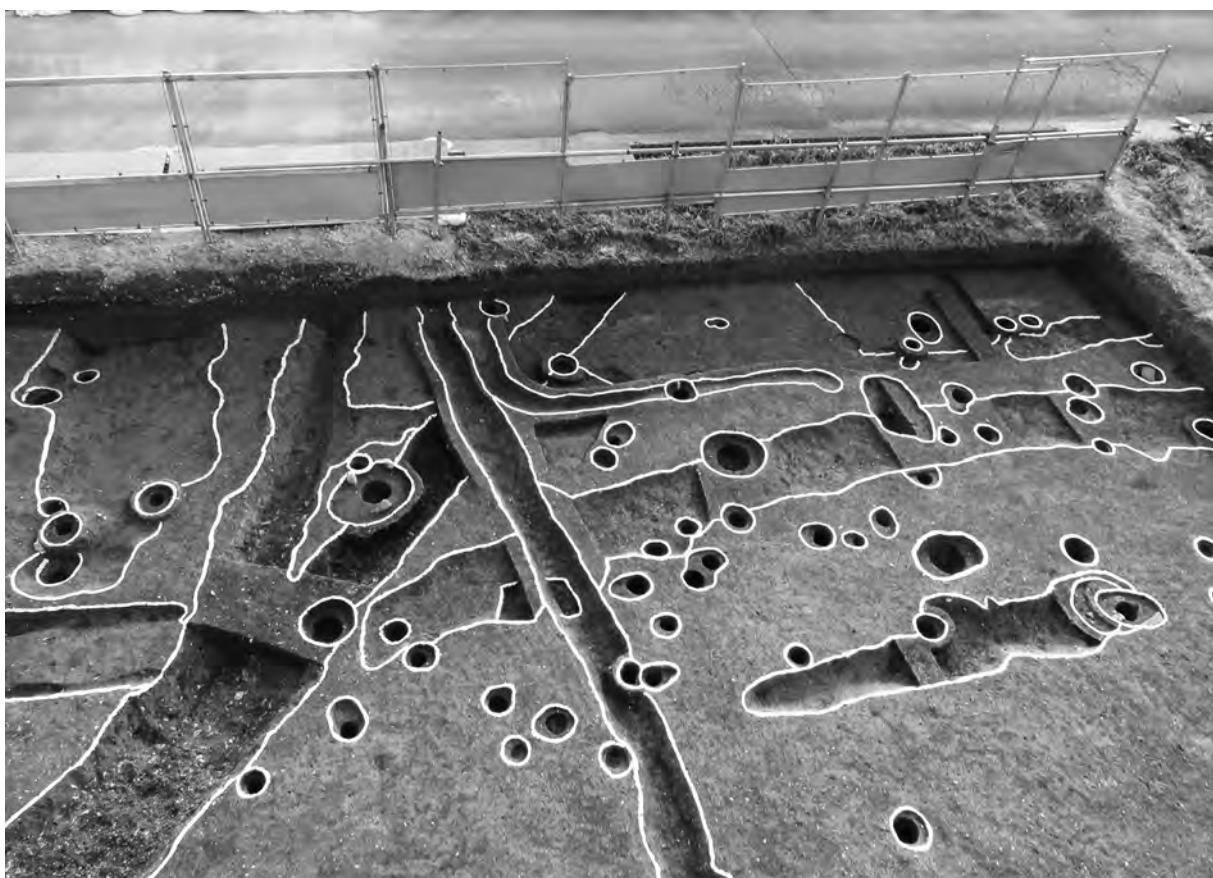


ST46 埋土断面・土師器 (147) 出土状況 (東北東から)



調査区南部遺構群（南から）

西島4W区



調査区南部遺構群（北から）

写真図版30



調査区南端東部壁断面（北西から）



調査区南端西半部壁断面（北東から）



調査区南端中央部壁断面（北から）



調査区南端中央西部壁断面（北から）



調査区南端西端部壁断面（北から）



SX262 埋土断面（北から）



SD222・253 埋土断面（北東から）



SD222 埋土断面（北東から）



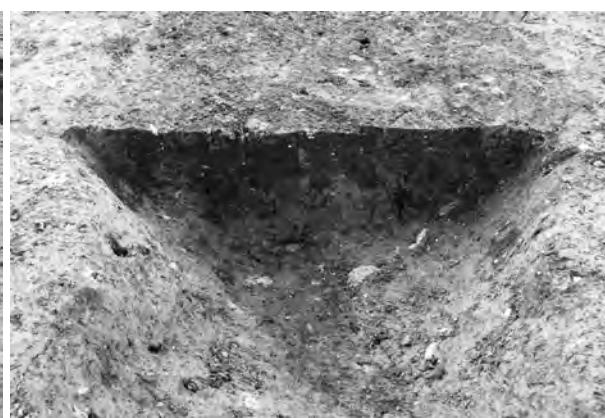
SX267 埋土断面 (西から)



SK277 (南から)



SK277 埋土断面 (東から)



SD203 埋土断面 (東から)



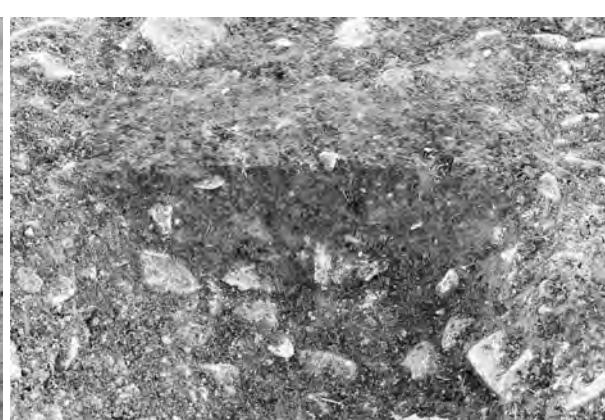
SP171 確板石 (S18) 検出状況 (南から)



SP171 確板石 (S18) 検出状況 (北から)

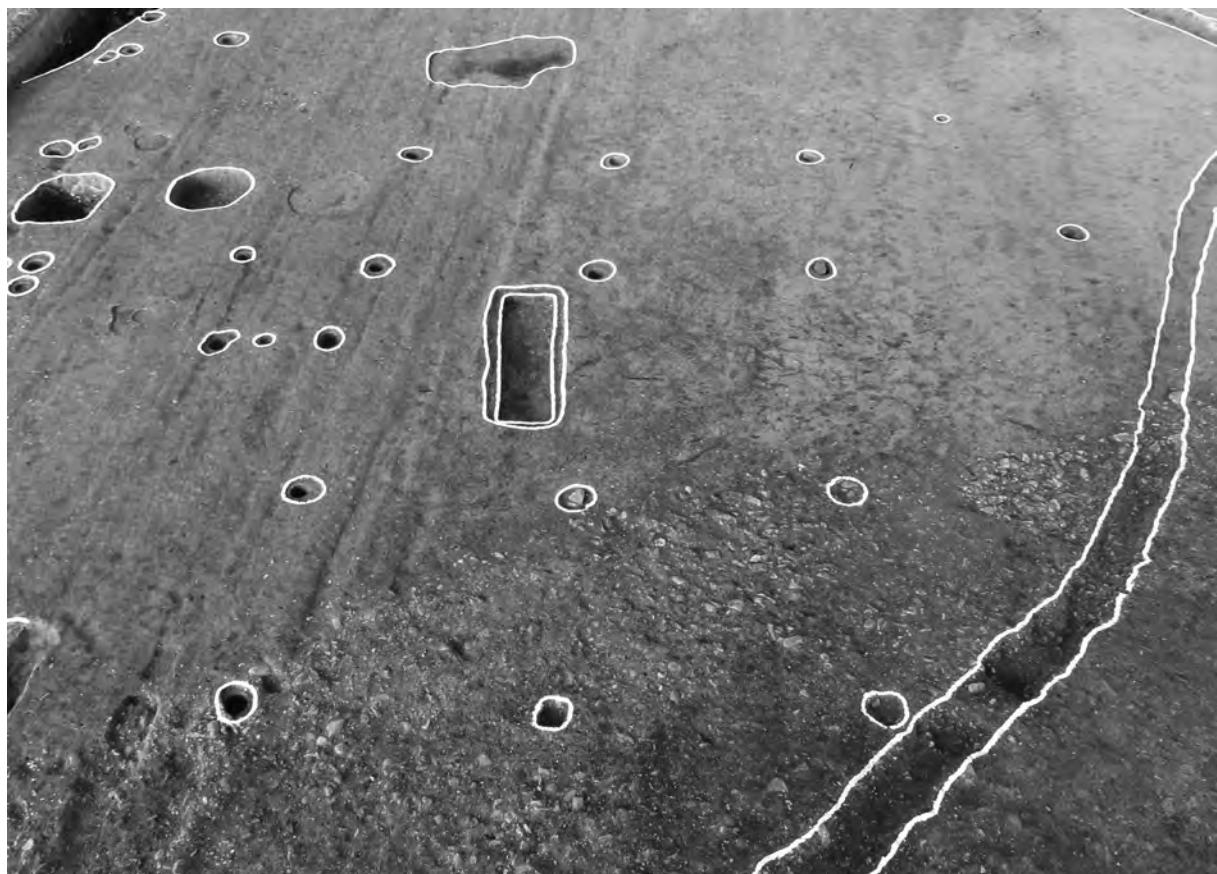


SD210 北部埋土断面 (南南西から)

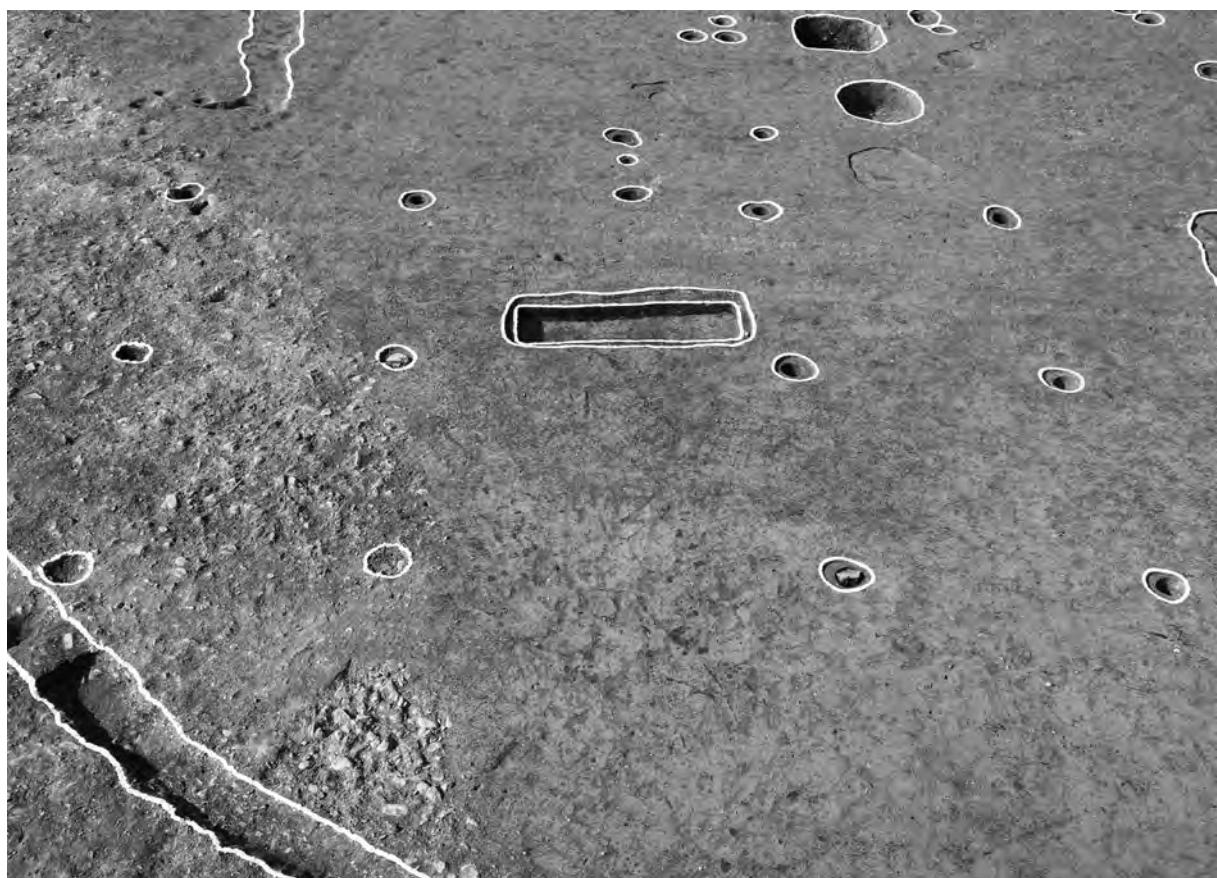


SD210 中央部埋土断面 (南西から)

西嶋
4W
区



SB01・ST22（南から）



SB01・ST22（東から）



SB01 内 SP18 裁ち割り断面 (南から)



SB01 内 SP20 裁ち割り断面 (東から)



SB01 内 SP21 裁ち割り断面 (南から)



SB01 内 SP23 裁ち割り断面 (西から)



SB01 内 SP24 裁ち割り断面 (南から)



SB01 内 SP25 裁ち割り断面 (西から)



SB01 内 SP26 裁ち割り断面 (南から)



SB01 内 SP28 裁ち割り断面 (南から)

西
嶋
4W
区



ST22 上面検出状況（南から）



ST22（東から）



ST22 墓壙（東から）



ST22 棺内埋土断面（南から）



ST22 西半部墓壙埋土断面（南から）

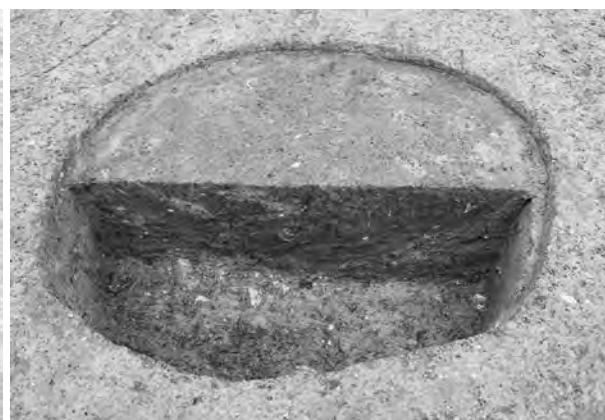


ST22 東半部墓壙埋土断面（南から）

西嶋
4W
区



SK212 埋土断面（南から）



SK32 埋土断面（南から）



SD80 中央部木材出土状況（北東から）



SD80 埋土断面（西北西から）



SD118 全景及び北東部遺構検出状況（北西から）



SD118 全景及び北東部遺構検出状況（南東から）



西島
4W
区

SD118・130 全景及び北東部遺構検出状況（北西から）



SD118 南東部礫出土状況（北から）



SD118・130 埋土断面（南東から）

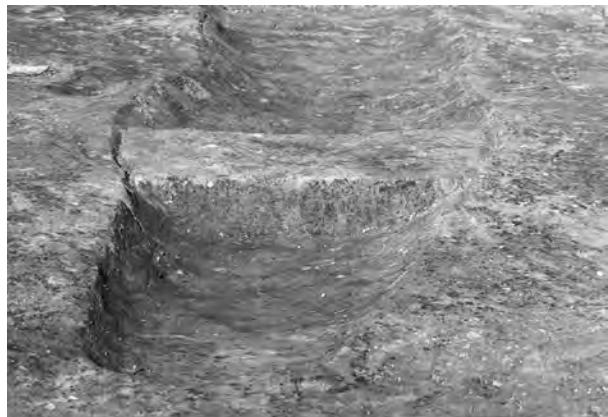


北東部東壁 SD118 等埋土断面（西から）



北東部埋土断面（北西から）

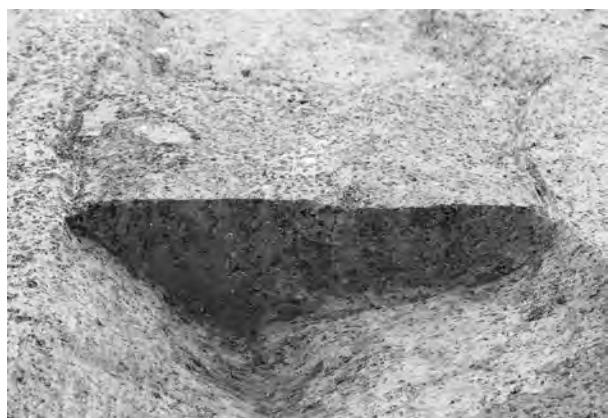
写真図版38



SD119 埋土断面（南東から）



SD120 埋土断面（南東から）



SD125 埋土断面（北西から）



SX109（東から）



SX109 西端埋土断面（東から）



SX109 埋土断面（東から）



SP82 裁ち割り断面（南から）



SP82 磓板石（S17）出土状況（南から）



SP153 埋土断面（北東から）



SP155 埋土断面（南西から）



SX144 埋土断面（南から）



SX148 埋土断面（南から）



ラジコンヘリによる空中写真撮影状況（南東から）

西嶋
4W
区

写真図版 40



北西部機械掘削状況（北から）



南部人力掘削状況（北東から）



NR73 等人力掘削状況（北北東から）



南部遺構検出状況（西南西から）



SH150 掘削状況（西南西から）



北部電子平板測量状況（南南西から）



SB01・ST22 遺構実測状況（北から）



北半部埋め戻し状況（南から）



西嶋 4W 区
西嶋 4E 区

写真図版 42



西嶋 4 E 区全景（北から）



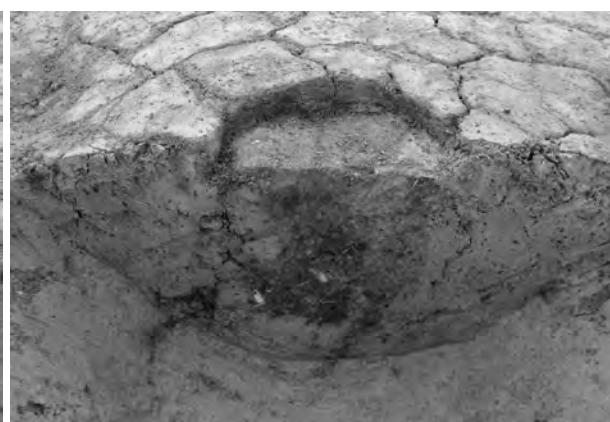
西嶋 4 E 区全景（南から）



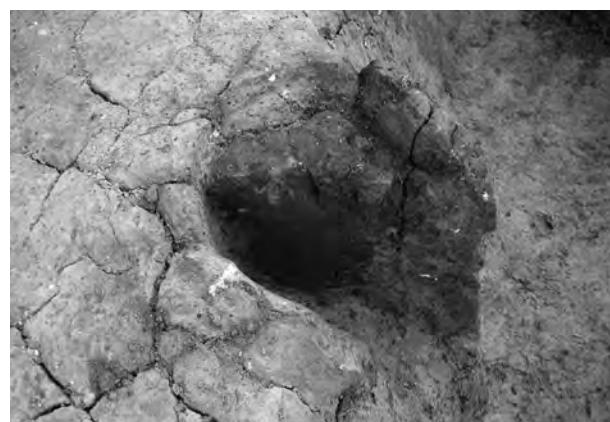
西嶋4E
区



P05 (東から)



P06 (東から)



P04 (東から)

写真図版 44



SB02 (03) (西から)



P17 (南から)



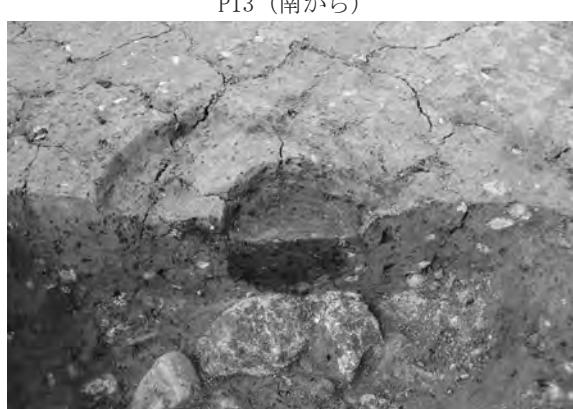
P56 (南から)



P13 (南から)



P54 (南から)

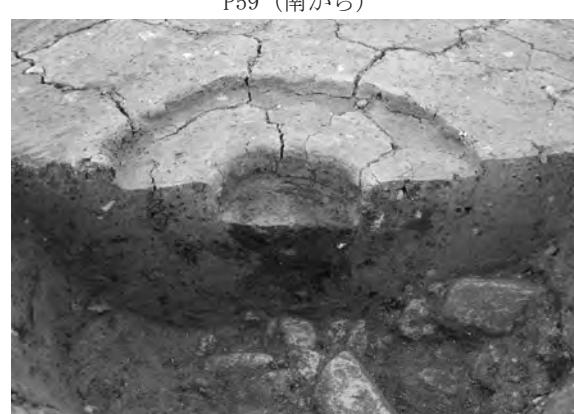
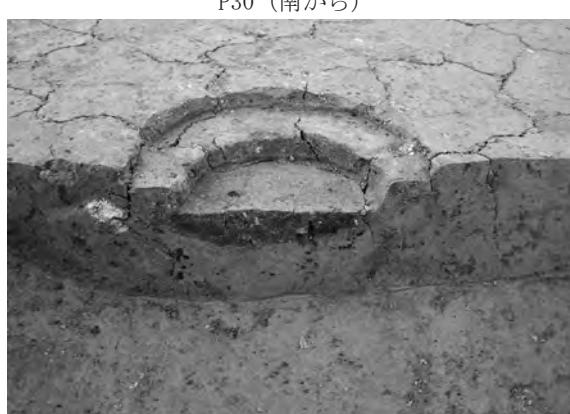
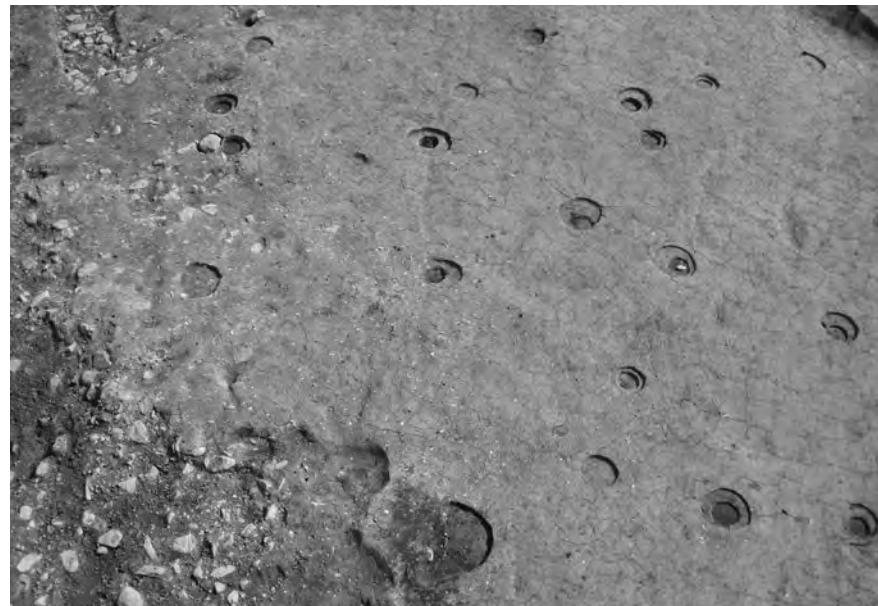


P57 (南から)



P55 (南から)

西嶋4E
区



写真図版 46



SB04 (南から)



P66 (東から)



P61 (東から)



P64・65 (東から)



P60 (東から)



P62 (東から)



SB04・05 (南から)



P44 (南から)



P67 (南から)



P41 (南から)



P69 (南から)



P34 (南から)



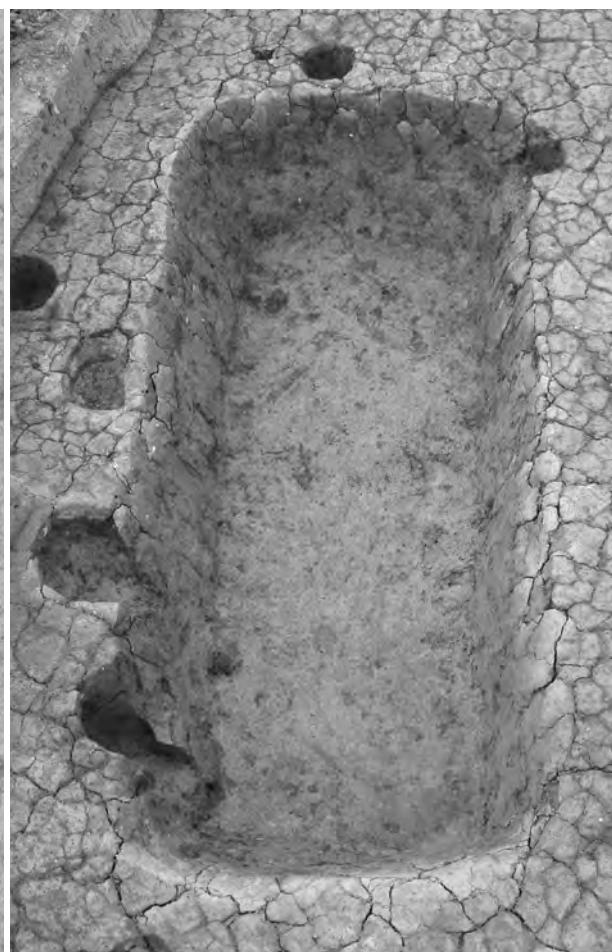
P68 (南から)



木棺墓・土壙墓群 ST05～08（北から）



木棺墓 ST05（東から）



ST05 完掘状況（東から）

西嶋4E区



ST05 側板掘方断面 (東から)



ST05 側板断面 (東から)



ST05 側板掘方断面 (東から)



ST05 東小口断面 (北から)



ST05 西小口断面 (北から)



ST05 西小口掘方断面 (南から)



ST05 東小口掘方断面 (南から)



木棺墓 ST06 ·
土壙墓 ST08 (北から)



土壙墓 ST08 断面
(南から)



木棺墓 ST06 ·
土壙墓 ST08 断面
(西から)



ST06 側板断面（南から）



ST06 断ち割り（南から）



ST06 側板断面（南から）



ST06 北小口断面（西から）



ST06 南小口断面（西から）



ST06 北小口（東から）

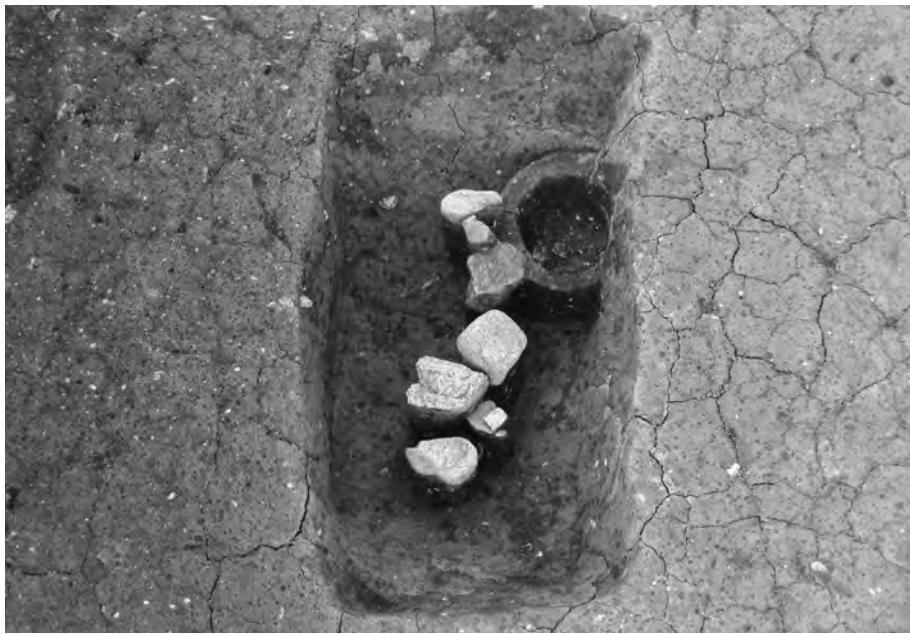


ST06 完掘状況（南から）

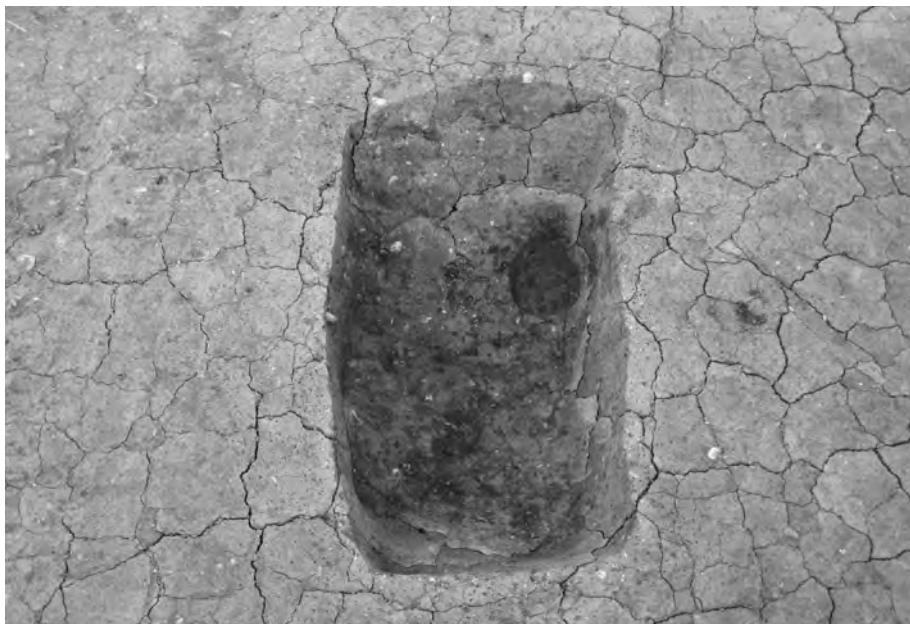
西嶋4E
区



土壙墓 ST07 断面
(西から)



土壙墓 ST07 (南から)



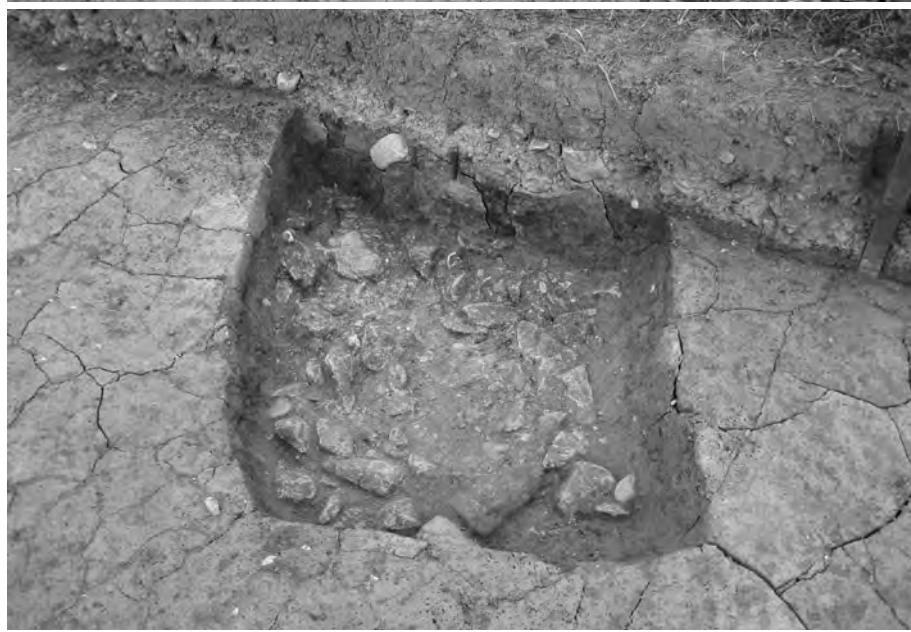
土壙墓 ST07 完掘状況
(南から)



木棺墓 ST14 断面
(西から)



木棺墓 ST14 (南から)



木棺墓 ST14 完掘状況
(西から)

写真図版54



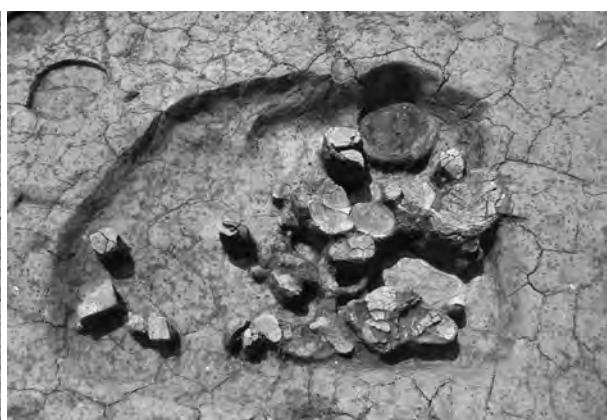
土壙墓 ST28 断面及び土器出土状況（東から）



土壙墓 ST28 完掘状況（西から）



SK09 断面（東から）



SK09 土器出土状況（北から）



SK10 断面（北から）



SK10 土器出土状況（南から）



SK30 断面（南西から）



SK30 土器出土状況（南東から）



P35 土器出土状況（北から）



SK03 断面（東から）



SK11 断面（南から）



SK12 断面（西から）



SK13 断面（西から）



SK15 断面（北西から）



SK16 断面（南東から）



SK17 断面（南から）

写真図版 56



SK18 剖面 (東から)



SK19・20 剖面 (北西から)



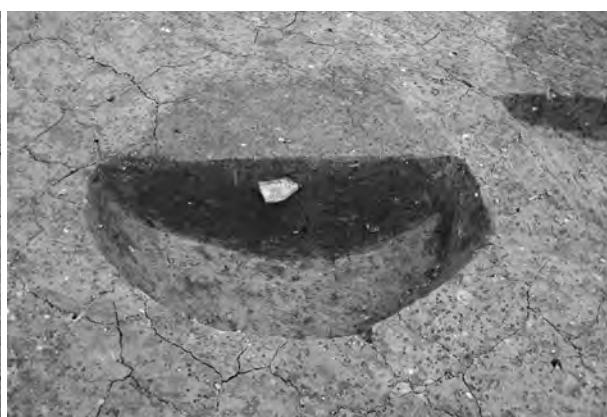
SK22 剖面 (南から)



SK23 剖面 (南西から)



SK24 剖面 (北西から)



SK25 剖面 (南から)



SK26 剖面 (南から)



SK02 剖面 (東から)



SD01 (北西から)



SD01 断面 (南東から)



SD02 (南西から)



SD02 断面 (南西から)



SD04 (北西から)



SD04 断面 (南東から)



SD05・06 (北西から)



SD06 断面 (南東から)

西嶋4E
区

写真図版 58



NR01 (西から)



NR01 断面 (西から)



堆積状況調査 (南西から)



下層断ち割り (北西から)



SX01 (南東から)



遺構掘削状況 (北西から)



遺構掘削状況 (南から)



実測状況 (南西から)



西嶋 5 区全景（北から）

西嶋 5 区



西壁（SR01）断面（B-B'）・SD01（南東から）

写真図版 60



SD01 (西から)



SD01 断面 (a-a') (東から)



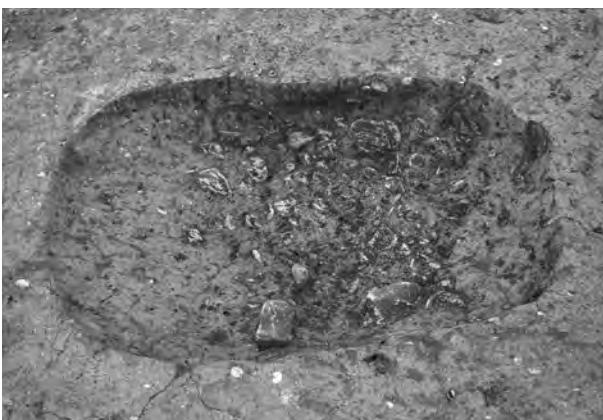
SD02 断面 (b-b') (東から)



SD03 (西から)



SD03 断面 (c-c') (東から)



SK01 (東から)



SK01 断面 (e-e') (南から)



西嶋 6 区調査区東部全景（南から）



西嶋 6 区調査区西部全景（南から）



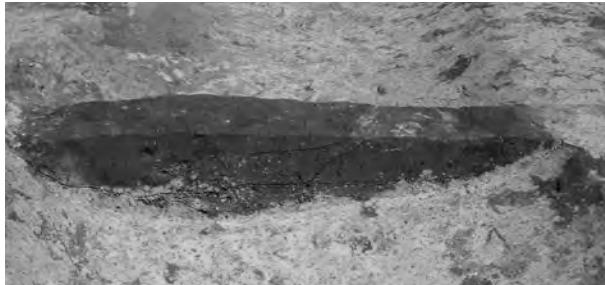
西嶋 6 区調査区西部全景（北から）



SR01 南壁断面（B-B'）（北から）



SR01 南壁断面（B-B'）西部（北から）



SD01 断面（a-a'）（南から）



西島 6 区南部及び
島 1 区全景（真上から）

西島 6 区
島 1 区



鳴 1 区全景（北から）



鳴 1 区全景（南から）



調査区北壁断面 (A-B) SD01 付近 (南西から)



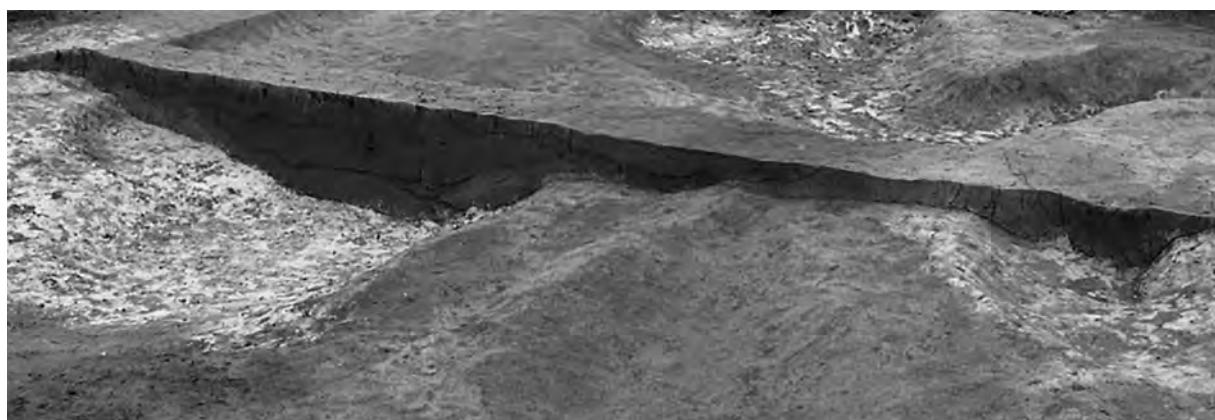
調査区東壁断面 (B-C) (北西から)



調査区東壁断面 (B-C) 中央付近 (西から)



調査区東壁断面 (B-C) 南部 SR02-a 付近 (南西から)



SR01 中央部断面 (a-a') (南西から)



SR01 北部溜まり状遺構（西から）



SR01 北部溜まり状遺構西部（南から）



SR01 北部溜まり状遺構北部（南から）



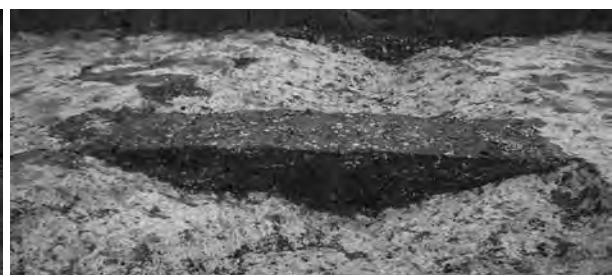
SR02-a・03 南部断面（e-e'）（南西から）



SR02-b 南部断面（c-c'）（北西から）



SR04 南部断面（f-f'）（西から）



SD01 断面（h-h'）（南から）



鳴 2 区全景 (北から)



鳴 2 区全景 (南東から)



調査区東壁断面南部 (SR01・SD01・SD03 付近) (西から)



SR01-a・b 断面 (a-a') 南断面 (南東から)



SR01-a・b 断面 (a-a') 南断面 (SR01-a・b 境界付近) (南から)



SR01-a 断面 (b-b') 北断面 (南から)



SR01-a 断面 (c-c') 北断面② (南から)



SR01-a 東肩弥生土器・礫出土状況 (西から)



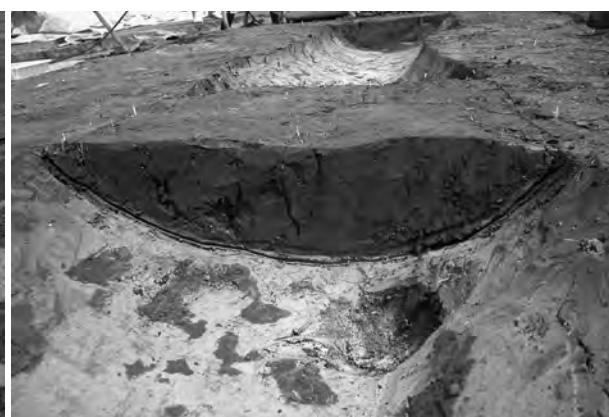
SR01-a 南東隅底部弥生土器出土状況 (北西から)



SR02 断面 (e-e') 南断面 (南から)



SD01・SD02 断面 (A-A') (南から)



SD03 断面 (B-B') (南から)



SD04 断面 (B-B') (南から)



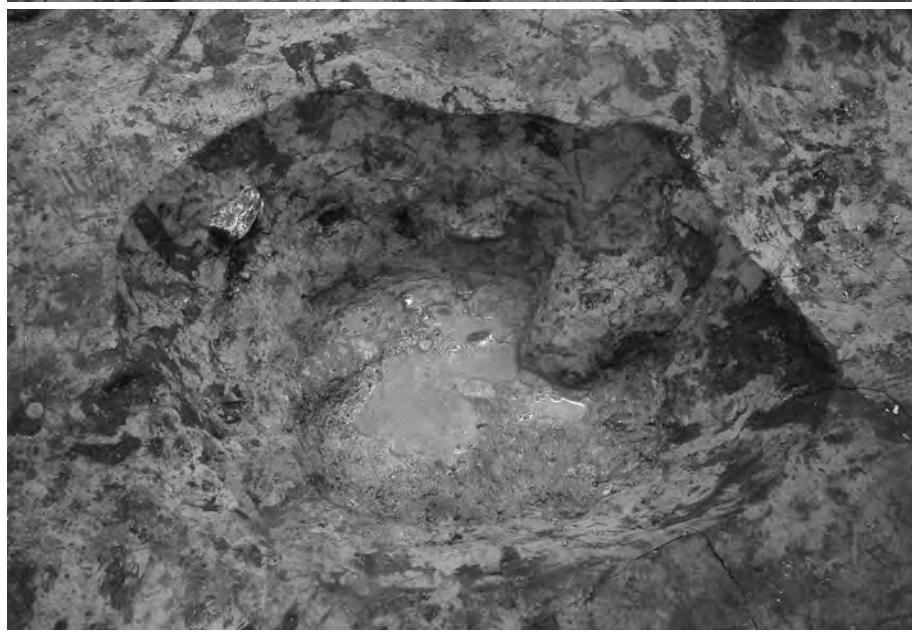
SD06 断面 (E-E') (南から)



SK01 断面（西から）



SK01 土師器椀（397）
出土状況（西から）



SK01 完掘状況（西から）



島3区・4区全景（真上から）

島3区

島4区



島 3 区全景（北から）



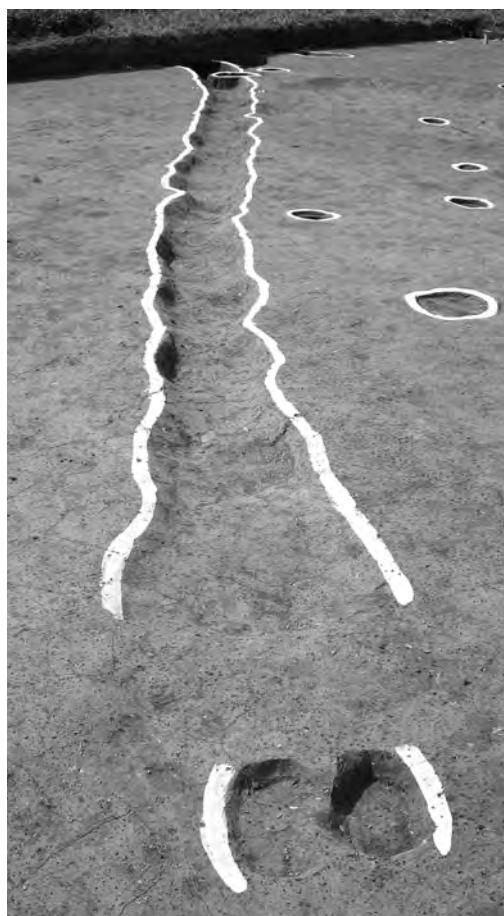
SR01（北西から）



北壁断面 (A-A') 西・中部 (南東から)



北壁断面 (A-A') 東部 (南から)



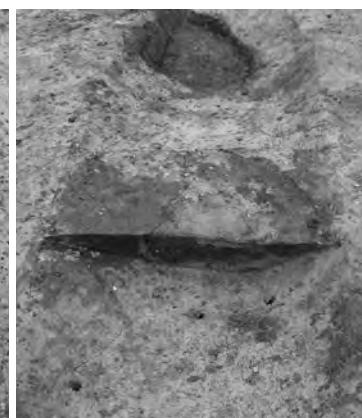
SD03 (北東から)



SD01 中央部断面 (c-c') (西から) SD01 西部断面 (b-b') (南西から)



SD02 断面 (e-e') (西から)



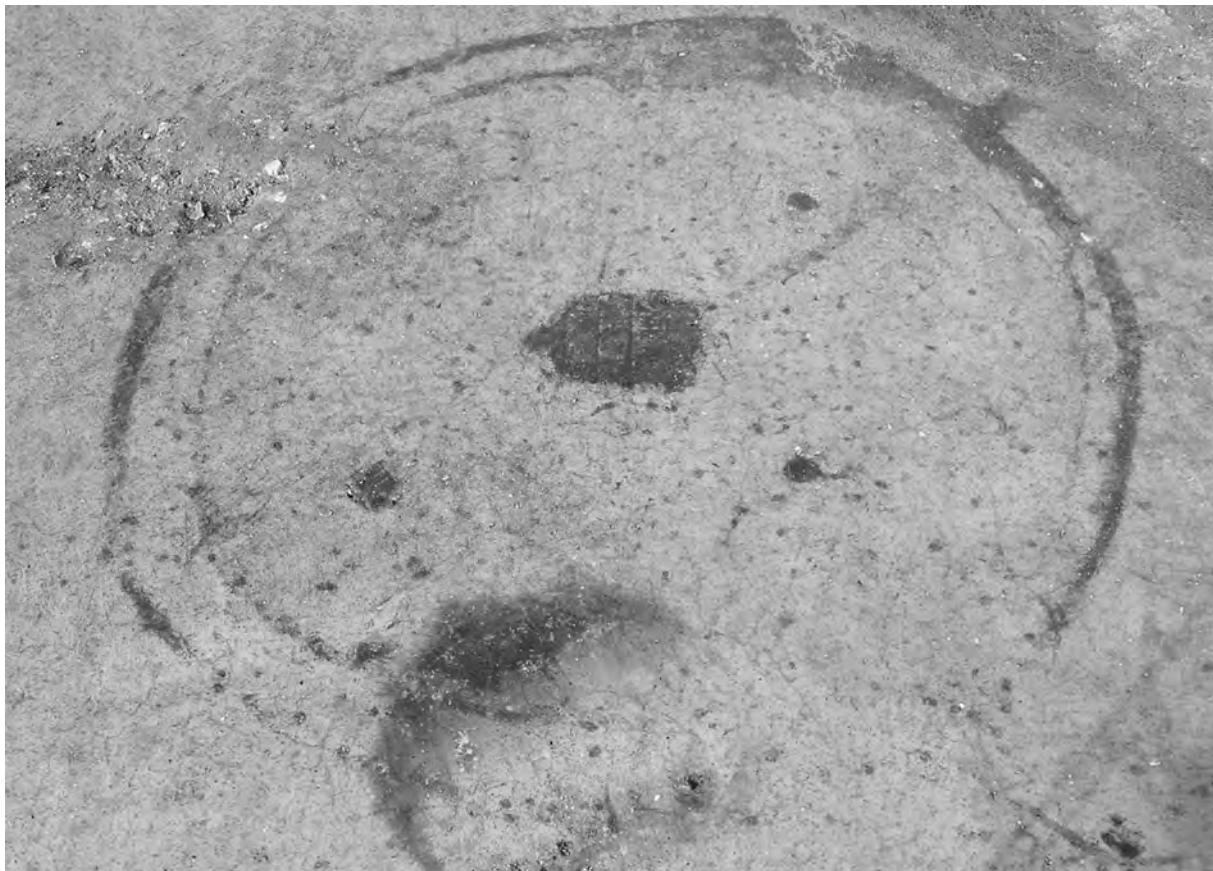
SD03 断面 (g-g') (南西から)



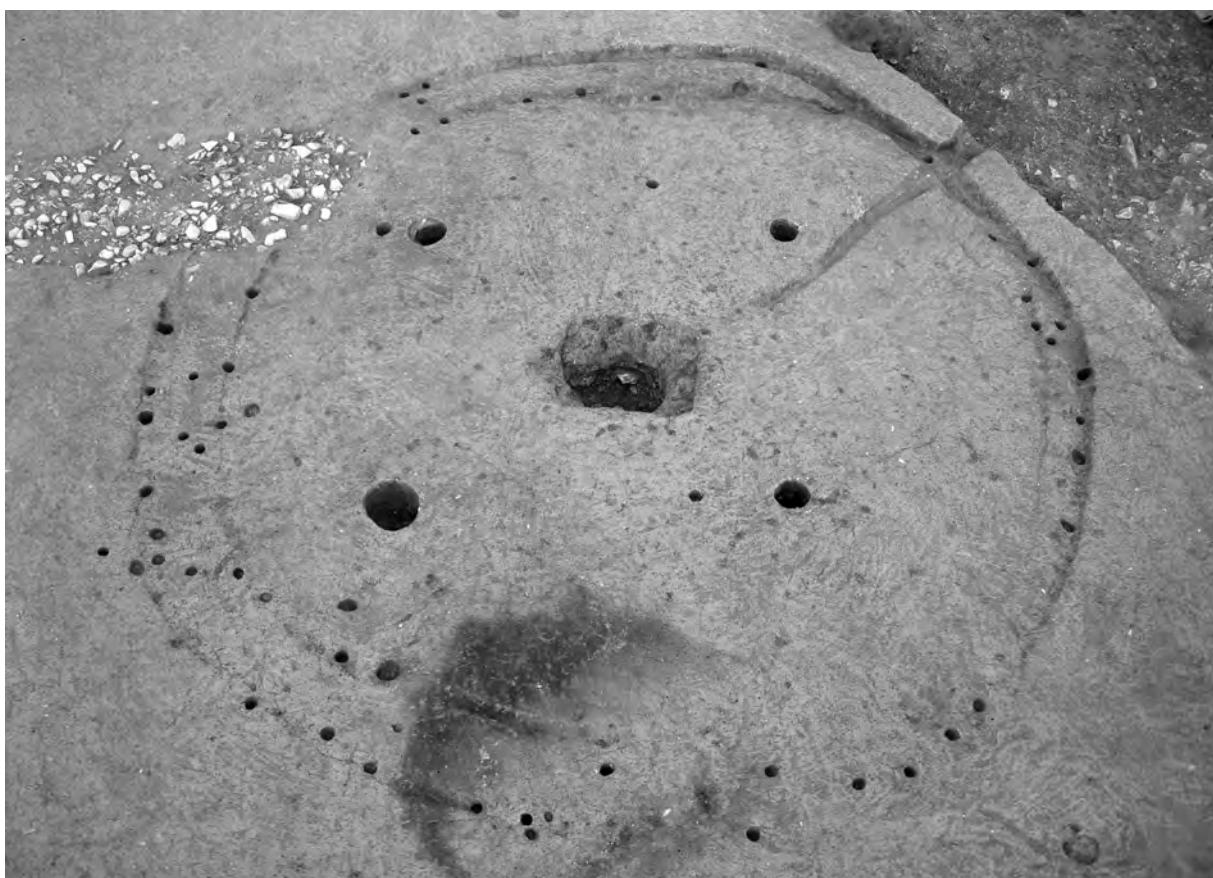
SH01・SD01 検出状況（南から）



SH01 南東部周壁溝・杭穴検出状況（南西から）



SH01 検出状況 (南から)



SH01 完掘状況 (南から)

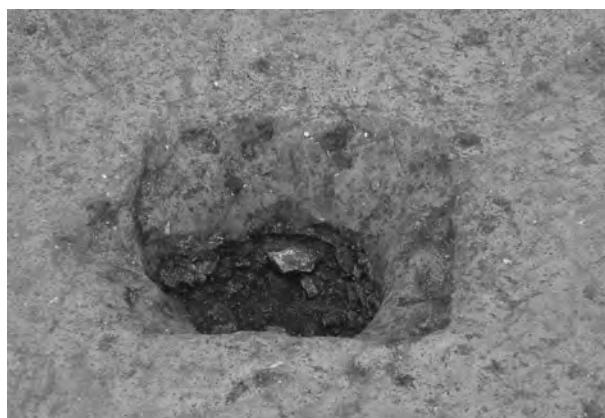
写真図版 76



SH01 中央土坑（東から）



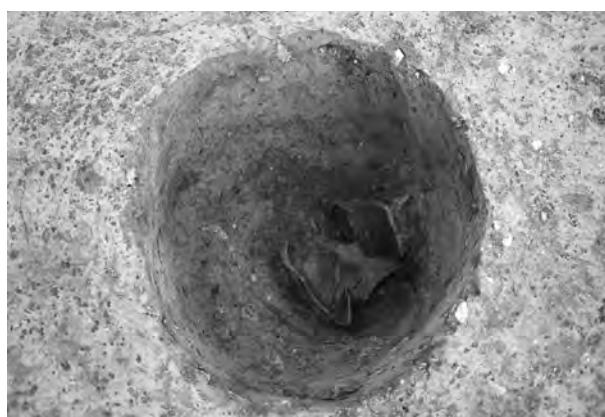
SH01 中央土坑断面（東から）



SH01 中央土坑（南から）



SH01 中央土坑断面（南から）



SH01 主柱穴 P2 土器出土状況（南から）



SH01 周壁溝北部断面（東から）



SH01 排水溝断面（C-C'）（東から）



SH01 間仕切り溝・排水溝・周壁溝断面（B-B'）（南から）



柱穴列 1・2 (北から)



柱穴列 3・4 (西から)



鳴4区全景（北から）



鳴4区西半部全景（南から）



SB01 柱穴・柱痕 (南東から)



SB01 柱穴完掘状況 (南東から)



SD01・SK04 (南東から)



SD01 断面 (a-a') (西から)



SK04 断面 (北から)



SK04 完掘状況 (北から)



SK04 炭層検出状況 (北から)

写真図版 80



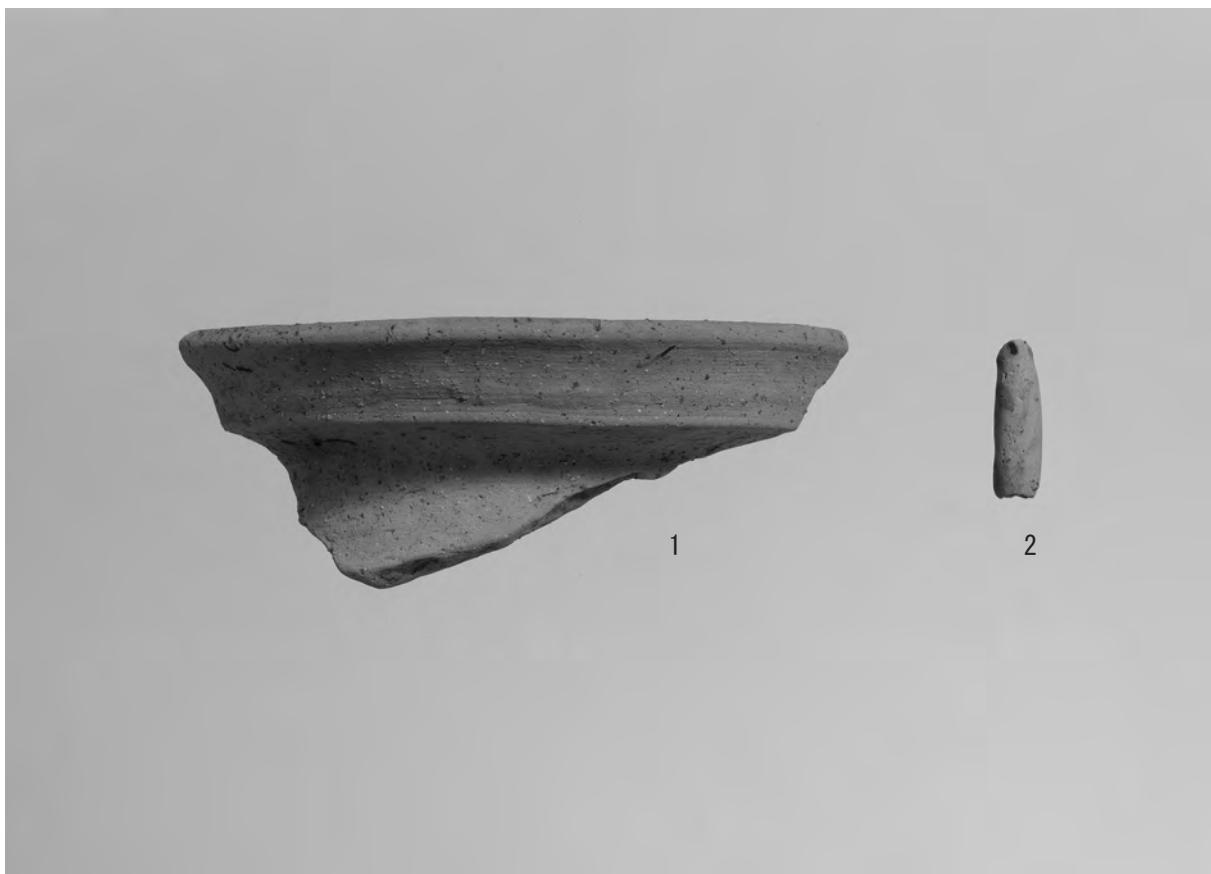
SR01 全景（南西から）



SR01 内埋没上部
畦畔検出状況（北東から）



SR01
調査区東壁断面（B-C）
(北西から)



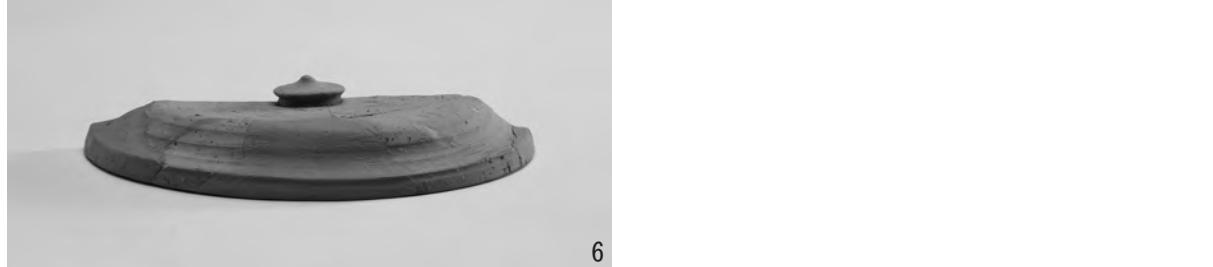
1

2

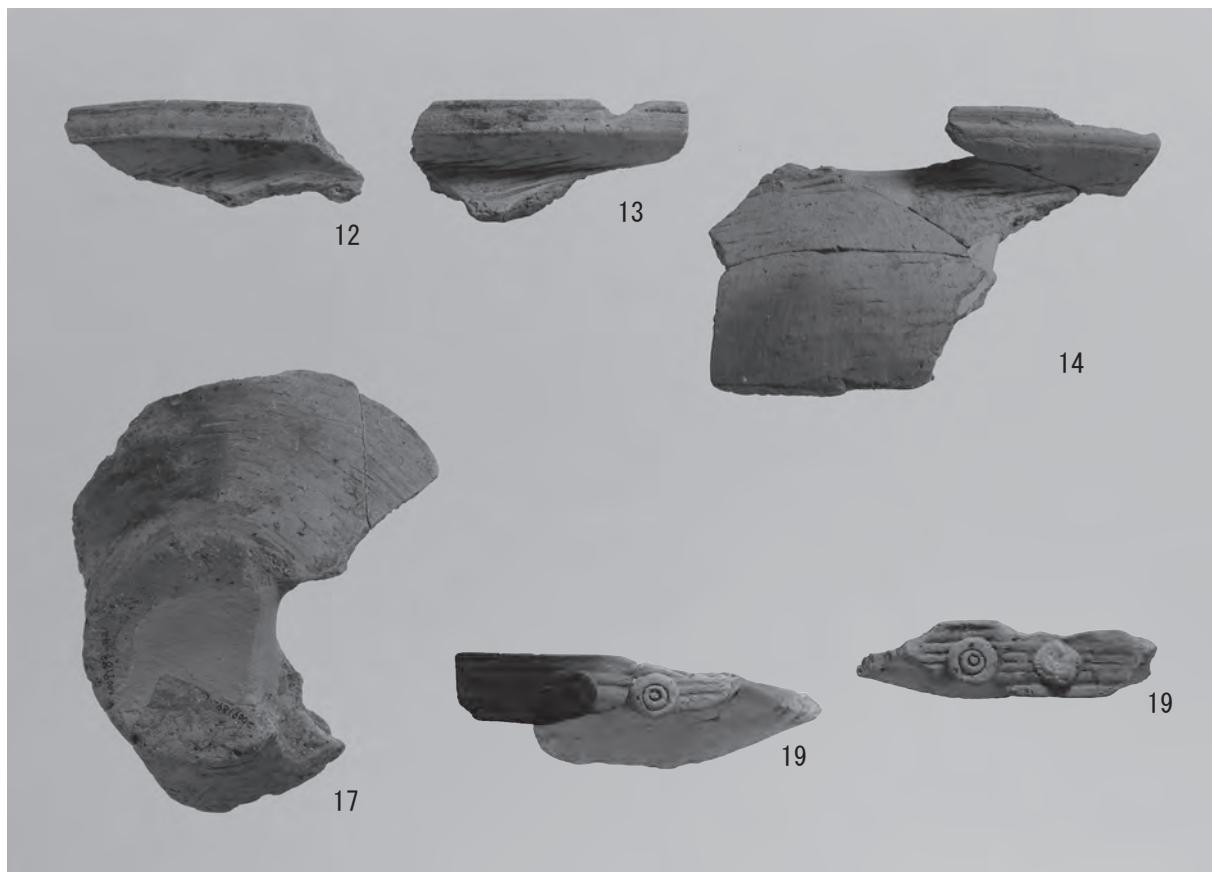


3

トレンチ出土土器



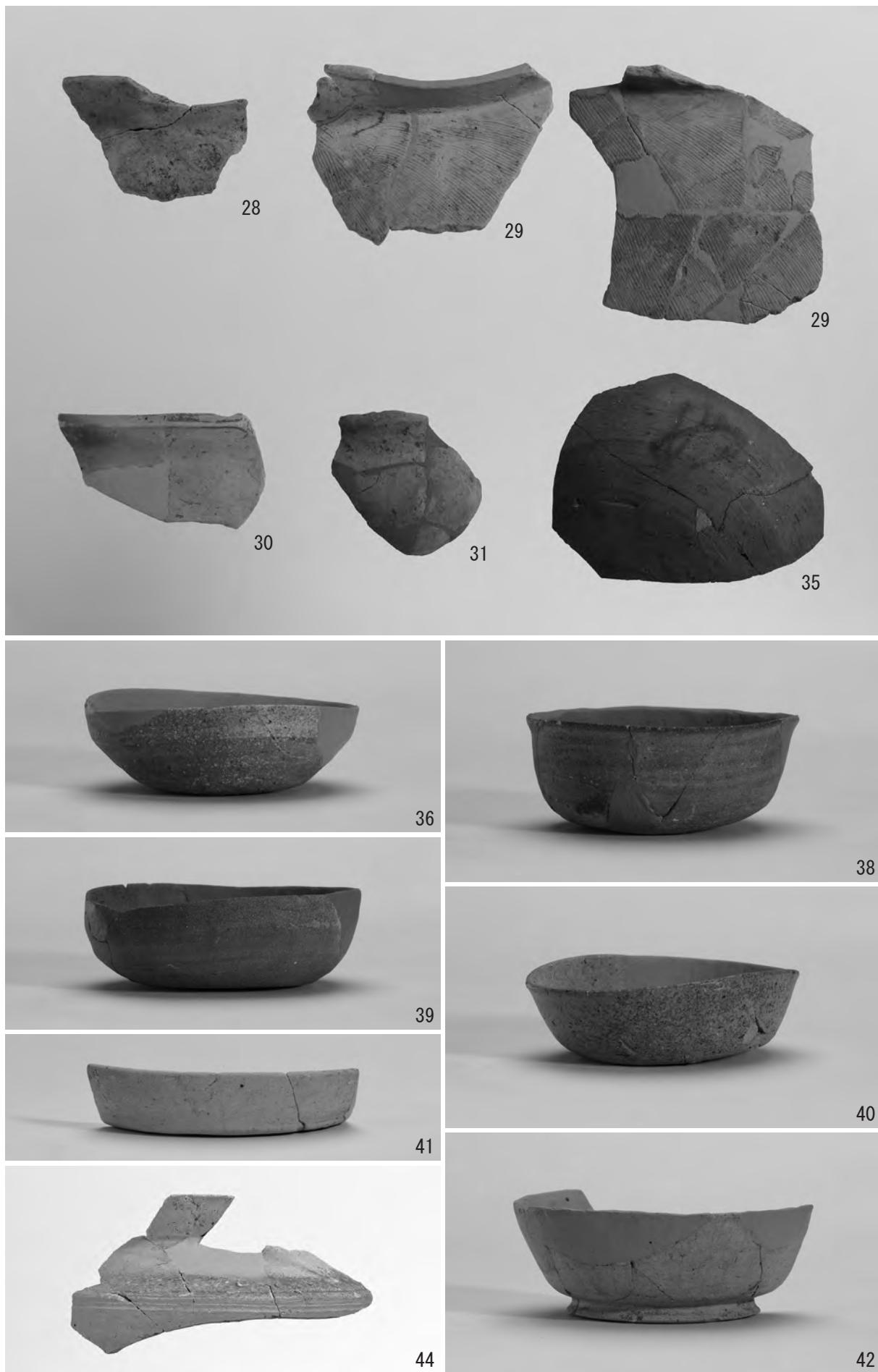
西嶋 1 区出土土器



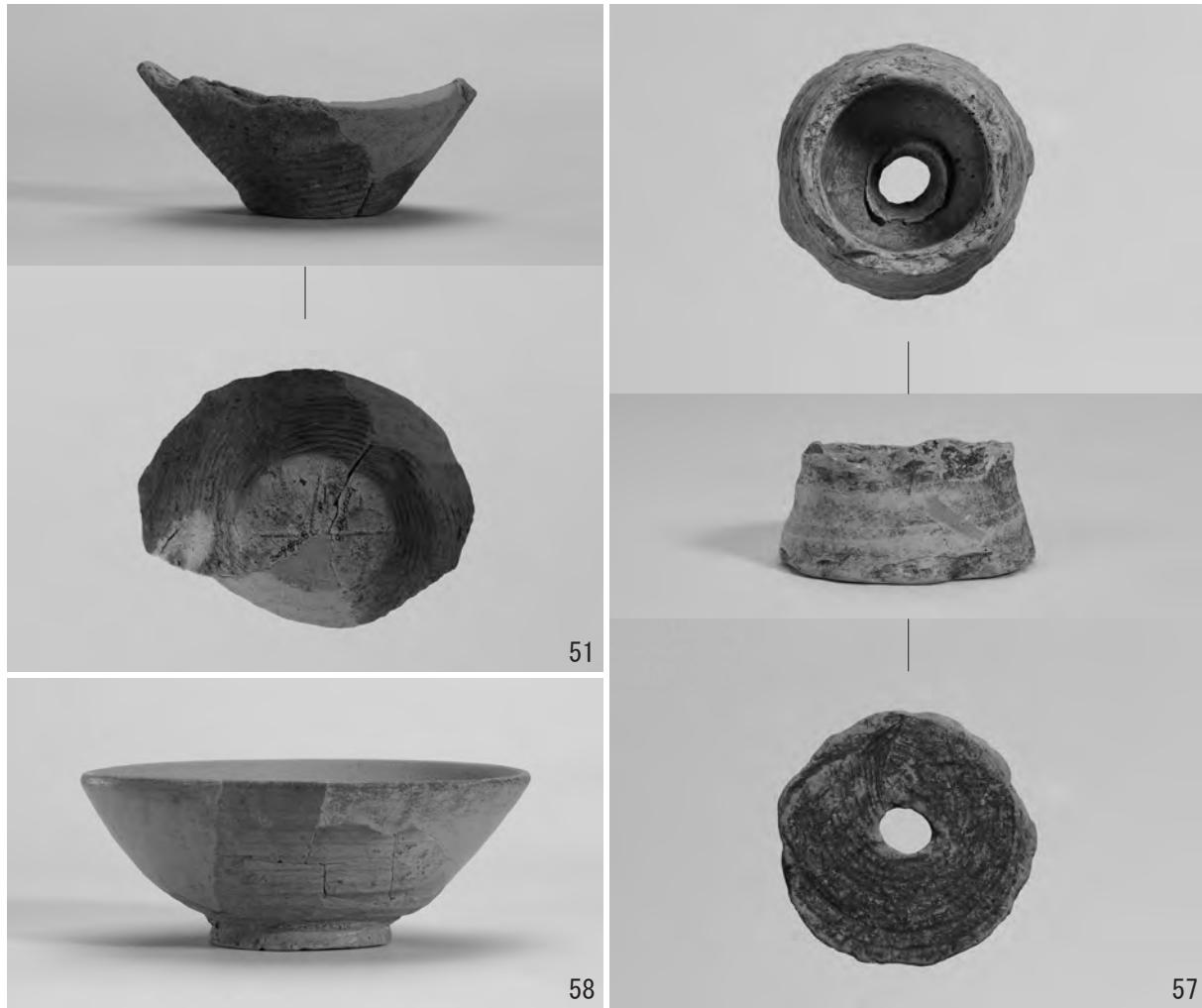
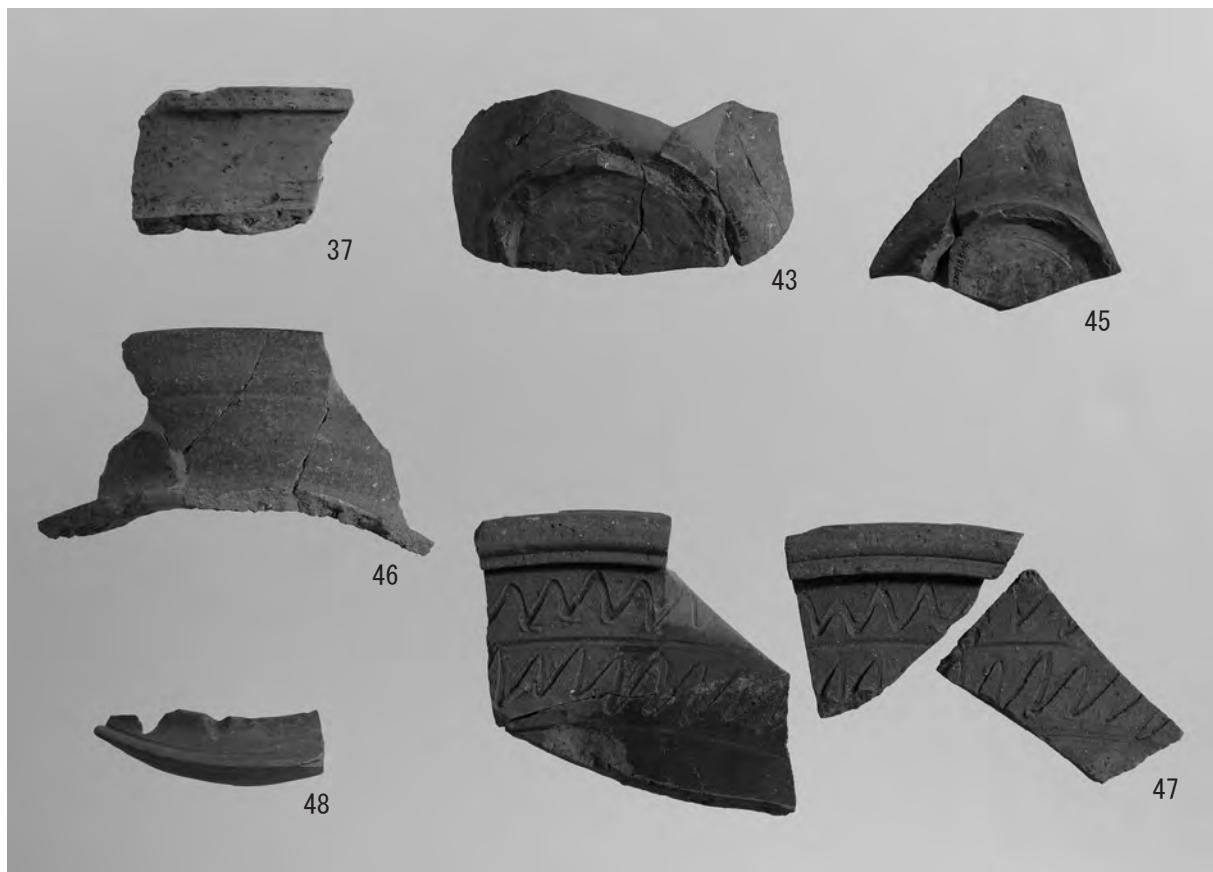
西嶋2区出土土器（1）



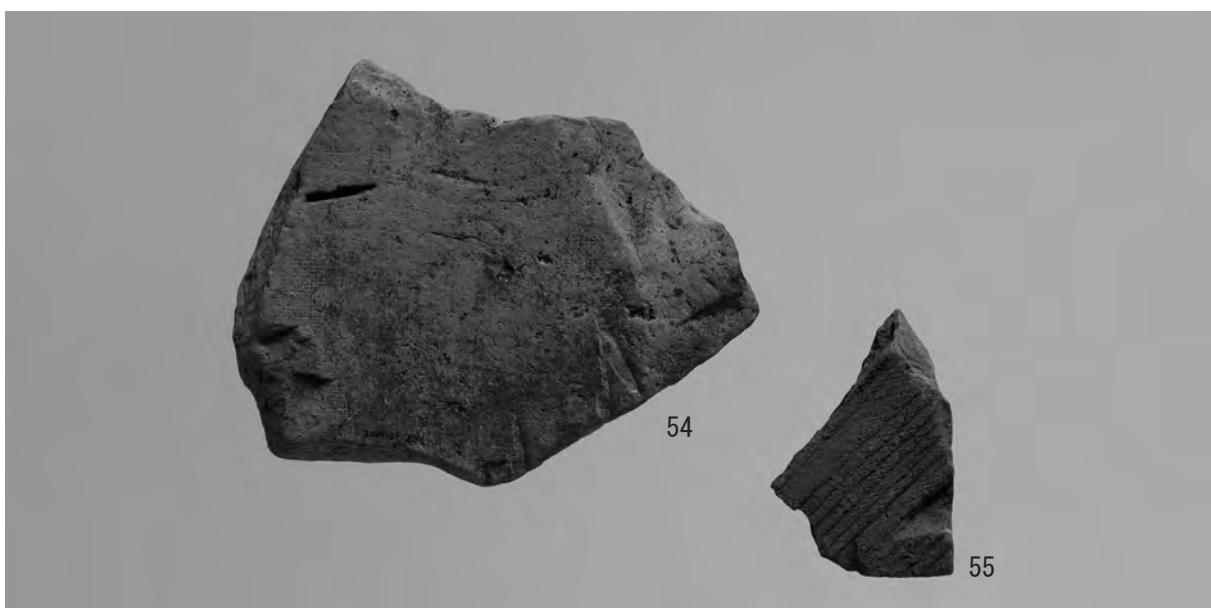
西嶋 2 区出土土器（2）



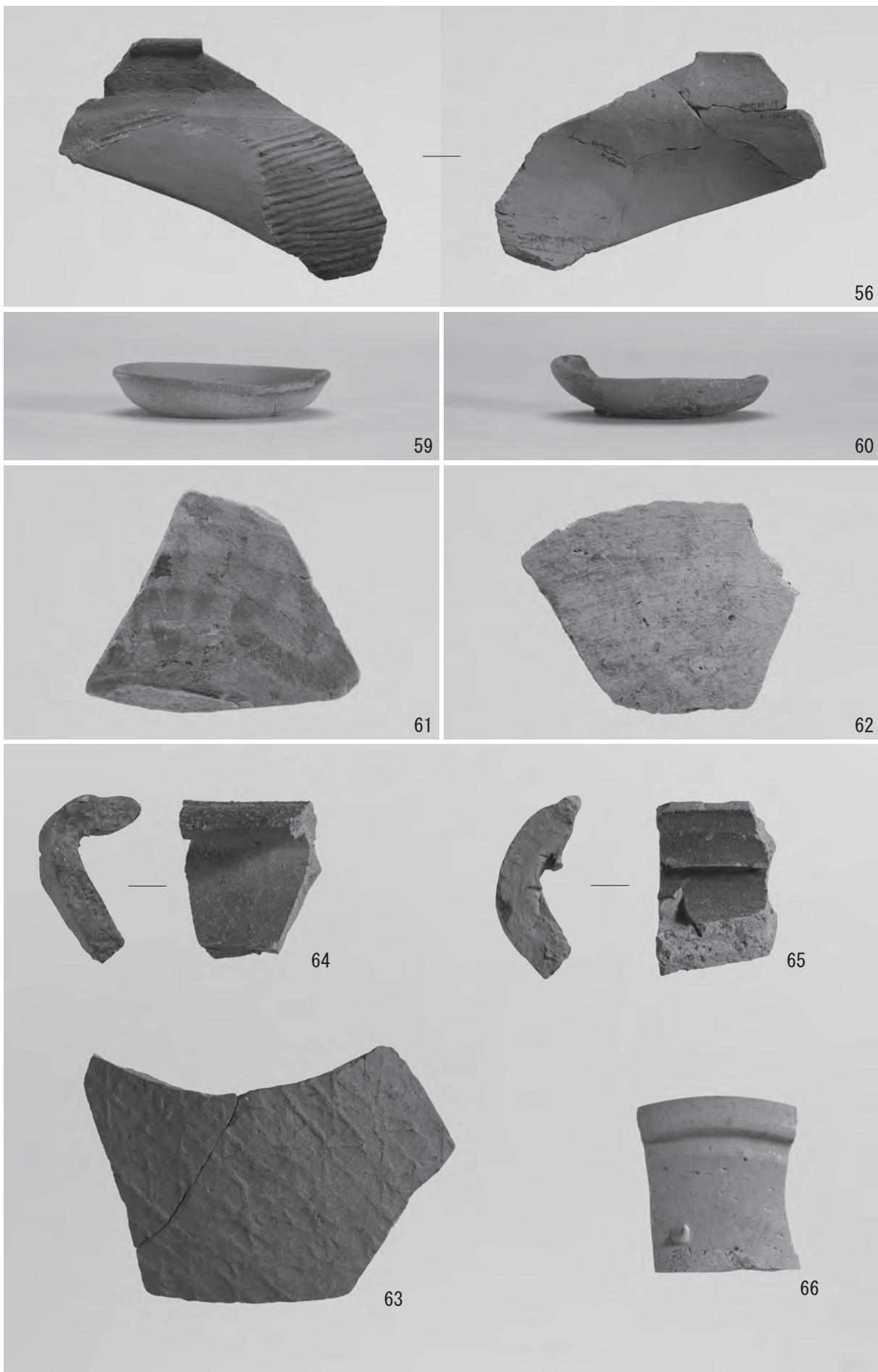
西嶋2区出土土器（3）



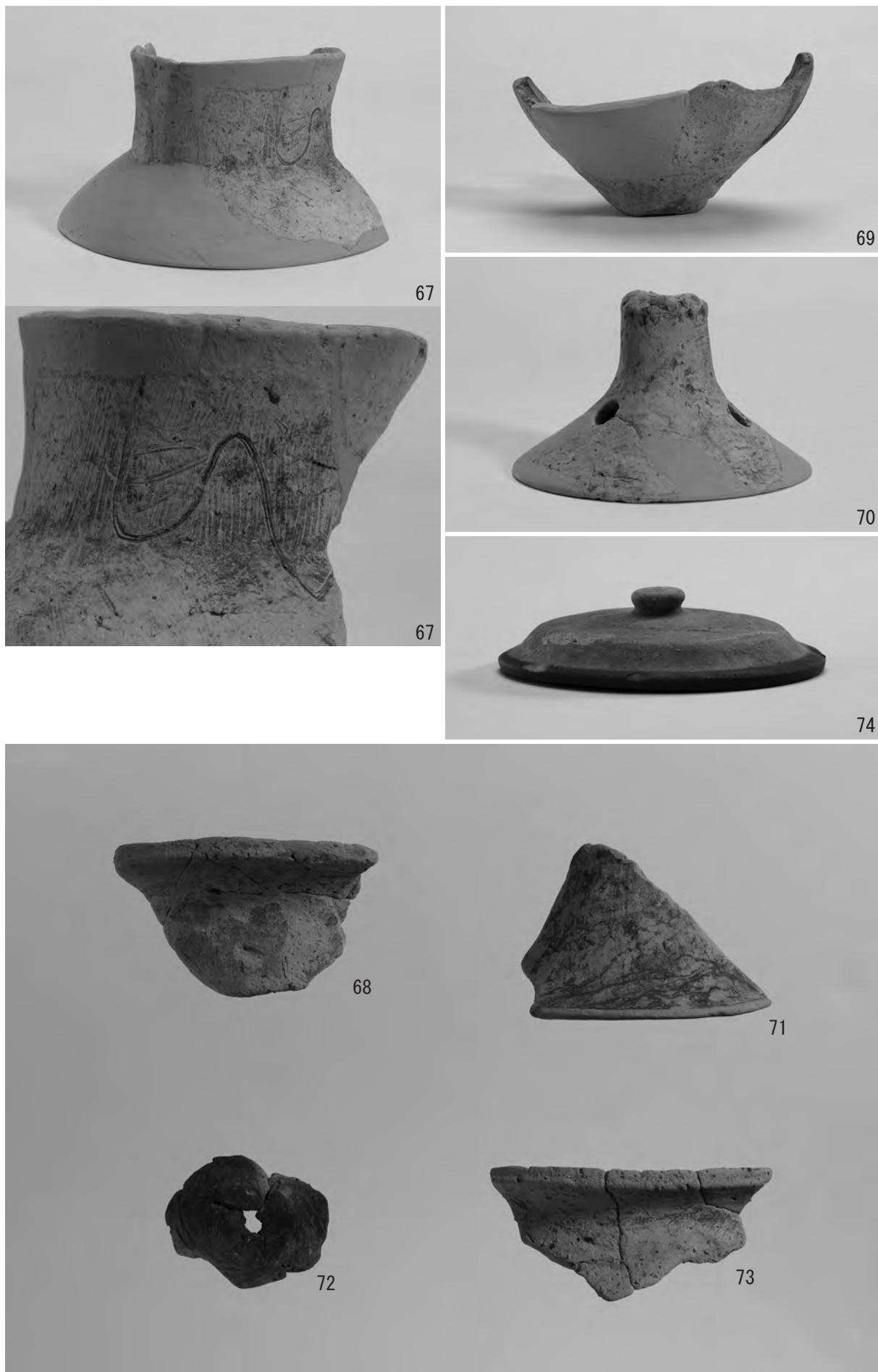
西嶋 2 区出土土器 (4)



西嶋 2 区出土土器（5）



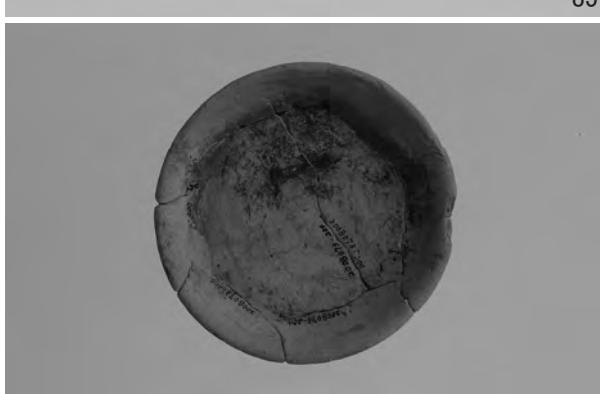
西嶋 2 区出土土器 (6)



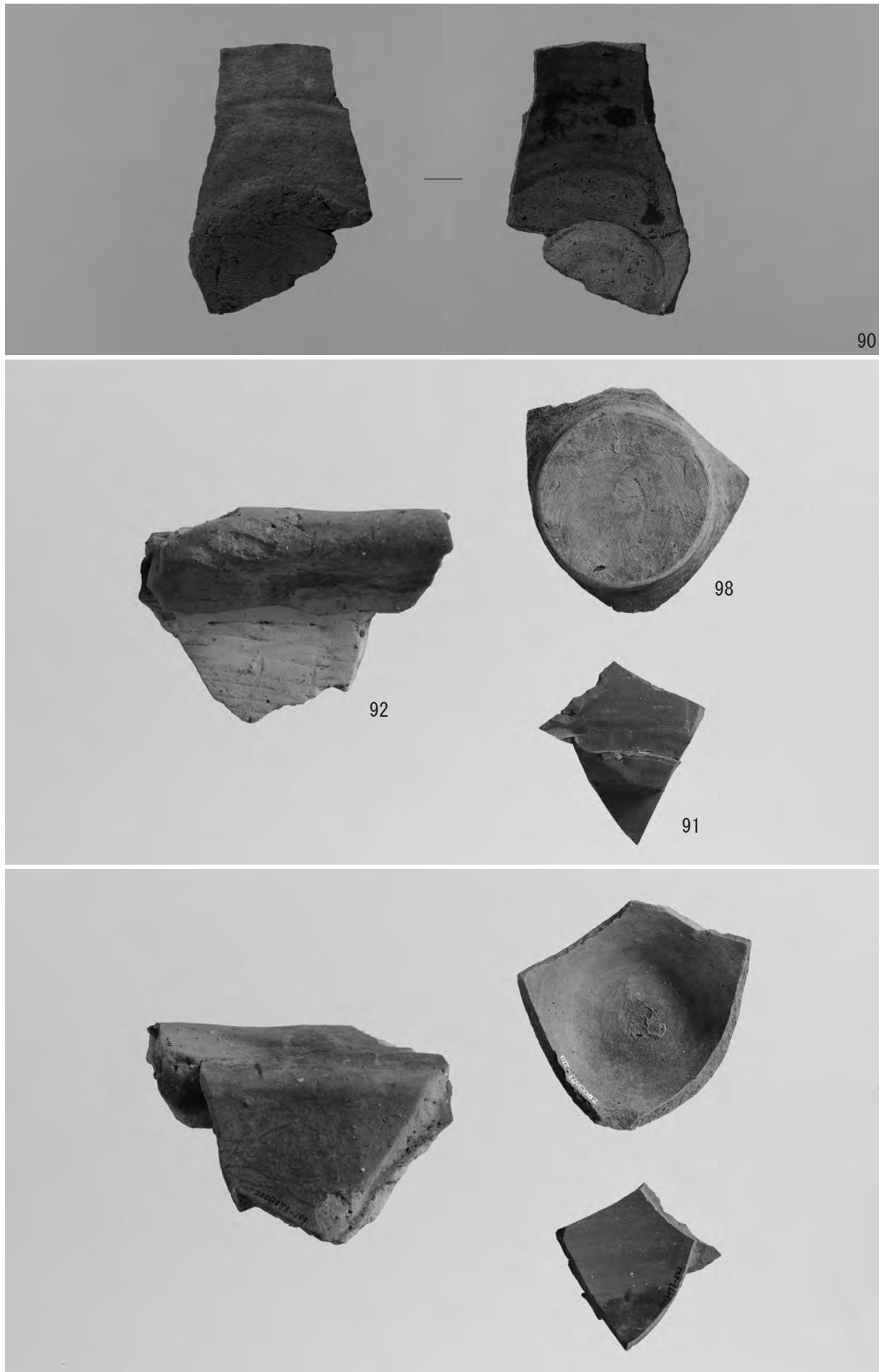
西嶋3区出土土器（1）



西嶋3区出土土器（2）



西嶋3区出土土器（3）



西嶋3区出土土器（4）



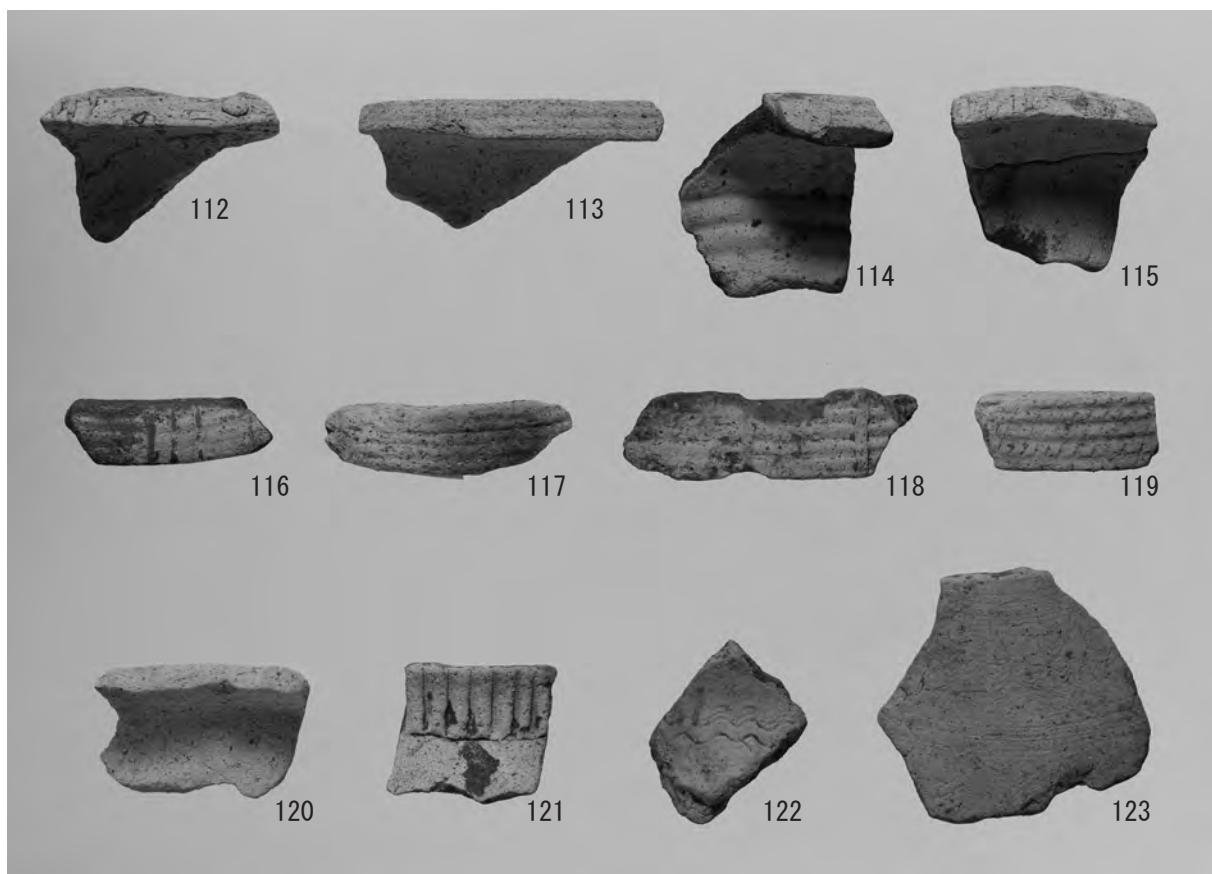
西嶋3区



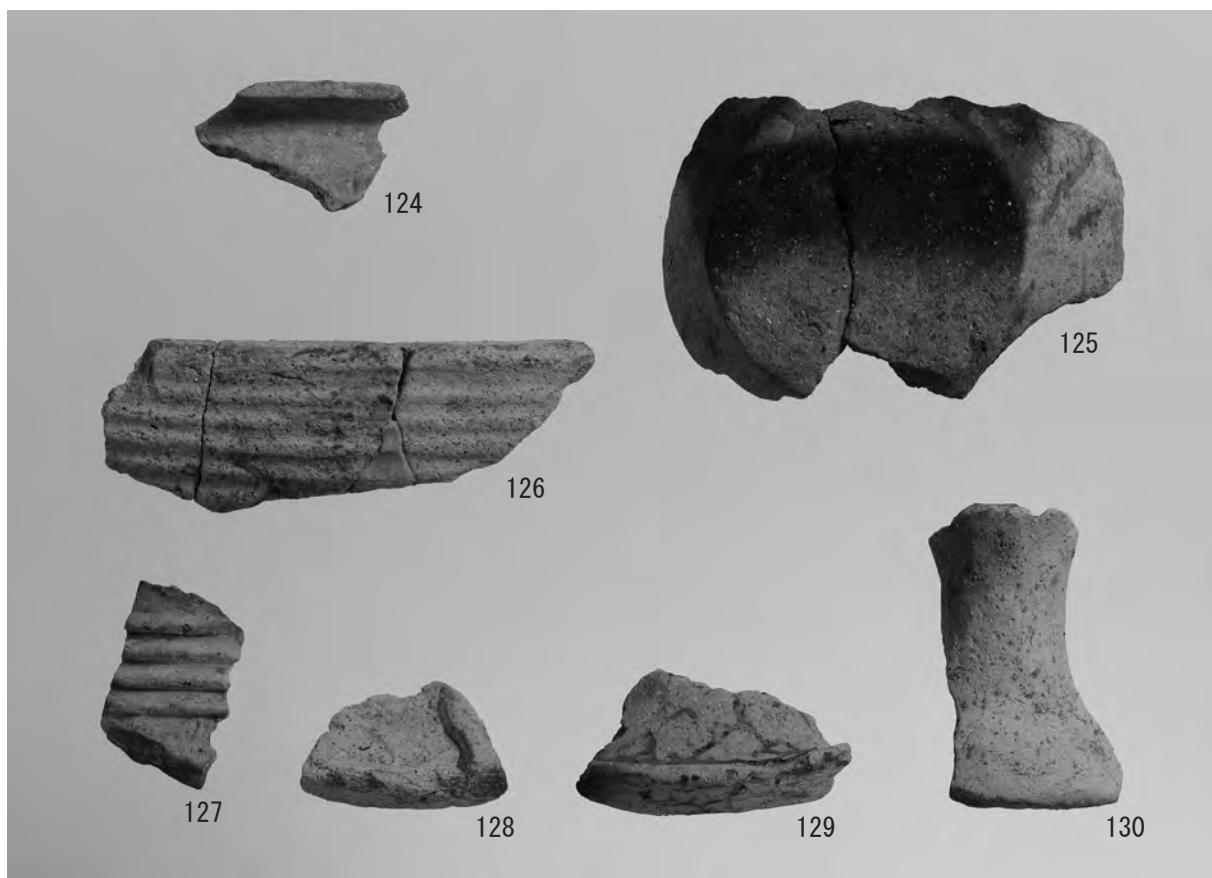
西嶋3区出土土器（5）



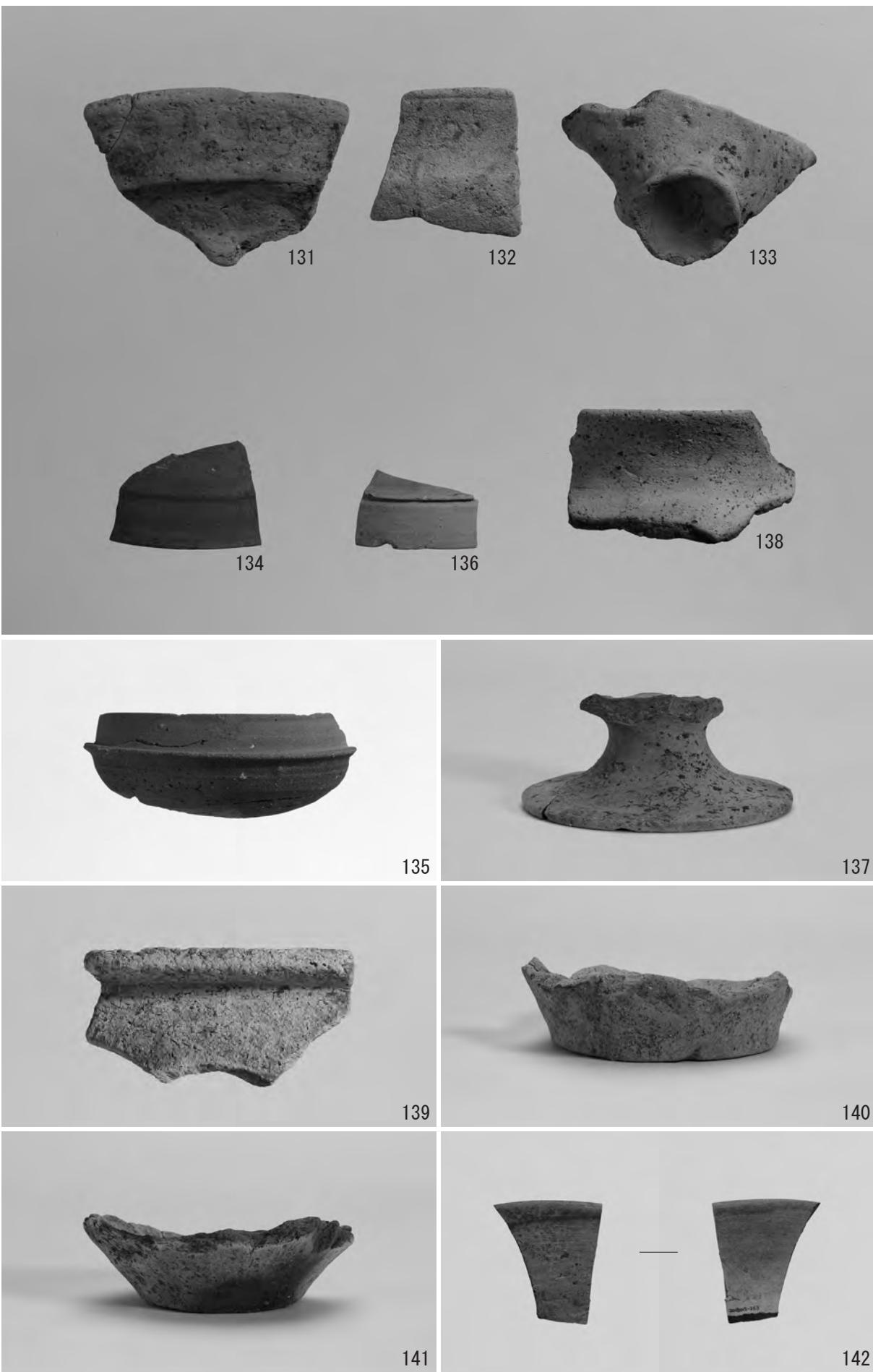
西嶋4W区出土土器（1）



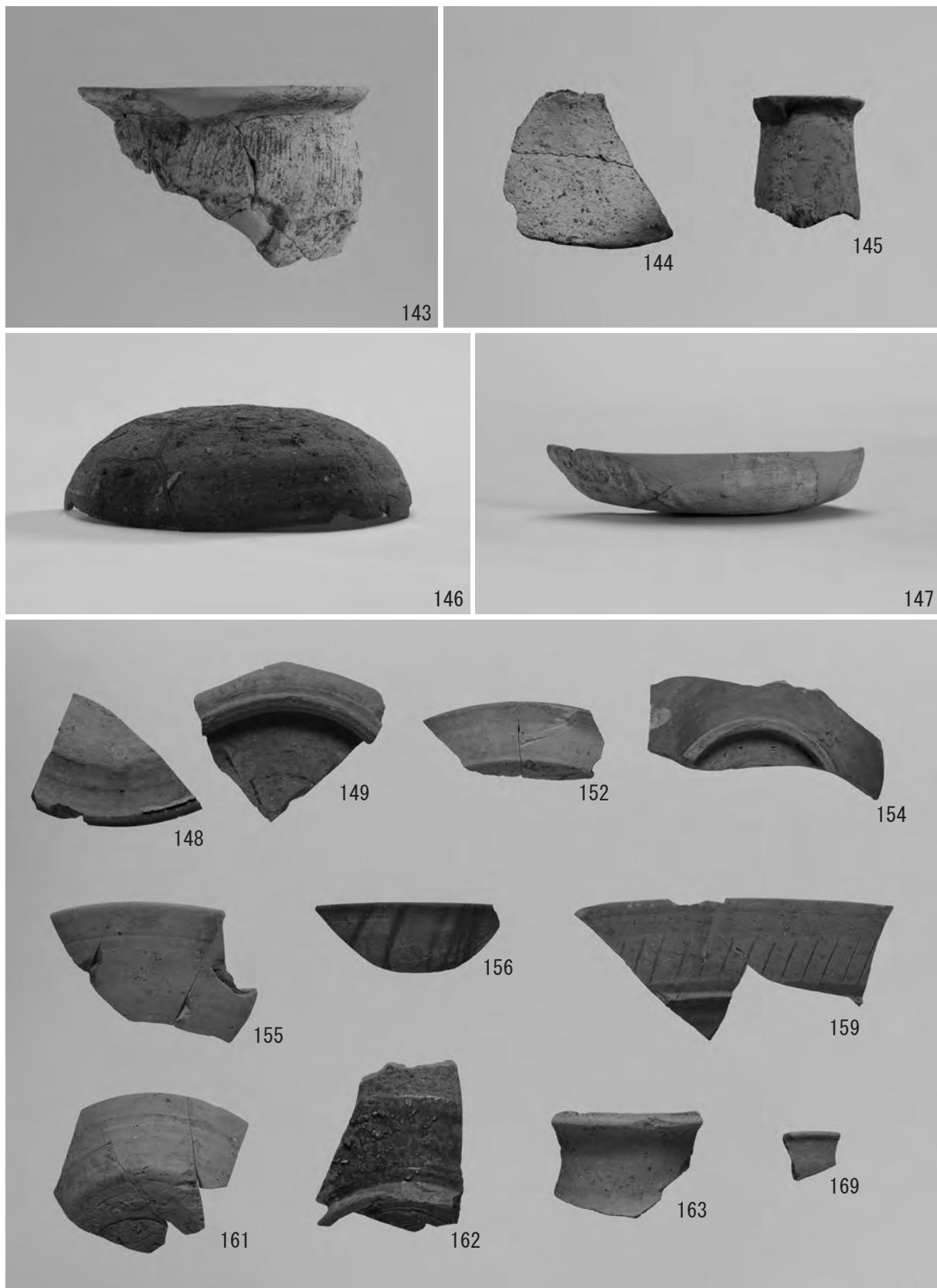
西嶋
4W
区



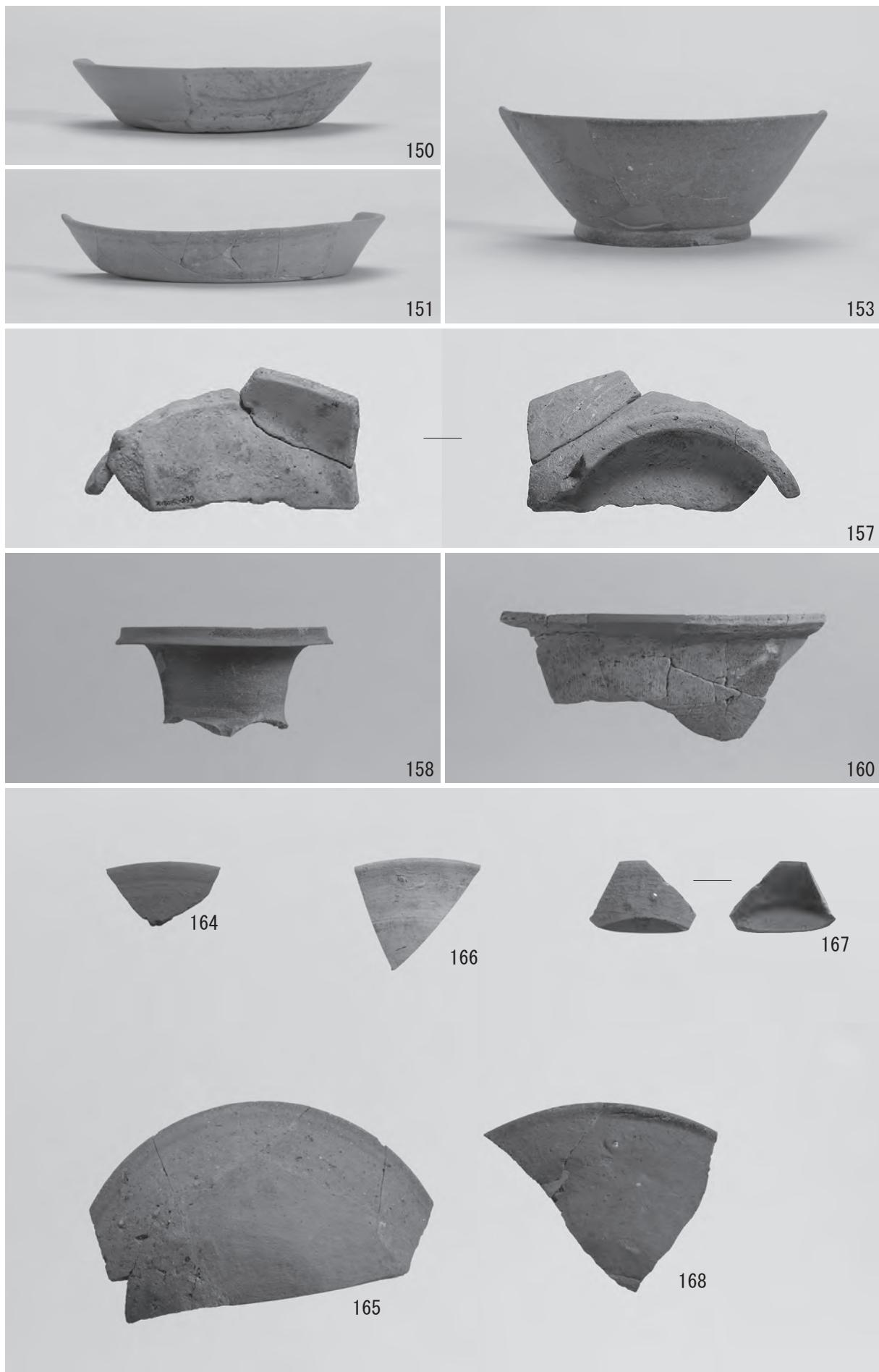
西嶋 4 W区出土土器 (2)



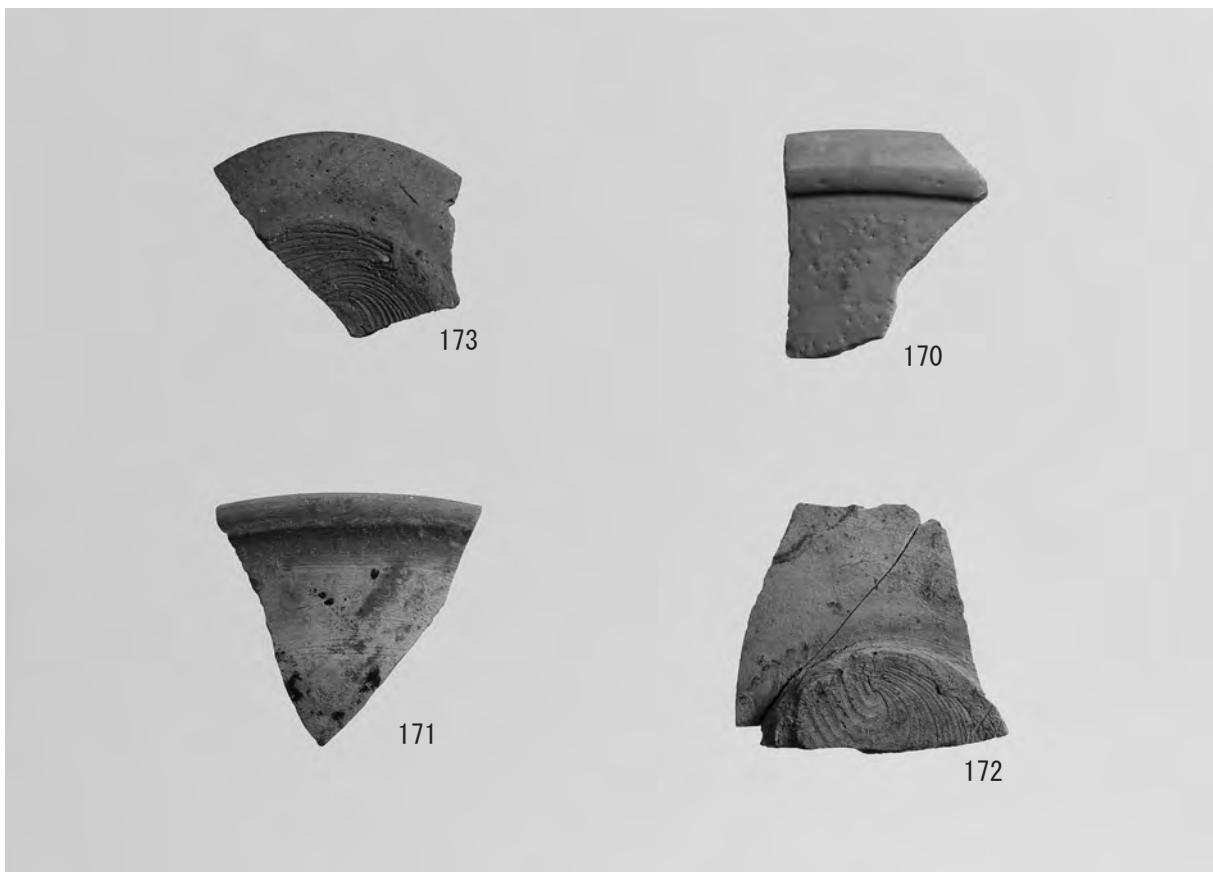
西嶋4W区出土土器(3)



西嶋 4W区出土土器 (4)



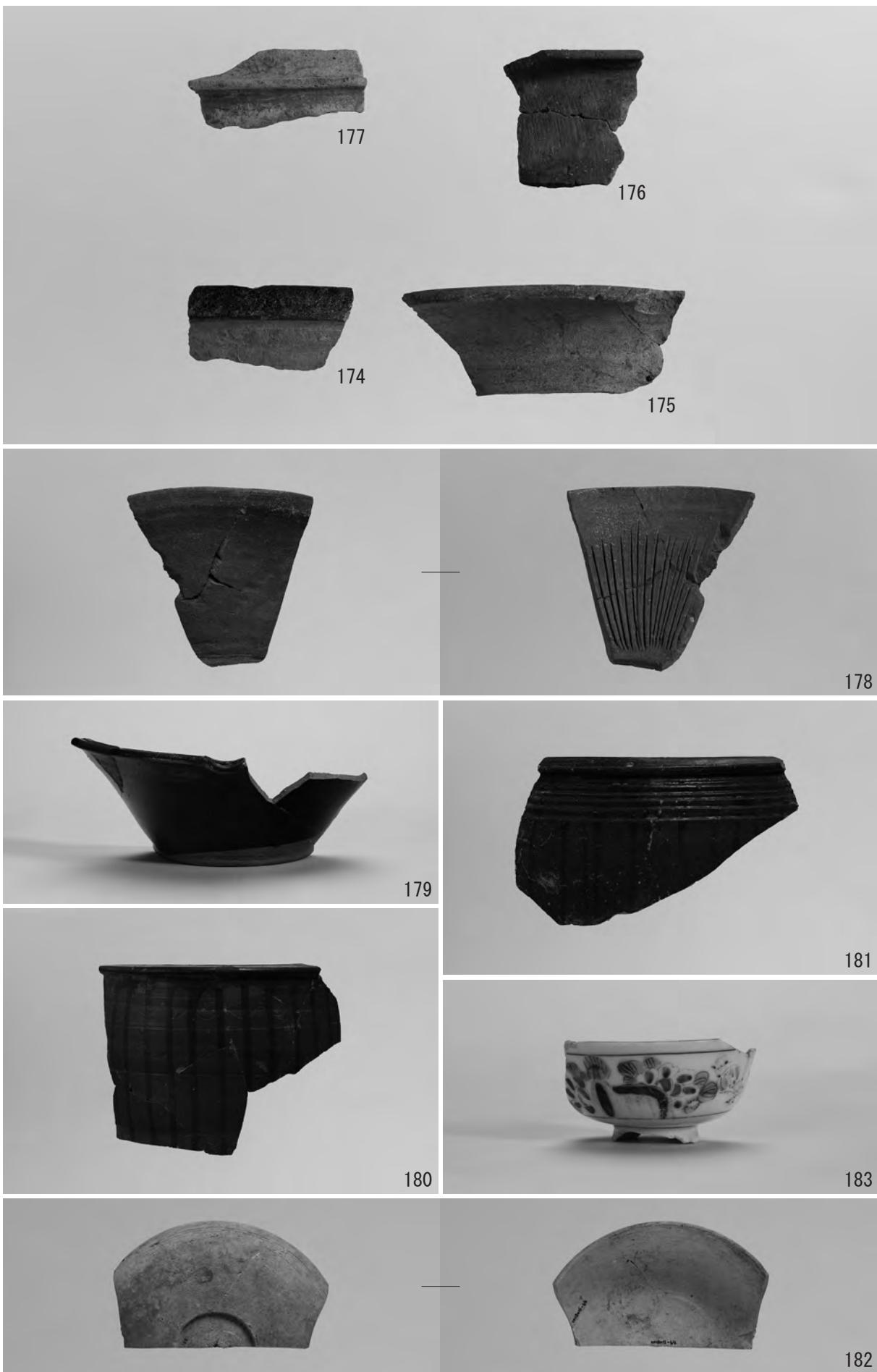
西嶋4W区出土土器(5)



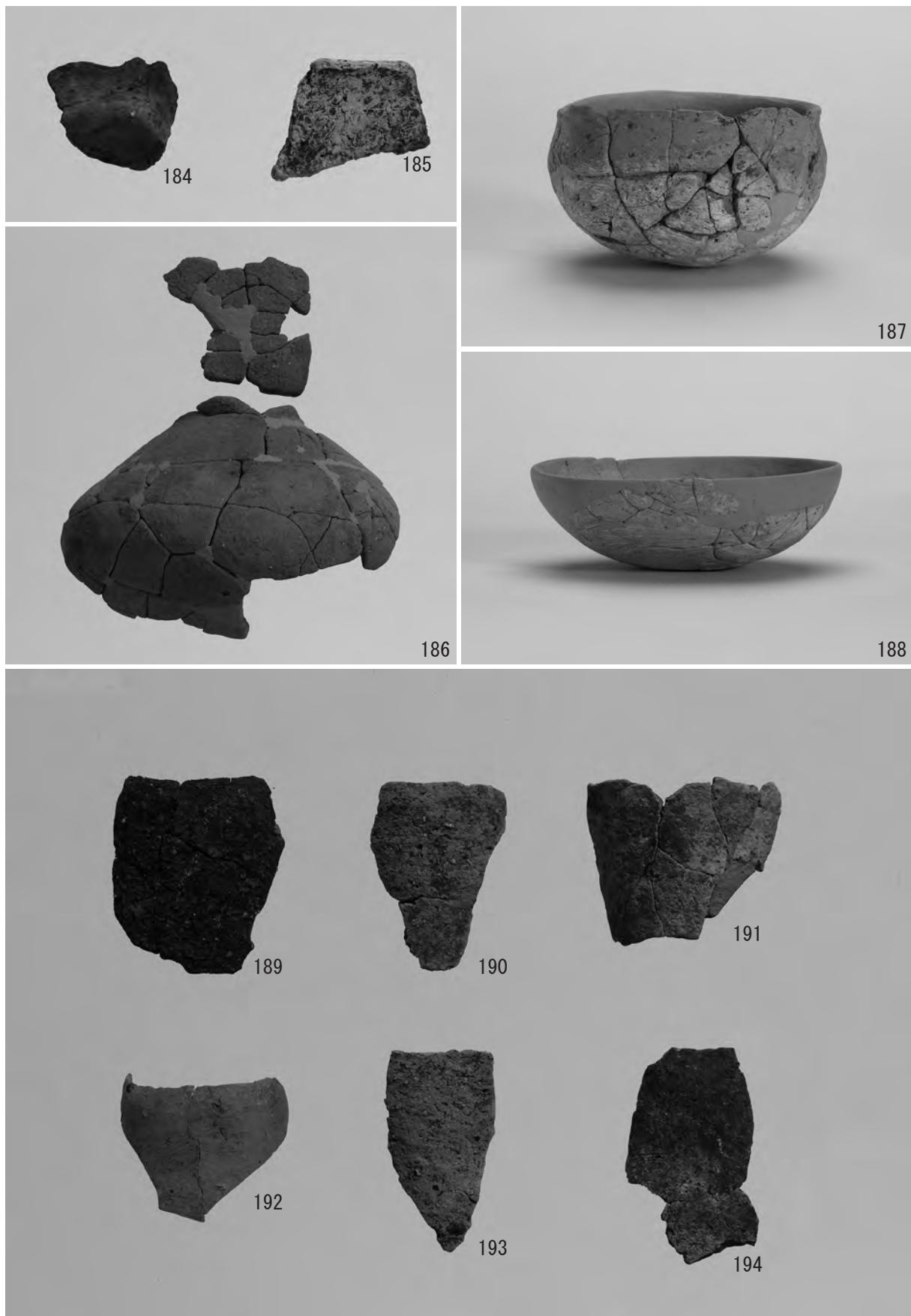
西嶋
4W
区



西嶋 4 W区出土土器 (6)



西嶋 4 W区出土土器 (7)



西嶋4E区出土土器(1)



195



196



197



198



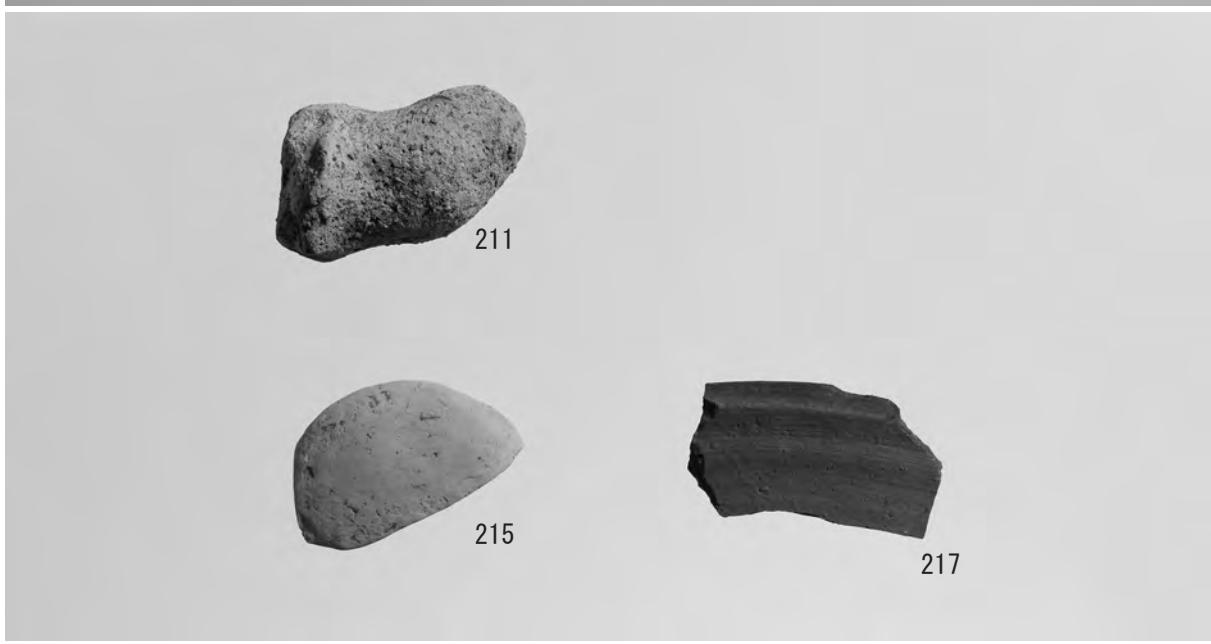
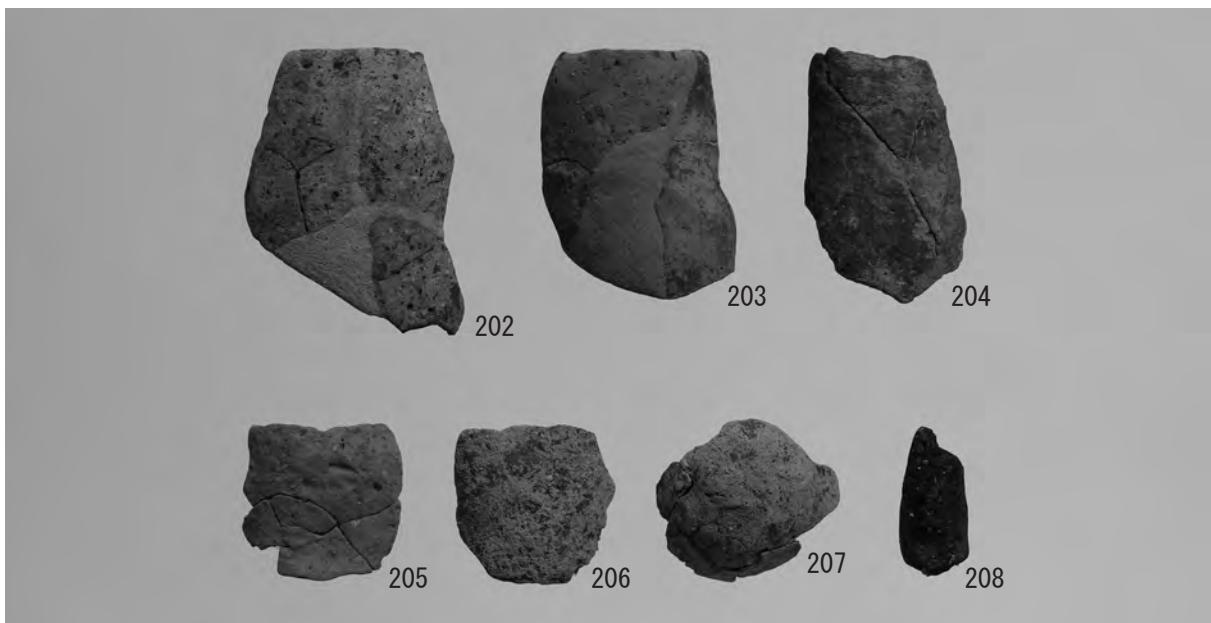
200



199



201



西嶋4E区

西嶋4E区出土土器(3)



209



210



212



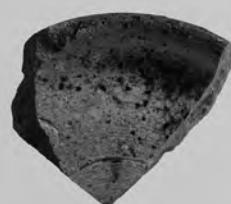
214



213



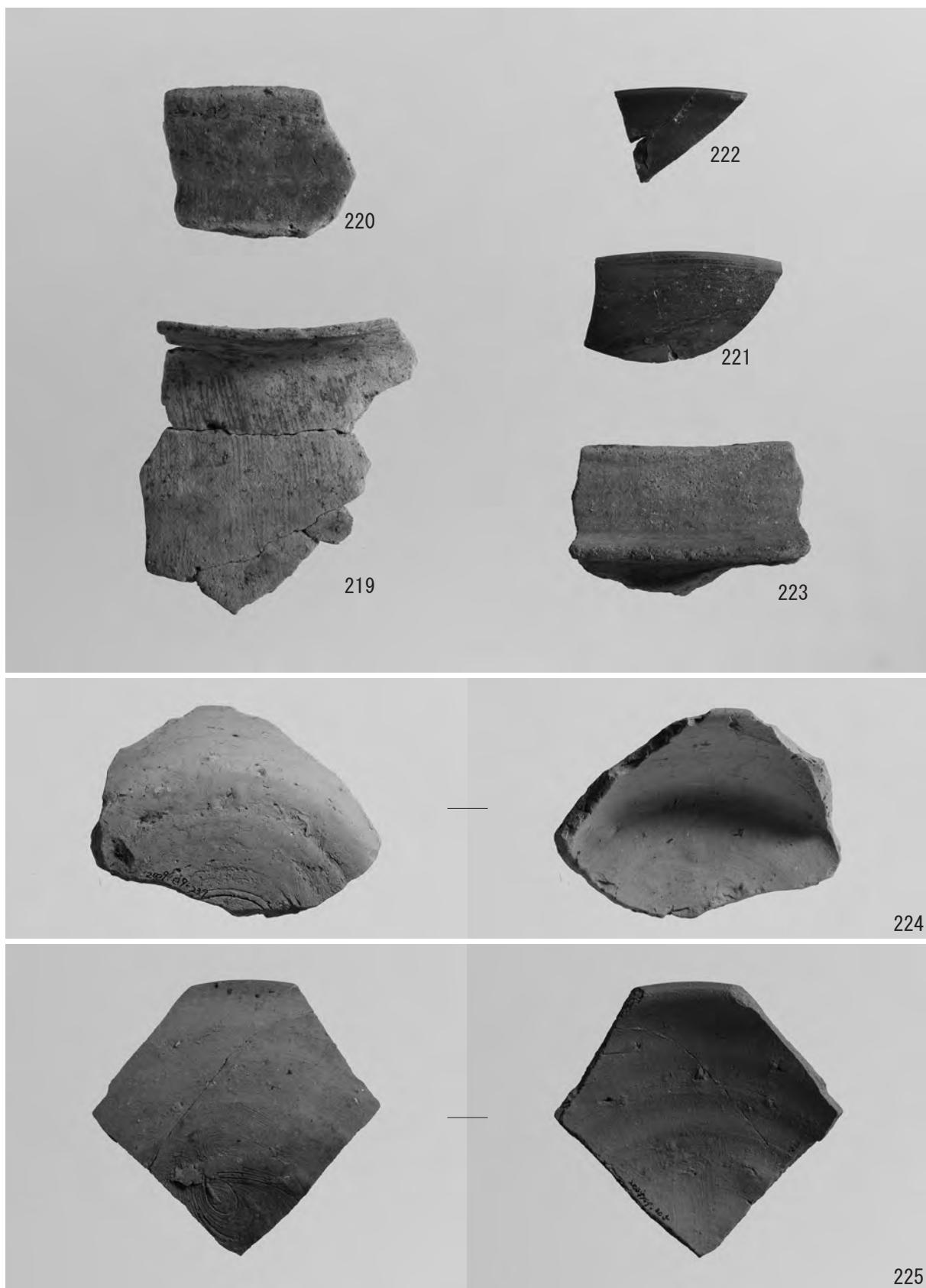
—



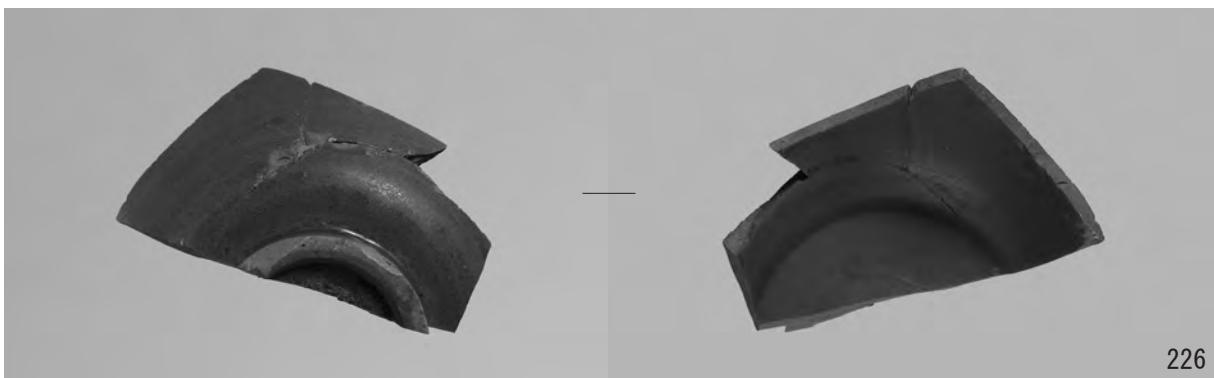
216



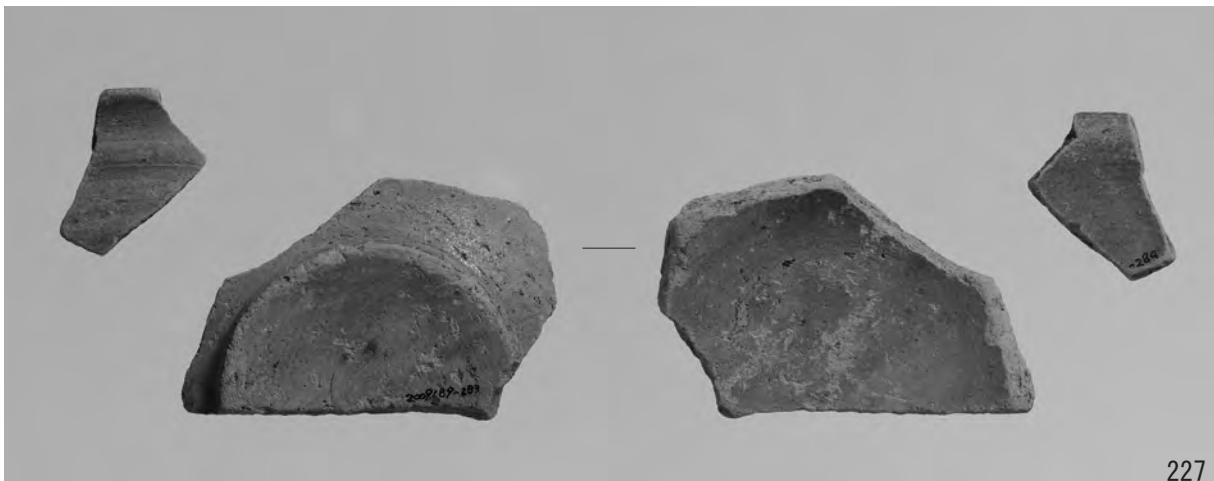
218



西嶋4E区出土土器(5)



226



227



228



230



231



232



229

西嶋 4 E 区出土土器 (6)



233



234



235



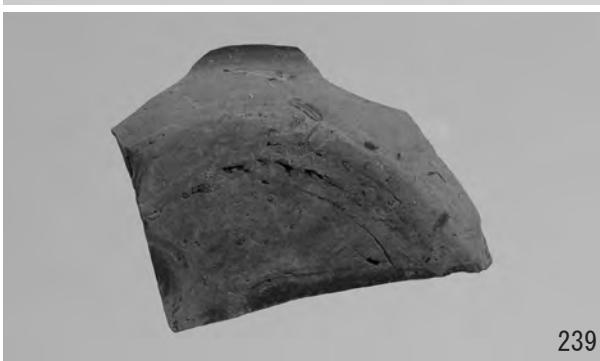
236



238



237



239



241



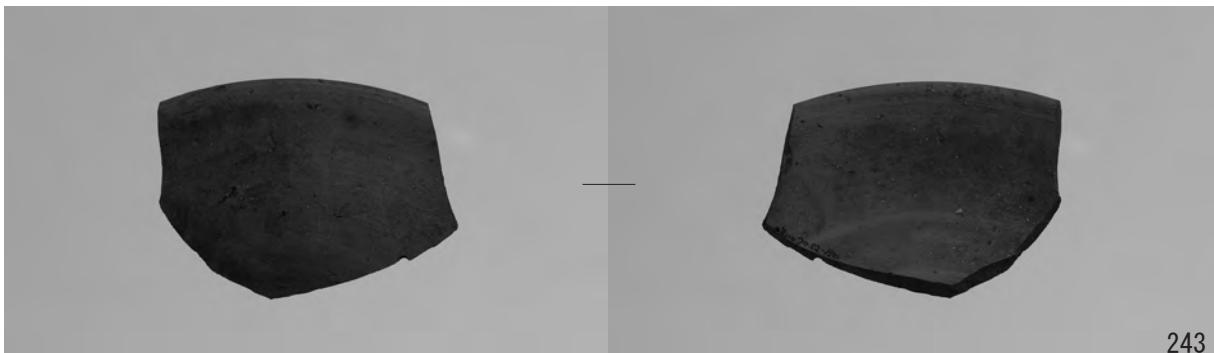
240

西嶋5区

西嶋6区



242



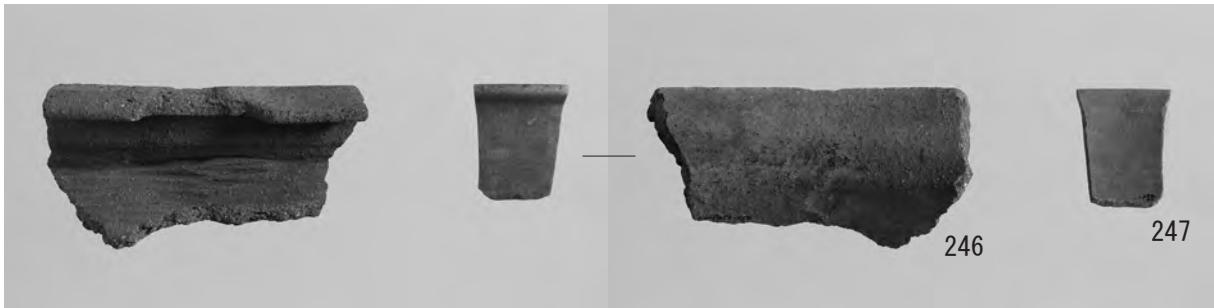
243



244



245



246

247



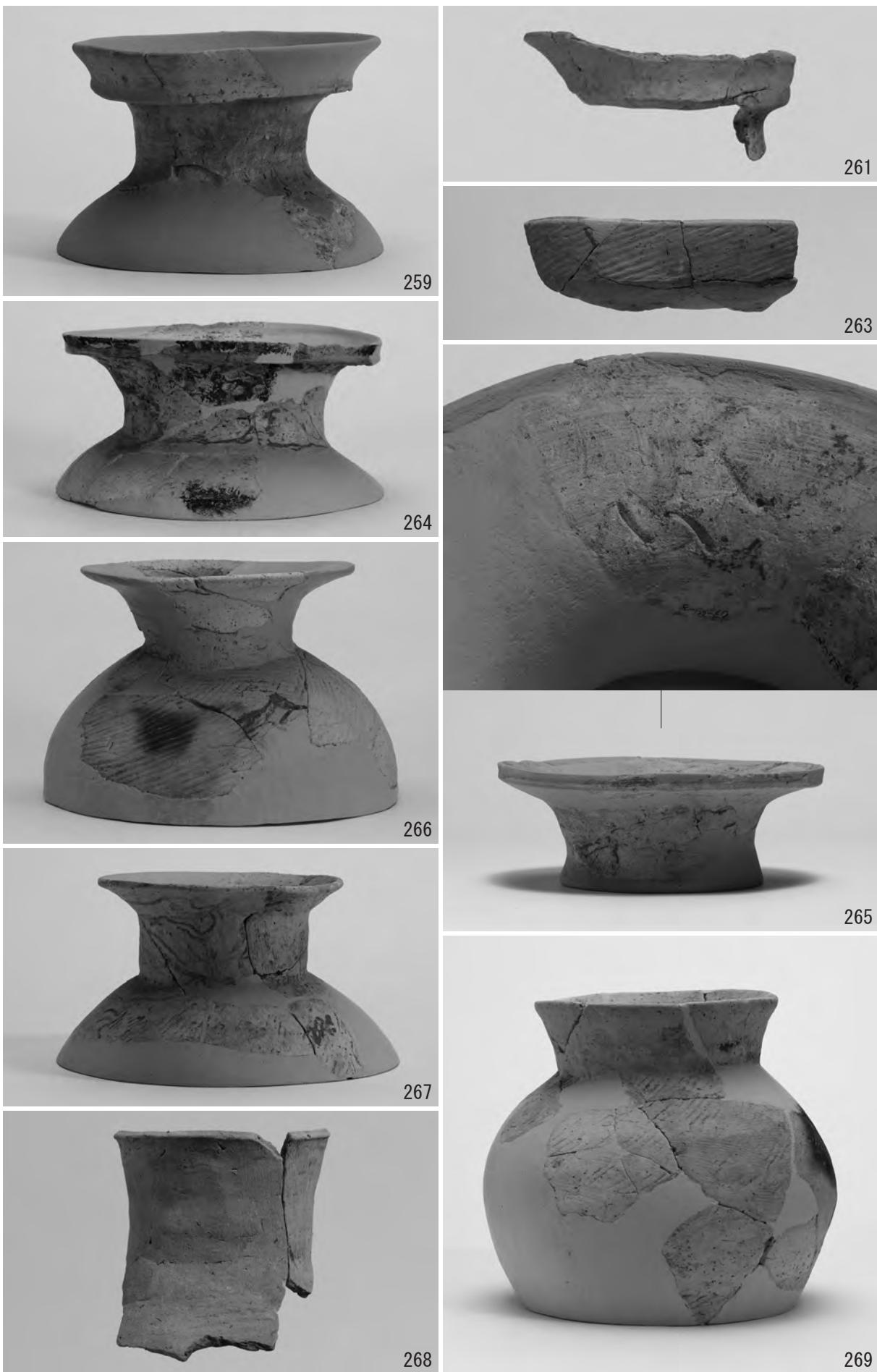
248

西嶋 6 区出土土器（2）

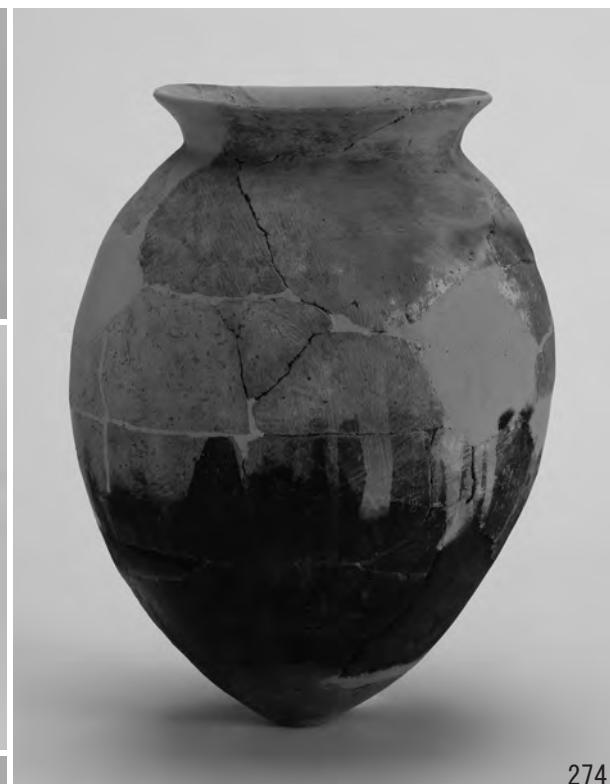


鳴
1
区

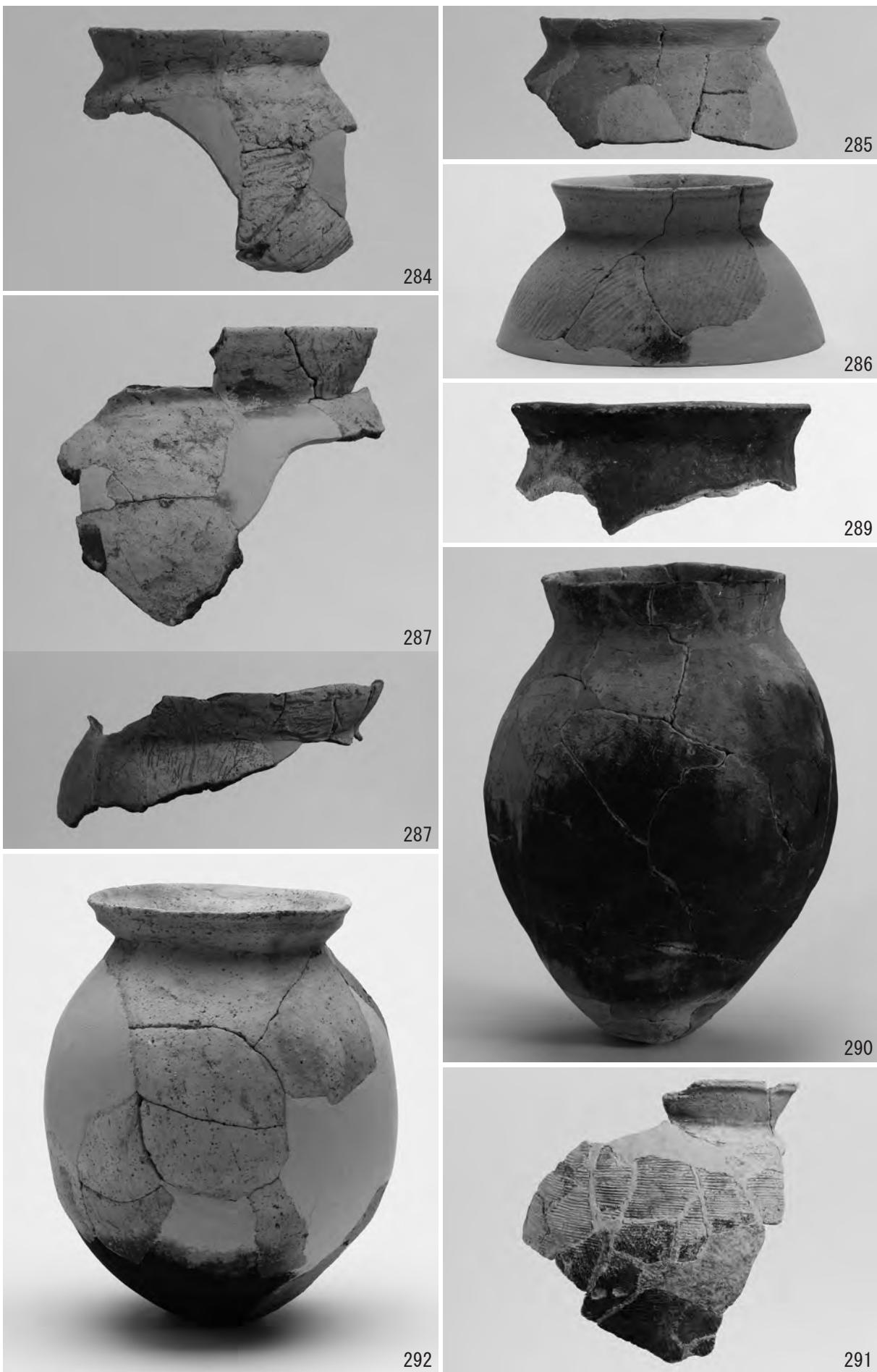
鳴 1 区出土土器

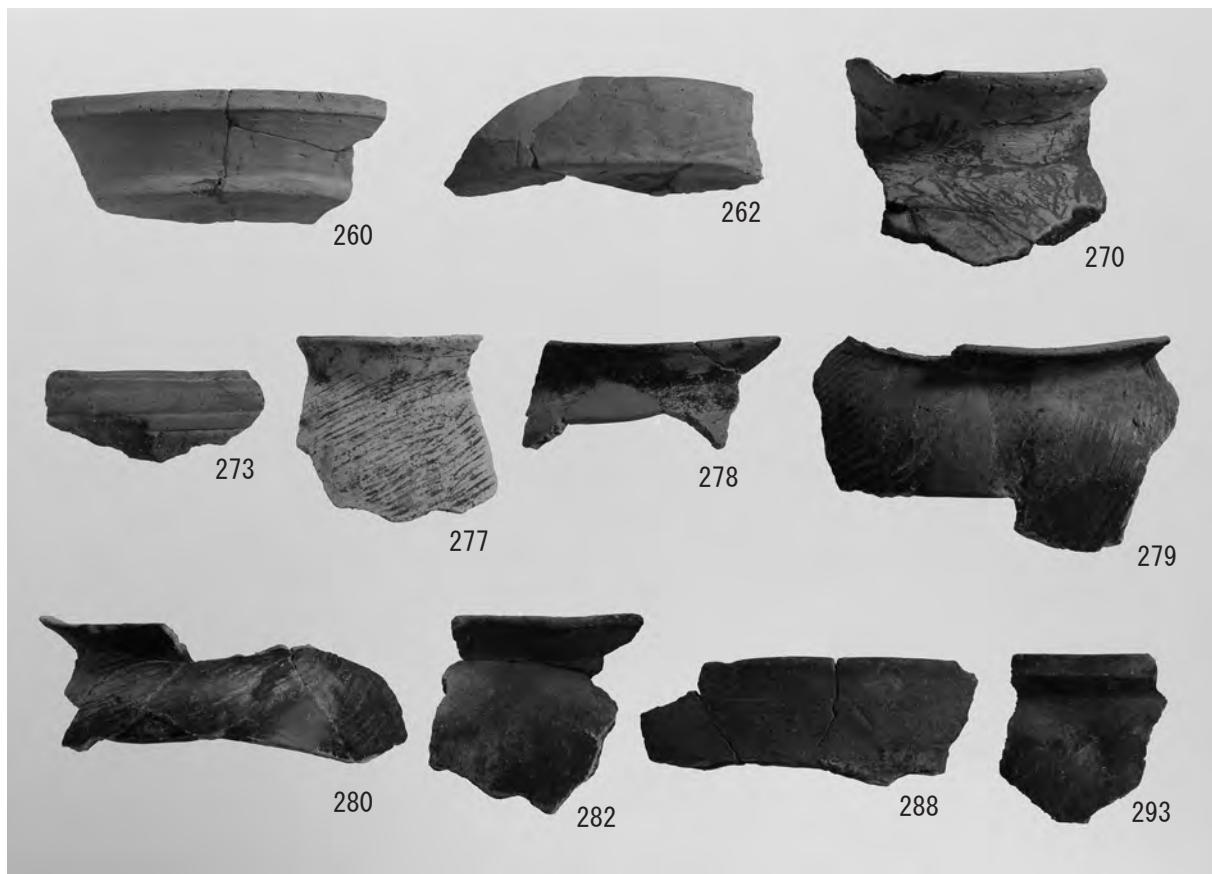


鳴 2 区出土土器 (1)



鳴 2 区出土土器（2）

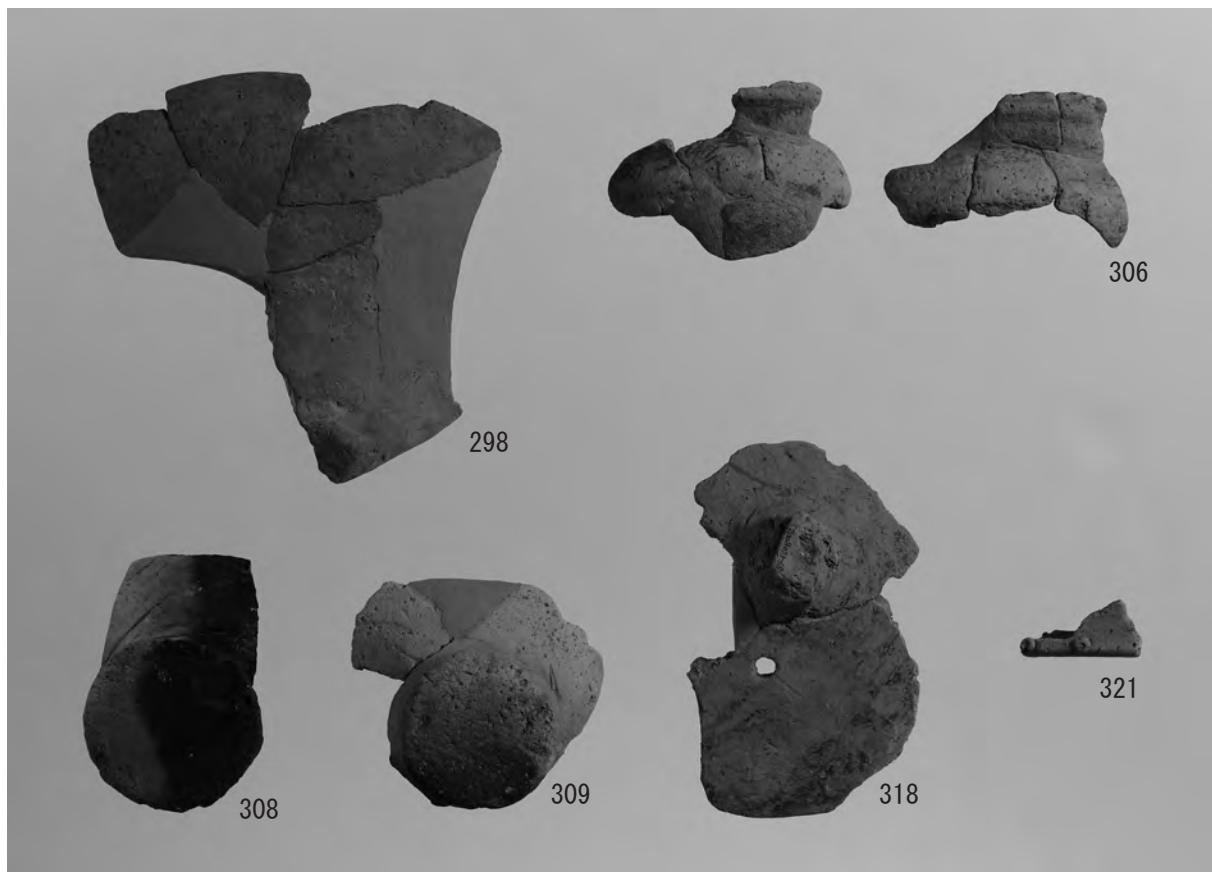




鳴 2 区出土土器 (4)

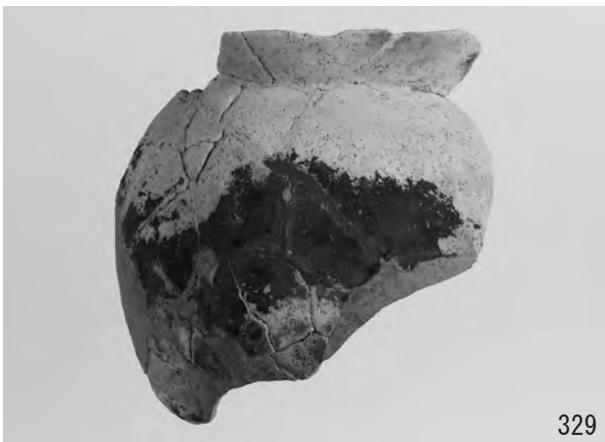
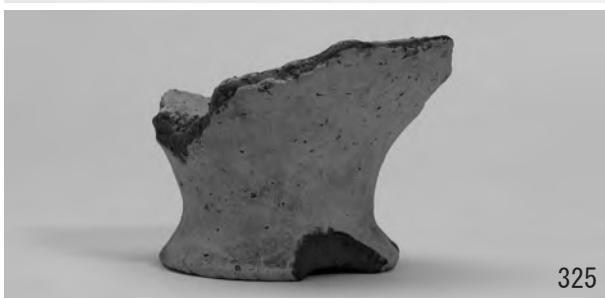
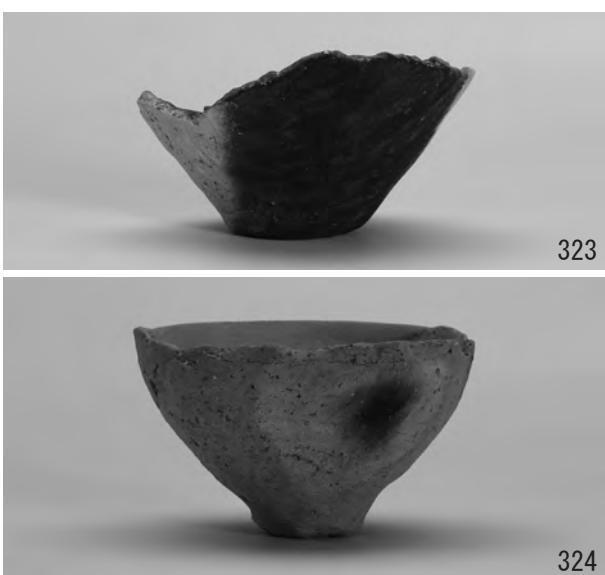


鳴 2 区出土土器 (5)



鳴2区

鳴2区出土土器（6）

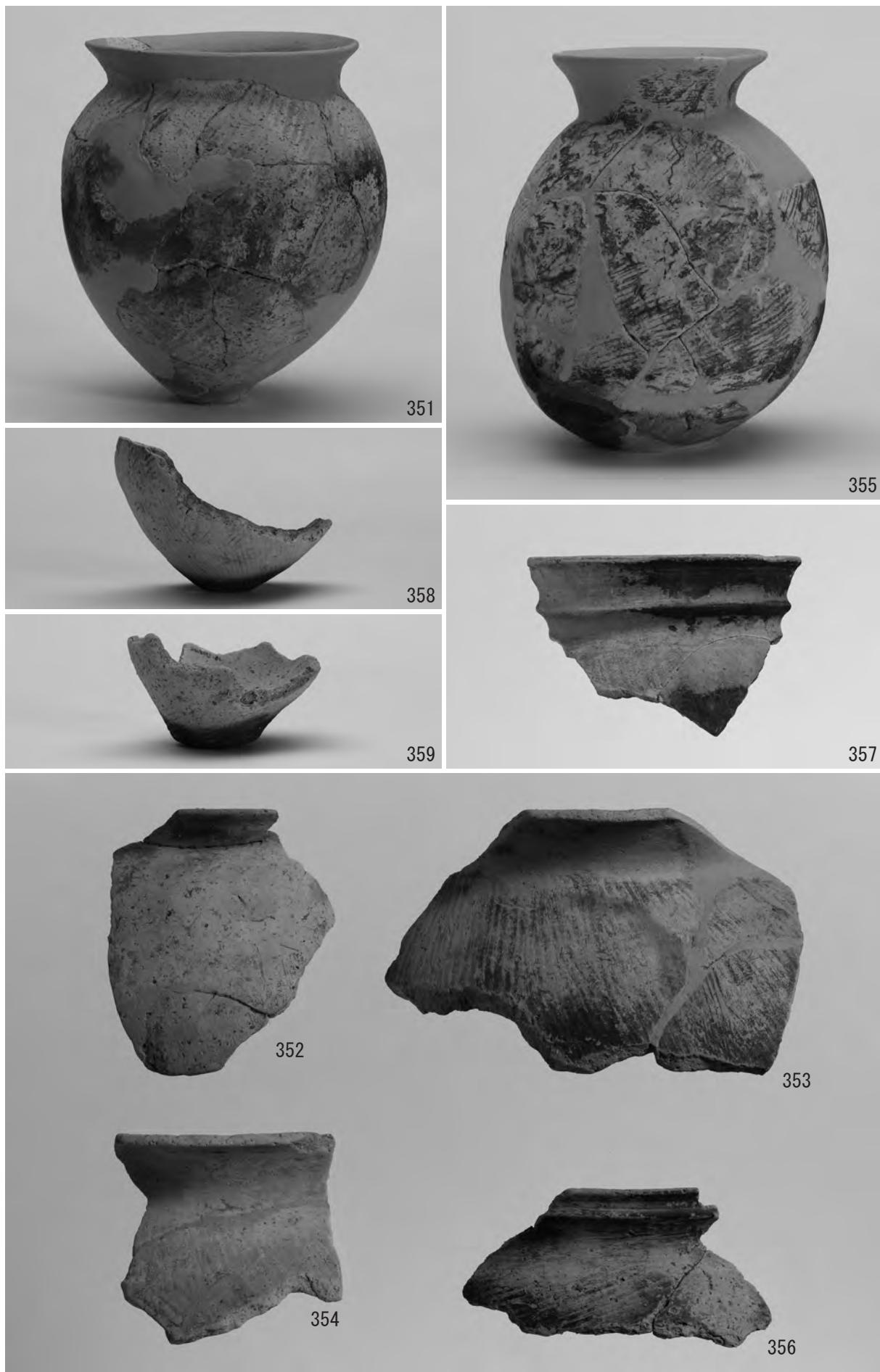


鳴2区出土土器(7)



鳴2区出土土器（8）





鳴 2 区出土土器 (10)

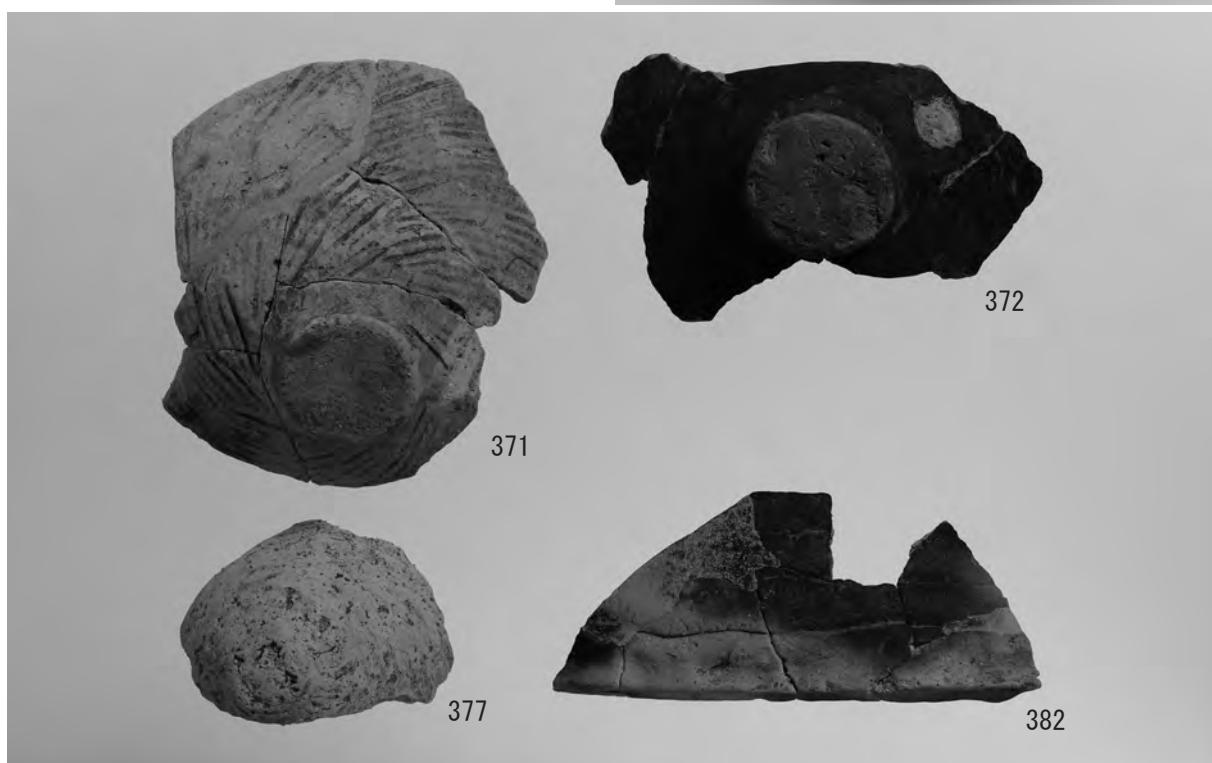




369



370



371

372



377



382

375

島2区



島 2 区出土土器 (13)



383



384



385



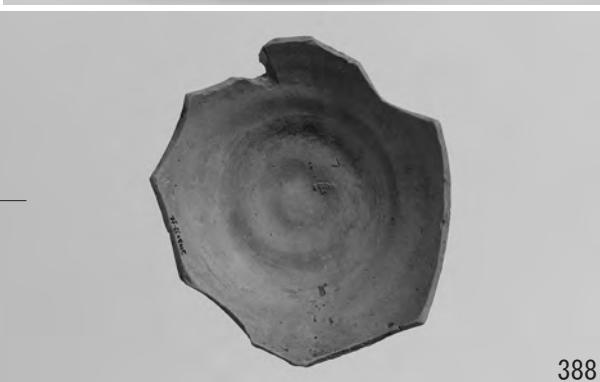
386



387



388

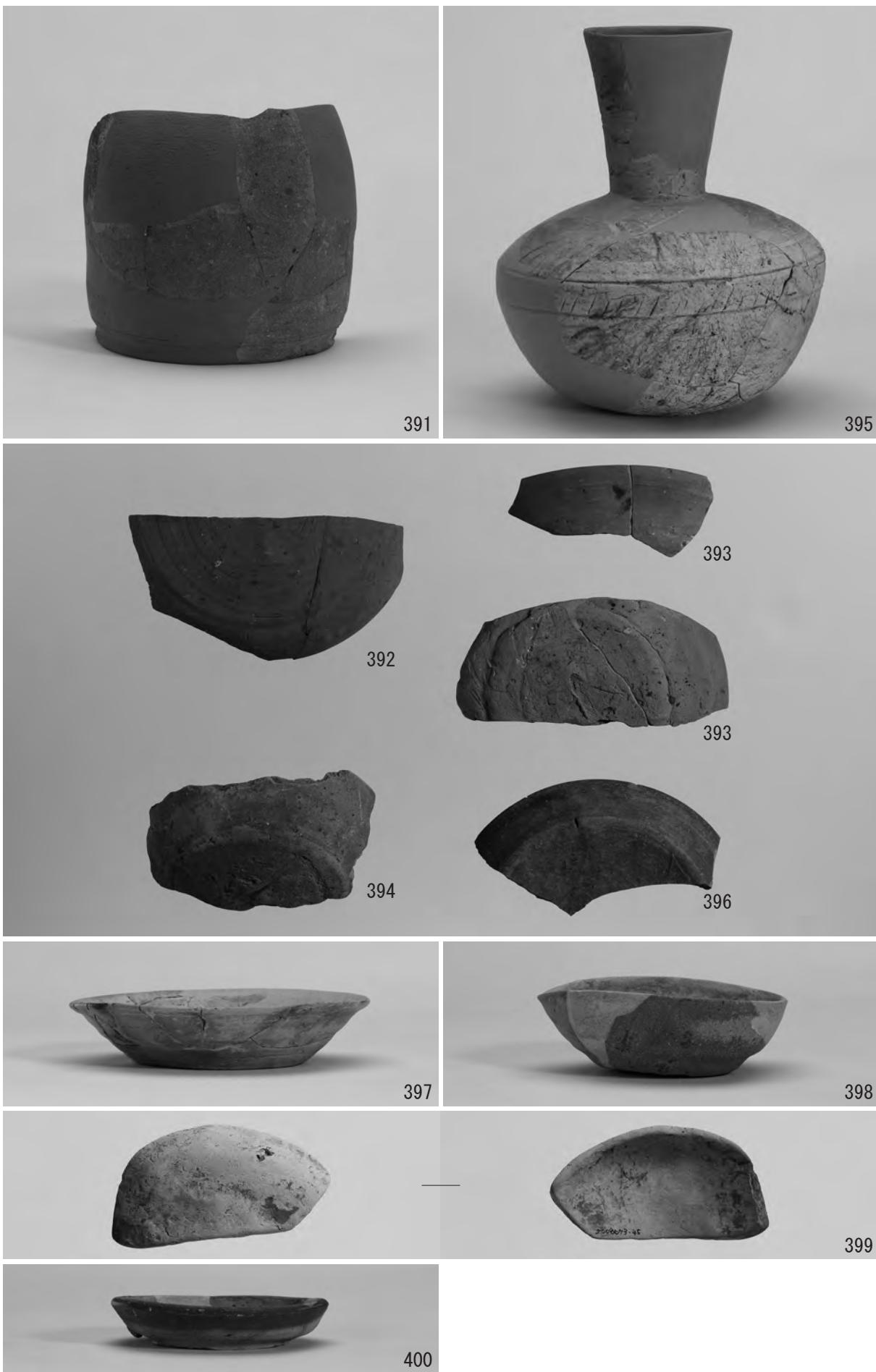


389



390

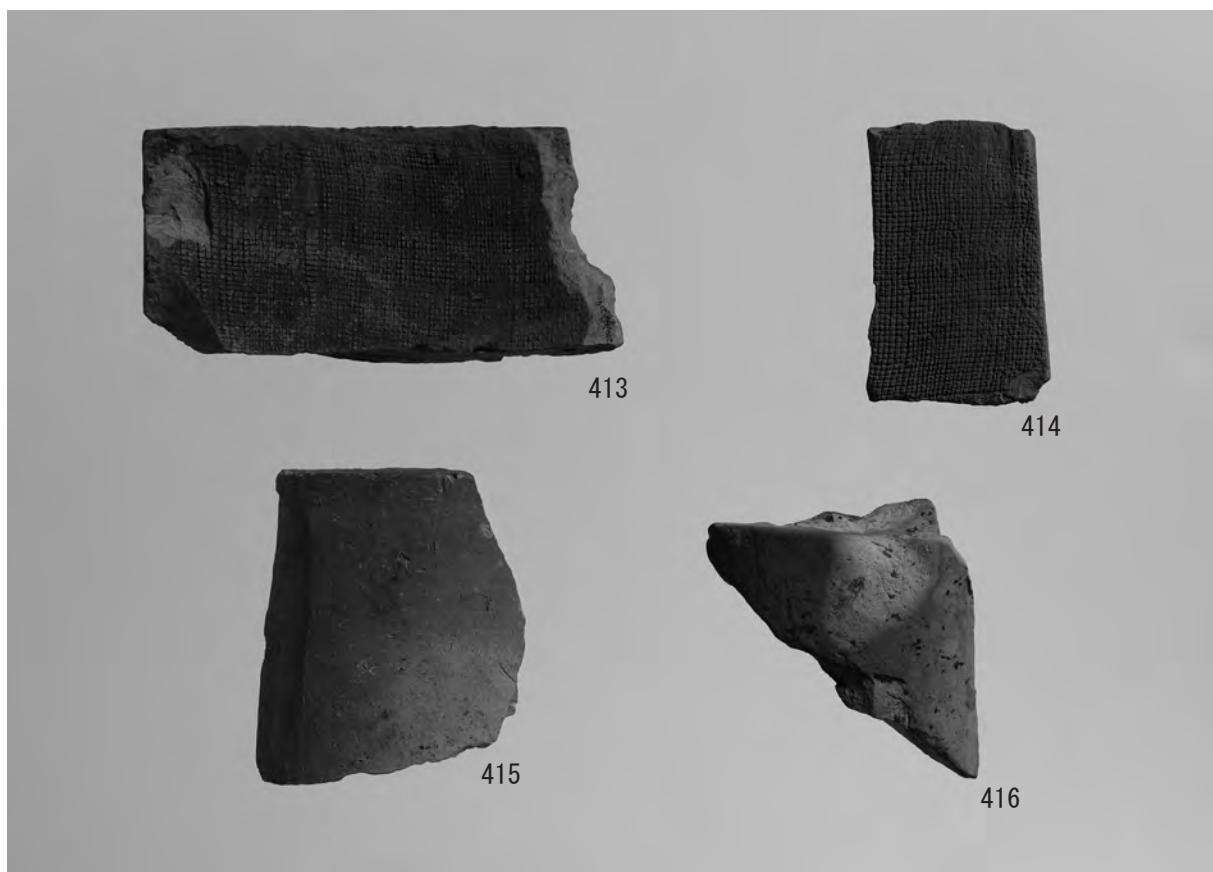
島2区



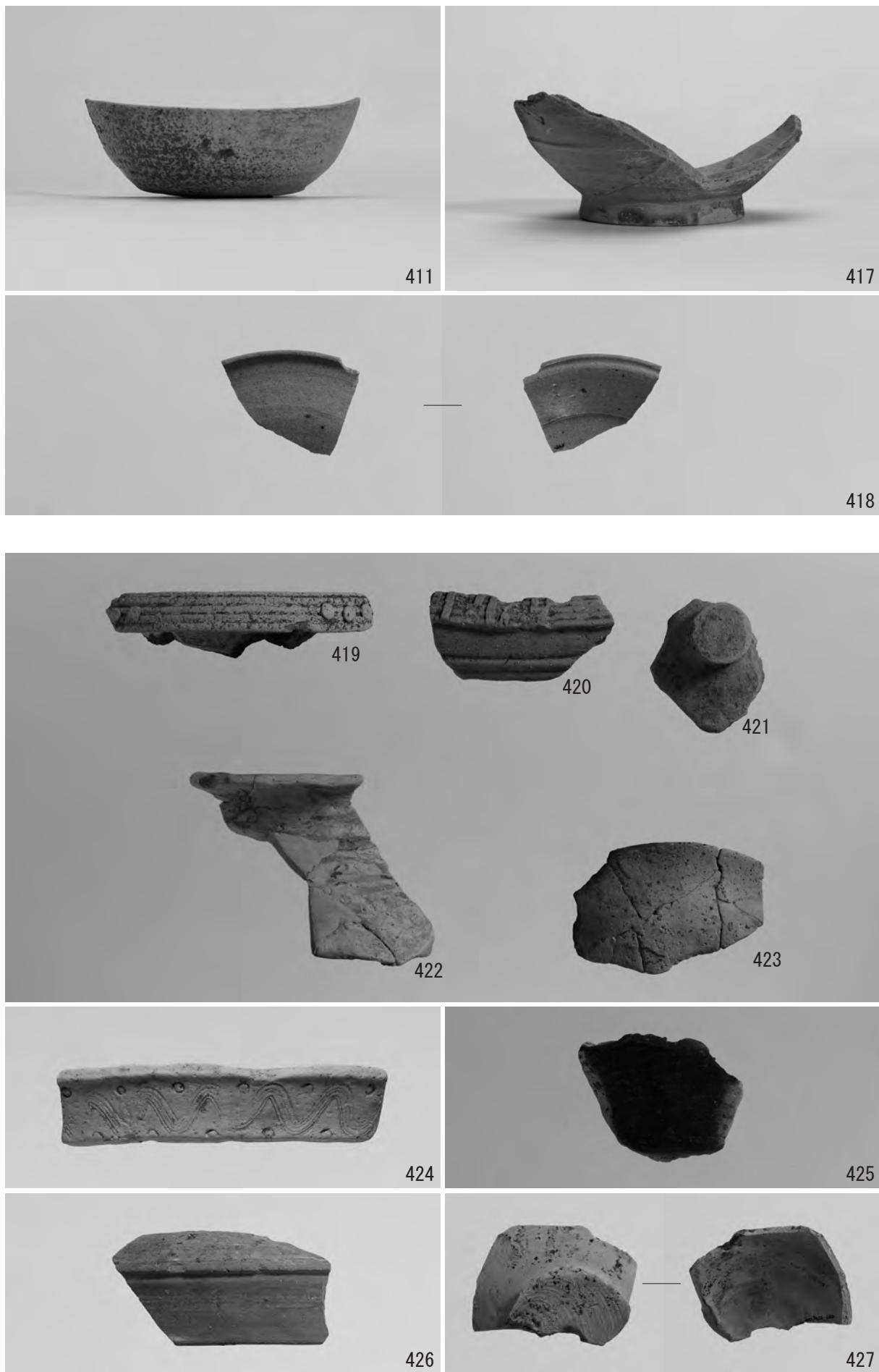
鳴 2 区出土土器 (15)



島 3 区出土土器（1）



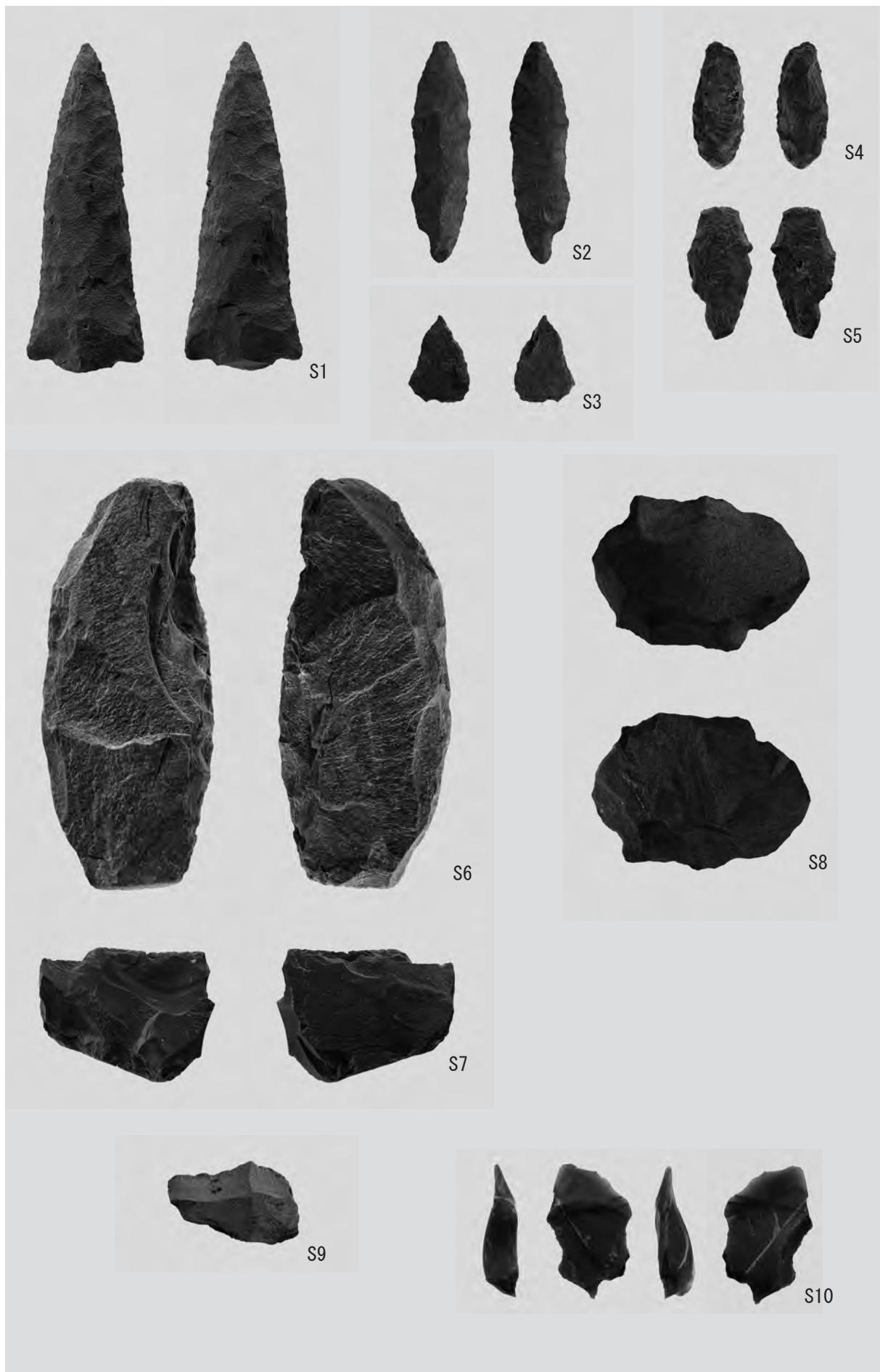
鳴3区出土土器（2）



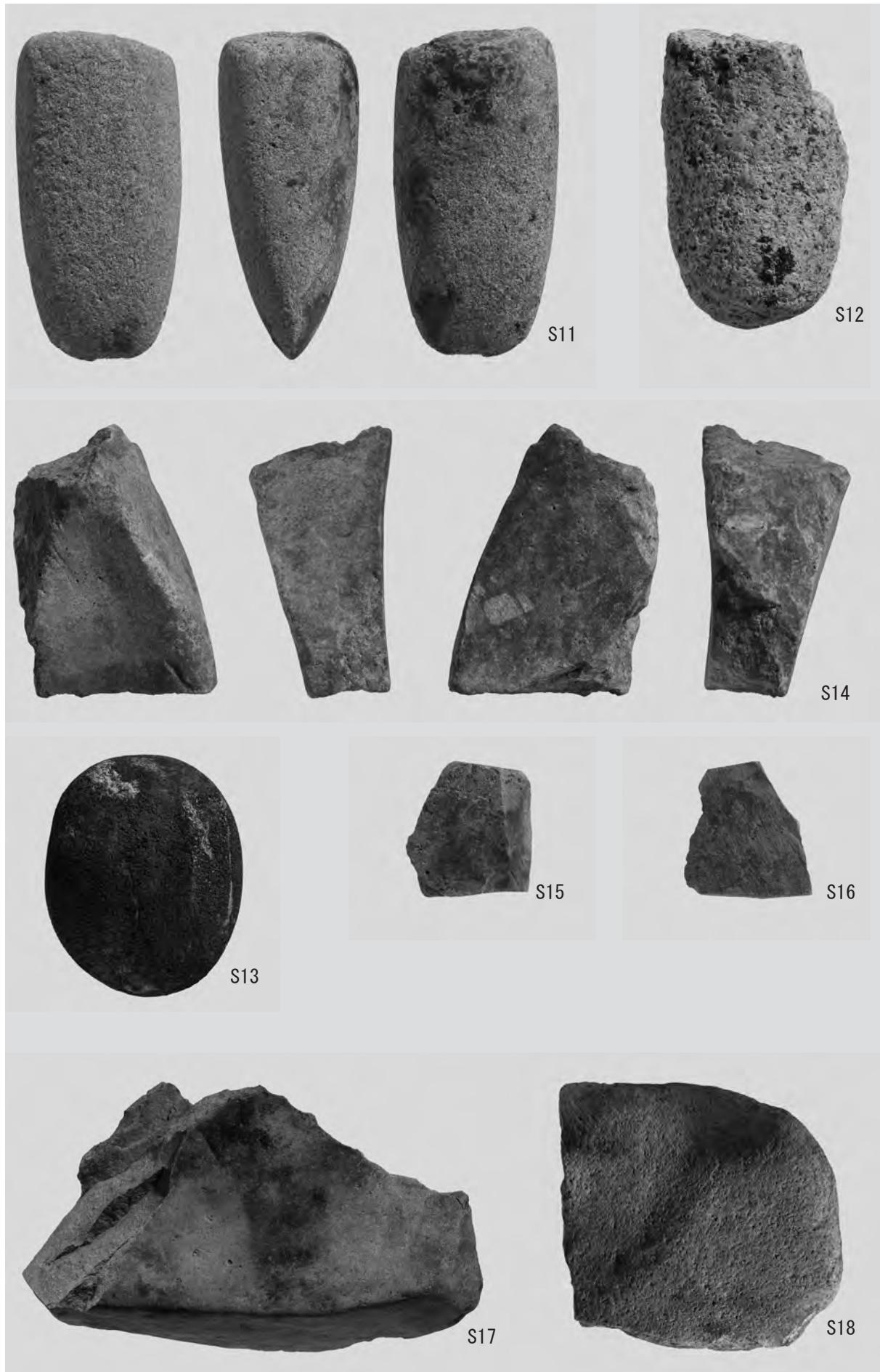
嶋 3 区出土土器 (3)・嶋 4 区出土土器

嶋 3 区

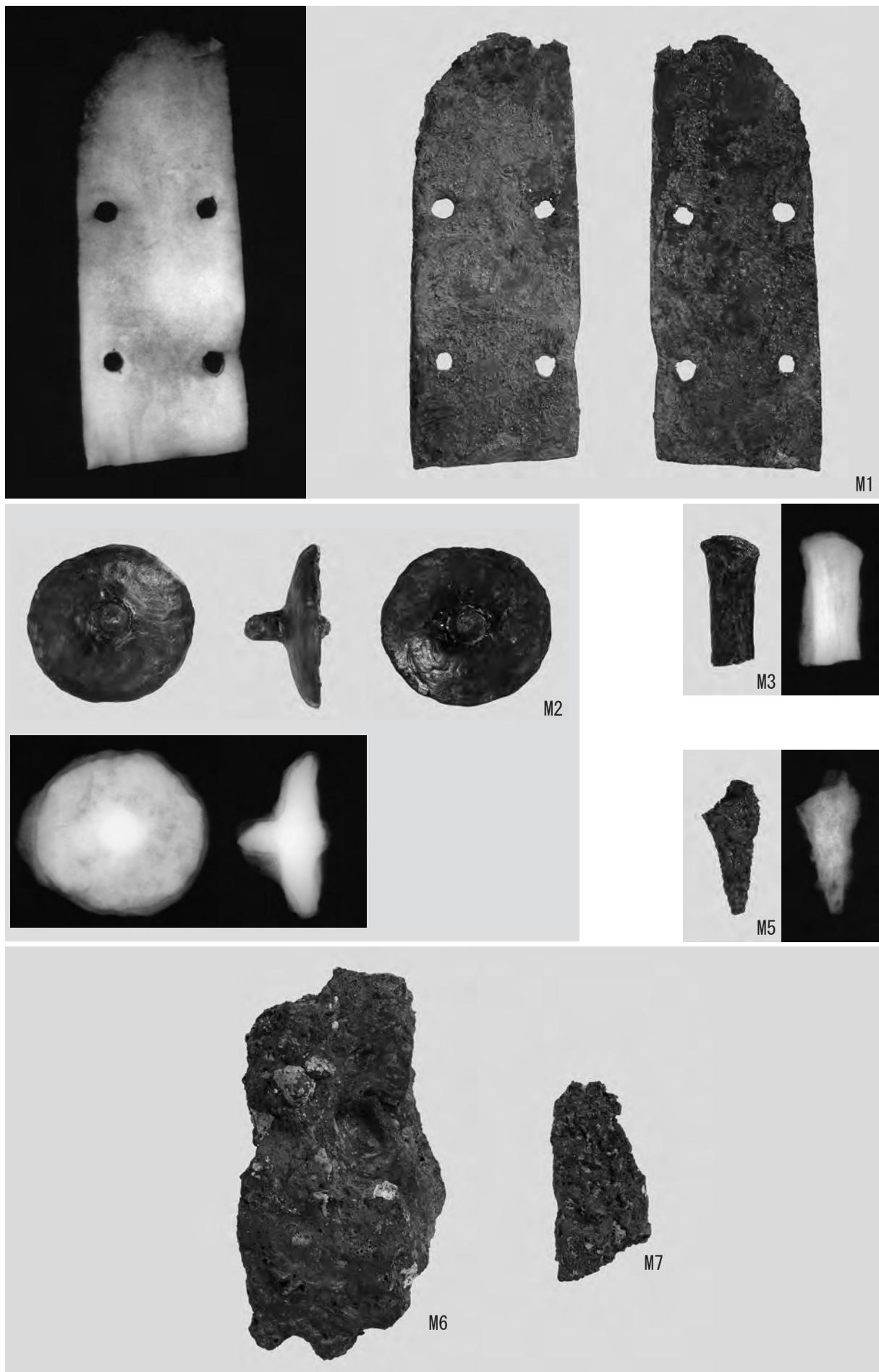
嶋 4 区



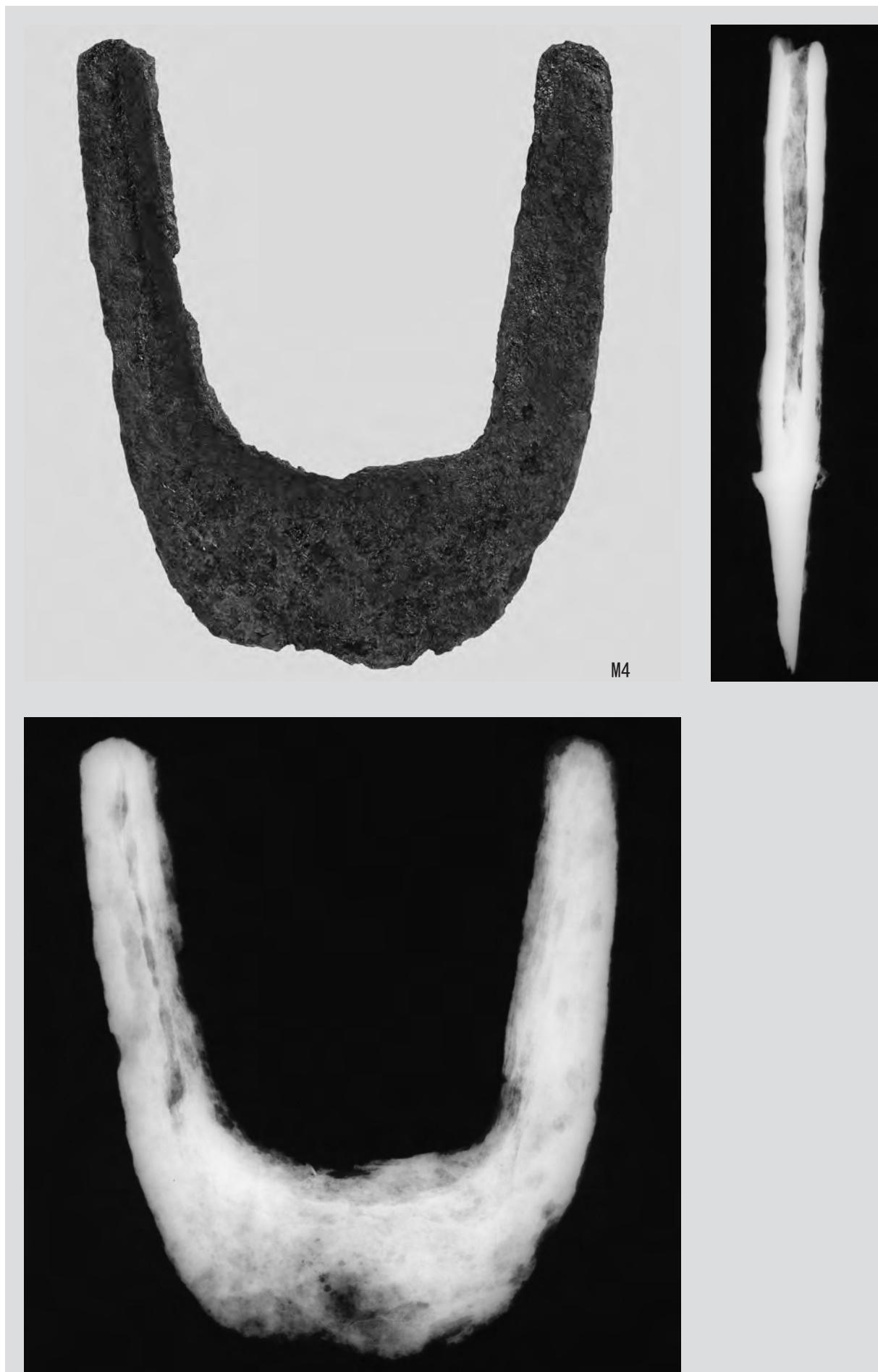
津万遺跡群 2 出土石器 (1)



津万遺跡群 2 出土石器 (2)

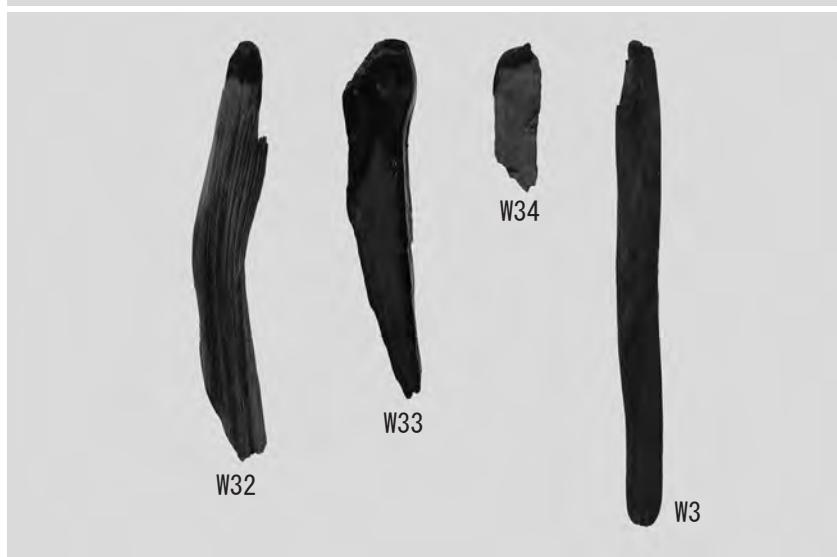
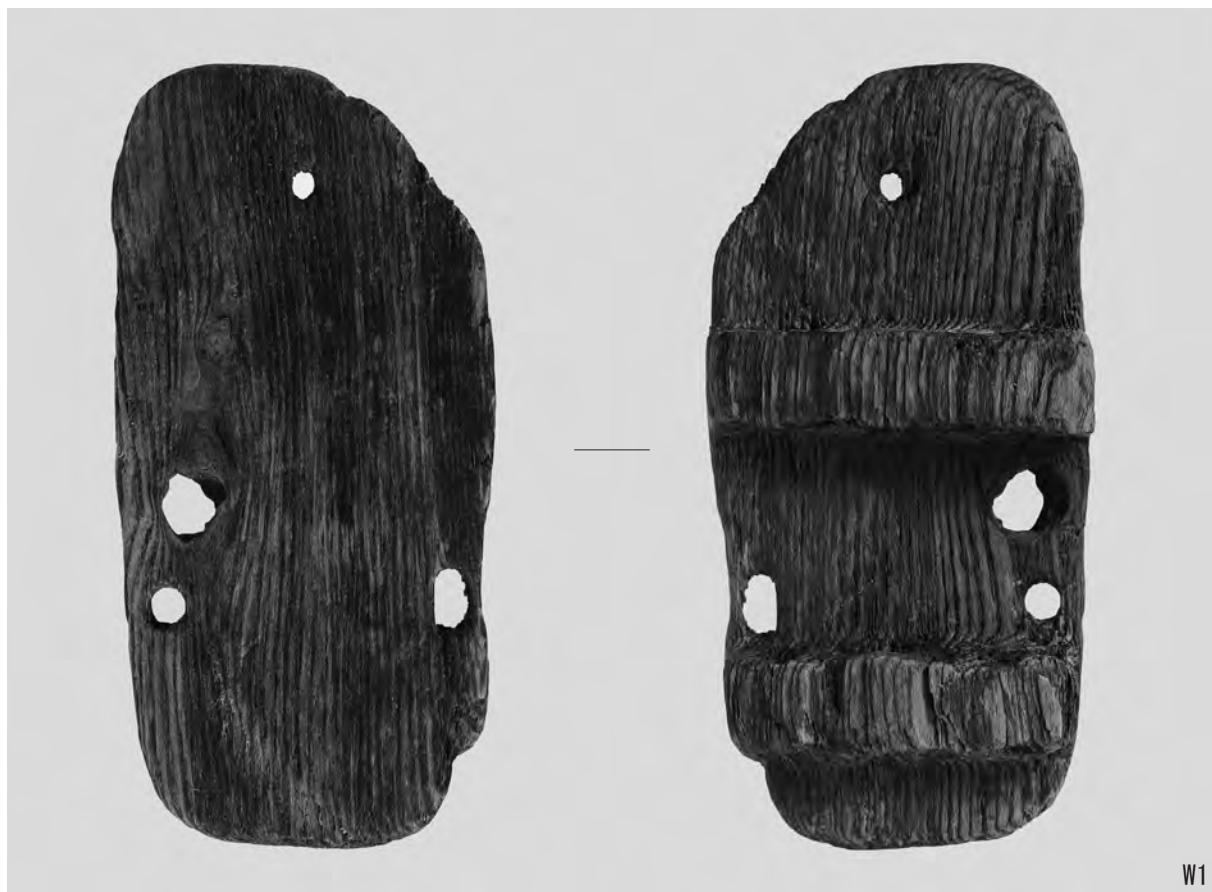


津万遺跡群 2 出土金属器（1）

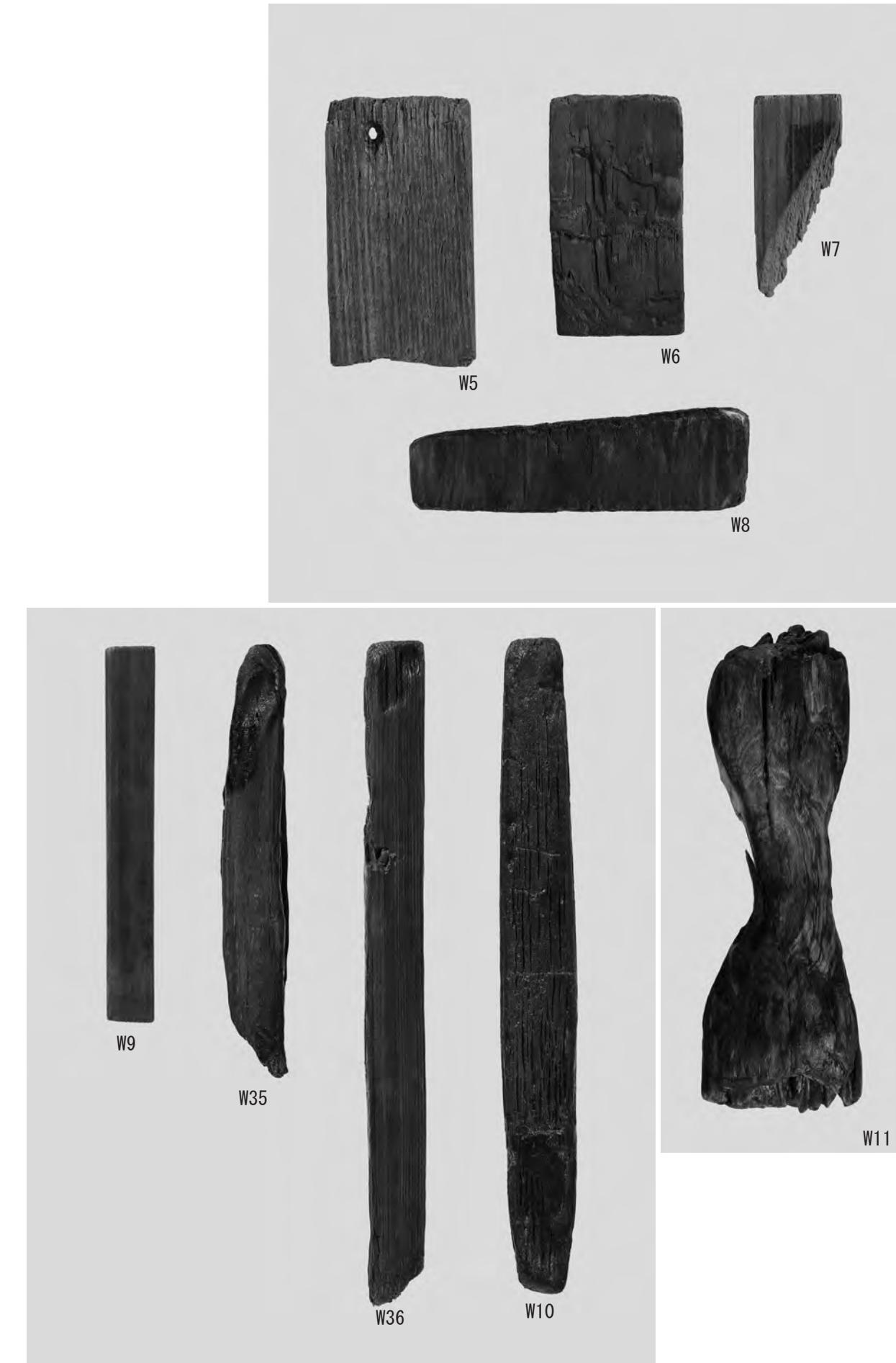


津万遺跡群 2 出土金属器（2）

西嶋1区
西嶋2区
西嶋3区



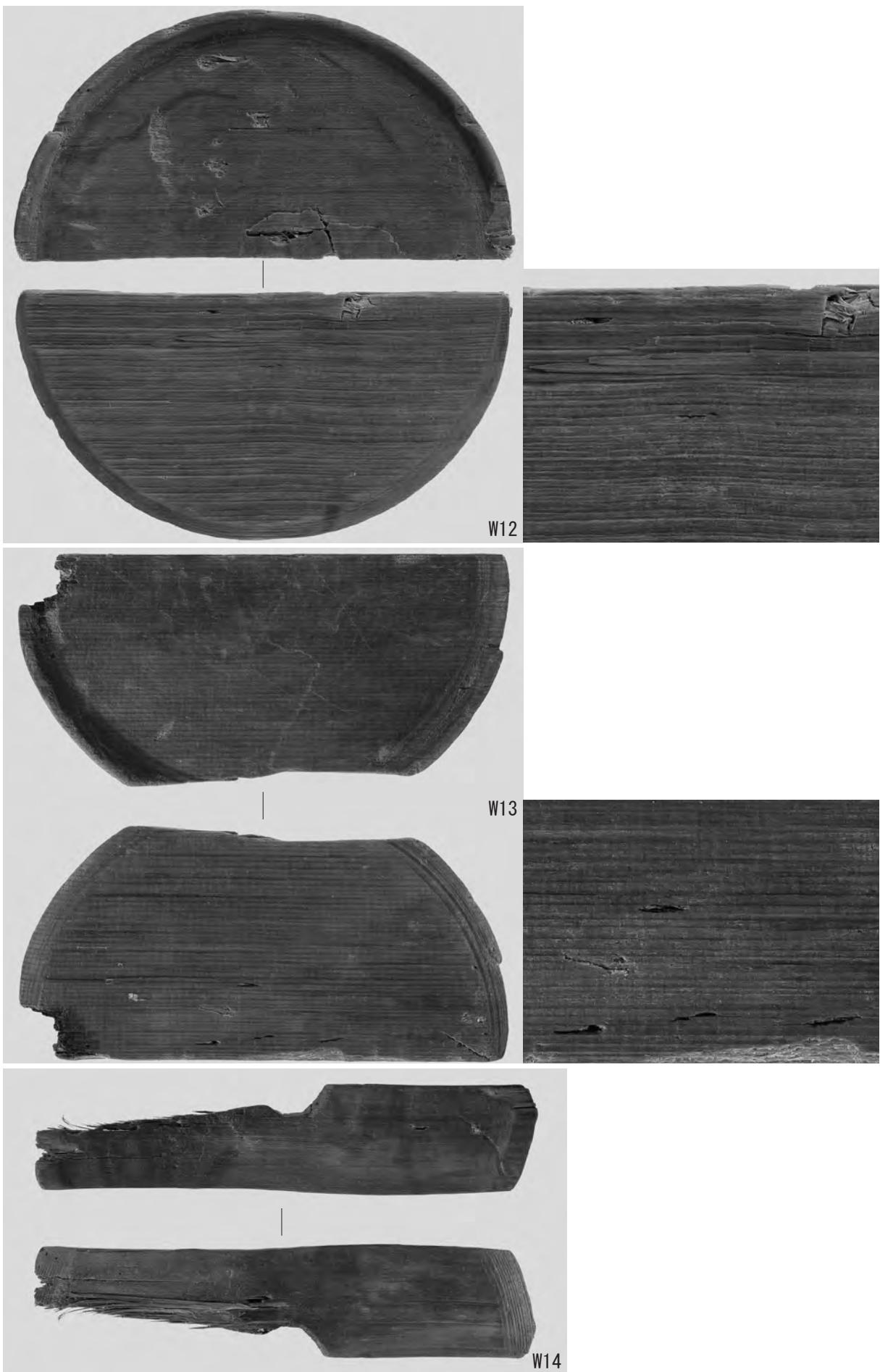
津万遺跡群 2 出土木器 (1)



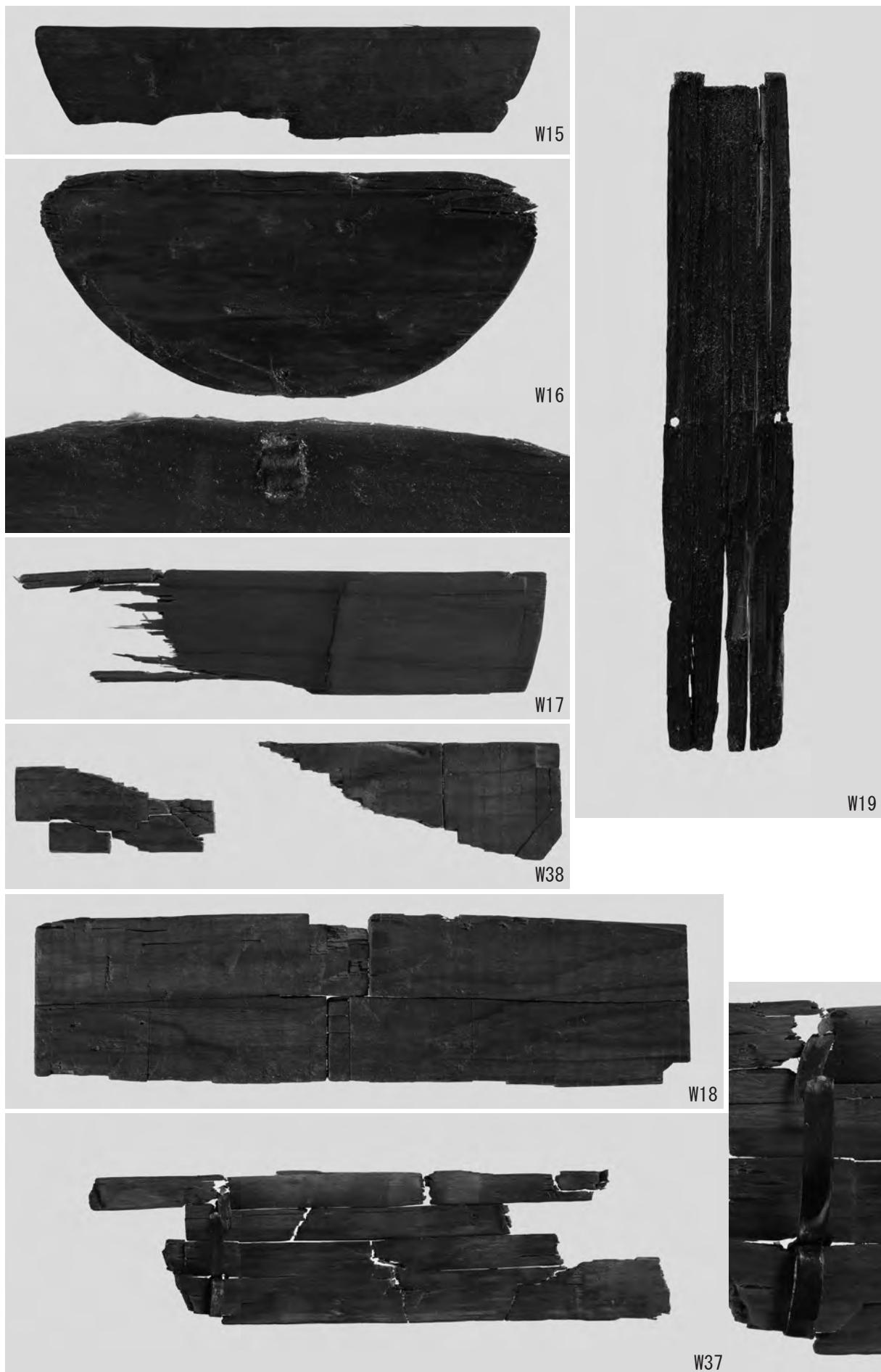
西嶋4E区

西嶋6区

津万遺跡群 2 出土木器 (2)



津万遺跡群 2 出土木器 (3)



津万遺跡群 2 出土木器 (4)

島
1
区



W22



W23



W24



W25



W26



島1区
島2区

津万遺跡群 2 出土木器 (6)

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第 538 冊

西脇市

津万遺跡群 2

— 175 号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和 7 (2025) 年 3 月 25 日 発行

編集：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒 658-0081 兵庫県神戸市東灘区田中町 5-3-23

印刷：小野高速印刷株式会社

〒 670-0933 姫路市平野町 62 番地
